

宮之下遺跡群

—新潟県柏崎市・宮之下遺跡群発掘調査報告書—

2001

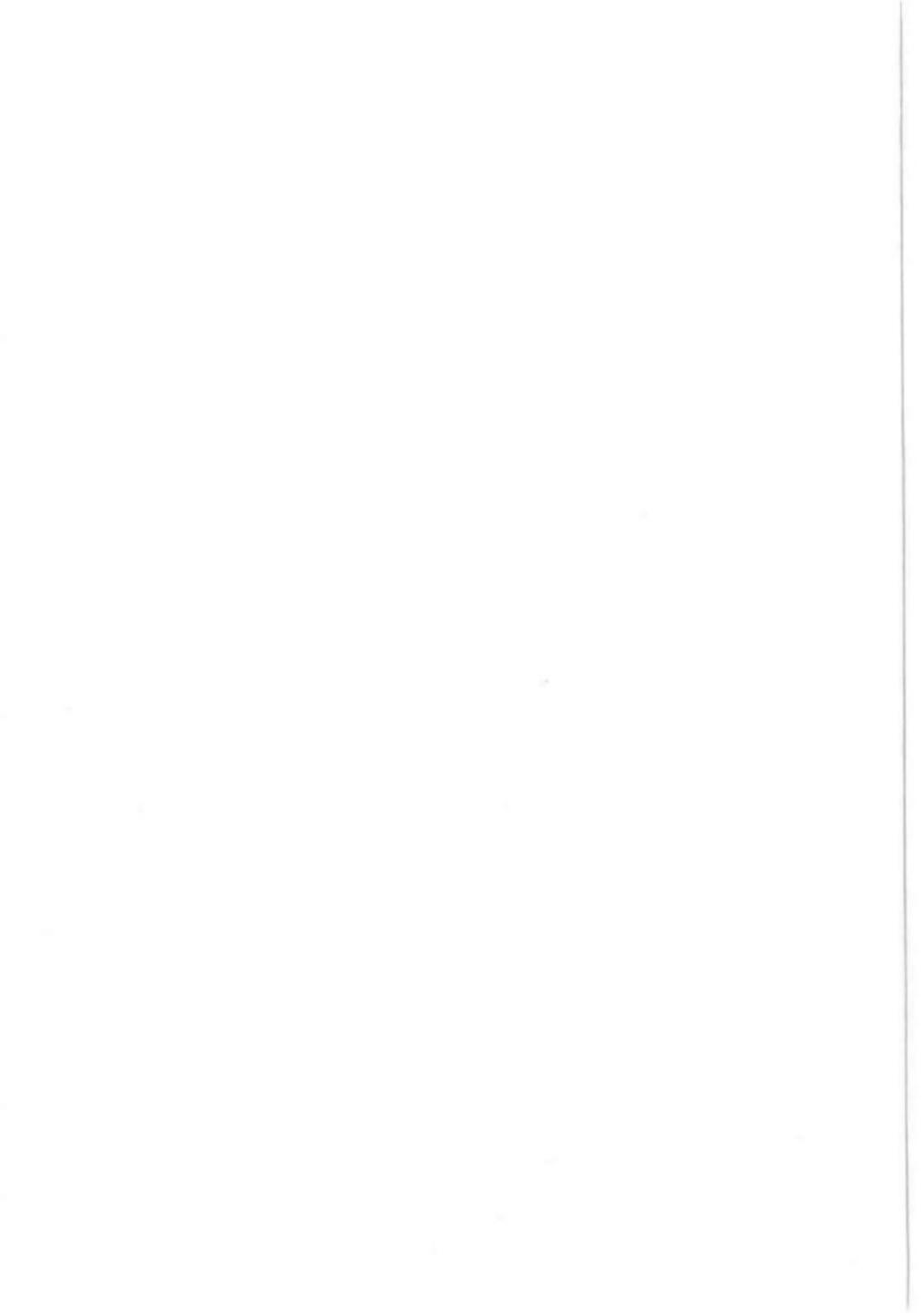
柏崎市教育委員会

宮之下遺跡群

—新潟県柏崎市・宮之下遺跡群発掘調査報告書—

2001

柏崎市教育委員会



序

柏崎市の南側に位置する南鯖石地区には、今でも豊かな田園地帯がひろがっています。丘陵は穏やかな雑木林におおわれ、すぐそばには鯖石川の流れを望むことができます。では、もっと時代をさかのばると、このような自然環境のなかで、人びとはどのような営みをしていったのでしょうか。

宮之下遺跡群の発掘調査は、平成10年と平成11年の2カ年という長期にわたって実施されました。その結果、水田の地下から平安時代のムラが姿をあらわし、人びとの生活の場となっていたことが判明しました。ムラには建物が立ち並び、井戸や廐棄場などもみられます。その脇には沢が流れ、豊かな水の恵みをもたらしていたことでしょう。しかし、時には沢の氾濫や土石流の災害を受けることもあったようです。宮之下に刻まれていた歴史的な事実は、この地で力強く生きた人びとかいたことを証明してくれました。また、それ以前の縄文時代や古墳時代の土器も、少量ながらみつかり、古くから人びとが活動していたことがわかりました。江戸時代の痕跡も確認され、断続的ながらも、現代にまで至る歴史の一端を垣間みることができます。

南鯖石地区におけるはじめての本格的な発掘調査となった宮之下遺跡群の成果は、それまでの歴史の空白を埋める発見であったといえるでしょう。この成果を報告する本書は、ささやかなものではありますが、地域の歴史を理解する一助となり、遺跡保護のために活用されるとすれば、この上なく幸いに思います。

最後になりましたが、このたびの発掘調査が無事終了できたことは、ひとえに事業主体であります新潟県および新潟県柏崎農地事務所のご理解とご協力、そしてご支援の賜物です。また、調査の現場作業におきましても、工事関係業者をはじめ、柏崎市シルバー人材センターの会員や調査員各位など、さまざまの方々から多大なご協力をいただきました。ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成13年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市大字石曾根字宮之下地内に所在する宮之下遺跡群の発掘調査記録である。
2. この発掘調査は、県営中山間地域総合整備事業【山室地区】および県営農免農道整備事業【石曾根地区】に伴う事前調査として、新潟県柏崎農地事務所から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が調査主体となって実施したものである。
3. 発掘調査現場作業は、第1次試掘確認調査を平成9年度に、深町遺跡と片畠遺跡の発掘調査および宮田遺跡第2次確認調査を平成10年度に、宮田遺跡発掘調査を平成11年度に実施した。
現場作業にあたっては、社団法人柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けた。整理作業及び報告書作成作業は、柏崎市西本町3丁目喬柏園内遺跡調査室において行った。また現場作業は、柏崎市教育委員会文化振興課職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員・調査補助員とし、整理・報告書作成作業は、職員（学芸員）を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。
4. 調査によって出土した遺物は、註記に際し、それぞれの遺跡名とともに、グリッド名や遺構名および層序等を併記した。ただし、第1次試掘確認調査の場合は、地区名を付したトレンチ名に遺構名や層序等を併記した。
5. 遺構平面図の作成は、柏崎市の委託を受けた株式会社オリスが、航空写真測量による方法で行った。
6. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（文化振興課遺跡調査室）が保管・管理している。
7. 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、編集も中野・伊藤が担当した。

第Ⅰ章第1～2節・第Ⅱ章・第Ⅲ章第3節・第Ⅳ章第3節・第Ⅴ章第3～4節・第Ⅵ章

第2節・図面図版・写真図版 伊藤啓雄

第Ⅰ章第3節・第Ⅲ章第1～2・4節・第Ⅳ章第1～2・4節・第Ⅴ章第1～2節・

第Ⅵ章第1・3節・図面図版・写真図版 中野 純

8. 本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

9. 発掘調査から本書作成まで、事業主体者である新潟県柏崎農地事務所、および地元である宮之下地区の方々からは数多くのご理解とご協力を賜った。

また、このほかの方々からも、多大なご助力とご協力並びにご教示等を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

相沢 央・荒川正明・安藤正美・春日真実・川村 尚・小山美利・笠澤正史・渡辺朋和

柏崎市経済部農村整備課・株式会社石塚組・株式会社中村建設・新潟県教育庁文化行政課

新潟考古学談話会・(仮)新潟古代土器研究会

(五十音順・敬称略)

調査体制

平成9年度 試掘確認調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一
総括 小林清福（文化振興課長）
管理・庶務 飯塚純一（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長事務取扱）
調査担当 品田高志（文化振興課埋蔵文化財係主査・学芸員）
調査員 伊藤啓雄（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）
帆刈敏子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）
調査補助員 黒崎和子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

平成10～12年度 発掘調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一
総括 小林清福（文化振興課長）
管理・庶務 飯塚純一（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長事務取扱、～平成11年3月）
猪爪一郎（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長事務取扱、平成11年4月～）
調査指導 品田高志（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係主査・学芸員事務取扱）
調査担当 中野 純（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）
調査員 伊藤啓雄（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）
平吹 靖（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）
横田忠義（文化振興課埋蔵文化財係工務員）
渡辺富夫（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）
帆刈敏子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）
徳間香代子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託、～平成12年3月）
村山幸子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託、～平成12年1月）
調査補助員 月橋香奈子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室、平成11年5月～）
大野博子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）
黒崎和子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）
片山和子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

現場作業スタッフ

植木房吉・上野 畿・大倉正敏・大園信一・大橋 勇・大矢 畿・金子弘栄・吉川富夫
五位野 務・小林辰雄・駒形武雄・駒形光大・佐藤祝平・塙浦 正・高野吟子
中沢時春・中村多作・中森武虎・野村 直・布施達栄・本間正敏・牧野尚輝・松浦孝夫
目崎 忠・矢代清英・矢代昭次・吉田雄二・吉田義雄

（柏崎市シルバー人材センター会員：五十音順）

整理作業スタッフ

高橋恵美（文化振興課埋蔵文化財係嘱託、平成12年2月～）
吉田正樹（文化振興課埋蔵文化財係嘱託、平成12年4月～）
小林 薫・竹井 一・萩野しげ子・吉浦啓子 （遺跡調査室：五十音順）

目 次

I	序 説	1
1	調査に至る経緯	1
2	第1次試掘確認調査	3
1)	調査の概要	3
2)	中村遺跡	7
3	第2次確認調査	10
II	宮之下遺跡群をめぐる環境	12
1	遺跡群の位置と地理的環境	12
2	周辺の遺跡と歴史的環境	14
III	深町遺跡	18
1	調 査	18
1)	遺跡の立地と微地形	18
2)	調査区とグリッドの設定	18
3)	発掘調査の経過	19
4)	基本層序の概要	20
2	遺 構	21
1)	遺構の分布	21
2)	遺構各説	21
3	遺 物	35
1)	古代の土器類	35
2)	古代以外の土器・陶磁器類	47
3)	木製品類	49
4)	石器・石製品類	51
5)	銭 貨	51
6)	鍛冶関連遺物	51
4	調査のまとめ	52
IV	片畑遺跡	53
1	調 査	53
1)	遺跡の立地と微地形	53
2)	調査区とグリッドの設定	53
3)	発掘調査の経過	53
4)	基本層序の概要	54

2 遺 構	55
1) 遺構の分布	55
2) 遺構各説	55
3 遺 物	59
1) 土器・陶磁器類	59
2) 柱 根	60
3) S E -42出土遺物	60
4) 墓壙出土遺物	61
4 調査のまとめ	62
 V 宮田遺跡	63
1 調 査	63
1) 遺跡の立地と微地形	63
2) 調査区とグリッドの設定	63
3) 発掘調査の経過	64
4) 基本層序の概要	64
2 遺 構	66
1) 遺構の分布	66
2) 遺構各説	66
3 遺 物	79
1) 古代の土器・陶磁器類	79
2) 古代以外の土器・陶磁器類	94
3) 木製品類	95
4) 石器・石製品類	96
5) 銭 貨	98
4 調査のまとめ	98
 VI 総 括	99
1 宮之下遺跡群における遺構群と集落構成	99
1) 遺構群の概要	99
2) 集落構成の概略	104
3) ま と め	104
2 宮之下遺跡群における古代の土器様相	105
1) はじめて	105
2) 編年的位置付け	105
3) 出土土器と遺構の性格	110
4) おわりに	113
3 調査の成果とまとめ	114
 引用参考文献	115
報告書抄録	116

図版目次

図面図版

- 図版1 宮之下遺跡群1 宮之下遺跡群と周辺の地形
図版2 宮之下遺跡群2 宮之下遺跡群グリッド図
図版3 深町遺跡1 深町遺跡と周辺の地形
図版4 深町遺跡2 深町遺跡全体図
図版5 深町遺跡3 深町遺跡遺構全体図付図
図版6 深町遺跡4 深町遺跡遺構全体図①
図版7 深町遺跡5 深町遺跡遺構全体図②
図版8 深町遺跡6 深町遺跡遺構全体図③
図版9 深町遺跡7 深町遺跡遺構全体図④
図版10 深町遺跡8 深町遺跡遺構全体図⑤
図版11 深町遺跡9 深町遺跡遺構全体図⑥
図版12 深町遺跡10 深町遺跡遺構全体図⑦
図版13 深町遺跡11 深町遺跡遺構全体図⑧
図版14 深町遺跡12 深町遺跡遺構全体図⑨
図版15 深町遺跡13 深町遺跡遺構全体図⑩
図版16 深町遺跡14 深町遺跡遺構全体図⑪
図版17 深町遺跡15 深町遺跡基本層序1(Ⅰ地区)
図版18 深町遺跡16 深町遺跡基本層序2(Ⅱ・Ⅲ地区)
図版19 深町遺跡17 深町遺跡遺構個別図1(建物跡1)
図版20 深町遺跡18 深町遺跡遺構個別図2(建物跡2)
図版21 深町遺跡19 深町遺跡遺構個別図3(建物跡3)
図版22 深町遺跡20 深町遺跡遺構個別図4(建物跡4)
図版23 深町遺跡21 深町遺跡遺構個別図5(建物跡5)
図版24 深町遺跡22 深町遺跡遺構個別図6(建物跡6)
図版25 深町遺跡23 深町遺跡遺構個別図7(建物跡7)
図版26 深町遺跡24 深町遺跡遺構個別図8(建物跡8)
図版27 深町遺跡25 深町遺跡遺構個別図9(建物跡9)
図版28 深町遺跡26 深町遺跡遺構個別図10(建物跡10)
図版29 深町遺跡27 深町遺跡遺構個別図11(建物跡11)
図版30 深町遺跡28 深町遺跡遺構個別図12(建物跡12)
図版31 深町遺跡29 深町遺跡遺構個別図13(土坑1)
図版32 深町遺跡30 深町遺跡遺構個別図14

(土坑2・溝跡・自然流路跡)

図版33 深町遺跡31 深町遺跡遺物出土状況(廻り土坑)
図版34 深町遺跡32 深町遺跡出土遺物1(S X-33 1)
図版35 深町遺跡33 深町遺跡出土遺物2(S X-33 2)
図版36 深町遺跡34 深町遺跡出土遺物3(S X-33 3)
図版37 深町遺跡35 深町遺跡出土遺物4(S X-33 4)

- 図版38 深町遺跡36 深町遺跡出土遺物5(S X-33 5)
図版39 深町遺跡36 深町遺跡出土遺物6(その他の遺構)
図版40 深町遺跡37 深町遺跡出土遺物7(遺構外1)
図版41 深町遺跡37 深町遺跡出土遺物8(遺構外2)
図版42 深町遺跡38 深町遺跡出土遺物9(中・近世ほか)
図版43 深町遺跡39 深町遺跡出土遺物10

(木製品・石器・鍛冶関連遺物)

図版44 片畠遺跡1 片畠遺跡と周辺の地形
図版45 片畠遺跡2 片畠遺跡全体図
図版46 片畠遺跡3 片畠遺跡遺構全体図付図
図版47 片畠遺跡4 片畠遺跡遺構全体図①
図版48 片畠遺跡5 片畠遺跡遺構全体図②
図版49 片畠遺跡6 片畠遺跡遺構全体図③
図版50 片畠遺跡7 片畠遺跡遺構全体図④
図版51 片畠遺跡8 片畠遺跡基本層序1(西壁)
図版52 片畠遺跡9 片畠遺跡基本層序2(北壁)
図版53 片畠遺跡10 片畠遺跡遺構個別図1

(土坑・井戸跡・墓塚)

図版54 片畠遺跡11 片畠遺跡遺構個別図2(自然流路跡)
図版55 片畠遺跡12 片畠遺跡遺物出土状況(墓塚)
図版56 片畠遺跡13 片畠遺跡出土遺物1
図版57 片畠遺跡14 片畠遺跡出土遺物2
図版58 片畠遺跡15 片畠遺跡出土遺物3
図版59 宮田遺跡1 宮田遺跡と周辺の地形
図版60 宮田遺跡2 宮田遺跡全体図
図版61 宮田遺跡3 宮田遺跡遺構全体図付図
図版62 宮田遺跡4 宮田遺跡遺構全体図①
図版63 宮田遺跡5 宮田遺跡遺構全体図②
図版64 宮田遺跡6 宮田遺跡遺構全体図③
図版65 宮田遺跡7 宮田遺跡遺構全体図④
図版66 宮田遺跡8 宮田遺跡遺構全体図⑤
図版67 宮田遺跡9 宮田遺跡遺構全体図⑥
図版68 宮田遺跡10 宮田遺跡遺構全体図⑦
図版69 宮田遺跡11 宮田遺跡遺構全体図⑧
図版70 宮田遺跡12 宮田遺跡遺構全体図⑨
図版71 宮田遺跡13 宮田遺跡遺構全体図⑩
図版72 宮田遺跡14 宮田遺跡遺構全体図⑪
図版73 宮田遺跡15 宮田遺跡遺構全体図⑫
図版74 宮田遺跡16 宮田遺跡遺構全体図⑬
図版75 宮田遺跡17 宮田遺跡遺構全体図⑭

- 図版76 宮田遺跡18 宮田遺跡遺構全体図⑥
 図版77 宮田遺跡19 宮田遺跡遺構全体図⑥
 図版78 宮田遺跡20 宮田遺跡遺構全体図⑦
 図版79 宮田遺跡21 宮田遺跡遺構全体図⑦
 図版80 宮田遺跡22 宮田遺跡遺構全体図⑦
 図版81 宮田遺跡23 宮田遺跡遺構全体図⑦
 図版82 宮田遺跡24 宮田遺跡基本層序1(Ⅰ地区)
 図版83 宮田遺跡25 宮田遺跡基本層序2(Ⅱ地区)
 図版84 宮田遺跡26 宮田遺跡遺構別図1(建物跡1)
 図版85 宮田遺跡27 宮田遺跡遺構別図2(建物跡2)
 図版86 宮田遺跡28 宮田遺跡遺構別図3(建物跡3)
 図版87 宮田遺跡29 宮田遺跡遺構別図4(建物跡4)
 図版88 宮田遺跡30 宮田遺跡遺構別図5(建物跡5)
 図版89 宮田遺跡31 宮田遺跡遺構別図6(建物跡6)
 図版90 宮田遺跡32 宮田遺跡遺構別図7(建物跡7)
 図版91 宮田遺跡33 宮田遺跡遺構別図8(建物跡8)
 図版92 宮田遺跡34 宮田遺跡遺構別図9(建物跡9)
 図版93 宮田遺跡35 宮田遺跡遺構別図10
 (ピット・土坑・井戸跡・溝跡1)
 図版94 宮田遺跡36 宮田遺跡遺構別図11(溝跡2)
 図版95 宮田遺跡37 宮田遺跡遺構別図12(溝跡3)
 図版96 宮田遺跡38 宮田遺跡遺構別図13(溝跡4)
 図版97 宮田遺跡39 宮田遺跡遺構別図14(自然流路跡1)
 図版98 宮田遺跡40 宮田遺跡遺構別図15(自然流路跡2)
 図版99 宮田遺跡41 宮田遺跡遺構別図16(自然流路跡3)
 図版100 宮田遺跡42 宮田遺跡遺構別図17(自然流路跡4)
 図版101 宮田遺跡43 宮田遺跡遺構別図18(自然流路跡5)
 図版102 宮田遺跡44 宮田遺跡遺物出土状況
 (集石土坑・溝跡1)
 図版103 宮田遺跡45 宮田遺跡遺物出土状況2(溝跡2)
 図版104 宮田遺跡46 宮田遺跡遺物出土状況3(溝跡3)
 図版105 宮田遺跡47 宮田遺跡出土遺物1(S D-346 1)
 図版106 宮田遺跡48 宮田遺跡出土遺物2(S D-346 2)
 図版107 宮田遺跡49 宮田遺跡出土遺物3(S D-378a 1)
 図版108 宮田遺跡50 宮田遺跡出土遺物4(S D-378a 2)
 図版109 宮田遺跡51 宮田遺跡出土遺物5(その他の遺構1)
 図版110 宮田遺跡52 宮田遺跡出土遺物6(その他の遺構2)
 図版111 宮田遺跡53 宮田遺跡出土遺物7(遺構外1)
 図版112 宮田遺跡54 宮田遺跡出土遺物8(遺構外2)
 図版113 宮田遺跡55 宮田遺跡出土遺物9(中・近世ほか)
 図版114 宮田遺跡56 宮田遺跡出土遺物10(木製品1)
 図版115 宮田遺跡57 宮田遺跡出土遺物11(木製品2)
 図版116 宮田遺跡58 宮田遺跡出土遺物12(木製品3)
 図版117 宮田遺跡59 宮田遺跡出土遺物13(木製品4)

- 図版118 宮田遺跡60 宮田遺跡出土遺物12(木製品5)

写真図版

- 図版119 宮之下遺跡群1 遺跡群全景
 図版120 宮之下遺跡群2 遺跡群全景
 図版121 宮之下遺跡群3 遺跡群全景
 図版122 宮之下遺跡群4 遺跡群全景
 図版123 深町遺跡1 遺跡全景
 図版124 深町遺跡2 遺跡近景・Ⅰ地区全景
 図版125 深町遺跡3 Ⅱ・Ⅲ地区全景
 図版126 深町遺跡4 作業風景
 図版127 深町遺跡5 作業風景・層序
 図版128 深町遺跡6 層序
 図版129 深町遺跡7 遺構(掘立柱建物跡)
 図版130 深町遺跡8 遺構(掘立柱建物跡)
 図版131 深町遺跡9 遺構(掘立柱建物跡・柱穴)
 図版132 深町遺跡10 遺構(柱穴・土坑)
 図版133 深町遺跡11 遺構(S X-33)
 図版134 深町遺跡12 現地説明会・調査スタッフ
 図版135 深町遺跡13 出土遺物1(S X-33)
 図版136 深町遺跡14 出土遺物2(S X-33)
 図版137 深町遺跡15 出土遺物3(S X-33)
 図版138 深町遺跡16 出土遺物4-5(S X-33)
 図版139 深町遺跡17 出土遺物6-7(S X-33)
 図版140 深町遺跡18 出土遺物8-9(S X-33)
 図版141 深町遺跡19 出土遺物10-11
 (その他の遺構・河川跡)
 図版142 深町遺跡20 出土遺物12-13(遺構外)
 図版143 深町遺跡21 出土遺物14-15(遺構外)
 図版144 深町遺跡22 出土遺物16-17(中・近世ほか)
 図版145 深町遺跡23 出土遺物18(木製品類ほか)
 図版146 深町遺跡24 出土遺物19(その他)
 図版147 片畠遺跡1 遺跡全景
 図版148 片畠遺跡2 遺跡近景
 図版149 片畠遺跡3 調査区全景
 図版150 片畠遺跡4 調査区
 図版151 片畠遺跡5 作業風景
 図版152 片畠遺跡6 遺構(柱穴・土坑)
 図版153 片畠遺跡7 遺構(墓壙)
 図版154 片畠遺跡8 遺構(墓壙・井戸跡・河川跡)
 図版155 片畠遺跡9 出土遺物1(土器類・木製品類1)
 図版156 片畠遺跡10 出土遺物2(木製品類2)
 図版157 片畠遺跡11 出土遺物3(木製品類3 S E-42)

図版158	片畠遺跡12 出土遺物4(墓壙)	図版176	宮田遺跡18 遺構(S D-378a)
図版159	宮田遺跡1 遺跡全景	図版177	宮田遺跡19 現地説明会・調査スタッフ
図版160	宮田遺跡2 遺跡遠景	図版178	宮田遺跡20 出土遺物1・2(S D-346)
図版161	宮田遺跡3 作業風景	図版179	宮田遺跡21 出土遺物3(S D-346)
図版162	宮田遺跡4 層序	図版180	宮田遺跡22 出土遺物4・5(S D-346)
図版163	宮田遺跡5 遺構(掘立柱建物跡)	図版181	宮田遺跡23 出土遺物6・7(S D-378a)
図版164	宮田遺跡6 遺構(柱穴)	図版182	宮田遺跡24 出土遺物8・9(S D-378a)
図版165	宮田遺跡7 遺構(柱穴)	図版183	宮田遺跡25 出土遺物10・11(S D-378aほか)
図版166	宮田遺跡8 遺構(柱穴)	図版184	宮田遺跡26 出土遺物12・13 (その他の遺構・河川跡)
図版167	宮田遺跡9 遺構(柱穴)	図版185	宮田遺跡27 出土遺物14・15(遺構外)
図版168	宮田遺跡10 遺構(柱穴)	図版186	宮田遺跡28 出土遺物16・17(遺構外・墨書きほか)
図版169	宮田遺跡11 遺構(柱穴)	図版187	宮田遺跡29 出土遺物18・19(攢文・中近世)
図版170	宮田遺跡12 遺構(柱穴)	図版188	宮田遺跡30 出土遺物20(木製品類ほか)
図版171	宮田遺跡13 遺構(柱穴)	図版189	宮田遺跡31 出土遺物21(木製品類)
図版172	宮田遺跡14 遺構(柱穴)	図版190	宮田遺跡32 出土遺物22(木製品類)
図版173	宮田遺跡15 遺構(土坑・河川跡)	図版191	宮田遺跡33 出土遺物23(木製品類)
図版174	宮田遺跡16 遺構(S D-346)	図版192	宮田遺跡34 出土遺物24(礫)
図版175	宮田遺跡17 遺構(S X-294・S D-252)		

挿 図 目 次

第1図	宮之下遺跡群第1次試掘確認調査トレンチ配置図	5
第2図	中村遺跡と周辺の地形	7
第3図	中村遺跡探査遺物	9
第4図	宮之下遺跡群第2次確認調査トレンチ配置図	11
第5図	宮田遺跡基本層序状模式図	11
第6図	柏崎平野の地形分類と宮之下遺跡群	13
第7図	鶴石川中流域における遺跡分布図	15
第8図	深町遺跡出土古代土器器種分類図	34
第9図	深町遺跡出土古代土器法量分布図	35
第10図	宮田遺跡出土古代土器器種分類図	81
第11図	宮田遺跡出土古代土器法量分布図	81
第12図	宮田遺跡出土壺瓶にみられる 製作段階の痕跡と付着物	85
第13図	宮田遺跡における柱根出土位置模式図	97
第14図	宮之下遺跡群柱穴法量分布図	100
第15図	深町遺跡建物跡推定復元模式図	102
第16図	宮田遺跡建物跡推定復元模式図	103
第17図	宮之下遺跡群出土土器・黒色土器法量分布図	107
第18図	北陰におけるおもな古代土器 大量出土遺構と組成図	113

挿 表 目 次

第1表	深町遺跡遺構計測表	26~34
第2表	深町遺跡出土古代土器觀察表	44~47
第3表	片畠遺跡遺構計測表	57~58
第4表	片畠遺跡出土柱根一覧表	60
第5表	片畠遺跡出土錢貨一覧表	61
第6表	宮田遺跡遺構計測表	70~78
第7表	宮田遺跡出土古代土器觀察表	91~93
第8表	宮田遺跡出土柱根一覧表	97
第9表	宮田遺跡出土遺構一覧表	97
第10表	宮之下遺跡群の編年の位置付け	109
第11表	宮田遺跡主要遺構の土器類組成表	111

挿 写 真 目 次

写真1	宮之下遺跡群第1次試掘確認調査スナップ	2
写真2	片畠遺跡調査区全景	62

I 序 説

1 調査に至る経緯

柏崎市大字石曾根の宮之下地区は、市街地から12.5kmほど南東（南南東）に所在する。地形的には鰐石川中流域の左岸に位置している。鰐石川中流域には発達した河岸段丘がみられ、現集落も標高約40mの段丘上に営まれている。宅地の周辺では、段丘上の緩斜面がおもに水田として利用されているが、当該地一帯において県営農免農道整備事業〔石曾根地区〕および県営中山間地域総合整備事業〔山室地区〕が同時に実施されることとなった。

宮之下地区において遺跡の存在が明らかとなったのは、昭和58年の新潟県教育委員会（以下「県教委」と略）による分布調査が実施されてからである。集落内の宅地に隣接する畑地から珠洲の破片が採集されたことにより、堂竹遺跡が周知化された。その後、堂竹遺跡以外の遺跡の存在を知る機会には恵まれなかつたが、当該事業に係る分布調査や試掘確認調査によって、深町遺跡・片畠遺跡・宮田遺跡・中村遺跡を発見することができた。「宮之下遺跡群」とは、これら4遺跡と堂竹遺跡の総称である。

調査原因と第1次試掘確認調査に至る経緯　調査原因のひとつである県営農免農道整備事業については、平成6年8月25日付け柏農地第1145号により、埋蔵文化財包蔵地の所在確認を依頼する文書が新潟県柏崎農地事務所（担当：建設課、以下「県農地」と略）から柏崎市教育委員会（以下「市教委」と略）へ提出された。これを受けた市教委は、別事業に係る大規模な発掘調査が終了し、雪融け後となった平成7年4月26日に当該農道の全線を対象とした現地踏査を行い、土師器の採集などから深町遺跡を発見した。さらに、平成8年5月の試掘調査によって発見された山王前遺跡は、若干の法線変更を経て平成9年10～11月に本発掘調査が実施されるなど〔柏崎市教委1998〕、埋蔵文化財に関する協議・調査が具体的に進められていた。しかし、中山間地域総合整備事業については、平成9年5月に至って初めて埋蔵文化財に関する協議が始められたものであった。この事業は、平成9年度を初年度として、平成12年度までの4ヶ年事業として計画された。主体は宮之下地区における圃場整備事業であるが、この事業区域内に石曾根地区農免農道も同時に整備されることとなったというものであった。

中山間地域総合整備事業内には、先に発見されていた深町遺跡の範囲も当然及んでいると思われたが、具体的な遺跡範囲は不明確であり、ほかにも遺跡が存在する可能性は高かった。県農地は、平成9年5月15日付け柏農地第505号により、市教委へ試掘調査の実施を依頼したが、工事の具体的な設計図等の提示は同年9月2日となった。地形観察等によって遺跡が存在する可能性が低いと思われる区域を除いても、試掘確認調査対象区域としては、およそ10万m²に近い範囲が想定され、試掘確認調査そのものも簡単に実施できる内容ではないことが判明した。そのため、市教委と県農地は数度の事前協議を重ねることとなる。それらの協議の結果、平成10年度当初予算編成期との関わりもあり、早急に試掘確認調査を実施することで合意した。これを受けた市教委は、調査で使用する重機の乗り入れ口やルート、復旧の方法などを充分に検討するなどの事前準備を行った。そして平成9年10月14日付け事務連絡により、県教委へ試掘確認調査（第1次）実施の通知し、同日着手した。



写真1　宮之下遺跡群第1次試掘確認調査スナップ

発掘調査に至る経緯 第1次試掘確認調査は約1ヵ月にわたり、128ヶ所のトレンチを発掘した。その結果、当該事業地内における深町遺跡の範囲をおおよそ把握したほか、片畑・宮田・中村の3遺跡を新たに発見することができた。事業地内に分布するこれら4遺跡の面積は合計で約19,200m²に及ぶと想定される。第1次試掘確認調査の内容については、調査終了後すみやかに「概要報告書」〔柏崎市教委1997c〕を作成し、県教委へ報告した上で、今後の取扱いについて事業者である県農地と協議することになった。

発見された遺跡のうち、約2,000m²と目される中村遺跡はすでに埋滅していたと考えられるので、発掘調査の対象からは除外されることとなった。さらに、今回の圃場整備事業では現況の水田毎に盛土工法となる部分と切土工法となる部分とが混在している。耕作土直下の浅い深度から遺構・遺物が検出される地点もあったが、耕作土を残したまま盛土工法を施せば、遺跡の保存が可能となる部分が生じる上、発掘調査対象面積を約3,700m²ほど削減することができる。以上のことから、当該事業に係る発掘調査で対象となるのは3遺跡で、面積は合計約13,500m²とすることができた。ただし、宮田遺跡では第1次試掘確認調査で範囲を明らかにできなかった部分があったため、再度の範囲確認調査が必要であった。

また、調査スケジュールについては、平成10年度に深町遺跡・片畑遺跡の発掘調査および宮田遺跡についての第2次確認調査、翌11年度に宮田遺跡の発掘調査を実施して現場作業を終了させ、整理作業を随時行っていくというものである。そして、当該事業の最終年度が平成12年度であることから、報告書の刊行を平成13年3月とし、今回の調査事業を完了させることとした。このスケジュールに基づき、深町遺跡は平成10年5月18日付け教文第17号、片畑遺跡は同年8月3日付け教文第31号にて発掘調査を実施する旨を報告した。さらに、宮田遺跡については、第2次確認調査を同年9月10日付けで事務連絡し、片畑遺跡発掘調査の期間中に実施し、遺跡範囲を把握した。そして、平成11年5月11日付け教文第13号にて宮田遺跡の発掘調査を実施する旨を報告した。

2 第1次試掘確認調査

本節では、当該事業に係る試掘確認調査の概要報告書【柏崎市教委1997c】に基づき、第1次試掘確認調査の概要を説明する。また、その際に発見されたものの、本調査には至らなかった中村遺跡についても簡単に報告したい。

1) 調査の概要

第1次試掘確認調査は、平成9年10月14日の着手日から同年11月11日の器材撤収まで延14.5日にわたって実施した。調査員・調査補助員は延57.5人である。調査トレンチは、合計128ヶ所に設定し、発掘実面積は合計約421m²となったので、調査対象とした面積約93,000m²の約0.45%を調査したことになる。

a 調査の方法と経過

調査の対象としたのは、小字深町・内宮ノ越・前田・中村の4地区で、ほとんどの地目は休耕田を含む水田である。しかも、水田を抜ける既存道はやや狭く、重機の移動ひいては調査工程への制約となつた。

調査の方法 調査では0.25m²のバック・ホウを使用し、任意のトレンチを発掘することにより進めていった。第1次試掘確認調査は、突発的な対応という事態の中で実施に移されたため、速やかに調査が実施できるよう、協議により市教委と県農地それぞれは調査部門と復旧部門を分担し、市教委は調査に専念することとした。しかし、実際は掘削した水田や畦畔等の修復も、調査用の重機で行わざるを得ず、復旧箇所を少なくするために各地区内における調査順路等でかなりの苦慮を強いられ、また復旧のため多くの時間を割かざるを得なかつた。このことは調査面積の確保について、かなり大きな制約を科すこととなつた。

なお、調査においては、道路等によって便宜的な地区分けを行つたが、それぞれの呼称については、小字名にA地区・B地区・C地区…とアルファベットを付することで地区名を表した。さらに、トレンチについては地区名に1・2・3…の算用数字を加え、「深町A-1トレンチ」などと称することとした。

調査の経過 初日の10月14日、深町遺跡の確認調査から着手した。深町地区には、約4万m²にも及ぶ緩傾斜の平坦面があり、それそれに段差のある水田が広がつてゐる。バック・ホウの進路を考慮して、おおむね南西側→北側→南東側という順路で発掘していった。B地区から初めて古代の遺物が出土したが、西側のC・D地区の1段低い地点では、遺物包含層は確認されなかつた。20日に着手したE地区では、遺物包含層がすでに削平されていた地点もあったが、柱穴を中心とした遺構が30基ほど検出された。E地区的低い部分とF地区および南東側のG地区では、遺物包含層は明瞭でなくなり、地山土も還元化していった。これまでの調査で、深町遺跡の範囲を推定することができたが、23日までの延7日間を要した。

翌24日からは、中村地区に着手した。中村A地区では、発掘前から比較的多くの遺物が表面採集されたので、トレンチをやや多く設定した。24・29日でB地区とともに19本のトレンチを発掘したが、遺物の出土量は表採された量を下回り、地山土も還元化されていた。中村A地区では、過去の工事で遺跡が消滅してしまった可能性が生じた。29日からは、前田A地区に着手した。24日、原点移動の作業中に北側の宅地に近い水田から、中世土師器片が採集されたので、中世遺跡の存在も想定された。30日・11月4日にわたくつて13本のトレンチを発掘した。黄褐色を呈する安定した地山土が検出され、ピットも確認されたので、おおよその遺跡範囲を想定することができた。しかし、遺物はあまり出土しなかつたため、時期は不明のままとなつた。4日、中村C地区から土師器片が表面採集された。C地区的水田は周囲よりもやや高く、

西側に張り出した微高地状の地形が観察され、遺跡が存在する可能性が生じた。10日までの間に、B地点の隣接地や北西の前田B地区も含めて33本のトレンチを発掘した。一部に搅乱層もあったが、標高の高い西側や畦畔となっている微高地の縁辺部付近では遺構・遺物の遺存状態は比較的良好であったので、広範囲の古代遺跡が想定された。10・11日、最後に内宮ノ越地区を試掘し、調査は終了となった。中村・前田・内宮ノ越地区では延7.5日を要したことになる。11日に機材等を撤収し、現場作業は完了した。

b) トレンチと出土遺物

まず、深町・内宮ノ越・前田・中村の4地区について地区別の概要をまとめ、次に少量であるが、出土した遺物についての概略を述べたい。

i) 深町地区

トレンチ60本、約238m²を発掘した。当該地区は、すでに深町遺跡として周知化されているが、遺跡範囲が不明確な状況であった。事前の踏査では、東側（おもにF地区）から绳文土器、西側（おもにB地区）から古代土器が表面採集されていたため、当初は2時期の遺跡があると想定していた。

A 地区 トレンチ3本（約14m²）を発掘した。地山土は還元化し、遺物包含層も確認されない。

B 地区 トレンチ10本（約37m²）を発掘した。地山土は酸化し、北側には遺物包含層も確認された。

C 地区 トレンチ8本（約44m²）を発掘した。東側の地山土は酸化し、遺物包含層も確認された。しかし、1段下がっている西側は青灰色の砂疊層がみられ、河川の氾濫源であったと思われる。

D 地区 トレンチ4本（約16m²）を発掘した。地山土は酸化している部分があったが、遺物包含層は確認されない。

E 地区 トレンチ17本（約67m²）を発掘した。東端で標高の低い16・17トレンチ以外では酸化した地山土がみられる。柱穴などの遺構も30基ほど確認され、土師器片も出土した。遺跡の中心部である可能性が高い。事業地外である北側の畑地にも平坦面が継続しているので、遺跡範囲が及んでいると思われる。

F 地区 トレンチ12本（約41m²）を発掘した。地山土は、北西部が酸化していたのみで、ほとんど弱酸化～還元化した状態であった。北西部を中心に土師器が出土している。

G 地区 トレンチ6本（約19m²）を発掘した。地山土は還元化し、遺物包含層も確認されなかった。

ii) 内宮ノ越地区（A地区）

トレンチ4本、約1m²を発掘した。当該地区については重機の乗り入れが不可能であるため、人力によつてA地区のみを発掘した。地山土は還元化した青灰色を呈し、遺物も検出されなかつた。

iii) 前田地区

トレンチ19本、約49m²を発掘した。地形的には、前田B地区は中村C地区に近く、同一の遺跡が広がっている可能性があつた。

A 地区 トレンチ13本（約37m²）を発掘した。酸化した地山土層からピットなどの遺構が検出されたが、遺物を伴わず、時期については不明である。

B 地区 トレンチ6本（約12m²）を発掘した。地山土の酸化度は隣接する中村C地区よりも強く、1トレンチでは、高密度な遺構の分布がみられた。しかし、北西の山裾部分への遺跡の広がりについては、重機の乗り入れができなかつたため、詳細を確認できなかつた。

iv) 中村地区

トレンチ45本、約133m²を発掘した。当該地区においては、須恵器・土師器を中心とした土器が比較的多くの遺物が表面採集されている。



■ 造橋・遺物(包含層)検出トレンチ
□ 造橋・遺物(包含層)未検出トレンチ



第1図 宮之下遺跡群第1次試掘確認調査トレンチ配置図

A 地区 トレンチ17本（約56m²）を発掘した。15・16トレンチ以外では、弱酸化～還元化した地山土がみられ、遺構も検出されない。また、遺物包含層も確認できなかった。A地区における遺物の表面採集量は多く、遺跡の存在を想定させるものの、試掘調査では遺跡の痕跡をうかがうことはできなかった。これは過去の耕地整理（間直し）により、遺物包含層や地山土が大きく削平を受けたためと推測された。

B 地区 トレンチ7本（約19m²）を発掘した。東側はA地区に、北側はC地区に準じると思われるが、地山土はおむね還元化していた。

C 地区 トレンチ21本（約58m²）を発掘した。2・4・11トレンチでは地山土が還元化しており、砂礫層であったことから、南西から北東へ流れる流路が存在したと考えられる。ほかのトレンチでは、地山土がおむね酸化しており、ピットなどの遺構および古代の遺物包含層も検出されている。

v) 出土遺物

今回の調査では、特に古代の土器が多く出土しており、縄文・中世・近世の土器・陶磁器や鉢類が少量化する。ただし、全体的な量はテンバコ1箱分にすぎない上、発掘出土量に比べて表面採集された量が多いという状況である。量的に多い古代土器は、土師器が主体であり、深町地区では須恵器食膳具が得られなかったことから、古代でも10世紀頃の時期が考えられる。ただし、中村C地区では須恵器食膳具も採集されていることから、この地区については9世紀後半期を含めた時期に位置付けが可能と思われる。詳細については、次項および第Ⅲ～V章にて本調査出土遺物とともに触れることとしたい。

c) 調査のまとめ

各地区の状況をまとめると、当該事業地においては、次の4遺跡の存在が考えられるが、さらに範囲の確認が必要な遺跡もある。新発見遺跡の名称については小字名を利用した。

深町遺跡 すでに周知化されている遺跡である。今回の調査によっておむね深町B・C・E地区がその範囲と考えられる。時期は10世紀頃を中心と思われるが、採集された遺物には中世後期の土器も含まれるので、中世にも小規模な集落が形成されていた可能性が指摘できる。

面積は、全体で7,000m²程度を想定することができるが、今回の工事区域内にはおよそ5,000m²ほどが広がっているものと見込まれる。

片畑遺跡 前田A地区が範囲として考えられる。遺物が検出されなかったことから、時期については不明とせざるを得ず、北側への広がりも確認できていない。なお、表面採集された遺物は、近世以降のものが多いが、わずかながら中世土師器片が確認できる。

遺跡面積は、5,000m²程度と想定されるが、事業区域内にはそのうち3,200m²程度が含まれる見込みである。

宮田遺跡 中村C地区と前田B地区を中心とした範囲に確認できる。北西部への遺跡の広がりは、今回の調査では把握できなかった。この段階では、9世紀後半を中心とした時期が想定された。

発掘面積が少なく、調査できなかった区域もあって充分ではなく、第2次確認調査が必要であるが、宮之下遺跡群では最大規模となる約9,000m²の範囲が想定でき、すべてが事業区域内に広がっている。遺跡の性格等は明らかではないが、小規模な扇状地地形の扇頂部に立地していたものと考えられ、遺跡の中央を流路が縱断する。このため、水利等に伴う施設などの存在が考えられ、本調査にあたってはこれらにも留意する必要がある。

中村遺跡 中村A地区を中心とした、およそ2,000m²程度の範囲が遺跡であったと考えられる。縄文時代～近世の遺物があり、複数の時期が考えられる。ただし、遺構・遺物包含層とともに遺存せず、過去における耕地整理によって大きく削平を受け、遺跡は消滅したと考えられる。詳細は次項を参照されたい。

2) 中村遺跡

中村遺跡は、前項にて述べたように、第1次試掘確認調査によって発見された遺跡である。本発掘調査の対象からは除外されたのであるが、少量ながら遺物が検出されているので、本項にて報告しておくことしたい。

a 立地と微地形

中村遺跡は、鰐石川中流域の南端に位置している。中流域と上流域との境界は、西之入川の合流点を考えることができる。西之入川は鰐石川にはほぼ平行して北流するものの、合流する約400m手前で東流する支流を集めて流れを変える。この支流によって、宮之下と西之入とを画す丘陵は比較的急峻に開析されている。遺跡は、この丘陵先端の北東側に接する段丘上に立地している。

当該地の現況は水田である。斜面であるため、鰐石川に向かって4段ほどの階段状を呈した水田面が形成されている。最下段は、耕地整理によって区画された、定型化した水田が広がるが、上3段は傾斜した地形に基づいた不定形な水田がみられる。遺物は尾根に接する最上段および北側の2段目の水田から採集することができた。最上段には、平坦面が形成されており、50m×70mの範囲で遺物が採集されているので、この部分に遺跡の存在が考えられた。

この丘陵の北側に展開する扇状地帯を呈した部分には宮田遺跡を発見することができた。位置が近接するため、中村遺跡は宮田遺跡の延長である可能性もある。ただし、両遺跡の中間に位置する中村B地区からの遺物検出量は極めて少ないので、ひとまず別遺跡として考えておきたい。



第2図 中村遺跡と周辺の地形

第3図 中村遺跡基本層序
柱状模式図(1:40)

b 基本層序

第1次試掘確認調査では、多くのトレンチにおいて層位を確認することができたが、遺物包含層や漸移層に認定できる層はなく、耕作土・地山土を除けば、盛土や攪乱と考えられる層が多かった。したがって、全体的には第Ⅰ層：耕作土層、第Ⅱ層：盛土層、第Ⅲ層：地山土層としてまとめることとした。

第Ⅰ層は、(暗)褐色粘質土層で、現況の水田耕作土層である。表面採集される土器がやや多いことからも、攪乱された遺物包含層の土砂をやや含むと考えられる。第Ⅱ層は、青灰色もしくは黒灰色を呈した粘質土層である。やや暗色化した部分を遺物包含層と想定していたが、遺物の出土は確認できなかつたため、現在の水田を造成するための盛土とみなした。第Ⅲ層は、青灰色砂質粘土層である。粘性・縮まりとともにややあり、地山土層と考えられる。色調からはかなり還元化した状態をうかがうことができた。第Ⅱ層とは、砂質を帶びていていることで大きく異なっている。漸移層などが確認できないことから、第Ⅲ層の上位は全体的に削平を受けていると考えられる。

c 出土遺物

第1次試掘確認調査によって得られた遺物は、おもに土器・陶磁器の小破片であり、出土量も30点に満たない。遺物の内容は、縄文土器・須恵器・土師器・珠・近世陶磁器および錢貨である。破片数で最も多いのは土師器であるが、小片のために実測可能なものはなく、図化できたのは全体でも次の11点のみとなつた。また、トレンチ発掘によって出土した遺物は土師器小片のみで、掲載できた遺物はすべて周辺からの表面採集による。以下、種別に説明したい。

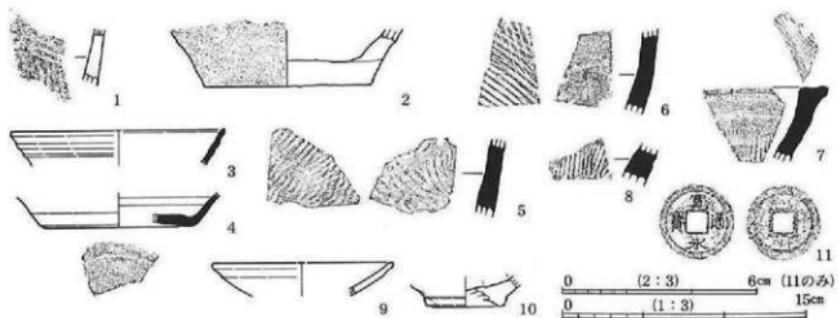
縄文土器（1・2） 1は、深鉢の体部片と思われる。小片である上、器面がやや荒れているが、外面には羽状縄文が確認される。胎土には径1mmほどの砂粒が多く混じる。焼成はやや良好で、灰褐～明褐灰色を呈する。詳細は不明だが、縄文前期の所産である可能性がある。2は、深鉢の体部下半～底部片である。文様などは確認されず、所属する時期等は不明であるが、径0.5～1mmの雲母などの砂粒が混じる胎土の内容から、縄文中～後期の所産と考えられる。なお、内外面に煤が付着しているが、剥離面にも一部認められる。破片となってから再利用された痕跡として考えられよう。

須恵器（3～5） 3は、杯の口縁部～体部片である。体部には、ロクロ成形の痕跡である凹凸がやや顯著にみられる。胎土は長石と思われる白色粒をやや多く含み、全体的に灰～灰白色を呈する。焼成は良好で、口縁部外面には幅3mmほど黒色になっている部分があるが、重ね焼きの痕跡と考えられる。口径は13.0cmと推測される。中村A-13トレンチの東側から表面採集された。4は、無台杯の体部下半～底部片である。体部にはロクロ成形、底部外面には回転ヘラ切りの痕跡を遺す。胎土は長石の微粒子を含み、灰色を呈する。焼成は良好で、底径は8.8cmと思われる。3・4はともに小泊窯産の製品であろう。

5は、甕類の胴部片である。外面の叩き目は平行線文で、彫り込みに対して木目が右上がりに斜行する。内面の当て具痕は同心円文で、年輪状に木目が走っている可能性がある。胎土には黑色微粒子が多く混じり、小泊窯産と思われる。色調は灰色で、焼成は良好である。

珠・洲（6～8） 6は、壺もしくは甕の胴部片である。外面には平行線文の叩き目がみられるが、内面の当て具痕はさほど明瞭ではない。また、色調は灰色であるが、内面は焼成がやや不良であるため、にぶい橙色を呈している。胎土には、長石粒や海綿骨針がやや混じる。叩き目の溝の幅が約3mmで、やや粗雑化している。

7は、壺の口縁部～胴部上半である。胴部は内湾して立ち上がり、口縁端部は外方へ引き出される。やや窪む口縁部端面には7条以上の櫛目による波状文がめぐらし、胴部内面の摺り目も密に施されている。



第4図 中村遺跡出土遺物

焼成は良好で、胎土には径1mmほどの黒色あるいは白色の砂粒がやや混じり、灰色を呈している。口縁部の形態などから、第V期に属すと思われる〔吉岡1994〕。8は、擂鉢の脇部下半である。外面には、沈線状の凹みがみられる。胎土には、長石・雲母の微粒が混じる。焼成は良好で、灰色を呈する。1段下がった水田からの表面採集資料である。

肥前（9・10） 9は、肥前系陶器の小皿で、口縁部～体部である。胎土の色調は灰黄色で、釉薬は灰オリーブ色を呈している。口径は11.0cmと推測される。外面の釉薬にはむらがみられることや器形などから、17世紀前葉～後葉と思われる。

10は、肥前系磁器の小皿の底部片である。見込みは幅約16mmほど蛇ノ目釉剥ぎされ、無釉部分には上位に重ね焼きした同じ製品の小皿の釉薬が付着している。胎土の色調は灰白～灰色を呈し、高台径は5.0cmと復元される。見込み蛇ノ目釉剥ぎや高台の形態から、17世紀後半～18世紀初頭の所産と思われる。1段下がった水田からの表面採集である。

銭貨（11） 銭貨は1点のみ採集された。11は、寛永通寶である。銭文の字体から、1697年を初説とする3期の「新寛永」であることがわかる〔永井編1998〕。

dまとめ

以上、第1次試掘確認調査の結果をもとに、中村遺跡の概要を述べてきた。本遺跡は、畦畔などから遺物が表面採集されているにもかかわらず、地下の状況からは遺跡の痕跡を確認することはできなかった。おそらく、過去の耕地整理においては、耕作土を保存してその地下を掘削する間直しといった工法が用いられたと思われ、そのために遺構や遺物包含層が大きく削られたと想定される。したがって、中村遺跡はすでに消滅したと考えられる。

ところで、中村遺跡からは古代の土器も出土している。近接する宮田遺跡は9世紀後葉～10世紀初頭を前後する時期の集落跡と考えられるが（第V章）、両者にはどのような関係があったのか、古代における当該地の動向を探るのが今後の課題といえよう。

3 第2次確認調査

1) 調査の方法と経過

平成9年に実施した第1次試掘確認調査により、深町遺跡、片畑遺跡、宮田遺跡の3遺跡に対して発掘調査を行うこととなったが、特に宮田遺跡の北半部分については、諸条件により調査トレンチを設定することができず、範囲や内容等を地形からの推定に頼らざるを得なかつた。その後、土木工事等の工程との整合性等から、深町遺跡、片畑遺跡は平成10年に、宮田遺跡は平成11年に発掘調査を実施する方針となつた。このことは、平成10年に実施を予定している2遺跡の発掘調査と並行して、宮田遺跡の確認調査を再度行い、より詳細に範囲や内容等を把握し得る期間が与えられたことにもなる。そのため、宮田遺跡の発掘調査が必要と推定されている範囲約8,000m²を対象に、第2次確認調査を実施することとした。調査期間は当該水田の稲刈り後とし、平成10年9月9日から11日に、片畑遺跡の発掘調査と並行して実施した。また、片畑遺跡の発掘調査終了後の同年10月30日にも補足調査を行い、延べ4日間で作業を終了した。

確認調査では0.45m³のバック・ホウを使用し、任意に設定した1~23トレンチの発掘を行つた。また、補足調査時にはA~Cトレンチの掘削を行つたため、発掘を行つた調査トレンチは合計で26ヶ所となつた。発掘実面積は約630m²で、調査対象面積の約7.9%を調査したことになる。

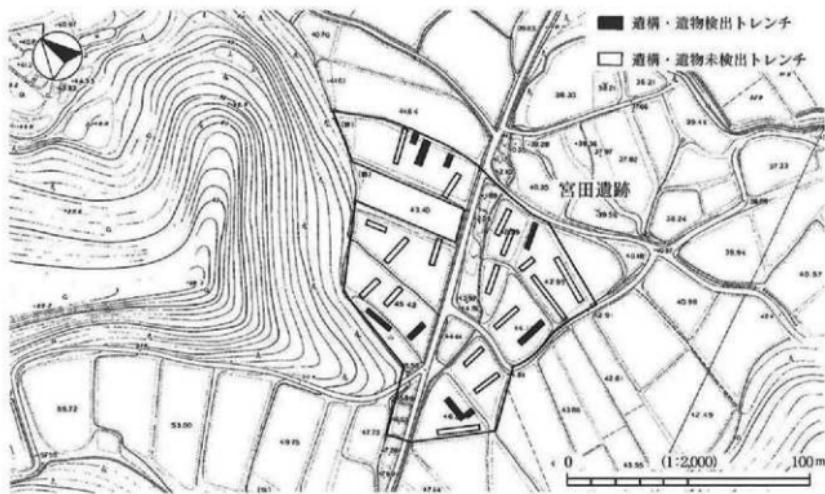
2) トレンチの概要と基本層序

調査トレンチは、現況の水田区画一枚に2~3ヶ所の割合で、調査対象区域のほぼ全域に設定した。遺構もしくは遺物等の検出が認められたのは、2・9・11・12・15・22トレンチ及びA・B・Cトレンチの9ヶ所である。出土遺物の大半は古代に比定可能な土器類であり、宮田遺跡の主体的時期が示唆されたが、中世の遺物も數点認められた。これら遺構・遺物検出トレンチの分布を概観すると、調査対象区域のほぼ全域に点在していることが把握される。

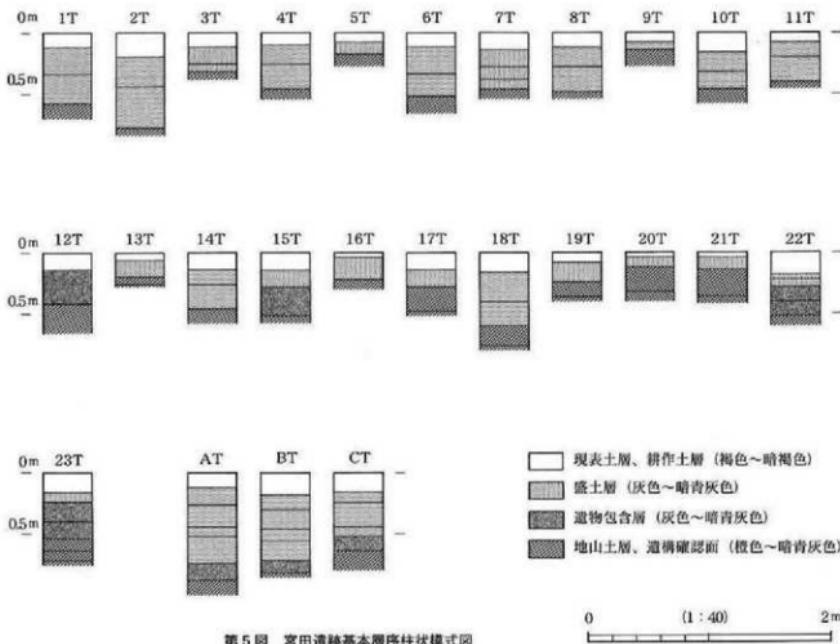
第2次確認調査における基本層序は、大半のトレンチにおいて、現表土（耕作土）の直下に水田造成のための盛土がなされ、その直下に橙色～暗青灰色粘質土の地山土が堆積している状況であった。このことは、過去の耕地整理等による影響が、遺物包含層や遺構確認面にまで著しく及んでいることを示している。また、このような影響もあってか、宮田遺跡の遺構密度はやや薄いと判断される内容になつていて。遺物包含層は7ヶ所の調査トレンチで把握され、概ね腐植物や炭化物等を多く含み、灰色や暗青灰色、暗褐色等を呈する粘質土で、古代の遺物が主体であった。また、その下位に相当する地山土からは、ピット状あるいは土坑状の落ち込みや、溝状の落ち込み等が検出された。これらの発掘は行わなかつたが、遺物包含層と同様の粘質土を覆土としており、古代に属する遺構の確認面に相当すると考えられた。

3) 調査のまとめ

調査対象区域のほぼ中央を通る農道周辺は、沢状地形を呈しており、特に農道南側に沿つた部分は、周辺の水田と比較して1m程度も低くなつていて。遺構・遺物検出トレンチの分布状況からは、沢状地形を避けるように、その両岸に遺跡が営まれる様相も想定可能である。そのため、調査対象区域の中央部分には、集落跡等と一体を成す旧自然流路の存在が考えられた。これらの結果から、土木工事等の工法等との兼ね合いも再検討し、今回の調査対象区域をそのまま発掘調査対象とする必要性が把握された。



第4図 宮之下遺跡群確認調査（第2次）トレーニング配置図



第5図 宮田遺跡基本層序柱状模式図

Ⅱ 宮之下遺跡群をめぐる環境

1 宮之下遺跡群の位置と地理的環境

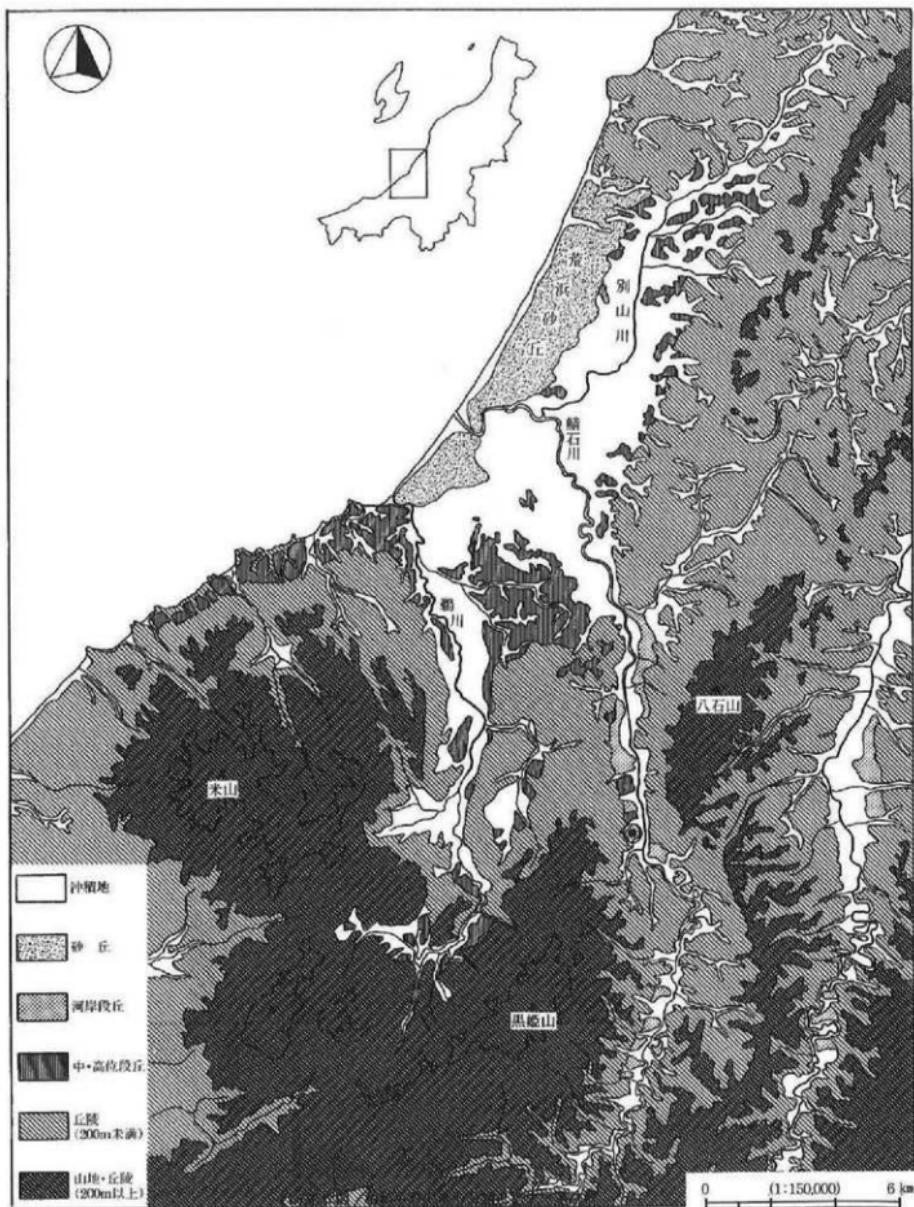
今回の発掘調査で対象となった宮之下遺跡群は、市の中心部からは南東へ約12.5km離れた石曾根地区に位置する。ここでは、まず柏崎平野について概観し、遺跡群の位置とその周辺地形についてまとめたい。

柏崎平野概観 柏崎平野は、新潟県の日本海沿岸部のほぼ中央に位置した、臨海沖積平野である。行政的には中越地方とされているが、柏崎平野はその北西部といえる。中越地方は、地形的には大きく南部と北部とに分けられる。南部は、魚沼地方を中心とした山間部であり、北部は、おもに東半部が新潟平野の一部、西半部を柏崎平野とする。新潟県には、信濃川や阿賀野川等の大河によって形成された広大な新潟平野や、関川による高田平野など、比較的大規模な平野がみられる。柏崎平野は、この二大平野の間に挟まれ、山塊や丘陵等の分水嶺に囲まれた小規模な独立平野である。

柏崎平野は、鶴川・鰐石川およびその支流である別山川を主要河川として形成されている。平野は、河川流域によって南または北東へ広がり、流域に沿った自然堤防の発達が顕著である。平野を囲む山塊・丘陵は、東頸城丘陵の一部をなし、刈羽三山と称される米山・黒姫山・八石山が連なる。これらの丘陵は、各々独立した水系を持つ鶴川・鰐石川により、地形的に西部・中部・東部と3分できる。西部は、米山を頂点とした陥しい山塊によって高田平野から隔離され、その山塊は米山海岸にまで達している。低位・中位・高位段丘の形成が著しく、断崖が多い。また、沖積地が少なく、砂浜もほとんどない。中部は、黒姫山を頂点とした丘陵が緩やかに裾野を北側へ伸ばしている。沖積地に近い丘陵の北辺部では、広い中位段丘がみられるが、鶴川・鰐石川両水系による浸食により、島状の独立丘もある。東部は、南西→北東方向へ伸びた八石山丘陵・曾地丘陵・西山丘陵が規則的に並び、向斜軸によって長鳥川・別山川といった鰐石川の支流が南西へ流れている。また、中部→東部の北西辺は、日本海によって洗われるが、海岸線に沿って柏崎砂丘・荒浜砂丘が横たわり、南西は米山山系の丘陵に、北東は西山丘陵に接している。大部分の沖積地は、現在では水田化されているものの、本来はこの砂丘の後背地として湿地性が強い低地である。

宮之下遺跡群と周辺の地形 宮之下遺跡群は、鰐石川中流域の左岸に位置している。鰐石川は、下流域に至って著しく蛇行し、広い冲積地と多くの自然堤防を形成する。しかし、上・中流域では黒姫山北麓に連なる丘陵に河岸段丘を形成し、顕著な発達をみせる。中流域とは、西ノ入川と合流する南端から、長鳥川と合流する北端まで、南北約8km、東西約1kmの冲積地を中心とする。河岸段丘は東西両岸に形成されているが、これらを開析する沢も多い。沢は、冲積地に至って小規模な扇状地を形成しており、鰐石川の蛇行もかなり制約を受けて北流している。

左岸の南半部では、沢による開析の結果、冲積地に対して幅約500~700mの舌状に張り出した台地が4ヶ所ほど形成されている。現在では、北から宮平・笠崎・行兼・宮之下の集落が台地上に展開し、周辺の冲積地は水田として利用されている。宮之下の台地は標高約40mほどで、直下の冲積面とは約10mの高低を持つ。台地のほぼ中央には、集落を見下ろす八剣神社を戴いた細長い尾根があるが、この尾根によつて台地は南北に分かれ、北側に深町遺跡、南側に片畠遺跡・宮田遺跡・中村遺跡が分布する。



第6図 柏崎平野の地形分類と宮之下遺跡群

2 周辺の遺跡と歴史的環境

今回実施した宮之下遺跡群の調査では、出土遺物の大半が古代の土器で占められているが、ほかにも若干ではあるが縄文・中世・近世の遺物も得られている。鰐石川中流域の遺跡や文献資料を手掛りとして、本遺跡群をめぐる歴史的環境をまとめてみたい。

古墳時代以前 当該地では、今のところ旧石器時代・縄文時代草創期に属す遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡も数少ないが、秋里遺跡(14)・十二沢遺跡(17)などが知られている。十二沢遺跡では、尾根東斜面一帯から縄文土器・石器が採集され、土器の文様から中期前葉と考えられている【岡本1987】。また、平成8年度に発掘調査された秋里遺跡では、台地状を呈した地形の縁辺部における土器捨場から、後期前～中葉に属する土器や石器が出土している【柏崎市遺跡調査室1996】。さらに、宮之下遺跡群にも近い鰐石川上流域では長者ヶ原遺跡(早期)・中山遺跡(中期)・野崎久保田遺跡(26、後期)【岡本1987】等がある。これらの遺跡によって、当該地に縄文集落が営まれていたことがわかるが、その規模や内容などは今後明らかにすべき課題である。

縄文晩期以降の遺跡はさらに稀薄となるが、前述の秋里遺跡から弥生後期と考えられる壺形土器片が出土している。これらの土器片は、台地を分断する深さ約2mの溝状造構から発見されており、周囲に濠をめぐらした高地性集落の存在が想定されている【柏崎市遺跡調査室1996】。

続く古墳時代になっても、同様に遺跡の内容は希薄であるが、鰐石川との合流点に近い亀の倉遺跡では、前～中期および後期の土器が採集されている。前～中期の遺物としては、二重口縁壺や赤彩された壺・高杯が、後期には内面を黒色処理した高杯や土製支脚がある。遺物の内容からは、ある程度の時間幅を有した集落跡が想定される【宇佐美・坂井1987】。

なお、宮之下遺跡群においても、宮田・中村の各遺跡から縄文時代・片烟遺跡から古墳時代の土器が発見されているが、出土状況からは遺跡との明確な関係はみられなかった。

古代 7世紀の畿内政権によって、当該地にも律令に基づく制度が導入されたと考えられる。7世紀末までには北陸道にあたる越国が3分割されたが、阿賀野川以南の新潟県域は越中国に属していた。その後、8世紀初頭に越中国4郡割譲や出羽郡建郡・出羽国建置を経て、明治に至る越後国が確定したと考えられている。なお、柏崎地方は割譲された4郡中の古志郡に属していたが、9世紀初頭に三嶋郡として分離独立したと推定される【米沢1980】。さらに、承平年間(931～937)に成立した『和名類聚抄』には、三嶋(島)郡内の郷として三嶋(島)・高家・多岐の3郷が記載されている【柏崎市史編さん委1987所収4・5】。この3郷の範囲については、推測の域を出ることができないが、おおよその範囲でとらえるとすれば、鰐石川中流域・長島川流域が高家郷域に比定されている【金子1990】。ただし、鰐石川中流域でも上流に近い宮之下遺跡群の古代集落は、高家郷域の集落とされていたのか、実態は不明瞭である。また、古代北陸道のルートについては、「延喜式」に記載されている佐味・三嶋・多太・大家の各駅で結ばれるルートによって、北陸道は柏崎地方を通過するとされている【柏崎市史編さん委1987所収13】。鶴川や鰐石川の渡河点などの差異によって諸説が呈示されているが【新沢1970・金子1990】、柏崎におけるルートについては、近年の調査成果に基づいた再検討が必要であろう。

当該地における古代遺跡としては、今回調査した宮之下遺跡群のほか、亀の倉遺跡(1)・上加納遺跡(8)・赤木遺跡(12)・谷内田遺跡(13)・秋里遺跡(14)・山王前遺跡(15)が知られている。いずれの



番号	遺跡名	おもな時期など
1	龜の巣遺跡	古墳・古代
2	馬場・天神脛遺跡	中世
3	下川原遺跡	古代
4	山谷遺跡	中世
5	下加納遺跡	中世
6	住吉遺跡	中世
7	山王おばたけ遺跡	中世
8	上加納遺跡	古代・中世
9	周広院遺跡	绳文
10	鶴田遺跡	中世
11	欠畠遺跡	中世
12	赤木遺跡	古代
13	谷内田遺跡	古代・中世々
14	秋里遺跡(宮平道路跡)	绳文後期・弥生
15	山王前遺跡(宮平道路跡)	古代・中世・近世
16	林平遺跡	近世
17	十二沢遺跡	绳文
18	深町遺跡(宮平道路跡)	绳文中期
19	堂竹遺跡(宮平道路跡)	古代・中世
20	片畠遺跡(宮平道路跡)	中世
21	宮村遺跡(宮平道路跡)	中世・近世
22	中村遺跡(宮平道路跡)	古代・中世
23	山室瀧谷遺跡	古代・中世
24	北村遺跡	中世
25	久保田島神社遺跡	中世
26	野崎久保田遺跡	古代
27	南条毛利航跡	绳文後期
28	加納城跡	中世
29	小番城跡	中世
30	善根城跡	中世
31	八石城跡	中世
32	宮平城跡(宮平道路跡)	中世
33	石曾根城跡	中世
34	神の倉塚	中世
35	愛宕山の塚群	中世々
36	じょうきん塚	員数 23
37	光賀寺の宝篋印塔	
38	光賀寺の五輪塔	
39	光賀寺の大塚	
40	久之木塚群	
41	清竜寺の五輪塔	員数 5
42	飛岡大坪ダイラ	
43	出土の宝篋印塔	
44	飛岡松葉の塚群	員数 2
45	飛岡神明神裏山の塚群	員数 2
46	十二神社の塚	
47	周広院の五輪塔	
	宮平の塚(宮平道路跡)	

第7図 鮎石川中流域における遺跡分布図

遺跡も鯖石川の河岸段丘上や旧流路に沿った自然堤防上に立地している。亀の倉遺跡は、鯖石川とその支流長鳥川に挟まれた位置にあり、八石山から派生する丘陵につくられた河岸段丘上に立地する。水田から多量の須恵器・土師器が出土しており〔宇佐美・坂井1987〕、高家郷における中心的な遺跡として位置付けられている〔金子1990〕。秋里遺跡は、南北を鯖石川の旧流路によって浸食され、舌状に張り出した微高地にある。先端部の畠地から須恵器の甕片が比較的多く採集されている〔斎藤1997〕。また、秋里遺跡と同じ宮平遺跡群の山王前遺跡では、立会調査および発掘調査によって小規模な河川跡が南北2ヶ所で発見されており、いずれも完形品を含む土師器碗が出土した〔柏崎市教委1997b・1998〕。発掘調査では南側の河川跡（S D-51）付近における遺物の出土状況を明らかにしているが、河川の北側や北側斜面から土器は出土せず、完形の土師器碗は河川の南側斜面、その他の小片はすべて河川の中や南側に分布していた。この出土状況は、土器が廃棄された状態を良好に示している。柏崎平野においては、類似した資料との対比が難しく、すぐにこれらの資料から年代観を得ることはできない。ただし、山王前遺跡から須恵器食膳具が出土していないことが手掛りとなろう。

当該地では、発掘調査などによって9～10世紀を中心とした資料が蓄積されつつあるが、これまでの調査面積は小さく、遺物の出土量が少なかったことから、集落の様相を示すには至らなかった。今回の調査では、2つの古代集落の大半を発掘し、建物跡も検出できることから、該期の様相について明らかにしていくことが可能になると思われる。

中世 11世紀後半～12世紀になると、越後国にも多くの荘園が成立するようになり、柏崎地方では宇河（鶴川）・佐橋・比角の3荘が史料によって確認されている。このうち、皇室領佐橋荘には荘内の地名として「北条」・「南条」・「永鳥（長鳥）条」・「カンナウ（加納）条」などがみられる事から、鯖石川中流域と長鳥川流域に荘域が想定されている。史料上の初見は文治2年（1186）であるが〔柏崎市史編さん委1987所収15〕、12世紀前半には立荘していたとされる〔荻野1986〕。荘園領主には若干の変遷があったようであるが〔村山1990〕、地頭職は鎌倉期を通じて毛利氏が相承していたようである。まず、13世紀初頭に大江氏が佐橋荘の地頭職を得、中頃には庶流の越後毛利氏が相伝して在地に赴任していたと考えられる〔田村1987・村山1990〕。さらに、毛利氏は北条毛利氏を嫡流として庶流の南条毛利氏・安田毛利氏が分立するが、その後は各々が独自に所領支配を進めていくこととなる。嫡流である北条氏は、長鳥川右岸に北条城を構えて要害とした。裾部には寺院が多く立ち並び、現在でも中世末の景観を残している。北条氏が16世紀後半の御館の乱で敗れた後、柏崎一帯は上杉景勝の家臣によって分割された支配を受ける。

また、「廻国雜記」によれば、その著者道興は1486年（文明18）に都から大原越えし、北陸をめぐって越後から関東へ至る旅に出ている。越後では、関東へ出るために府中（上越市）から柏崎を経て、「やすだ（安田） 山むろ（山室） みをけ（刈羽郡小国町三桶） しぶ川（渋海川） 大井（刈羽郡小国町大貝） きおとし（中魚沼郡川西町木落）など打過ぎて」魚沼に向かっている〔柏崎市史編さん委1987所収111〕。さらに、1488年（長享2）には万里集九が江戸から越後府中に旅する際に、魚沼から柏崎を通過している。集九の詩文集「梅花無尽藏」によれば、「渡信濃河 河在越後之有妻（め見置之間）とあるから〔柏崎市史編さん委1987所収114〕、道興と同様に「見置（三桶）」を通過したと考えられる。このルートは、山室と安田を結ぶことから、鯖石川中流域を河川沿いに進んでいくと考えられるが、のちに魚沼街道とされる北条一小千谷を通過するルートなどとともに、上杉氏によって整備されていったと推測されている〔小松ほか1994〕。今回の調査では中世の遺物も出土しているほか、実態不明ながら堂竹遺跡が

存在するなど、宮之下遺跡群にもこのルートの沿線にあった中世集落が展開していた可能性がある。なお、「貴屋家兼光券案」と呼ばれる永禄3年(1560)の史料がある〔柏崎市史編さん委1987所収242〕。はじめに「越後米山より奥之分」とあることから、当時の越後国内における地域区分には米山が用いられていることがわかる史料である。記載内容をみると、柏崎市から南蒲原郡中之島村に至る88ヶ所の集落を伊勢御師が訪ね歩いたことがわかる。その中には、鰐石川中流域では「宮たいら(宮平)」があり、さらに「北上(北条)」があるが、記載されている集落は、鶴川・別山川などの河岸段丘や自然堤防上にあり、河川交通の利用が指摘されている〔山上1987〕。

集落跡などの中世遺跡は、やはりほとんどが鰐石川に面した河岸段丘や自然堤防上で確認されている。特に、長鳥川との合流点に立地する馬場・天神腰遺跡(2)は特筆すべき調査結果が得られている。平成3~4年の発掘調査により、同遺跡は13~14世紀を主体時期としながらも、12~16世紀の約400年にわたって営まれていたことがわかった。遺跡は南条毛利氏所縁の地にあり、検出された遺構・遺物からは、中世の一般集落とは異なった様相がみられ、都市的な性格が推測されている〔品田1993b〕。また、下加納遺跡(5)では1.5mほどの小塚を取り崩した際に完形の珠洲の小壺が発見された〔宇佐美・坂井1987〕。付近にも多くのマウンドが散在しているので、中世墓地の可能性もあるだろう。他の遺跡については、珠洲片などが採集されても遺構などは不明瞭な場合が多く、当該地における一般集落の実態は今後の調査成果が待たれる。この他、鰐石川两岸の黒姫山系・八石山系から派生する丘陵には多くの要害が築かれ、毛利氏に関わる伝承を遺すものがある。また、宮平城跡(32)はこれまで所在が不明確であったが、平成8年度の秋里遺跡発掘調査によって、空堀の可能性を持つ溝状遺構が検出されたので、宮平城跡の比定地として有力になった〔柏崎市遺跡調査室1996〕。鰐石川中流域の中世遺跡は、内容などがほとんど不明確なものが多い。しかし、当該地の地形は前近代の状況を比較的良好にとどめているほか、現在の集落名である「森近」や「行兼」などは、中世の土地制度における単位となつた「名」を想定させる地名である。今後は、旧地形や要害と集落との位置関係などからも中世史の一端を類推することができよう。

近世 16世紀末に上杉景勝が会津へ移封されてからは、18世紀初頭に至るまでの支配者には幾度かの変遷がみられる。ほとんど高田地方の藩主による支配が続いたが、ほどなく改易・転封などを受けるといった例が多かったからである。部分的に天領・旗本領もしくは他藩領となるが、18世紀初頭に松平越中守家が高田藩主となると、その後は白河・桑名への移封があったものの、大半の柏崎市域に対する松平家の支配は継続して幕末にまで及んだ。

現在の宮之下集落を含む石曾根地区は、近世には石曾根村とされている。17世紀初頭にはやはり春日山・福島・高田藩領と変遷するが、1681年から幕末までは天領となっている〔新沢ほか1990〕。柏崎・刈羽地方におけるおおまかな近世の状況は、19世紀初頭に白河藩主松平定信の命で編纂された『白川風土記』に詳しいが〔柏崎市立図書館1977〕、石曾根村は白河藩領ではなかつたため、『白川風土記』には記載されておらず、具体的な村の様子は明らかではない。村の石高を示した史料をみると、正保2年(1645)の「越後国絵図」には「一五〇石余宮下村」との記載があり、「天和三年(1683)検地水帳」以降は石曾根村に含められている〔新沢ほか1990〕。宮下(宮之下)村は、17世紀後半頃に小清水・西ノ入・笹崎とともに支配の上では石曾根村に組み入れられたと考えられる。

鰐石川中流域における近世遺跡は今のところ明確ではない。これは現在の集落が近世集落を踏襲しているために発見の機会を得なかつたためと思われる。宮之下遺跡群でも近世の遺物が散見されるが、該期における開発の様相などを示すと考えられる。

III 深町遺跡

1 調査

1) 遺跡の立地と微地形

深町遺跡は、新潟県柏崎市大字石曾根字深町地内他に所在する。平成7年、県営農免農道整備事業<石曾根地区>が計画されたことに伴い、現地踏査を実施した結果、遺物等の散布が認められ、新発見の遺跡として周知化された。

鰐石川中流域の左岸に形成された段丘上に立地し、標高は約37mを測る。また、周辺の沖積地との比高差は約8mである。西側には黒姫山から連なる丘陵が広がり、急激に標高を高めるが、これらを開析する沢が多くみられる。深町遺跡は、このような沢の一つによって、鰐石川との合流部付近に形成された扇状地に位置しているのである。また、南側には沢の開析によって半島状に取り残された丘陵がみられる。その東端には八剣神社が鎮座し、標高約54mを計り、更に東側に段丘地には、現在の宮之下集落が形成されている。深町遺跡はこの半島状の丘陵によって、片烟遺跡、宮田遺跡及び中村遺跡の3遺跡と、大きく南北に分離された位置に所在している。すなわち、地理的には他の3遺跡と大きく異なるあり方を呈しており、標高約43~45mの宮田遺跡との比高差も大きい。また、北側には標高約33mの段丘面があるが、鰐石川支流の小規模な河川によって、遺跡の所在する段丘と分離されている。この小規模な河川は、西側の丘陵地を源に、鰐石川を目指して沢状地形内を北東方向に流れている。しかし、深町遺跡の立地する段丘に到ると、この段丘面を避けるように、縦に沿って一旦北上し、その後再び北東へと流路を変えて鰐石川へと注ぐ。小規模な河川が蛇行する地点は、鰐石川左岸の段丘面と西側の丘陵地との接点に相当するが、丘陵斜面の崩落や地滑り等の痕跡が著しく、断崖絶壁状の山肌を見せていている。

このように、深町遺跡の所在する段丘は、半島状の丘陵地や小規模な河川によって、南と西、そして南北の3方向から地形的に分離されているのである。東側についても、沖積地との比高差は約8mと大きい。そのため、微地形的な観点からは、独立丘的な立地と捉えることができよう。しかし、現在の宮之下集落の一部とは比高差もなく、同一の扇状地に相当していると思われ、地形的な連続性が窺われる。

2) 調査区とグリッドの設定

深町遺跡は全体で約7,000m²の範囲が想定できるが、今回の土木工事等において盛土工法が行われ、遺跡が保存される部分が生じたため、それらを除いた約3,500m²が発掘調査の対象となった。また、実際の発掘調査時には、表土剥ぎが進んだ結果、自然流跡だけしか検出されないことが明確になった地点等の面積を縮小し、調査の効率化を図つていった。そのため、実際に発掘調査を実施した面積は、約3,300m²となつた。

調査グリッドは、国家座標軸に沿って、宮之下遺跡群の4遺跡すべてが含まれるように設定した。したがって、グリッドのX軸が真北を指し、グリッド名称がそのまま各遺跡間の位置関係をも示している。大グリッドは10m四方とし、その中に2m四方の小グリッドを設定して25分割した。グリッドの名称は、X

軸の起点を141.30とし、そこを1ラインとして、南に向かって1・2・3…の算用数字を使用した。また、Y軸の起点は11.40とし、そこをAラインとして、東に向かってA・B・C…X・Y・Z・A1・B1・C1…のアルファベット大文字と算用数字の組合せを使用した。したがって、具体的に表記する場合は、大・小グリッドを組み合わせることによって、「Y-10-15」や「B1-8-2」等となる。

また、グリッドとは別に、調査区をⅠ～Ⅲ地区に区分して呼称することも行った。便宜上用いた概念的な区分であり、Ⅰ地区は調査区西側の自然流路跡が多く検出された地区、Ⅱ地区は調査区の中央に相当する地区、Ⅲ地区は調査区東側の比較的遺構密度の高い地区を指す。

3) 発掘調査の経過

深町遺跡の現場作業は、平成10年5月18日から7月18日まで、延べ40日間で実施した。また、8月2日には現地説明会を開催した。調査員延べ84.5人、調査補助員延べ122人、作業員延べ366人を要した。

調査初日には調査担当以下、調査員・調査補助員5名と、社団法人柏崎市シルバー人材センターへ委託した作業員15名が現地に集まり、文化振興課長の挨拶を皮切りに調査に着手した。

調査初日からは表土剥ぎを中心とし、株式会社石塚組からのバック・ホウ、クローラーダンプ各1台で作業を行った。調査区の西側に相当するⅠ地区の北端から開始し、表土剥ぎが終了した部分から、順次作業員によるジョレンがけと遺構確認を行っていった。しかし、当初はこれらの作業が順調に進んだが、ある程度表土剥ぎが進んだ段階で、本地区の層序の把握が難航してしまった。そのため、遺構確認面の理解にも苦しむこととなり、翌日以降は基本層序の把握に主眼を置いて作業を行った。その結果、層序の理解が難航した事由は、異時期の自然流路跡が複雑に絡んでいるためと推測されるに至ったが、まさに手探りの苦しい状況が続いた。

調査開始から約1週間経った頃には、ようやく基本層序の理解が得られるようになり、遺構確認作業も進んで、自然流路跡に設定したサブ・トレチの発掘にも着手した。また、5月27日にはⅠ地区の表土剥ぎ作業を終了し、引き続いてⅡ地区的表土剥ぎへと移行した。Ⅱ地区は北西側から掘削を開始したが、この地点には良好な遺物包含層が包蔵されており、古代を主体とする遺物が多数検出された。6月2日からは表土剥ぎもⅢ地区へと進み、この頃にはⅠ地区の遺構発掘やⅡ地区的遺構確認作業も並行して行っていたため、作業箇所が現場内の広範囲に分散してしまった。そのため、各箇所の作業員と打ち合せをするために、調査担当及び調査員が現場内を常に走り続けるような光景がみられた。しかし、6月4日には調査区全域の表土剥ぎ作業を終了し、重機の撤収を行った。6月9日には株式会社オリスによって、グリッド杭の打設が開始され、遺構確認作業も6月12日には終了した。この日にはグリッド杭の打設や仮木準点の設置も終了したため、以後は遺構発掘作業に専念していくこととなる。

遺構の発掘作業は、Ⅰ地区から順次Ⅱ地区、Ⅲ地区へと進みながら行っていく方針とした。大半がピット類であったため、半截を行った後、土層観察をして、遺構台帳の作成。その後、必要に応じて土層断面の写真撮影や実測図面を作成し、完掘を行う手順をとった。大型の土坑類等には土層観察用のベルトを設定し、建物跡と考えられる柱穴列については、その列ごとに土層図もしくは断面図の作成を行った。また、S X-33廐棗土坑は、遺構確認の段階から、多量の土器類を包含していることが把握されていたため、優先的に発掘作業に着手した。当初は竪穴住居跡とも考えられたが、発掘が進むと、その可能性はすぐに否定された。6月18日には出土遺物やベルトを残して、S X-33廐棗土坑の発掘が終了したため、遺物出土状況を写真撮影した。遺物出土状況の微細図は、写真測量によって作成することとし、株式会社オリスが

簡易タワーの先端に測量用カメラを取り付けた器材を現場に持ち込み、6月23日に撮影を実施した。

その後、遺構台帳や土層図、断面図の作成が、半蔵の進み具合から大きく遅れることがあり、調査担当や調査員だけによって、これらを作成する日が数日あった。しかし、7月に入った頃には作業も順調に進み、7月13日にはすべての遺構発掘作業を終了した。遺構の平面図については、当初から航空写真測量によって作成することとしていたため、その撮影日を15日に決定して全体清掃作業等の準備を開始した。しかし、当日の現場付近は快晴に恵まれたものの、撮影用セスナ機の離陸場所である調布飛行場が荒天となり、結局離陸許可が下りずに撮影を延期せざるを得なくなってしまった。この日には、航空写真的撮影後に予定していた地上からの通常撮影により、遺跡全体の完掘写真等を撮影し、翌日の天候回復を祈った。しかし、翌16日と17日も東京付近の雨天のため撮影延期となり、現場付近が快晴なだけに関係者の間に苛立ちが募った。7月18日、満を持して飛び立ったセスナ機は10時20分頃に現場に到着、11時頃には無事に撮影を終了した。これにより、深町遺跡発掘調査の現場作業がすべて終了。8月2日には地元の住民を対象に現地説明会を開催し、約100人の見学者が訪れた。

4) 基本層序の概要

今回の調査における基本層序は、I地区の調査区東壁、II地区の調査区西壁、III地区の調査区東壁の3ヶ所で観察を行った。I地区は自然流路跡が集中的に検出された地点であることから、他の2つの地区とは若干異なる堆積状況が確認された。II地区及びIII地区については、概ね共通した堆積状況であることが把握された。堆積状況の差異は、基本的に自然流路跡による影響の多寡に起因すると考えられるが、I地区の旧地形が他の2つの地区に比べて約1mも低かったため、過去に実施された耕地整理等による削平が軽微であったことも推察できる。なお、基本層序の名称については、ローマ数字大文字を使用し、算用数字によって呼称した遺構覆土等と区別した。

I地区 第Ⅰ層は現表土をなす層であり、水田の耕作土に相当する。床土として盛土された部分も認められたため、第Ⅰa層及び第Ⅰb層に細分した。色調は暗褐色及び暗灰褐色を呈す。第Ⅱ層は炭化物や砂粒を含み、灰褐色及び褐色を呈す。色調の相違から第Ⅱa層と第Ⅱb層に細分された。第Ⅲ層は洪水等の自然災害の痕跡を示す層で、黄灰色及び暗灰黄色を呈して、第Ⅲa層～第Ⅲc層に細分される。洪水等は2～3次にわたって発生したと思われ、その間に中世の遺物を包含する層も認められる。そのため、自然災害の時期を中世に比定することが可能であろう。また、数次に及ぶ災害が、中世において生活の痕跡が不顕著になる要因になったと考えられる。第Ⅳ層は古代の遺物を包含する粘質土層で、第Ⅳa層～第Ⅳe層に細分される。炭化物等を多く含み、生活等の痕跡が比較的色濃い。色調は暗褐色、褐色、明黄褐色、黒色を呈している。第Ⅴ層は青灰色を呈する粘質土層で、本地区における地山土に比定される。本層上面において自然流路跡やピット・土坑類等が検出され、遺構確認面に相当すると判断された。第Ⅳ層との関係から、古代を主体とする時期の確認面と考えられる。

II地区・III地区 第Ⅰ層は現表土で、暗褐色を呈す。水田の耕作土に相当する。第Ⅱ層は暗灰色及び灰黄色を呈する粘質土で、炭化物を含む。古代の遺物を多量に包含するため、本層を遺物包含層とした。色調の相違から、第Ⅱa層と第Ⅱb層に細分された。第Ⅲ層は浅黄色を呈する粘質土で、本地区における地山土に相当する。本層上面において多数のピット・土坑類等が検出され、古代を主体とする遺構確認面と認識された。第Ⅳ層は遺構確認面の下位に相当する地山土で、黄橙色を呈する粘質土である。また、第Ⅴ層は橙色粘質土層である。

2 遺構

1) 遺構の分布

深町遺跡からは、ピット類や土坑類を主体に、溝跡や自然流路跡等が検出された（図版4）。ピット類は主に建物跡等に伴う柱穴であると考えられるが、すべてを推定復元することはできなかった。土坑類は比較的深度の浅いものが大半であったが、遺物を一括廃棄したと思われる廃棄土坑も1基検出された。また、溝跡は自然流路の流水の進路を人工的に調整するための小規模なもので、土地区画等を意識した痕跡は認められなかった。自然流路跡は調査区内で最も標高の低いI地区に集中しており、若干時期の異なる流路が複雑に切り合っている様相が把握された。これらの遺構群からは、土器類等の年代を知ることが可能な遺物が出土しなかったため、詳細な帰属時期を特定できないものが大半である。しかし、本遺跡の主体は、概ね10世紀前葉に比定可能であり、検出遺構の多くもその前後に營まれたと推定できよう。なお、今回の発掘調査区は、概ねコの字状を呈するが、中央の未発掘部分は盛土保存区域である。

検出遺構の主体を占めるピット類や土坑類は、II地区及びIII地区としたXグリッド以東を中心に分布している。ピット類はII～III地区のほぼ全域に分布しているが、III地区西半で最も密度が高く、この地点では切り合いも多くみられる。また、建物跡もピット類と同様に、II～III地区のほぼ全域で推定復元することができた。しかし、Y-6グリッドやX-9グリッド、Y～A1-10～11グリッド、D1-E1-4～5グリッドにおいて、遺構が稀薄になる地点も認められ、Z-8～9グリッドでは、ピット類に代わって土坑類が主体をなしている。また、概ねI地区に相当するV～W-4～9グリッドにおいては、自然流路跡が主体となっている。I地区はII地区に比べると標高が約1m低く、自然流路が多いため、建物跡等の施設を構築するには不適であったと思われる。そのため、ピット類や土坑類等はほとんどみられない。このような分布状況から、保存区域としたコの字状の未発掘部分に近い地点において、遺構密度が高まる様相が看取され、当該区域が遺跡の中心域である可能性が考えられる。したがって、今回の発掘調査区は、遺跡中心域の縁辺部分に相当すると思われる。

2) 遺構各説

深町遺跡からは、総数で426基の遺構が検出された。内訳はピット類413基、土坑類9基、溝跡2基、自然流路跡2基である。また、柱穴の配列を検討し、22棟の掘立柱建物跡を推定復元した。

a 掘立柱建物跡

調査区内のほぼ全域に分布するピット類の配列等から、掘立柱建物跡を推定復元した。検出されたピット類は413基であるため、単純な算出では、50～60棟の建物跡が形成されていた可能性もある。しかし、確証が得られないなどの事由により、最終的には22棟を推定復元した。II地区における建物跡の主軸は、北西～南東方向を指向するか、それに対して約90°の北東～南西方向を指向するもののが多かった。また、III地区では概ね東～西方向を指向する建物跡が多く、本遺跡における大略的な規則性が窺える。なお、建物跡に付した遺構番号は、ピット類や土坑類等との混同を避けるため、1001番から使用した。

S B-1001建物跡 Y-5～6グリッドで確認された。SK p-35・36・42の3基の柱穴で構成されるが、北半は調査区外に及ぶため不明である。長方形もしくは五角形を呈すると想定される。S B-1002と重複しているが、SK p-34と35の切り合い関係から、S B-1002よりも新しいと判断された。規模は桁

行約5.6mで、主軸はN-80°-Wであり、概ね北西-南東の方向を指向する。

S B -1002建物跡 Y-5～6グリッドで確認され、S B -1001と重複する部分が多い。SK p -34・37・39・40の4基で構成されるが、北半は調査区外に及ぶため不明である。長方形を呈すると想定される。SK p -34と35の切り合い関係から、S B -1001よりも古ないと判断された。規模は桁行2間以上×梁間1間以上で、約5.0m以上×約3.2m以上を測る。主軸はN-35°-Wであり、概ね北西-南東の方向を指向している。

S B -1003建物跡 Y～Z-6グリッドで確認された。SK p -43・45・47・48・51の5基の柱穴で構成されるが、東半は調査区外に及ぶため不明である。形態は長方形を呈すると思われ、規模は桁行2間以上×梁間1間で、約3.3m以上×約2.1mを測る。主軸はN-47°-Wであり、概ね北西-南東方向を指向している。

S B -1004建物跡 Y-7グリッドにおいて確認された。SK p -56・57・58・59・60・61・62・76の8基の柱穴によって構成され、亀甲状の六角形を呈するが、全体的にやや歪んだ形態となっている。規模は桁行2間×梁間1間で、約3.7m×約1.8mを測る。主軸はN-35°-Eであり、概ね北東-南西方向を指向している。

S B -1005建物跡 Y-7～8グリッドにおいて確認された。SK p -65・66・67・73・79・90の6基の柱穴によって構成されている。形態は長方形を呈するが、全体的にやや歪みが生じ、柱穴の間隔も不規則となっている。規模は桁行2間×梁間1間で、約4.9m×約2.8mを測る。主軸はN-2°-Wであり、概ね北北-南方向を指向している。

S B -1006建物跡 X～Y-8グリッドにおいて確認された。SK p -95・96・98・100・101の5基の柱穴によって構成されている。形態は長方形もしくは五角形を呈する。規模は桁行2間×梁間1間で、約3.8m×約3.2mを測る。主軸はN-78°-Wであり、概ね北西-南東方向を指向している。

S B -1007建物跡 X～Y-9グリッドにおいて確認された。SK p -169・170・171・172・173・174・175・176・177の9基の柱穴によって構成されている。柱穴の配列から、総柱建物跡である可能性が考えられ、概ね正方形の形態を呈している。規模は桁行2間×梁間2間で、約4.3m×約4.3mを測る。主軸はN-88°-Eであり、概ね東-西方向を指向している。

S B -1008建物跡 X～Y-10グリッドにおいて確認された。SK p -180・181・182・183・185・187の6基の柱穴によって構成されている。建物跡の南西半は、調査区外に及ぶため不明であるが、概ね正方形を呈する総柱建物跡の可能性が想定される。規模は桁行2間以上×梁間2間で、約3.6m以上×約4.2mを測る。主軸はN-72°-Wであり、概ね北西-南東方向を指向している。

S B -1009建物跡 Z～A 1-9～10グリッドで確認された。SK p -189・190・192・193・194・195の6基の柱穴によって構成されている。形態は長方形を呈するが、全体的にやや歪みが生じている。規模は桁行2間×梁間1間で、約4.4m×約2.8mを測る。主軸はN-73°-Eであり、概ね北東-南西方向を指向している。

S B -1010建物跡 A 1-9グリッドにおいて確認された。SK p -209・211・212・215・216の5基の柱穴によって構成され、長方形もしくは五角形の形態を呈している。規模は桁行2間×梁間1間で、約4.3m×約2.0mを測る。また、主軸はN-72°-Eであり、概ね北東-南西方向を指向している。

S B -1011建物跡 A 1-8グリッドにおいて確認された。SK p -221・222・225の3基の柱穴によって構成されているが、北西半は調査区外に及ぶため不明である。概ね長方形を呈すると思われ、規模

は桁行2間で、約4.9mを測る。また、主軸はN-44°-Eで、概ね北東-南西方向を指向している。

S B -1012建物跡 B 1～9グリッドにおいて確認された。SK p -235・236・237・238・239・241の6基の柱穴によって構成されている。南端が調査区外に及ぶため不明であるが、概ね五角形の形態を呈すると考えられる。規模は桁行2間×梁間1間で、約4.9m×約4.4mを測る。主軸はN-67°-Eで、概ね北東-南西方向を指向している。

S B -1013建物跡 B 1～C 1～8～9グリッドにおいて確認された。SK p -244・246・248・249の4基の柱穴によって構成されている。概ね長方形を呈するが、全体的にやや歪んだ形態を呈している。規模は桁行1間×梁間1間であるが、桁行方向における柱穴の間隔が広く設定され、約4.4m×約2.4mを測る。主軸はN-15°-Wであり、概ね北西-南東方向を指向している。

S B -1014建物跡 B 1～C 1～8グリッドにおいて確認された。SK p -318・321・325・329の4基の柱穴によって構成されている。概ね長方形を呈するが、全体的にやや歪んだ形態を呈している。規模は桁行1間×梁間1間であるが、桁行方向における柱穴の間隔が広く設定され、約3.7m×約2.5mを測る。主軸はN-16°-Wであり、概ね北西-南東方向を指向している。

S B -1015建物跡 C 1～8グリッドにおいて確認された。SK p -261・263・273・277・278・300の6基の柱穴によって構成されている。概ね長方形を呈するが、全体的にやや歪んだ台形状の形態を呈している。規模は桁行2間×梁間1間であるが、柱穴の間隔は不規則となっており、約3.5m×約4.3mを測る。主軸はN-16°-Wであり、概ね北西-南東方向を指向している。

S B -1016建物跡 C 1～6～7グリッドにおいて確認された。SK p -352・354・360・372・379の5基の柱穴によって構成されている。建物跡の西半が調査区外にまで及んでいるため、詳細な点は不明であるが、形態的には概ね長方形を呈すると思われる。規模は桁行2間以上×梁間1間であり、約3.6m以上×約3.2mを測る。主軸はN-66°-Eであり、概ね北東-南西方向を指向している。

S B -1017建物跡 C 1～D 1～6～7グリッドにおいて確認された。SK p -361・380・383・384・390・393・402b・406の8基の柱穴によって構成されている。形態は概ね長方形を呈するが、柱穴の間隔は不規則である。特に桁行方向と梁間方向における柱穴の間隔差は著しく、桁行3間×梁間1間の規模でありながら、約6.3m×約4.5mを測る。主軸はN-77°-Eで、概ね北東-南西方向を指向する。

S B -1018建物跡 C 1～D 1～6グリッドにおいて確認された。SK p -485・486・487・488・489・490・492・493の8基の柱穴によって構成されている。概ね長方形を呈するが、全体的に歪んだ形態となっている。また、桁行の片側が4本の柱穴であるのに対し、他方は3本の柱穴しか認められず、梁間も一方が3本なのに対して、他方は2本である等、柱穴の配置や間隔が極めて不規則となっている。規模は桁行3間×梁間2間であり、約6.7m×約4.0mを測る。主軸はN-88°-Wであり、概ね東-西方向を指向している。

S B -1019建物跡 C 1～D 1～6グリッドにおいて確認された。SK p -394・405・417・423・429・446の6基の柱穴によって構成されている。形態は概ね長方形を呈するが、全体的に歪みが著しい。柱穴の間隔も不規則で、特に桁行方向と梁間方向における差異が顕著に認められる。規模は桁行2間×梁間1間であり、約4.6m×約3.5mを測る。主軸はN-21°-Wで、概ね北西-南東方向を指向している。

S B -1020建物跡 C 1～5～6グリッドにおいて確認された。SK p -425・430a・432・435・441・443・444・449aの8基の柱穴によって構成されている。概ね台形を呈するが、やや歪みが生じた形態で、柱穴の間隔等も不規則である。規模は桁行2間×梁間2間であり、約4.5m×約3.8mを測る。主軸

はN-85°-Eで、概ね東-西方向を指向している。

S B-1021建物跡 C 1-4~5グリッドから確認された。SK p-508・512・514・522・528・533bの6基の柱穴によって構成されている。概ね長方形を呈するが、全体的にやや歪んだ形態となっている。また、柱穴の間隔も不規則である。規模は桁行2間×梁間1間で、約7.3m×約5.4mを測り、本遺跡における建物跡としては大形である。S B-1022と重複する部分が認められるが、新旧関係は不明である。主軸はN-82°-Eであり、概ね東-西方向を指向している。

S B-1022建物跡 C 1-4~5グリッドから確認された。SK p-509・511・523の3基によって構成されているが、西半は調査区外に及んでいたため不明である。柱穴の間隔は不規則であるが、概ね長方形の形態を呈すると思われる。規模は桁行2間以上×梁間1間で、約3.6m以上×約4.1mを測る。主軸はN-79°-Eであり、概ね東-西方向を指向している。なお、S B-1021と重複する部分が認められるが、柱穴等の切り合いかみられないため、新旧関係は不明である。

b 土坑類

Z-8~9グリッドを中心に分布しており、ピット類や建物跡等とは分布域に若干の差異が認められる。比較的深度の浅いものが多いが、大半が性格不詳となつたが、遺物を一括廃棄したと思われる廃棄土坑も1基検出され、比較的良好な資料が得られた。

S X-33廃棄土坑 Z-8~9グリッドから検出された。長軸約490cm×短軸約392cmを測り、底面までの深度は約46cmである。概ね土坑の中心を通るように十字のベルトを設定し、土層観察を行った。覆土は第1層～第3層に区分され、第1層はさらにa～bに細分された。第1a層及び第1b層は、ともに暗青灰色土層で、炭化物等を多量に含む。第2層は古代の遺物を多量に包含し、一括的に廃棄された様相を呈していた。本層を中心に約300点もの遺物が出土し、同時に廃棄されたと思われる炭化物を主体として、土層が形成されていたのである。したがって、本層は比較的短時間に廃棄された土器類や炭化物等によって形成されたと捉えられ、その出土遺物には極めて高い共伴性を付加し得るのである。なお、遺物の取り上げ等に際しては、原則的には微細図を作成したが、細片等については、十字に設定したベルトを境界に、便宜的にI～IV区に区分して取り上げを行った(図版33)。第3層はa～bに細分され、ともに暗灰黄色を呈する土層である。第3a層の上半においても、若干の遺物が検出されている。また、第2層において多量に認められた炭化物も、少量含まれていた。第4層は暗灰色粘質土層で、本土坑の最下層に相当する。灰色粘質土と地山土の混合土で、炭化物を少量含む。

また、本土坑の底面において、SK p-559・560・561の3基のピットが検出された。ともに柱穴と思われ、N-76°-W方向に列をなしていた。しかし、本土坑の覆土中からの掘り込みは確認されなかつたため、本土坑形成以前の所産であると判断された。

S K-104土坑 X-7グリッドにおいて確認された。長軸約60cm×短軸約60cmの円形を呈し、深度は約84cmを測る。また、底面標高は36.28mである。本土坑の性格については、不明である。覆土は第1層～第3層に区分された。第1層はさらにa～cに細分され、いずれも地山土を主体とする暗灰色土層であった。第2層は黒褐色土層で、多量の炭化物によって形成されていた。本層の堆積段階において、人為的に多量の炭化物が廃棄されたと思われるが、遺物は検出されなかつた。第3層は黄橙色粘質土層で、地山土を主体とする混合土である。炭化物を少量含んでいた。本土坑からは、土器類等の時期判断が可能な遺物が出土しなかつたため、時期については不詳である。しかし、周辺に分布する遺構の状況から、10世紀前葉前後の所産である可能性が高いといえよう。

S K - 108土坑 X - 7 グリッドにおいて確認された。長軸約68cm×短軸約64cmの円形を呈し、底面までの深度約89cmを測る。底面標高は36.21mである。また、性格については不明である。覆土は第1層～第5層に区分された。第1層は暗灰色土層で、炭化物を多量に含む。第2層は暗褐色土層で、炭化物を多量に含む。第3層は地山土を主体とする混合土で、暗黄色を呈し、炭化物を多量に含む。第4層は多量の炭化物によって形成される黒褐色土層で、S K - 104第2層に近似した様相を呈していた。本層の堆積段階において、人為的に多量の炭化物が廃棄されたと思われる。数点の土師器等も同時に廃棄されている状況であった。古代の土師器片等が出土しているが、全体の状況から、概ね10世紀前葉に比定可能である。また、第5層は黄褐色土層で、地山土主体の混合土である。炭化物を多量に含んでいた。

S K - 198土坑 Z - 9 グリッドにおいて確認された。長軸約178cm×短軸約144cmの不定形を呈し、底面までの深度は約28cmを測る。そのため、平面形の規模に比較して深度がやや浅く、底面標高は37.04mであった。S K p - 197との切り合い関係が認められ、本土坑の方が古い所産であることが把握された。深度が比較的浅いこともあり、覆土は分層されなかった。土層番号はS K p - 197からの連番としたため、本土坑覆土は第3層に相当する。本層は地山土との混合土で、炭化物を多量に含み、色調は暗灰色を呈していた。出土遺物としては、古代の土師器片のほか、輪の羽口や楕円形等といった鍛冶関連遺物も出土している。

S K - 200土坑 Z - 9 グリッドにおいて確認された。長軸約80cm×短軸約74cmの円形を呈し、底面までの深度は約15cmと比較的浅い。また、底面標高は37.16mである。性格や時期等については不明であるが、周辺の状況から概ね10世紀前葉前後の所産と思われる。覆土は分層されず、炭化物及び地山土粒を多量に含む暗褐色土層が観察された。

c ピット類

調査区内のほぼ全域に分布し、Ⅲ地区西半等では密度が極めて高くなっている。一方、Ⅱ地区南半やⅣ地区東半等、保存区域からやや離れた地点では、分布が稀薄な状況も認められる。したがって、大略的には保存区域からの距離により、遺構密度の粗密差が著しいという規則性が看取されるのである。保存区域として設定した地点を中心域として、集落跡が広がっている可能性が高いといえよう。また、Ⅰ地区は異時期の自然流路跡が複雑に切り合っており、居住等が可能な区域ではなかったと考えられる。自然流路跡の東端付近にまで、ピット類の分布が及んでいるが、基本的にはⅠ地区は分布範囲外とみなしえる状況であった。検出されたピット類の大半は柱穴と思われ、木柱や柱痕が確認されたものもあった。また、覆土は概ね暗灰色～暗褐色を呈していた。

d 溝跡・自然流路跡

Ⅰ地区に相当するV～W-4～9グリッドにおいては、異時期の自然流路が複雑に切り合っている様相が把握された。そのため、本地点では流路を徐々に変えながらも、比較的長期間にわたって流水のある環境であったと考えられる。

S D - 6 溝跡 W - 6 グリッドから検出され、自然流路に伴う流水の進路を人工的に調整したものと思われる。比較的小規模なため、この地点における水量も少量であったと思われる。覆土は第1層～第2層に区分され、植物腐植土層の堆積も認められた。

S D - 32 自然流路跡 V - 8 グリッドから検出され、本遺跡における自然流路で、最も規模が大きいものである。分岐が著しく、中州状の部分もみられ、やや複雑な形態を呈する。しかし、概ね南北から東西への進路を指向している。覆土は第1層～第10層に区分され、確認面からの深度は約131cmである。

第1表 深町遺跡遺構計測表

遺構名	種別	グリッド	形態	規模(cm) 高幅×短幅×深さ	底面標高 (海抜(m))	面土	出土遺物	備考
2	流路跡	W-4	沢状	- × - × -	-	明茶褐色砂礫 暗灰灰砂礫		
6	溝	W-6	溝状	200× 72× 6	36.60	黄褐色土 黑色粘土土		
7	溝	W-7他	溝状	1900× 130× 34	36.38	黄褐色土 黑色粘土土		
22	ピット	X-5	円形	34× 28× 42	36.19	黄褐色土 黑色粘土土		
23	ピット	W-5	円形	14× 14× 37	36.05	黄褐色土 黑色粘土土		
27	ピット	X-5	円形	32× 30× 26	36.22	黄褐色土 黑色粘土土		
28	ピット	X-5	円形	24× 20× 41	36.11	黄褐色土土		
32	流路跡	V-8他	沢状	- × - × -	-	灰褐色土 黑色粘土土	土師器	
33	土坑	Z-8他	不定形	490× 392× 46	36.89	暗青灰色土 黑色粘土土	上部器 黑色土器 底部器	施塗土坑
34	ピット	Y-5	円形	50× 44× 52	36.54	黄褐色土 暗灰灰土土		SB-1002
35	ピット	Y-5	三角状	48× 44× 41	36.85	褐色土 黑色粘土土	土師器	SB-1001
36	ピット	Y-8	輪丸方形	34× 30× 35	36.71	褐色土 黑色粘土土		SB-1001
37	ピット	Y-8	不定形	36× 30× 45	36.61	褐色土 黑色粘土土		SB-1002
38	ピット	Y-8	輪円形	30× 24× 39	36.67	褐色土 黑色粘土土	土師器	
39	ピット	Y-8	輪円形	60× 44× 52	36.58	褐色土 黑色粘土土		SB-1002
40	ピット	Y-8	円形	54× 52× 75	36.34	暗褐色土 暗青灰土土		SB-1002
41	ピット	Y-8	輪円形	34× 18× 17	36.92	褐色土		
42	ピット	Y-8	円形	56× 54× 56	36.53	暗褐色土		SB-1001
43	ピット	Y-8	輪円形	42× 32× 64	36.49	褐色土 黑色粘土土		SB-1003
44	ピット	Y-8他	輪円形	36× 28× 39	36.73	暗褐色土 褐色土		
45	ピット	Z-8	輪円形	36× 20× 38	36.72	暗褐色土 褐色土		SB-1003
46	ピット	Z-8	輪円形	34× 26× 45	36.65	暗褐色土		
47	ピット	Y-8	円形	34× 30× 40	36.67	暗褐色土 褐色土		SB-1003
48	ピット	Y-8	円形	34× 30× 36	36.71	暗褐色土 褐色土		SB-1003
49	ピット	Y-8	円形	36× 34× 43	36.66	暗褐色土 褐色土		
50	ピット	Y-8	輪円形	44× 36× 26	36.83	暗褐色土 褐色土		
51	ピット	Y-8	円形	30× 28× 46	36.62	暗褐色土 褐色土土		SB-1003
52	ピット	Y-8	円形	26× 26× 57	36.54	暗褐色土		
56	ピット	Y-7	輪円形	34× 28× 51	36.82	暗褐色土		SB-1004
57	ピット	Y-7	三角状	18× 16× 22	36.93	暗褐色土		SB-1004
58	ピット	Y-7	輪円形	39× 32× 59	36.56	暗褐色土 褐色土		SB-1004
59	ピット	Y-7	輪円形	22× 18× 46	36.72	暗褐色土 褐色土		SB-1004
60	ピット	Y-7	輪円形	32× 28× 49	36.72	暗褐色土	土師器	SB-1004
61	ピット	Y-7	輪円形	28× 24× 56	36.66	褐色土 暗褐色土		SB-1004
62	ピット	Y-7	円形	38× 36× 40	36.83	暗褐色土 褐色土		SB-1004
63	ピット	Y-7	輪円形	18× 16× 24	37.00	暗褐色土		
65	ピット	Y-7	輪円形	28× 24× 60	36.60	暗褐色土 暗青灰土土		SB-1005
66	ピット	Y-7	輪円形	18× 14× 33	36.86	褐色土 暗褐色土		SB-1005
67	ピット	Y-7	輪円形	24× 20× 43	36.78	暗褐色土 暗青灰土土		SB-1005
68	ピット	Y-7	円形	26× 22× 25	36.91	暗褐色土 暗褐色土		
69	ピット	Y-7	円形	22× 20× 22	36.97	褐色土 暗褐色土		
70	ピット	Y-7	輪丸方形	28× 24× 13	37.06	暗褐色土 褐色土		
73	ピット	Y-7	輪円形	22× 18× 58	36.62	暗褐色土 暗青灰土土		SB-1005
74	ピット	Y-7	円形	8× 6× 17	37.03	暗褐色土		
75	ピット	Y-7	円形	12× 12× 28	36.95	暗褐色土		
78	ピット	Y-7	円形	14× 14× 33	36.89	暗褐色土	土師器	SB-1004
77	ピット	Y-7	輪円形	18× 8× 35	36.65	暗褐色土		

道 構 名	種 別	ダリッド	形 態	層 面 (cm) 長軸×短軸×深既	直面標高 (測定m)	面 土	出 土 資 物	備 考
78	ピット	Y-7	箱円形	16×12×27	36.92	暗褐色土 暗褐色土		
79	ピット	Y-8	円形	22×18×42	36.78	暗褐色土 暗褐色土		SB-1005
81	ピット	X-7	円形	16×14×21	36.92	暗褐色土 暗褐色土		
82	ピット	X-7	円形	15×15×24	36.86	暗褐色土 暗褐色土		
83	ピット	X-7	円形	16×14×25	36.86	暗褐色土 暗褐色土		
85	ピット	Y-7	円形	22×21×34	36.60	暗褐色土 暗褐色土		
87	ピット	Y-8	円形	12×10×37	36.82	暗褐色土 暗褐色土		
90	ピット	Y-8	箱円形	24×18×46	36.74	暗褐色土 暗褐色土	土跡	SB-1005
93	ピット	X-8	円形	12×8×5	37.08	暗褐色土 暗褐色土		
94	ピット	X-8	円形	20×18×29	36.90	暗褐色土 暗褐色土		
95	ピット	X-8	円形	24×18×36	36.81	暗褐色土 暗褐色土		SB-1006
96	ピット	X-8	円形	16×14×39	36.80	暗灰褐色土 暗褐色土		SB-1006
97	ピット	Y-8	円形	14×12×49	36.69	暗褐色土 暗褐色土		
98	ピット	Y-8	箱円形	16×10×19	37.00	暗灰褐色土 暗褐色土		SB-1006
99	ピット	Y-8	円形	20×16×29	36.92	暗褐色土 暗褐色土		
100	ピット	X-8	箱円形	14×12×26	36.93	暗灰褐色土 暗褐色土		SB-1006
101	ピット	X-8	円形	12×10×32	36.84	暗褐色土 暗褐色土		SB-1006
102	ピット	X-8	箱円形	12×10×22	36.94	暗褐色土 暗褐色土		
103	ピット	X-8	箱円形	38×30×60	36.59	暗褐色土 暗褐色土		
104	土 坑	X-7	円形	60×60×84	36.28	暗灰褐色土 暗褐色土		
105	ピット	X-7	箱円形	16×14×38	36.74	暗褐色土 暗褐色土	土跡	
106	ピット	X-7	三角状	28×25×31	36.81	暗褐色土 暗褐色土		
107	ピット	X-7	円形	30×26×21	36.89	暗褐色土 暗褐色土		
108	土 坑	X-7	円形	68×64×89	36.21	暗灰褐色土 暗褐色土	土跡	
109	ピット	X-7	箱円形	18×12×12	37.00	暗褐色土 暗褐色土		
110	ピット	X-7	三角状	34×28×16	36.96	暗褐色土 暗褐色土		
111	ピット	X-7	円形	20×20×28	36.85	暗褐色土 暗褐色土		
115	ピット	W-7	箱円形	24×20×21	36.84	暗灰褐色土 暗褐色土		
116	ピット	W-7	三角状	30×26×26	36.85	暗灰褐色土 暗褐色土		
117	ピット	W-7	箱円形	26×22×47	36.66	暗褐色土 暗褐色土		
119	ピット	W-7	箱円形	30×22×30	36.84	暗褐色土 暗褐色土		
121	ピット	W-7	箱円形	40×32×34	36.78	暗灰褐色土 暗褐色土		
122	ピット	W-7	円形	20×18×15	36.55	暗灰褐色土 暗褐色土		
123a	ピット	W-7	円形	30×24×29	36.71	暗褐色土 暗褐色土		
128b	ピット	W-7	箱円形	38×10×13	36.87	暗褐色土 暗褐色土		
130	ピット	W-7	円形	18×14×26	36.77	暗褐色土 暗褐色土		
131	ピット	W-7	円形	24×24×31	36.73	暗灰褐色土 暗褐色土		
132	ピット	W-7	箱円形	22×14×29	36.75	暗褐色土 暗褐色土		
133	ピット	W-7	円形	14×14×21	36.86	暗灰褐色土 暗褐色土		
138	ピット	X-7	箱丸形	24×24×38	36.79	暗褐色土 暗褐色土		
139	ピット	X-7	円形	28×24×29	36.87	暗褐色土 暗褐色土		
140	ピット	W-7	円形	28×26×25	36.79	暗灰褐色土 暗褐色土		
141	ピット	W-8	箱丸形	40×30×59	36.25	暗灰褐色土 暗灰褐色土		
143	ピット	W-7	円形	32×30×36	36.65	暗褐色土 暗褐色土		
145	ピット	W-8	箱円形	34×26×46	36.54	暗褐色土 暗褐色土		

遺構名	種別	グリッド	形態	測定	概要	底面標高 (海抜m)	覆土	出土遺物	備考
				前輪×後輪×深度	(海抜m)				
146a	土塁	W-8	不定形	138×130×	81	36.37	暗褐色土	土器	
146b	ピット	W-8	扇円形	48×38×	97	36.21	暗褐色土		
147	ピット	W-8	扇円形	24×18×	37	36.52	暗褐色土		
148	ピット	W-8	三角状	20×20×	31	36.86	暗褐色土		
149	ピット	X-8	扇円形	30×22×	31	36.94	混褐色土		
150	ピット	X-8	扇円形	26×18×	33	36.85	混褐色土	釋	
151	ピット	X-8	扇円形	28×18×	29	36.89	暗褐色土		
152	ピット	X-8	扇円形	32×20×	31	36.89	混褐色土		
153a	土塁	X-8	扇円形	56×40×	15	37.04	黑褐色土		
153b	ピット	X-8	扇円形	16×12×	32	36.87	暗褐色土		
155	ピット	X-8	扇円形	28×18×	21	36.96	混褐色土		
156	ピット	X-8	円形	22×20×	31	36.88	暗褐色土		
157	ピット	X-8	扇円形	24×20×	35	36.85	暗褐色土		
158	ピット	X-8	扇円形	24×18×	29	36.89	暗褐色土		
160	ピット	X-8	扇円形	14×10×	18	36.99	暗褐色土		
161	ピット	X-8	扇円形	32×26×	13	37.04	暗褐色土		
162	ピット	X-8	円形	34×32×	32	36.88	暗褐色土		
163	ピット	X-8	円形	20×18×	31	36.89	暗褐色土		
164	ピット	X-8	扇円形	24×18×	29	36.91	暗褐色土		
166	ピット	X-8	扇円形	20×14×	27	36.89	暗褐色土		
167	ピット	X-8	円形	32×28×	14	37.00	暗褐色土		
169	ピット	X-9	扇円形	28×22×	29	37.02	暗褐色土		SB-1007
170	ピット	Y-9	円形	18×18×	23	37.02	暗褐色土		SB-1007
171	ピット	Y-9	扇円形	24×20×	23	37.03	暗褐色土		SB-1007
172	ピット	Y-9	円形	16×14×	29	37.01	暗褐色土		SB-1007
173	ピット	Y-9	円形	14×12×	19	37.02	黑色土		SB-1007
174	ピット	Y-9	円形	14×14×	19	37.03	暗褐色土		SB-1007
175	ピット	X-9	円形	20×18×	22	37.01	暗褐色土		SB-1007
176	ピット	Y-9	円形	20×18×	29	37.09	暗褐色土		SB-1007
177	ピット	Y-9	扇円形	20×16×	28	37.01	暗褐色土		SB-1007
178	ピット	Y-9	扇円形	26×18×	23	36.95	暗褐色土		
179	ピット	Y-9	扇円形	18×14×	29	37.00	暗褐色土		
180	ピット	Y-10	扇円形	18×16×	11	37.12	暗色土		SB-1008
181	ピット	Y-10	円形	14×14×	34	36.92	暗褐色土		SB-1008
182	ピット	Y-10	円形	20×18×	28	36.98	暗褐色土		SB-1008
183	ピット	Y-10	円形	15×14×	23	37.03	暗褐色土		SB-1008
184	ピット	Y-10	円形	14×14×	25	37.01	暗灰褐色土		
185	ピット	Y-10	円形	18×16×	22	37.04	暗褐色土		SB-1008
186	ピット	Y-10	円形	16×14×	18	37.02	暗褐色土		
187	ピット	Y-10	扇円形	20×16×	24	37.00	黑褐色土	柱軸	SB-1008
188	ピット	Y-10	扇円形	16×10×	16	37.08	暗褐色土		
189	ピット	Z-9	扇円形	18×14×	18	37.14	暗褐色土		SB-1009
190	ピット	Z-9	円形	18×16×	8	37.22	黑色土		SB-1009
191	ピット	Z-9	扇円形	18×14×	24	37.05	暗褐色土		
192	ピット	Z-10	円形	24×20×	22	37.14	暗褐色土	土器	SB-1009
193	ピット	Z-10	扇円形	20×16×	16	37.17	暗褐色土		SB-1009
194	ピット	A1-10	扇円形	20×16×	32	37.01	暗褐色土		SB-1009

通 番 号	種 別	ダリット	形 性	規 格(cm) 幅×奥行き×総厚さ	底面標高 (海抜m)	覆 土	出 土 遺 物	備 考
195	ピット	Z-9	円形	20× 18× 34	36.94	暗褐色土 黒色土	土師器	SB-1009
196	ピット	Y-9	円形	24× 22× 41	36.89	暗褐色土 暗黄褐色土	土師器	
198	土壤	Z-9	不定形	178× 144× 28	37.04	暗褐色土	土師器 順治圓通造物	
199	土壤	Z-9	三角状	84× 58× 8	37.21	暗褐色土		
200	土壤	Z-9	円形	80× 74× 15	37.16	暗褐色土		
202	ピット	A1-9	椭円形	22× 18× 28	37.08	暗褐色土		
203	ピット	A1-9	円形	28× 26× 37	36.94	暗褐色土		
204	ピット	A1-9	円形	26× 28× 38	36.93	暗褐色土 暗藍褐色土		
205	ピット	A1-9	円形	18× 18× 47	36.87	暗褐色土		
206	ピット	A1-9	椭円形	20× 16× 29	37.04	黒色土		
207	ピット	A1-10	円形	17× 14× 8	37.25	暗褐色土		
208	ピット	A1-10	円形	20× 20× 22	37.11	暗褐色土 黒色土		
209	ピット	A1-9	椭円形	19× 14× 25	37.03	暗褐色土 黒色土		SB-1010
210	ピット	A1-9	椭円形	38× 26× 38	36.88	暗褐色土 黒色土		
211	ピット	A1-9	椭円形	24× 20× 64	35.60	暗褐色土指		SB-1010
212	ピット	A1-9	椭円形	21× 16× 34	36.04	暗褐色土指		SB-1010
215	ピット	A1-9	椭円形	24× 20× 47	36.80	暗褐色土 黒色土		SB-1010
216	ピット	A1-9	円形	21× 18× 24	36.96	暗褐色土 黒色土		SB-1010
217	ピット	A1-9	椭円形	22× 18× 33	36.95	暗褐色土 黒色土		
218	ピット	A1-9	円形	26× 22× 42	36.84	暗褐色土 暗青灰色土		
221	ピット	A1-8	椭円形	26× 20× 10	37.06	暗褐色土		SB-1011
222	ピット	A1-8	円形	22× 20× 29	36.86	暗褐色土 黒色土		SB-1011
223	ピット	A1-8	椭円形	24× 20× 26	36.89	暗褐色土 黒色土		
224	ピット	A1-8	三角状	30× 18× 29	36.86	暗褐色土	土師器	
225	ピット	A1-8	円形	20× 18× 34	36.79	暗褐色土 黒色土		SB-1011
226	ピット	A1-8	円形	20× 20× 41	36.72	暗褐色土		
227	ピット	A1-8	椭円形	18× 14× 37	36.81	暗褐色土 黒色土		
230	ピット	A1-8	円形	18× 14× 28	36.84	暗褐色土		
231	ピット	A1-6	円形	14× 12× 30	36.71	暗褐色土		
232	ピット	B1-6	椭円形	24× 20× 53	36.47	暗褐色土 黒色土	土師器	
233	ピット	B1-6	円形	19× 18× 25	36.79	暗褐色土		
235	ピット	B1-9	円形	20× 19× 28	36.78	暗褐色土 暗青灰色土		SB-1012
236	ピット	B1-9	椭円形	18× 14× 39	36.64	暗褐色土 暗青灰色土		SB-1012
237	ピット	B1-9	円形	18× 8× 18	36.88	暗褐色土		SB-1012
238	ピット	B1-9	円形	20× 20× 28	36.71	暗褐色土	土師器	SB-1012
239	ピット	B1-9	円形	18× 18× 34	36.68	暗褐色土 暗褐色土		SB-1012
240	ピット	B1-9	三角状	18× 17× 26	36.74	暗褐色土		
241	ピット	B1-9	椭円形	23× 20× 18	36.81	暗褐色土 暗褐色土		SB-1012
242	ピット	B1-9	円形	12× 12× 17	36.79	暗褐色土 暗褐色土		
244	ピット	B1-8	円形	24× 24× 67	36.26	暗褐色土 暗青灰色土		SB-1013
246	ピット	B1-8	不定形	28× 23× 41	36.46	暗褐色土 暗褐色土		SB-1013
247	ピット	C1-8	椭円形	22× 17× 23	36.65	暗褐色土 暗褐色土		
248	ピット	B1-9	椭円形	28× 20× 36	36.55	暗褐色土 暗褐色土		SB-1013
249	ピット	C1-9	椭円形	24× 20× 41	36.43	暗褐色土		SB-1013
250	ピット	C1-9	円形	16× 14× 19	36.66	暗褐色土 暗褐色土		
251	ピット	C1-9	円形	16× 14× 14	36.73	暗褐色土		
253	ピット	C1-8	円形	22× 18× 34	36.47	暗褐色土		
254	ピット	C1-8	円形	22× 18× 36	36.49	暗褐色土 暗褐色土		

登録名	種別	グリッド	形態	規格(cm) 長軸×短軸×厚さ	底面標高 (海抜m)	地 土	指 土 道 物	備 考
255	ピット	D1-B	楕円形	21×29×34	36.40	暗褐色土		
257	ピット	D1-B	円形	18×18×31	36.41	暗褐色土		
258	ピット	C1-B	円形	20×19×20	36.53	暗褐色土		
259a	ピット	C1-B	楕円形	30×29×21	36.59	暗褐色土		
259b	ピット	C1-B	円形	16×16×29	36.51	暗褐色土		
260	ピット	C1-B	楕円形	30×23×54	36.23	暗褐色土 暗灰色土		
261	ピット	C1-B	楕円形	29×17×13	36.64	暗褐色土		SB-1015
262	ピット	C1-B	円形	18×17×30	36.46	暗褐色土 暗灰色土		
263	ピット	D1-B	楕円形	16×13×18	36.51	暗褐色土		SB-1015
264	ピット	D1-B	楕円形	36×29×34	36.35	暗褐色土 暗灰色土		
265	ピット	D1-B	円形	16×14×34	36.20	暗褐色土 暗灰色土		
266	ピット	D1-B	楕円形	22×22×30	36.39	暗褐色土 暗灰色土		
267	ピット	C1-B	円形	14×11×18	36.61	暗褐色土		
268	ピット	C1-B	楕円形	22×16×39	36.41	暗褐色土		
269	ピット	C1-B	楕円形	16×12×24	36.55	暗褐色土 暗灰色土		
270	ピット	C1-B	円形	19×16×46	36.34	暗褐色土 暗灰色土		
271	ピット	C1-B	楕円形	22×16×24	36.56	暗褐色土 暗灰色土		
272	ピット	C1-B	楕円形	18×14×35	36.45	暗褐色土		
273	ピット	C1-B	楕円形	24×14×29	36.51	暗褐色土 暗灰色土		SB-1015
274	ピット	C1-B	円形	19×16×23	36.57	暗褐色土 暗灰色土		
276	ピット	C1-B	円形	20×19×35	36.39	暗褐色土 暗灰色土		
277	ピット	C1-B	円形	21×18×25	36.59	暗褐色土		SB-1015
278	ピット	C1-B	楕丸形	32×19×38	36.38	暗褐色土 暗灰色土	土源	SB-1015
279	ピット	C1-B	円形	18×18×29	36.47	暗褐色土 暗灰色土		
300	ピット	C1-B	円形	20×17×44	36.39	暗褐色土		SB-1015
301	ピット	D1-B	円形	16×16×38	36.29	暗褐色土 暗灰色土		
302	ピット	C1-B	楕円形	20×16×34	36.43	暗褐色土 暗灰色土		
303	ピット	B1-7	円形	19×17×10	36.96	暗褐色土 暗灰色土		
304	ピット	B1-7	楕円形	21×12×24	36.81	暗褐色土		
305	ピット	B1-7	楕円形	22×16×24	36.81	暗褐色土 暗灰色土		
307	ピット	B1-7	楕円形	24×20×49	36.60	暗褐色土		
308	ピット	B1-6	円形	18×16×28	36.71	暗褐色土 暗灰色土		
311	ピット	B1-6	円形	20×17×33	36.69	暗褐色土 暗灰色土		
315	ピット	B1-6	円形	16×14×27	36.72	暗褐色土 暗灰色土		
316	ピット	B1-7	円形	18×18×36	36.62	暗褐色土 暗灰色土		
317	ピット	B1-7	円形	16×14×36	36.63	暗褐色土		
318	ピット	B1-8	円形	12×12×22	36.73	暗褐色土		SB-1014
320	ピット	B1-8	楕円形	46×24×29	36.86	暗褐色土		
321	ピット	B1-8	楕円形	20×14×22	36.68	暗褐色土 暗灰色土		SB-1014
322	ピット	B1-8	円形	18×16×29	36.62	暗褐色土 暗灰色土		
324	ピット	B1-8	円形	14×12×15	36.76	暗褐色土 暗灰色土		
325	ピット	C1-B	円形	24×20×31	36.57	暗褐色土		SB-1014
326	ピット	C1-B	三角状	18×14×26	36.63	暗褐色土 暗灰色土		
329	ピット	B1-8	円形	14×12×17	36.71	暗褐色土		SB-1014
330	ピット	B1-8	楕円形	20×14×25	36.66	暗褐色土		
331	ピット	C1-B	楕円形	10×8×18	36.72	暗褐色土		
333	ピット	C1-B	円形	14×12×28	36.58	暗褐色土		
335	ピット	B1-7	楕円形	20×17×24	36.61	暗褐色土		
336	ピット	C1-7	楕円形	20×14×24	36.63	暗褐色土		
337	ピット	B1-7	円形	14×14×16	36.73	暗褐色土		
339	ピット	C1-7	円形	15×14×22	36.62	暗褐色土 暗灰色土		
340	ピット	C1-7	楕円形	18×13×17	36.61	暗褐色土		

観測名	種別	グリット	形態	規格 [cm] 容積×質量×厚度	底面標高 (海抜m)	覆土	出土遺物	備考
341	ピット	C1-7	扇円形	17 × 13 × 24	36.68	暗褐色土		
342	ピット	C1-7	円形	16 × 14 × 15	36.68	暗褐色土		
344	ピット	C1-8	円形	22 × 20 × 33	36.63	暗褐色土		
346	ピット	C1-7	扇円形	26 × 21 × 14	36.55	暗褐色土		
							土師器	
347	ピット	C1-7	扇円形	18 × 14 × 13	36.57	暗褐色土		
348	ピット	C1-7	扇円形	18 × 16 × 19	36.51	暗褐色土		
349	ピット	D1-2	扇円形	17 × 13 × 11	36.40	暗褐色土		
350	ピット	D1-7	円形	22 × 22 × 23	36.20	暗褐色土		
							茶褐色土	
351	ピット	D1-7	円形	24 × 22 × 13	36.34	暗褐色土		
352	ピット	C1-7	扇円形	24 × 14 × 15	36.48	暗褐色土		SB-1018
353	ピット	C1-7	円形	20 × 19 × 20	36.43	暗褐色土		
							褐色土	
354	ピット	C1-7	扇円形	23 × 19 × 25	36.37	暗褐色土		SB-1016
							暗褐色土粘	
355	ピット	C1-7	円形	15 × 13 × 17	36.38	暗褐色土		
							褐色土	
357	ピット	C1-7	円形	21 × 19 × 20	36.33	暗褐色土		
359	ピット	C1-7	円形	11 × 10 × 12	36.46	暗褐色土		
							暗褐色土粘	
360	ピット	C1-7	円形	21 × 19 × 20	36.39	暗褐色土		
							褐色土	
361	ピット	C1-7	円形	28 × 27 × 51	36.04	暗褐色土		SB-1017
							暗褐色土粘	
362	ピット	C1-7	扇円形	16 × 14 × 18	36.37	暗褐色土		
							褐色土	
363	ピット	C1-7	扇円形	19 × 14 × 14	36.41	暗褐色土		
							褐色土	
364	ピット	C1-7	円形	20 × 16 × 15	36.40	暗褐色土		
							褐色土	
365	ピット	C1-7	扇円形	16 × 16 × 13	36.42	暗褐色土		
							褐色土	
367	ピット	C1-7	円形	16 × 14 × 16	36.43	暗褐色土		
							褐色土	
368	ピット	C1-6	扇円形	20 × 14 × 13	36.40	褐色土		
							暗褐色土	
371	ピット	C1-6	扇円形	50 × 32 × 34	36.16	暗褐色土		
							褐色土	
372	ピット	C1-6	円形	22 × 22 × 22	36.27	暗褐色土		SB-1016
							暗褐色土粘	
377	ピット	C1-6	扇円形	20 × 16 × 30	36.22	暗褐色土		
							褐色土	
379	ピット	C1-6	円形	16 × 15 × 32	36.20	暗褐色土		SB-1016
							暗褐色土粘	
380	ピット	C1-7	円形	28 × 26 × 71	35.78	暗褐色土		SB-1017
							暗褐色土粘	
381	ピット	C1-7	円形	29 × 20 × 13	36.36	暗褐色土		
							褐色土	
383	ピット	D1-7	扇円形	34 × 25 × 60	35.84	暗褐色土		SB-1017
							褐色土	
384	ピット	D1-6	扇円形	26 × 17 × 39	36.01	暗褐色土		
							褐色土	
385	ピット	D1-7	扇円形	22 × 14 × 15	36.26	暗褐色土		
							褐色土	
386	ピット	D1-6	扇円形	20 × 15 × 40	36.01	暗褐色土		
							褐色土	
388a	ピット	C1-6	扇円形	26 × 20 × 23	36.27	暗褐色土		
388b	ピット	C1-6	円形	18 × 17 × 5	36.45	暗褐色土		
390	ピット	C1-6	円形	40 × 32 × 49	35.98	暗褐色土		
							土師器	SB-1017
391	ピット	C1-6	三角状	22 × 20 × 22	36.24	暗褐色土		
							褐色土	
393	ピット	C1-6	扇円形	37 × 30 × 40	36.07	暗褐色土		
							褐色土	
394	ピット	C1-6	扇円形	32 × 25 × 43	36.04	暗褐色土		
							褐色土	
395	ピット	C1-6	扇円形	44 × 34 × 5	35.42	暗褐色土		
399a	ピット	C1-6	扇円形	26 × 17 × 28	36.16	暗褐色土		
399b	ピット	C1-6	円形	31 × 28 × 12	36.34	暗褐色土		
400	ピット	C1-6	円形	14 × 12 × 12	36.38	暗褐色土		
401	ピット	D1-6	円形	20 × 18 × 44	36.01	暗褐色土		
							褐色土	
402a	土坑	D1-6	不定形	48 × 36 × 18	38.29	暗茶褐色土		
							暗茶褐色土~ 褐色土	
402b	ピット	D1-6	円形	23 × 20 × 59	35.86	暗褐色土		SB-1017
405	ピット	D1-6	扇円形	24 × 18 × 62	35.80	暗褐色土		SB-1019
406	ピット	D1-6	円形	27 × 25 × 57	35.85	暗茶褐色土		SB-1017

立 構 名	種 別	ダリッド	形 素	規 格(cm) 厚幅×剖面×厚度	底面標高 (標高m)	面 土	出 土 遺 物	備 考
408	ピット	D1-6	楕円形	22×12×22	36.30	黄灰色土 鐵灰色土		
409	ピット	D1-6	円形	26×22×29	36.24	黄灰色土 鐵灰色土		
410	ピット	D1-6	円形	10×8×4	36.37	混褐色土 鐵灰色土		
412	ピット	D1-6	円形	14×12×18	36.23	混褐色土 鐵灰色土		
413	ピット	C1-6	楕円形	22×20×22	36.24	暗褐色土 鐵土		
414	ピット	C1-6	円形	20×18×20	36.26	暗褐色土		
415	ピット	C1-6	円形	22×18×34	36.12	暗褐色土 暗灰色土		
416	ピット	C1-6	三角状	20×18×17	36.29	暗褐色土		
417	ピット	C1-6	楕円形	22×16×28	36.20	褐土 暗灰色土		SB-1019
418	ピット	C1-6	楕円形	15×9×6	36.42	混褐色土 暗灰色土		
419	ピット	C1-6	楕円形	12×11×38	36.10	暗褐色土 黃褐色土條		
420	ピット	D1-6	円形	22×22×16	36.31	黑褐色土 暗黃褐色土條		
421	ピット	D1-6	円形	16×15×12	36.35	黑褐色土 暗黃褐色土		
422	ピット	D1-6	楕円形	18×12×11	36.35	黑褐色土		
423	ピット	D1-6	円形	28×26×50	35.95	黑褐色土 暗褐色土條		SB-1019
424	ピット	C1-6	円形	19×16×29	36.30	暗褐色土 暗黃褐色土		
425	ピット	C1-6	円形	34×30×73	35.81	暗灰色土 黃褐色土條		SB-1020
427	ピット	C1-6	楕円形	14×10×14	36.40	暗褐色土		
429	ピット	C1-6	圓丸方彌	26×26×6	36.43	暗褐色土		SB-1019
430a	ピット	C1-6	円形	20×20×28	36.18	暗褐色土		SB-1020
430b	ピット	C1-6	圓丸方彌	20×14×33	36.13	暗褐色土		
431	ピット	C1-6	円形	15×14×3	36.46	暗褐色土		
432	ピット	C1-6	円形	20×20×23	36.24	暗褐色土 黑色土		SB-1020
433	ピット	C1-6	楕円形	34×34×49	36.08	暗褐色土 暗青灰褐色土		
434	ピット	C1-6	三角状	24×21×31	36.15	暗褐色土		
435	ピット	C1-6	円形	36×32×38	36.08	暗褐色土		SB-1020
436	ピット	C1-6	楕円形	22×18×14	36.34	暗褐色土 褐色土		
437	ピット	C1-6	楕円形	19×18×40	36.06	暗褐色土		
438	ピット	C1-6	円形	20×20×39	36.09	暗青灰褐色土 暗褐色土		
439a	ピット	C1-6	不定形	44×39×11	36.37	暗褐色土 褐色土		
439b	ピット	C1-6	楕円形	26×18×37	36.11	褐色土		
440	ピット	C1-6	楕円形	19×18×32	36.16	暗褐色土 暗青灰褐色土		
441	ピット	C1-6	楕円形	20×19×13	36.32	暗青灰褐色土 褐色土		SB-1020
442	ピット	C1-6	楕円形	12×10×23	36.23	暗褐色土 暗青灰褐色土		
443	ピット	C1-6	楕円形	20×18×23	36.24	暗褐色土		SB-1020
444	ピット	C1-6	楕円形	31×26×53	35.91	暗褐色土 青灰色土條		SB-1020
445	ピット	C1-6	楕円形	31×26×21	36.23	暗青褐色土 暗褐色土條		
446	ピット	D1-6他	楕円形	30×28×16	36.27	暗褐色土 暗青灰褐色土		SB-1019
447	ピット	C1-6	楕円形	33×31×69	35.75	暗褐色土 暗褐色土條		
448	ピット	C1-6	圓丸方彌	18×16×19	36.25	暗褐色土		
449a	ピット	C1-5	楕円形	30×29×28	36.16	暗褐色土 暗褐色土條		SB-1020
449b	ピット	C1-5	円形	14×14×36	36.08	暗褐色土 暗灰色土		
450	ピット	C1-5	楕円形	24×18×29	36.14	暗褐色土 暗褐色土		
451	ピット	C1-5	楕円形	34×30×47	35.94	暗褐色土 暗褐色土		
452	ピット	D1-5	円形	19×18×20	36.21	暗褐色土 暗褐色土條		
453	ピット	D1-5	楕円形	40×18×57	35.86	暗褐色土 暗褐色土		
454	ピット	D1-5	円形	18×17×20	36.20	暗褐色土		
455	ピット	D1-5	圓丸方彌	44×34×60	35.81	暗褐色土 暗褐色土條		

遺 墓 名	種 別	グリッド	形 種	規 格(cm) 縦軸×横軸×深厚	底面標高 (測量m)	面 土	出 土 遺 物	備 考
456	ピット	D1-5	箱円形	32 × 29 × 56	35.84	暗黄灰褐色 細緻土質		
457	ピット	D1-5	箱円形	22 × 18 × 8	36.32	暗褐色土 細緻土質		
458	ピット	D1-5	円形	18 × 16 × 55	35.84	暗褐色土 細緻土質		
459	ピット	D1-5	円形	20 × 19 × 20	36.12	暗黄灰褐色 細緻土質		
460	ピット	D1-5	箱円形	18 × 13 × 23	36.05	暗褐色土		
464	ピット	D1-5	箱円形	30 × 18 × 59	35.78	暗褐色土 細緻土質		
465	ピット	D1-5	箱円形	28 × 26 × 51	35.86	暗褐色土 細緻土質		
466	ピット	C1-5	箱円形	42 × 36 × 90	35.50	暗黄灰褐色 細緻土質		
467	ピット	C1-5	円形	20 × 18 × 16	36.27	暗褐色土 細緻土質		
468	ピット	C1-5	円形	14 × 14 × 20	36.22	暗褐色土		
469	ピット	C1-5	箱円形	20 × 18 × 43	35.97	暗黄灰褐色 細緻土質		
470	ピット	C1-5	箱円形	24 × 14 × 28	36.16	褐色土	黑色漆	
471	ピット	C1-5	箱円形	39 × 28 × 56	35.95	暗褐色土 細緻土質	鐵鏡	
472	ピット	C1-5	扇丸形	22 × 21 × 37	36.09	暗褐色土 細緻土質	中世土器	
473	ピット	C1-5	円形	16 × 13 × 21	36.28	暗褐色土 細緻土質	土解剖	
474	ピット	C1-5	円形	27 × 16 × 14	36.33	暗褐色土		
475	ピット	C1-5	扇円形	38 × 30 × 23	36.24	褐色土 細緻土質		
477	ピット	C1-5	扇円形	23 × 23 × 23	36.27	暗褐色土 細緻土質		
478	ピット	C1-5	三角状	24 × 22 × 11	36.45	暗褐色土 細緻土質		
479	ピット	D1-6	不定形	31 × 29 × 20	36.30	暗褐色土 細緻土質		
480	ピット	D1-7	円形	10 × 8 × 14	36.22	褐色土		
481	ピット	E1-6	円形	18 × 16 × 26	35.92	暗褐色土 細緻土質		
482	ピット	E1-6	箱円形	38 × 24 × 42	35.73	褐色土 細緻土質		
483	ピット	E1-6	円形	18 × 16 × 21	35.94	褐色土 細緻土質		
485	ピット	D1-6	箱円形	22 × 18 × 22	35.06	黑色土 黃褐色土	SB-1018	
486	ピット	E1-6	円形	16 × 16 × 6	36.11	褐色土 細緻土質	SB-1018	
487	ピット	E1-6	円形	18 × 18 × 19	35.95	暗褐色土 細緻土質	SB-1018	
488	ピット	E1-6	円形	20 × 18 × 56	35.54	褐色土 細緻土質	SB-1018	
489	ピット	D1-5	扇円形	24 × 18 × 17	36.12	褐色土 細緻土質	SB-1018	
490	ピット	E1-6	円形	16 × 14 × 16	36.05	褐色土 黑色土	SB-1018	
492	ピット	E1-6	扇円形	24 × 18 × 56	35.51	暗青灰褐色土 細緻土質	SB-1018	
493	ピット	E1-6	円形	22 × 20 × 67	35.40	褐色土 細緻土質	SB-1018	
494	ピット	E1-6	三角状	49 × 26 × 35	35.90	褐色土 細緻土質		
495	ピット	E1-6	不定形	56 × 28 × 29	35.75	褐色土 細緻土質		
496	ピット	E1-6	扇円形	50 × 32 × 37	35.69	褐色土 細緻土質		
497	ピット	E1-6	三角状	44 × 36 × 24	35.84	褐色土 細緻土質		
498	ピット	E1-6	円形	14 × 14 × 23	35.61	褐色土 細緻土質		
500 a	ピット	D1-5	円形	30 × 30 × 13	36.14	暗褐色土 細緻土質		
500 b	ピット	D1-5	円形	28 × 16 × 35	35.92	褐色土		
501	ピット	D1-5	円形	24 × 20 × 35	35.92	褐色土 細緻土質		
502	ピット	C1-5	円形	20 × 19 × 18	36.29	褐色土		
503	ピット	C1-5	円形	24 × 20 × 17	36.22	褐色土		
505	ピット	C1-5	不定形	38 × 30 × 44	35.95	褐色土 細緻土質		
507	ピット	C1-5	扇円形	22 × 12 × 11	36.28	褐色土 細緻土質		
508	ピット	C1-5	扇円形	30 × 28 × 44	35.98	褐色土 細青灰褐色土質	SB-1021	

直 横 名	植 実	グリッド	形 細	規 格 (cm) 長軸×短軸×厚さ	底面標高 (海抜m)	覆 土	出 土 順 物	備 考
509	ピット	C1-5	円形	28×28×55	35.85	暗灰色土 黒色腐殖土層	土脚層	SB-1022
511	ピット	C1-5	楕円形	32×28×60	35.79	暗灰色土 暗色灰褐色土層		SB-1022
512	ピット	C1-5	楕円形	30×26×20	36.16	暗灰色土 暗色灰褐色土層		SB-1021
513	ピット	C1-5	円形	24×20×20	36.20	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
514	ピット	C1-5	楕円形	20×14×13	36.24	暗灰色土 暗色灰褐色土層		SB-1021
515	ピット	C1-5	円形	24×20×21	36.18	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
516	ピット	C1-5	楕円形	50×32×21	36.16	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
518	ピット	D1-4	円形	22×20×43	35.93	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
519	ピット	D1-4	円形	18×16×19	36.18	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
520	ピット	D1-4	円形	12×10×12	36.15	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
522	ピット	C1-4	楕円方形	30×26×33	35.98	暗灰色土 暗色灰褐色土層		SB-1021
523	ピット	C1-4	楕円形	30×22×32	36.02	暗灰色土 暗色灰褐色土層		SB-1022
524	ピット	C1-4	楕円形	18×14×23	36.14	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
525a	ピット	C1-4	楕円形	32×26×21	36.12	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
525b	ピット	C1-4	三角状	18×14×20	36.13	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
527a	ピット	C1-4	楕丸方形	48×38×14	36.29	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
527b	ピット	C1-4	円形	26×24×45	35.98	暗灰色土 暗色灰褐色土層		
528	ピット	D1-4	楕円形	52×40×79	35.84	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		SB-1021
529a	ピット	C1-4	円形	42×38×14	36.29	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
529b	ピット	C1-4	楕円形	28×20×26	36.17	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
530	ピット	D1-4	楕円形	36×28×60	35.90	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
531	ピット	D1-4	円形	18×18×17	36.23	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
533a	ピット	D1-4	楕円形	30×24×67	35.73	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
533b	ピット	D1-4	楕円形	30×22×72	35.68	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		SB-1021
534	ピット	D1-4	楕円形	28×24×26	36.11	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
535	ピット	D1-4	楕円形	22×18×25	36.15	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
538	ピット	C1-4	円形	22×20×27	36.13	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
540	ピット	D1-4	円形	22×20×27	36.07	暗色褐色土 暗色灰褐色土層	瓦片陶器	
541	ピット	D1-4	円形	22×20×27	36.02	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
542	ピット	C1-4	楕円形	26×18×25	36.10	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
543	ピット	D1-4	楕円形	22×20×22	36.08	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
544	ピット	D1-4	楕円形	24×20×33	35.89	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
545	ピット	D1-4	楕円形	30×26×29	35.92	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
546	ピット	D1-4	円形	20×20×26	35.97	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
547	ピット	D1-4	楕円形	40×32×44	35.77	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
548	ピット	D1-4	楕円形	18×16×20	36.01	黑色褐色土 暗色灰褐色土層		
549	ピット	D1-4	円形	16×14×14	36.04	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
551	ピット	E1-4	円形	28×22×35	35.59	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
552	ピット	E1-4	楕円形	22×18×29	35.68	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
553	ピット	E1-4	三角状	26×20×38	35.56	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
557	ピット	E1-7	楕円形	28×22×50	35.65	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
558	ピット	E1-6	円形	12×12×19	35.91	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
559	ピット	Z-8	楕円形	24×18×82	36.53	暗色褐色土 暗色灰褐色土層	柱軸	
560	ピット	Z-8	楕円形	16×14×104	36.31	暗色褐色土 暗色灰褐色土層	土脚層	
561	ピット	Z-8	楕円形	18×14×102	36.33	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		
562	ピット	C1-6	楕円形	20×18×24	36.24	暗色褐色土 暗色灰褐色土層		

3 遺 物

深町遺跡からは、全体でテンバコおよそ15箱分の遺物が出土している。その内訳は、土器・陶磁器類がおおよそ8箱分、碟を含む石器・石製品類が6箱分、木製品類1箱分であり、このほかに銭貨や種子などの自然遺物がわずかに伴っている。出土量が主体的であるのは、古代の土器類であるが、木製品類や石製品類にも古代に属すと考えられるものも含まれている。

本節では、まず深町遺跡で主体となる古代の土器類について述べ、次に他の時代もしくは所属時期不明の土器・陶磁器類、さらに木製品類、石器や碟を含む石製品類、銭貨、自然遺物と種別に報告していくことをしたい。

1) 古代の土器類

深町遺跡の主要時期である古代の土器について報告する。土器・陶磁器類は8箱分としたが、古代に属す土器類は、その9割以上を占める。出土量が比較的豊富であるため、最初にこれらの資料について、内容や出土状況などを概観し、器種や形態などから分類を試みる。そして、次にそれぞれの土器類について各説を述べる。

a 概観と分類

本遺跡から出土した遺物のうち、古代の土器類に該当するものとしては、土師器・黒色土器・須恵器がある。それらの出土量は、土師器が圧倒的に多く、全体の9割近くあり、黒色土器・須恵器がそれと伴うという組成である。

出土状況をみると、土坑や柱穴などの遺構から出土した土器類は少なく、遺物包含層からの出土量もさほど多くはない上、ほとんどが小片である。これに対して、Z-8~9グリッドで検出されたSX-33土坑からは、無台榦を中心とした大量の土師器と定量の黒色土器がまとまって出土しており、本遺跡出土土器のはとんどが集中している。そのため、報告に際しての図化作業にあたっては、このSX-33が中心的な遺構となった。ただし、比較などのために他の遺構や包含層から出土した土器類についてもできるだけ図化するように努めた。また、小片であることにより図化が困難となったものについては、必要に応じて破片数などを記載することで報告にかえることとした。

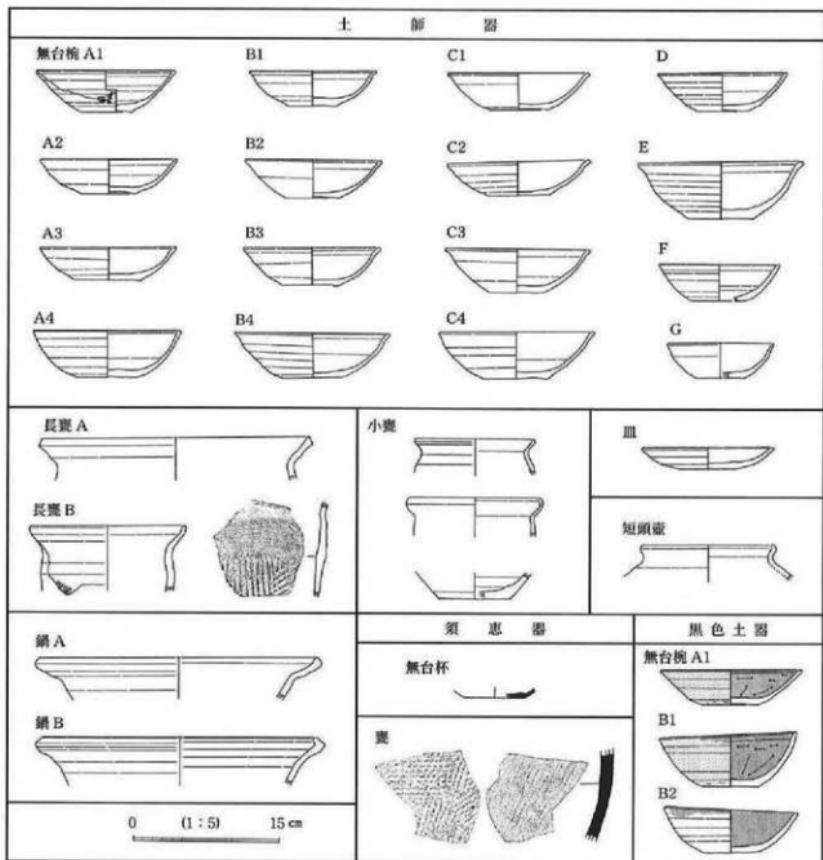
なお、具体的な検討は第Ⅵ章にて行うが、深町遺跡で出土した古代土器については、おおむね10世紀前葉頃の所産と考えられる。さらに、当該土器群には、ある程度の時期幅を看取することはできず、本遺跡に営まれた古代集落の存続は比較的短期間であったことが想定される。これは、集落の中心部からややそれれた位置に調査区が設定されたことにもよるが、遺構の重複があまりなかったことと対応する現象であると思われる。

次に、種別に概観し、器種分類などを呈示しておきたい。

i) 土 師 器

出土した古代土器の圧倒的多数を土師器が占めている。器種としては、食膳具は最も出土量の多い無台榦、および1点のみ確認された小皿の2器種、煮炊具は長甕・小甕・鍋の3器種がある。さらに、短頸甕も出土しているので、計7器種となる。

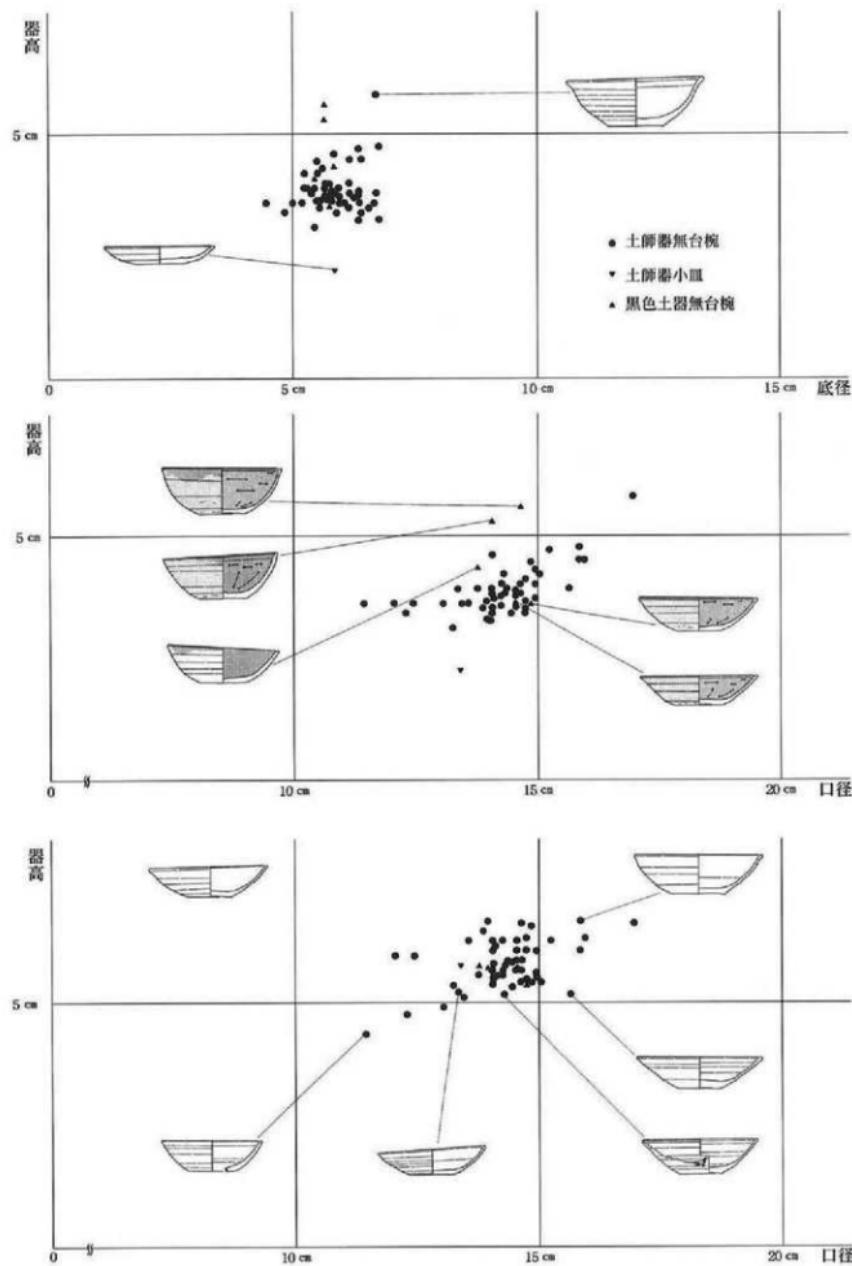
以下、それぞれの器種について述べ、最後に胎土についてまとめる。



第8図 深町遺跡出土古代土器器種分類図

無台椀 土器の主要器種であり、82点を図化した。全体の器形を把握できるものを中心に、形態などによって分類を試みた。また、歪んだ器形を有するものが多かったので、形態分類にはやや曖昧な点がある。また、法量も参考にしたが、やはり器形の歪みのため、口径や器高は計測する位置によって数値がやや異なってしまう。そこで、法量を加味する場合は、一定の数値を得ることができる底径を重視することとした。以下、形態によって分類したA～Gの7類について説明する。

A類は、体部がおむね内湾して口縁部に至るものである。口縁端部は強いナデなどを受けるが、形態にはさほど影響なく直線的である。口径は14cm前後になるものが多いが、底径によって5cm台前半(A1類)、5cm台後半(A2類)、6cm台前半(A3類)、6cm台後半(A4類)に細分される。A1類は、底部が厚く、直線に近い体部は外傾して開く。A2類は、器高が3cm台後半のものが多く、口径に比して底径・器



第9図 深町遺跡出土古代土器法量分布図

高が小さいタイプである。A 3 類は、口径も15cm台の法量のやや大きいタイプである。A 4 類は、口径に比して底径が大きく、器高が低いタイプである。

B 類は、やはり体部が内弯して立ち上がり、口縁部の強いナデによって端部が若干外反する端反状の形態を有するものである。外反する程度は一定ではなく、個体によってさまざまであり、同じ個体でも部分的に異なる場合もある。A 類と同様に底径によって細分すると、5 cm前後 (B 1 類)、5 cm台 (B 2 類)、6 cm台 (B 3・4 類)となる。B 1 類は、口径も13cmほどの小型のタイプである。B 2 類は、口径に対して底径が小さいタイプであるが、器高が3 cm台と4 cm台のものがある。また、底径6 cm台のものは、口径14cm前後、器高3 cm台後半のB 3 類と、口径16cm前後、器高4 cm台のB 4 類とした。

C 類は、同様に体部が内弯して立ち上がり、口縁部に強いナデが施されるものであるが、ナデはB 類よりも端部を強調させてあり、端部が肥厚したもの、玉縁状を呈するものがある。やはり個体によるナデの程度あるほか、同一個体でも部分的な強弱があって、特にB 類との区別が困難なものもあった。口径は14cm台のものが多いが、同じく底径によって5 cm前後 (C 1 類)、5 cm台前半 (C 4 類)、5 cm台後半 (C 2 類)、6 cm台前半 (C 3 類)、6 cm台後半 (C 5 類)に細分される。C 1 類は、肥厚した底部から体部が直線的に外傾して立ち上がる。そのため、底径に対して口径が大きい。C 2 類は、器高3 cm台後半が多い。C 3 類は、口径・器高がC 2 類に近い。C 4 類は、底径に比べて口径・器高が大きい。C 5 類は、法量のやや大きいタイプである。

D 類は、作りが粗雑で、外面にはロクロ成形の痕跡を顕著にとどめるものである。

E 類は、口径17cm前後を計る大型タイプである。器面のロクロ成形痕を遺している。

F 類は、器厚が厚く、体部が内弯して立ち上がり、深身となるタイプである。

G 類は、体部下半が内弯するが、上半ではナデによってわずかに屈曲し、口縁端部がやや外側に反るタイプである。A～F 類と異なり、G 類はS X-33からは出土せず、他の遺構のみから出土している。

以上、今回試みた無台碗の分類を示した。圧倒的な量比を占めるのはA～C 類である。A～C 類は、器面をおおむね平滑に仕上げるもの、器形が歪んで場合が多いという共通点もある。A～C 類への分類は、口縁部形態に基づいたものであるが、A 1 類とC 1 類はやや類似した形態を有しており、ほかの分類案も想定しなければならない。ただし、口縁端部が外反する形態は、10世紀に顕著になる傾向があり、形態の変遷を追うためには、今回の分類も有効であると思われる。

無台皿 1点のみ出土している。詳細は各説にて述べる。

長 瓢 すべてロクロ成形であるが、器形全体を把握できるものはなく、口縁部～胴部上半の形態によって大きくA・B の2 類に分類した。A 類は、大きさにはバラエティがあるが、胴部が「く」の字に屈曲すると口縁部が外傾して立ち上がる。B 類は、口径15cmほどの小型のものである。口頭部はやや薄手となって立ち上がる。ともに胴部下半にはタタキ成形が施されたと思われる。

小 瓢 すべてロクロ成形である。長瓢と同様に、器形全体を把握できるものはなく、口縁部～胴部上半の形態によって大きくA・B の2 類に分類した。A 類は、胴部が内弯するが、「く」の字に屈曲して口縁部を形作るものである。またB 類は、胴部からの屈曲後、口縁部が湾曲して受口状を呈するものである。底部には回転糸切りの痕跡が認められる。

鍋 破片が得られたのみであるため、口径などを復元できたものは少ない。形態からA・B 類に分類した。A 類は、口縁端部が内側へ丸く引き出されたものである。B 類は、口縁端部を内側へ折り返すように屈曲させるものである。B 類は撇して薄手の作りである。

短 類 壺 1点のみであるため、詳細は各説にて述べたい。

胎 土 今回は、胎土によってあまり細分せずに大まかなA～Cの3分類にとどめた。A類は、比較的キメの細かい胎土に、径0.5mm程度の微細なチャート粒や径1mmほどの褐色土粒が混じり、わずかに雲母粒なども含まれるものである。この中でも比較的混和物の粒子が粗いものをA2類とし、キメの細かいA1類と区別した。SX-33出土無台壺に多くみられる。B類は、A類よりも混和物の量が多く、チャート粒なども径1mmほどのものが多いものである。特に煮炊具などに多くみられる。C類は、おおむね橙色の色調を呈するものである。全体的にやや粗く、チャート粒や白色粒を含む。その他はD類として、詳細は各説にて注した。

胎土は、焼成の具合などによって色調にバラエティが生じる。また、ミガキなどの調整が施されると、器面は堅緻な状態となる。そのため、胎土の分類にあたっては、胎土そのもののほか、微細な混和物についても注意を払った。ただし、今回得られた土師器において、量的に主体となっているSX-33出土の無台壺の胎土の大半はおおむね同様の土質や混和物がみられた。これは、SX-33出土の土師器無台壺が同時に大量生産され、使用・廃棄された状況を示唆するものと思われる。今回はSX-33から出土した土師器と他地点から出土した土師器と比較し、土師器の使用形態などに何らかの違いが認められるかどうかを検討するための一助となることを目指したい。

ii) 黒色土器（無台壺）

内面に黒色処理を施した土器で、「内黒」とも称される。今回確認された器種としては無台壺のみである。底部切離し技法は、回転糸切り技法によると思われるが、その後はヘラによって調整される。また、体部外面の立ち上がり部分には、1～2条の回転ヘラケズリが施されている。さらに、内面は体部下半に縱方向、上半に横方向のミガキが丁寧に施されている。

器形や法量から、口径に比して器高が高い皿形を志向するもの（A類）と器厚が高い壺形をなすもの（B類）に分類できる。さらに、胎土が浅黄橙色を呈して外面が赤彩されるもの（1類）と胎土がにぶい橙～にぶい褐色を呈して外面に赤彩のみられないもの（2類）とに分類できる。

これらの組み合わせから、形態・胎土・色調による分類として4類にまとめることができるが、このうち明確にA2類と判断できるものは出土していない。

iii) 須恵器

無台杯2点と甌類の胴部片15点を図化したのみである。全体からみれば少量であるため、今回出土した須恵器を細分することは避けたい。なお、胎土の観察から、今回出土した須恵器はすべて佐渡小泊窯産であると思われる。胎土についても、小泊窯産であることを指摘するにとどめ、細分することは避けるとした。

b 土器類各説

個々の土器類について報告する。ただし、出土量において中心的となる遺構はSX-33のみで、その他の遺構から出土した土器類は各々数点が出土したにすぎない。ここでは、まずSX-33出土の土器類について述べ、次にその他の遺構、河川跡、遺物包含層等の遺構外にまとめて説明する。

i) SX-33

本遺構は、Z-8～9グリッドに位置する土坑である。大量の土器が出土しており、接合作業を経た破片数は、847点を数える。その内容は、土師器812点、黒色土器31点、須恵器4点と土師器の量が圧倒的である。以下、種別に報告する。

① 土 師 器

完形もしくはある程度の器形が把握できるものを中心、85点を図化した。器種としては、無台椀・皿・長甕・小甕・鍋・短頸壺があるが、出土量や完形率では、無台椀が群を抜く。

無台椀（1～69）形態分類から、A類（1～20）、B類（26～43）、C類（46～67）、D類（21～24）、E類（44・45）、F類（25）となった。

1・2は、A 1類とした。内外面とも、ロクロナデの痕跡を比較的多く残している。1は、体部外面に墨書きがみられる。文字は途中で欠損しているため判読は難しいが、逆位にて記載された「縁」や「録」などが考えられる¹¹⁾。文字の幅は1.8cmである。2は、口縁形態よりA 1類としたものであるが、全体的な器形としてはC 1類にも近いので、今回の分類にも注意が必要である。3～8は、A 2類である。4・5・8の外面には、部分的に赤色化したところがあり、焼成の際には何らかの顔料が器面に施されていた可能性がある。特に、6は器面の調整が丁寧に仕上げられている。また、7は他よりも底径が大きく、数値の上ではA 4類にも近似するが、ここでは形態によりA 2類に含めた。9は、A 3類で、今回は1点のみの分類である。10・11は、A 4類である。10の体部～底部外面には黒斑がみられる。12～20は、いずれも口縁部～体部の破片であり、細分には至らなかった。18の口径はやや小さいが、12～17は14～15cm、19・20は16cm前後である。器高はさほど高くないと考えられるので、A 2類が想定される。

21～24は、D類である。特に外面のロクロ成形痕を顯著にとどめている点で他と区別した。21と22、23と24がそれぞれ同じ胎土である。特に後者は、器厚も均一ではなく、製作上の粗雑さがうかがえる。

25は、F類である。1点のみの分類となった。器厚はやや厚めであるが、内外面は平滑に仕上げられる。26～33は、B 2類である。口縁端部は、各個体あるいは部分によって外反の程度が異なる。また、26～32の口縁部内面にもやや強いナデが施されたため、平滑な仕上げが試みられているものの、浅い沈線状の窪みとして遺っている。33は、口径・器高がやや大きく、胎土も異なるため、B 2類とするには疑問もある。また、30には前述のような赤色化した部分がある。34～39は、B 3類である。34は、特に内面の調整が丁寧であり、器形の歪みも少ない。40は、B 1類で、法量の小さいタイプである。41～43は、B 4類である。E類との中間的な法量を有する。41は、内面をおおむね平滑に調整するものの、外面にはロクロ成形の凹凸を顯著に遺している。器形の歪みもない。底部～体部の境界に丸みを持たせるべくナデを施している。胎土には2mmほどの大粒の砂粒を含む。42・43は、口径の復元からB 4類であることを想定した。

44・45は、E類である。体部が内窓して口縁部が外反する形態はB類に類似するが、口径・器高が群を抜くため、E類として独立させることとした。外面には細かなロクロ成形の痕跡を遺すが、内面はおおむね平滑に仕上げている。45は、一部赤色になっているほか、外面に煤を受けている。

46～52はC 2類、53はC 1類である。53は、底部が厚く、体部が外傾して直線的に立ち上がる形態はA 1類に類似し、口径と底径との比率もおおむね近い。54～60は、C 3類である。58～60の口縁部内面に、やや強いナデによる沈線状の窪みが遺るが、それ以外はおおむね平滑に調整されている。66・67はC 4類、68はC 5類とした。68と近似する法量を持つB 4類の41は、外面にロクロ成形痕を遺していたが、68は内外面ともに平滑なナデが施されている。また、1mm以上の砂粒も含まれていない。

69は、底部片で、中央に径7mmほどの穿孔がみられる。表面の観察がし難いため、焼成前の穿孔か跡の穿孔かは判然としない。穿孔の目的なども不明となった。

皿（70）1点のみ確認された。底部と体部との境界は不鮮明で、内窓しながら緩やかに立ち上がり、口縁端部はやや外反する。外面に薄い煤が付着する。

長 鋸 (71) 明らかに長鋸とみなせるものは1点のみとなった。71は、口縁部～体部上半の破片である。今回A類としたもので、ロクロ成形である。外面に薄い煤が付着する。

小 鋸 (72・73) 72は、口縁部～体部上半の破片である。口頭部の形態よりA類とした。73は、体部下半～底部の破片である。ロクロ成形で、底部外面には回転糸きり痕がみられる。

鍋 (74～84) 固化できたのすべて口縁部の小片で、A類7点(74～80)、B類4点(81～84)である。76・80・83には、外面に薄い煤が付着する。

短 頸 壺 (85) 接合の結果、口縁部～胴部の一部を確認した。ロクロ成形であり、外傾する口頭部の長さは1cmほどである。口縁部内面がやや強くナデられ、端部が内側上方を志向する。ただし、つくりはやや粗雑で、口頭部の屈曲が弱い部分もある。

(2) 黒色土器(無台椀86～98)

13点を固化した。分類の結果、A1類が7個体(86～92)、B1類が3個体(93～95)、B2類が3個体(96～98)となった。

86は、約1/5を欠損するが、全体の器形を把握できる。体部はほぼ直線的に立ち上がるが、口縁部はやや強いナデによって端部が若干外反する。底部は回転糸切りによって切り離された後、ヘラによって調整されたと思われる。外面は、上半にロクロ成形の痕跡を遺すが、下半には1条のヘラケズリがされる。部分的に赤(橙)色化しているが、次の97～95とは色調が異なり、土師器無台椀A2類に一部認められた顔料の色調に類似する。内面の黒色処理やミガキ調整は丁寧に施されている。ミガキは、下半の縦位のち上半の横位という重複関係がみられる。87は、ほぼ完形である。体部は内寄し、口縁端部は86よりも外反する。86と同様のヘラ調整がみられ、赤彩された部分も遺っている。内面は摩耗しており、黒色処理された部分が薄れ、調整の痕跡も明瞭ではないが、縦位と横位のミガキを観察することができる。88～90は口縁部～体部の破片、91・92は体部下半～底部の破片である。

93は、完形であり、体部の器厚が厚く、5～8mmを計る。外面の調整は87などと同様であり、赤彩部分も1/2近く遺る。内面は口縁部～体部に横位のミガキが、底部に近い部分に縦位のミガキがみられる。94・95は、93とは異なり、体部の器厚が3～5mmほどの薄手の作りで、A1類のように口縁端部が外反する。内外面の調整はほぼ同様であるが、94の体部下半外面のヘラケズリは2条に及ぶ。

96は、ほぼ完形である。概して粗雑な作りであり、口縁端部はやや外反する部分も認められる。内面は厚く黒色処理される。体部上半の外面にはロクロ成形痕を遺すが、それ以外は摩耗のため、細かな調整は確認されなかった。97は、体部下半～底部片である。底部外面に回転糸きり痕をとどめているが、やはり細かな調整は不明である。98は、胎土の色調からひとまずB2類としたが、調整などからみれば1類の可能性もある。

(3) 須 惠 器 (99・100)

本遺構からは3点の須恵器が出土しているが、いずれも小片である。ここでは2点を報告する。なお、胎土の観察により、すべて佐渡小泊窯産の製品と考えられる。

無台杯 (99) 底部片である。回転ヘラケズリ痕が遺る底部外面には墨書が認められる。墨痕は薄く、文字の判読は困難であるが、「門」もしくはもんがえを用いた文字が想定される。中央よりもやや上よりの位置にあり、大きさは遺存する部分で4.8cmを計る。

壺 (100) 体部片である。外面には格子文の叩き目がある。内面の当て具痕平行線文であるが、その上から放射状文と思われる別種の当て具痕が重複している。

ii) その他の遺構 (図版39)

S X-33以外の遺構からは、まとまった量の土器類は出土していない。ここでは、少量ではあるが、S X-33以外の遺構から出土した土器類について説明する。

① S D-7 (土師器無台椀101)

土師器・須恵器の小片が数点出土しているが、101のみを報告する。101は、土師器無台椀G類の口縁部～底部の破片である。内面は平滑に調整される。

② SK p-473 (土師器無台椀102)

102は、口縁部～体部の破片で、わずかに底部が遺存する。ひとまずG類に分類したが⁴、胎土は概して粗く、径1mmのチャート粒などをやや多く含んでいるので、101等とは異なっている。

③ SK p-196 (土師器無台椀103)

103は、体部下半～底部片である。焼成がややあまいが、胎土は101等に近い。内面に煤が付着する。

④ SK p-60 (土師器長甕104・105)

2点とも長甕A類の口頭部片である。いずれも体部外面にロクロ成形の痕跡を遺している。105の外面には薄い煤の付着が認められる。

⑤ SK p-198

土師器と黒色土器の小片があるが、図化できたのは106・107の2点のみである。106は、全体の器形が想定されず、器種も不明となった。なお、本遺構からは、鍛冶関連遺物も出土している(第6項)。

土師器鍋 (107) 口縁部～体部上半の破片である。B類としたが、端部の折り返しがやや弱い。

⑥ SK-200

10点ほどの土師器片が出土しているが、図化が可能なのは2点のみとなった。

土師器鍋 (108) B類の口縁部片である。内外面に煤が付着する。

土師器長甕 (109) 脣部片である。上半にはロクロ成形痕が遺るが、下半の外面には平行線文の叩き目がみられる。内外面とも上半に薄い煤が付着している。

⑦ SK p-470 (須恵器甕110)

体部の破片である。外面には格子文の叩き目がある。内面の當て具痕は平行線文と同心円文とが重複するが、おそらく同心円文が後に施されたと思われる。佐渡小泊窯産と考えられる。

iii) 河川跡

調査区西部のI地区から検出された河川跡の出土土器をまとめる。S X-33や他の遺構の土器とは形態や胎土などが異なるため、本項冒頭での分類の対象からはひとまず除外した。別時期の可能性がある。

① SD-6

トレンチ出土の土器から4点を図化した。すべて第Ⅵb層出土である。

土師器無台椀 (111～113) 111はロクロ成形されるが、口縁部外面のナデが強い。胎土には雲母粒のほか、白色・黒色・褐色の土粒が多く含まれる。112・113の胎土にはチャート粒がややみられる。なお、113の底部切り離しにはやや太い糸が用いられている。

土師器長甕 (114) B類の口縁部～胴部上半である。口縁部～頸部付近にはロクロ成形痕が遺るが、胴部には平行線文と思われる叩き目の一部がみられる。胴部にはやや厚い煤が付着する。

② SD-32 (土師器無台椀115～117)

すべて第2トレンチ下層からの出土である。胎土や形態は112・113に類似する。

iv) 包含層等 (図版40・41)

ここでは、遺物包含層など、遺構外から出土した土器類を報告する。特に、集落の中心部に近いと考えられるY-6グリッドやSX-33周辺のY-Z-9~10グリッドからの出土が多い。

① 土 師 器 (118~134)

無台椀や鍋の様相はSX-33に似るが、長甕や小甕はやや異なるため、注意が必要である。

無台 梗 (118~121) 118は、D類に分類される。第1次試掘確認調査B-5トレンチ (Z-10グリッド) から発見された。完形に近いが、遺構に伴う出土ではなく、包含層から検出された。119は、口縁部~体部の破片であるが、口縁形態からA類に分類される。120・121は底部片である。口縁部を欠くため、分類は留保するが、わずかな体部の立ち上がり部分から考えれば、A~C類の可能性がある。

長 甕 (122~125) 122・123は口縁部、124・125は体部の破片である。122は、口縁端部をやや丸く内側へ張り出した形態をなす。123は、平坦な端面を有し、特に外面にロクロ成形痕を遺す。124・125には、外面に平行線文による叩き目がみられる。

小 甕 (126・127) 2点を図化した。いずれもロクロ成形である。126は、口縁部~体部上半である。頸部から外方へ屈曲し、内側へ湾曲して口縁部となる受口状の形態をなす。概して薄いつくりである。127は、体部上半の破片である。体部は丸みを帯びた形態が想定され、器厚もやや厚い。

鍋 (128~134) 図化が可能であったのは、口縁部の小片のみで、128はA類、129~134はB類に分類される。いずれも焼成は良好であり、特にB類は器厚が薄く、しっかりしたつくりである。

② 黒色土器 (無台椀 135・136)

図化できたのは2点のみである。体部下半~底部の破片で器形は不明であるが、褐色系の胎土を有する2類である。黒色処理もしっかりと施され、底部外面はヘラケズリされる。また、135の体部外面にはケズリがみられる。

③ 須 惠 器 (137~150)

図化が可能であったのは、無台杯1点と甕13点である。いずれも小片のみとなった。胎土などから、すべて佐渡小泊窯産と考えられる。

無台 杯 (137) 底部片である。器厚は薄く、体部への立ち上がりが外傾気味であるため、江ノ下窯の製品である可能性がある。

甕 (138~150) すべて胴部の破片に限られた。しかし、少量であるにもかかわらず、外外面にみられる叩き目と当て具痕およびそれらの組合せにはバラエティがみられる。木目の間隔や方向によってさらに細分が可能であるが、叩き目にみられるのは、大きくは平行線文と格子文の2種である。当て具痕には平行線文・同心円文・放射状文が認められる。ただし、平行線文の当て具痕の上から、部分的に同心円文が重ねられるものがある (143・149)。部位によって当て具を使い分けたと思われるが、小片であるため、推測の域を出ない。しかし、当て具痕の平行線文や同心円文などから、すぐに個体の識別に結びつけるには注意が必要である。

c 墨書き土器 (1・99)

今回の調査で出土した明確な墨書き土器は1および99の2点のみである。1は、土師器無台椀の体部外面にみられる。文字の部分で欠損するため、判読はできないが、「禄」・「縁」などの可能性がある文字である。99は、須恵器無台杯であるが、底部外面に墨痕が認められた。だいぶ薄れているため、判読は困難だが、「門」もしくは「もんがまえ」を持つ文字と思われる。

第2表 深町遺跡出土古代土器観察表

番号	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	成形・調整等	色調	焼成	胎土	備考
1	S X - 33No281	土師器	無台輪 A 1	14.3	5.2	4.2	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	胎外部面墨書き(口縁部・縁内)
2	S X - 33No269 - No278	土師器	無台輪 A 1	15.6	5.2	3.9	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	黒斑
3	S X - 33No293	土師器	無台輪 A 2	14.0	5.5	3.6	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 2	
4	S X - 33No37 - No353	土師器	無台輪 A 2	14.0	5.7	3.6	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
5	S X - 33No38 - No239 - Aベルト上部	土師器	無台輪 A 2	14.3	5.8	3.8	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 2	
6	S X - 33No265 - No268 - I区下層	土師器	無台輪 A 2	14.0	5.9	3.4	底部削輪余切り	灰白・浅黄緑	良	A 2	黒斑
7	S X - 33No131 - Aベルト北側・II区下層	土師器	無台輪 A 2	14.3	5.9	3.9	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 2	
8	S X - 33No79 - No82 - No90 - II区下層	土師器	無台輪 A 2	14.2	6.3	3.8	底部削輪余切り	灰白・黒	良	A 2	
9	S X - 33 II区下層	土師器	無台輪 A 3	13.9	6.7	3.3	底部削輪余切り	椎	良	A 1	
10	S X - 33 Aベルト北側	土師器	無台輪 A 4	15.2	6.3	4.7		浅黄緑	良	A 2	
11	S X - 33No359 - No360 - Aベルト上部	土師器	無台輪 A 4	15.9	6.4	4.5	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	黒斑
12	S X - 33No165 - No214	土師器	無台輪 A	14.0	-	-		浅黄緑	良	A 1	
13	S X - 33No302	土師器	無台輪 A	14.6	-	-		浅黄緑	良	A 1	
14	S X - 33 Aベルト北側	土師器	無台輪 A	14.8	-	-		浅黄緑	良	A 1	
15	S X - 33No29	土師器	無台輪 A	14.0	-	-		浅黄緑・灰白	良	A 1	
16	S X - 33No254	土師器	無台輪 A	14.0	-	-		浅黄緑	良	A 2	
17	S X - 33No57	土師器	無台輪 A	14.7	-	-		浅黄緑	良	A 1	
18	S X - 33No166	土師器	無台輪 A	13.0	-	-		浅黄緑	良	A 2	
19	S X - 33 II区・III区下層 - No121 - No142 - No143	土師器	無台輪 A	16.0	-	-		浅黄緑	良	A 1	
20	S X - 33No249 - No252	土師器	無台輪 A	16.4	-	-		浅黄緑	良	A 2	
21	S X - 33No174 - No177 - No178 - No179 - No180	土師器	無台輪 D	13.3	5.3	3.9	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
22	S X - 33No163 - No164 - No179 - III区下層	土師器	無台輪 D	14.1	5.6	3.6	底部削輪余切り	浅黄緑	中や良	A 1	
23	S X - 33No567	土師器	無台輪 D	13.2	5.4	3.1	底部削輪余切り	浅黄緑	中や良	A 1	
24	S X - 33 Aベルト北側・II区下層	土師器	無台輪 D	13.4	5.2	3.6	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
25	S X - 33No273	土師器	無台輪 F	12.4	6.0	3.5	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
26	S X - 33No352 - I区下層	土師器	無台輪 B 2	14.0	5.4	3.9	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	黒斑
27	S X - 33No139 - No140 - No147 - No151 - No152 - No159	土師器	無台輪 B 2	14.8	5.7	4.0	底部削輪余切り	灰白・浅黄緑	良	A 1	
28	S X - 33No111 - No117 - 上層	土師器	無台輪 B 2	14.9	5.7	3.7	底部削輪余切り	灰白・黒	良	A 1	黒斑
29	S X - 33No112 - No113	土師器	無台輪 B 2	14.5	5.5	3.7	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
30	S X - 33No199 - Aベルト北側	土師器	無台輪 B 2	14.5	5.8	3.9	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 2	
31	S X - 33No53 - No55 - No59 - No62 - II区下層	土師器	無台輪 B 2	13.9	5.8	3.7	底部削輪余切り	灰白	良	A 1	
32	S X - 33No230	土師器	無台輪 B 2	14.0	5.8	4.6	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
33	S X - 33No161 - No162 - No165 - No168 - No172 - No189 - No193 - III区下層	土師器	無台輪 B 2	14.9	5.6	4.3	底部削輪余切り	椎	良	A 1	
34	S X - 33No81 - No83 - III区下層	土師器	無台輪 B 3	14.0	6.3	3.9	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	黒斑
35	S X - 33No122 - No147 - 上層	土師器	無台輪 B 3	13.8	6.5	3.5	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
36	S X - 33No145 - No146	土師器	無台輪 B 3	14.6	6.7	3.8	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
37	S X - 33No6 - No7 - No15 - No16 - No299 - Aベルト北側 - I区	土師器	無台輪 B 3	13.5	6.3	3.6	底部削輪余切り	(灰白)・浅黄	良	A 1	相
38	S X - 33No44 - No57	土師器	無台輪 B 3	14.0	6.1	3.8	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 2	
39	S X - 33No253 - No257	土師器	無台輪 B 3	14.5	6.3	3.6	底部削輪余切り	灰白	良	A 1	
40	S X - 33No131 - II区下層 Aベルト上部	土師器	無台輪 B 3	13.0	5.0	3.6	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
41	S X - 33上層 - No45 - No49 - No52	土師器	無台輪 B 4	15.8	6.1	4.5	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 2	黒斑
42	S X - 33No	土師器	無台輪 B 4	14.4	-	-		浅黄緑・椎	良	A 1	
43	S X - 33No383	土師器	無台輪 B 4	14.0	-	-		浅黄緑	良	A 1	
44	S X - 33No65 - No67 - No69	土師器	無台輪 E	16.9	6.7	5.8	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 2	
45	S X - 33 Aベルト上部	土師器	無台輪 E	17.0	-	-		浅黄緑・灰白	良	A 2	
46	S X - 33No48 - No81 - No83 - No84 - No85	土師器	無台輪 C 2	14.7	5.5	3.7	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
47	S X - 33No38 - No266 - Aベルト	土師器	無台輪 C 2	14.4	5.9	3.4	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
48	S X - 33 II区下層	土師器	無台輪 C 2	13.7	5.6	3.9	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
49	S X - 33No355 - Aベルト北側	土師器	無台輪 C 2	14.5	5.9	3.8	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	
50	S X - 33 II区下層	土師器	無台輪 C 2	14.8	5.9	3.6	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	黒斑
51	S X - 33No79	土師器	無台輪 C 2	14.4	5.4	3.8	底部削輪余切り	浅黄緑	良	A 1	

番号	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	成形・調整 等	色調	被成	胎土	備考
52	S X - 33Ne191 - No245 - No246 - I区下附	土師器	無台板C2	14.2	5.7	3.6	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 1	
53	S X - 33Ne76 - No174 - No200 - No237 - Aベルト直削、■区下附	土師器	無台板C1	14.2	5.6	4.0	底部回転条切り	に赤い緑	良	A 1	
54	S X - 33Ne78 - No88	土師器	無台板C3	14.8	6.6	3.6	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 1	
55	S X - 33Ne81 - No147 - I区	土師器	無台板C3	14.7	6.4	3.4	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 1	崩壊
56	S X - 33Ne138 - No147 - No276	土師器	無台板C3	14.1	6.2	3.7	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 1	
57	S X - 33Ne75 - Aベルト北削、■I区削	土師器	無台板C3	14.9	6.1	4.0	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 1	
58	S X - 33Ne21 - No134 - No150 - No155 - Aベルト北削、■区下附	土師器	無台板C3	14.5	6.1	3.8	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 1	崩壊
59	S X - 33Ne58 - No52 - No85 - No88 - No93 - I区下附・上附、No7	土師器	無台板C3	14.0	6.3	3.3	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 1	崩壊
60	S X - 33上附、■II16	土師器	無台板C3	14.7	6.1	3.5	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 1	
61	S X - 33Ne56 - I区II下附	土師器	無台板C	12.8	-	-		浅黄緑	中や良	A 2	
62	S X - 33Ne142 - Aベルト上削	土師器	無台板C	14.0	-	-		に赤い緑・浅黄緑	良	A 1	
63	S X - 33Ne251 - Aベルト南削	土師器	無台板C	15.0	-	-		浅黄緑	良	A 1	
64	S X - 33Ne294 - No295	土師器	無台板C	14.2	-	-		浅黄緑	良	A 1	
65	S X - 33Aベルト南削	土師器	無台板C	13.0	-	-		灰白・浅黄緑	良	A 1	
66	S X - 33Ne80 - No80 - No90 - I区下附	土師器	無台板C4	15.0	5.5	4.2	底部回転条切り	灰白・浅黄緑	良	A 1	黒斑
67	S X - 33Ne79 - No72 - No84 - No85 - No29 - No61	土師器	無台板C4	14.8	5.5	4.5	底部回転条切り	灰白・浅黄緑	良	A 2	
68	S X - 33Ne47 - No246 - No257 - No262 - No170 - ■区下附	土師器	無台板C5	15.8	6.7	4.6	底部回転条切り	浅黄緑	良	A 2	
69	S X - 33Ne301	土師器	無台板	-	5.4	-	底部回転条切り	緑	良	A 1	表面穿孔あり
70	S X - 33Ne174	土師器	盤	13.4	5.8	2.2	底部回転条切り	浅黄緑	やや良	A 2	
71	S X - 33Ne364	土師器	長圓A	22.0	-	-		浅黄緑・に赤い緑	良	B	
72	S X - 33Ne106	土師器	小窓A	12.2	-	-		緑	中や良	C	
73	S X - 33Ne201	土師器	小窓A	-	7.2	-	底部回転条切り	に赤い緑・黄緑	良	B	
74	S X - 33Ne375	土師器	圓A	36.0	-	-		浅黄緑・に赤い緑	良	B	
75	S X - 33Ne208	土師器	圓A	-	-	-		浅黄緑・に赤い緑	良	B	
76	S X - 33Ne132	土師器	圓A	-	-	-		に赤い緑	中や良	B	
77	S X - 33	土師器	圓A	-	-	-		浅黄緑	良	B	
78	S X - 33Ne270	土師器	圓A	-	-	-		に赤い緑・浅黄緑	良	B	
79	S X - 33上附	土師器	圓A	-	-	-		に赤い緑・黄緑	良	B	
80	S X - 33Aベルト北削	土師器	圓A	-	-	-		に赤い緑	良	B	
81	S X - 33Ne126	土師器	圓B	35.0	-	-		浅黄緑・盤	良	B	
82	S X - 33Ne197	土師器	圓B	18.0	-	-		に赤い緑・に赤い緑	良	B	
83	S X - 33Ne2	土師器	圓B	-	-	-		に赤い緑・黄緑	良	B	
84	S X - 33上附	土師器	圓B	-	-	-		盤・浅黄緑	良	B	
85	S X - 33Ne42 - No59 - No51 - No55 - I区下附	土師器	短圓盤	13.8	-	-		に赤い緑・盤	良	A 2	
86	S X - 33Ne34 - No35 - No73 - No101 - No346 - ■I区Aベルト上削	黑色土器	無台板A1	14.5	5.7	3.6	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	に赤い緑	良	A 1	
87	S X - 33Ne167 - ■I区下附	黑色土器	無台板A1	14.7	5.4	4.1	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	浅黄緑	良	A 1	
88	S X - 33上附	黑色土器	無台板A1	15.0	-	-	内面ミカキ・外面走査	灰白	良	A 1	
89	S X - 33Ne34 - No43 - Bベルト直削、■区下附	黑色土器	無台板A1	15.3	-	-	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	浅黄緑	良	A 1	
90	S X - 33Ne187 - No188 - ■区下附、I区、Aベルト北削	黑色土器	無台板A1	16.2	-	-	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	に赤い緑	良	A 1	
91	S X - 33Ne332	黑色土器	無台板A1	-	6.4	-	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	浅黄緑	良	A 1	
92	S X - 33Ne168	黑色土器	無台板B1	-	6.3	-	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	浅黄緑	良	B 1	
93	S X - 33Ne61 - No63 - No64 - No66 - No71 - No74	黑色土器	無台板B1	14.0	5.6	5.3	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	に赤い緑	良	B 1	
94	S X - 33Ne66 - No97 - ■I区・II区下附、Aベルト上削	黑色土器	無台板B1	14.6	5.6	5.6	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	に赤い緑・明褐	良	B 1	
95	S X - 33I区下附	黑色土器	無台板B1	17.6	-	-	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	灰白	良	B 1	
96	S X - 33Aベルト北削41 - ■I区・上附	黑色土器	無台板B2	13.7	5.8	4.4	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ・外面走査	に赤い緑	やや良	B 2	
97	S X - 33Ne217 - No218 - No223	黑色土器	無台板B2	-	6.2	-	体部下平～底部外面へラケズリ・内面ミカキ	に赤い緑	良	B 2	

番号	出土概要	種別	器種	口径	底径	器高	成形・調整 等	色調	焼成	胎土	備考
98	S X-33Ⅲ 区下層	黒色土器	無台杯 B-2?	5.8	-	-	体部下半～底部外周へラ ケズリ、四辺に半牛半 脚	黒褐色～灰白	良	B2?	
99	S X-33Ⅲ 区下層	黒漆器	無台杯	-	8.0	-	底部内側へラ切り	灰白	良		伝渡小泊窯、底部外 周黒漆(門口)
100	S X-33n291	黒漆器	蓋	-	-	-	(例)椅子文類 (例)平行 線文組・同心円文組	灰	良		伝渡小泊窯
101	S D-7 W-6	土師器	無台碗G	-	-	-	底部内側へラ切り	浅黄褐色	良	A1	
102	S Kp-473	土師器	無台碗G	-	-	-	底部内側へラ切り	にじむ・褐	良	A1	
103	S Kp-196	土師器	無台碗G	-	-	-	底部内側へラ切り	にじむ・褐	良	A1	
104	S Kp-60	土師器	長甕A	30.9	-	-	-	にじむ・黄褐色	やや良	B	
105	S Kp-60	土師器	長甕A	25.5	-	-	-	にじむ・橙	良	B	
106	S Kp-198～6ト	土師器	-	20.0	-	-	-	灰白	やや良	B	
107	S Kp-198	土師器	甕B	36.9	-	-	-	浅黄褐色	良	B	
108	S K-200	土師器	甕B	-	-	-	-	反青	良	B	
109	S K-200	土師器	長甕	-	-	-	(例)平行線文	浅黄褐色	良	B	
110	S Kp-470	須恵器	蓋	-	-	-	(例)椅子文類 (例)平行 線文組・同心円文組	灰・灰白	良		伝渡小泊窯
111	SD-6 1サブテンチ B層	土師器	無台碗	11.6	-	-	-	棕	風	D	
112	SD-6 1トレンチB層	土師器	無台碗	13.0	-	-	-	にじむ・橙	良	D	
113	SD-6 1トレンチB層	土師器	無台碗	-	4.8	-	底部内側へラ切り	反青褐色	良	D	
114	SD-6 1トレンチB層	土師器	長甕B	16.0	-	-	(例)平行線文	灰白	やや良	D	底部外周に擦
115	SD-32 2トレンチ下層	土師器	無台碗	-	-	-	-	にじむ・橙	良	D	
116	SD-32 2トレンチ下層	土師器	無台碗	11.8	-	-	-	にじむ・橙	良	D	
117	SD-32 2トレンチ下層	土師器	無台碗	-	6.1	-	底部内側へラ切り	にじむ・黄褐色	良	D	
118	深堀確認記-5トレンチ	土師器	無台碗D	12.3	4.8	3.4	底部内側へラ切り	浅黄褐色	良	A2?	
119	Z-10包含層	土師器	無台碗A	14.0	-	-	-	にじむ・黄褐色	やや良	A	
120	Y-9包含層	土師器	無台碗	-	6.4	-	底部内側へラ切り	黄灰・灰黃褐色	良	A	
121	Z-9包含層	土師器	無台碗	-	5.2	-	底部内側へラ切り	浅黃褐色	良	A	
122	Z-9,10包含層	土師器	長甕A	22.0	-	-	-	棕	やや良	C	
123	Z-9,10包含層	土師器	長甕	30.0	-	-	-	浅黃褐色	やや良	B	
124	Y-9包含層 Z-9, 10包含層	土師器	長甕	-	-	-	(例)平行線文	にじむ・黄褐色	良	B	
125	Y-9包含層	土師器	甕	-	-	-	(例)平行線文	にじむ・橙	良	C	
126	Z-10包含層	土師器	小甕B	14.0	-	-	-	棕	良	B	
127	A 1-10包含層	土師器	小甕	14.2	-	-	-	浅黃褐色	やや良	B	
128	Z-10包含層	土師器	長甕A	30.0	-	-	-	浅黃褐色・灰黃褐色	良	B	
129	Z-9,10包含層	土師器	長甕B	32.0	-	-	-	棕・浅黃褐色	良	B	
130	Z-10包含層	土師器	長甕B	32.0	-	-	-	にじむ・橙	良	B	
131	Z-9包含層	土師器	長甕B	-	-	-	-	にじむ・黄褐色	良	B	
132	Z-9,10包含層	土師器	長甕B	-	-	-	-	にじむ・黄褐色	良	B	
133	II 地区	土師器	長甕B	-	-	-	-	棕	良	B	
134	II 地区	土師器	長甕B	-	-	-	-	にじむ・橙・浅黃褐色	やや良	B	
135	Y-6包含層	黒色土器	無台碗A	-	4.9	-	体部下半～底部外周へラ ケズリ	にじむ・橙	良	A1	
136	Y-9包含層	黒色土器	無台碗A	-	6.5	-	体部下半～底部外周へラ ケズリ	にじむ・橙	良	A1	
137	Y-6包含層	須恵器	無台杯	-	6.0	-	底部内側へラ切り	青灰	良		伝渡小泊窯
138	II 地区	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文 (例)平行 線文組	灰白	良		伝渡小泊窯
139	Z-9包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文 (例)平行 線文組	灰白	良		伝渡小泊窯
140	Z-9,10包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文 (例)平行 線文組	灰白・黄褐色	良		伝渡小泊窯
141	A 1-10包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文 (例)平行 線文組	灰	良		伝渡小泊窯
142	II 地区	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文 (例)平行 線文組	灰白・灰	良		伝渡小泊窯
143	Z-9包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文? (例)平行 線文組・同心円文?	灰・灰白	良		伝渡小泊窯
144	Z-10包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文 (例)平行 線文組	灰	良		伝渡小泊窯
145	Z-10包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文 (例)平行 線文組	灰白	良		伝渡小泊窯
146	C 1-6第B層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)平行線文 (例)平行 線文組	灰	良		伝渡小泊窯
147	Y-6包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)椅子文 (例)平行線文	灰・灰白	良		伝渡小泊窯
148	Z-10包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)椅子文類 (例)同心 円文組	灰白・灰	良		伝渡小泊窯
149	Y-6包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)椅子文類 (例)平行 線文組・同心円文組	灰・灰白	良		伝渡小泊窯
150	B 1-8包含層	須恵器	蓋	-	-	-	(例)椅子文類 (例)放射 状文組	灰	良		伝渡小泊窯

* 器種・胎土および備考に記した分類記号については本文参照のこと

2) 古代以外の土器・陶磁器 (図版42・144)

前項では、深町遺跡で主体となった古代の土器類について報告したが、古代以外の時期の土器・陶磁器類も若干出土しているので、時期別に述べることとしたい。

a 中世 (151~154)

今回の調査で得られた中世に属す土器・陶磁器類は、わずか4点にすぎない。その内容は、中世土器・珠洲・越前・青磁が各1点ずつのみである。出土地点は、おもにC1~E1-4~6グリッドの遺構または包含層に集中する。

中世土器 (151) 腹部下半～底部の破片である。手づくね成形であり、外面には指頭圧痕がみられるが、腹部内面には横ナデの痕跡がみられる。さらに、内面の腹部と底部とを画す見込み部分には強い横ナデが施されて、沈線状をなす。また、底部の器壁は約2mmと薄いが、腹部は上方になるにつれて厚くなっていく。底径は7.9cmと推測される。胎土には、雲母や黒色の微細な砂粒を多く含むほか、径1mm以下で軟質の白色粒や海綿骨針なども混じり、内面にはわずかに煤が認められる。焼成は良好で、全体的に褐色を呈している。SKP-472から出土した。形態からみた製作時期は15~16世紀と考えられる。

珠洲 (152) 摶鉢の腹部下半の破片である。外面にはロクロ成形の痕跡があり、内面には幅4.9cmで10条を1単位とする摺り目が施されている。胎土には雲母のほか、軟質で黒色もしくは白色の微細な砂粒が多く含まれている。焼成はやや不良であり、色調は青灰色を呈する。E1-6グリッド第Ⅲ層から出土した。おそらく中世後期の所産と思われる。

越前 (153) 摶鉢の口縁部片である。外面にはロクロ成形の痕跡が認められる。口縁部の端面はわずかに丸みを帯びているが、内側に傾いているため、断面は三角形を呈している。内面には、端部から1.8cm下位の位置に沈線が施され、摺り目が入れ始められる。これらの形態的な特徴から、16世紀の所産と考えられる [小野1989]。焼成はやや良好である。表面はぶい赤褐色であるが、胎土は淡黄色を呈し、径1mmほどの白色砂粒を多く含んでいる。

青磁 (154) 碗の底部付近の破片である。高台は削り出しによると思われ、径5.0cmと推計される。小片のために断定できないが、おそらく蓮弁などの文様はないタイプと思われる。また、内面の見込み部分には一重の圓線がめぐる。緑灰色を呈する釉薬は、高台内面および疊付け以外に施され、貫入がみられる。胎土は白色微粒子を多く含むが全体的には黒灰色で、高台内面付近は熱を受けにくいためか、灰白色を呈する。焼成は良好である。おそらく龍泉窯の製品で、14~15世紀の所産であろうか。第1次試掘確認調査E-12トレンチ出土である。

b 近世 (155~177)

近世に属す土器・陶磁器類としては、肥前系に生産地を求められるものを中心に、20点ほどの陶磁器が出土している。出土地点は調査区のほぼ全体に散見され、周辺からも第1次試掘確認調査において検出されている。ただし、C1~D1-4~5グリッドの遺構や包含層にやや集中にしているようであるが、それ以外は表土層もしくは盛土層からの出土である。内容は、陶器と磁器がほぼ3:1であり、器種は皿類(小皿)を中心として、碗類(中碗)・鉢類(摶鉢)・瓶類を含んでいる。ここでは、先行研究 [大橋1993・新宿区内藤町遺跡調査会1992・九州近世陶磁学会2000ほか]などをもとにして産地別に報告することとしたい。なお、陶磁器の製作年代は、おおむね17世紀が中心と思われるが、1~2点出土している19世紀以降のものは割愛した。

肥前系陶器 (155~166) 155は、小皿の口縁部～体部片である。ロクロ成形であり、丸形を呈するが、胴部は中ほどが強いナデによってややくびれる。内面および外面の胴部上半まで緑灰色の釉が施される。胎土は緻密で、灰白色を呈している。口径12.3cmと思われる。製作時期は判然としないが、釉薬などから17世紀初頭の可能性がある。

156~158は、「溝縁皿」といわれる折線形の小皿である。156は、口縁部～底部片である。ロクロ成形で、高台は削り出しによる。胎土はにぶい赤褐色で、内面および体部下半まで褐灰色の釉が施される。見込み部分には砂目の痕があり、高台内面にも砂が付着している。焼成は良好で、口径13.4cm、高台径4.4cm、器高4.2cmを計る。B 1~9グリッドからの出土である。157は、口縁部～体部片である。ロクロ成形であり、胎土はにぶい赤褐色で、内面および体部上半の外面に(オリーブ)灰色の釉がみられる。焼成は良好で、口径13.0cmと推測される。第1次試掘確認調査B-7トレンチから出土した。158は、口縁部～体部片である。ロクロ成形で、内面および胴部外面に灰オリーブ色の釉がみられる。焼成はとても良好で、灰白色を呈した胎土は硬質感がある。口径は13.0cmと推測される。同じく第1次試掘確認調査B-7トレンチから出土した。159は、小皿の底部片である。ロクロ成形、削り出し高台であり、高台径5.1cmを計る。内面には灰黄色の釉がみられ、見込みには砂目の痕が認められる。胎土はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。Z-10グリッド出土である。156~159は、溝縁状の口縁部や砂目の痕など、Ⅱ期の特徴を有しており、製作年代は17世紀前半と考えられる。160は、小皿の体部～底部片である。高台径3.5cmを計る。焼成は良好で、胎土は赤褐色を呈する。灰白色的釉薬は全面にみられるが、ムラが目立つ。159や他の小皿に比べても器厚が非常に薄い作りであるため、産地が別である可能性もあるが、胎土などからひとまず肥前系とした。SK p-540出土である。

161~163は、小皿の底部片である。内面の見込みに蛇ノ目釉剥がれが施されており、高台はすべて削り出しによると想われる。161は、高台径5.2cm、胎土は灰白色、釉薬は銅綠釉で、緑灰色を呈する。焼成は良好である。第1次試掘確認調査において表面探集された。162は、高台径4.2cm、胎土は灰白色、釉薬は外側がにぶい黄褐色、内面がオリーブ色を呈する。焼成は良好である。A 1~10グリッドから出土した。163は、高台径4.6cm、胎土は暗灰色、釉薬は褐灰色を呈する。焼成は良好である。C 1~5グリッドから出土した。いずれも17世紀後半～18世紀前半の所産と思われる。

164は、おそらく碗類の底部片と思われる。削り出し高台を伴う。焼成は良好で、胎土はにぶい橙色、釉薬は緑灰色を呈する。釉薬は銅綠釉であると思われるが、肥前系の内野山西窯産である可能性があり、17世紀後半～18世紀前半の所産と思われる。W-4グリッド出土である。165は、中碗の体部～底部である。体部下半は内寄して立ち上がり、上半は屈曲して口縁部に至る腰折形の形態をなす。C 1~5グリッドから出土した。

166は、捕鉢の口縁部の小破片である。ロクロ成形で、捕り目は確認されないが、片口の一部が認められる。内外面には黒褐色の釉が施され、胎土は褐灰色を呈している。焼成は良好である。W-6グリッドから出土した。

その他の陶器 (167・168) 167は、小皿の口縁部～体部の破片である。ロクロ成形で、器高の低い形態である。口径は9.0cmを計る。胎土は浅黄色で、釉薬は淡黄色を呈する。焼成はやや良好である。Y-6グリッドから出土した。168は、小皿の体部下半～底部片である。高台は貼り付けであり、径は4.3cmを計る。焼成は良好で、胎土は灰白色、釉薬は浅黄色を呈する。表面探集資料である。胎土や釉薬から、この2点は瀬戸系の製品と思われ、18世紀の所産である可能性がある。

肥前系磁器（169～173） 169は、中碗の口縁部～体部の破片で、形態は丸形であったと思われる。口径は12.0cmと思われる。外面の染付は一部欠損するが、交叉文などの文様であろうか。また、口縁部内面には、二重圓線が施される。胎土は灰白色で、焼成は良好である。第1次試掘確認調査におけるF地区からの表面探集である。170は、中碗の体部下半～底部の破片である。外面には一重網目文が施される。高台径5.6cmと推計される。胎土は灰白色を呈しており、焼成は良好である。製作時期は17世紀後半であろう。Y-6グリッドから出土した。

171は、小皿の口縁部～底部片で、丸形であったと思われる。高台外縁に1条の圓線がめぐり、底部内面・体部外面・高台内面には草花をモチーフにした染付が描かれる。口径9.2cmと思われる。172は、小皿の底部片である。高台径4.7cmと推計される。胎土は灰白色で、焼成は良好である。Y-9グリッド出土である。

173は、瓶類の体部下半～底部片で、高台径6.7cmと考えらる。胎土は灰白色で、釉薬は明緑灰色を呈しているが、内面と高台疊付は無釉である。焼成は良好である。第1次試掘確認調査におけるC-6トレーニング東側からの表面探集である。

c その他 (174～176)

時期を特定することのできなかった土器類3点をここに報告する。

174は、皿形を呈した素焼きの土器の口縁部～底部で、全体の約3/4が遺存する。ロクロ成形であり、体部はほぼ直線的で、外傾して立ち上がる。口径11.1cm、底径5.4cm、高さ2.5cmと推計される。口縁部の一部にはタールが付着しており、灯明皿として使用された可能性を指摘できよう。胎土には、径1～2mmの褐色粒が多く混じる。浅黄橙色を呈し、焼成はやや良好である。W-7グリッド出土である。本遺跡で主体となる10世紀前葉の土器群からは逸しており、中世の所産である可能性もあるが、今後の類例の増加に期待したい。

175は、口縁部～体部上半で、鉢状の形態であったと思われる。ロクロ成形で、体部は緩やかに内窵して立ち上がり、口縁端部は外側へつまみ出される。口径は17.0cmと推測される。胎土は褐～浅黄色で、焼成は良好である。第1次試掘確認調査E-10トレーニング出土である。

176は、蓋のつまみ部分と思われる。ロクロ成形と思われるが、外面の括れ部分にはミガキが施されている。最大径4.2cm、括れ部分は径3.8cmを計る。内面は黒色である。胎土には、雲母・チャート・石英など、径1mm前後の砂粒が多く混じる。胎土はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。第1次試掘確認調査B-9トレーニングから出土した。

3) 木製品類 (図版43・145)

図化が可能であった木製品は5点ほどにすぎない。それらは、容器の一部や柱根と考えられるので、それぞれ報告したい。なお、184・185・187は出土地点不明である。

漆器 梶 (183) 漆器は1点のみの出土である上、遺存状態もあまり良好ではないが、接合によって梶の口縁部～体部の形態を把握することができた。胴部は内窵して立ち上がるが、中位ほどでわずかに内側へ屈曲する。口径は13.3cmと推計される。樹種は特定できず、木目も明瞭には読み取れないが、横気取りと思われる。内外面ともに黒色漆である。なお、漆器の場合には、おもに高台の形態に基づく変遷が研究されている。183は、高台を欠損しているため、時期を特定することができなかった。SK-108から出土した。

箱 物 (185・186) 箱物として全体の形態が把握できる状態で出土しているものはないが、その部材と考えられる板材が2点出土している。

185は、側板とそれに接合される底板の一部と考えられる。側板は、長方形の柾目板で、長さ13.7cm、幅4.5cm、厚さ0.7~0.9cmを計る。底板も同様に柾目板を利用したもので、厚さ0.5cmを計り、長さは側板に接触する0.9cmのみが遺存する。側板と底板とは、木製釘によって接合される。また、摩滅もあって表面の観察は難航したが、底板の欠損した面の位置から、木裏側が外面と考えられる。側板は、外面の左側下間に長さ0.7~0.8cm、幅2.4cm、右側の上間に長さ0.5cm、幅2.7cmで柄を切り出している。釘穴は、側板の柄上に各2ヶ所、小口面に各1ヶ所穿たれ、側板の側面においても、底板との接合のために2ヶ所、さらに上辺になる面にも1ヶ所あるため、合計9ヶ所に認められる。このうち、柄上の4ヶ所を除いた5ヶ所の釘穴には木製釘が遺るが、上辺と左側の小口の木製釘は頭部が欠損する。なお、上辺の釘の意図は不明である。外面には多数の刃物傷があるほか、側板・底板とも一部に火を受けている。いずれも何の痕跡かは不明である。

186は、柾目板を利用した板材で、長さ37.3cm、厚さ0.6~0.7cmを計る。長方形と思われるが、側面を不整形に欠損し、約5~8cmほどが遺存する。断面にみられる木目の微妙な片寄りから、木表・木裏を考えらるが、おそらく木表と思われる面の実測図下側、木口から0.3cmの位置に、幅0.2cmの溝が設けられている。右側には認められないため、この溝が別の板材との接合するために設けられたものとすれば、底板との接合が想定され、当該資料は側板であった可能性が生じる。中央付近には、桜皮を用いたと思われる綴じ具が外面から差し込まれているが、内面にはみ出る部分は欠損している。内外面には刃物傷が観察されるが、外面は約2~3cm間隔の横位のもの、内面は長さ10~17cmほどの縦位のものが目立つ。

曲 物 (184) 円盤状の柾目板で、曲物の底板もしくは蓋と考えられる。木目に沿って両側を欠損しているため、遺存率は4/5ほどである。径9.4cm、厚さ0.5~0.6cmを計る。また、周縁から約2mmの位置に、1ヶ所のみ綴じ部がみられる。綴じ具には幅6mmの桜皮が用いられ、木目に沿った方向に差し込まれているが、綴じ具は裏面からはみ出ず、板に差し込まれている部分のみが遺存している。おそらく、当初は板を2枚重ねた状態で使用されていたと考えられる。板を重ねていたと思われる裏面に比べ、表面の木目は浮き上がりっている部分が多いが、使用頻度や腐朽の度合いなどを示していると思われる。なお、綴じ部は1ヶ所のみに認められるが、一般的には複数設けられると思われる。そのため、欠損部分に2ヶ所、3等分された位置にあったと考えられよう。A 1-10グリッドから出土した。

柱 根 (187・a) 187は、上部が腐朽したため、下部の約60cmのみが遺存する。最大径は8.3cmを計る。先端部には、4ヶ所に枝の節がみられるが、それらをも払って鋭利に尖らせている。幅2~4cmほどの加工痕によるが、大きさは4方向から削られているため、その形態は四角錐に近い。樹種は特定できないが、スギなどの針葉樹が推定される。

aは、全体的に腐朽し、長さ30cmほどが遺るのみであるが、やはり柱根と考えられる。同じく針葉樹と思われる。SK p-559出土である。

そ の 他 (b・c) おそらく針葉樹の樹皮である。樹幹部ではなく、樹皮のみが発見された。遺存状態としては特異なあり方であり、疑問点として考えられる。SK p-425から出土した。ほかにSK p-527においても同様の状態で出土している。

また、木製品ではないが、おもにI地区の河川跡から種子が出土している(c)。おそらくトチノミと思われる。

4) 石器・石製品類および礫 (図版43-146)

石器・石製品類および特に加工痕の認められない礫をここで一括する。

石 瑚 (188) 凹基有茎鎧である。長さ5.0cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重量3.9gを測る。石材は、やや白濁した石英（水晶）が用いられている。茎部末端・基部先端・身部上半に欠損がみられるが¹、基部は当初から左右非対称であったと思われる。また、身部上半には抉りがみられるが²、欠損後に再加工が施されたと考えられる。横断面の形態は、丁寧な押圧平行剥離により、側縁の厚みが減じられ、凸レンズ状を呈している。形態や法量から、縄文時代晩期～弥生時代に属すと考えられる。Y-9グリッド出土である。

用途不明 (a) 長方形の偏平な形態で、長さ12.2cm、幅10.0cm、厚さ1.9cm、重さ646gを計る。風化が著しいが、安山岩質と考えられる。表面の黒色化は、炭化物が付着していたからと思われる。柱穴出土であるため、木柱の沈下防止などの機能を有していた可能性もある。SK p-150出土である。

礫 (b) 大量の土器廃棄土坑であるSX-33から10点前後の礫が出土している。特に加工は認められないが、土器とともに廃棄されたものであろうか。やはり安山岩質のものが多い。

5) 銭 貨 (図版42-146)

第1次試掘確認調査をも含め、本遺跡からは6点の銭貨が出土している。うち2点は中世の渡来銭で、ほか4点は寛永通寶である。

177は、篆書体による元豊通寶（北宋、1078年初鑄）で、Z-8グリッドから出土した。178は、行書体による元祐通寶（北宋、1086年初鑄）で、SK p-471からの出土である。179～182は、寛永通寶であるが³、いずれも3期（新寛永、1697年初鑄）の所産である〔永井編1998〕。179はZ-10グリッドから出土したが、180～182は表面採集による。

6) 錫冶関連遺物 (図版43・146)

SK-198から、鍛冶に関連する輪の羽口と楕形滓の破片が出土している。SK-198からは土師器も出土していることから（106）、深町遺跡で主体となる古代集落に伴うものと思われる。

羽 口 (189) 基部（羽口先）の一部である。外径9.0cm、内径2.2cmと推測される。胎土には径1mm前後の褐色粒が多く含んでいる。外面の先端から約3cmの範囲は熔融してガラス化しており、周囲も黒色化している。羽口先のガラス化した部分について、詳細な分析が試みられているが〔津野1993〕、今回は小片のため、留保しておきたい。

楕 形 淬 (190) 楕形滓の破片である。番号は2.3cm、1.5cmをそれぞれ計る部分があり、浅い楕状を呈していたと思われる。上面にはやや緩やかだが凹凸があり、径2mmもしくは1cmほどの大小の気孔がみられる。下面には、灰色を呈する鍛冶炉側の粘土が付着している。

註1) 墓書の判読については、相沢 央氏からご教示をいただいた。

2) 越前窯における制作方法から考えれば、成形の方法は「ねじたてロクロ成形」によると思われる〔田中1994〕。

3) 荒川正明氏・安藤正美氏に実見の上、ご教示いただいた。

4 調査のまとめ

今回の発掘調査区域周辺は、過去にも耕地整理が実施されているが、概ね平坦な地形であったこともあり、大規模な切土工法等が行われた痕跡は認められなかった。そのため、遺構の遺存状態等は比較的良好であったと思われる。しかし、土石流によって被災した地点や、強粘性を帯びた土質の地点もあったため、遺構確認作業は極めて難航した。このような状況の中でも、集落の広範囲を発掘できることによる成果は大きく、集落の中心域と考えられる地点については、関係者の尽力により盛土保存をすることもできた。また、本遺跡が南鰐石地区では初めての本格的な発掘調査となり、それまで不明瞭であった様相が、ある程度明らかになったことの意義も大きであろう。

深町遺跡からは、土師器をはじめとする古代の遺物が主体的に出土している。中世や近世の土器・陶磁器類もみられるが、全体の1割未満に過ぎない。遺物包含層や遺構覆土等から出土した遺物の大半も古代の所産であり、本遺跡に営まれた集落も古代に帰属させることができてであろう。出土した土器類には土師器や黒色土器、須恵器がみられるが、土師器が圧倒的に多く、古代の土器類で9割以上を占めている。そして、黒色土器と須恵器がそれぞれ10~20点程という組成であった。これらの出土状況を概観すると、柱穴等から検出された土器類は少なく、遺物包含層からの出土量も多くはない上、ほとんどが小片であった。これに対して、S X-33廐棗土坑からは、無台挽を主体とする多量の土師器と数個体分の黒色土器が、一括的に廐棄された状況で検出されており、本遺跡出土土器類の大半を占めていた。なお、これらの土器類における年代差あるいは時期幅は比較的乏しく、概ね10世紀前葉を前後する年代觀が想定できるものであった。したがって、本遺跡に営まれた古代の集落は、比較的短期間の存続であったと考えられ、遺構の重複がほとんど認められなかつたこととも合致している。

検出された遺構はピット類を主体とし、盛土保存とした未発掘地点を中心とする分布が把握された。したがって、今回の発掘調査区は、遺跡中心域の縁辺部分に相当していると考えられる。また、土坑類はピット類の分布状況と若干差異が認められ、Z-8~9グリッドにおいて集中的に検出されている。調査区内で最も標高の低いI地区においては、自然流路跡が主体をなし、基本的にはピット類や土坑類等の遺構は分布していない。このような様相から、本遺跡における集落の構成を大略的に推定することが可能であろう。すなわち、盛土保存区域を中心に建物跡等が分布し、縁辺付近に相当するZ-8~9グリッド付近に廐棗土坑等を構築、I地区には自然流路が存在していたという景観を想定し得るのである。

また、推定復元された建物跡の形態が、比較的歪んでいることも、本遺跡における特徴として挙げることができよう。のことから、建物の建築技術等が未熟であった可能性も示唆され、上屋構造や耐用年数等にも影響が生じていたと考えられる。建物跡の主軸方向は、II地区では北西-南東方向か、それに対して約90°で直交する北東-南西方向を指向するものが多かった。しかし、III地区では概ね東-西方向を指向する建物跡が多く、大略的な規則性は認められるものの、地点によって異なる様相が看取された。このように、建物跡の主軸方向からは、少なくとも2~3のまとまりに区分できるのであるが、このまとまりが集落内の戸数を反映している可能性もあると思われる。集落の中心域と思われる地点が保存区域になつたことによって、逆に集落全体の詳細な状況を把握することができなくなった感は否めないが、今回の発掘調査から得られた情報を最大限に生かし、古代における南鰐石地区周辺の様相に対して、今後も検証を深めていくことが必要であろう。

IV 片畠遺跡

1 調査

1) 遺跡の立地と微地形

片畠遺跡は、新潟県柏崎市大字石曾根字片畠地内に所在する。県営中山間地域総合整備事業く山室地区に伴い、平成9年に実施された試掘確認調査によって新発見され、周知化された。

鰐石川中流域左岸の標高約40mを測る段丘のほぼ先端に立地し、周辺の沖積地との比高差は約10mである。黒姫山から連なる丘陵が西側に広がるが、これらを開析する沢が多く、鰐石川との合流部付近には、段丘上に扇状地を形成する。片畠遺跡はこのような扇状地上に位置し、南西側の宮田遺跡、南側の中村遺跡と隣接している。また、本遺跡の南端には、丘陵地からの湧水が流れるU字溝がみられ、農業用水等に利用されているが、深町遺跡付近の小規模河川に比べると、水量は桁段に少ない。また、西側の丘陵地には、小規模な地滑りの痕跡が部分的に認められるが、深町遺跡付近のように大規模な地滑り跡はみられない。片畠遺跡の立地は、丘陵地との距離もやや離れており、小規模な地滑り程度であれば、その直接的な被害からは免れたであろう。この点が、深町遺跡の立地する扇状地との大きな差異と理解され、異時期の遺跡が隣接して複数営まれた要因にもなったのではなかろうか。

2) 調査区とグリッドの設定

片畠遺跡は全体で約5,000m²の範囲が想定され、今回の土木工事等の事業範囲内には、約3,200m²が含まれている。本遺跡周辺では、盛土工法により施工される部分が多く、それらを除いた約1,200m²が発掘調査の対象となった。しかし、現況の農道部分東半は遺構等の分布が皆無であったため、事業者の要望により、即時土木工事等が施工された。そのため、実際に発掘調査を実施した面積は、約950m²となった。

調査グリッドは、国家座標軸を用いて、X軸が真北を指すように設定し、宮之下遺跡群の4遺跡すべてが含まれるようにした。大グリッドは10m四方とし、その中に2m四方の小グリッドを設定して25分割した。グリッドの名称は、X軸の起点を1ライン=141.30とし、南に向かって1・2・3…の算用数字を使用した。また、Y軸の起点はAライン=11.40とし、東に向かってA・B・C…X・Y・Z・A1・B1・C1…のアルファベット大文字と算用数字の組合せを使用した。したがって、具体的に表記する場合は、大・小グリッドを組み合わせることによって、「S-56-1」や「A1-58-25」等となる。

3) 発掘調査の経過

片畠遺跡発掘調査における現場作業は、平成10年8月3日から10月5日まで、延べ32日間にわたって実施した。若干の日数を空けながらも、深町遺跡から連続した調査であり、着手日の前日には深町遺跡の現地説明会も開催していた。調査員延べ58人、調査補助員延べ63.5人、作業員延べ279.5人を要した。

調査初日の8月3日、深町遺跡と同じ顔触れが再び集まつた。重機は株式会社中村建設からのパック・ホウ、クローラーダンプ各1台を使用し、調査区の北西端から表土剥ぎを開始し、調査に着手した。調査

区の南端を通る農道は、宮之下集落と水田とを結ぶ唯一の車両通行可能な道路であっため、地元区長らとの協議により、周辺の水田すべての稲刈りが終了した後に、この部分の表土剥ぎを行うこととなった。8月12日には、農道部分を除いて表土剥ぎが終了した。遺構確認も並行して行っており、この日までにはほぼ終了することができた。翌13日からは盆休みのため、作業を5日間中断した。

8月18日には現場作業を再開し、SD-1自然流路跡の発掘等に着手した。8月24日からは、ピット類の半截作業に入った。深町遺跡と同様に、半截後に土層観察等を行い、遺構台帳に記入する方法で発掘を進め、必要に応じて記録写真の撮影や実測図面の作成をした。しかし、8月26日から9月2日までの8日間、台風の影響等による荒天が続き、現場作業を中止せざるを得ない状況となつた。ようやく9月3日に再開できたが、この大雨は周辺の水田における稲刈りにも支障を来し、予定よりも10日以上経った9月8日に、農道部分の表土剥ぎを行なうことができた。その際、東半部分は遺構が皆無であったため、即時土木工事等が施工された。また、9日から11日の3日間、宮田遺跡の第2次確認調査を並行して実施した。

9月16日には、片畠遺跡から検出されたすべての遺構発掘作業を終了した。遺構平面図等は航空写真測量によって作成することとなっていたため、22日を撮影日に決定して準備に着手した。しかし、翌17日は早朝からの豪雨となり、週明けの21日からは台風7号・8号が接近した。関係者の間には、撮影日を再三延期した深町遺跡の苦い記憶が残つたが、今回の事態はもっと深刻であった。9月17日の早朝に降り始めた雨は、時折休息しながらも、10月3日の夜まで17日間も断続的に降り続いたのである。10月4日は日曜日であったが、天候回復の機を逃さず、現場の復旧作業を行なった。復旧は不十分であったが、6日以降は再び雨天が続く予報のため、翌5日を14回目の挑戦として、撮影日に決定した。10月5日午前9時、撮影用のセスナ機が調布飛行場を離陸した。途中に雨雲が多いため、危険な場合は引き返すという約束での離陸であった。そのため、到着予定を1時間以上過ぎた頃、現場は不安感に包まれていった。セスナ機とは直接連絡がとれず、全員が詰めかけた午前11時30分頃、ついに片畠遺跡の上空にエンジン音が鳴り響いた。約30分で撮影を終了したが、着陸後にカメラの機械的トラブルが判明し、関係者は再び頭を抱えた。現像の結果、ネガにはまったく問題がなく、雨に翻弄され続けた発掘調査現場作業がようやく終了した。

4) 基本層序の概要

今回の発掘調査における基本層序は、調査区の西壁と北壁で観察を行つた。この2ヶ所では概ね同様の堆積状況を呈しており、調査範囲全域を共通した層序で捉えることが可能であろう。なお、基本層序の名称については、ローマ数字大文字を使用し、算用数字によって呼称した遺構覆土等と区別した。

第I a層は現表土をなす暗褐色土層であり、水田の耕作土に相当する。第I b層も現表土をなす水田の耕作土に相当し、北壁において顕著な堆積を示している。色調は褐色を呈す。第I c層は北壁の東半部分で確認された暗褐色土層で、水田の耕作土に相当する。第I d層は西壁の北半において顕著で、現表土をなす水田の耕作土である。色調は暗褐色を呈す。第II a層は褐色土層で、西壁と北壁のほぼ全面で把握された。中世～近世を主体とする遺物包含層である。第II b層も遺物包含層に相当し、色調は褐色を呈す。堆積は比較的厚く、北壁において顕著に観察された。第II c層は、第II b層と第III a層の漸移層的な暗褐色土層で、遺物包含層に相当する。北壁の東半部分に顕著である。第III a層は、本遺跡の遺構認面に相当する地山土で、浅黄色を呈す。北壁の中央部分で、顕著に観察された。第III b層はにぶい橙色を呈し、遺構認面に相当する地山土である。西壁のほぼ全面と北壁の西半部分に顕著で、堆積も比較的厚い。また、第IV層はやや砂質を呈する青灰色土層である。

2 遺構

1) 遺構の分布

片烟遺跡からは、ピット類や土坑類を主体に、井戸跡や墓壙、自然流路跡等が検出された（図版43）。ピット類は柱穴である可能性が高いが、建物跡等を推定復元することはできなかった。土坑類は比較的深度の浅いものが大半であったが、井戸跡も1基検出された。また、近世の所産と思われる墓壙も確認され、自然流路跡は調査区の北端から検出された。なお、土器類等の年代を知ることが可能な遺物が出土しなかつたため、詳細な時期を特定できない遺構が大半である。本遺跡の主体的時期は、15～16世紀、17世紀及び18世紀以降の3つがあり、個々の検出遺構がそのいずれの所産であるのか判然としない状況である。

検出遺構の主体を占めるピット類は、S～U-55～57グリッドを中心に分布している。土坑類は調査区西半を中心とし、井戸跡等もみられる。調査区の東端に相当するV-55グリッドからは、近世の所産である墓壙が分布していた。また、調査区北端のR～V-54グリッドからは、自然流路跡が検出された。人为的な施設を構築するには不適な地点であったと思われ、ピット類や土坑類等は認められなかつた。

2) 遺構各説

片烟遺跡からは、総数で114基の遺構が検出された。内訳はピット類101基、土坑類7基、井戸跡1基、近世墓壙4基、自然流路跡1基である。

a 土坑類

調査区西半のS～T-55～57グリッドを中心に分布し、Tグリッド東半以東には認められなかつた。

S K-40土坑 S-56グリッドにおいて確認された。西半が調査区外に及んでいるため、詳細な規模は不明であるが、調査区内における長軸は約216cmで、短軸は約196cmであった。形態は不定形を呈し、深度は約50cmを測る。また、底面標高は38.99mである。遺物等は検出されず、時期や性格等は不詳となつた。覆土は第1層～第2層に区分され、第1層は赤灰色を呈する土層である。橙色土と灰色土を主体とする混合土で、炭化物を少量含んでいた。第2層はa～bに細分されたが、いずれも暗灰色を呈する粘質土であった。第2a層は炭化物を少量、地山土粒を微量に含んでいた。第2b層は炭化物を少量、地山土粒を多量に含み、包含物の差異によって第2a層と区分された。

b 井戸跡

S E-42井戸跡 T-55～56グリッドにおいて確認された。長軸約183cm×短軸約166cmの円形を呈し、底面までの深度は約141cmを測る。また、底面標高は38.00mである。井戸跡としては比較的浅い深度であるが、本地点の湧水点も高い位置にあるため、機能的には充分であったと推定される。土器類等の時期判断が可能な遺物が出土しなかつたため、時期については不詳である。覆土は第1層～第6層に区分され、概ね暗灰色～青灰色を呈していた。第1層は暗灰色土層、第2層は暗黄色土層で、地山土を主体とする混合土である。第3層は暗灰色土層、第4層は暗青灰色土層で、ともに地山土との混合土である。第5層はa～bに細分され、第5a層は青灰色土層、第5b層は緑灰色土層であった。また、第6層もa～bに細分されるが、ともに青灰色を呈する土層である。

c ピット類

S～U-55～57グリッドを中心に分布し、調査区の北端や東端では稀薄である。特にS-56、S-57、

T-56、T-57の4グリッドの交点付近や、T-55~56東半及びU-55~56西半付近では、比較的密度が高くなっている。したがって、これらの地点を本遺跡の中心域として捉えることが可能であるが、柱穴の配列等から、建物跡等を推定復元するには至らなかった。検出されたピット類の多くは柱穴と思われ、木柱や柱痕が確認されたものも認められた。覆土は概ね暗灰色～暗褐色を呈するものが大半であった。

d 墓 墓

V-55グリッドから4基が検出され、出土した錢貨等から近世の所産と考えられる。約4mの範囲内に集中していたことから、近世にはこの地点が墓域であったと推定される。

S X-151a墓壙 V-55グリッドから検出された。S X-151bと切り合い関係が認められ、土層觀察等により、S X-151aの方が古い所産であることが把握された。木製棺等が検出されなかつたため、S X-151b構築の際に移動された可能性が高い。残存部分は長軸約92cm×短軸約60cmの長方形を呈し、底面までの深度は約17cmを測る。また、底面標高は38.84mである。覆土は分層ができず、青灰色土層の第1層のみであった。本層は地山土との混合土で、炭化物を微量に含んでいた。このような堆積状況から、埋葬に伴って一括的に埋土されたと考えられる。

S X-151b墓壙 V-55グリッドにおいて確認された。S X-151a及びS X-152との切り合い関係が認められ、S X-151bが最も新しい所産であることが把握された。長方形の箱形木製棺が検出され、寛永通寶による六道銭を伴っていたことから、近世に帰属する墓壙と考えられる。S X-151aとの切り合いにより、南端の形態が不詳であるが、残存部分は長軸約108cm×短軸約50cmの長方形を呈している。底面までの深度は約58cmで、底面標高は38.44mである。覆土は分層ができず、S X-151aからの連番とした第2層のみが確認された。本層は暗灰色を呈する土層で、灰色粘質土を主体とする混合土であった。粘性はやや強く、埋葬に伴って一括的に埋土された土層と考えられる。

S X-152墓壙 V-55グリッドにおいて確認された。S X-151bとの切り合い関係認められ、S X-152の方が古い所産であることが把握された。円形の桶形木製棺が検出され、他の墓壙とは異なる形態を呈していた。六道銭等の副葬品も認められず、本遺跡から検出された墓壙では、特異な様相となっている。S X-151bとの切り合いによって、南北端の形態等が不詳であるが¹、残存部分は長軸約88cm×短軸約70cmの円形を呈し、底面までの深度は約45cmを測る。底面標高は38.56mである。時期判断の可能な遺物等が出土しなかつたため、詳細な時期は不明であるが、隣接する墓壙の状況から、近世の範疇で捉えられるであろう。覆土はS X-151aからの連番とした第3層～第4層に区分された。第3層は暗灰色土層で、桶形木製棺の痕跡を示す。灰色粘質土を主体とする混合土で、炭化物を微量に含んでいた。第4層は紫灰色を呈し、地山土との混合土である。木製棺を埋葬する際に、一括的に埋土された土層と考えられる。

S X-153墓壙 V-55グリッドにおいて確認された。S X-152の東方約2mに位置し、他の墓壙との新旧関係は不明である。長方形の箱形木製棺が検出され、寛永通寶による六道銭を伴うことから、近世に帰属する墓壙と判断された。長軸約120cm×短軸約66cmの長方形を呈し、底面までの深度は約22cmを測る。また、底面標高は38.80mである。覆土は分層ができず、第1層のみが確認された。本層は暗灰色を呈する土層で、地山土との混合土であった。炭化物を微量に含み、埋葬に伴って一括的に埋土された土層と考えられる。

e 自然流路跡

S D-1自然流路跡 調査区北端から検出され、西から東へと直線的に向う流路跡である。覆土は第1層～第3層に区分され、確認面からの深度は約81cmであった。

第3表 片烟遺跡造構計測表

遺物名	種別	グラフ	形態	寸法(cm)		底面高さ (深さ)cm	土	出土遺物	備考
				長軸	短軸×加幅×厚度				
1	流路跡	S-54鉢	弧状	-	-	-	暗茶褐色土		
3	ピット	S-55	円形	26×	24×	31	39.02	暗茶褐色土 暗灰色粘質土	
6	ピット	S-55	円形	28×	23×	31	38.96	暗茶褐色土 暗灰色土	
7	ピット	S-55	梢円形	19×	16×	24	39.06	暗茶褐色土	
8	ピット	S-55	円形	20×	17×	27	39.02	暗茶褐色土 暗灰色粘質土	
9	土坑	S-55	不定形	52×	48×	66	38.62	暗茶褐色土	木
10	ピット	S-55	円形	29×	26×	23	39.06	暗茶褐色土 暗灰色粘質土	
11	ピット	T-55	円形	42×	34×	45	38.71	暗茶褐色土 暗茶褐色土	
12	ピット	T-55	三角状	30×	26×	33	38.63	暗茶褐色土 暗茶褐色土	
14	ピット	T-55	梢円形	31×	22×	72	38.33	暗茶褐色土	木
15	ピット	T-55	梢円形	70×	40×	7	38.96	暗灰褐色土	繩子
16	ピット	T-55	三角状	54×	31×	22	38.63	暗茶褐色土	
18	ピット	T-55	円形	28×	28×	25	38.84	暗茶褐色土	
19	ピット	T-55	楕丸形	30×	28×	39	38.44	暗茶褐色土	
20	ピット	T-55	梢円形	34×	28×	44	38.73	暗茶褐色土	木
21	ピット	T-55	円形	24×	23×	35	38.92	暗灰褐色土	
25	ピット	T-55	円形	27	20	25	39.04	暗茶褐色土	
26	ピット	T-55	円形	26×	24×	41	38.91	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
29	ピット	S-55	円形	29×	18×	30	39.03	暗茶褐色土	
30	ピット	S-55	円形	16×	15×	25	39.08	暗茶褐色土	
31	土坑	S-55	不定形	156×	106×	15	39.14	暗茶褐色土	
32	ピット	S-55	楕丸形	20×	18×	27	39.11	暗茶褐色土 暗灰褐色粘質土	
33	ピット	S-55	円形	19×	18×	30	39.04	暗茶褐色土 暗灰褐色粘質土	
34	ピット	S-55	円形	31×	28×	34	38.99	暗茶褐色土 暗灰褐色粘質土	
35	ピット	S-55	楕丸形	20×	17×	29	39.09	暗茶褐色土 暗灰褐色粘質土	
38	ピット	S-56鉢	梢円形	26×	19×	31	39.07	暗茶褐色土 暗灰褐色粘質土	
39	ピット	S-56	梢円形	30×	22×	66	38.79	暗茶褐色粘質土 暗灰褐色粘質土	
40	土坑	S-56	不定形	216×	196×	50	38.99	暗茶褐色土	
42	井戸	T-55	円形	163×	166×	141	38.00	暗茶褐色粘質土	磚 木
43	ピット	T-56	楕丸形	45×	40×	46	38.98	暗茶褐色土	
44	ピット	T-56	円形	24×	22×	31	38.99	暗茶褐色土	磚 木
45	ピット	T-55	円形	26×	23×	32	38.89	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
46	ピット	T-55	梢円形	34×	24×	34	38.95	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
47	ピット	T-55	梢円形	21×	14×	40	38.87	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
48	ピット	T-55	不定形	50×	48×	84	38.42	暗茶褐色土 暗灰褐色土	木
50	ピット	T-55	三角状	52×	49×	65	38.74	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
51	ピット	T-55	円形	46×	42×	46	38.84	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
52	ピット	T-56鉢	梢円形	40×	29×	21	39.03	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
53	ピット	T-56	円形	32×	29×	44	38.88	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
54	ピット	U-56	楕丸形	23×	22×	46	38.84	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
55a	ピット	T-56	円形	26×	24×	47	38.86	暗茶褐色土	
55b	ピット	T-56	円形	56×	50×	31	39.01	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
56	ピット	T-56	円形	48×	44×	62	38.69	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
58	ピット	T-56	円形	33×	31×	62	38.81	暗茶褐色土 暗灰褐色土	中世土器窓
61	ピット	T-56	円形	24×	24×	30	39.00	暗茶褐色土	
65	ピット	T-56	梢円形	44×	34×	46	38.92	暗茶褐色土	
67	ピット	T-56	楕丸形	32×	28×	28	38.98	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
68	ピット	T-56	円形	26×	24×	35	38.93	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
69	ピット	T-56	円形	42×	32×	56	38.70	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
73	ピット	U-56	楕丸形	33×	28×	38	38.97	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
74	ピット	T-56鉢	梢円形	34×	22×	54	38.79	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
75	ピット	T-56	円形	48×	42×	37	38.95	暗茶褐色土 暗灰褐色土	
76	ピット	T-56	梢円形	38×	30×	74	38.78	暗茶褐色土	
77	ピット	T-56	円形	18×	15×	31	39.01	暗茶褐色土	

遺構名	種別	グリッド	形態	現 標 <small>(cm)</small> 基盤×埋植×深度	底面高 (cm)	覆 土	出土 遺物	備考
78	ピット	T-56	楕円形	44×34×38	38.99	暗赤褐色土 暗紅色土		
79	ピット	T-56	楕円形	32×28×35	38.98	暗赤褐色土		
80	ピット	T-56	楕丸方形	34×34×43	39.01	暗赤褐色土		
82	ピット	S-56	円形	28×26×51	38.98	暗赤褐色土		
89	ピット	T-56	楕円形	46×28×50	38.95	暗赤褐色土		
91	ピット	S-56	三角状	42×36×51	38.98	暗赤褐色土		
92	ピット	S-56	楕円形	38×28×16	39.26	黑褐色土 暗赤褐色粘質土		
94	ピット	S-56	楕円形	40×28×53	38.94	淡赤褐色土 暗赤褐色土		
95	ピット	S-56	楕円形	34×24×53	38.94	暗赤褐色土 暗灰白色土		
96	ピット	S-56	円形	48×46×44	38.99	暗赤褐色土 暗灰白色土		
99	ピット	S-56	楕円形	29×20×36	39.05	暗褐色土		
102	ピット	S-56	円形	22×22×43	39.05	暗灰白色土		
109	ピット	U-55	円形	25×24×24	38.84	暗灰白色土		
110	ピット	U-55	円形	31×30×24	38.78	暗灰白色土		
111	ピット	U-55	三角状	34×32×24	38.78	暗灰白色土		
112	ピット	U-55	楕丸方形	34×32×38	38.80	暗灰白色土 暗褐色土		
113	ピット	U-55	楕円形	36×24×31	38.85	暗褐色土		
114	ピット	U-55	不定形	20×12×31	38.82	暗灰白色土		
115	ピット	U-55	円形	24×22×37	38.72	暗褐色土		
118	ピット	U-55	楕丸方形	28×22×23	38.87	暗褐色土 暗褐色土		
119	ピット	U-55	楕円形	36×29×39	39.80	暗灰白色土		
120	ピット	U-55	円形	26×24×64	38.80	暗灰白色土		
121	ピット	U-55	楕円形	46×36×32	38.91	暗灰白色土 暗褐色土		
122	ピット	U-55	円形	40×36×25	38.99	暗灰白色土		
123	ピット	U-55	楕円形	29×23×66	38.82	暗灰白色土 暗灰黄色土		
124	ピット	U-55	楕丸方形	36×28×76	38.55	灰褐色土 暗褐色土		
125	土塁	U-55	楕丸方形	44×44×14	39.08	暗灰白色土		
127	ピット	U-55	楕円形	42×30×37	38.85	暗灰白色土		
129	ピット	U-55	楕丸方形	44×40×55	38.72	暗灰白色土 暗灰黄色土		
130	ピット	U-55	三角状	32×36×74	38.55	暗灰白色土 暗灰黄色土		
131	ピット	U-55	楕丸方形	26×24×64	38.84	暗灰白色土 暗褐色土		
132	ピット	U-55	楕円形	32×26×15	39.11	暗灰白色土		
137a	ピット	U-55	不定形	20×16×35	38.92	暗灰白色土		
137b	土塁	U-55	三角状	36×34×16	39.18	暗灰白色土		
139	ピット	U-56	円形	38×34×58	38.79	暗赤褐色粘質土 暗褐色粘質土		
141	ピット	U-56	円形	28×26×48	38.81	暗灰白色土 暗褐色土		
142	ピット	U-56	円形	36×34×56	38.73	暗赤褐色粘質土 暗灰白色粘質土		
144	ピット	U-56	円形	29×28×49	38.81	暗赤褐色粘質土 暗灰白色粘質土		
147	ピット	U-56	楕円形	30×26×44	38.82	黄褐色粘質土 暗赤褐色土		
148	ピット	U-55	円形	24×21×16	38.87	暗灰白色土		
149	ピット	U-55	円形	22×20×13	38.87	暗灰白色土		
150	ピット	U-55	円形	22×20×25	38.72	暗灰白色土		
151a	墓壙	V-55	其方形	92×60×17	38.84	青褐色土		
151b	墓壙	V-55	其方形	108×50×58	38.44	暗灰白色土	鉢 瓦 木	
152	墓壙	V-55	円形	88×70×45	38.58	暗灰白色土 紫褐色土	鉢 瓦 木	
153	墓壙	V-55	長方形	120×66×22	38.80	暗灰白色土	鉢 瓦 木	
156	ピット	S-57	円形	41×34×23	39.20	黑褐色土		
159	ピット	S-57	円形	34×30×23	39.18	暗灰白色土 淡赤褐色土		
160	ピット	S-57	円形	42×40×55	38.88	暗灰白色土 暗褐色土		
161	ピット	S-57	楕丸方形	34×30×34	39.10	暗灰白色土		
163	ピット	S-57	楕円形	36×30×46	39.02	暗灰白色土 暗褐色土		
164	ピット	S-56	円形	38×32×75	39.76	暗灰白色土		
166	ピット	S-56	楕円形	56×46×57	39.83	暗灰白色土 暗褐色土		
168	ピット	S-56	円形	20×20×22	39.27	暗灰白色土		
170	ピット	S-56	三角状	35×26×43	39.05	暗灰白色土		
171	ピット	S-56	楕円形	34×26×69	39.84	暗灰白色土		
174	ピット	T-57	三角状	26×22×39	39.19	暗灰白色土		
176	ピット	T-57	円形	36×32×17	39.32	暗灰白色土 暗褐色土		
178	土塁	T-57	円形	140×122×17	39.34	暗灰白色土		
181	ピット	T-56	楕円形	34×24×34	39.08	暗灰白色土 明褐色粘質土		

3 遺 物

片畠遺跡からは、全体でテンバコ約10箱分の遺物が出土している。その内容は、容量の大きい柱根などによって大半が占められ、土器・陶磁器類はわずか1箱分にも満たない。本節では、出土遺物を土器・陶磁器類と柱根に分類して説明するが、この他に井戸跡と推定されるSE-42および調査区東部から検出された墓壙の出土遺物をそれぞれ報告したい。

1) 土器・陶磁器類 (図版54・155)

今回の調査で得られた土器・陶磁器類は、土師器・中世土師器・珠洲・近世陶磁器と多岐にわたるが、それぞれの出土量は少なく、明確な遺構に伴って出土したものは中世以降のわずか数点にすぎない。ここでは、種別に報告する。

土 師 器 (1) 1は、壺形土器に分類される古墳時代の土師器の口縁部である。口縁部は外反して立ち上がるが、中ほどで屈曲して端部に至る。胎土はにぶい橙色で、雲母や石英など、径1.5~2mmの砂粒や褐色土粒が多く混じる。焼成は良好で、口縁端部の一部に薄い煤がみられる。当該資料は、T-55-21~22グリッドにおいて、ブロック状に出土した土器片を接合したものである。ほかに近い時期の土器類は見受けられず、土石流などによって本遺跡に混入した可能性がある。形態などから推測すれば、古墳中期に属するものであろうか。

中世土師器 (a・b) 細片が數点検出されている。aは、皿の口縁部片である。手づくねによる薄手の作りで、褐灰色の胎土には、雲母や白色の微細な砂粒を多く含んでいる。焼成は良好で、内面にはやや厚い煤が付着している。製作時期は、15~16世紀の可能性がある。bは、aと同一個体と考えられる皿の底部片である。外面には指圧圧痕がみられ、内面にはaより薄いものの、やはり煤が付着している。a・bともSK p-58から出土した。

珠 洲 (2・3) 2は、擂鉢の口縁部～胴部上半の破片である。胴部は外傾して直線的に立ち上がるが、口縁部付近でやや内寄り、端部は外方につまみ出される。端面は平坦につくられ、最低7条と思われる櫛目によって波状紋が描かれている。この破片からでは、胴部内面の擢り目は見受けられない。胎土には長石粒や雲母粒がやや多く混じるほか、海綿骨針がみられる。口径は36.0cmと思われ、灰色を呈し、焼成は良好である。形態から、第V期(14世紀後葉～15世紀前葉)の所産と思われる〔吉岡1994〕。表面採集による。3は、擂鉢の底部片である。底径は14.0cmと推計される。胎土は2に類似し、焼成も良好である。W-54グリッド包含層から出土した。

肥 前 (c・d) 検出されたのはいずれも磁器の細片であり、図化は困難であった。cは碗、dは瓶の破片と考えられる。17世紀後半頃の所産と思われる。とともに第1次試掘確認調査前田A-5トレンチ出土である。

越中瀬戸 (4) 壺またはサヤの胴部下半～底部片である。内面には、小刻みなロクロナデの痕跡が顕著に認められる。また、底部切り離しは回転系切りによる。浅黄橙色を呈する胎土はやや粗く、白色砂粒が多く混じる。内外面には、暗赤褐色の鉄釉が施される。製作時期を明確にはできないが、越中瀬戸が越中以外にも流通するのはおもに17世紀であることが参考になろう〔宮田1997〕。第1次試掘確認調査前田A-11トレンチ出土である。

番号	出土遺構	形態	径	備考	番号	出土遺構	形態	径	備考	番号	出土遺構	形態	径	備考
17	64	A-1カ	5		26	9	A-3	9		35	80	A-?	10	
18	54	A-1カ	9		27	120	A-3	9	樅架木	36	164	A-?	10	樅架木
19	47	A-2	7		28	94	A-3	10	樅架木	37	82	A-?	10	
20	21	A-2	8		29	68	A-3	10	樅架木	38	20	B-1	14	樅架木
21	131	A-2	8	樅架木	30	171	A-3	10		39	88	B-3	17	
22	115	A-2	9		31	78	A-3	11	樅架木	40	49	B-?	14	
23	93	A-2	9		32	14	A-3	11		41	90	C-3	24	
24	84	A-3	8		33	58	A-4	10		42	49		11	角材
25	130	A-3	8	樅架木	34	76	A-?	8	樅架木					

第4表 片煙遺跡出土柱根一覧

径 単位: cm

2) 柱根 (図版56・155・156)

今回の調査では、26点の柱根が出土し、その一覧を第4表に掲載した。樹種については、鑑定を経ていないために断定はできないが、ほとんどがスギなどの針葉樹によって占められるようである。また、いずれも芯を用いた芯柱であるが、径によってA類 (11cm以下)・B類 (13~17cm)・C類 (20cm以上) に分類した。さらに、加工された下端部の形態により、3方向以上から加工して先端を銳利にしたもの (1類)、2方向から加工して先端を「一」字にしたもの (2類)、おおむね2方向から加工して先端の角度を緩やかにしたもの (3類)、1方向から平坦に切断したもの (4類) に分類される。これらの組合せから形態分類が可能であるが、樅架木と考えられるものがA-2・3類によって構成されることから、A-2・3類はすべて樅架木材の可能性がある。ただし、A-4類とした33は、同遺構から中世土器 (図版155-a・b) も出土しているので注意を要する。この他、22は遺存状態が良好ではないが、芯柱ではなく、約11cm角の角材と考えられ、部分的に面取りされている。

3) SE-42出土遺物 (図版54・157)

SE-42は、T-55~56グリッドで検出された井戸跡と思われる遺構である。土器・陶磁器類は出土しなかつたが、木製による井戸枠の部材や礫などが発見されているので、本項にて一括して報告したい。

井戸枠 (20・e~g) 4点の木製品が出土している。eは上層、f・gは下層から検出されたが、e・fは遺構の壁面上において横位の状態でそれぞれ検出された。20は、腐蝕のために原形をとどめているのは下端部の約40cmに限られるが、発見段階ではe~gの内側を縦位の20が直交していたことが観察された。このような出土状況から、これら4点はともに井戸枠を構成していた部材と考えられる。20は、径15cm、芯を用いた部材で、端面には切断した際の加工痕を残す。eは遺存する長さ134cm、径5~7cm、fは長さ130cm、径4~6cm、gは長さ63cm、径2cm、腐蝕のため加工痕は認められない。

竹片 (h) 下層付近から1点出土した。切断して節を底部とした容器状の形態をなすが、具体的な用途などは不明である。

礫 (i) 最下層付近から1点のみ出土した。形態はおおむね扁平であり、不整な長方形を呈している。長さ13.2cm、幅7.9cm、厚さ3.5cm、重量585gである。風化が著しいため、石材を特定することはできないが、安山岩の可能性がある。井戸跡から礫が発見される例は比較的多く見受けられるが、当該資料もその一例と推測される。

4) 墓壙出土遺物 (図版54・55・158)

墓壙もしくはその可能性がある遺構は4基検出されたが、うち3基から、棺桶と考えられる木製容器と、六道銭と思われる銭貨が出土した。ここでは出土遺構別に紹介したい。

また、出土した銭貨は六道銭とするにはいずれも枚数が不足する。墓壙底面は3基とも現地表面から比較的浅い深度にあり、表面採集された5の存在なども考えれば、散逸した遺物も想定する必要があろう。なお、銭貨は第5表にまとめたが、兵庫埋蔵鉄査会の成果〔永井編1998〕に基づいて記載した。

a SX-151b (8~12)

木製容器と銭貨が出土した。銭貨から17世紀末以降の年代観が得られる。

木製容器 (8) 箱形の容器で、底板とわずかに側板の一部が遺存する。腐蝕のため、底板および側板を構成する部材はそれぞれ接合せず、詳細は明らかではない。ただし、発見段階での各部材の配置から、底板は幅36cm、遺存部分から長さ72cm以上、厚さ1cmと推測される。側板はごく部分的に遺るのみだが、厚さ約0.9cmを計る。各部材はいずれも長方形の柾目板で、底板は4枚からなるが、幅は8~10cmとやや不揃いである。釘や釘穴あるいは何らかの加工痕などは確認されず、各部材の結合方法は不明である。

銭 貨 (9~12) 4点検出された。木製容器底板の北東隅にまとめて出土し、9と10、11と12がそれぞれ重なっていた。すべて寛永通寶である。11の線文が不鮮明であるが、11以外の3点はすべて3期(新寛永、1697年初鋤)の所産である。

b SX-153 (13~16)

SX-153と同様に、木製容器と銭貨が出土した。やはり、銭貨から17世紀末以降と思われる。

木製容器 (13) 箱形の容器で、底板とわずかに側板の一部が遺存するが、腐蝕は8よりも著しい。発見時の各破片の配置から、底板は幅40cm、長さは遺存部分から64cm以上、そして厚さ1~1.2cmと推測される。側板はごく部分的に遺るのみで、厚さ0.8cmと考えられる。各部材はいずれも長方形の柾目板で、底板は5枚ほどの板材で構成されている。また、8と同様に、各部材の結合方法は不明である。

銭 貨 (14~16) 4点検出された。うち1点は遺存状態が良好ではなく、原形をとどめていないため、銭種を明らかにすることはできないが、おそらく4点とも寛永通寶と思われる。木製容器底板の中央からやや北側の位置にまとめて出土し、15と16および14ともう1点がそれぞれ重なって検出された。線文の字体を観察できる3点をみると、14は1期(古寛永、1636年初鋤)、15・16は3期の所産である。

c SX-152 (7)

銭貨が確認されず、他の2基と形態の異なる木製容器のみが出土した。墓壙と断定はできないが、ひとまず本項にて扱う。また、層位的には重複するSX-151bに先行する。

木製容器 (7) 桶形の容器で、底板と部分的に側板が遺存している。底板は、表面は腐蝕しているが、径45.1cm、厚さ1.0~1.7cmで、3枚の柾目板が結合されて作られていることがわかる。互いの結合面には、2ヶ所ずつ対応する径約4mmの孔が穿たれ、結合に木製釘が用いられていたと考えられる。側板は幅6~9cm、厚さ約1.1cmの柾目板が用いられているが、長さは18cmほどしか遺存していない。釘穴などは確認されず、底板との結合はタガのみであった可能性がある。

番号	出土遺構	鉱名	時期	備考
5	表面採集	寛永通寶	3	
9	SX-151b	1 寛永通寶	3	
10		2 寛永通寶	3	
11		3 寛永通寶 不明		
12		4 寛永通寶	3	
14	SX-153	1 寛永通寶	1	
なし		2 不明		形態をとどめない
15		3 寛永通寶	3	
16		4 寛永通寶	3	

※時期 1期:1636年初鋤 2期:1668年初鋤 3期:1697年初鋤
〔永井編 1998〕

第5表 片端遺跡出土銭貨一覧表

4 調査のまとめ

片畠遺跡において、今回発掘調査を実施した区域の周辺では、過去にも耕地整理が行われている。また、南端部分には農道が通っており、過去の土木工事等による影響が懸念されていた。しかし、実際にはこれらの影響は極めて軽微であり、遺構の遺存状態等は良好であったと思われる。宮之下遺跡群として発掘調査を行った3遺跡の中では、最も調査面積が小さいこともあり、全体的な集落構成を把握するには至らなかったが、中世以降の複数の時期に営まれた遺跡であることが判明した。深町遺跡と宮田遺跡が比較的短期間に形成されたと思われるのに対し、特異なあり方を呈しているといえよう。

本遺跡からは古式土師器や中世土師器、珠洲、近世陶磁器等が出土し、多岐にわたる内容の遺物が得られた。しかし、それぞれの出土量は少なく、明確な遺構に伴って検出されたものも、中世以降の数点でしかない。そのため、本遺跡は15~16世紀、17世紀及び18世紀以降を主体とし、それぞれの時期に小規模に営まれていたと推定されよう。柱穴と思われるピット類は101基が検出されたが、その配列は不規則であり、建物跡等を推定復元することもできなかった。調査区の東側には近世墓塚が営まれ、他の遺構分布も認められないことから、当初から居住区域のソトに位置づけられていた可能性が推定される。また、調査区北端には自然流路跡が存在するため、遺構群が連続的に北方にまで至るとは考えられない。一方、調査区の中央付近から西側にかけては、遺構の分布が比較的多く認められる。そのため、調査区の西方には遺跡の延長が及ぶ蓋然性は高く、本遺跡の形成過程や集落構造等を総合的に検証していくためには、今後の成果に期するところが大きいといえよう。

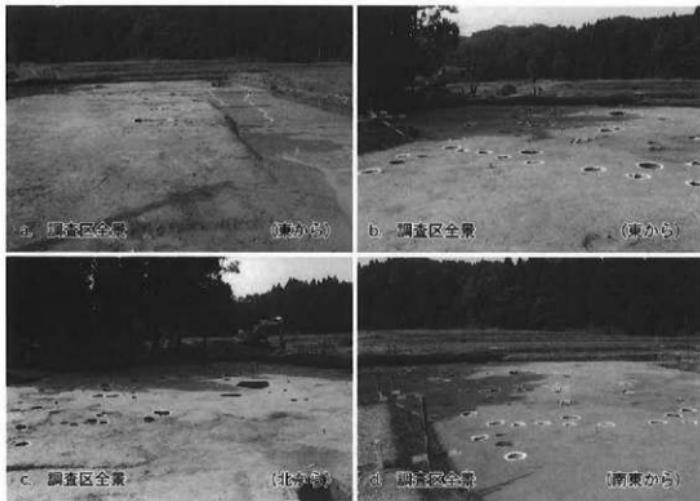


写真2 片畠遺跡調査区全景

V 宮田遺跡

1 調 査

1) 遺跡の立地と微地形

宮田遺跡は、新潟県柏崎市大字石曾根字宮田地内他に所在する。県営中山間地域総合整備事業く山室地区に伴い、平成9年に実施された試掘確認調査によって新発見され、周知化された。

鰐石川中流域の左岸に形成された段丘上に立地し、標高は約45mを測る。周辺の沖積地との比高差は約15mである。西側には黒姫山から連なる丘陵が広がり、急激に標高を高めるが、これらを開析する沢も多く、鰐石川との合流部付近には、段丘上に扇状地を形成している。宮田遺跡は、このような扇状地上に立地し、丘陵部の東端と扇状地とが接する位置に相当するのである。また、今回の調査対象区域内における地形は、西側の丘陵地から東側の沖積地へ向かって東傾しており、西端付近の標高約45.5mに対して、東端付近の標高は約42.0mで、約3.5mの高低差が認められる。なお、同じ扇状地上には、北東側に片烟遺跡、南東側に中村遺跡が所在し、互いに隣接している。

本遺跡のほぼ中央付近には農道が通り、その両側には丘陵地からの湧水が流れるU字溝が設置され、農業用水として利用されている。しかし、水量は比較的少なく、周辺の丘陵地には大規模な地滑り等の痕跡はみられない。本遺跡からやや離れた地点で、小規模な地滑りの痕跡等が認められるものの、遺跡の所在地にまで直接的な被害を及ぼす規模とは考えられない程度のものである。したがって、深町遺跡の立地との比較において、この点が大きな差異となっており、異時期の遺跡が隣接して複数営まれた要因にもなったのではなかろうか。

2) 調査区とグリッドの設定

宮田遺跡は全体で約9,000m²の範囲が想定され、その全域が土木工事等の施工範囲内に含まれているが、盛土工法等により遺跡への影響が軽微な部分もあるため、それらを除いた約8,000m²が発掘調査の対象となった。しかし、調査対象区域内の中央付近を通る農道の両側には、2本のU字溝が設置されており、農業用水として利用されている現状であった。そのため、掘削による崩落を防止する必要があり、U字溝の前後約1m弱を発掘範囲から除外した。また、表土剥ぎが進んだ時点で、U字溝に挟まれた地区（II地区）の西端においては、自然流路跡だけしか検出されないことが明確になったため、この地点の調査面積を縮小し、効率化を図った。そのため、実際に発掘調査を実施した面積は、約6,800m²となった。

調査グリッドは、国家座標軸に沿って、宮之下遺跡群の4遺跡すべてが含まれるように設定した。したがって、グリッドのX軸が真北を指し、グリッド名称がそのまま各遺跡間の位置関係をも示している。大グリッドは10m四方とし、その中に2m四方の小グリッドを設定して25分割した。グリッドの名称は、X軸の起点を141.30とし、そこを1ラインとして、南に向かって1・2・3…の算用数字を使用した。また、Y軸の起点は11.30とし、そこをAラインとして、東に向かってA・B・C…X・Y・Z・A1・B1・C1…のアルファベット大文字と算用数字の組合せを使用した。したがって、具体的に表記する場合は、

大・小グリッドを組み合わせることによって、「H-62-9」や「A1-67-25」等となる。

また、グリッドとは別に、調査区をⅠ～Ⅲ地区に区分して呼称することも行った。便宜上用いた概念的な区分であり、調査区の中央付近を通る2本のU字溝を境界とした。Ⅰ地区はU字溝の北側の地区、Ⅱ地区は2本のU字溝に挟まれた地区で、現況が農道であった部分、Ⅲ地区はU字溝の南側の地区を指す。

3) 発掘調査の経過

宮田遺跡の発掘調査における現場作業は、平成11年5月11日から7月25日まで、延べ50日間にわたって実施した。調査員延べ118.5人、調査補助員延べ143.5人、作業員延べ737.5人を要した。

調査初日には調査担当以下、調査員・調査補助員5名と、社団法人シルバー人材センターへ委託した作業員21名が現地に集まり、文化振興課長の挨拶を皮切りに調査に着手した。

調査初日からは表土剥ぎを中心とし、株式会社石塚組からのパック・ホウ1台、クローラーダンプ2台によって作業を行った。表土剥ぎはⅢ地区から着手し、次いでⅠ地区を行い、現況が農道のⅡ地区は最後に行方針とした。また、遺構確認作業は、表土剥ぎが終了した部分から順次行つていった。5月24日にはⅢ地区の表土剥ぎ及び遺構確認が終了、6月4日にはⅠ地区、9日にはⅡ地区の表土剥ぎも終了した。グリッド杭打設も逐次行い、11日には調査区全域の遺構確認作業が終了した。6月14日からは、いよいよ本格的に遺構の発掘作業を開始したが、この頃から梅雨の長雨が続き、思うように調査が進まない状態となつた。そのため、晴天の日には、辺りのまだ明るい午後7時頃まで調査員らが作業を行い、少しでも遅れを補おうとする日が数日続いた。検出された遺構の大半はピット類であったため、半截を行つた後、土層観察をして、遺構台帳の作成。その後、必要に応じて土層断面の写真撮影や実測図面等を作成し、完掘を行う手順をとつた。柱穴列については隨時検討を加え、建物跡等の推定復元を行い、列ごとに土層図もしくは断面図を作成した。また、Ⅱ地区を中心とする地点では、大規模な自然流路跡が検出されたため、サブ・トレチを数ヶ所設定し、発掘を行つていった。この頃にはSD-346溝跡やSX-294集石土坑等の調査も行い、23日には遺物出土状況の微細図作成のため、株式会社オリスが簡易タワーの先端に測量用カメラを取り付けた器材を現場に持ち込み、図化用写真の撮影を行つた。

7月16日にはすべての遺構発掘作業を終了した。遺構の平面図については、当初から航空写真測量によって作成することとしていたため、撮影日を21日に設定し、その準備のための全体清掃作業等を行つていった。遇明けの19日は雨天のため作業を中止し、20日は海の日の祝日であったが、作業を行つて撮影準備を整えた。しかし、撮影当日の21日は荒天となり、撮影を延期。現場内の復旧には2～3日かかる状態となつた。関係者の間では、昨年の片畠遺跡発掘調査で、発掘終了から航空写真撮影までに19日間も要した苦い経験が思い出されたため、1日でも早く撮影を終了させる方針とした。そのため、撮影日を25日の日曜日に再設定し、準備を行つた。7月25日午後12時30分頃、無事に現場に到着した撮影用セスナ機により、約1時間で撮影を終了。これにより、宮田遺跡発掘調査の現場作業がすべて終了した。なお、8月1日には地元の住民を対象に現地説明会を開催し、約60人の見学者が訪れた。翌2日には地元の子供会による見学会を行い、約35人の児童や保護者らが宮田遺跡を訪れた。

4) 基本層序の概要

今回の発掘調査における基本層序は、Ⅰ地区西壁とⅢ地区西壁の2ヶ所で観察を行つた。Ⅱ地区については、現況が農道であり、その影響による盛土等が顕著であったため、基本層序の観察には適さないと判

断した。Ⅰ地区とⅢ地区は若干距離を隔てていることもあり、堆積状況には差異が認められた。また、Ⅲ地区西壁の北端部分では、重機によってトレーナーを掘削し、遺構確認面以下の層序を確認した。基本層序の名称は、ローマ数字大文字を使用し、算用数字によって呼称した遺構覆土等と区別した。さらに、層序の細分にはアルファベット小文字を用い、ローマ数字の後に付して、「第Ⅲ a 層」等と表記した。

Ⅰ地区 第Ⅰ層は現表土をなす層で、小礫を含む。色調の相違から第Ⅰ a 層～第Ⅰ c 層に細分された。色調は暗褐色及び褐色を呈す。第Ⅱ層は灰色～暗灰色を呈する粘質土で、第Ⅱ a 層～第Ⅱ i 層に細分される。概ね本地区西壁の南側から中央付近にかけて顕著で、SD-346溝跡の埋没過程に関わる沖積作用の痕跡を示すと考えられる。小礫を含み、第Ⅱ c 層及び第Ⅱ e 層からは、古代の遺物が数点検出された。しかし、遺物包含層を形成する程の出土量は認められず、これらの遺物は後世の混入等によるものと判断された。第Ⅲ層は灰色～暗灰色を呈する粘質土で、第Ⅲ a 層～第Ⅲ f 層に細分された。小礫及び地山土粒を含み、本地区西壁の北側で顕著な堆積状況が把握された。そのため、大略的には第Ⅱ層と主要な堆積域を異にしていると理解され、第Ⅱ層堆積以前には、本地区北側で比較的活発な冲積作用があったことを示している。第Ⅳ層は暗青灰色及び暗灰色を呈する粘質土で、古代の遺物を包含し、本地区における遺物包含層に相当する。第Ⅳ a 層～第Ⅳ c 層に細分され、炭化物、小礫を多く含んで、生活等の痕跡が比較的色濃い。第Ⅴ層は地山土に相当し、黄灰色、青灰色、緑灰色を呈す。第Ⅴ a 層～第Ⅴ h 層に細分され、第Ⅴ a 層はシルト層、第Ⅴ b 層は砂礫層、第Ⅴ c 層は砂層で、第Ⅴ d 層～第Ⅴ h 層が粘質土層である。第Ⅴ a 層上面において古代を主体とする遺構が検出され、本地区における遺構確認面と認識された。しかし、本地区西壁の北側では、第Ⅴ a 層の堆積が概して不顯著であり、代わりに第Ⅴ b 層～第Ⅴ h 層の堆積が認められた。これらの層は分布範囲が狭く、比較的短期間に堆積した様相を呈している。第Ⅲ層が顕著な地点と概ね一致することから、本地区北側では比較的活発な冲積作用が断続的にあったと考えられる。第Ⅵ層は青灰色及び緑灰色を呈し、第Ⅵ a 層～第Ⅵ c 層に細分される。第Ⅵ a 層は砂質土層、第Ⅵ b 層はシルト層、第Ⅵ c 層は粘土層である。本地区西壁の北端では、第Ⅴ a 層の堆積が認められなかったため、第Ⅵ a 層を遺構確認面とした。

Ⅲ地区 第Ⅰ層は現表土をなす層であり、水田に伴う畦畔のための盛土に相当する。第Ⅰ a 層及び第Ⅰ b 層に細分され、色調は褐色、暗褐色を呈す。第Ⅱ層は暗青灰色を呈する砂質土層で、炭化物及び砂礫を含む。第Ⅱ a 層～第Ⅱ c 層に細分される。本地区西壁の南半に顕著であるが、北半では堆積が認められない。第Ⅲ層は青灰色粘質土層で、第Ⅲ a 層及び第Ⅲ b 層に細分される。炭化物及び砂粒を含む。本地区西壁の南半から中央付近にかけて認められるが、北端付近での堆積は観察されなかった。第Ⅳ層は黄灰色を呈する粘質土層で、第Ⅳ a 層及び第Ⅳ b 層に細分される。炭化物、砂粒を含み、本地区西壁のほぼ全面で把握される。第Ⅴ層は灰白色及び灰色を呈する粘質土層で、第Ⅴ a 層、第Ⅴ b 層に細分される。炭化物及び砂礫を含む。第Ⅵ層は青灰色砂質土層で、地山土に相当する。本層上面において、古代を主体とする遺構が検出されたことから、本地区における遺構確認面と判断された。第Ⅵ a 層～第Ⅵ c 層に細分される。第Ⅶ層は青灰色を呈する粘質土層で、第Ⅶ a 層～第Ⅶ c 層に細分され、砂粒を含む。第Ⅷ層は黒色植物腐植土層で、縄文時代中期～後期の遺物を包含する。そのため、本層の深度で周辺の掘削を行ったが、極めて局地的な分布を呈し、本地区西壁の北端付近でのみ認められる層であった。おそらく、縄文時代の中期～後期において、部分的に沼状等の環境となり、腐植物が堆積するとともに、遺物が廻棄されたものであろう。第Ⅸ層は緑灰色粘質土層で、砂礫を含む。第Ⅸ a 層及び第Ⅸ b 層に細分される。また、第Ⅹ層は緑灰色砂礫層で、段丘面を形成する基盤層に相当すると考えられる。

2 遺構

1) 遺構の分布

宮田遺跡からは、ピット類や土坑類を主体に、溝跡や自然流路跡等が検出された（図版58）。ピット類は主に建物跡に伴う柱穴であると考えられるが、すべてを推定復元することはできなかった。土坑類は比較的深度の浅いものが大半であったが、井戸跡や集石土坑も検出された。また、湧水等を導水したと考えられる溝跡や、方形区画を意図した溝跡等も認められた。自然流路跡はII地区を中心とする地点を中心に検出され、時期の異なる流路が複雑に切り合っている様相が把握された。これらの遺構群からは、土器類等の年代を知ることが可能な遺物が出土しなかつたため、詳細な層属時期を特定できないものが大半である。しかし、本遺跡の主体は、概ね9世紀末葉前後に比定可能であり、検出遺構の多くもその前後に営まれたと推定できよう。なお、今回の発掘調査区は、中央に位置する2本のU字溝が崩落することを避ける必要があったため、I～III地区に分割して調査を行った。また、I地区は東西に二分割されたが、未発掘部分は盛土工法により保存された区域である。

検出遺構の大半を占めるピット類や土坑類は、I地区とIII地区を中心に分布している。I地区ではG～H-60～61グリッド、I-57～59グリッド、I-62グリッド、K～M-57～58グリッドで、特に分布密度が高い。また、III地区ではE～H-66グリッド、I-65～66グリッド、K～L-63～65グリッド、M～N-63～64グリッドにおいて、遺構密度が高い状況であった。しかし、本遺跡の主な現況であった水田は、斜面の傾斜に合わせて階段状に造成されており、著しい切土が行われた地点も多い。そのため、今回の発掘調査で把握された遺構の分布状況は、過去の耕地整理等の影響から免れた地点において遺構密度が高くなっている可能性が高く、形成当時の状況を反映するものではないと考えられるのである。なお、II地区は自然流路跡を主体としていた。この地点の現況は農道で、その両側には丘陵からの湧水が流れるU字溝が設置され、現在も農業用水として利用されていた。また、II地区は他の地区に比べて標高が約1m低く、流水が連絡とあるため、居住施設等の構築には不適な環境であったと考えられる。

2) 遺構各説

宮田遺跡からは、総数で559基の遺構が検出された。内訳はピット類523基、土坑類11基、井戸跡1基、溝跡19基、自然流路跡5基である。また、柱穴の配列等を検討し、11棟の掘立柱建物跡を推定復元した。

a 掘立柱建物跡

I地区とIII地区を中心に分布するピット類の配列等から、掘立柱建物跡を推定復元した。検出されたピット類は523基であるため、単純な算出では80～90棟の建物跡が形成されていた可能性もある。しかし、確証が得られないなどの事由により、最終的には11棟を推定復元した。建物跡の主軸は、東～西方向を指向するものもみられるが、大半が北～南方向を指向しており、本遺跡における大略的な規則性が窺える。なお、建物跡に付した遺構番号は、ピット類や土坑類等との混同を避けるため、1001番から使用した。

S B-1001建物跡 F～G-65～66グリッドにおいて確認された。SK p-38・40・44・45・46・47・48・53・54・57・58・60の12基の柱穴で構成されている。長方形を呈する総柱建物跡であるが、やや歪んだ形態を呈している。また、SK p-38・40・45・46・47・48・53・54・57・58・60の11基から、木柱が検出された。規模は桁行3間×梁間2間で、約8.6m×約6.0mを測る。主軸はN-4°～Eであり、概ね

北一南方向を指向している。

S B -1002建物跡 G-66~67グリッドにおいて確認された。SK p -63・64・65・74・77・78の6基の柱穴で構成されている。ほぼ方形を呈するが、柱穴の間隔が不規則で、やや歪んだ形態となっている。また、SK p -78からは、木柱が検出されている。規模は桁行2間×梁間1間で、約3.8m×約3.8mを測る。主軸はN-7°-Eであり、概ね北一南方向を指向している。

S B -1003建物跡 H-66~67グリッドにおいて確認された。SK p -81・82・83・84・85の5基の柱穴で構成されている。形態は長方形を呈すると思われるが、南半が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。また、SK p -81からは木柱が検出されている。規模は桁行2間以上×梁間1間で、確認された部分は約4.5m×約3.5mを測る。主軸はN-7°-Eであり、概ね北一南方向を指向している。

S B -1004建物跡 L-63~64グリッドにおいて確認された。SK p -178・180・184a・188・197・245の6基の柱穴で構成されている。長方形を呈するが、柱穴の間隔が不規則で、やや歪んだ形態を呈している。桁行2間×梁間1間であるが、東側へ延長する可能性もある。規模は約5.9m×約2.7mを測る。主軸はN-1°-Eであり、概ね北一南方向を指向している。

S B -1005建物跡 M~N-63グリッドにおいて確認された。SK p -229・230・232・258・259・265・268・270の8基の柱穴によって構成されている。長方形を呈するが、柱穴の間隔が不規則で、全体的にやや歪んだ形態となっている。規模は桁行2間×梁間2間で、約5.5m×約4.7mを測る。主軸はN-95°-Eであり、概ね東一西方向を指向している。

S B -1006建物跡 M~N-64グリッドにおいて確認された。SK p -283・288・290・295・296・299・303・304・305の9基の柱穴によって構成されている。ほぼ方形を呈し、総柱建物跡の可能性も考えられるが、柱穴の間隔はやや不規則となっている。規模は桁行2間×梁間2間で、約5.4m×約5.4mを測る。主軸はN-13°-Eであり、概ね北一南方向を指向している。

S B -1007建物跡 M~N-58グリッドにおいて確認された。SK p -641・642・646・647・651・687の6基の柱穴によって構成されている。長方形を呈すると考えられるが、東端が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。柱穴の間隔は不規則であり、桁行2間以上×梁間2間で、約5.7m以上×約4.9mを測る。主軸はN-93°-Eであり、概ね東一西方向を指向している。

S B -1008建物跡 L~M-58グリッドにおいて確認された。SK p -600・602・603・611・612・619・624・626・630・631b・633a・635の12基の柱穴によって構成されている。ほぼ方形を呈するが、柱穴の間隔が不規則で、やや歪んだ形態を呈している。規模は桁行3間×梁間2間で、約5.9m×約5.3mを測る。また、主軸はN-5°-Wであり、概ね北一南方向を指向している。

S B -1009建物跡 K~L-57グリッドにおいて確認された。SK p -493・495・501・504・529・534・539・543・584・590の10基の柱穴によって構成されている。また、SK p -505・536を含んで、総柱建物跡になる可能性も考えられるが、ここでは廟等の設備をもつ建物跡と想定した。なお、SK p -505・536・584・590からは、木柱が検出されている。形態は長方形を呈すると思われるが、西半が調査区外にまで及ぶため、詳細な点は不明である。柱穴の間隔は比較的の不規則で、やや歪んだ形態を呈しているが、桁行3間以上×梁間3間で、約5.3m以上×約9.2mを測る。主軸はN-53°-Eであり、概ね北東一南北方向を指向している。

S B -1010建物跡 K-65グリッドにおいて確認された。SK p -136・137・138・139・143・147・150・154の8基によって構成されている。また、SK p -137・138からは、木柱が検出された。ほぼ方形

に近い形態を呈するが、柱穴の間隔が不規則で、歪みも著しい。規模は桁行2間×梁間2間で、約5.4m×約4.9mを測る。主軸はN-3°-Eであり、概ね北-南方向を指向している。

S B-1011建物跡 H-I-61~62グリッドにおいて確認された。S K p-426・430・432・435・438・441・667・702の8基の柱穴によって構成されている。また、S K p-426・435・667・702からは、木柱が検出されている。ほぼ長方形を呈するが、柱穴の間隔が不規則で、やや歪んだ形態を呈している。規模は桁行3間×梁間1間であるが、約8.3m×約5.8mを測る。なお、主軸はN-79°-Wであり、概ね西北西-東南東方向を指向している。

b 土坑類

ピット類とはほぼ同様の分布状況を呈し、I地区とIII地区を中心に認められる。比較的深度の浅いものが多いため、大半が性格不詳となつたが、焼燐等を一括廃棄したと思われる集石土坑も1基検出された。

S X-294集石土坑 M-64グリッドから検出された。長軸約139cm×短軸約122cmの円形を呈し、底面までの深度は約57cm、底面標高は41.68mである。覆土中には多量の焼燐が含まれており、一括的に廃棄されたものと思われる。しかし、炭化物は多量にみられるものの、焼土がほとんど認められず、本土坑内における燃焼の痕跡は乏しい状況である。そのため、他地点で被熱した燐や炭化物等を本土坑に廃棄したと推定される。また、覆土は第1層～第2層に区分された。第1層は暗褐色土層で、炭化物を多量、地山土粒を少量含んでいた。焼燐等は本層から第2層上半にかけて、多量に含まれている。第2層は黒褐色土層で、炭化物を多量、地山土粒を少量含む。第1層に比べると炭化物がより多く、焼燐等は少ない。したがって、大略的には多量の炭化物の後、焼燐等を廃棄したという形成過程を考えられよう。

S K-309土坑 M-64グリッドにおいて確認された。長軸約57cm×短軸約46cmの梢円形を呈し、深度約65cm、底面標高は41.69mである。性格については不詳であり、覆土は第1層～第3層に区分された。第1層は灰色土層で、炭化物及び地山土粒を含む。第2層はさらにa～bに細分され、第2a層は暗灰色土層である。地山土との混合土で、炭化物を含んでいた。第2b層は暗褐色土層で、炭化物及び地山土粒を含む。また、第3層は黒褐色土層で、炭化物及び地山土粒を含んでいた。

S K-490土坑 K-57グリッドにおいて確認された。長軸約64cm×短軸約60cmの円形を呈し、深度は約14cmと浅く、底面標高は42.41mであった。性格については不詳であるが、底面から燐が出土している。覆土は第1層～第3層に区分された。第1層は明褐色土層で、炭化物を含む。第2層は暗褐色土層で、地山土粒を含む。また、第3層は黒褐色土層で、燐を包含していた。

S K-606土坑 M-58グリッドから検出された。長軸約60cm×短軸約58cmの円形を呈し、底面までの深度は約58cm、底面標高は41.58mである。性格については不詳であるが、覆土中から土師器が出土している。覆土は第1層～第3層に区分された。第1層は灰色土層で、腐植物を含む。また、土師器を包含していた。第2層は暗褐色土層で、地山土粒を含む。第3層は黒褐色土層で、地山土粒を含んでいた。

c 井戸跡

S E-86井戸跡 H-66グリッドにおいて確認された。長軸約102cm×短軸約100cmの円形を呈し、底面までの深度は約157cm、底面標高は43.25mである。井戸跡としては比較的浅い深度であるが、本地点の湧水点も高い位置にあるため、機能的には充分であったと推定される。また、底面付近の西側壁面の一部には、井戸枠状の木板が設置されていた。この部分は軟弱な粘質土に相当し、壁面の崩落が著しかったと推定される。そのため、井戸枠状の木板は、その崩落を防止する目的で設置されたものと考えられる。なお、覆土は上層が暗灰色土層、中層が暗灰色粘質土層、下層が暗青灰色粘質土層であった。

d ピット類

I 地区及びIII地区を中心に分布するが、過去の耕地整理等の影響で湮滅した地点も多いと考えられる。II地区では自然流路跡が主体をなしており、居住等には不適な環境であったと考えられ、ピット類の分布も稀薄である。検出されたピット類の大半は柱穴と思われ、木柱や柱痕が確認されたものもあった。また、覆土は概ね暗灰色～暗褐色を呈していた。

e 溝 跡

SD-219溝跡 N-62グリッドから検出された。形態は弓状を呈しており、何らかの土地区画等を目的とした可能性もあるが、詳細は不明である。規模は長さ約550cm×幅約66cmで、深度は約49cm、底面標高は約41.83mである。なお、覆土は第1層～第4層に区分された。

SD-252溝跡 M～N-63～65グリッドにおいて確認された。本地点における方形状の土地区画を意図したものと思われ、本溝跡の内側にはSB-1005及び1006が位置し、主軸方向も大略的には一致している。東半が調査区外にまで及んでいるが、検出された部分は長さ約2594cm×幅約50cmの規模である。また、最深部の深度は約25cmで、底面標高は42.44mである。覆土は第1層～第6層に区分された。

SD-346溝跡 F～H-58～62グリッドにおいて確認された。地形観察からは、西側の丘陵裾部が本地点にまで延長していたと考えられ、そこからの湧水等を断切るために、本溝跡が構築されたと想定される。したがって、本溝跡は丘陵裾部に沿って形成され、当時の地形を反映している可能性が高い。また、G-60グリッド以北では、覆土中に土師器片や須恵器片を主体とする多量の遺物が、一括廃棄された状態で検出された。出土遺物の総数は約60点であり、墨書き器等も認められる。覆土はI地区西壁と3ヶ所のベルトで観察し、第1層～第12層に区分された。出土遺物の大半は、第9層～第12層に包含され、底面付近に廃棄された様相を呈していた。

SD-378a・378b溝跡 SD-378a溝跡はG～H-62グリッド、SD-378b溝跡はI-62グリッドにおいて確認された。主軸方向等から想定すると、これらの溝跡は丘陵からの湧水をSD-17等の自然流路へと導くためのものであった可能性が考えられる。また、SD-378a溝跡の覆土中からは、土師器片や須恵器片を主体とする約80点の遺物が出土した。これらは溝跡の底面付近に一括的に廃棄されたと思われる様相で検出され、比較的良好な事例が得られた。SD-378a溝跡の覆土は第1層～第3層に区分されたが、出土遺物の大半は、第2層～第3層に包含されていた。SD-378b溝跡の覆土は、SD-378a溝跡からの連番とし、第4層～第7層に区分された。

f 自然流路跡

SD-1 自然流路跡 III地区的南西端から検出された。深度は比較的浅く、土師器片や須恵器片を主体とする遺物が検出され、灰釉陶器や中世土師器も認められた。また、覆土は第1層～第4層に区分された。

SD-17自然流路跡 II地区を中心とし、III地区的北側にも認められた。比較的深度が深く、異時期の流路が複雑に重複しながら形成していった痕跡である。そのため、時期によって流路の幅や深さを変えながら、長期間にわたって流水があったと考えられる。

SD-444自然流路跡 I地区西側の調査区の中央付近から検出された。深度は比較的浅いが、分岐や中洲状の部分もみられ、やや複雑な形態を呈している。覆土は第1層～第6層に区分された。

SD-701自然流路跡 I地区東側の調査区北端から検出された。比較的深度が深く、異時期の流路が複雑に重複している様相が把握された。部分的に流木が含まれた土層もみられ、小規模な土石流等もあったことが想定される。覆土は第1層～第10層に区分された。

第6表 宮田遺跡遺構計測表

遺構名	種別	グリッド	形態	規格 延長×幅員×深度 (mm)	底面標高 (海抜m)	土	出土遺物	備考
1	道路跡	E-66	鉄軌	- × - × -	-	暗灰色土 暗青灰色土他	土師器 鉄器頭 灰陶器 中世土師器 瓦	
2	ピット	D-66	円形	14× 13× 16	45.42	暗褐色土		
3	ピット	D-66	円形	14× 14× 11	45.45	暗褐色土		
4	ピット	D-66	円形	16× 16× 5	45.39	暗褐色土		
5	ピット	D-66	円形	15× 13× 19	45.40	暗褐色土		
6	ピット	D-66	円形	16× 12× 10	45.50	暗褐色土		
7	ピット	D-66	円形	20× 17× 46	45.34	暗褐色土		
8	ピット	D-66	楕円形	23× 14× 10	45.50	暗褐色土		
9	ピット	D-66	円形	12× 12× 17	45.36	暗褐色土		
10	ピット	D-66	楕円形	18× 10× 12	45.39	暗褐色土		
11	ピット	D-66	円形	24× 24× 24	45.29	暗赤褐色土		
12	ピット	D-66	円形	16× 16× 13	45.45	暗褐色土	土師器	
13	ピット	D-66	円形	16× 14× 11	45.44	暗褐色土		
14	ピット	D-65	三角状	26× 22× 12	45.46	暗褐色土		
15	ピット	D-65	円形	19× 16× 7	45.53	暗褐色土		
17	道路跡	K-61	鉄軌	- × - × -	-	淡灰色土 暗褐色土他	土師器 鉄器頭 灰陶器 近世鐵器 銀貨 球	
18	ピット	D-65	円形	12× 11× 20	45.41	暗褐色土		
19	ピット	D-65	円形	13× 12× 17	45.47	暗褐色土		
20	ピット	D-65	楕円形	32× 32× 24	45.47	暗褐色土		
21	ピット	D-65	円形	14× 14× 20	45.37	暗褐色土		
22	ピット	D-66	円形	18× 16× 13	45.29	暗褐色土		
23	ピット	D-66	円形	16× 16× 13	45.31	暗褐色土		
24	ピット	E-66	楕円形	16× 14× 8	45.28	灰褐色土		
25	ピット	E-65	楕円形	28× 18× 15	45.31	暗褐色土		
26	ピット	E-65	楕円形	30× 24× 20	45.25	暗褐色土		
27	土壙	E-65	円形	80× 87× 15	45.34	暗褐色土		
28	ピット	E-65	楕円形	18× 16× 15	45.34	暗褐色土		
30	道路跡	C-65	鉄軌	- × - × -	-	淡灰色土		
36	ピット	F-65	円形	20× 29× 5	45.09	暗褐色土他		
37	ピット	F-65	楕円形	26× 20× 9	45.27	暗褐色土		
38	ピット	F-65	楕円形	42× 34× 45	44.91	淡灰色土 灰褐色土	木	SB-1001
39	ピット	E-65	楕円形	18× 12× 8	45.27	暗褐色土	木	
40	ピット	F-65	円形	32× 28× 27	44.98	暗褐色土	木	SB-1001
41	ピット	G-65	円形	16× 16× 5	45.11	暗褐色土		
42	ピット	G-65	楕円形	22× 15× 20	44.98	暗褐色土 淡灰色土		
43	ピット	G-65	楕円形	26× 20× 16	45.03	淡灰色土 暗褐色土他	木	
44	ピット	G-65	楕円形	38× 28× 26	44.92	暗褐色土	木	SB-1001
45	ピット	G-66	楕丸形方	36× 27× 5	44.72	淡褐色土	木	SB-1001
46	ピット	F-66	円形	34× 30× 33	44.82	暗褐色土 灰褐色土	木	SB-1001
47	ピット	E-66	楕丸形方	28× 26× 23	45.20	淡灰色土	木	SB-1001
48	ピット	E-66	円形	22× 20× 27	45.09	暗褐色土	木	SB-1001
49	ピット	E-66	楕円形	14× 12× 8	45.28	暗褐色土		
50	ピット	E-66	楕円形	20× 12× 17	45.19	暗褐色土		
51	ピット	E-66	円形	12× 12× 16	45.18	暗褐色土		
52	ピット	F-66	円形	28× 10× 10	45.12	暗褐色土		
53	ピット	F-66	円形	34× 28× 59	44.63	淡灰色土 暗褐色土	木	SB-1001
54	ピット	G-66	円形	34× 32× 49	44.59	暗褐色土		SB-1001
55	ピット	E-66	円形	14× 13× 23	45.12	暗褐色土		
56	ピット	E-66	楕円形	26× 19× 20	45.14	暗褐色土		
57	ピット	E-66	楕円形	38× 33× 79	44.54	暗褐色土 灰褐色土	木	SB-1001
58	ピット	F-66	円形	32× 28× 46	44.77	暗褐色土 淡褐色土		SB-1001
60	ピット	G-66	円形	50× 43× 15	45.02	暗褐色土	木	SB-1001
63	ピット	G-66	楕丸形方	32× 28× 38	44.52	暗褐色土 暗褐色土他		SB-1002
64	ピット	G-66	円形	32× 28× 37	44.66	暗褐色土 暗褐色土他	木	SB-1002
65	ピット	G-67	円形	24× 23× 43	44.54	暗褐色土		
66	ピット	G-67	円形	18× 12× 18	44.79	暗褐色土		
68	ピット	G-67	円形	22× 20× 20	44.80	暗褐色土		
70	ピット	G-67	楕円形	26× 22× 28	44.70	暗褐色土 暗褐色土		
72	ピット	G-67	円形	18× 17× 8	44.90	暗褐色土		
73	ピット	G-67	円形	20× 18× 16	44.71	暗褐色土 淡褐色土		
74	ピット	G-67	円形	22× 20× 19	44.67	暗褐色土 暗褐色土		SB-1002
75	ピット	G-67	楕円形	26× 20× 26	44.55	暗褐色土 暗褐色土		

番号	種別	グリッド	形態	規格(cm) 長幅×側幅×深度 (海抜m)	断面高さ (海抜m)	覆土	出土遺物	備考
76	ピット	G-67	円形	20×18×17	44.76	暗灰色土 淡灰色土		
77	ピット	G-66	円形	36×34×39	44.42	灰白色土 淡灰色土		SB-1002
78	ピット	G-66	円形	34×30×31	44.49	暗灰色土 暗灰色土	木	SB-1002
79	ピット	G-66	円形	20×18×26	44.54	暗灰色土		
80	ピット	G-66	円形	32×30×31	44.51	暗灰色土		
81	ピット	H-67	円形	30×30×44	44.40	暗灰色土		SB-1003
82	ピット	H-66	円形	18×18×31	44.51	暗灰色土 暗灰色土		SB-1003
83	ピット	H-66	箱円形	34×28×14	44.16	灰白色土 淡灰色土		SB-1003
84	ピット	H-66	円形	22×20×17	44.64	暗灰色土 淡灰色土		SB-1003
85	ピット	H-66	楕丸形	26×22×28	44.56	暗灰色土 淡灰色土		SB-1003
86	井戸	H-66	円形	102×100×157	43.25	暗灰色粘質土	木	
87	ピット	H-66	円形	22×20×7	44.78	暗灰色土		
91	ピット	H-65	円形	24×24×21	44.27	暗灰色土 にふく(黄褐色土)		
92	ピット	H-65	円形	20×18×7	44.43	暗灰色土 淡灰色土		
93	ピット	H-65	箱円形	27×20×26	44.18	暗灰色土 淡灰色土		土解器
96	ピット	H-65	円形	18×14×35	44.45	暗灰色土 淡灰色土		土解器
97	ピット	I-85	円形	14×12×22	44.31	暗灰色土 灰白色土		
99	ピット	I-85	円形	17×14×28	44.27	暗灰色土 淡灰色土		
100	ピット	I-85	円形	18×16×30	44.27	暗灰色土 淡灰色土		
101	ピット	I-85	円形	18×18×51	44.05	暗灰色土 淡灰色土		
103	ピット	I-85	円形	20×20×6	44.61	暗灰色土		
104	ピット	I-85	三角形	18×18×5	44.65	暗灰色土		
105	ピット	I-85	箱円形	36×20×24	44.41	暗灰色土		機文土器
106	ピット	I-85	円形	28×25×29	44.26	暗灰色土		土解器
107	ピット	I-85	円形	29×18×9	44.07	暗灰色土		
108	ピット	I-85	箱円形	23×14×6	44.11	暗灰色土		
109	ピット	I-85	箱円形	22×17×11	44.59	暗灰色土		
110	ピット	H-65	箱円形	28×24×32	44.38	暗灰色土 淡灰色土		
113	ピット	I-85	円形	20×18×36	44.49	暗灰色土 淡灰色土		
114	ピット	I-66	円形	19×18×13	44.78	暗灰色土 淡灰色土		
115	ピット	I-86	箱円形	26×21×20	44.60	暗灰色土 暗灰色土		
116	ピット	I-66	箱円形	24×18×7	44.70	暗灰色土		
117	ピット	I-65	三角形	24×18×8	44.88	暗灰色土		
118	ピット	I-66	箱円形	50×24×39	44.53	暗灰色土		土解器
119	ピット	H-65	箱円形	18×16×26	44.68	暗灰色土		
120	ピット	H-65	箱円形	19×14×12	44.77	暗灰色土		
121	ピット	H-65	箱円形	32×26×9	44.81	暗灰色土		
122	ピット	H-65	円形	24×24×16	44.80	暗灰色土		
128	ピット	J-65	円形	22×20×23	42.95	淡灰色土	木	
132	ピット	J-65	円形	20×20×25	43.05	灰白色土	木	
133	ピット	K-65	箱円形	22×18×5	43.38	黑褐色土 淡灰色土		
134	ピット	K-64	箱円形	22×18×10	43.29	暗灰色土 淡灰色土		
135	ピット	K-64	円形	26×22×13	43.14	灰白色土		
136	ピット	K-64	円形	28×26×9	43.10	暗灰色土		SB-1010
137	ピット	K-64	円形	28×24×42	43.18	暗灰色土 淡黄色土	木	SB-1010
138	ピット	K-65	楕丸形	44×30×40	43.11	暗灰色土 灰白色土	土解器 木	SB-1010
139	ピット	K-65	箱円形	28×24×11	43.30	暗灰色土 淡灰色土		SB-1010
140	ピット	K-65	円形	20×18×7	43.44	暗灰色土 淡灰色土		
141	ピット	K-65	箱円形	23×18×7	43.36	暗灰色土 淡灰色土		
142	ピット	K-65	箱円形	27×20×6	43.46	暗灰色土		
143	ピット	K-65	円形	28×26×29	43.12	暗灰色土 灰白色土		SB-1010
146	ピット	K-65	円形	18×16×26	43.18	黑褐色土 淡褐色土		

通 番 号	種 別	タ イ ッ ド	形 态	規 格(cm)	底面高 (底盤cm)	地 土	出 土 道 物	備 考
147	ビット	K-65	角円形	23× 14× 11	43.17	暗灰色土		SB-1010
148	ビット	K-65	角円形	23× 19× 27	43.02	暗灰色土 白色土		
149	ビット	K-65	隅丸方形	28× 26× 5	43.32	暗灰色土		
150	ビット	K-65	隅丸方形	27× 26× 27	43.18	暗灰色土		SB-1010
151	ビット	K-65	角円形	20× 17× 6	43.44	暗灰色土		
152	ビット	K-65	角円形	20× 10× 6	43.45	暗灰色土		
153	ビット	K-65	円形	20× 18× 32	43.08	暗灰色土		
154	ビット	K-65	円形	20× 20× 27	43.12	暗灰色土 黑色土		SB-1010
155	ビット	L-65	角円形	24× 17× 25	43.21	暗灰色土		
157	ビット	L-65	円形	22× 21× 31	43.15	暗灰色土 黑色土		
158	ビット	L-65	円形	28× 24× 39	43.01	暗灰色土 淡黄色土		
159	ビット	L-65	円形	30× 24× 41	42.87	暗灰色土	土層認	
160	ビット	L-65	円形	14× 14× 6	43.22	暗灰色土		
161	ビット	L-65	円形	19× 17× 29	42.99	暗灰色土 黑色土		
162	ビット	L-65	三角状	20× 18× 14	43.15	暗灰色土 淡黄色土		
163	ビット	L-65	円形	14× 13× 7	43.29	暗灰色土	土層認	
164	ビット	L-65	円形	16× 16× 8	43.29	暗灰色土		
165	ビット	L-65	円形	17× 18× 8	42.88	暗灰色土		
166	ビット	L-64	角円形	18× 10× 6	43.32	暗灰色土		
167	ビット	L-64	円形	24× 20× 36	42.93	暗灰色土 淡黄色土		
168	ビット	L-64	角円形	20× 13× 7	43.25	暗灰色土 淡灰色土		
169	ビット	L-64	角円形	24× 20× 18	43.19	暗灰色土		
170	ビット	L-64	角円形	24× 19× 20	43.09	暗灰色土		
171	ビット	L-64	円形	14× 12× 26	43.16	暗灰色土 淡灰色土		
172	ビット	L-64	円形	16× 14× 21	43.08	暗灰色土 淡黄色土		
173	ビット	L-64	円形	22× 17× 12	43.16	暗灰色土		
174	ビット	L-64	円形	24× 24× 14	43.14	暗灰色土		
175	ビット	L-64	円形	20× 20× 5	43.23	淡灰色土		
176	ビット	L-64	円形	24× 23× 49	42.71	暗灰色土 淡黄色土		
177	ビット	L-64	隅丸方形	23× 22× 15	43.23	淡灰色土		
178	ビット	L-64	円形	30× 26× 16	43.18	淡灰色土		SB-1004
179	ビット	L-64	円形	24× 23× 16	43.14	暗灰色土 淡黄色土		
180	ビット	L-64	角円形	33× 23× 6	43.15	暗灰色土		SB-1004
181	ビット	L-64	円形	22× 13× 7	43.28	暗灰色土 淡黄色土		
182	ビット	L-64	円形	16× 14× 46	42.95	暗灰色土 淡灰色土		
183	ビット	L-64	円形	14× 13× 25	43.12	暗灰色土 淡灰色土		
184 a	ビット	L-64	角円形	38× 26× 16	43.27	暗灰色土 黑色土	土層認	SB-1004
184 b	ビット	L-64	角円形	66× 36× 30	43.07	深褐色土	土層認	
185	ビット	L-63	円形	22× 20× 15	43.15	暗灰色土		
186	ビット	L-63	三角状	25× 18× 11	43.21	暗灰色土		
187	ビット	L-64	角円形	28× 22× 26	43.11	暗灰色土		
188	ビット	L-64	三角状	32× 26× 24	42.98	暗灰色土		SB-1004
189	ビット	L-64	円形	18× 18× 20	43.03	灰白色土		
191	ビット	K-64	隅丸方形	20× 20× 9	43.17	暗灰色土 淡黄色土		
193	ビット	K-63	角円形	20× 16× 24	43.06	暗灰色土 淡灰色土		
194	ビット	K-63	円形	20× 18× 16	43.08	暗灰色土 淡灰色土		
196	ビット	K-63	角円形	20× 14× 5	43.27	暗灰色土		
197	ビット	L-63	角円形	28× 22× 29	43.01	暗灰色土 淡灰色土		SB-1004
198	ビット	L-63	円形	22× 20× 16	43.14	暗灰色土 淡灰色土		
199	ビット	L-63	円形	28× 26× 25	43.08	暗灰色土 淡灰色土		
200	ビット	L-63	円形	20× 20× 35	43.07	暗灰色土 淡黄色土		
201	ビット	L-63	円形	28× 26× 32	43.08	暗灰色土		
202	ビット	K-63	円形	22× 22× 26	43.21	暗灰色土 淡黄色土		

道 構 名	種 類	グリッド	形 築	規 格 (cm)	前面標高 (海抜m)	面 土	出 土 遺 物	備 考
				長軸×短軸×深さ				
203	ピット	K-63	円形	24× 22× 24	43.18	暗灰色土 黄褐色土他		
204	ピット	K-63	円形	20× 19× 10	43.43	暗灰色土 浅灰色土		
206	ピット	K-63	椭円形	25× 22× 14	42.83	暗灰色土		
207	ピット	K-63	椭円形	23× 17× 14	42.87	暗灰色土		
208	ピット	L-63	椭円形	20× 20× 26	43.00	暗灰色土	木	
209	ピット	L-63	椭円形	20× 14× 16	43.05	暗灰色土		
210	ピット	L-63	円形	26× 24× 5	43.02	暗灰色土		
211	ピット	L-63	円形	22× 20× 23	42.60	暗灰色土 淡灰色土		
213	ピット	L-63	椭円形	22× 18× 11	42.52	暗灰色土		
215	ピット	N-62	円形	21× 19× 31	41.77	暗灰色土		
216	ピット	N-62	円形	18× 14× 10	42.07	暗灰色土 明灰色褐色土他		
217	ピット	N-62	円形	28× 28× 46	41.62	暗灰色土		
218	ピット	N-62	円形	23× 22× 46	41.65	灰土		
219	溝	N-62	溝状	550× 66× 49	41.83	灰土 黄色土他		
224	ピット	N-62	椭円形	37× 23× 39	41.93	暗灰色土	土脚部	
225	ピット	N-62	椭円形	26× 22× 37	41.81	暗灰色土		
229	ピット	N-63	椭円形	26× 20× 49	41.87	灰土 暗灰色土他	SB-1005	
230	ピット	N-63他	円形	24× 21× 32	42.04	暗灰色土 灰土	SB-1005	
231	溝	M-63	溝状	101× 94× 13	42.20	淡灰色砂質土	土脚部	
232	ピット	M-63	円形	22× 22× 7	42.35	暗灰色土	SB-1005	
233	溝	M-63	椭円形	250× 104× 39	41.99	淡灰色土	土脚部	
234	ピット	L-63	円形	20× 20× 24	42.48	暗灰色土		
236	ピット	L-63	椭円形	20× 17× 38	42.89	暗灰色土 反白土		
239	ピット	L-63	椭円形	18× 12× 3	43.37	暗灰色土		
240	ピット	L-63	椭円形	32× 28× 54	42.91	暗灰色土 浅灰色土他	土脚部	
241	ピット	L-63	円形	22× 20× 34	43.03	暗灰色土 淡灰色土他		
242	ピット	L-63	円形	21× 20× 9	42.84	暗灰色土		
243	ピット	L-63	円形	14× 12× 10	43.39	暗灰色土		
244	ピット	L-63	円形	13× 13× 7	43.41	暗灰色土		
245	ピット	L-63	円形	20× 20× 17	43.21	暗灰色土 淡灰色土	SB-1004	
246	ピット	L-63	円形	19× 18× 21	43.14	暗灰色土 淡灰色土他		
247	ピット	L-63	円形	20× 20× 34	43.01	淡灰色土		
248	ピット	L-63	円形	20× 19× 15	43.10	暗灰色土		
251	ピット	L-64他	円形	27× 26× 16	43.13	暗灰色土	土脚部	
252	溝	M-64他	溝状	2594× 50× 25	42.44	暗灰色粘質土 崩落色粘質土他	土脚部 蘭	
253	ピット	M-63	円形	22× 20× 15	42.49	暗灰色土		
254	ピット	M-63	円形	17× 16× 7	42.62	暗灰色土		
255	溝	M-64他	溝状	512× 92× 17	42.47	淡灰色土	土脚部	
256	ピット	M-63	円形	20× 20× 22	42.37	暗灰色土		
257	ピット	M-63	椭円形	18× 14× 3	42.51	暗灰色土		
258	ピット	M-63	円形	22× 18× 24	42.15	暗灰色土 淡黄色土	SB-1005	
259	ピット	M-63	円形	18× 16× 14	42.27	暗灰色土 淡黄色土	SB-1005	
260	ピット	M-63	円形	23× 20× 21	42.19	暗灰色土		
261	ピット	N-63	椭円形	28× 22× 3	42.27	灰土		
263	ピット	N-63	円形	24× 21× 33	41.94	暗灰色土 淡黄色土		
264	ピット	N-63	円形	20× 20× 11	42.22	暗灰色土		
265	ピット	N-63	円形	27× 19× 28	42.02	灰土等	SB-1005	
266	溝	N-63	溝状	468× 116× 25	42.00	暗灰色砂質土 淡灰色沙礫土	土脚部	
267	ピット	N-63	椭円形	24× 18× 8	42.15	暗灰色土		
268	ピット	N-63	円形	34× 33× 36	41.90	淡黄色土 淡灰色土	SB-1005	
269	ピット	N-63	円形	22× 21× 7	42.27	暗灰色土		
270	ピット	N-63	円形	27× 24× 16	42.14	灰土	SB-1005	
271	ピット	M-63	円形	22× 20× 38	42.01	暗灰色土		
272	溝	M-64他	溝状	954× 68× 16	42.14	暗灰色土	土脚部	
273	ピット	M-63	椭円形	21× 18× 16	42.27	暗灰色土		
274	ピット	N-63	円形	22× 18× 32	42.05	暗灰色土		
275	ピット	N-63	円形	28× 27× 16	42.24	暗灰色土		
276	ピット	N-63	三角状	26× 22× 3	42.27	暗灰色土		
277	ピット	N-63	円形	22× 20× 18	42.12	暗灰色土		

遺跡名	種別	グリッド	形態	寸法(cm) 長軸×短軸×厚度	底面高 (海拔m)	覆土	出土遺物	備考
278	ピット	N-63	楕円形	22×16×12	42.19	暗灰色土		
279	ピット	N-63	楕円形	24×20×20	42.11	淡青灰色土 淡黄色土		
280	ピット	N-64	円形	16×16×21	42.03	暗灰色土		
281	ピット	N-64	円形	16×14×31	41.80	暗灰色土		
282	ピット	N-64	円形	20×15×40	41.90	暗灰色土		SB-1006
283	ピット	N-64	円形	20×18×50	41.73	暗灰色土		
284	ピット	N-64	円形	20×20×25	42.02	灰白色土 淡黄色土	土師器	
285	ピット	N-64	楕円形	26×18×5	42.32	暗灰色土		
286	ピット	N-64地	円形	18×16×29	42.04	暗灰色土	罐	
287	ピット	M-64	円形	22×21×30	42.03	暗灰色土		
288	ピット	M-64	楕円形	22×18×31	42.03	暗灰色土		SB-1006
289	ピット	M-64	円形	16×14×21	42.07	暗灰色土		
290	ピット	M-64	円形	20×18×27	42.11	暗灰色土 淡黄色土		SB-1006
291	ピット	M-64	円形	20×18×34	42.47	暗灰色土		
294	土坑	M-64	円形	139×122×57	41.68	暗灰色土 黑褐色土	土師器 滑石器 鍋	黒石土壤
295	ピット	M-64	楕円形	27×21×36	42.04	暗灰色土 暗褐色土		SB-1006
296	ピット	M-64	円形	20×20×41	42.03	暗灰色土 淡黄色土		SB-1006
298	ピット	N-64	円形	18×17×19	42.25	暗灰色土		
299	ピット	N-64	円形	27×25×39	41.96	淡黄褐色土 淡褐色土		SB-1006
303	ピット	N-64	楕円形	40×32×44	41.93	暗灰色土 暗褐色土		SB-1006
304	ピット	M-64	円形	28×24×41	42.03	暗灰色土 淡黄色土	木	SB-1006
305	ピット	M-64	三角状	24×22×19	42.22	暗灰色土 板岩		SB-1006
306	ピット	M-64	楕円形	28×22×20	42.20	暗灰色土 淡黄色土		
307	ピット	M-65	円形	22×18×10	42.39	暗灰色土		
308	ピット	M-64	楕円形	22×19×22	42.14	暗灰色土		
309	土坑	M-64	円形	57×46×65	41.69	暗灰色粘質土 淡灰色粘質土		
310	ピット	N-65	円形	26×24×24	42.08	暗灰色土		
314	ピット	L-64	円形	18×17×23	42.05	暗灰色土		
330	土坑	F-62	円形	54×50×11	46.00	暗灰色土 淡灰色土	土師器	
331	ピット	F-62	円形	28×23×22	45.52	暗灰色土 淡灰色土		
332	ピット	F-62	円形	28×25×31	45.51	暗灰色土 淡灰色土		
341	ピット	G-62	扇丸形	33×32×4	45.53	暗灰色土		
343	ピット	G-62	扇円形	23×17×5	45.56	暗灰色土		
344	ピット	G-62	扇丸形	31×26×4	45.51	暗灰色土		
345	土坑	G-62	扇円形	55×39×8	45.52	暗灰色土	土師器	
346	溝	H-59地	跳状	4130×173×58	44.93	暗灰色土 板黄色土	土師器 滑石器 鍋	
347	ピット	G-61	円形	23×20×59	44.87	暗灰色土		
348	ピット	G-61	円形	32×32×43	44.98	暗灰色土		
349	ピット	G-61	扇丸形	35×20×5	45.26	暗灰色土		
350	ピット	G-61	扇円形	42×30×42	44.78	暗灰色土 淡黄色土		
351	ピット	G-61	円形	27×26×58	45.17	暗灰色土		
352	ピット	G-61	扇円形	40×24×1	45.24	暗灰色土		
353	ピット	G-60	扇丸形	31×28×65	44.53	暗灰色土		
354	ピット	G-60	円形	28×28×40	44.78	暗灰色土		
359	ピット	G-60	円形	32×32×43	44.78	暗灰色土	土師器	
361	ピット	G-60	円形	30×28×24	44.95	暗灰色土		
362	ピット	G-60	円形	26×24×34	44.85	暗灰色土		
363	ピット	G-60	扇円形	20×12×26	44.91	暗灰色土		
365	ピット	G-60	円形	21×20×44	44.75	暗灰色土 淡灰色土		
366	ピット	G-60	円形	15×14×17	45.18	暗灰色土		
357	ピット	G-60	扇円形	32×18×52	44.79	暗灰色土		
368	ピット	G-60	円形	17×16×5	45.16	暗灰色土		
369	ピット	G-60	円形	14×14×7	45.15	暗灰色土		
370	ピット	G-60	円形	20×20×36	44.78	暗灰色土		
374	ピット	G-60	扇円形	22×18×17	44.80	暗灰色土		
375	ピット	G-59	扇円形	26×22×6	45.07	暗灰色土		
376	ピット	G-60	円形	24×24×19	44.77	暗灰色土 淡灰色土		
378 a	溝	G-62地	溝状	1090×223×31	44.86	青灰色土 淡黄色土	灰陶器 土師器	罐
378 b	溝	I-62	溝状	310×152×50	43.86	青灰色土 淡黄色土		
379	ピット	H-62	円形	22×20×14	45.02	暗灰色土		
380	ピット	G-62	扇円形	28×23×29	44.94	暗灰色土	土師器	
381	ピット	G-62	円形	25×22×15	44.98	暗灰色土		

遺 賽 名	種 別	グリッド	形 態	規 格 (cm)			高さ部高 (最高値)	観 土	古 土 遺 物	備 考
				長軸×側軸×厚度						
385	ピット	H-62	円形	30× 28× 36	44.77	黒褐色土 粘状褐色土				
387	ピット	G-61	円形	25× 24× 27	44.82	粘状褐色土 淡灰褐色土				
388	ピット	G-61	円形	29× 20× 16	44.96	粘状褐色土 土脚部				
389	ピット	G-61	円形	19× 18× 14	45.07	粘状褐色土				
390	ピット	G-61	円形	26× 23× 27	44.88	粘状褐色土				
391	ピット	G-61	円形	20× 18× 28	44.86	粘状褐色土				
392	ピット	G-61	円形	23× 23× 59	45.14	粘状褐色土				
393	ピット	G-61	扇円形	18× 14× 29	44.86	粘状褐色土				
394	ピット	G-60他	扇円形	31× 27× 18	45.01	粘状褐色土				
395	ピット	G-61	円形	21× 21× 14	44.94	粘状褐色土				
396	ピット	H-61	扇円形	30× 28× 11	44.90	粘状褐色土				
397	ピット	H-61	扇丸方型	28× 22× 24	44.80	粘状褐色土				
400	ピット	H-61	三角状	20× 17× 4	45.01	粘状褐色土				
401	ピット	H-61	扇円形	24× 16× 4	44.96	粘状褐色土				
404	ピット	H-61	円形	30× 29× 18	44.77	粘状褐色土				
405	ピット	H-61	円形	28× 26× 14	44.91	粘状褐色土				
406	ピット	H-61	円形	28× 25× 9	44.85	粘状褐色土				
407	ピット	H-61	円形	20× 18× 15	44.80	粘状褐色土				
408	ピット	H-61	扇円形	32× 26× 24	44.51	粘状褐色土				
409	ピット	H-61	円形	14× 14× 24	44.31	粘状褐色土 淡灰褐色土				
410	ピット	H-61	円形	24× 21× 39	44.29	粘状褐色土				
412	ピット	H-60他	扇円形	20× 18× 21	44.58	粘状褐色土 淡灰褐色土				
413	ピット	H-60	円形	26× 25× 59	44.31	粘状褐色土				
414	ピット	H-60	円形	14× 12× 18	44.75	粘状褐色土 淡灰褐色土				
415	ピット	H-60	扇円形	23× 17× 34	44.63	粘状褐色土				
417	ピット	H-60	円形	19× 18× 25	44.70	粘状褐色土				
422	ピット	H-60	扇円形	30× 25× 18	44.79	粘状褐色土				
423	ピット	H-60	円形	19× 18× 33	44.37	粘状褐色土				
424	ピット	H-62	円形	16× 15× 29	44.30	粘状褐色土 木				
425	土壤	H-62	円形	46× 41× 45	44.04	粘状褐色土				
426	ピット	H-62	扇円形	34× 22× 23	44.22	粘状褐色土 土脚部 木			SB-1011	
427	ピット	H-62	扇円形	28× 24× 25	44.19	粘状褐色土				
428	ピット	H-62	円形	16× 14× 23	44.17	反張土				
429	ピット	H-62	扇円形	30× 20× 12	44.28	粘状褐色土 木				
430	ピット	I-62	円形	24× 24× 14	44.20	粘状褐色土 木			SB-1011	
431	ピット	I-62	円形	22× 22× 17	44.12	粘状褐色土 木				
432	ピット	I-61	円形	18× 17× 37	43.92	粘状褐色土 木			SB-1011	
435	ピット	I-61	円形	25× 23× 39	43.80	粘状褐色土 土脚部 木			SB-1011	
436	ピット	I-61	扇円形	21× 18× 20	44.00	粘状褐色土 淡灰褐色土				
437	ピット	I-62	円形	26× 24× 13	44.19	粘状褐色土				
438	ピット	I-61	円形	18× 18× 30	43.90	粘状褐色土 淡灰褐色土			SB-1011	
439	ピット	I-61	三角状	30× 28× 8	44.10	暗褐色土				
440	ピット	I-61	扇円形	38× 29× 42	43.76	粘状褐色土				
441	ピット	I-62他	円形	24× 22× 35	43.85	粘状褐色土 淡灰褐色土			SB-1011	
442	ピット	I-61	扇円形	31× 24× 34	43.85	粘状褐色土 板状土			土脚部	
443	ピット	I-61	円形	17× 17× 24	43.92	粘状褐色土 一般粘性砂堆				
444	走跡	I-60他	武狀	- × -	-	-				
445 a	溝	G-59	溝状	460× 36× 27	44.54	粘状褐色土 暗褐色土				
445 b	虎	G-59他	溝状	838× 92× 27	44.87	粘状褐色土 土脚部 球				
445 c	虎	G-59	溝状	282× 50× 20	44.67	粘状褐色土 土脚部				
446	ピット	G-59	扇円形	27× 24× 26	44.70	粘状褐色土				
447	ピット	G-59	扇丸方型	23× 22× 17	44.69	粘状褐色土				
449	ピット	J-60	扇円形	21× 16× 15	43.55	粘状褐色土				
450	ピット	J-59	円形	16× 14× 14	43.60	粘状褐色土				
451	ピット	I-59	扇円形	16× 14× 19	43.62	粘状褐色土				
452	ピット	I-59	扇円形	26× 22× 30	43.84	粘状褐色土 球				
453	ピット	I-58	円形	19× 19× 22	43.62	粘状褐色土 淡灰褐色土				
454	ピット	I-58	円形	21× 21× 3	43.83	粘状褐色土				
455	ピット	I-58	扇丸方型	29× 21× 24	43.67	粘状褐色土				
459	ピット	I-58	扇円形	23× 20× 40	43.50	粘状褐色土				
460	ピット	I-58	円形	18× 14× 10	43.80	粘状褐色土				
461	ピット	I-58	円形	22× 20× 11	43.79	粘状褐色土				
462	ピット	I-58	円形	21× 20× 15	43.70	粘状褐色土				
463	ピット	I-58	円形	18× 18× 28	43.39	粘状褐色土				
464	ピット	I-58	扇円形	30× 22× 16	43.60	粘状褐色土				
465	ピット	I-58	扇内腔	24× 21× 21	43.67	粘状褐色土				
466	ピット	I-58	扇円形	18× 16× 27	43.59	粘状褐色土				
467	ピット	I-58	扇円形	20× 16× 4	43.94	粘状褐色土				
468	ピット	I-58	扇円形	18× 16× 44	43.52	粘状褐色土				
469	ピット	I-58	円形	24× 23× 41	43.46	粘状褐色土				

種 様 名	種 類	ダリッド	形 態	規 格(cm)	底面積 (海抜m)	覆 土	出 土 道 物	備 考
470 ピット	I-58	箱内型	20× 17× 9	43.76	暗灰色土			
471 ピット	I-57	扇五方形	22× 20× 19	43.89	暗灰色土			
472 ピット	I-57	円形	14× 12× 8	43.87	暗灰色土			
473 ピット	I-57	三角状	15× 16× 35	43.65	暗灰色土			
475 ピット	I-57	円形	17× 14× 5	44.10	暗灰色土			
476 ピット	I-57	箱内型	20× 18× 52	43.38	暗灰色土 淡褐色土			
477 ピット	I-57	箱内型	20× 18× 14	43.94	暗灰色土			
478 ピット	I-57	箱内型	24× 18× 7	43.87	暗灰色土			
479 ピット	I-57	箱内型	18× 14× 7	44.02	暗灰色土			
480 ピット	K-59	箱内型	17× 16× 5	41.79	暗灰色土			
481 ピット	L-55	円形	16× 16× 40	41.56	暗灰色土			
482 ピット	L-55	三角状	23× 22× 22	41.77	暗灰色土			
483 ピット	L-55	箱内型	20× 12× 24	41.63	暗灰色土 淡褐色土			
484 ピット	L-55	円形	14× 14× 26	41.80	暗灰色土			
485 ピット	K-55	箱内型	16× 13× 13	41.91	暗灰色土			
489 ピット	K-56	箱内型	25× 18× 7	42.45	暗灰色土			
490 土坑	K-67	円形	64× 60× 14	42.41	暗褐色粘質土 黑褐色粘質土	本		
492 ピット	K-57	箱内型	18× 14× 3	42.24	暗灰色土			
493 ピット	K-57	扇五方形	23× 21× 33	42.04	黑褐色土		SB-1009	
494 ピット	K-57	箱内型	18× 13× 13	42.27	暗灰色土			
495 ピット	K-57	円形	32× 26× 35	42.09	暗褐色粘質土 黑褐色粘質土		SB-1009	
496 ピット	L-57	円形	16× 14× 26	42.03	暗灰色土			
497 ピット	L-57	箱内型	26× 17× 9	42.10	暗灰色土			
498 ピット	L-57	箱内型	18× 17× 9	42.21	暗灰色土			
499 ピット	L-57	箱内型	30× 18× 5	42.24	暗灰色土			
500 ピット	L-57	箱内型	14× 10× 6	42.32	暗灰色土			
501 ピット	L-57	箱内型	22× 18× 16	42.16	暗灰色土		SB-1009	
502 ピット	L-57	箱内型	16× 13× 19	42.19	暗灰色土			
503 ピット	L-57	箱内型	17× 15× 5	42.27	暗灰色土			
504 ピット	K-57	箱内型	28× 22× 40	42.05	暗褐色粘質土 黑褐色粘質土		SB-1009	
505 ピット	K-57	円形	26× 24× 45	42.13	暗褐色粘質土 黑褐色粘質土	本		
506 ピット	K-57	箱内型	16× 13× 27	42.23	暗褐色土			
507 ピット	L-57	箱内型	17× 14× 11	42.29	黑褐色粘質土 暗褐色粘質土			
508 ピット	L-57	円形	26× 24× 36	42.08	暗褐色土			
509 ピット	L-57	円形	20× 18× 25	42.13	暗褐色土			
514 ピット	M-56	三角状	22× 22× 33	41.36	暗褐色土			
515 ピット	M-57	箱内型	30× 22× 34	41.43	暗褐色土			
516 ピット	M-57	円形	18× 17× 25	41.58	暗褐色土			
517 ピット	M-57	円形	18× 18× 19	41.66	暗褐色土	泥炭層		
518 ピット	M-57	円形	20× 20× 20	41.81	暗灰色土			
519 ピット	M-57	円形	16× 16× 20	41.89	暗褐色土			
520 ピット	M-57	箱内型	17× 15× 6	42.08	暗灰色土 淡褐色土			
522 ピット	L-57	円形	24× 22× 6	42.14	暗灰色土			
523 ピット	L-57	箱内型	22× 15× 7	42.18	暗褐色土			
524 ピット	L-57	箱内型	17× 11× 30	42.05	暗褐色土			
526 ピット	L-57	箱内型	32× 18× 40	41.95	暗灰色土			
527 ピット	L-57	円形	24× 20× 24	42.09	暗褐色土			
528 ピット	L-57	円形	20× 18× 26	42.02	暗褐色土			
529 ピット	L-57	扇五方形	26× 25× 33	42.00	暗灰色土		SB-1009	
530 ピット	L-57	箱内型	14× 12× 22	42.11	暗褐色土			
531 ピット	L-57	箱内型	18× 14× 4	42.33	暗褐色土			
533 ピット	L-57	箱内型	16× 14× 2	42.35	暗褐色土			
534 ピット	L-57	円形	30× 26× 35	42.05	黑褐色粘質土 暗褐色粘質土		SB-1009	
535 ピット	L-57	三角状	21× 22× 35	42.08	暗褐色土			
536 ピット	K-57	箱内型	27× 20× 29	42.21	黑褐色粘質土 暗褐色粘質土	本		
537 ピット	K-57	円形	16× 15× 24	42.26	暗灰色土 暗褐色土			
538 ピット	L-57	箱内型	18× 13× 27	42.19	暗灰色土			
539 ピット	L-57	扇五方形	33× 32× 34	42.01	暗褐色粘質土 黑灰色粘質土		SB-1009	
540 ピット	L-57	円形	29× 18× 19	42.18	暗褐色土			
542 ピット	L-57	箱内型	15× 13× 6	42.28	暗灰色土			
543 ピット	L-57	三角状	20× 20× 27	42.07	暗灰色土		SB-1009	
544 ピット	L-57	箱内型	23× 12× 37	41.97	暗褐色土			
545 ピット	L-57	箱内型	16× 14× 7	42.22	暗灰色土			
546 ピット	L-57	円形	18× 17× 10	42.25	暗灰色土			
547 ピット	L-57	扇五方形	16× 16× 16	42.00	暗灰色土			
548 ピット	L-57	箱内型	20× 16× 8	42.05	暗灰色土			
549 ピット	L-57	箱内型	20× 16× 19	41.87	暗灰色土			
550 ピット	L-57	円形	19× 17× 29	41.84	暗褐色土 淡褐色土	本		

遺構名	種別	グリッド	形態	規格(cm) 長幅×幅幅×深度	底面高 底面積	覆土	出土遺物	備考
551	ピット	L-57	円形	18×18×23	41.87	暗灰色土 深灰色土		
552	ピット	M-57	円形	19×18×24	41.90	暗灰色土		
553	ピット	M-57	椭円形	16×12×15	41.69	暗灰色土		
554	ピット	M-57	椭円形	19×15×18	41.69	暗灰色土		
555	ピット	M-57	円形	16×15×14	41.71	暗灰色土		
556	ピット	M-57	円形	20×19×7	41.83	暗灰色土		
557	土坑	M-57	円形	44×43×11	41.88	暗灰色土		
558	ピット	M-57	椭丸形	20×20×26	41.78	暗灰色土		
559	ピット	L-57	椭円形	16×12×29	41.92	暗灰色土		
560	ピット	L-57	円形	17×16×30	41.90	暗灰色土		
561	ピット	L-57	椭円形	16×14×35	41.92	暗灰色土 淡灰色土		
562	ピット	L-57	円形	30×29×56	41.71	暗灰色土 暗灰色土	縄文土器 土器群 網状繩	
563	ピット	L-58	椭円形	20×18×36	41.92	暗灰色土		
564	ピット	L-58	円形	31×27×55	41.73	暗灰色土		
565	ピット	L-58	円形	18×17×33	41.96	暗灰色土		
566	ピット	L-58	椭円形	20×14×23	42.07	暗灰色土		
567	ピット	L-58	椭円形	23×21×27	42.03	暗灰色土		
568	ピット	L-58	円形	15×14×23	42.09	暗灰色土		
569	ピット	L-58	円形	16×16×17	42.15	暗灰色土		
571	ピット	L-58	円形	19×18×23	42.16	暗灰色土		
572	ピット	L-58	円形	19×18×33	42.02	暗灰色土		
573	ピット	L-58	椭円形	22×15×8	42.22	暗灰色土		
574	ピット	L-58	椭円形	24×17×35	41.98	暗灰色土 淡灰色土		
575	ピット	L-58	椭円形	16×14×3	42.11	暗灰色土		
576	ピット	L-58	椭円形	17×15×30	42.11	暗灰色土		
577	ピット	L-58	椭円形	37×30×36	42.04	暗灰色土 淡灰色土		
578	ピット	L-58	椭円形	16×12×2	42.49	暗灰色土		
579	ピット	L-58	円形	14×14×4	42.49	暗灰色土		
580	ピット	L-58	二角鉢	23×22×37	42.12	暗灰色土		
581	ピット	L-58	椭円形	16×12×24	42.26	暗灰色土		
582	ピット	L-58	椭円形	18×16×36	42.19	暗灰色土		
583	ピット	L-58	椭円形	18×17×24	42.24	暗灰色土		
584	ピット	L-58	円形	22×22×30	42.18	暗灰色粘質土	木	SB-1009
585	ピット	L-58	円形	26×20×30	42.21	暗灰色土		
586	ピット	L-58	円形	19×14×30	42.17	暗灰色土		
587	ピット	L-58	円形	14×13×22	42.24	暗灰色土		
589	ピット	L-58	椭円形	28×22×32	42.15	暗灰色土	木	SB-1009
591	ピット	K-58	椭円形	18×15×20	42.33	暗灰色土		
592	ピット	K-58	円形	25×22×34	42.23	暗灰色土		
593	ピット	K-58	椭円形	22×14×37	42.24	暗灰色土		
594	ピット	K-58	椭丸形	21×20×11	42.46	暗灰色土		
596	ピット	L-58	円形	24×12×29	42.18	暗灰色土		
597	ピット	L-58	椭円形	38×26×42	42.05	暗灰色土		
598	ピット	L-58	椭円形	20×18×13	42.35	暗灰色土		
599	ピット	L-58	円形	36×33×37	42.09	暗灰色土	木	
600	ピット	L-58	椭丸形	34×30×58	41.89	暗灰色粘質土	木	SB-1008
601	ピット	L-58	椭円形	27×22×50	41.84	暗灰色粘質土		
602	ピット	L-58	椭円形	58×44×25	42.09	暗灰色粘質土		
603	ピット	L-58	椭円形	31×30×62	41.55	暗灰色粘質土 深灰色粘質土		
604	ピット	L-58	椭円形	16×11×7	42.16	暗灰色土		
605	ピット	L-58	椭円形	18×16×32	41.89	暗灰色土	土器群	
606	土坑	M-58	円形	60×58×58	41.58	灰褐色粘質土 暗褐色粘質土	土器群	
607	ピット	M-58	椭円形	20×16×26	41.80	暗灰色土		
608	ピット	M-58	椭円形	20×17×15	41.91	暗灰色土		
609	ピット	M-58	椭円形	18×12×45	41.65	暗灰色土		
610	ピット	M-58	椭円形	16×10×8	41.98	暗灰色土		
611	ピット	L-58	椭円形	25×20×41	41.75	暗灰色粘質土 暗褐色粘質土		
612	ピット	L-58	円形	50×46×42	41.95	暗灰色粘質土 暗褐色粘質土		
613	ピット	L-58	椭円形	46×24×8	42.24	暗灰色粘質土		
614	ピット	L-58	円形	44×38×34	42.09	暗灰色土 淡灰色土	縄文土器 漆器群 磬	
615	ピット	L-58	円形	20×19×17	42.26	暗灰色土 暗灰色土		
617	ピット	L-58	椭円形	22×19×28	42.10	暗灰色土		
618	ピット	L-58	椭円形	36×22×28	42.10	暗灰色土 淡灰色土		
619	ピット	L-58	円形	26×24×30	42.11	黑色粘質土 暗褐色粘質土		
620	ピット	L-58	椭丸形	28×27×43	42.14	暗灰色土		

遺跡名	種別	グリッド	形態	縦 長軸×横軸×厚さ	枚数(cm)	最高高 (直瓶)	覆土	出土遺物	備考
622	ピット	L-58	円筒	32× 32× 6	42.18	明灰色土			
623	ピット	L-58	箱内型	18× 13× 8	42.41	明灰色土			
624	ピット	L-58	倒円筒	35× 30× 54	41.84	黒色粘質土			SB-1008
625	ピット	L-58	箱内型	28× 20× 48	42.03	明灰色粘質土			SB-1008
626	ピット	L-58	円筒	24× 23× 44	42.04	黒色粘質土			SB-1008
627	ピット	L-58	円筒	22× 20× 6	41.96	明灰色土			
628	ピット	L-58	円筒	20× 18× 21	42.15	明灰色土			
629	ピット	L-58	箱内型	32× 18× 24	42.10	明灰色粘質土			
630	ピット	L-58	円筒	30× 28× 52	41.86	明褐色粘質土	鉢		SB-1008
631a	ピット	L-58	箱内型	47× 40× 18	42.19	黒灰色粘質土			
631b	ピット	L-58	箱内型	26× 22× 56	41.81	明灰色土			SB-1008
632	ピット	L-58	箱内型	22× 18× 39	42.02	明灰色土			SB-1008
633a	ピット	M-58	箱内型	26× 23× 62	41.72	黒褐色粘質土			SB-1008
633b	ピット	L-58他	箱内型	32× 26× 13	42.19	黒褐色粘質土			
635	ピット	M-58	箱内型	36× 24× 56	41.73	黒褐色粘質土			SB-1008
637	ピット	L-58	箱内型	19× 14× 7	42.21	明灰色土			
638	ピット	M-58	円筒	16× 16× 29	41.95	明灰色土			
639	ピット	M-58	箱内型	16× 14× 41	41.87	明灰色土			
640	ピット	M-58	扇丸万形	22× 20× 7	42.17	明灰色土			
641	ピット	M-58	円筒	29× 28× 47	41.34	明灰色土			SB-1007
642	ピット	M-58	扇丸万形	26× 22× 37	41.39	明灰色土			SB-1007
643	ピット	M-58	円筒	14× 11× 12	41.66	浅灰土			
644	ピット	M-58	角円筒	26× 19× 39	41.42	明灰色土			
645	ピット	M-58	円筒	18× 16× 29	41.37	明灰色土			
646	ピット	M-58	円筒	23× 20× 34	41.53	明灰色土			SB-1007
647	ピット	M-58	円筒	20× 20× 12	41.87	明灰色土			SB-1007
649	ピット	M-58	円筒	23× 22× 30	41.49	明灰色土			
650	ピット	M-58	円筒	24× 22× 13	41.72	明灰色土			
651	ピット	N-58他	円筒	26× 26× 30	41.35	明灰色土			SB-1007
652	ピット	N-59他	円筒	23× 23× 12	41.70	明灰色土			
653	ピット	M-59	角円筒	21× 18× 9	41.95	明灰色土			
654	ピット	M-59	円筒	24× 22× 21	41.77	明灰色土			
656	ピット	L-59	角円筒	24× 20× 6	42.42	明灰色土			
657	溝	M-58他	溝状	2170× 196× 39	41.55	浅灰土	土壁面 近世陶器 縁		
664a	溝	K-41他	溝状	978× 78× 19	43.36	明灰色土	土壁面 漢唐面 近世陶器 縁		
664b	溝	J-62	溝状	593× 38× 21	43.45	明灰色土			
664c	溝	L-62	溝状	260× 68× 47	43.86	黒褐色土			
666	ピット	I-52	扇丸万形	40× 40× 26	44.08	明灰色土			
667	ピット	I-62	円筒	36× 31× 62	43.52	黒褐色土	木		SB-1011
668	ピット	I-62	円筒	38× 38× 51	43.51	明灰色土			
669	ピット	I-62	扇円筒	36× 24× 36	43.58	浅灰土	木		
670	ピット	I-62	円筒	46× 42× 27	43.02	明灰色土			
671	ピット	I-62	円筒	44× 42× 10	43.32	明灰色土			
674	ピット	I-62	円筒	84× 83× 37	42.79	明灰色土	土壁面 近世陶 縁		
677	ピット	I-62	円筒	15× 13× 8	43.35	明灰色土	粗粘面 縁		
678	ピット	I-62	三脚状	33× 27× 10	43.30	明灰色土	土壁面		
679	溝	G-51他	溝状	966× 74× 24	42.20	明灰色土	瓦塊		
680	ピット	H-62	円筒	30× 30× 19	44.32	明灰色土			
682	ピット	G-61	円筒	18× 16× 8	45.07	明灰色土			
683	ピット	G-61	扇円筒	17× 12× 6	45.13	明灰色土			
684	ピット	G-61	円筒	19× 16× 8	45.06	明灰色土			
685	ピット	M-58	扇円筒	43× 36× 8	42.16	明灰色土			
686	ピット	L-58	扇円筒	17× 12× 32	41.94	明灰色土			
687	ピット	M-58	円筒	21× 19× 25	41.52	明灰色土			SB-1007
688	ピット	L-58	扇円筒	28× 23× 21	42.02	明灰色土			
689	ピット	L-58	扇円筒	19× 16× 29	41.92	明灰色土			
690	ピット	L-58	扇丸万形	20× 16× 33	42.09	明灰色土	土壁面		
691	ピット	M-58	扇円筒	16× 12× 17	41.91	明灰色土			
692	ピット	L-58	扇円筒	35× 30× 12	42.24	明灰色土			
693	ピット	L-57	円筒	34× 34× 9	42.21	明灰色土	土壁面 近世陶器 縁		
694	ピット	L-57	円筒	16× 14× 36	41.90	明灰色土			
695	ピット	L-65	扇円筒	24× 20× 32	41.49	明灰色土			
696	ピット	K-55	扇丸万形	18× 18× 25	41.79	黒褐色土			
697	溝	N-58	溝状	160× 114× 23	41.42	灰黄色土	暗褐色土		
698	ピット	L-58	扇円筒	42× 33× 34	42.20	明灰色土	明灰色土		
699	ピット	K-57	P1形	32× 24× 36	41.82	明灰色土	木		
701	南路跡	K-55他	沢状	- × -	-	-	-		
702	ピット	I-62	P1形	34× 32× 30	44.01	明灰色土	木		SB-1011
703	土壤	H-58	扇円筒	250× 200× 12	44.32	明灰色土			
704	ピット	K-63	P1形	24× 22× 44	42.93	明灰色土			

3 遺物

宮田遺跡からは、全体でテンバコ約30箱分の遺物が出土している。その内容は、大半が容量の大きい柱根によって占められるが、おおよそ土器・陶磁器類は8箱分、礫を含む石製品類は7箱分であり、わずかに銭貨などがこれに伴っている。

本節では、まず今回の出土遺物で主体となる古代の土器類について述べ、次に縄文時代・中世・近世の土器・陶磁器類、さらに木製品・石製品・銭貨と種別に報告していきたい。

1) 古代の土器類

古代の土器類に含まれるものとしては、須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器がある。まず、これらの資料について概観し、次に各説を述べる。

a 概観と分類

古代の土器類は、土師器が全体の約6割、須恵器が約4割を占めるが、そのほかに黒色土器と灰釉陶器が数点ずつ存在する。ほとんどが小破片によって占められるが、SD-346・SD-378aといった溝跡からは概してまとまった出土量がある。また、SD-1・17とした中～近世の遺物をも含む河川跡からの出土量もやや多い。出土遺物の点からいえば、これらが主要な遺構となるのであり、特にSD-346・SD-378aは報告にあたっても中心的な遺構となった。ただし、その他の柱穴や包含層出土の土器類もできるだけ報告するように努めた。なお、宮田遺跡から出土した古代の土器類には大きな時期差などは看取されず、次章にて検討するように9世紀後葉～10世紀初頭を中心とした年代が想定できる。

以下、出土遺構別に土器・陶器類を説明していくが、まずは本遺跡における器種や胎土による分類を提示しておきたい。

i) 須恵器

出土した須恵器のうち、75点を報告する。機能から大きく分類すると、食膳具と貯蔵具がある。食膳具には有台杯・無台杯の2器種が、貯蔵具には長頸瓶・甕・横瓶の3器種があるため、本遺跡には計5器種の須恵器が認められる。なお、判別し難いものも含まれるが、大半は佐渡小泊窯産の製品と思われる。

有台杯 全体で4点出土しているが、器形を把握できるのは1点のみで、ほかは小片である。しかし、底部片のみのものを除けば、すべて深身のタイプの有台杯と考えられる。形態による分類は困難であるが、内外面のロクロ成形痕を平滑に調整するもの（a類）とロクロ成形痕を残すもの（b類）があることを指摘しておきたい。

無台杯 須恵器の中で出土量の多いのは無台杯である。ただし、圓化が可能であったのは全体で13点にすぎず、器形全体を把握できるのはわずかに5点のみであった。そのため、法量による分類は難しく、形態による分類を試みてみた。

第11図は、口径・底径・器高が計測もしくは推測できた須恵器・土師器食膳具の法量分布を示している。須恵器無台杯の口径については、ほぼ12～13cmに集中しており、法量は底径と器高の数値によって分化している。このような法量分布も参考にしながら形態分類すると、まず器高3cm前後を境界として、浅身のタイプ（A類）と比較的深身のタイプ（B類）に大別できる。8の器形に歪みがみられるため、分布図上ではやや隔絶された位置にあるが、これを加味すれば、A類は底径7cm前後、器高2～3cm、B類は底径

7～8 cm、高さ3 cm前後となる。A類は、体部が外傾しながらほぼ直線的に立ち上がるものである。今回は全体でも2点のみであったため、細分は避けたい。B類は、さらに2類に細分できる。B1類は、体部の立ち上がりに幾つか内弯した形態を認めるもので、体部・底部とも器厚が約4～5 mmと厚めである。B2類は、体部が直線的に外傾して立ち上がり、平均的な器厚が約2 mmと薄いものである。無台杯13点のうち、A類2個体、B1類4個体、B2類7個体あり、B2類が量的には半数を占める。なお、B2類の形態は佐渡小泊窯群における江ノ下窯の製品に類似するものである。

長頸瓶（含：瓶・壺類） 確実に長頸瓶といえるものは、口縁部や頸部もしくは頸部を伴う胴部片4点が出土している。この他に胴部下半や底部片・高台片のみが出土している場合があり、器種は特定できないが、瓶類もしくは壺類と思われる。

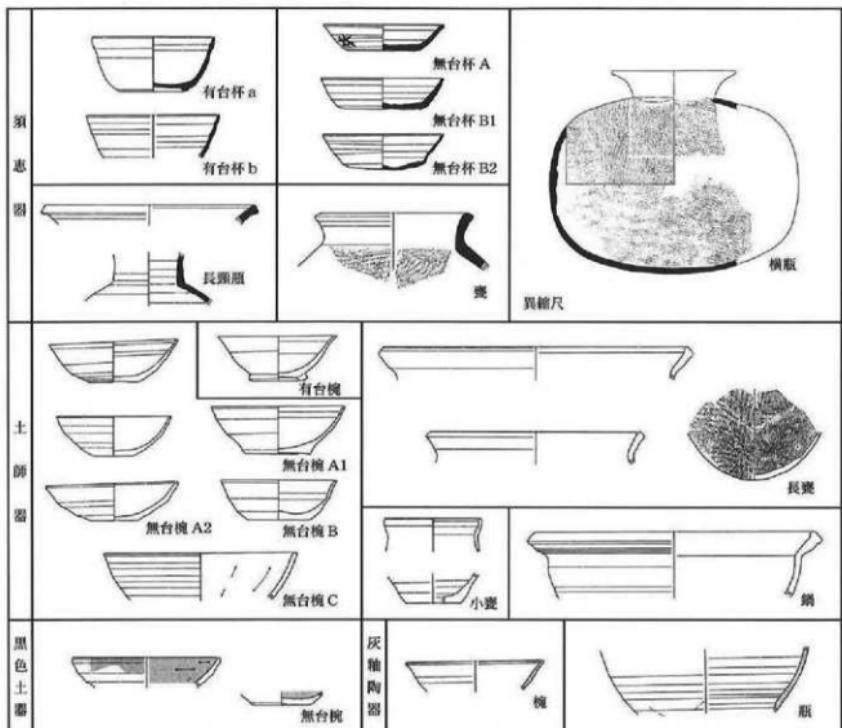
横瓶 破片接合の結果、遺存率が約1/2となったものが1点、細片で、横瓶の可能性にとどまるものが1点出土している。このほかにも横瓶の破片がある可能性は否定できないが、甕との識別ができないため、その場合は甕として一括することとした。

甕 器形を把握できるものではなく、すべて破片資料である。ここでは、形態ではなく、甕や横瓶の体部にみられる叩き目と当て具痕の種類を示しておく¹¹。叩き目の種類については、おおむね平行線文（H類）と格子文（K類）がある。H類としては、叩き板の掘り込みに対して木目が直交するもの（H a類）、右上がりに斜行するもの（H b類）がある。当て具痕についても、叩き目に準拠して分類すれば、おおむね同心円文（D類）と平行線文（H類）にまとめることができる。D類としては、木目がみえないもの（D a類）、年輪状の木目がみえるもの（D b類）、柵目状にみえるもの（D c類）がある。H類は叩き目と同様としたが、横瓶15の当て具痕がH a類に近いものの、片側が弧を描いており、当て具の使用方法に甕との差異を見出すことも可能である。今回出土した資料には、叩き目H a類・当て具痕D a類、叩き目K類・当て具痕D a類となる組合せの破片が比較的多く見受けられた。

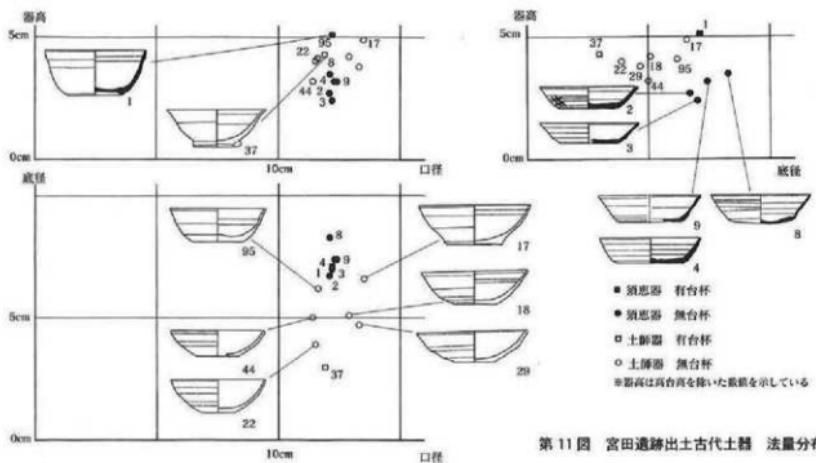
胎土 今回出土した須恵器の胎土について、肉眼の観察による分類を行いたい。それぞれの呼称については、土器の胎土分類との混同を避けるため、Sを冠して「S○類」とした。焼成の具合によって、硬質なものと軟質なものとがあるが、大きくはS1～S4類の分類にとどめた。

S1類は、おむね緻密であり、軟質感を持つものである。食膳具にはみられず、貯蔵具において数点ほど確認された。S2類は、S1類のように緻密なものであるが、軟質感なく、白色を呈した長石の微粒子がやや多く混じるものである。ここにみられる長石粒は、ほとんどが点に近い微粒子であり、径1 mmほどの粒子もあるが、わずかに散見される程度である。このほかに、黒色の微粒子も多く混じる。杯類や瓶類にはこのS1類が多くみられるが、黒色微粒子が比較的少ないもの（S1a類）とやや多いもの（S2b類）、非常に多く混じるもの（S2c類）に細分した。なお、S2a類を有する杯類の器面には、黒色を呈した不純物の吹き出しが多く付着している場合がある。S2c類は、甕にみられ、内面が白色に発色しているものが多い。S3類は、白色粒子がS2類よりも大きく、さらに多く混じるものである。黒色微粒子も伴っているが、全体的に白色粒子が目立つ。S4類は、白色粒子と黒色粒子がS2・3類よりも大きく、多く混じるものである。黒色粒子がより多く混じるもの（S4a類）、黒色・白色ともに微粒子が多いもの（S4b類）に細分される。このS4類も、食膳具にはみられず、甕をはじめとする貯蔵具に多くみられる胎土である。

なお、ほとんどが佐渡小泊窯産の製品と考えられるが、一部に疑問視されるものがある（14など）。現段階では產地の特定ができず、今後の課題となつた。



第10図 宮田遺跡出土古代土器類器種分類図 (1:5)



第11図 宮田遺跡出土古代土器 法量分布図

ii) 土師器

出土した土師器のうち、79点を報告する。機能や用途によって分類すれば、食膳具と煮炊具がある。食膳具としては無台椀・有台椀の2器種、煮炊具としては長甕・小甕・鍋の3器種がみられるので、今回出土した土師器は合計5器種で構成されている。破片資料が多く、全体の器形を把握できるものは少ないため、法量による分類を参考しながらも、おもに形態によって分類を試みたい。

無台椀 土師器の中で量的に主体となっているのは無台椀である。今回は58点を図化した。やはり破片が多く、全体的な形態や法量がわかるのは、わずか6点である。また、形態の違いが微妙な底部片のみである破片も多く、すべてについて分類しきることはできなかった。ここでは、器形を把握できた6点を中心に分類を試みる。なお、確認できた底部切離し技法はすべて回転糸切りによる。

まずは、全体の形態としてA～C類の3類に大別した。A類は、体部が全体的に内湾して深身となるタイプである。さらに細分すれば、底部から体部へ移行する部分の器厚が厚く、外面に明瞭な境界を持って体部が立ち上がる（A 1類）と、外面における底部～体部の境界が不明瞭なもの（A 2類）がみられる。これは、体部下半～底部の形態の違いであるため、底部を欠失する破片については細分することはできなかった。法量による細分もできそうであるが、小片から法量復元を試みたものが多いため、今回は留保した。B類は、同じく深身の形態となるが、A類のように内湾せず、体部中位で内側にやや屈曲して口縁部に至るものである。形態は箱形に近いため、口径に対する底径の割合はA類よりも大きい。C類は、口径が20cmほどもあり、口径11～16cmである他の無台椀とは法量に明かな格差を有するものである。

これらの中では、A 2類が量的に多く、A 1・B・C類は各々1～2点であった。

有台椀 SD-346から3点出土している。底部と体部との屈曲部分は丸みを帯び、境界は不明瞭になっている。体部はやや内湾して立ち上がるが、口縁部は外反する。また、上位に向かうにつれて器厚は薄くなっていく。底部と体部の境界部分に外側へ向かう高台が貼り付けられている。10～11世紀などにみられる有台椀とは系譜的に連続するとは考えにくく、当該地域における独特の形態と思われる。

長甕 9点を図化した。うち7点は口頭部で、ロクロ成形による。口縁端部の形態には、バラエティがあるが、少数であるため、分類は留保する。ほかは体部片、底部片が各1点出土しているおり、体部外面には平行線文の叩き目がみられるものの、内面の当て具痕は不明瞭である。底部は丸底である。

小甕 5点を図化した。うち3点は底部を含む破片である。ロクロ成形の平底で、底部切り離し技法は回転糸切りによる。形態的な特徴としては、口縁部が直線的で、外傾して立ち上がるものと、内側に湾曲して受口状をなすものがある。

鍋 口縁部～体部上半の破片2点を図化した。ロクロ成形による。

胎土 須恵器と同様に肉眼の観察による分類を行う。それぞれの呼称については、須恵器の胎土分類との混同を避けるため、Hを冠して「H〇類」とした。須恵器と異なってバラエティに富むが、大きさはH 1～4類に大別される。

H 1類は、軟質感があり、雲母やチャートなどの粒子がやや混じるもの、その大きさは微細である。粒子の少ないもの（H 1 a類）とこれよりやや多いもの（H 1 b類）に細分した。2類は、浅黄橙色～橙色を呈する胎土である。径0.5～1mmほどの長石・石英・チャート・褐色粒が混じる。3類は、おおむね浅黄橙色を呈するものである。軟質感を持ち、径約1mmのチャート粒などを含むもの（H 3 a類）、白色・褐色・黒色の微細な粒子をやや多く含むもの（H 3 b類）、全体的に粗く、粒子もH 2 b類よりも多く含むもの（H 3 c類）に細分した。H 4類は、径0.5～2mmの砂粒を多く含むものである。

iii) 黒色土器

内面に黒色処理を施し、ミガキ等の調整を加えて平滑にした「内黒」と呼ばれる土器である。今回の調査では、破片を2点得たのみであった。小片のために器形は明らかにできないが⁵、2点とも無台椀の一部と思われる。なお、外面に赤彩などはみられなかった。また、胎土については、土師器の分類に準じた。

iv) 灰釉陶器

全体で3点の破片を得ることができた。器種別には碗類2点、瓶類1点である。しかし、全体の器形を把握できるものはなく、図化も椀類・瓶類各1点が可能となったのみである。いずれも胎土から窯投産の製品である可能性がある⁶。

b 土器類各説 (図版105~112・178~186)

宮田遺跡で出土した土器類の大半はSD-346およびSD-378aから出土しており、この2遺構が遺物の出土量からみれば主要な遺構といえる。土器類の報告にあたっては、出土遺構別にSD-346、SD-378a、その他の遺構、河川跡、遺物包含層等にまとめて説明する。ただし、法量の数値や色調などといった個々のデータについては観察表(第7表)にまとめたので、ここでは概略的な内容を述べ、特徴をまとめていくこととした。

1) SD-346 (図版105・106・178・179・180)

本遺構は、調査区の北西部、F~H-58~62グリッドを逆「く」の字に流れる溝跡である。G~H-59~60グリッドを中心にまとまった量の土器類が出土している。内容は須恵器と土師器に限られるが、墨書き器や横瓶・有台椀が含まれるので、何らかの儀礼に関わる遺構であったことがうかがわれる。破片数による出土量の割合は、須恵器：土師器=約1:9である。

① 須恵器 (1~16)

16点を報告する。内容は、有台杯1点・無台杯12点・長頸瓶1点・横瓶1点・甕1点がある。

有台杯 (1) 1は、本遺構から出土した唯一の有台杯で、完形率も9割ほどである。器面の調整から今回は有台杯a類とした。器形は、底部からやや緩い屈曲を経、外傾してほぼ直線的に立ち上がる。ただし、体部上半は強いナデによって外面がややくびれて口縁部に至っている。内外面とも、全体的に平滑なナデ調整が施されているようであるが、体部上半のロクロナデが強いため、その痕跡は明瞭に残っている。底部は回転ヘラ切りによってなされ、高台が貼り付けられた際に調整される。高台は外端接地であるが、断面が三角形で、形態の退化がうかがえる。底部外面との境界をあまり明瞭にせず、体部下半からのカーブの延長のようにみえる部分もある。体部外面の約1/2には薄い自然釉がみられる。

無台杯 (2~13) 今回の分類に従えば、A類が12個体(2~3)、B1類が4個体(4~7)、B2類が6個体(8~13)となる。

2は、完形品である。底部から体部への屈曲は緩く、やや丸みを帯びるために外面の境界はさほど明らかではないが、内面は見込み部分のナデが強く、明瞭である。器面、特に外面にはロクロ成形痕が顕著にみられる。外傾して立ち上がる体部はほぼ直線的であるが、口縁部のナデが強いため、やや外反した形態となっている。口縁端部には、2~3mmにわたって、重ね焼きによる黒色帶がみられる。また、体部外面には墨書きがあり、「井」もしくは記号の「#」と読まる。文字(記号)は正面に書かれ、縦約2cm×横約2.5cmの大きさである。3は、口縁部~底部まで遺存するが、全体の1/5程度にすぎない。外面にはロクロ成形痕が残り、2よりも体部~底部への境界は明瞭である。また、内面は体部に平滑なナデが施されている。

4は、1/2ほどが遺存する。体部の立ち上がりは幾つか内窓している。外面は、体部のロクロ成形痕や回転ヘラ切りの痕跡は明瞭である。ただし、内面はかなり摩滅しており、体部はほとんど平滑である。何か強く擦られたか、もしくは使用頻度の高さを示すものと思われる。口縁部外面には、3~4mmの黒色帯がある。無台杯では、4のみが胎土S 2 d類となった。5~6は、いずれも小片であり、全体の器形を把握することはできなかったが、体部の器厚が他よりもやや厚いため、B 1類に分類した。5は、口縁部~体部の破片である。体部上半内面の強いナデにより、口縁部が内側にやや屈曲した形態となっている。口縁部外面は、幅約12mm前後にわたって灰褐色を呈しているが、やはり重ね焼きの痕跡と考えられる。また、4ほど顕著ではないが、体部内面には摩滅が認められる。6は、体部下半~底部片である。外面における体部~底部の屈曲部は平滑で、丸みを帯びている。7は、体部下半の一部を伴う底部片である。6と同様に、体部~底部の屈曲部には丸みを持つ。底部外面には、ほぼ中央に「田」と読まれる墨書きがある。大きさは、縦2.4cm×横3.2cmである。

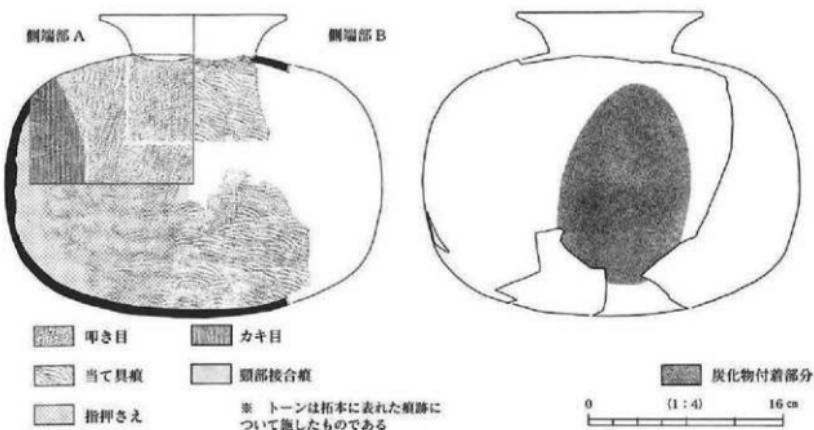
8は、遺存率が9割ほどであるが、底部が歪んだ墨形となっている。底部~体部の境界部分には丸みがあり、内面の見込み部分のナデが強い。また、体部下半外面のナデも強いため、体部の立ち上がりにくびれがみられる。体部上半はほぼ直線的となるが、内面のナデにより、口縁部は内側に幾つか湾曲する。口縁部には、内面に約6mmの黒色帯があり、外面にも部分的にみられる。また、底部外面には、非常に薄くなっているためにあまり明瞭ではないが、「十」と読める墨書きが認められる。中央よりも下位にあり、大きさは縦約2.5cm×横約5cmである。9は、口縁部~底部まで遺存するが、遺存率は1/8ほどである。8と同様に、体部の形態にはくびれがあるが、体部~底部の境界にはあまり丸みを持たない。やはり口縁部には内外面それぞれに約6mmの黒色帯がみられる。10~12は、口縁部~体部片である。10は、焼成がややまく、口縁部にみられる重ね焼きの痕跡も灰白色である。11・12は、8・9ほど顕著ではないが、やはり体部がややくびれる。口縁端部は黒色になっている。13は、体部下半~底部片である。体部の器厚が薄いことからB 2類とした。体部と底部との外面における境界部分は、平滑で丸みを持つ。

長頸瓶(14) 本遺構出土のうち、明らかに長頸瓶とできるものは、14の1点のみとなつた。14は、口縁部の小片である。ロクロ成形であり、口縁部外端がやや外側へつまみ出される。本遺構出土須恵器のうち、14のみ胎土がS 4b類としたが、佐渡小泊窯産とは異なる製品の可能性がある。

横瓶(15) 閉塞円盤を有する側端部(「側端部A」と仮称)を伴うことから、横瓶であることが判明した。破片接合の結果、胴部の1/2以上を得ることができたが、もう一方の側端部(「側端部B」と仮称)は確認されなかつた。胴部は横長の長胴形であるが、側端部付近で緩く折れているため、全体としては俵形に近い。胴部の長さは約38cm、最大胴径は21.7cmと推測される。口頭部は遺存していないが、胴部の一部から頭部の接合部分が認められた。接合部分で推定できた直径は12.4cmである。これをもとに、実測図では頭部接合部分の図上復元を行つた。

また、横瓶はその特異な器形のために複雑な製作方法が用いられるが、内外の器面には多様な製作上の痕跡が観察される。完形ではないことによる制約は大きいが、ここではこの横瓶の製作方法について若干の復元を試みたい³⁾。

まず、胴部が成形される(工程1)。側端部とその付近を除く外面に叩き目、内面に当て具痕がみられる。叩き目は、今回K類とした格子文であるが、他に出土した箇にみられるK類よりも格子の大きさいや小さく、1辺3~4mm程度となっている。当て具痕はH a類であるが、当て具の縁辺部を用いたことによるためか、弧を描いて輪状をなすものが多数みられる。当て具の使用方法については、さらなる検討が



第12図 宮田遺跡出土須恵器横瓶における製作段階の痕跡と付着物

必要である。また、成形段階では側端部A側が上位であったと考えられる。この段階において下位にある側端部B側が底部のように成形されていれば当該資料は側端部Aのみを閉塞する片面閉塞となり、底部が塞がっていなければ両面閉塞の横瓶と考えられる。また、当て具痕の重複関係をみるとロクロは左回転であったと思われる。

次に、上位になっている側端部A側に閉塞円盤が付される（工程2）。その際に、口縁となっている部分（閉塞円盤との接合部分）の形が整えられる。この部分の内面には当て具痕がなく、梢円形の凹みがおおむね4段にわたってめぐっている。下2段は当て具痕に重複するが、工程1後の作業であることがわかる。この凹みは、指の第1関節の外側と考えられる。この作業は、当て具を用いず、おそらく上から左手を内面にあてがつて行ったのであろう。閉塞円盤が付された後は、外面にカキ目が施されて器面が調整される。渦状に中央から外側へ向かって叩き目と重複するカキ目は、左回転のロクロが利用されており、工程1で胴部が据えられたまま、続けて工程2が行われたという推測が可能である。この横瓶が片面閉塞のものであれば、工程2によって胴部は完成となるが、両面閉塞の場合は下位になっている側端部B側に閉塞円盤を付す必要がある。

最後に、器面の観察から考えられる次の工程としては、頭部の接合がある（工程3）。胴部の中央部を穿孔し、別作りの口頭部を接合したと思われる。接合部分の外面には指でナデた痕、内面には指で押さえた痕が観察される。

以上、器面の痕跡から工程1～3を推測したが、可能性のひとつを指摘したにすぎない。また、この横瓶が両面閉塞か片面閉塞かは未解決となった。なお、回転台上で製品を固定する湿台の痕跡等も確認できなかった。このほか、口頭部の下位となる胴部の中央に炭化物の付着が認められた。その周辺には薄い煤もみられ、使用段階における痕跡として注目される。

壺 (16) 胴部の破片である。図化できなかった小片を含めて、壺に分類されるのは、この1点のみとなった。外面には、叩き目の上に1条のハケ目がみられる。

② 土師器 (17~40)

無台椀20点、有台椀3点、小甕1点を図化した。しかし、破片資料が多く、全体の器形を把握できたのは無台椀3点、有台椀1点にすぎない。

無台椀 (17~36) 本遺構出土の無台椀には、A1類 (17・18)・A2類 (19~21・32~35)・C類 (36) がある。また、22~31は細分できないが、A類と考えらる。

17は、口縁部を含む1/8程度が欠損するのみで、全体の器形を把握することができる。底部の縁辺部に厚みがあり、体部との境界が明瞭である。下半では外反気味に立ち上がる体部も、上半では内湾して口縁部に至る。器面はおおむね平滑に仕上げられるが、口縁部にはナデの痕が遺る。また、口縁部の外面には煤が付着している。18は、体部下半～底部片である。底部は17ほど顕著な作りをしていないが、A1類に分類できよう。

A2類としたもので、全体の器形がわかるのは19~21の3点のみである。21は、破片を図上で復元したものである。今回は法量による細分は行わないが、口径・底径は他よりも1~2cmほど小さいため、別器種の想定も可能であるが、21に類似する法量を持つものはないため、指摘にとどめる。19は、部分的に口縁部を欠くが、9割ほどが遺存する。体部下半は内湾するが、上半では直線的になる。また、内面は平滑であるが、一部にはロクロナデの痕が遺る。口縁部の一部には赤色化した部分があり、器面になんらかの顔料が用いられた可能性がある。体部上半の外面に煤を受ける。20は、6割ほどの遺存率で、器形もやや歪む。SD-378a出土の破片とも接合しており、両遺構が同時に機能していたことを示している。また、32~35は、体部下半～底部片である。底径や形態からA2類とした。内面はいずれも平滑になっているが、35の内面には全体的に薄い煤を受けている。

22~31は、下半の形態が不明なため、ひとまず口縁部形態のみからA類に分類した。22~31は、他に比べると極端に破片の大きさが小さいため、法量の復元にはやや正確さを欠くものもある。体部はやはり内湾する形態を持つが、体部が外側にやや反るもの (26) や肥厚するもの (23)などもある。また、口径はほぼ12~13cmの範囲にあるが、31は16.2cmと推計される。さらに、22は深身の形態が想定されるなど、主要なものではないが、別器種の存在も考えられる。

36は、口縁部～体部の破片で、大型のC類である。外面には細かなロクロ成形痕を遺すが、内面は体部に縱方向のミガキが施され、平滑に仕上げられる。胎土はある程度精製されたと思われ、雲母粒や長石粒がやや多く混じるが、いずれも微細な粒子である。本調査区全体でもC類に分類されるのは36のみであった。そのため、本遺構が関係していたと思われる儀礼的な行為で使用された特定の器種であった可能性を指摘できよう。

有台椀 (37~39) 本遺構のみから出土する器種で、3点出土しているが、完形は42のみであった。3点とも器形や胎土は共通しており、法量も均一と思われる。38のみ、高台が横方向に貼り付けられている。また、37は外面に、39は内面に煤が付着している。胎土は共通して雲母やチャートなど、径1mm前後の砂粒が多く混じるH4類である。H4類に分類されるものはこの3点以外ではなく、有台椀に特定した胎土であったと考えられる。

他の遺構出土の土師器をみても、器形や胎土などが共通するものはない。無台椀C類と同様に、本遺構で想定される儀礼的な行為に伴って使用される器種である可能性がある。

小甕 (40) 脊部下半～底部の破片である。ロクロ成形であり、底部には回転糸切り痕を遺す。内外面に煤が付着する。

ii) SD-378a (図版107・108・181~183)

本遺構は、G~H-62グリッドにある不整形な溝状を呈した遺構である。安山岩質の多くの砾とともに、土器類の小片が多く出土した。その内容は、須恵器53点、土師器242点、黒色土器2点、灰釉陶器2点である。しかし、小片が多く、口縁部~底部の形態を把握できるものは2点のみである。完形率は極めて低く、SD-346とは様相が異なる。

① 須恵器 (41~43・70~87)

有台杯2点、瓶類1点、甕18点を図化した。ただし、全体の器形がわかるものは出土していない。

有台杯 (41~42) 2点とも口縁部~体部片であり、ロクロ成形痕を遺すb類としたものである。46は、底部から屈曲して体部が外傾して直線的に立ち上がる。47は、口縁部がやや外反する。また、器壁が厚く、焼成があまい。

瓶・壺 (43) 瓶類もしくは壺類の体部下半の破片と思われる。ロクロ成形であるが、外面は縦位で幅の狭いケズリが施され、平滑な調整が意図されている。また、底部との屈曲部分に高台が貼り付けられた痕跡があるが、遺存していない。

甕 (70~87) 叩き目と当て具痕との組み合わせにはややバラエティがあり、同一個体であっても部位によって当て具などをかえていた可能性がある。

② 土師器 (44~67)

無台椀20点、長甕2点、小甕3点を図化した。須恵器と同様に小片が多い。また、器面が摩耗しているものが多く見受けられた。

無台椀 (44~63) 底部片が多く、口縁部~体部の形態がわかるのは44~46の3点のみである。44は、内窯する体部からA2類とした。器面がやや摩耗しており、内外面には薄い煤が付着する。45~46は、口縁部が強くナデられるために、体部中位で幾つか屈曲し、口縁部は外反気味になる。しかし、全体としては内窯しているので同じくA2類の範疇で考えることとした。

47~63は、いずれも底部片である。底径は6~7cmのものが多いため、A・B類である可能性が高い。さらに、体部への移行部分をみると、A1類のように肥厚するものではなく、B類のように箱形を志向するものもない。したがって、形態としてはA2類に近いと考えられる。また、47の底部外面には、板目状の圧痕がみられる。

長甕 (64~65) 2点とも口縁部の小片である。64は、内窯して立ち上がり、端部が面取り状にナデされる。65は、ほぼ直線的に外傾し、端部を内側に折って丸く張り出させる。

小甕 (66~68) 66・67は口縁部~胴部上半、68は体部下半~底部の破片である。66は、内窯して立ち上がる胴部から、口縁部が外反する。67は、口縁部が受口状を呈している。すなわち、胴部から外側に聞くと、さらに口縁部がほぼ垂直に立ち上がって端部に至る。器面は摩耗しているが、口縁部の内外面は丁寧にナデされていたと思われる。

③ 灰釉陶器 (瓶 69)

胴部下半の破片が1点出土した。長頸瓶もしくは広口瓶の一部と思われる。内外面にはロクロ成形の痕跡があり、外面にはケズリもみられる。また、外面にはオリーブ灰色の釉が施される。球胴の器形が想定され、胴部の湾曲も緩やかで、最大胴径は約20cmと推測されるから、やや大型の瓶であった可能性がある。破片の下端部は底部とのほぼ境界付近と思われるが、器厚が極端に薄くなる。胎土は堅緻で、おそらく猿投産と考えられる。

iii) その他の遺構 (図版109・110・183・184)

S D - 346・S D - 378 a 以外の遺構からは、まとまった量の土器類は出土していない。ここでは、少しずつではあるが、その他の遺構から出土した土器類について説明する。

① S D - 378 b (88~92)

ほとんど小片によって占められているが、土師器無台椀2点、土師器小甕1点、須恵器甕1点、黒色土器無台椀1点を図化した。

土師器無台椀 (88・89) 2点とも底部片である。89は、底部がやや厚めに作り出され、体部との境界を明瞭にしている。

土師器小甕 (90) 口縁部の小片である。大きく外反した口縁部は、端部が上方に摘み上げられ、受口状を呈している。

須恵器甕 (91) 脇部の小片である。外面の叩き目は、H b類がほぼ直交して重なったものである。内面の当て具痕はD a類であるが、重複部分が多い。

黒色土器無台椀 (92) 底部片が出土した。内面はしっかりとした黒色処理が施されているが、摩滅しているため、器面の調整は明かではない。ただし、おそらく底部および体部下半の外面には回転ヘラ削りがなされたと思われる。

② S D - 252 (土師器無台椀 93・94)

本遺構出土遺物も小片が中心であった。93は、口縁部～体部片である。C類であるが、体部上半が内湾している。94は、体部下半～底部片である。

③ SK p - 258 (土師器無台椀 95)

無台椀の口縁部～底部を把握することはできるが、口縁部は約1/8程度の遺存であった。C類であるが、93とは異なり、体部上半は外反して口縁部に至る。

④ SK p - 138 (土師器無台椀 96)

底部～体部下半の破片である。体部の立ち上がりがやや緩く、今回の形態分類に基づけば、B類に属す可能性がある。

⑤ SK p - 426 (土師器無台椀 97)

底部～体部下半の小片である。96と同様に、B類に属す可能性がある。

⑥ SK p - 359 (土師器無台椀 98)

底部～体部下半の小片である。内面の底部付近にはカキ目状のハケ目が1条見受けられた。無台椀にこのような調整がみられたのは98のみであった。

⑦ SK - 330 (土師器鍋 99)

口縁部～体部上半の破片である。ロクロによって成形されている。口縁部の下位を強いナデによって体部との境界が作られる。口縁部は外端が丸く、内端が上方に摘み上げられている。

⑧ SK p - 562 (土師器長甕 100・101)

100は脇部、101は底部の破片である。両者とも外面には平行線文の叩き目が遺るが、内面については凹凸がみられるものの、不明瞭である。両者の胎土を比較すると、100は砂質がやや強いため、別個体の可能性がある。

⑨ SK - 672 (須恵器有台杯 102)

小片であるが、おそらくb類と思われる。外端接地する。

⑩ SK-577 (須恵器無台杯 103)

小片であるが、器厚が薄いことなどが今回のB2類としたものに類似すると思われる。

⑪ SK-294 (104・105)

須恵器の瓶・壺類と甕類の破片を図化した。

須恵器瓶・壺 (104) 壺類もしくは壺類と考えられる体部下半～底部片である。ロクロ成形であり、高台が貼り付けられる。高台の端面は平坦であるが、外端接地する。

須恵器甕 (105) 脊部片である。器面が摩滅しているため、当て具痕などの観察は充分ではないが、頸部に近い部位の破片と思われる。

⑫ SD-664b (須恵器瓶 106)

おそらく瓶の一部と思われるが、高台のみが遺存している。高台の端面は窪み、内端接地する。

⑬ SKp-202 (須恵器甕 107)

脛部片である。口頸部と接合する部分の外面には強いナデがみられる。焼成はややあまく、外面には自然釉がかかる。胎土には雲母粒や黒色微粒子が多く混じる。これらのことから、後述の116・117・147・184と同一個体と考えられる。

⑭ SKp-674 (須恵器甕 108)

脣部の小片である。外面の叩き目は、Hb類が重なったものである。

⑮ 中村C-20トレンチSKp-1 (須恵器甕 109)

脣部の破片である。第1次試掘確認調査におけるトレンチから検出された柱穴より出土した。

iv) 河川跡 (図版110・184)

SD-1とSD-17は中世および近世以降に流れていた流路である。中・近世の土器類のほかに古代の土器類も出土しているため、報告しておきたい。

① SD-1 (110～122)

中世土師器のほか、土師器無台椀・長甕・小甕、須恵器甕、灰釉陶器碗が出土している。

土師器無台椀 (110～112) すべて底部片である。いずれもA類もしくはB類と思われるが、形態は不明である。

土師器長甕 (113) 口縁部片である。ロクロによって成形される。脣部から屈曲した後、外傾して立ち上がり、口縁端部に至るまでに肥厚していく。端面は窪み、内端は上方へ摘み上げられる。

土師器小甕 (114) 体部下半～底部片である。ロクロによって成形される。

須恵器甕 (116～119) 116は口縁部～脣部上半、117～119は脣部上半の破片である。116は、中型の甕と考えられる。口頸部は外反し、端部は外方に張り出される。

灰釉陶器椀 (115) 灰釉陶器では唯一椀類とみなせるのものである。ただし、口縁部～体部の小片のみが遺存する。ロクロ成形であり、口縁部は外反する。内外面には明オリーブ灰色の釉薬が施される。胎土は灰白色を呈し、白色もしくは黒色の微粒子がやや多く混入する。黒窯90号窯段階のものであろうか [斎藤1989]。

② SD-17 (120～122) 近世陶器や銭貨のほかに、古代の土器類も含まれる。

須恵器長頸瓶 (120) 頸部の破片である。ロクロ成形の痕跡を遺している。

須恵器甕 (121・122) 2点とも脣部片である。器面にはやや摩滅がみられる。

灰釉陶器 (a) 小片が出土しているが、器種は不明である。

v) 包含層等 (図版111・112・185・186)

ここでは、遺物包含層など、遺構外から出土した土器類を報告する。出土状況には、それぞれに何らかの関係を見出すことはできなかつたため、一括して種別・器種ごとに説明する。

① 須恵器 (137~158)

食器具ではなく、長頸瓶や横瓶の可能性があるものや、甕などの貯蔵具が出土している。

長頸瓶 (137~139) 137は、頸部下半～胴部上半の破片である。ロクロ成形であり、特に頸部内面にはその痕跡が明瞭である。全体的に薄手で、S1類の胎土も堅緻である。肩部には丸みを持ち、頸部は直接接合される。138は、137と同様に頸部下半～胴部上半の破片で、頸部と胴部とは直接接合される。ただし、厚手であり、胎土もS2類で、やや粗い。頸部内面には薄い自然釉がかかり、外面には漆が付着している。139は、体部下半の破片であり、長頸瓶とは断定できないが、瓶類の可能性があるため、ここに報告する。外面は緩やかに内湾しているが、内面には底部へと連続する屈曲部分がみられる。

横瓶 (140) 断定はできないが、横瓶の可能性がある破片である。片面閉塞のもので、閉塞側ではない側端部と思われる。破片は「へ」の字に屈曲し、外面にある不整な沈線状の窪みが胴部と側端部との境界をなしている。胴部は厚手で内湾し、側端部は薄手で平坦もしくは一部反った形態となっている。外面にはHb類の叩き目がみられるが、やや粗いナデ調整を受けたと思われる。内面の当て具痕はD類であった可能性があるが、その後の調整によって不明瞭になっている。

甕 (141~158) すべて破片資料である。胎土の観察から、144・149・155は同一個体の可能性がある。また、159~161は、79・114・123と同一個体と思われる。さらに、157の内面をみると、Hb類の当て具痕の後、Da類が施されていることがわかる。

② 土師器 (123~134)

やはり小片が多かったが、無台碗7点、長甕4点、小甕1点、鍋1点を図化した。

無台碗 (123~129) 123は口縁部から体部片、124~129は体部下半～底部片である。A類などが想定されるが、詳細は不明である。

長甕 (130~133) いずれも口縁部を伴う小片で、頸部が「く」の字にくびれて、口縁部が外傾する形態である。ただし、端部をわずかに外方へ引き出るもの(130)、内側に強く張り出させるもの(131)、折り込むように内側へ屈曲させるもの(132)、さらに全体的に厚手のもの(133)とバリエティがある。131は内面に、133は胴部外面に煤が付着する。

小甕 (134) 体部下半～底部片である。ロクロ成形で、焼成がややまく、器面も摩滅する。

鍋 (135) 口縁部～体部片である。ロクロによって成形される。内湾する体部から、屈曲して外傾する口縁部が作られ、肥厚して端部に至る。内端・外端とも、それぞれ引き出されている。胴部外面に煤が付着する。

③ 黒色土器 (無台碗 136)

口縁部～体部上半片である。口縁部内面は横方向、体部は縱方向のミガキがある。また、内面にはタール状の付着物がある。

c 墨書き土器 (2・7・8 図版186)

墨書き土器は全体で3点出土している。すべてSD-346溝跡から出土した須恵器無台杯である。2は体部下半外面に「井」(「#」)、7は底部外面に「十」、8も底部外面に「田」とある。詳細は各説にて述べたが、記載されている文字はいずれも縦画・横画のみで構成されていることが共通するといえよう。

第7表 宮田遺跡出土古代土器観察表

番号	出土位置	種別	器種	口径	底径	高さ	形態・調査等	色調	焼成	胎土	備考
1	SD-346No.37・No.41・C区中層	須恵器	有台杯a	12.2	6.5	5.5	底部回転へ少切り・脇り付け灰	灰	良	S 2 b	高台径6.5cm・高台高0.3cm・小泊産
2	SD-346No.7	須恵器	無台杯A	12.1	6.7	2.7	底部回転へ少切り	灰	良	S 2 a	瓶外部に墨書き「井」(「ヰ」)・小泊産
3	SD-346No.8・C区	須恵器	無台杯A	12.2	7.0	2.4	底部回転へ少切り	灰	良	S 2 a	小泊産
4	SD-346No.28	須恵器	無台杯B 1	12.3	7.4	3.2	底部回転へ少切り	灰	良	S 3	小泊産
5	SD-346No.57・C区下層	須恵器	無台杯B 1	12.9	-	-		灰	中良	S 2 a	小泊産
6	SD-346No.73	須恵器	無台杯B	-	7.8	-	底部回転へ少切り	灰	良	S 2 a	小泊産
7	SD-346No.76	須恵器	無台杯B 1	-	7.8	-	底部回転へ少切り	灰	良	S 2 a	底部外側に墨書き「田」・小泊産
8	SD-346No.74	須恵器	無台杯B 2	12.1	8.3	3.5	底部回転へ少切り	灰	良	S 2 a	底部外側に墨書き「十」・小泊産
9	SD-346No.23	須恵器	無台杯B 2	12.4	7.4	3.2	底部回転へ少切り	灰	良	S 2 a	小泊産
10	SD-346No.62	須恵器	無台杯B 2	12.4	-	-		灰	良	S 2 a	小泊産
11	SD-346No.35	須恵器	無台杯B 2	12.6	-	-		灰	良	S 2 a	小泊産
12	SD-346No.36	須恵器	無台杯B 2	12.8	-	-		灰	中良	S 2 a	小泊産
13	SD-346No.24	須恵器	無台杯B 2	-	7.2	-	底部回転へ少切り	灰	良	S 2 a	小泊産
14	SD-346C区	須恵器	縦縫縦	21.8	-	-		灰	中中不良	S 4 b	
15	SD-346No.5・No.21 No.22・No.27・No.33, No.44・No.47・No.48・ No.65・C区・C区上層・ C区下層 G-80含銅	須恵器	縦縫				外: K類 内: Ha類	灰	良	S 3	脚部最大径21.7cm・ 小泊産
16	SD-346No.1・ No.2・No.3	須恵器	縦縫				外: Hb類 内: Da類	灰	中良	S 3	小泊産
17	SD-346No.69	土師器	無台碗A 1	13.5	6.6	4.9	底部回転斜切り	淡	中中不良	H 2	
18	SD-346No.60	土師器	無台碗A 1	-	5.5	-	底部回転斜切り	浅黄褐	中中良	H 3 a	
19	SD-346No.14	土師器	無台碗A 2	12.9	5.1	4.2	底部回転斜切り	浅黄褐	中中良	H 1 a	
20	SD-346No.46・No.49・ No.51・SD-378C区	土師器	無台碗A 2	-	4.6	-	底部回転斜切り	橙	中中良	H 2	
21	SD-346No.70・No.78	土師器	無台碗A 2	11.5	3.9	4.0	底部回転斜切り	浅黄褐	中中不良	H 3 a	脚上腹元
22	SD-346No.12	土師器	無台碗A	14.0	-	-		浅黄褐	中中良	H 3 a	
23	SD-346No.25	土師器	無台碗A	12.6	-	-		浅黄褐	中中良	H 3 a	
24	SD-346No.67	土師器	無台碗A	12.2	-	-		赤褐	中中良	H 2	
25	SD-346C区	土師器	無台碗A	12.6	-	-		浅黄褐	良	H 3 a	
26	SD-346No.63	土師器	無台碗A	12.4	-	-		浅黄褐	中中良	H 1 a	
27	SD-346No.69	土師器	無台碗A	12.7	-	-		浅黄褐	中中良	H 3 b	
28	SD-346No.71	土師器	無台碗A	12.8	-	-		浅黄褐	良	H 3 a	
29	SD-346C区中層	土師器	無台碗A	12.4	-	-		橙	中中不良	H 2	
30	SD-346No.55	土師器	無台碗A	13.8	-	-		浅黄褐	中中良	H 3 b	
31	SD-346No.9	土師器	無台碗A	16.2	-	-		浅黄褐	中中良	H 3 a	
32	SD-346No.61	土師器	無台碗A 2	-	6.0	-	底部回転斜切り	浅黄褐	中中良	H 3 b	
33	SD-346C区上層	土師器	無台碗A 2	-	6.1	-		橙	中中不良	H 2	
34	SD-346No.18	土師器	無台碗A	-	5.3	-	底部回転斜切り	浅黄褐	中中良	H 2	
35	SD-346No.64	土師器	無台碗A 2	-	5.5	-	底部回転斜切り	浅黄褐	中中良	H 1 a	
36	SD-346No.80・No.81	土師器	無台碗C	19.4	-	-	体部内面5.才牛	浅黄褐	良	H 1 b	
37	SD-346No.13	土師器	有台碗	11.9	2.9	4.6	脇り付け高台	浅黄褐	良	H 4	高台径5.8cm・高台高0.4cm
38	SD-346No.34	土師器	有台碗	-	3.8	-	脇り付け高台	橙	良	H 4	高台径5.5cm・高台高0.2cm
39	SD-346No.79	土師器	有台碗	-	4.3	-	脇り付け高台	浅黄褐	良	H 4	高台径5.5cm・高台高0.3cm
40	SD-346No.54	土師器	小甕	-	5.6	-	底部回転斜切り	黄褐	良	H 3 b	
41	SD-378aC区	須恵器	有台杯b	13.3	-	-		灰	良	S 2 b	小泊産
42	SD-378aC区	須恵器	有台杯b	14.7	-	-		灰	中中良	S 2 a	小泊産
43	SD-378aC区	須恵器	縦縫	-	14.0	-	各部下半外側に羅方向のケズリ	灰	良	S 1	小泊産
44	SD-378aC区	土師器	無台碗A 2	11.4	5.0	3.2	底部回転斜切り	橙	良	H 3 c	
45	SD-378aC区	土師器	無台碗	12.8	-	-		中玉・橙	中中良	H 3 c	
46	SD-378aC区	土師器	無台碗	15.8	-	-		橙	中中良	H 3 c	
47	SD-378aC区	土師器	無台碗	-	6.2	-	底部回転斜切り・柱状状粗筋	赤褐	中中良	H 3 c	
48	SD-378aC区	土師器	無台碗	-	5.8	-	底部回転斜切り	浅黄褐	良	H 3 b	
49	SD-378aC区	土師器	無台碗	-	6.6	-	底部回転斜切り	灰白	中中良	H 3 b	
50	SD-378aC区	土師器	無台碗	-	5.3	-	底部回転斜切り	浅黄褐	中中良	H 3 b	

番号	出土位置	種別	器形	口径	底径	器高	成形・調整等	色調	焼成	胎土	備考
51	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	6.6	-	底部回転条切り	浅黄褐	やや良	H3 c	
52	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	6.9	-	底部回転条切り	浅黄褐	やや良	H3 c	
53	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	6.2	-	底部回転条切り	浅黄褐	やや良	H3 c	
54	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	6.4	-	底部回転条切り	にぶい黄 褐色	やや良	H3 c	
55	S D - 378aB区	土師器	無台輪	-	6.3	-	底部回転条切り	純白	良	H3 c	
56	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	3.3	-	底部回転条切り	淡白	やや良	H3 c	
57	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	7.0	-	底部回転条切り	浅黄褐	やや良	H3 c	
58	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	5.4	-	底部回転条切り	褐	良	H3 c	
59	S D - 378aB区	土師器	無台輪	-	6.1	-	底部回転条切り	浅黄褐	やや良	H3 c	
60	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	5.6	-	底部回転条切り	赤褐	やや良	H3 c	
61	S D - 378aA区	土師器	無台輪	-	5.6	-	底部回転条切り	褐	やや良	H2	
62	S D - 378aA区	土師器	無台輪	-	4.4	-	底部回転条切り	褐	やや良	H2	
63	S D - 378aC区	土師器	無台輪	-	6.0	-	底部回転条切り	褐	良	H3 c	
64	S D - 378aC区	土師器	長甌					浅黄褐	良	H3 b	
65	S D - 378aC区	土師器	長甌					にぶい黄 褐色	良	H3 b	
66	S D - 378aB区	土師器	小甌	9.8	-	-		浅黄褐	やや良	H3 c	
67	S D - 378aC区	土師器	小甌					にぶい黄 褐色	良	H3 c	
68	S D - 378aB区	土師器	無台輪	-	5.7	-	底部回転条切り	浅黄褐	やや良	H3 a	
69	S D - 378aA区	灰陶向器	瓶					物: 灰 白・オ リーブ灰 胎: 灰白	良	本文参照	復元座
70	S D - 378aB区	頭蓋器	甌					灰	良	S 4 a	小泊座
71	S D - 378aC区	頭蓋器	甌					灰	良	S 4 a	小泊座
72	S D - 378aC区	頭蓋器	甌					灰	良	S 3	小泊座
73	S D - 378aC区	頭蓋器	甌					青灰	良	S 4 a	小泊座
74	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: H ? 類 内: D ? 類	灰白	良	S 2 c	少の座
75	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: H a 類 内: D a 類	灰	良	S 1	少の座
76	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: H 類 内: D a 類	灰	良	S 1	少の座
77	S D - 378aA区	頭蓋器	甌				外: H b 類 内: D a 類	灰	良	S 4 b	少の座
78	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: H b 類 内: D c 類	純白	良	S 4 b	少の座
79	S D - 378aB区	頭蓋器	甌				外: H c 類 内: D a 類	灰	良	S 4 a	少の座
80	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: H (b ?) 類 内: D a 類	灰	良	S 4 a	少の座
81	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: D a (D c ?) 類	灰	良	S 4 b	少の座
82	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: H a 類 内: D a 類	灰	良	S 4 b	少の座
83	S D - 378aA区	頭蓋器	甌				外: H b 類 内: D a 類	灰	良	S 4 b	少の座
84	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: K 類 内: D c ? 類	灰	良	S 3	少の座
85	S D - 378aC区	頭蓋器	甌				外: K 類 内: H a 類	灰	良	S 4 b	少の座
86	S D - 378aA区	頭蓋器	甌				外: K 類 内: H a 類	灰	良	S 3	少の座
87	S D - 378B-A区	頭蓋器	甌				外: K 類 内: H a 類	外: 灰白 内: 灰	良	S 4 b	少の座
88	S D - 378b	土師器	無台輪	-	7.2	-	底部回転条切り	浅黄褐	やや良	H3 c	
89	S D - 378aC区・378b	土師器	無台輪	-	5.2	-	底部回転条切り	褐	良	H3 c	
90	S D - 378D-A区	土師器	小甌	18.4	-	-		褐	良	H3 b	
91	S D - 378D-A区	頭蓋器	甌				外: H b 類 内: D a 類	灰	良	S 1	少の座
92	S D - 378D-A区	頭蓋器	甌		5.2	-	底部回転条切り	浅黄褐	良	H3 c	
93	S D - 252B区	土師器	無台輪	13.5	-	-		浅黄褐	やや良	H3 a	
94	S D - 252B区	土師器	無台輪	-	5.8	-		淡褐	やや良	H3 b	
95	S Kp - 258	土師器	無台輪	11.6	6.2	4.1		褐	やや良	H2	
96	S Kp - 138	土師器	無台輪	-	5.4	-	底部回転条切り	浅黄褐	良	H3 c	
97	S Kp - 426	土師器	無台輪	-	5.4	-	底部回転条切り	にぶい黄 褐色	良	H3 a	
98	S Kp - 359	土師器	無台輪	-	7.1	-	底部回転条切り・内面に ハゲ目	浅黄褐	良	H3 c	
99	S K - 330	土師器	壺	34.6	-	-		浅黄褐	良	H3 b	
100	S Kp - 562	土師器	長甌				外: H 類 内: ? 類	褐	良	H 2	
101	S Kp - 562	土師器	長甌				外: H 類 内: ? 類	褐	やや良	H3 c	
102	S K - 672	頭蓋器	有台杯	-	9.5	-	脳勺付高台	灰	良	S 4 b	
103	S K - 677	頭蓋器	無台杯 B 2	-	8.7	-	底部回転条切り	灰	良	S 2 a	
104	S K - 294	頭蓋器	瓶々					灰	良	S 4 b	高台径14.7cm・小泊座
105	S K - 294	頭蓋器	瓶々				外: K 類 内: D ? 類	灰	良	S 4 b	小泊座
106	S D - 664b	頭蓋器	瓶々					灰	良	S 4 b	高台径13.7cm・小泊座
107	S Kp - 202	頭蓋器	瓶々				外: K 類 内: D 類	灰	良	S 2 c	小の座

番号	地土位置	種別	調査	口徑	既往	器高	成形・調整 等	色調	焼成	胎土	備考
108	S Kp-674	須恵器	鏡				外：Hb類 内：Da類	灰	良	S 4 b	小泊産
109	中H C-20トレンチ SKp-1	須恵器	鏡				外：K類 内：H (?)類	灰	良	S 4 b	小泊産
110	S D-1 B区	土師器	無台輪	-	5.5	-	底部回転条切り	灰白	やや良	H 3 b	
111	S D-1 B区	土師器	無台輪	-	4.8	-	底部回転条切り	にぶい黄	やや良	H 3 b	
112	S D-1 A区	土師器	無台輪	-	6.9	-	底部回転条切り	浅黄橙	良	H 3 b	
113	S D-1 B区	土師器	鏡	30.6	-		浅黄橙	良	H 3 b		
114	S D-1 C区	土師器	小鏡	-	5.4	-	底部回転条切り	浅黄橙	やや良	H 3 b	
115	S D-1 C区	灰釉陶鏡	鏡	14.0	-		灰白	良	本文参照	狼床座	
116	S D-1 B区	須恵器	鏡	15.8	-		外：H a類 内：D (?)類	灰白	良	S 2 c	小泊産
117	S D-1 C区	須恵器	鏡				外：H a類 内：D類	灰	良	S 2 c	小泊産
118	S D-1 B区	須恵器	鏡				外：K?類 内：D c類	灰	良	S 4 b	小泊産
119	S D-1 C区	須恵器	鏡				外：H a類 内：D a類	灰	良	S 1	小泊産
120	S D-17 J-63	須恵器	長円瓶					灰	良	S 4 a	小泊産
121	S D-17	須恵器	鏡				外：K類 内：D a類	灰白	良	S 2 c	小泊産
122	S D-17 I-トレンチ下	須恵器	鏡				外：H類 内：D a類	灰オリーブ	良	S 3	小泊産
123	M-57	土師器	無台輪A 1	13.6	-	-		にぶい橙	やや良	H 3 a	
124	中H C-6トレンチ	土師器	無台輪	-	6.1	-	底部回転条切り	橙	やや良	H 2	
125	施上	土師器	無台輪	-	6.2	-	底部回転条切り	橙	やや良	H 2	
126	宮園2トレンチ下施上 (表土)	土師器	無台輪	-	5.0	-	底部回転条切り	にぶい橙	やや良	H 3 a	
127	N-61包含層	土師器	無台輪	-	6.2	-	底部回転条切り	灰黃面	やや良	H 3 c	
128	G-62包含層	土師器	無台輪				底部回転条切り	にぶい橙	やや良	H 3 a	
129	K-65包含層	土師器	無台輪	-	7.1	-	底部回転条切り	粉・にぶい橙	やや良	H 3 c	
130	K-64包含層	土師器	長鏡	22.0	-	-	にぶい黄 橙	良	H 3 c		
131	G-69包含層	土師器	長鏡	24.0	-	-	にぶい橙	良	H 3 b		
132	N-61包含層	土師器	長鏡	30.0	-	-	にぶい黄 橙	やや良	H 3 b		
133	J-62包含層	土師器	長鏡	23.8	-	-	にぶい橙	やや良	H 3 b		
134	N-61包含層	土師器	小鏡	-	5.0	-	底部回転条切り	にぶい橙	やや良	H 3 a	
135	中H C地区表縁	土師器	鏡	29.9	-	-	浅黄橙	良	H 3 b		
136	N-61包含層	黒色土鏡	無台輪	14.9	-	-	内面ミガキ	浅黄橙	やや良	H 3 a	タール付着
137	N-64包含層	須恵器	長圓瓶				瓶部2段接合	(黄) 橙	良	S 2 b	小泊産
138	J-62 壁際埋甕	須恵器	長圓瓶				瓶部2段接合	灰	良	S 4 a	小泊産
139	K-65包含層	須恵器	長圓瓶					灰	良	S 1	小泊産
140	中H C地区施上	須恵器	楕瓶A	-	16.0	-	外：H類 内：D類	灰	良	S 3	小泊産
141	F-62	須恵器	鏡	25.3	-	-		灰	良	S 3	小泊産
142	J-61包含層	須恵器	鏡				外：K類 内：D a類	灰白	良	S 3	小泊産
143	N-65包含層	須恵器	鏡				外：H類 内：D a類	灰赤	良	S 4 b	小泊産
144	I-61包含層	須恵器	鏡				外：K類 内：D類	灰・灰白	良	S 2 c	小泊産
145	F-64包含層	須恵器	鏡				外：H類 内：D類	灰	良	S 3	小泊産
146	L-59包含層	須恵器	鏡				外：H b類 内：D a類	灰白	良	S 4 b	小泊産
147	K-66包含層	須恵器	鏡				外：K類 内：D a類	灰白・青	良	S 2 c	小泊産
148	中H C地区表縁	須恵器	鏡				外：K類 内：D a類	灰	良	S 2 c	小泊産
149	I-62包含層	須恵器	鏡				外：K類 内：D類	灰黄	良	S 2 c	小泊産
150	中H C地区表縁	須恵器	鏡				外：K類 内：H ?類	灰	良	S 2 c	小泊産
151	I-61包含層	須恵器	鏡				外：K類 内：D a類	灰	良	S 3	小泊産
152	中H C地区表縁	須恵器	鏡				外：H類 内：D a類	灰・灰白	良	S 4 b	小泊産
153	H-63	須恵器	鏡				外：K類 内：H類	灰・灰白	良	S 2 c	小泊産
154	宮園Cトレンチ下解	須恵器	鏡				外：H類 内：D c ?類	灰	良	S 4 b	小泊産
155	J-62包含層	須恵器	鏡				外：K類 内：H b → D a類	灰白	良	S 2 c	小泊産
156	F-61	須恵器	鏡				外：K類 内：H a類	灰	良	S 4 b	小泊産
157	K-62包含層	須恵器	鏡				外：K類 内：H類	灰	良	S 3	小泊産
158	L-59表縁	須恵器	鏡				外：K類 内：D類	灰黄	良	S 4 b	小泊産

東：器種・胎土および備考に記した分類記号については本文参照のこと

※※ 器高は高台高を除く

2) 古代以外の土器・陶磁器類

宮田遺跡では客体的になっている古代以外に時期に属す土器・陶磁器類を本項にて一括する。内容は、縄文土器・中世土師器・珠洲・近世陶磁器である。時期別に報告したい。

a 縄文時代 (図版113・187)

今回の調査では、E-65~66グリッド(159~168)およびH-65~66グリッド(169~170)の2ヶ所に、部分的な薄い黒色土層が認められ、縄文土器片が出土した。土砂の流出などに伴って当該地に流れ込んだものであろうか。小片が多かったため、図化できたものは12点に限られた。R.Lの縄文が施文されたものが多く、接合はできなかつたものの、同一個体となるものが多いと思われる。時期の特定は難しいが、胎土などから中期後半～後期前半の所産と考えられる。

b 中世 (図版113・187)

中世に属す土器・陶磁器類としては、わずかに中世土師器と珠洲の破片がそれぞれ1点ずつ出土しているのみである。出土位置は河川跡や擾乱部であるなど、明確な遺構には伴っておらず、他地点から流入してきた可能性がある。

中世土師器(171) 盆の口縁部～底部片である。手づくね成形によるもので、底部～胴部外面にはやや不明瞭ながら指頭圧痕がみられる。口縁部には、上が弱く、下が強い横方向の2段ナダが施され、端部は面取りされている。口径12.8cm・底径8.1cm・高さ2.7cmと推計される。胎土は灰白色を呈し、径1mmほどの砂粒を多く含み、焼成は良好である。当該資料は、「刈羽・三島型」【品田1991】に分類される中世土師器盆であり、形態などから製作時期は13世紀後半～14世紀前半と推定される。SD-1A・C区から出土した。

珠洲(172) 壺もしくは甕類の胴部片である。外面には叩き目、内面には当て具痕がみられる。胎土は灰色を呈し、黒色・白色の細かい砂粒のほか、雲母や海綿骨針が混じる。焼成はややあまい。小片であるため、詳細は不明である。J-60グリッド擾乱層から出土した。

c 近世 (図版113・187)

近世もしくは近世以降の所産と考えられる土器・陶磁器類は、肥前系の陶磁器を中心として20点近く出土している。しかし、明確な遺構から出土したものではなく、表面採集によるものや河川跡や水田盛土などから発見されたものが多い。図化が可能なのは陶磁器10点であるが、磁器は180・182の2点で、それ以外は陶器である。ここでは、先行研究「大橋1993・新宿区内藤町遺跡調査会1992・九州近世陶磁学会2000ほか」などをもとに種別に報告したい。

肥前系陶器(173～179) 小皿4点、擂鉢2点、甕1点を図化した。

173は、小皿の口縁部～胴部片で、口径11.0cmと思われる。焼成はやや良好で、胎土は明褐灰色を呈す。オリーブ黄色の釉薬はむらがあって生掛けと思われるが、内面は全体的に、外面は胴部下半までに釉薬が及んでいる。ロクロ成形で、おそらく16世紀末～17世紀前半の製品と思われる。H-66グリッド出土である。174は、小皿の胴部下半～底部片である。ロクロ成形であり、底部外面中央に削り出し高台を設けている。高台径4.1cmと推測される。胎土は灰色を呈し、内面のみにオリーブ黄色の釉薬がかかっている。焼成は良好で、見込みの胎土目により、16世紀末の製品と考えられる。表面採集による。175は、小皿の胴部下半～底部片である。ロクロ成形であり、高台は底部外面の削り出しによる。高台径は5.3cmと思われる。胴部は屈曲して立ち上がりおり、内外面にその境を残す。胎土はにぶい赤褐色を呈しており、外面には

褐色、内面にはオリーブ黒色の釉薬が施される。焼成は良好である。器形などから、17世紀前半の製品である可能性がある。調査区北側の水田から表面採集された。176は、小皿の底部片である。ロクロ成形であり、削り出し高台は径3.7cmと推計される。焼成は良好で、胎土はにぶい橙色、釉薬は明褐灰色を呈する。製作時期は17世紀と思われる。K-64グリッド出土である。

177は、擂鉢の口縁部～胴部上半である。内外面にはロクロの成形痕を遺す。口径は30.0cmと思われる。胎土は橙色、内外面の釉薬は黒褐色を呈する。H-64グリッドから出土した。178は、擂鉢の胴部片である。胎土は橙色で、外面には褐色、内面には赤灰色の釉薬がかかっている。胎土などから須佐唐津の製品である可能性がある。F-61グリッド出土である。

179は、壺の口縁部片である。胎土は灰褐色を呈している。口縁端部を内側・外側に引き出す形態は、17世紀前半以降にみられる。

肥前系磁器（180） 小皿の口縁部～胴部下半である。口径は10.0cmと推測される。内面は吳須による文様が描かれているが、小片のために全体的なモチーフは不明である。また、見込みに釉薬のない部分がわずかに認められるため、蛇目釉剥ぎであった可能性がある。焼成は良好で、胎土は灰（黄）色を呈する。SD-17 I-63グリッドから出土した。

その他（181・182） 181は、陶器の土瓶蓋で、一部を欠失するが、ほぼ完形である。ロクロによる成形と思われる。胎土は灰黄褐色で、外面には黒褐色の釉薬がかかっている。産地は不明である。第1次試掘確認調査前田B-4トレンチから出土した。

182は、磁器の灯明受皿で、胴部下半～底部片である。磁器ではあまりみられない器種であり、胎土も肥前系のものよりも精緻であり、不明な点が多い。胎土は灰白色を呈し、外面はにぶい黄橙色であるが、内面にはオリーブ灰色の釉薬がかかっている。底径4.2cmと思われる。SD-657出土である。

3) 木製品類（図版114～118・188～191）

今回の調査で出土した木製品としては、井戸に用いられたと思われる部材や河川跡出土のもの、および柱穴から出土した柱根があげられる。

a 部 材（図版114・188）

何らかの部材であったと考えられるものは、井戸跡と推測されるSE-86から2点（188・189）、河川跡であるSD-701から1点（190）出土している。

188は、長方形の柾目板で、長さ44.6cm×幅12.6cm×厚さ4.8cmを計る。木表側は、端部の一方が3～5cm、他方が3cmほど法面状に削り取られている。また、2ヶ所に数条の刃物傷がみられ、うち1ヶ所は斜格子状に交差している。全体的にやや腐蝕しており、表面には凹凸が多くみられる。189も、長方形の柾目板で、長さ42.9cm×幅14.5cm×厚さ3.7cmが遺存する。やはり裏面には腐蝕による凹凸が著しく、木目の観察も困難であった。木裏側と思われる面には刃物傷が2ヶ所に認められる。一方はやはり斜格子状に交差していた。2点ともに、スギ材かと思われる。いずれもSE-86の底部付近から検出され、おそらく井戸枠などの部材として用いられた可能性がある。

190は、厚さ3.8cmの柾目板を利用したもので、径約22cmのほぼ円形に加工される。縁部は傾斜面となっているが、木口側の傾斜は緩い。木裏側は表面に加工痕や凹凸を遺すが、木表側は既して平滑に仕上げられている。中央付近には、1.5～2cm角の穴が2ヶ所に穿たれている。材質はスギであろうか。用途は不明であるが、何らかの部材と思われる。SD-701bトレンチからの出土である。

b 柱 根 (図版115~118・189~191)

宮田遺跡からは、計40点の柱根を検出することができた。配置などを考慮すれば、柱根の出土は掘立柱建物が存在していたことを示すのに充分であり、40点の出土は本遺跡に比較的多くの建物が設けられていたことを物語っていると思われる。特に、SB-1001掘立柱建物跡については、12基の柱穴のうち、10基から柱根が出土しており、建物の存在を確かなものにしている。柱根の簡単な個別データは第8表に表したが、遺存状態には良好なものから不良なものまでさまざまであり、形態や加工痕の観察が不充分なもの、径の計測が不可能なものなどがあった。また、特に樹種鑑定も行っていないため、断定はできないが、おむね針葉樹が多いようである。

柱根の径は、遺存状態の良好な部分で計測した。10cm以下や、20cm以上のものもあるが、多くは15~17cmに集中してみられる。形態や木目を把握できる柱根を観察すると、芯を用いたA類、芯を用いないB類に分類できる。このほか、200は1辺16.6cm(5寸5分)の角材に加工されているため、1点のみであるが、C類と分類することとした。また、柱根の下端部にみられる加工の形態によっても大きく4類に分類することができた。1類は、おおむね4方向から削り出すことで、鋭利な先端を作り出し、杭状にしたものである。2類は、大きさは2方向から削り出し、2面を有するマイナストライバー状にしたものである。3類は、2類と同様に2面を有するが、先端の角度が鈍角になるものである。ただし、両面とも同じ角度で削り出すもの(3a類)と、片面がほぼ垂直に近いもの(3b類)の2種類がある。そして4類は、1方向から削り出して、ほぼ平坦な面を作り出すものである。これらの組合せから、木材の利用方法や形態、そして加工された下端部の形態による分類を試みた。

比較的多くの柱根が得られたSB-1001・1011をみると、SB-1001を構成する柱根は、径13~18cmで、確認できるものはすべてA4類であるが、SB-1011の場合は、径16~21cmで、A1~4類までみられる。SB-1011は柱穴の配置がやや不整形をなし、建物跡との推測には確信がないが、同じ構築物でも下端部の形態に統一がみられない場合も想定できよう。また、SB-1001・1011ではすべてA類を用いていることは共通しているが、SB-1002・1009ではA・B類の混在しており、1点のみ検出されたSB-1008ではC類がみられる。SB-1002・1008・1009については、木材に対する加工技術の発展から考慮すれば、後世の建物跡である可能性もある。本遺跡は古代集落を主体とするが、この3建物跡を構成する柱根と共に伴する土器類などではなく、時期については今後さらに検討すべき課題としておきたい。

4) 石器・石製品類と礫 (図版113・180・192)

今回の調査では、テンバコにおよそ7箱分の石器・石製品・礫が出土している。ここでは、何らかの道具として加工された石器・石製品と加工の認められない礫とに分類し、概要を簡単にまとめる。

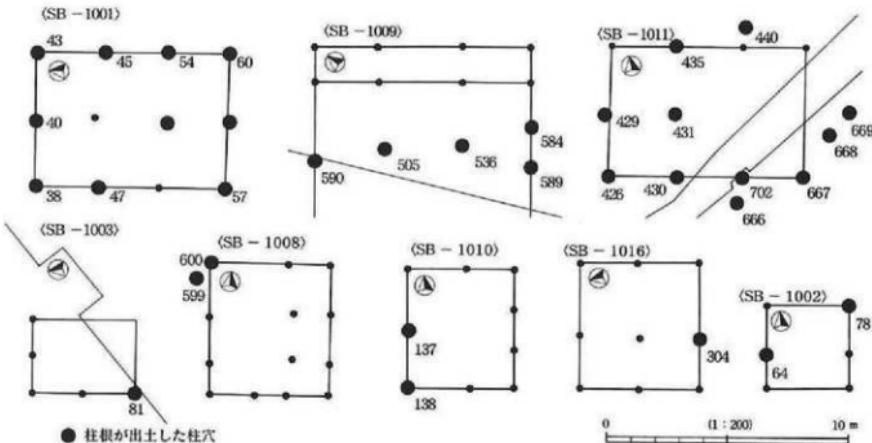
a 石器・石製品類 (図版113・180)

加工の認められる石器・石製品としては、軽石・台石・硯がある。簡単に説明したい。

軽 石 (193) 1/2近くを欠損する。厚さ2.1cmを計る。F-66グリッドから出土した。

台 石 (194) 安山岩製で、梢円形を呈していたと思われるが、一部を欠損する。表面には薄く炭化物が付着しており、黒色化している部分がある。N-62グリッドにあるSD-219上面から出土した。縄文時代の所産と思われる。

硯 (a) 摩耗痕の認められる面があり、硯の一部が剥離したものと思われる。第2次確認調査14トレンチから出土した。



第13図 宮田遺跡における柱根出土位置模式図

番号	計画	形態	径	備考	番号	計画	形態	径	備考	番号	計画	形態	径	備考
191	38	A4	19.7	SB-1001	201	599	A4		SB-1008	208	128	A3b	9.4	
a	40	A	13.2	SB-1001	200	600	B4	16.6	SB-1008角柱	g	132	A3a		
なし	43			SB-1001	n	505	A3a		SB-1009	なし	208			
192	45	A4	17.8	SB-1001	204	536	B3		SB-1009	なし	424	A3		
b	47	A4	17.1	SB-1001	205	590	B3b	17.1	SB-1009	なし	550			
193	53	A4	15.1	SB-1001	206	137		8.1	SB-1010	q	666	A4	15.7	
c	57	A4	20.3	SB-1001	207	138	A3a		SB-1010	k	687	A1	12.4	
d	58	A4	14.0	SB-1001	j	426	A1	16.3	SB-1011	l	668	B2		
e	60	A4	SB-1001	o	429	A2	14.1	SB-1011	m	669	B3b			
m	64	B3a	SB-1002	199	430	A1	19.5	SB-1011	なし	681				
203	78	A3b	10.7	SB-1002	p	431	A3b	14.6	SB-1011*	f	699	A3e		
202	81	A4	16.0	SB-1003	なし	435			SB-1011					
なし	304		SB-1006	198	702	A1	17.2	SB-1011						

番号: 図版115～118・190～192に対応
径: 単位cm

第8表 宮田遺跡出土柱根一覧表

番号	遺跡名	遺跡の性質	点数	備考	番号	遺跡名	遺跡の性質	点数	備考
図版192-b	46	柱穴	3	SB-1001	図版192-g	溝路	9		SB-1005-1006を含む
図版192-c	630	柱穴	1	SB-1008	図版192-d	溝路	4		
図版192-a	614	ピット	2	SB-1008内	図版192-e-f	溝路	34		
図版192-n	286	ピット	1		図版192-h	溝路	2		
図版192-a	452	ピット	3		-	657	溝路	5	近代以前
図版192-j	294	土坑	100		-	679	溝路	1	
図版192-i	490	土坑	3		-	1	河川路	16	中世
図版192-k-i	677	土坑	62		-	17	河川路	2	近世

第9表 宮田遺跡出土縄一覧表

第9表は、特に加工の認められなかった碑が出土した遺構の一覧表である。柱穴などから数点出土している例もあるが、SK-294・677土坑からの大量出土は特筆すべきである。また、SD-378aからは土器小片とともにまとめて出土している。石質は、安山岩質のものが中心である。SK-294はSB-1006建物跡、SK-677およびSD-378aはSB-1011建物跡に近接する。これらの碑が大量に出土した遺構と建物跡とは何らかの関係があると思われるが、今回はそれを見出すには至らなかった。ただし、SD-378a出土の土器類は小片が主体であり、もし廃棄場としての性格的な位置付けが妥当であるとすれば、碑も同時に廃棄されたことが想定されよう。

5) 錢 貨 (図版113・188)

185は、開元通寶(唐、621年初鋤)である。やや小振りで、形態が粗雑であった上、発見段階では赤褐色を呈しており、模範銭である可能性が高い。SD-17の5トレンチ下層から出土した。186・187は、寛永通寶である。線文の字体から、186は1期(古寛永、1636年初鋤)、187は3期(新寛永、1697年初鋤)と考えられる〔永井編1998〕。186はH-65グリッド、187はH-66グリッドから出土した。

註

- 1) 須恵器窯にみられる叩き目の研究史を整理し、北陸の様相についてまとめた柿田祐司氏の報告〔柿田2000〕をもとに、今回得られた資料について分類してみた。
- 2) 笹澤正史氏のご教示による。
- 3) 須恵器機瓶の製作復元については、北陸古代土器研究会の研究成果〔特に、春日2000・久世2000・北野2000〕によるところが大きい。また、笹澤正史氏をはじめ、(仮)新潟古代土器研究会の諸氏には実見のうえ、貴重なご指摘を賜った。

4 調査のまとめ

当該地一帯は、過去の耕地整理で緩傾斜を階段状の水田となった。調査区内にも3~4段の水田面があり、水田面の山側は地山土まで切土されている状況であった。また、土石流などによる被害もある。したがって、遺跡の遺存状態には、地点によって格差が大きいという状況の中での調査となり、遺構・遺物の分布には偏りが目立った。しかし、集落の広範囲を発掘できたことによる成果は大きいといえる。

宮田遺跡からは、縄文時代・古代・中世・近世の遺物が出土しているが、居住空間としての集落が営まれていた時期は古代である。土器の様相をまとめれば、須恵器はほぼ佐渡小泊窯産の製品によって占められており、土師器が量的に須恵器を上回る。そして、これらに少量の黒色土器が伴い、灰釉陶器の搬入も認められる。土器類が示す詳細な時期の検討は次章にて行うが、9世紀後葉~10世紀初頭が想定される。

調査区とした約6,800m²の範囲からは、約700基の遺構が検出された。柱穴の配置から11棟の掘立柱建物跡を推定復元できたが、この他にも建物跡が存在したことも充分考えられる。また、SB-1005・1006を囲むL字形のSD-252溝跡やSK-294土坑などは、建物に付属する施設として、集落の景観を検討する際には欠かせない遺構と思われる。また、調査区の北西を流れるSD-346溝跡は、出土遺物の内容から、何らかの儀礼に関わる遺構であったと推測される。

宮田遺跡では遺構の重複が少なく、土器類からも長期間営まれた集落とは考えにくい。したがって、該期における集落の様相を検討していくうえでは貴重な資料となるであろう。

VI 総 括

1 宮之下遺跡群における遺構群と集落構成

1) 遺構群の概要

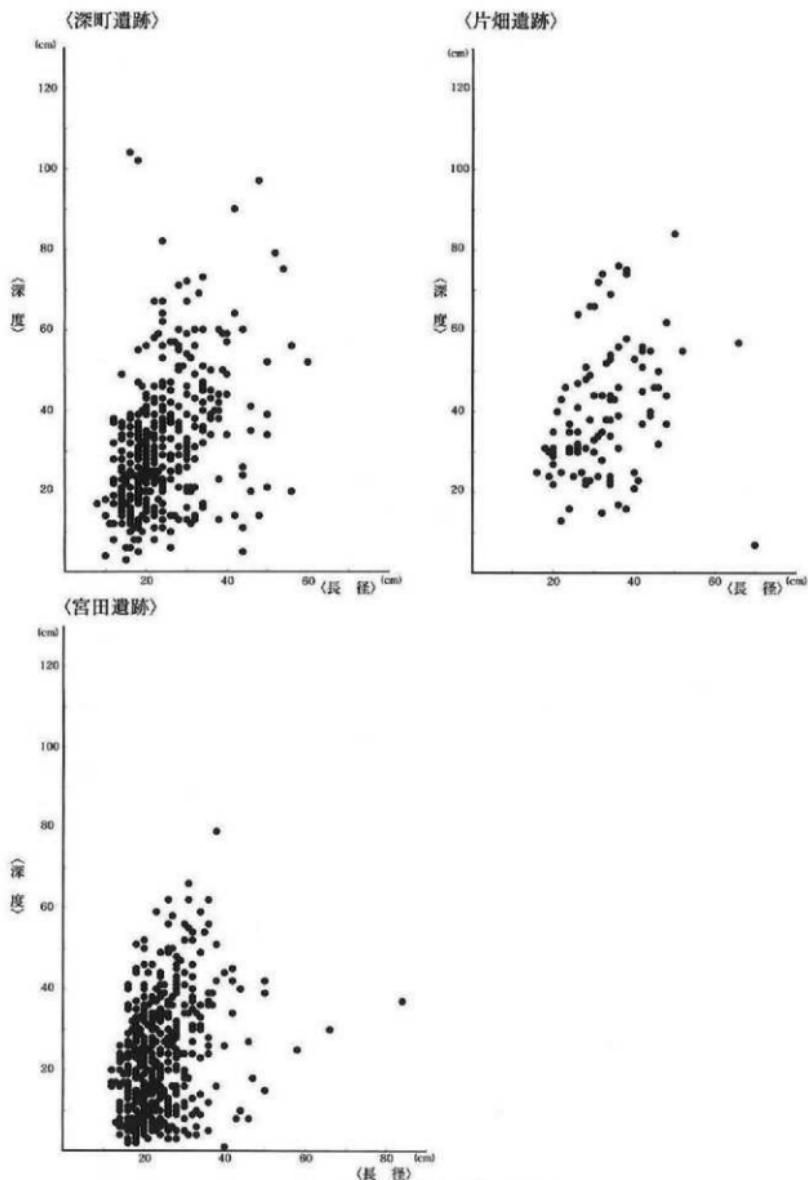
宮之下遺跡群には、深町遺跡、片畑遺跡、宮田遺跡、中村遺跡の4遺跡が認められる。今回は中村遺跡を除く3遺跡に対して発掘調査を実施し、本地域における古代集落の様相の一端が明らかになった。しかし、片畑遺跡については、主体となる時期が若干異なり、小規模な調査でもあったため、集落の内容を検証するにはやや資料不足となっている。そのため、古代を主体とし、集落の様相がある程度把握された深町遺跡と宮田遺跡を中心として、建物跡や柱穴等の概要を分析し、集落構成の概略に対して、若干の検証を加えたい。片畑遺跡については、補足的に柱穴等の概要を把握したい。なお、深町遺跡は10世紀前葉を主体とし、宮田遺跡は9世紀後葉～10世紀初頭を主体にすると考えられるため、一時期の時期差が認められる。それぞれ異時期の遺物も少量出土しており、検出遺構のすべてが当該期に帰属するものではないが、遺物の出土しなかった遺構が大半を占めるため、個々の遺構について時期比定を行うことは不可能である。そのため、ここでは検出された建物跡や柱穴等が、概ね各遺跡の主体的時期に帰属するという前提条件を設定し、概略を把握していくこととした。

a ピット類

深町遺跡からは413基のピット類が検出され、その大半が柱穴に相当すると思われる。検出遺構の総数は426基であるため、全体の約96.9%がピット類ということになる。これらの法量分布の状況を概観すると、長径10～40cm程度、深度10～60cm程度のものが比較的多い傾向が認められる。特に長径15～30cm程度、深度10～40cm程度に最も集中している様相が看取され、長径40cm以上、深度60cmになると個数が減少する。深度については、表土除去の状況に左右されることが多く、実際にはより深かつた可能性が高いと考えられるが、100cmを超えるものも2基認められる。また、全体的な傾向は、長径：深度の比率が概ね1：2になっていることが窺える。

一方、宮田遺跡からは523基のピット類が検出された。本遺跡においても、ピット類の大半が柱穴に相当すると思われる。検出遺構の総数は559基であるため、全体の約93.5%がピット類であったことになる。これらの法量分布の状況は、長径10～50cm程度、深度0～70cm程度のものが多い傾向が認められる。深町遺跡に比べると、近似した法量のものが大半を占める様相が看取され、長径10～40cm程度、深度0～50cm程度に最も集中している。また、長径が80cmを超える大形のものがみられるのも特徴といえよう。深度については、80cmを超えるものが認められず、深町遺跡に比べると、絶対的な深度はやや浅い。しかし、長径：深度の比率は概ね1：3となっており、平面規模に対して深度が深い傾向にあることが窺える。

また、片畑遺跡からは101基のピット類が検出された。他の2遺跡と同様に、ピット類の大半は柱穴に相当すると考えられるが、建物跡等を推定復元することはできなかった。検出遺構の総数は114基で、全体の約88.5%がピット類であったことになる。これらの法量分布の状況からは、長径10～50cm程度、深度10～60cm程度のものが比較的多い傾向が看取される。また、少量ながらも長径20～40cm程度、深度60～80



第14図 宮之下遺跡群柱穴法量分布図

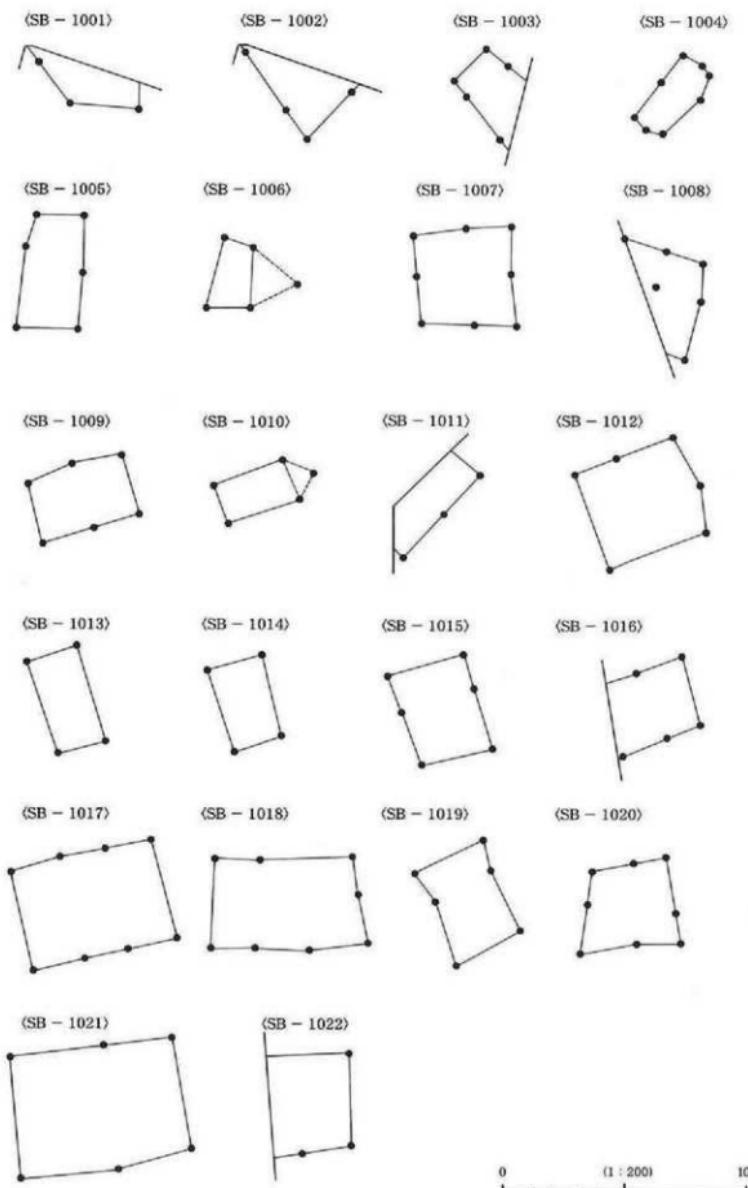
cm程度にまとまった一群もみられ、大きく二大別することができる。このような傾向は、本遺跡の主体が複数の時期の及んでいることに起因する可能性が高いと考えられる。また、長径が70cm以上のものは1基だけで、深度も90cmを超えるものはみられない。その一方で、長径や深度が10cm以下となるものは、わずか1基のみとなっている。また、全体的な傾向としては、長径：深度の比率が、概ね1：2になっていることが窺える。

b 建物跡

推定復元された建物跡は、深町遺跡で22棟、宮田遺跡で11棟である。片畠遺跡においては、建物跡等を推定復元することはできなかった。

深町遺跡において推定復元された建物跡を概観すると、全体的にやや歪んだ形態を呈しているものが多く、本遺跡の特徴となっている。このことは当該期における建物跡の構築技術等が、他地域に比べて未熟であった可能性を示唆していると思われ、柱穴の間隔等も比較的不規則となっている。形態的には長方となるものが多く、SB-1002・1003・1005・1009・1011・1013・1014・1015・1016・1017・1018・1019・1021・1022の14棟が相当する。また、SB-1001についても、長方形を呈する可能性が考えられる。正方形のものはSB-1007・1008の2棟、長方形もしくは五角形のものはSB-1006・1010・1012の3棟で、SB-1004は六角形、SB-1020は台形となっている。すなわち、形態が長方形を呈する建物跡が、約7割を占めているのであり、圧倒的に多い傾向が認められるのである。建物跡の主軸が概ね北西-南東方向を指向するものは、SB-1001・1002・1003・1006・1008・1013・1014・1015・1019の9棟である。全体の約4割に相当するが、II地区に所在する15棟の内、半数以上の8棟が含まれている。また、これらに対して直交する北東-南西方向を指向するのは、SB-1004・1009・1010・1011・1012・1016・1017の7棟である。全体の約3割を占めており、II地区に所在するものは5棟となっている。したがって、II地区においては、主軸が概ね北西-南東方向か、北東-南西方向を指向する建物跡が13棟に及び、15棟中の約87.7%を占めているのである。さらに、主軸が東-西方向を指向しているのは、SB-1007・1018・1020・1021・1022の5棟で、北-南方向を指向するのはSB-1005の1棟となっている。すなわち、III地区に所在する7棟の建物跡の内、約57.1%に相当する4棟が東-西方向を指向しているのであり、II地区における主軸方向の傾向に対して差異が認められるのである。

一方、宮田遺跡において推定復元された建物跡を概観すると、深町遺跡と同様に若干歪んだ形態を呈するものが多く認められる。柱穴の間隔もやや不規則となっており、技術的に未熟であった可能性が示唆されている。形態的には長方形を呈するものが多く、SB-1001・1003・1004・1005・1007・1009・1011の7棟が相当する。また、方形を呈するものは、SB-1002・1006・1008・1010の4棟である。五角形や六角形、あるいは台形等の形態は認められず、本遺跡において推定復元された建物跡は、長方形と方形の形態で構成されている。建物跡の主軸が概ね北-南方向を指向するものは、SB-1001・1002・1003・1004・1006・1008・1010の7棟で、全体の約6割に相当する。また、これらに対して直交する東-西方向を指向するのは、SB-1005・1007の2棟であり、SB-1009は概ね北東-南西方向、SB-1011は概ね西北西-東南東方向を指向している。すなわち、主軸が概ね北-南方向か、東-西方向を指向する建物跡は9棟に及び、総数11棟中の約81.8%を占めているのである。深町遺跡のように、地区における主軸方向の差異は認められない。これらのことから、宮田遺跡における建物跡は、概ね北方向等の方位を基準とした計画性に基づいて構築されたと推定できよう。

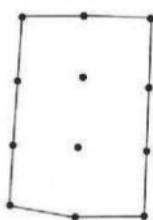


0 (1 : 200) 10m

第 15 図 深町遺跡建物跡推定復元模式図



(SB - 1001)



(SB - 1002)



(SB - 1003)



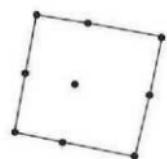
(SB - 1004)



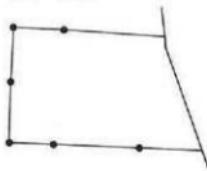
(SB - 1005)



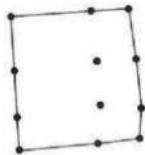
(SB - 1006)



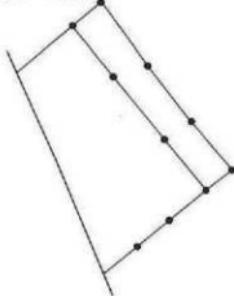
(SB - 1007)



(SB - 1008)



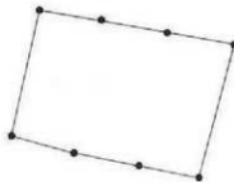
(SB - 1009)



(SB - 1010)



(SB - 1011)



0 (1 : 200) 10m

第 16 図 宮田遺跡建物跡推定復元模式図

2) 集落構成の概略

a 深町遺跡

深町遺跡から検出された遺構の多くは、古代に帰属するものであり、概ね10世紀前葉の年代観を与えることができる。検出遺構の分布状況は、盛土保存区域とした未発掘部分を中心に認められ、今回の発掘調査区は、その縁辺に相当していると考えられる。I地区においては自然流路跡が主体をなし、そこからの標高が1m以上高いII地区及びIII地区に、集落が営まれていた景観が想定できる。推定復元された建物跡の主軸方向は、II地区では概ね北西—南東方向か、それに対して直交する北東—南西方向を指向するものが主体的である。一方、III地区では東—西方向を指向する建物跡が主体となしておらず、地点における差異が比較的顕著に認められる。集落の継続期間が短時期に集約されると考えられるため、建物跡の切り合い関係の事例は極めて少ないが、SB-1001とSB-1002、SB-1021とSB-1022が重複した地点で検出されている。そのため、少なくとも建物跡は2段階に及んでいることが把握され、主軸方向の差異が若干の時期差によるものなのか、あるいは集落における戸数等に起因するものなのか、今後も検証を深めていく必要があろう。また、今回の発掘調査においては、井戸跡等は検出されなかつたが、比較的まとまった狭い範囲に土坑類が集中している状況もみられる。

b 宮田遺跡

宮田遺跡から検出された遺構についても、深町遺跡と同様に、その大半が古代に帰属するものと考えられる。出土遺物等の検討により、概ね9世紀後葉～10世紀初頭の年代観を与えることが可能であろう。過去に実施された耕地整理等の影響により、既に湮滅した遺構も多いと思われ、今回の発掘調査における分布状況が、そのまま遺跡形成時の集落構成を示している可能性は低い。そのため、集落構成の詳細については、不明とせざるを得ないが、大略的な構成は把握し得たといえよう。II地区を中心とする地点に大規模な自然流路跡が存在し、I地区においてもやや小規模な自然流路跡が検出されている。したがって、本遺跡は比較的流水の多い環境にあり、自然流路跡の両岸に集落が形成されていた景観を想定することが可能であろう。また、建物跡の主軸方向は概ね北—南方向か、それに対して直交する東—西方向を指向しており、重複関係も認められない。井戸跡や土地区分を意図したと思われる溝跡等も検出され、深町遺跡に比べると、やや明確な集落構成を呈している。

3) まとめ

深町遺跡と宮田遺跡の建物跡等を中心に、集落構成の概略の把握を試みたが、両遺跡とともにその全容を推定し得る材料にやや乏しいのが現状である。深町遺跡と宮田遺跡には一時期の時期差が認められるが、集落構成等の観点からも、両者には若干の差異が認められる。すなわち、自然流路跡の東側にのみ集落形成されたと考えられる深町遺跡に対して、宮田遺跡は自然流路跡の両岸に集落の広がりがみられる。また、宮田遺跡の建物跡の主軸方向には、地点による差異が認められないのに対し、深町遺跡では地区によって主軸方向が異なるという傾向も看取される。このような集落構成を規定した要因としては、第一に立地や環境等の相違が考えられよう。一方、両遺跡ともに建物跡がやや歪んだ形態を呈し、柱穴の間隔も不規則である等、建築技術が比較的未熟であったと推定される点では、共通点が見出される。古代における本地域の特徴として、捉えることが可能であろう。いずれにしても、本地域での本格的な発掘調査としては、今回が初めての事例であるため、今後に期する課題は多い。

2 宮之下遺跡群における古代の土器様相

1) はじめに

数年来の沖積地における開発事業に伴い、柏崎平野においても古代遺跡の調査件数が増加し、それぞれ貴重な成果を得ている。比較的早い時期の調査としては、別山川流域の尾野内遺跡（西山町）【新潟県教委1982】、吉井遺跡群【柏崎市教委1985・1987・1990b】、刻野B遺跡【柏崎市教委1990a】の調査がある。1990年代になってからは、枯木A遺跡（刈羽村）【刈羽村教委1996】、払川・山ノ脇遺跡（刈羽村）【刈羽村教委1998】、藤橋東遺跡群香作C遺跡【柏崎市教委1995】、箕輪遺跡【新潟県埋蔵文化財調査事業団1996・1997・1999ほか】、小峯遺跡、前掛り遺跡【柏崎市教委1997a】などがあり、須恵器窯跡である雨池古窯跡【柏崎市教委2000b】も調査された。また、宮之下遺跡群と同じ鰐石川中流域においては、山王前遺跡が発掘調査されている【柏崎市教委1998】。

これらの調査は、おもに新設・改良される道路部分の調査であり、箕輪遺跡や今回の宮之下遺跡群などを除けば、調査区は狭小な場合が多い。しかし、出土した土器のデータは多く蓄積される結果となり、9世紀を中心とした古代の土器様相をある程度検討できるまでになっていると思われる。さらに、前掛り遺跡では9世紀中葉において短期間営まれた集落があったと考えられているが¹、遺構別にみた土器の組成といった内容から集落内における遺構の性格などが検討されている【品田1997】。

宮之下遺跡群からは、深町遺跡の土坑や宮田遺跡の溝跡からまとまった量の土器が出土している。それらの土器がどのような年代を示し得るのか、またこれらの土器群によって表れる遺構の性格など、本節において考察してみたいこととした。

2) 編年の位置付け

本遺跡群で検出された2つの古代集落跡である宮田遺跡・深町遺跡について、編年的な位置付けを検討する。冒頭でも述べたように、柏崎平野における古代土器の編年作業は、ようやくその検討材料が揃いつつある段階である。したがって、当該土器群の検討にあたっては、まず北陸における研究をもとに、おおまかな土器様相の変遷の中で当該土器群を位置付けることから始める。北陸における古代土器編年は、加賀の様相をもとに組み立てられたものである【田嶋ほか1988】。その後、細部の補強や、地域差が浮き彫りにされるなどの研究が進められ、古代土器の変遷が追えるようになっている【出越1997ほか】。本遺跡群の古代土器が北陸編年の中ではどのように位置付けされるのか、おおまかな型式を把握する。

次に、新潟県における編年研究と対比する。新潟県における古代の土器研究は、北陸における研究とともに進められており、該期についても様相がまとめられている【春日1997a・b・1999】。さらに、近年では県内各地においても古代遺跡の調査件数が増加している。しかも、ある一定地域での調査成果が蓄積されていったことにより、おおよそ群単位の土器編年を確立するに至っている。柏崎平野（三崎郡）周辺では、頸城郡や古志郡における調査成果が目覚ましい。頸城郡では、遺構一括出土資料による検討がなされ、これまでの編年研究【坂井1988・春日1996ほか】よりも細分化された編年が設定されている【笹澤1998】。古志郡では、和島村八幡林遺跡・同村門新遺跡【和島村教委1991～1996】など、官衙に関連した遺跡の調査により、大きな成果が得られている。これらの研究成果も参考にしながら、本遺跡群における土器群の編年的な位置付けを検討し、年代を考察してみたい。

a 深町遺跡の編年的位置付け

深町遺跡から出土した土器群の内容は、すでに第Ⅲ章にて報告したが、編年的な位置付けを探るための材料として、特徴となる点を土師器と須恵器を中心にまとめておく。その際は、変遷の追いややすい食膳具について特に注目してみた。なお、考察の対象は、一括性の高いSX-33出土土器とした。

土器群の特徴 種別としては土師器・須恵器・黒色土器がある。ただし、その量比には圧倒的な差があり、土師器は全体の9割近くを占め、それぞれ1割にも満たない黒色土器と須恵器が伴っている程度である。土師器には、無台椀・皿・長甕・小甕・鍋・短頸壺の計6器種がある。須恵器は無台杯と甕の2器種、黒色土器は無台椀の1器種である。

土師器食膳具は、ほとんどが無台椀である。河川跡出土のG類を除けば、A～F類の6類に大分類したが、量的に主体であるのはA～C類である。A～C類は口縁形態による分類であるが、第Ⅲ章では口径・底径・器高のおおまかな比率によってそれを細分した。A～C類に共通した特徴のひとつとして、器面には平滑な調整を加えるものの、圓形には歪みが目立つ点があげられる。そのため、口径や器高は計測位置によって数値が異なるのであるが、全体的にみれば、これらの法量差はあまりなく、口径14cm台、底径5～7cm、器高3cm台に集中している。さらに、土師器食膳具のもうひとつの器種として皿が出現しているのは注目されよう。

また、十数個体ほど出土している黒色土器無台椀をみると、器高が低い皿形を志向するタイプ（A類）と器高が高い椀形となるタイプ（B類）とへ完全に法量分化している。法量の分布を土師器無台椀と比較すると、器高の高いB類は土師器の分布域からは逸しているが、A類は土師器と同じ分布域にある。

編年との対比 深町遺跡では、須恵器食膳具は無台杯の破片が3点出土したのみである。これは食膳具全体の0.5%にも満たない数値であり、遺存率もきわめて低いものであった。これは、須恵器生産が終末期を迎えるⅣ期以降の状況に類似すると思われるため、上限をⅣ1期とすことができよう。さらに、Ⅳ期以降になると、SX-33のように大量の土師器が一括廻収される現象が多くなることもこれを傍証することができる。また、土師器の法量をみると、深町遺跡では口径14cm台、器高3cm台を計る無台椀が主体であった。Ⅳ2期新段階（出越1997ではⅢ-1期）に並行する松任市中村井手遺跡2・5号戸井戸や金沢市額谷カネカヤブ遺跡SK-02などから出土した土師器無台椀は、前代の形態を継承しながらも、口径10～11cm台、器高2cm台へと急速に小型化してⅣ3期以降に引き継がれる。深町遺跡の土師器無台椀は小型化に至る前の状態と思われる所以で、Ⅳ2期古段階以前に設定できよう。ただし、Ⅳ1期（出越1997ではⅡ-2古期）の加賀地方では、すでに有台椀が定量存在しており、足高高台も出現している。これは、9割近くを無台椀によって占められる深町遺跡の様相と大きく異なる。越後との地域差であることも充分考えられるが、深町遺跡はⅣ1期でも比較的早い段階に位置付けられる可能性もある。

新潟県において、Ⅳ1期～Ⅳ2期古段階に併行する時期の遺跡としては、上越市子安遺跡・保坂遺跡・四ツ屋遺跡・江向遺跡・和島村門新遺跡などがある。頸城郡では、Ⅳ1期の前半（子安遺跡SE-45、笹澤1998ではⅣ-1期）になると、深町遺跡のようにB類としたような口縁端部が外反する土師器無台椀が目立つようになる。また、Ⅳ1期の後半（笹澤1998ではⅣ-2期）になると、小皿のほかに足高高台の椀や盤といった器種が出現する。さらに、古志郡では門新遺跡外削田地区においても口縁端部が外反する土師器無台椀が多い。そして、Ⅳ2期古段階併行とされる同遺跡SD-152からは、「延長六年（928）」銘を持つ墨紙文書が出土したが、共伴する土器群に、足高高台の有台椀・皿が伴っている。

以上のことから、深町遺跡の土器群は、おむねⅣ1期に対比できると考えられる。なお、下限につい

ては、足高高台の器種の出現する時期に限り、現段階において詳細を特定することは困難である。また、有台の器種ではないものの、皿が1点のみ検出されている。当該期は、新しい器種が少しづつ出現し始めていた時期であったと評価できるであろう。

b 宮田遺跡の編年的位置付け

宮田遺跡において、まとまった出土量がみられる造構は、SD-346とSD-378aとした2基の溝跡である。この2造構間では接合資料があるため(29)、この2造構間には時期差はほとんどないものと考えられる。

土器群の特徴 出土した土器類のうち、全体からみて量的に主体となるのは土師器であるが、定量の須恵器も伴っており、黒色土器と灰釉陶器が各々2~3点含まれるという組成である。須恵器には、食膳具と貯蔵具がある。食膳具は有台杯・無台杯の2器種、貯蔵具は長頸瓶・横瓶・甕の3器種である。土師器は食膳具と煮炊具がある。土師器は無台椀と独特の器形を有する有台椀の2器種、煮炊具は長甕・小甕・鍋の3器種である。そして、黒色土器は無台椀の1器種、灰釉陶器は椀と長頸瓶の2器種が確認されている。

土師器食膳具は、特徴的な有台椀を若干含むが、圧倒的に多いのは無台椀である。口縁部のわずかな形態差による細分が可能であるが、今回はA1・A2・B・Cの4類に大別した。形態が明らかなものでは、A2類が最も多いが、A1・B・C類はそれぞれ1~2点ほど確認されたにすぎない。口径はおむね11~14cmに集中し、器高は4cm台が多い。

須恵器食膳具は、図化した17点中3点が有台杯で、14点が無台杯である。有台杯はすべて深身のタイプであると思われるが、無台杯には浅身のタイプ(A類)と深身のタイプ(B類)が認められる。特に、佐渡小泊窯跡群の江ノ下窯跡の製品と同じ形態的特徴を有しているB2類が無台杯の約半数を占めている。胎土などをみると、須恵器食膳具はすべて佐渡小泊窯産の製品と考えらる。SD-1出土有台杯(1)は、器壁は薄手で、内外面はおむね平滑、高台の形態は退化するという特徴を持つ。また、無台杯の半数以上を占めるB2類は、薄手で、体部の開きが大きいものである。これらの形態的な特徴を有する須恵器は、佐渡小泊窯跡群の江ノ下窯産の製品に多くみられる[坂井ほか1991]。

編年との対比 9世紀になると、北陸の各地で土師器や黒色土器が生産されるようになるが、須恵器などとの量比からいえば地域性が認められる。越後では、食膳具として須恵器杯とともに土師器無台椀が使用されているが、これは越中東部から出羽にかけてみられる状況である。宮田遺跡では、須恵器が定量伴っているものの、食膳具における須恵器と土師器の量比はおよそ1:4であり、完全に土師器が須恵器を凌駕している。これは、須恵器の生産が衰退している時期の現象として考えることができる。また、V1期は有台杯が多く生産されるのに対し、V2期は無台杯が多く生産されている。宮田遺跡の須恵器杯類は、無台椀が主体的であるため、V2期以降の範疇でとらえることができよう。ただし、全体の2割程度であるものの、一定量の須恵器が使用されていることから、須恵器生産が存続するV期が下限として考えられる。このように、器種構成などの観点によって北陸編年と対比すると、宮田遺跡はV2期~V3期における様相に近いといえる。

さて、新潟県の場合、今池遺跡SD-3(V1~2期)では土師器が主体を占めるが、黒色土器も定量伴い、一之口遺跡西地区SE-183・SE-107・SD-188(V3期)では土師器が増加して黒色土器が減少する[春日1996]。宮田遺跡の黒色土器は、SD-378aからは小片が、全体でも4点の破片が出土した程度であるからV3期に近い。また、灰釉陶器の搬入が頸城郡ではV2期以降であるため、宮田遺跡

もⅥ2期以降に含まれる。さらに、江ノ下窯の年代もⅥ2～3期に想定されている〔春日1999〕。以上のことから、宮田遺跡はⅥ2～3期に併行すると考えられる。

c 古代土器の年代と土器群の変化

以上の検討から、深町遺跡はⅦ1期、宮田遺跡はⅥ2～3期に併行する可能性が高くなつた。これらの時期が該当する具体的な年代や土器様相の違いについて考察してみたい。

古代土器の年代 第10表は、これまでの研究をもとに、加賀地方を中心とした北陸編年や越後もしくは頸城郡・三崎郡・古志郡における編年を照らし合わせたものである。越後国内をみても、頸城郡などのように資料数の増加によってより細分化された変遷を追うことが可能な地域もある。柏崎平野が該当する三崎郡の場合には、近年になってようやく遺構出土で一括りが高い資料が増加してきたため、細かな時期分類はさらなる資料の増加を待たねばならないが、現時点においてもある程度の編年の位置付けは可能である。しかし、具体的な曆年代を示す資料に欠けていることから、それぞれに区分された時期に年代を当てはめることは難しい状況にある。

ところで、深町・宮田両遺跡とも、北陸編年〔田嶋ほか1998〕で大枠をとらえ、補足・修正する出越編年〔出越1997〕や各地域でまとめられた編年〔春日1999・笠澤1998〕などによって時期を絞り込んできた。田嶋編年と他の編年を比較すると、それぞれの時期における土器様相やその変遷などには大きな差異はなく、ほぼ対応する関係が認められる。しかし、同じ加賀地方の出土資料に根据を持つ田嶋編年と出越編年では、比定される年代に隔たりがある。深町・宮田遺跡で該当する時期についてみると、田嶋編年では、Ⅵ1期か900年、Ⅵ3期が950年を跨ぐ時期、Ⅶ1期とⅦ2期古段階の境界をおおむね1000年としている。出越編年では、Ⅵ2期(Ⅱ-1期)の早い段階で900年を跨ぎ、田嶋編年で1000年とするⅦ1期(Ⅱ-2期古段階)とⅦ2期古段階(Ⅱ-2期新段階)の境界をおおむね950年としている。

これまでのところ、三崎郡内と考えられる遺跡から、それぞれの編年を裏付けさせるような資料は出土していない。ただし、前述したように三崎郡に隣接する古志郡に属す和島村門新遺跡SD-152から、大量の土器とともに「延長六年」(928)と記された漆紙文書が出土した〔和島村教委1995〕。当該文書の使用・施用のあり方に検討は必要であるが、門新遺跡SD-152出土土器がⅦ2期古段階に該当することから、年代観としては出越編年に近いと思われる。したがって、年代は出越編年をもとにすれば、深町遺跡は10世紀前葉、宮田遺跡は9世紀後葉～10世紀初頭をそれぞれ中心とした時期と考えられる。

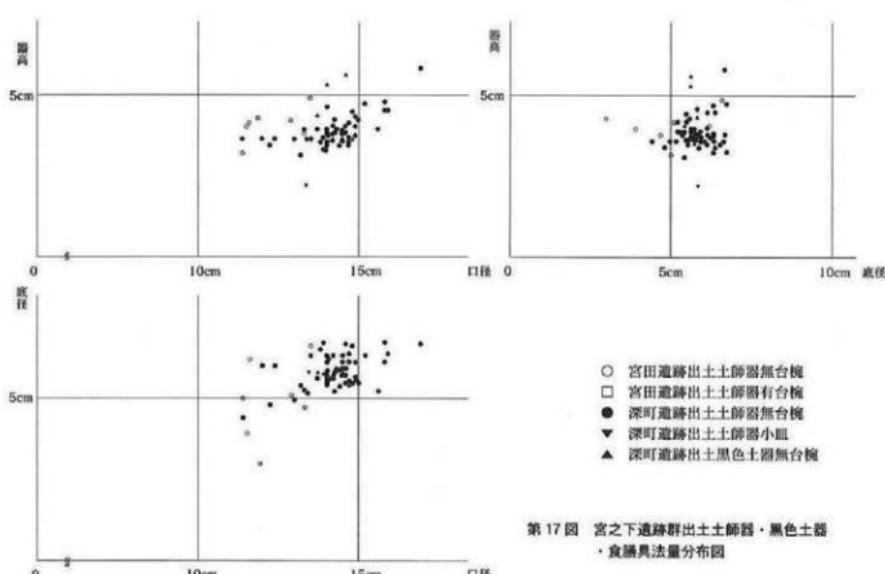
土器様相の変化 編年的な位置付けや、推測される年代を比べても、深町遺跡と宮田遺跡との間には半世紀ほどの隔たりしかない。しかし、土器様相には大きな差異がある。特に顕著なのは、両遺跡における土師器のあり方である。須恵器と土師器の量比や器種構成については、編年の検討の段階すでに述べているが、法量や形態に着目するとその違いは明瞭である。

第17図は、両遺跡出土の土師器・黒色土器食膳具の法量分布を示したものである。深町遺跡の土師器無台椀はおおむね口径14～15cm、底径6cm前後、器高3～4cmに集中する。宮田遺跡の土師器無台椀は、個体数が少ないために法量の集中する値を特定できないが、底径・器高が深町遺跡の分布範囲とさほど異なるものに対し、口径は1cmもしくは2～3cmの違いがある。器形に歪みを持つものが多いため、口径や器高の値は必ずしも正確ではないが、明瞭な違いであることは明らかである。また、深町遺跡の無台椀B類やC類のように口縁端部を外反させたり、玉縁状になるものが目立つことも形態上の特徴である。

さらに、深町遺跡S X-33のように大量の土器を伴う土坑が出現する点も大きな変化と考えられる。次項では、多くの土器群が出土した遺構について考察してみたい。

田崎 1988	出越 1997	春日 1997	兼澤 1998	須 城 郡		三 郷 郡		古 志 郡		佐渡国
				須 道 跡 番 号 SD-1099	須 道 跡 番 号 SD-1098	須 道 跡 番 号 SD-1097	須 道 跡 番 号 SD-1096	須 道 跡 番 号 SD-1095	須 道 跡 番 号 SD-1094	
V 1	I - 1	V 1	I	上 押 出 SX - 91	(大 舞)					
V 2	I - 2	V 2	I - 1	今 池 SD - 201	今 池 SD - 186 (施 寺)	前 耕 り	雨 池	八 幡 移 工 地 下 道	羽 黒	下 口 沢
	I - 3		I - 2		子安 SK - 21 子安 SK - 622					
	I - 4	V 1	II - 1		保坂 SD - 51 保坂 SD - 80					
V 1	I - 4			(今 池 SD - 39)	今 無			八 幡 移 工 地 上 部		カメ 畠
V 2	II - 1	V 2	II - 2		子安 SD - 322 越 前	宮 田 SD - 346 宮 田 SD - 378a	八 幡 移 C 地 区	江 ノ 下		
V 3	II - 1	V 3	II - 3	子安 SD - 354 子安 SD - 399 四 ヶ 屋 SK - 711						
V 1	II - 2 古	V 1	II - 1	子安 SE - 482 子安 SE - 45 子安 SE - 711	深 町 SX - 33	門 新 外 削 田	高 野			
			II - 2	須 町 SE - 168 須 町 SE - 295						
		V 2	V - 1	四 ヶ 屋 SK - 63 四 ヶ 屋 SK - 34						
V 2 古	II - 3	V 2	V - 2	江 向 SE - 8 四 ヶ 屋 SE - 25		門 新 SD - 182				
			V 3	-210東 SD - 1 四 ヶ 屋 SK - 37 四 ヶ 屋 SK - 80						
		II - 1	II - 2							

第 10 表 宮之下遺跡群出土古代土器の編年的位置付け（試案）



第 17 図 宮之下遺跡群出土土師器・黒色土器・食器具法量分布図

3) 出土土器と遺構の性格

前項では、宮田遺跡 S D-346・S D-378a、深町遺跡 S X-33出土土器群は一括りが高く、これらを中心として2遺跡の時期を推定してきた。ここでは、出土遺物の内容から考えられる遺構の性格について、若干考察してみたい。

a 宮田遺跡 S D-346・S D-378a 出土土器と遺構の性格

前述したように、宮田遺跡 S D-346と S D-378a は、機能していた時期にはほとんど差がないと考えられる。しかし、出土土器の内容には違いが認められ、遺構の性格を表すものと考えられる。第11表は、宮田遺跡の S D-346と S D-378a の出土遺物の内容を示したものである。数値は、接合作業を経た後の破片数を示している。そのため、特に貯蔵具や煮炊具においては実際の個体数とはやや異なる数値となるが、それぞれの傾向を把握するには大差ないものと考えた。ただし、1点（破片）としても、全体の器形を把握できるような場合もあれば、細片の場合もあり、遺存率・完形率の違いが著しい場合がある。そこで、第11表には今回の報告で図化することができた点数も付加することとした。図化が可能であったものは、ある程度の大きさを持つ破片であるため、それぞれの比較にあたっては参考になると思われる。

また、小破片からの器種の識別については、次の点に留意した。須恵器食膳具は、大半を占める無台杯の形態は3類に分類されたが、体部が直線的あるいはやや内湾したとしても、外傾して口縁部が開き、器高が4cmを超えない浅身のものが多い。これに対して有台杯は、すべて深身の形態であり、時期的にも浅身の有台杯が存在する可能性は低いと思われる。また、土師器食膳具の場合は、有台椀に特定の胎土（H4類）が用いられていることから、比較的容易であった。食膳具では、このような形態や胎土の違いを識別の着眼点とすることができた。さらに、煮炊具の場合、口縁部を伴わない長甕と鍋などの小破片からでは器種の特定が不可能なものが多かった。その場合は、ひとまず長甕に含めてあるが、長甕や鍋としてよりも、煮炊具としての数値を重視することとしたので、大勢への影響は少ないと思われる。

S D-346の須恵器と土師器の割合は約1:9、S D-378aは約1:4で黒色土器と灰釉陶器の破片をそれぞれ2点ずつ含んでいる。須恵器と土師器の量を比較した場合、両遺構とも圧倒的に土師器が須恵器を上回っている。また、S D-378aよりもS D-346では須恵器の割合が低いものの、全体のほぼ1~2割が須恵器であるという組成は、遺跡全体の傾向とも大差はない。しかし、器種別に出土量を比較すると、この2遺構には大きな違いが認められた。

まず、須恵器をみると、S D-346は計21点、S D-378aは計53点であるが、器種構成に大きな隔たりがある。S D-346で最も多いのが墨書き器3点を含む無台杯であるのに対し、S D-378aでは無台杯が出土しておらず、甕の破片が多くを占めている。また、有台杯についてもS D-346はほぼ完形のものが1点出土しているのに対し、S D-378aでは、口縁部～体部の小片が6点である。さらに、S D-346の貯蔵具は、長頸瓶・横瓶・甕が各1点であり、甕の破片が多くを占めるS D-378aに比べれば、少量で小片ながら器種のバラエティに富んだ内容といえよう。

次に、土師器をみると、S D-346は計154点、S D-378aは計242点であるが、やはり器種構成がやや異なる。両遺構とも、無台椀が圧倒的に多い。しかし、S D-346には完形に近いもの、もしくは全体の器形が把握できるものがあるのに対し、S D-378aではあまり見受けられず、底部のみの破片などが多い。さらに、S D-346は、C類とした大型の無台杯や有台椀が今回の調査では唯一存在する遺構である。また、小片であるが、煮炊具の量もS D-378aが多いという違いがある。

	須 恵 器			土 師 器			合 計	備 考
	有台杯	無台杯	貯藏具	無台椀	有台椀	煮炊具		
SD-346	1 (1)	17 (12)	3 (3)	139 (20)	3 (3)	12 (1)		175 (40)
SD-378a	6 (2)	47 (19)	212 (20)	30 (5)	2 (0)	2 (1)	299 (47)	須恵器長頸瓶1(1)点・楕瓶1(1)点・甕1(1) 点・土師器長瓶9(1)点・小甕3(1)点 須恵器瓶3(1)点・甕44(16)点・灰陶陶器瓶 2(1)点・土師器長甕35(22)点・小甕4(3)点
合 計	7 (3)	17 (12)	50 (22)	351 (40)	3 (3)	42 (6)	2 (0)	474 (87)

※ 点数は破片数
※※ () 内の数値は汎化した点数

第11表 宮田遺跡SD-346・SD-378a出土土器類組成表

このように、SD-346とSD-378aの須恵器・土師器は、器種構成がまったく異なった内容であることがわかる。これは、それぞれの遺構が持つ性格の違いによるためと思われる。SD-346には、墨書き土器・土師器無台椀C類・土師器有台椀や長頸瓶や横瓶といった貯蔵具を含み、比較的完形率が高いといったことから、何らかの儀礼的な行為に伴って、土器類が使用されていた遺構である可能性が高い。SD-378aについては、概して完形率が低いこと、土器類のほか甕なども多く含んでいることなどから、廃棄的な意味合いの強い遺構ではないかと推測される。

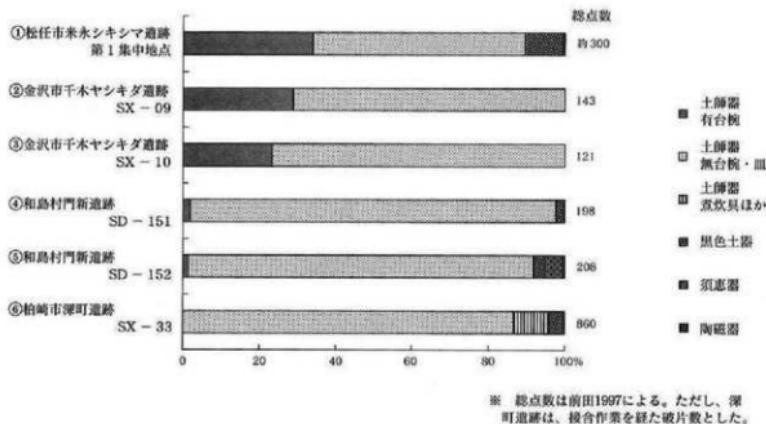
b 深町遺跡SX-33出土土器と遺構の性格

次に、深町遺跡SX-33について考察する。前述したように、北陸縦年のⅧ期以降（10世紀前葉以降）に比定される遺跡から、土師器食貯具を中心とした土器が、土坑や溝跡などから大量に出土する例がみられるようになる。この場合、大量の土器群が祭祀行為に伴うものなのか、廃棄行為に伴うものなのか、遺構の性格に関わり、議論されるところである。ここでは、北陸において祭祀に関連すると考えられる遺構と比較することによって、SX-33の性格について検討してみたい。

土器出土状況 SX-33は、約5m×4m、深度約50cmほどの土坑である。土器が多く含まれていたのは、第2層とした層厚5~10cmほどの炭化物の混入が多い覆土の中層であり、出土した土器群の一括性は高い。破片数は約800点以上であるが、完形もしくは全体の器形がわかるものは土師器無台椀約50点、小甕1点、黒色土器無台椀5点である。

土器の出土状況については、図版32に示されたとおりである。土器群は、黒褐色を主体とする第2層の広がりとともに、本遺構のおもに北側に多く分布している。南側からも破片や甕が出土しているが、北側に比べると分布する密度は極端に低くなっている。土器が大量に出土する場合、複数の土師器無台椀などが重なった状態や入れ子状態になって検出される例がある。しかし、当該遺構ではそのような状態を看取することはできず、位置や方向などに何らかの規則性を見出すこともできなかつた。また、土師器短頸壺や甕のほか、黒色土器の出土位置についても注意を払ったが、器種ごとに集中する部分など、特記すべき点はなかつた。

北陸における事例 北陸においては、前田清彦氏が土器祭祀の観点から、大量の土器が出土した遺構の類型をまとめている〔前田1997〕。前田氏は、集成了した遺構を土器窯・土坑・柱穴などに分類し、土器の出土状況や器種組成を整理し、各類型の年代を求めている。第18図は、前田氏が集成了した遺構のうち、SX-33のように大量の土器が出土したものを取り上げ、組成を示したものである。総点数や内訳の数値も前田氏の集計によるが、深町遺跡SX-33については接合作業を経た破片数とした。取り上げたのは、100点以上の出土量を有する遺構であるため、体制への影響は少ないとと思われる。



第18図 北陸におけるおもな古代土器大量出土遺構と組成図

前田氏の集成から第18図に取り上げたのは、①松任市米永シキシマ遺跡第1集中地点、③金沢市千木ヤシキダ遺跡SX-09、②同SX-10、④三島郡和島村門新遺跡SD-151、⑤同SD-152である。100以上の出土量を有することを条件としたが、遺構の種別は土器溜（A型）・土坑（B型）・雨落溝跡（F型）に限定された。ここで考察する⑥柏崎市深町遺跡SX-33も土坑であるため、比較検討にあたっては、特に大きな支障はないと思われる。時期はいずれもⅦ1期～Ⅶ2期古段階に該当する【出前1997ほか】。

①は、明確な掘り方を持たない、自然の落ち込み部分から大量の土器が出土している。前田氏はこれを「土器溜」（A型）とし、集落全体の祭祀との関連を想定している。土器器有台器種34%、同無台器種56%、黒色土器10%に縁軸・灰釉陶器が數点伴う。土器の用途からみると、食膳具のみであり、烹炊具は出土しない。A型に分類される場合には、おおむねこのような組成をなすが、土器器無台挽は入れ子状態である場合や無台挽と小皿がセットのような状態である場合があるなど、人為的な規則性を読み取れるとしている。

②・③は、明確な掘り方を有する遺構で、土坑（B型）に分類される。A型とは出土する土器の組成が異なり、ほとんどが土器器で占められる。有台器種が2～3割1）、無台器種が7～8割で、烹炊具はみられない。土坑の位置は、大型建物群の周辺に限定されることから、前田氏は建物（群）を対象とした祭祀を想定している。

④・⑤は、建物の周辺に設けられた雨落溝跡（E型）である。出土土器の組成は、土器器無台挽が9割を占めているが、灰釉陶器や黒色土器を含んでいます。須恵器食膳具・貯蔵具が若干混じるが、やはり土器器烹炊具はみられない。また、④では土器器無台挽が完形・逆位・入れ子状態で検出されている。雨落溝跡が建物の近辺に位置することから、B型との共通性が指摘できるが、前田氏は土器組成の点からA型と同様とし、集落全体の祭祀に関連付けている。

深町遺跡 SX-33の性格 それでは、④深町遺跡 SX-33の場合はどうであろうか。遺構の種別からいえば、明確な掘り方を有する土坑であるため、B型となる。SX-33の位置は、今回の調査では対象外とした 地区北部（E地区）に接する。第1次試掘確認調査において、地区北部からは比較的高い密度の柱穴群が検出されている（第1章第2節）。また、本発掘調査においても、遺構の分布はE地区に接する範囲に集中している。そのため、深町遺跡の中心部はE地区付近と考えられるから、建物（群）との関連を想定することができよう。

ただし、SX-33を前田氏のB型へ分類することは、土器の組成が異なっているという点で妥当とはいえない。SX-33には、施釉陶器は伴わないものの、全体の数%であるが、定量の黒色土器が含まれており、土器組成からみれば、A・E型などに近いといえる。さらに、土器組成における大きな特徴としては、小破片であるが、土師器煮炊具が全体の約1割を占めていることである。前田氏が祭祀に関連するとして集出した遺構には、日常的な性格の強い土師器煮炊具が土器組成に含まれる例はない²⁾。また、出土状況をみても、入れ子状態のものではなく、逆位と認められるものもなかった。

つまり、SX-33の土器は、出土状況や組成において、前田氏が祭祀との関連を想定する遺構とは大きく異なっていることになる。定量の土師器煮炊具が含まれていること、出土状況にはなんらかの規則性もみられないことなどから、祭祀的な意味合いは薄く、むしろ廃棄行為による痕跡であると考えられる。ただし、土器が含まれていた第2層は、層厚が5~10cmほどである。日常における廃棄物の堆積ではなく、大量の土器が一括して廃棄された可能性が高い。定量の土師器煮炊具が存在するため、その使用については検討する必要があるが、組成の主体である土師器無台椀が大量に使用されていた何らかの儀礼的な行為がなされていたことは想定されるだろう。土師器無台椀については、一過性の食器として使用されていた可能性がある。

4) おわりに

以上、本節では宮之下遺跡群から出土した土器の編年的な位置付けを検討し、深町・宮田遺跡でそれぞれ比較的大量の土器を包含していた遺構の性格について若干の考察を行ってきた。その結果、宮田遺跡は9世紀後葉~10世紀初頭、深町遺跡は10世紀前葉をそれぞれ中心とした時期に營まれていた集落跡と考えられる。この2つの古代集落は、想定される時期差は半世紀ほどであるものの、土器様相あるいは土器が出土する遺構のあり方において違いがみられた。土器からみた宮田遺跡から深町遺跡への変遷としては、食器を中心とした須恵器の激減や土師器無台椀の大量廃棄など、両遺跡での使用形態に大きな違いが認められるのである。

宮之下遺跡群は、推測される三崎郡高家郷域からはやや諸石川を遡った位置にあり、文献資料などでは古代の状況が不明のままであった。しかし、今回の発掘調査によって集落跡が検出され、多くの資料を得ることができた。本節の冒頭でも述べたように、近年は古代の資料が非常に増加している。地域の歴史叙述を目指し、更なる検討を進めていきたい。

註1) 編年的な位置付けを検討する段階でも若干述べたが、当該期において有台器種が定量含まれていることは、時期差なのか地域差なのか現段階では判断できない。あるいは遺構の性格なども反映されていることも想定されるが、今後の資料の増加に期待したい。

2) わずかに、和島村門新遺跡 SK-56から土師器が1点（遺構出土總点数41点）が出土しているのみである。

3 調査の成果とまとめ

1) 調査の要約

宮之下遺跡群は、新潟県柏崎市大字石曾根に所在する。県営中山間地域総合整備事業く山室地区>及び県営農免農道整備事業く石曾根地区>に伴う事前調査として、今回の発掘調査を実施した。

深町遺跡は、平成10年5月18日から7月18日までの延べ40日間で、約3,300m²の発掘調査を実施した。発掘された遺構総数は426基で、そのうちの大半を占める413基がピット類であった。その他には、土坑類9基、溝跡2基、自然流路跡2基が検出されている。また、推定復元された建物跡は22棟であった。これらのことから、遺跡の性格は農村的な集落であった可能性が高いと考えられる。遺跡の営まれた時期は、概ね10世紀前葉前後を主体とし、土師器や黒色土器、須恵器等が出土している。

片畠遺跡は、平成10年8月3日から10月5日まで、延べ32日間にわたって発掘調査を実施した。調査面積は約950m²である。発掘された遺構の総数は114基で、その大半の101基をピット類が占めていた。また、土坑類7基、井戸跡1基、近世墓壙4基、自然流路跡1基も検出されている。柱穴の配列から、建物跡等を推定復元することはできなかった。遺跡の性格は、農村的集落であったと考えられるが、主体となる時期が概ね3時期あり、それぞれ小規模に営まれていたと想定される。出土遺物等から、概ね15世紀、17世紀及び18世紀以降の年代に比定できよう。出土遺物には、古式土師器、中世土師器、珠洲、肥前、越中瀬戸、近世陶磁器、鏡貨等の多彩な内容が認められる。

宮田遺跡は、平成11年5月11日から7月25日までの延べ50日間で、約6,800m²の発掘調査を実施した。発掘された遺構総数は559基で、その内の半を占める523基がピット類であった。その他には、土坑類11基、井戸跡1基、溝跡19基、自然流路跡5基が検出されている。また、柱穴の配列等を検討し、11棟の建物跡が推定復元された。遺跡の性格は農村的な集落であると思われ、概ね9世紀第4四半期前後を主体とする。出土遺物には、土師器や黒色土器、須恵器、灰釉陶器等が認められる。

2) 遺跡群の盛衰と消長

今回の発掘調査を実施した遺跡群の中では、宮田遺跡の主体的時期が最も古く、概ね9世紀第4四半期に比定可能なものであった。ほぼ中央に比較的大規模な自然流路跡があり、その両岸に集落が形成されるあり方を呈していた。深町遺跡に比べると、土石流等の自然災害の痕跡も稀薄であり、建物跡や柱穴の規模も大形であった。過去に実施された土木工事等の影響もあるが、遺構の重複は少なく、比較的短期間で廃絶されたものとみられる。次いで、概ね10世紀前葉前後を主体的時期とする深町遺跡が、半島状の丘陵を越えた地点に形成される。この地点は自然災害の痕跡が顕著に認められ、本遺跡周辺のそのような環境が、比較的短期間の営みであったことの要因と考えられる。その後、約500年間にわたる期間、基本的には人跡が認めなくなる。しかし、概ね15世紀に至ると、宮田遺跡に隣接する地点に片畠遺跡が形成され、17世紀及び18世紀以降まで、断続的な営みが把握される。なお、宮田遺跡からは縄文時代、深町遺跡からは縄文～弥生時代、片畠遺跡からは古墳時代に比定可能な遺物が検出されたが、それぞれ極めて少量な状況であり、一時的な営みであった可能性が高い。

このように、宮之下遺跡群で把握された集落は、短期間での廃絶を繰り返していた。断片的な営みが行われた時期もあり、今後の当該地区周辺における事例増加に期待し、傍証していくことしたい。

「引用参考文献」

報告書抄録

ふりがな	みやのしたいせきぐん						
書名	宮之下遺跡群						
副書名	新潟県柏崎市・宮之下遺跡群発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第35集						
編著者名	中野 純・伊藤啓雄						
編集機関	柏崎市教育委員会 文化振興課 遺跡調査室						
発行者	柏崎市教育委員会						
所在地	945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL 0257-23-5111 内線365						
発行年月日	西暦 2001年3月21日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
深町遺跡	新潟県柏崎市 大字石曾根	15205	677	37度 16分 22秒	138度 37分 53秒	19980518 ~19980802	3,500	県営中山間地域 総合整備事業お よび県営農免県 道整備事業に伴 う発掘調査
片畑遺跡	新潟県柏崎市 大字石曾根	15205	687	37度 16分 09秒	138度 37分 53秒	19980803 ~19981005	1,200	
宮田遺跡	新潟県柏崎市 大字石曾根	15205	686	37度 16分 05秒	138度 37分 48秒	19990511 ~19990802	6,800	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
深町遺跡	集落跡	古代	堀立柱建物跡 土坑	土師器・須恵器 黒色土器				
片畑遺跡	集落跡	中世 近世	堀立柱建物跡 井戸跡・墓塚	土師器・中世土師器 珠州・近世陶磁器・錢貨				
宮田遺跡	集落跡	古代	堀立柱建物跡 溝跡・土坑	土師器・須恵器 灰釉陶器・柱根				

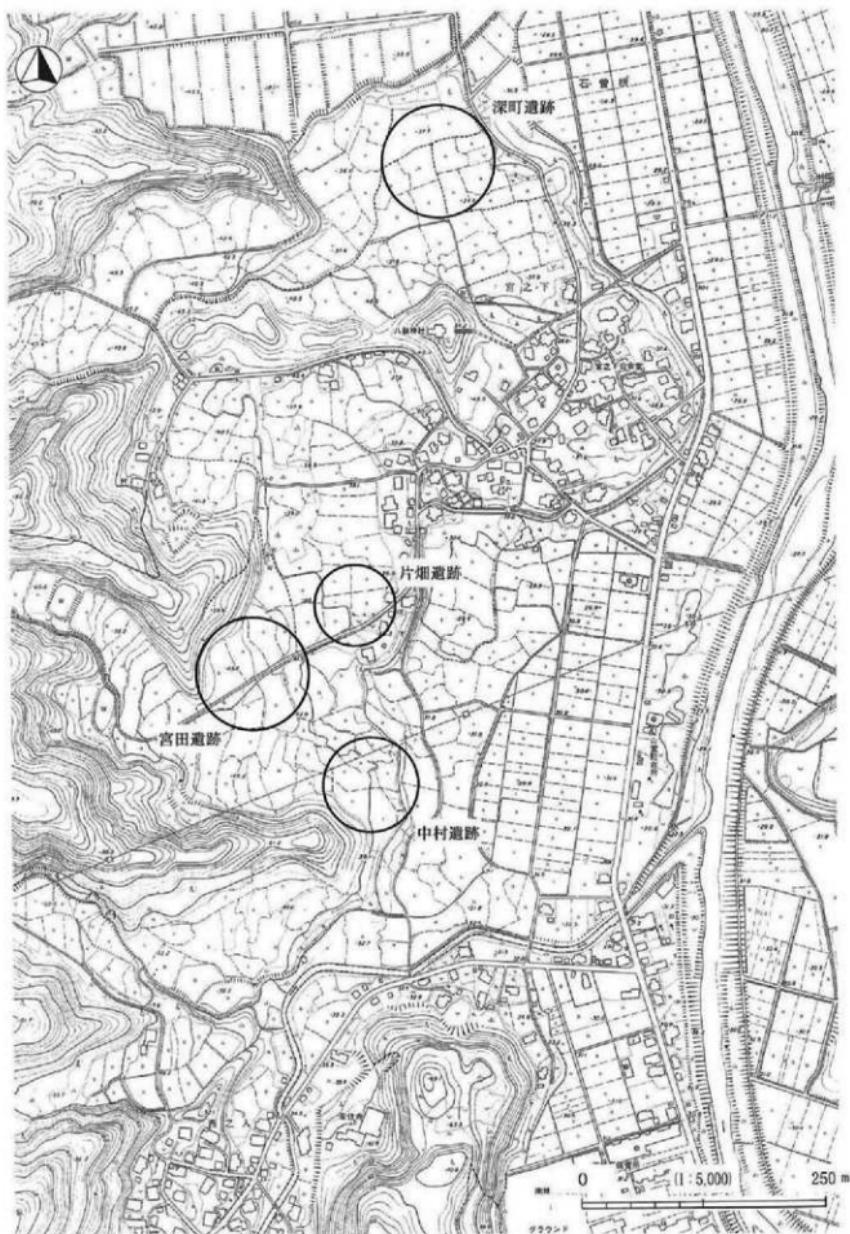
図 版

凡 例

1. ここには遺跡全体及び遺構に関わる実測図と写真をおさめ、図面図版と写真図版に区分されるが、図版番号は通し番号となっている。
2. 図面図版には、方位と縮尺を付した。方位はすべて真北である。
3. 写真図版に記した方位は、対象物に向かった方向を大まかに示したものである。



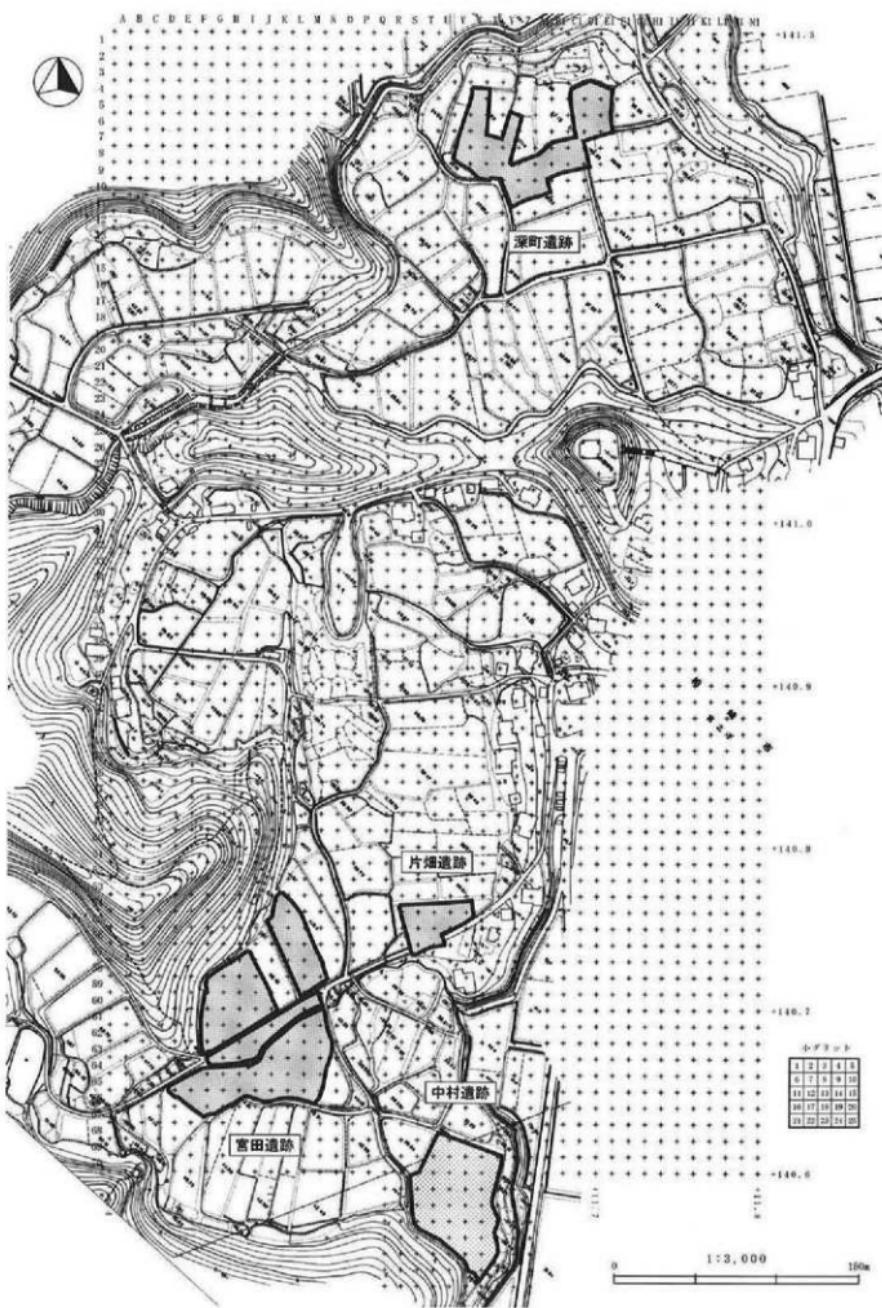
宮之下遺跡群 1



宮之下遺跡群と周辺の地形

図版2

宮之下遺跡群 2



宮之下遺跡群グリッド図

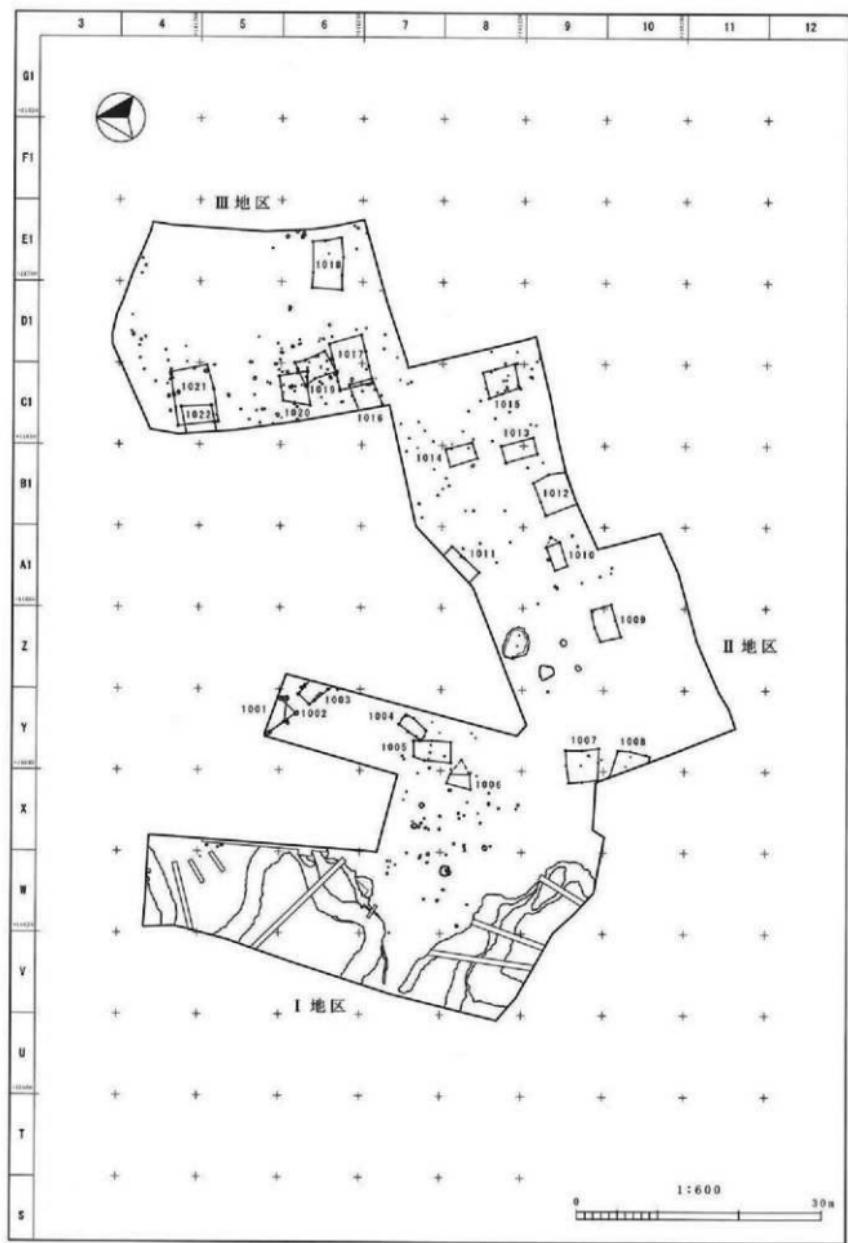
深町遺跡 1

図版 3



深町遺跡と周辺の地形

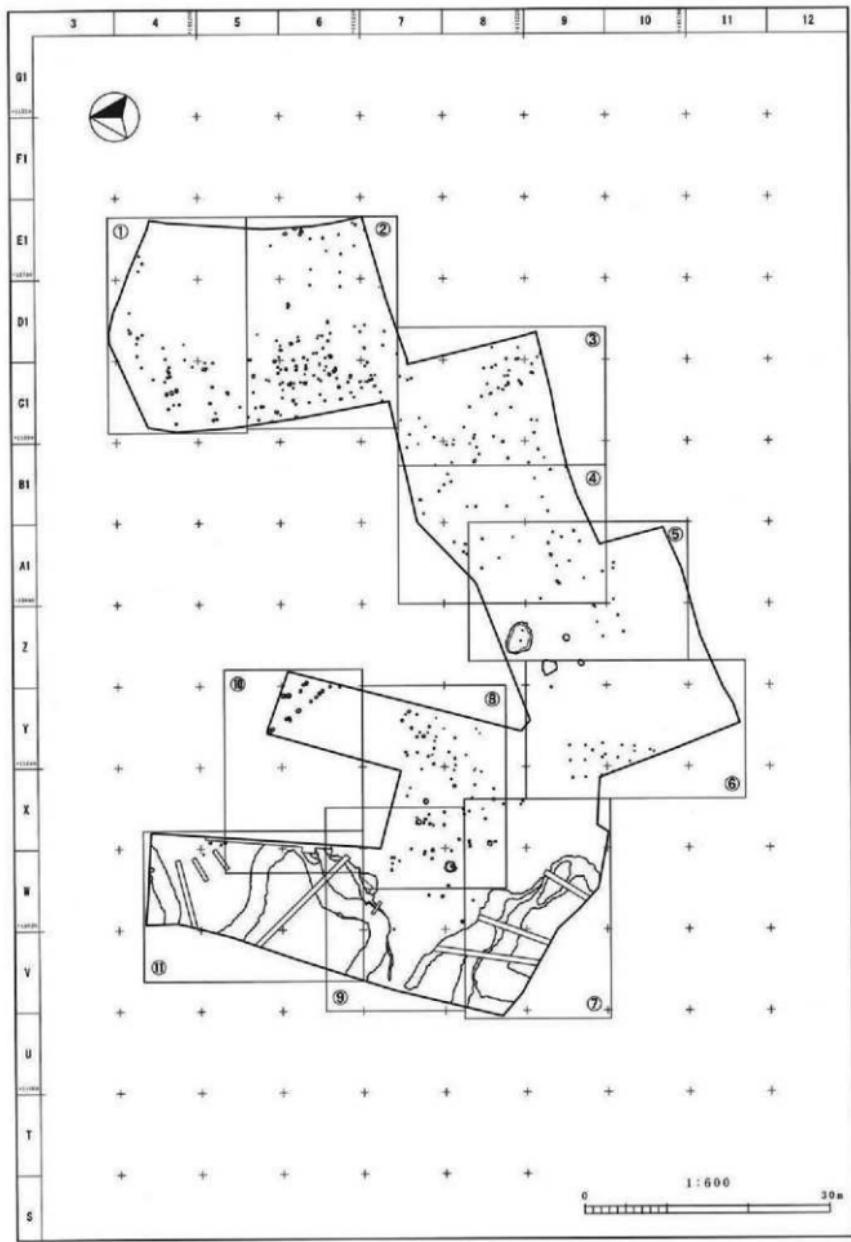
深町遺跡2



深町遺跡全体図

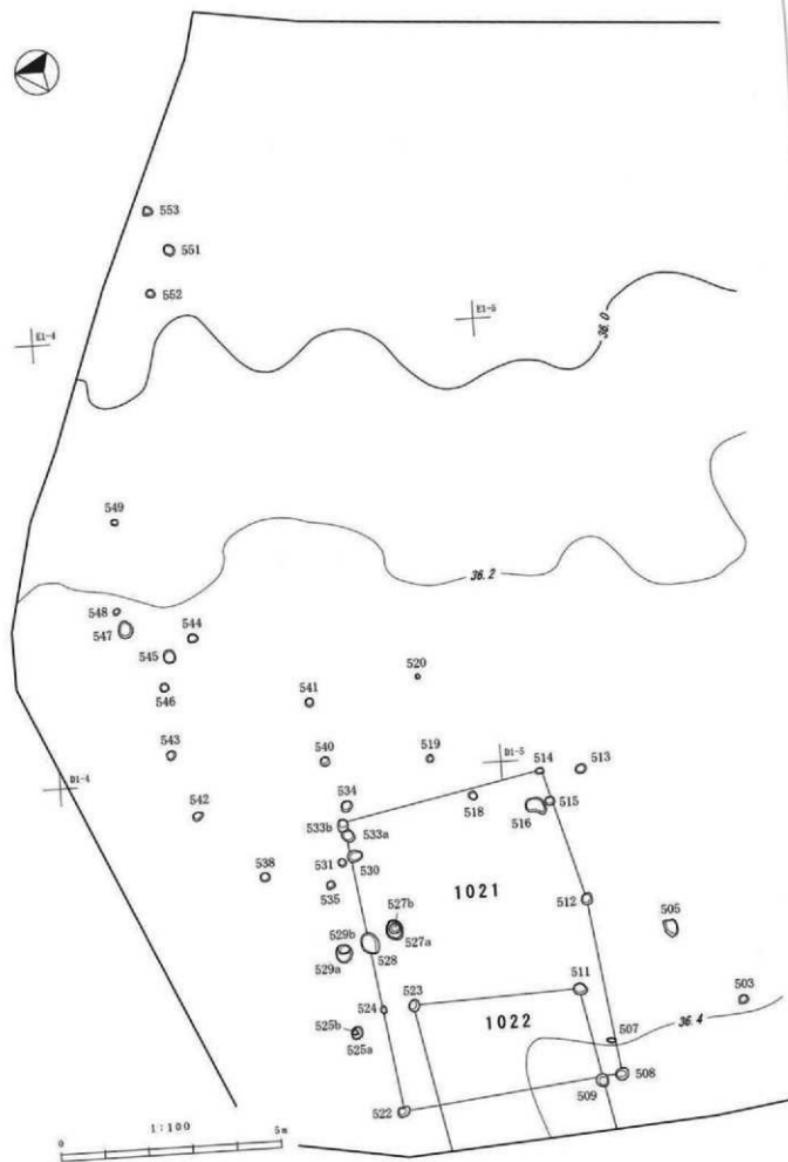
深町遺跡3

図版5



深町遺跡遺構全体図割付図

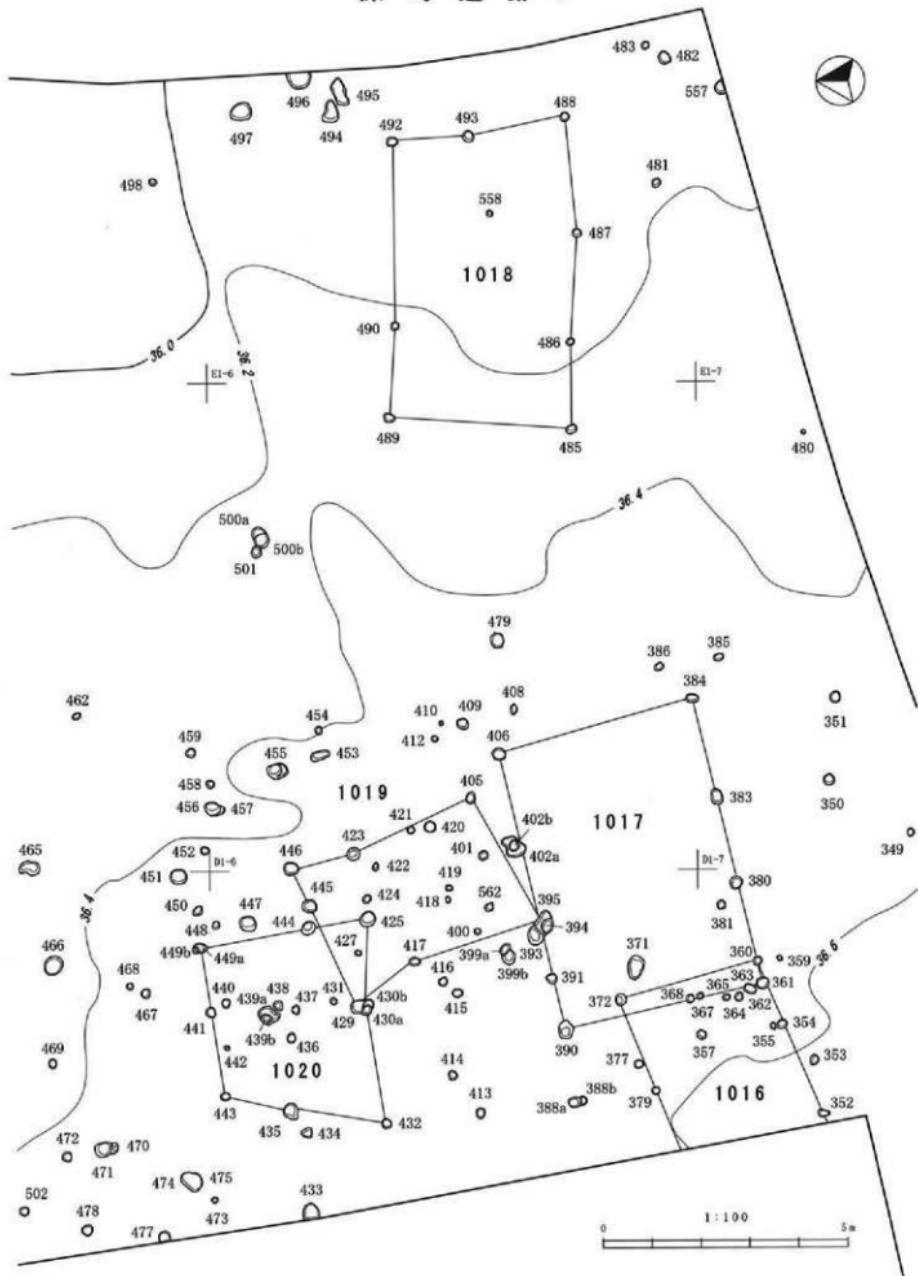
深町遺跡4



深町遺跡遺構全体図1

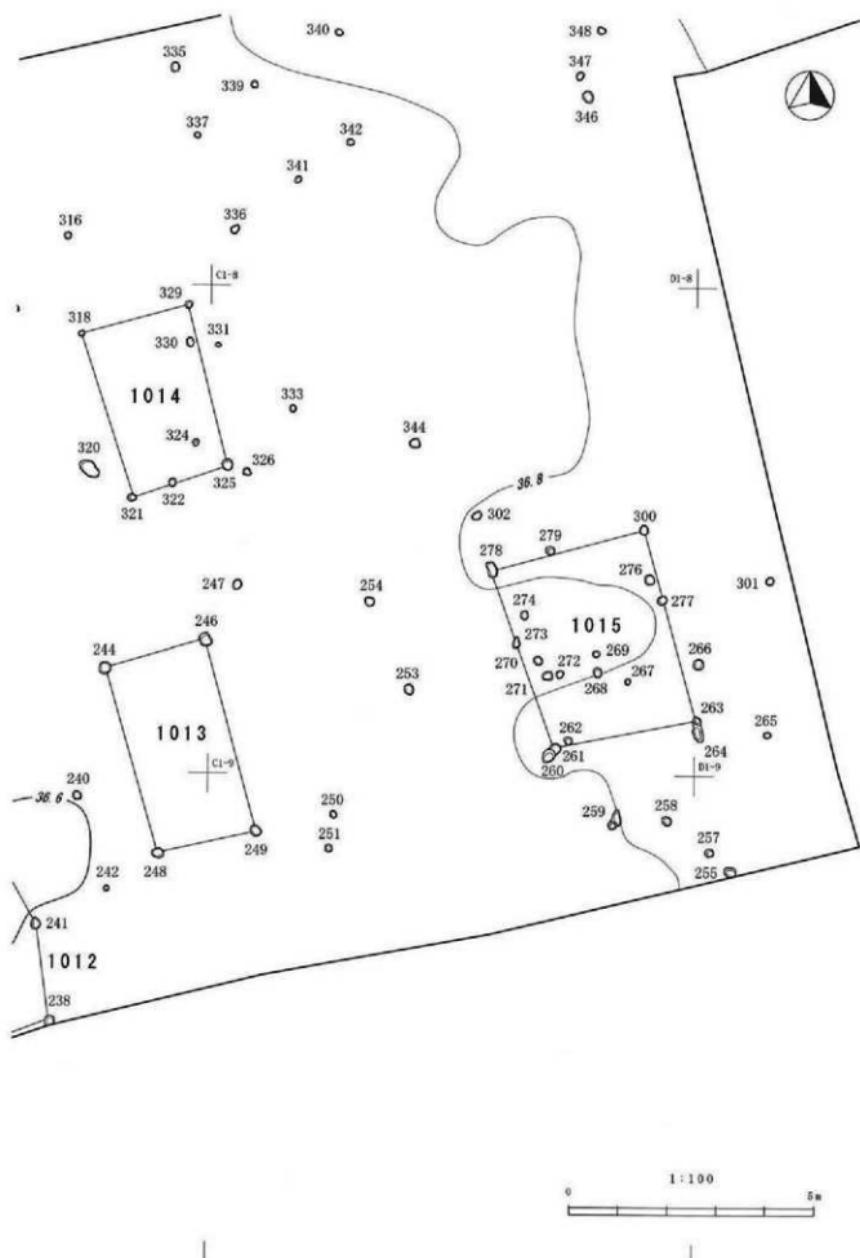
深町遺跡 5

圖版7

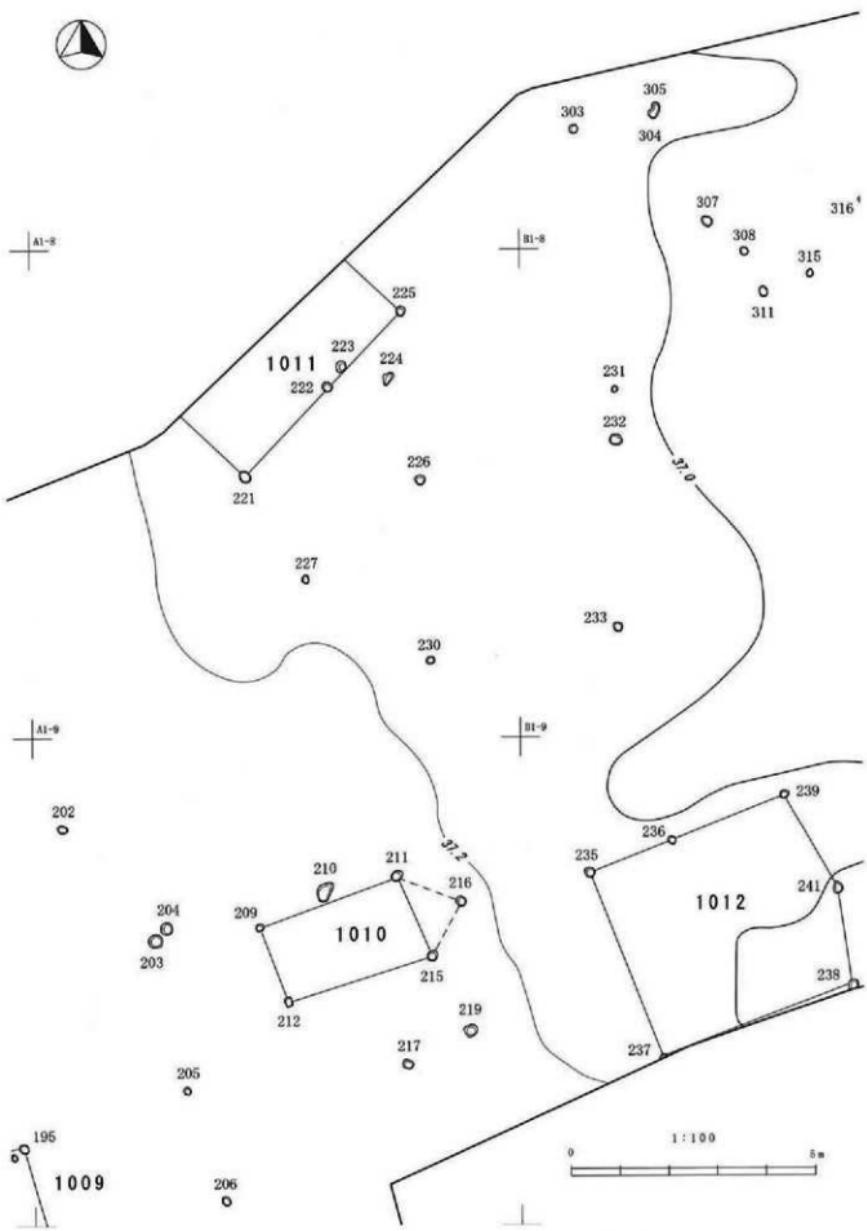


深町遺跡遺構全体図 2

深町遺跡6

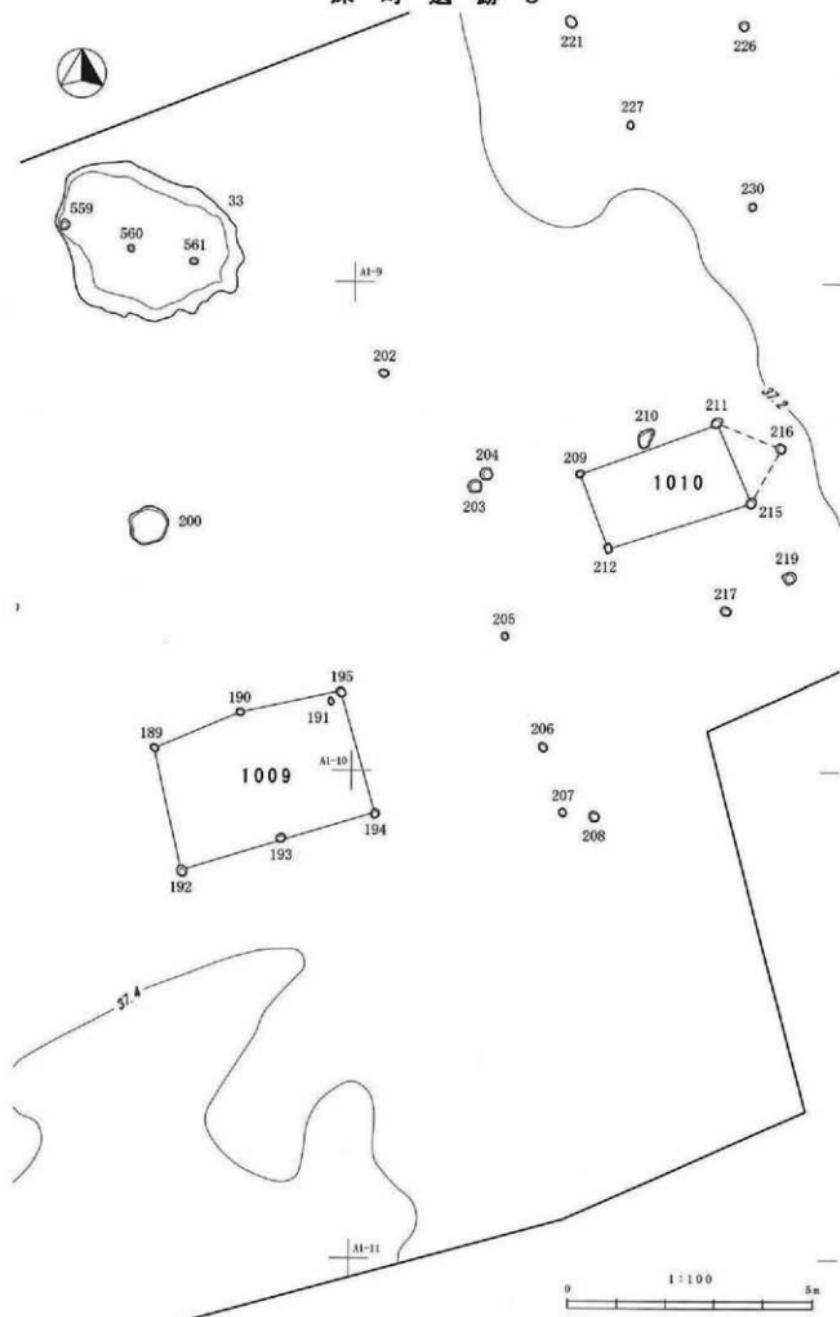


深町遺跡遺構全体図 3



深町遺跡遺構全体図 4

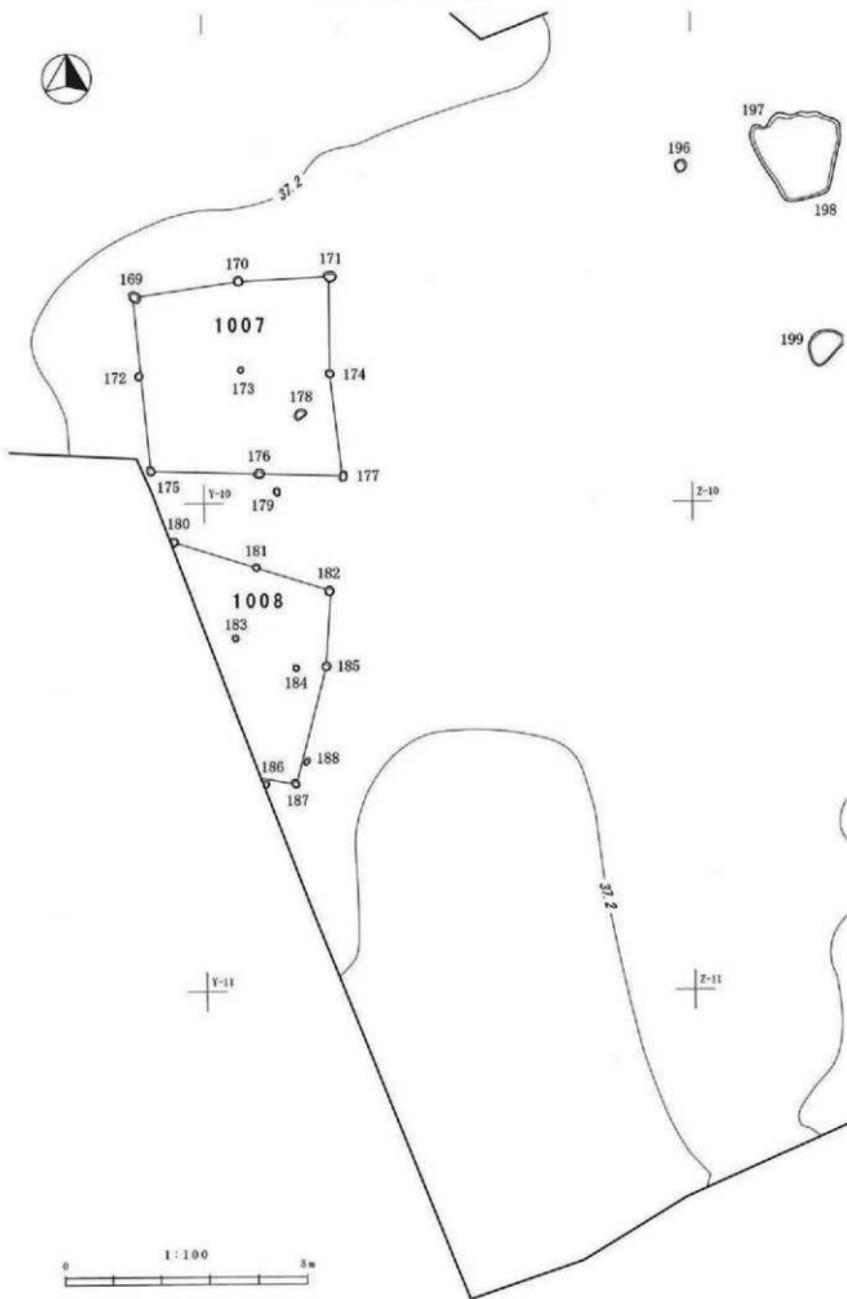
深町遺跡8



深町遺跡遺構全体図 5

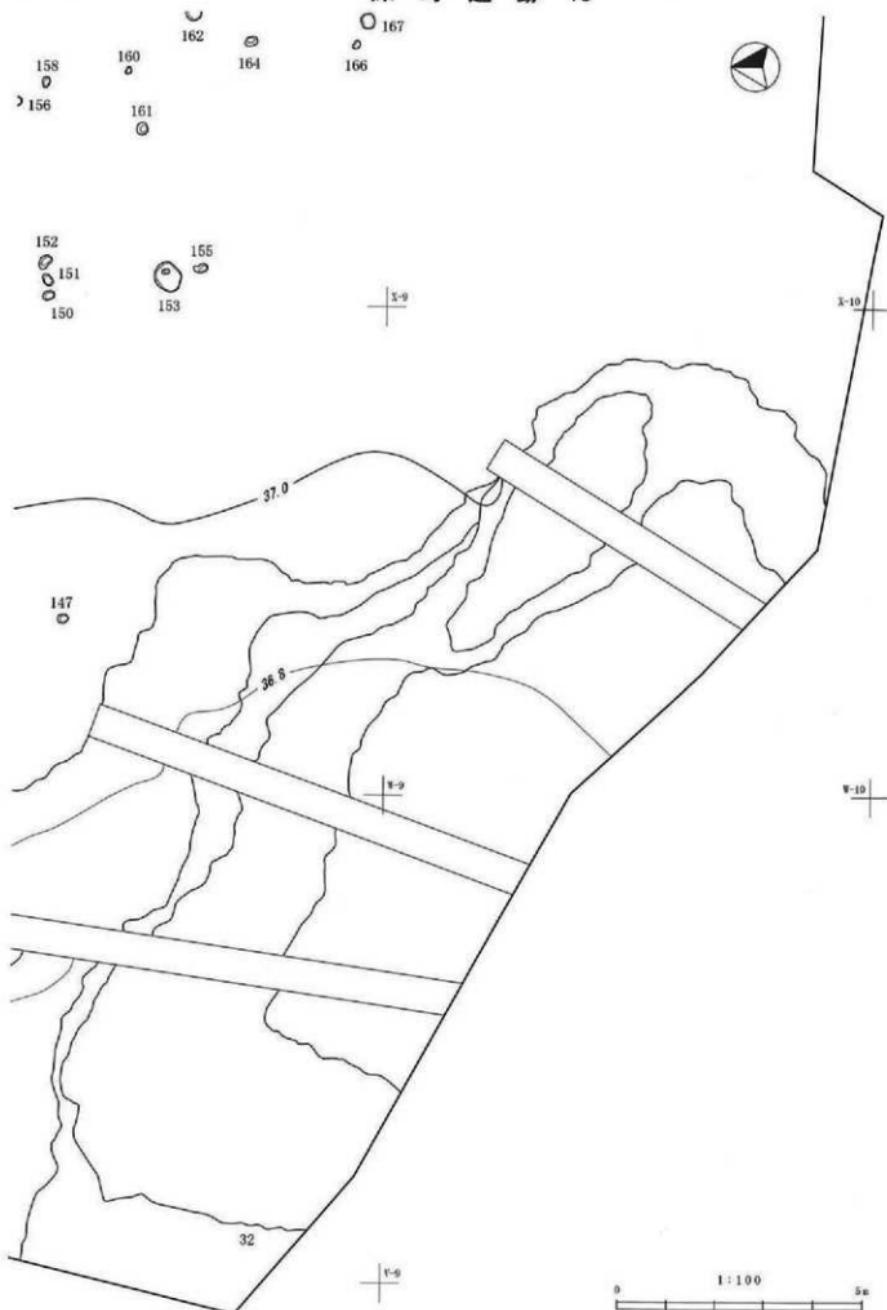
深町遺跡 9

図版11

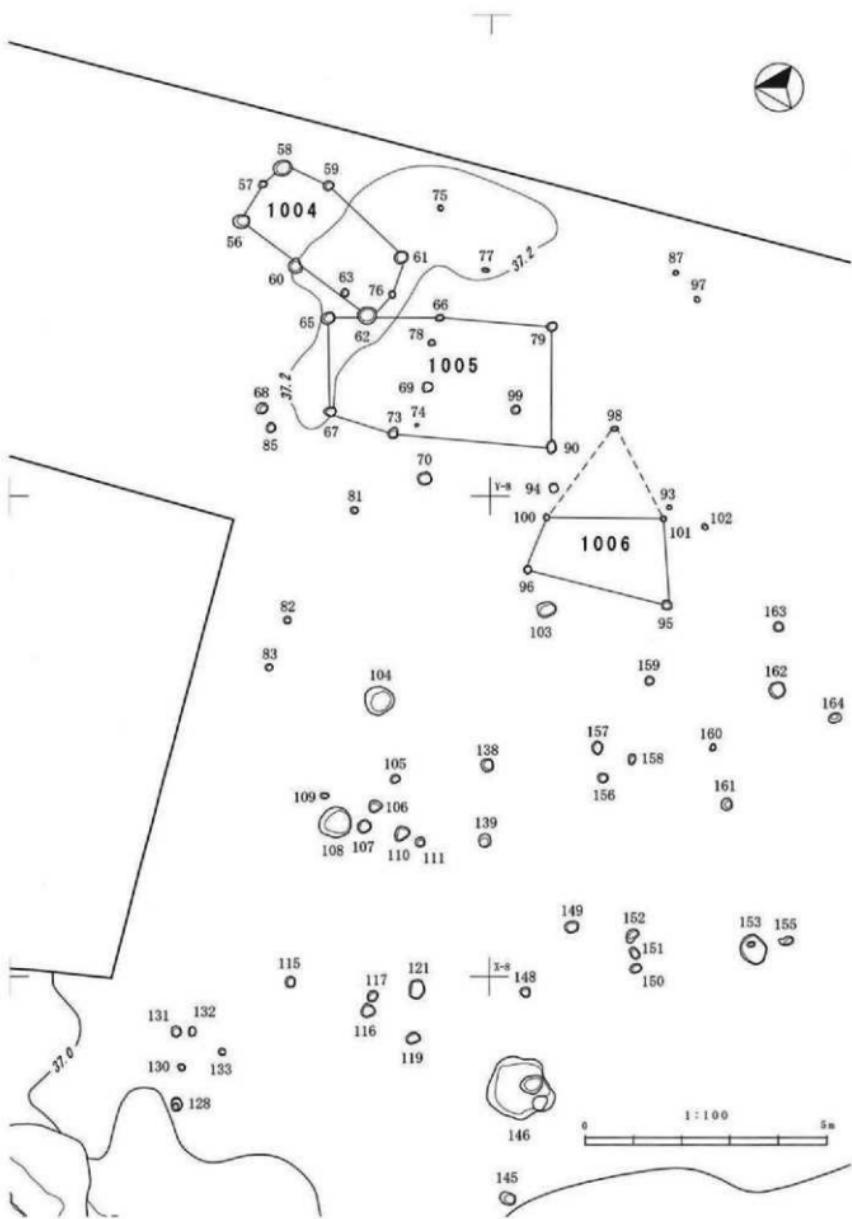


深町遺跡遺構全体図 6

深町遺跡 10

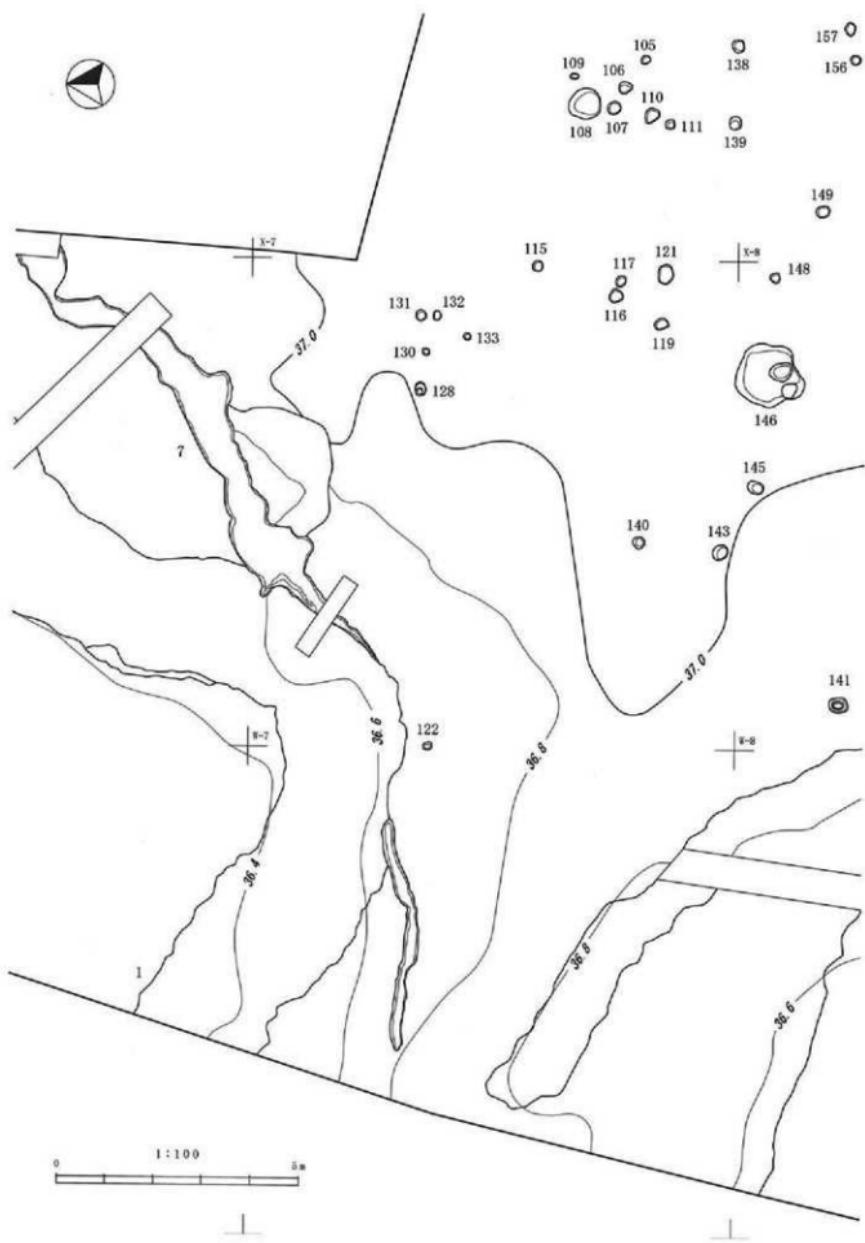


深町遺跡遺構全体図 7

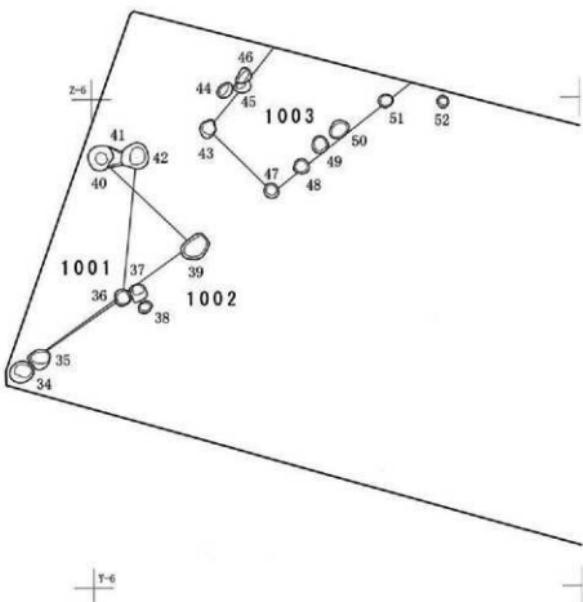


深町遺跡遺構全体図 8

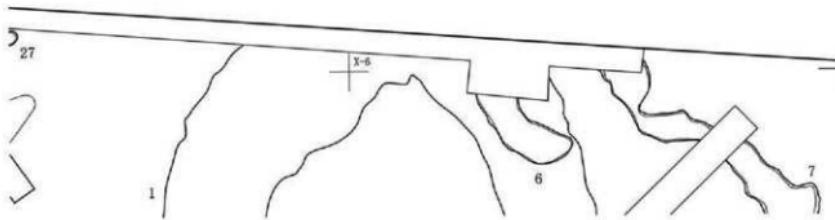
深町遺跡 12



深町遺跡遺構全体図 9



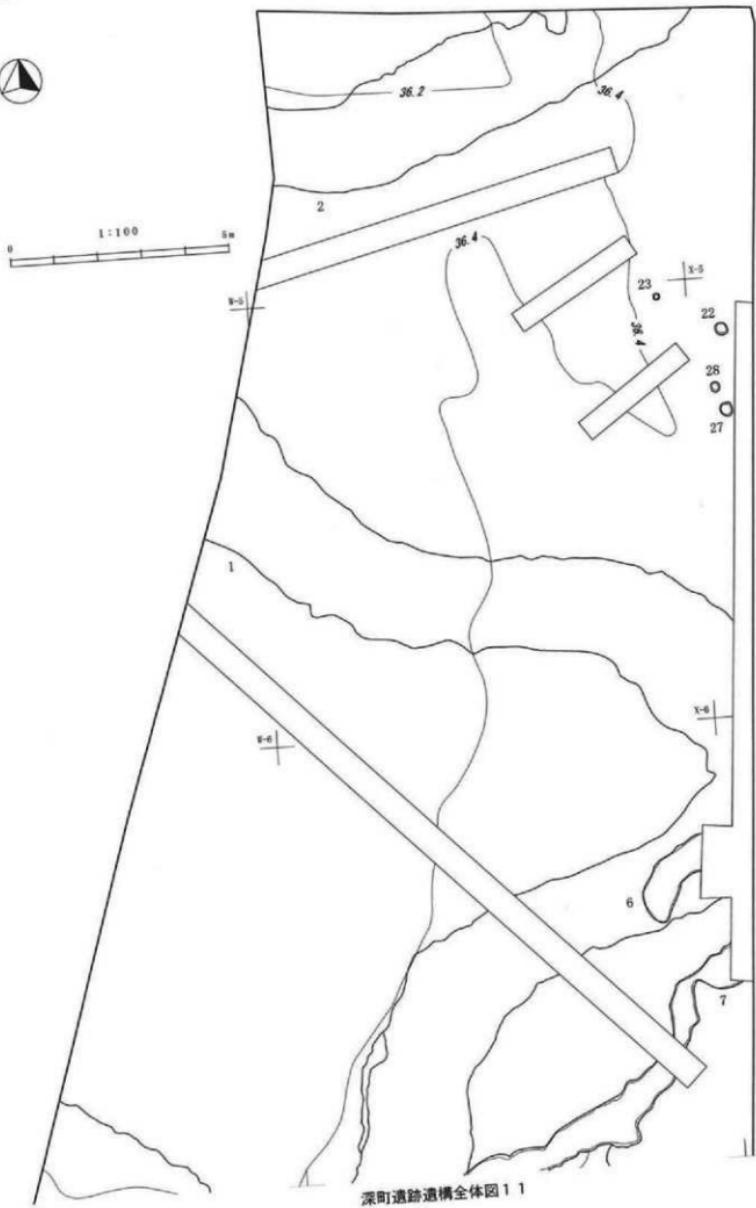
1:100
5m



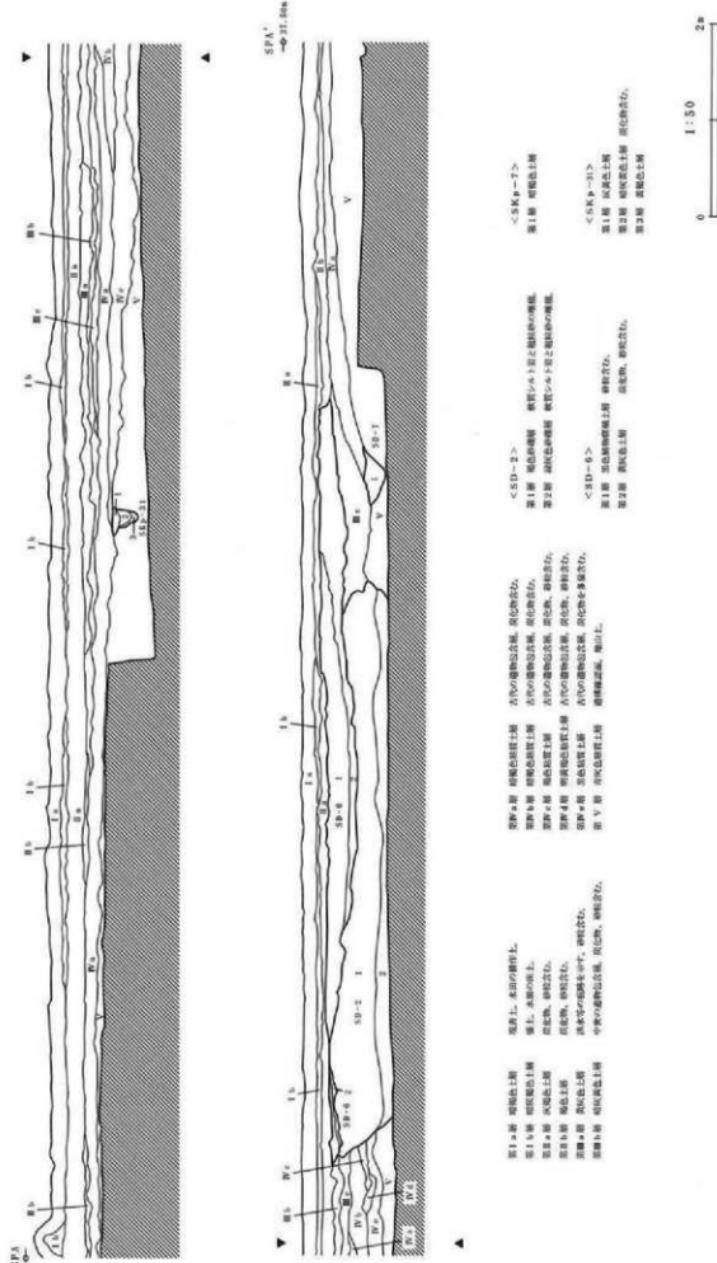
深町遺跡遺構全体図 10

図版16

深町遺跡 14



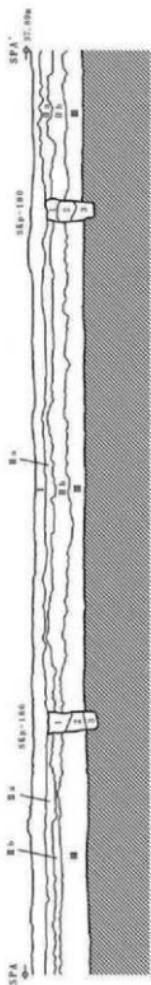
〈I 地区東壁〉



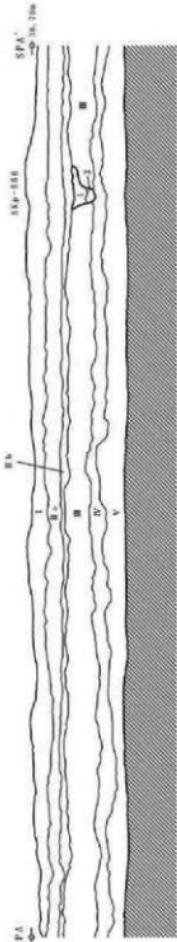
深町遺跡基本層序 1 (1 地区)

深町遺跡 16

<II地区西壁>



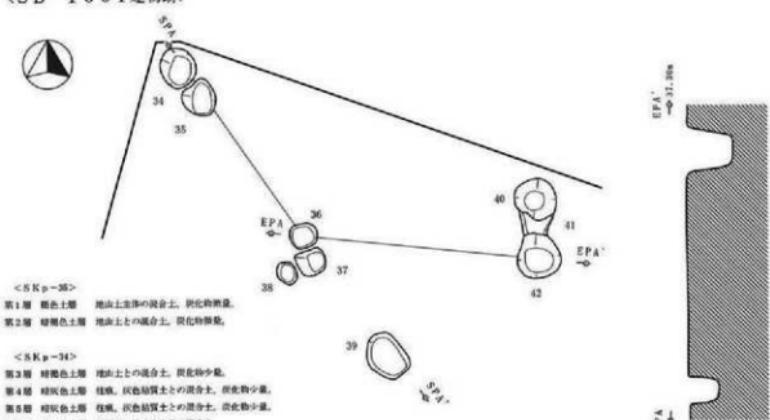
<III地区東壁>



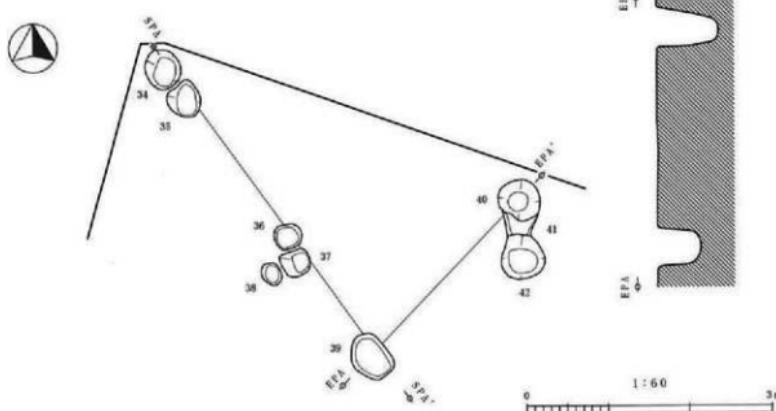
1:50
0 2.0

深町遺跡 17

<SB-1001建物跡>



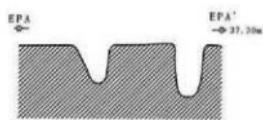
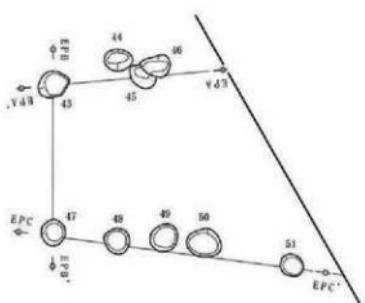
<SB-1002建物跡>



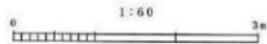
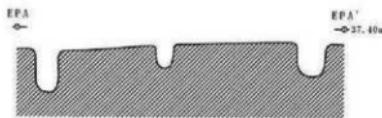
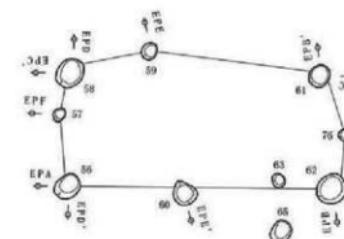
深町遺跡遺構個別図1(建物跡1)

深町遺跡 18

<SB-1003建物跡>



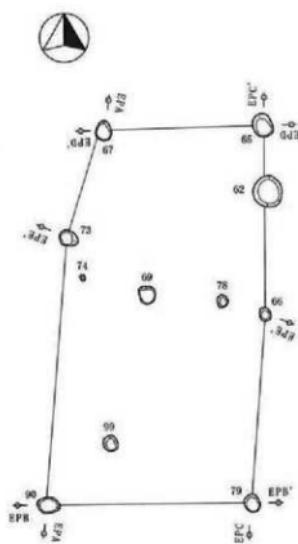
<SB-1004建物跡>



深町遺跡遺構個別図2 (建物跡2)

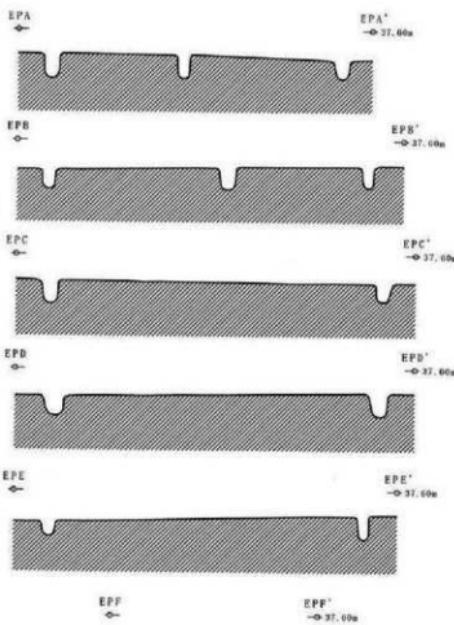
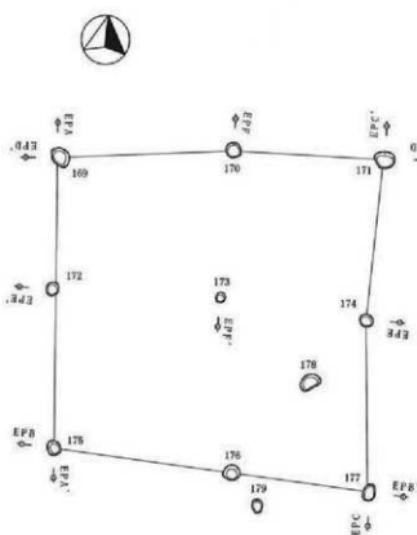
深町遺跡 19

<SB-1005建物跡>

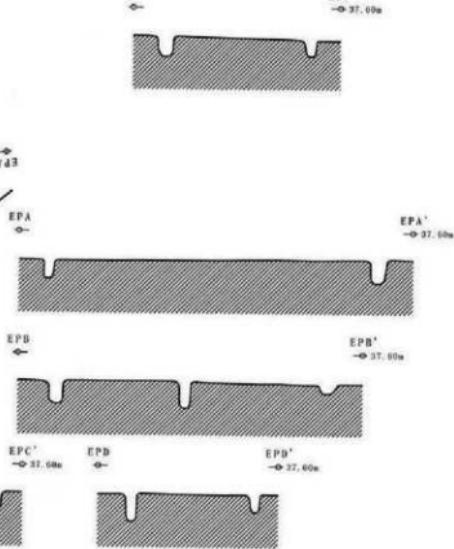
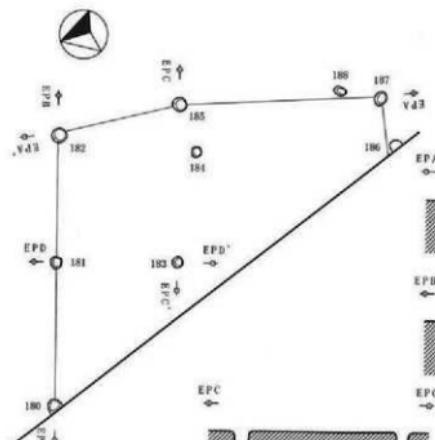


深町遺跡 20

<SB-1007建物跡>



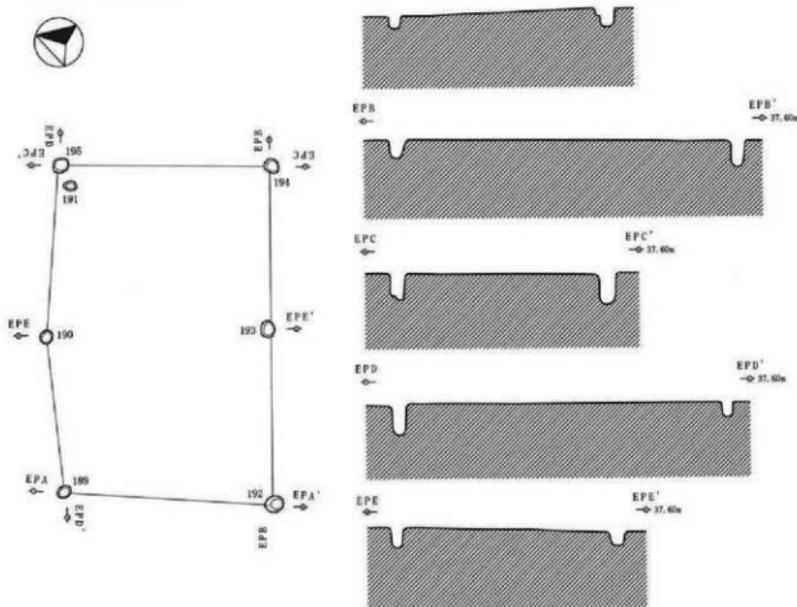
<SB-1008建物跡>

1:60
0 3m

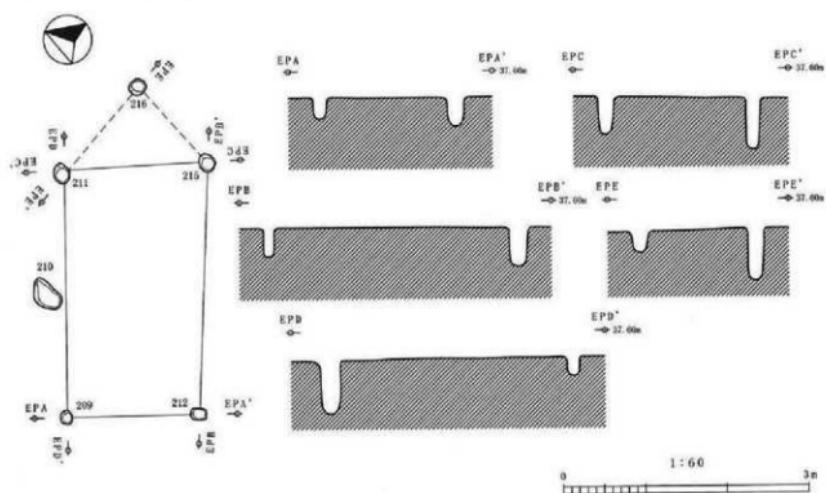
深町遺跡遺構個別図4 (建物跡4)

深町遺跡 21

<SB-1009建物跡>



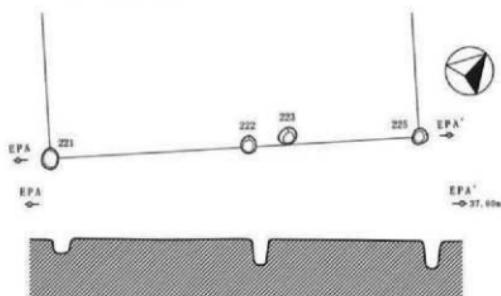
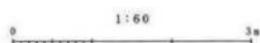
<SB-1010建物跡>



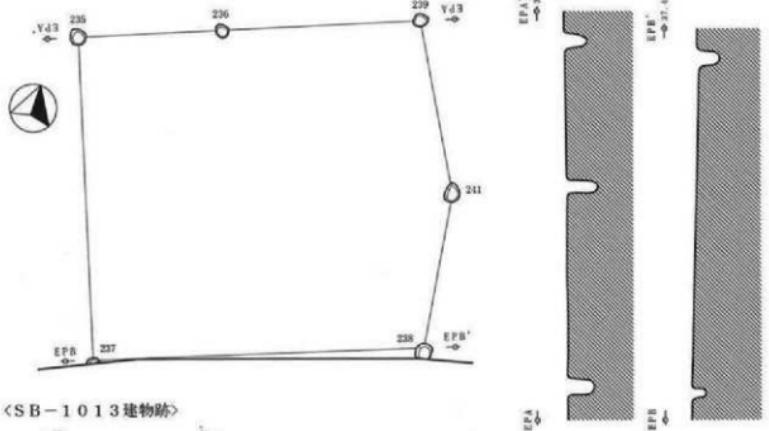
深町遺跡遺構個別図5（建物跡5）

深町遺跡 22

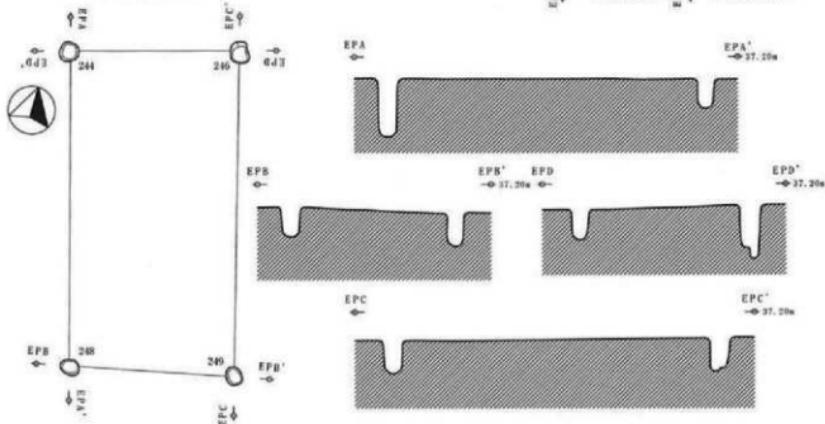
〈SB-1011建物跡〉



〈SB-1012建物跡〉



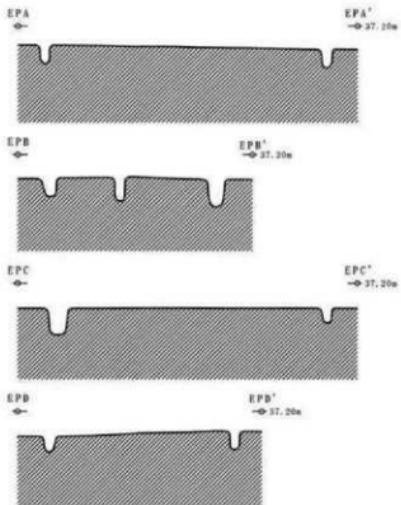
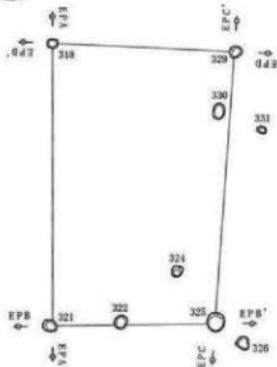
〈SB-1013建物跡〉



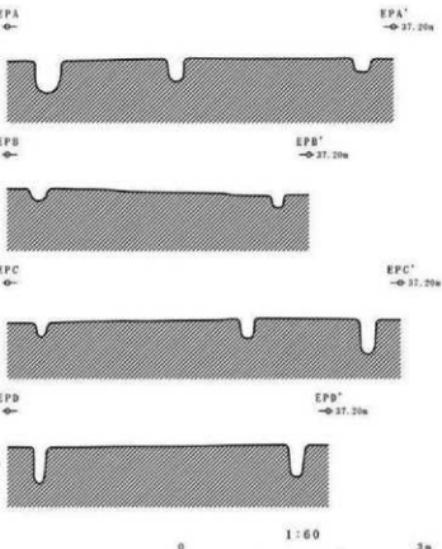
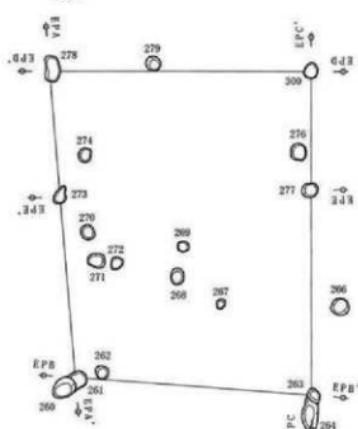
深町遺跡遺構個別図 6 (建物跡 6)

深町遺跡 23

<SB-1014建物跡>

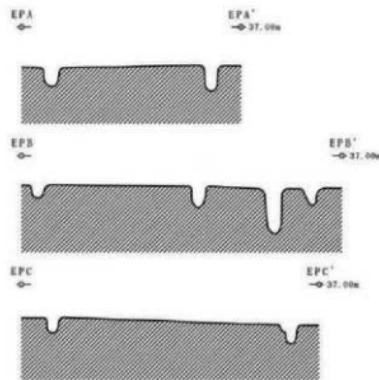
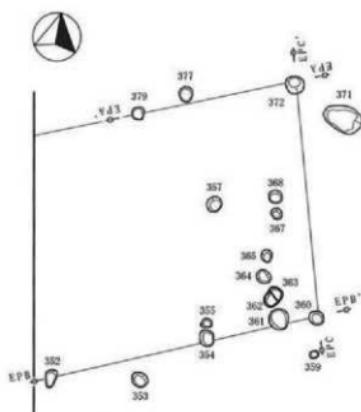


<SB-1015建物跡>

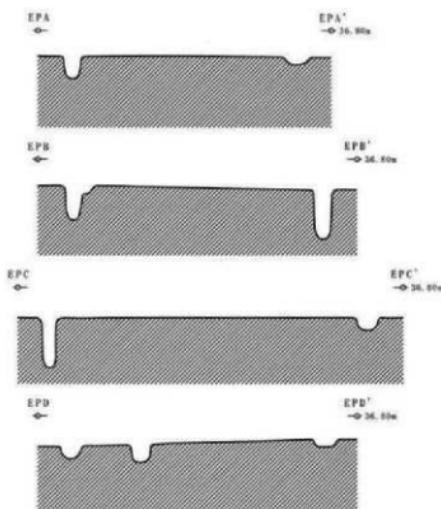
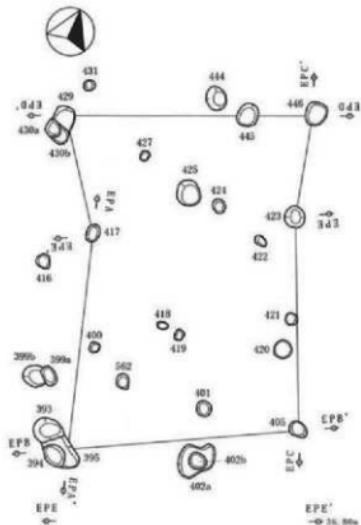


深町遺跡遺構個別図7（建物跡7）

<SB-1016建物跡>



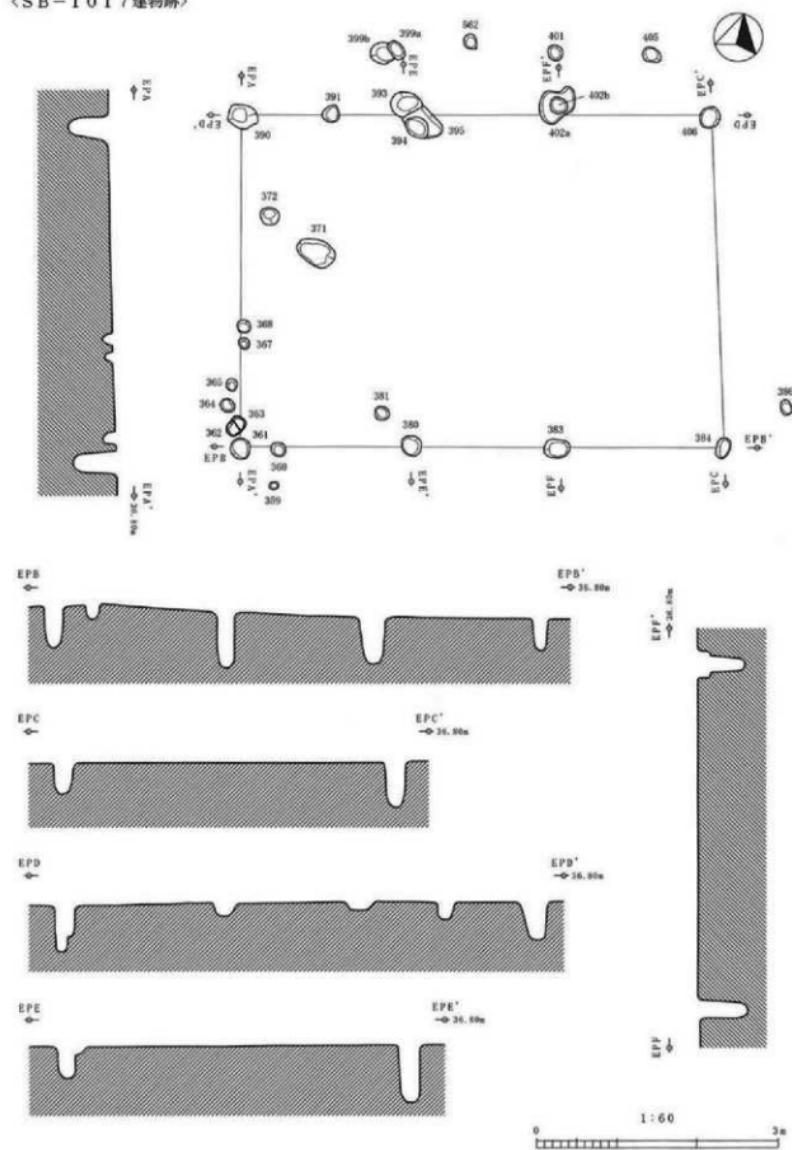
<SB-1019建物跡>



1:60
0 3m

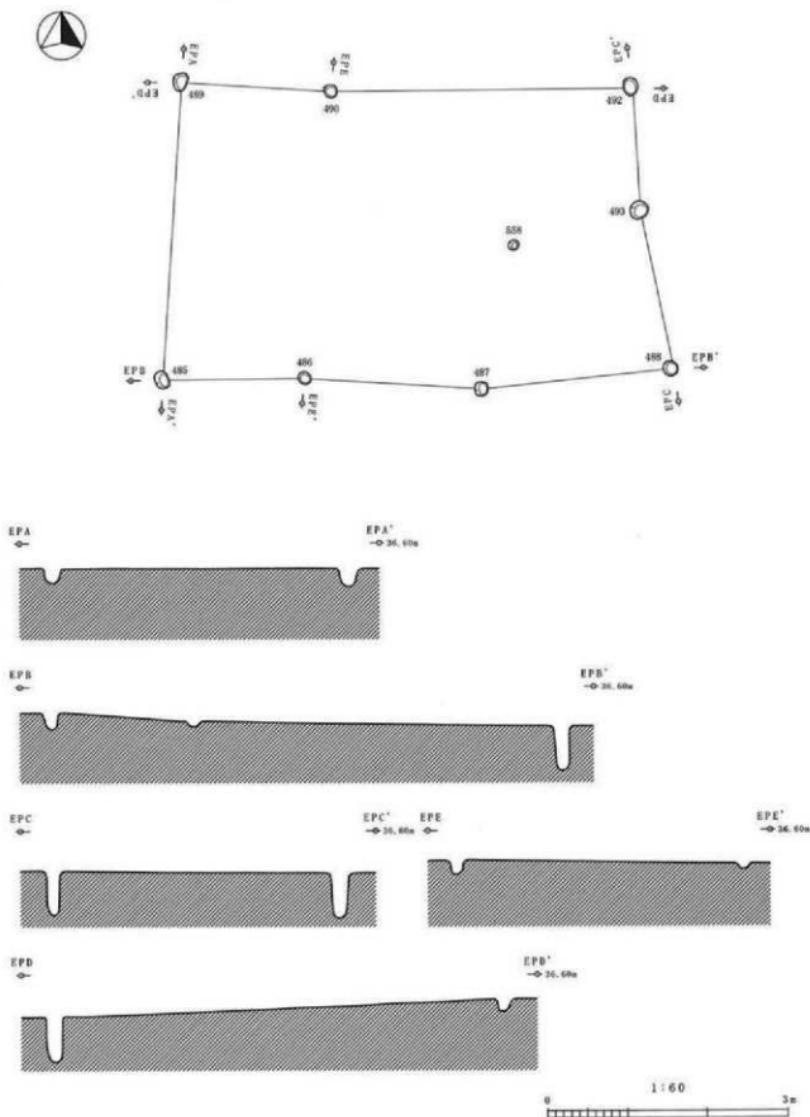
深町遺跡遺構個別図8(建物跡8)

<SB-1017建物跡>



深町遺跡遺構個別図9（建物跡9）

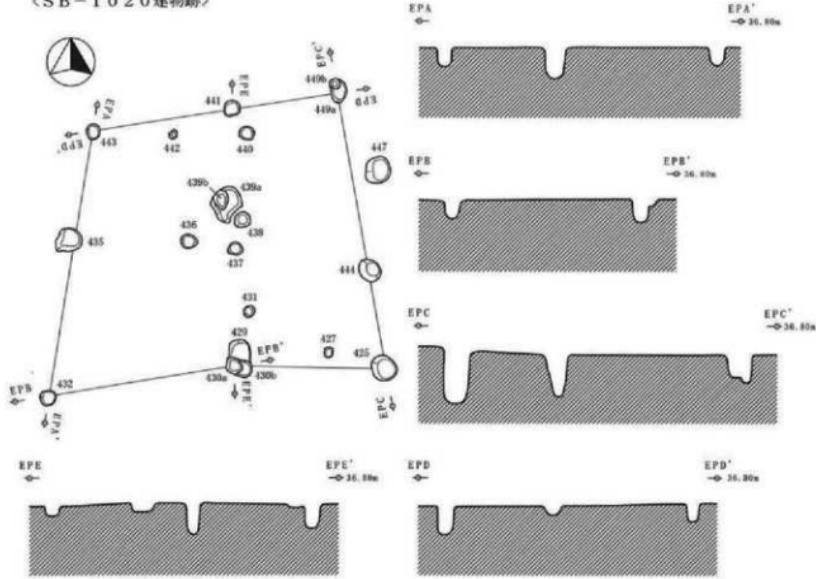
<SB-1018建物跡>



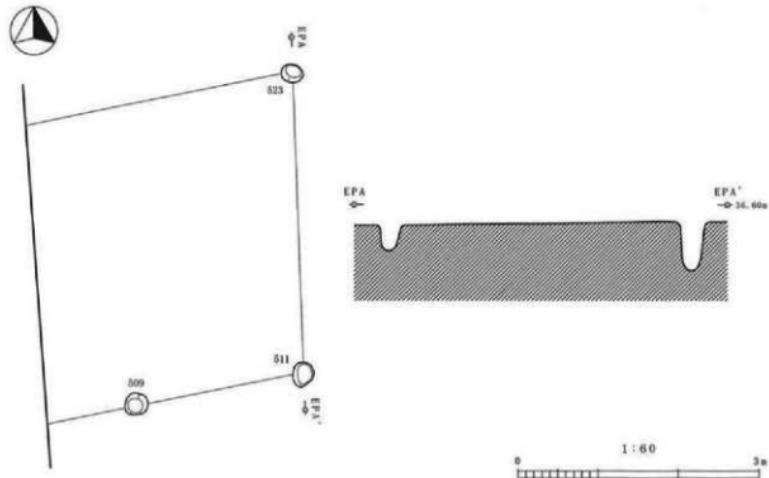
深町遺跡遺構個別図10（建物跡10）

深町遺跡 27

<SB-1020建物跡>



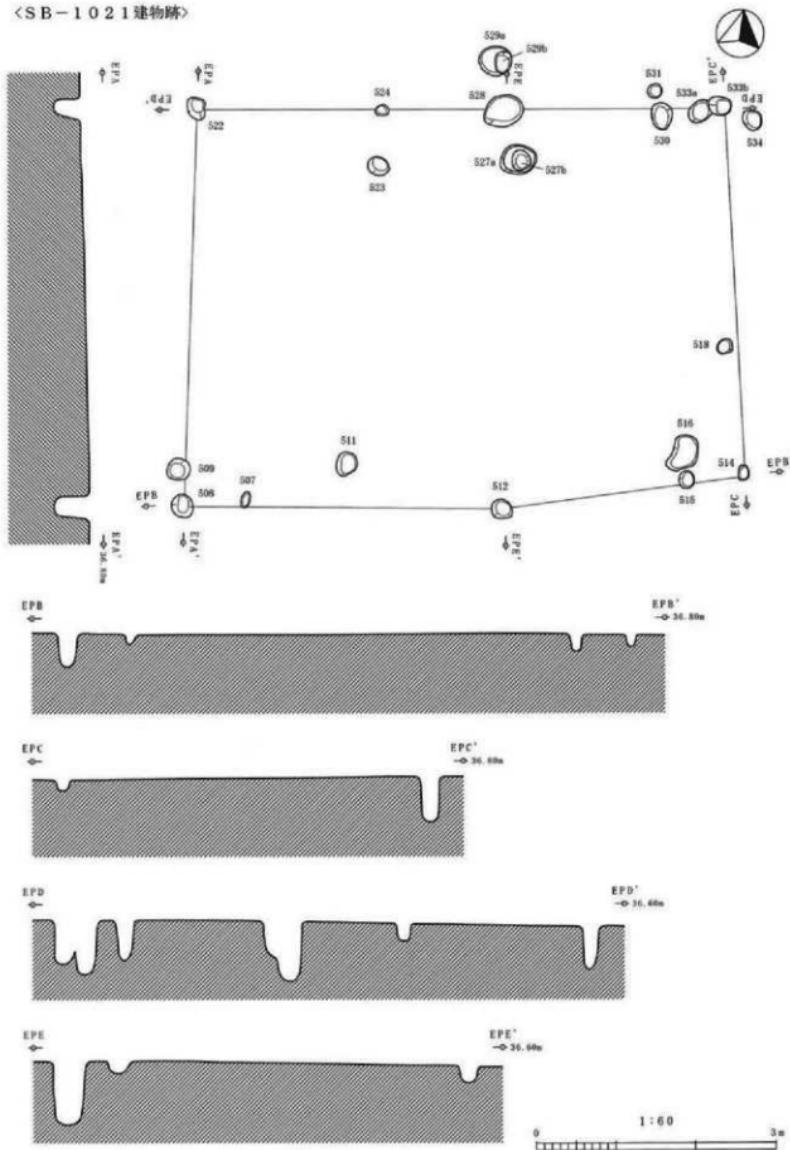
<SB-1022建物跡>



深町遺跡遺構個別図11(建物跡11)

深町遺跡 28

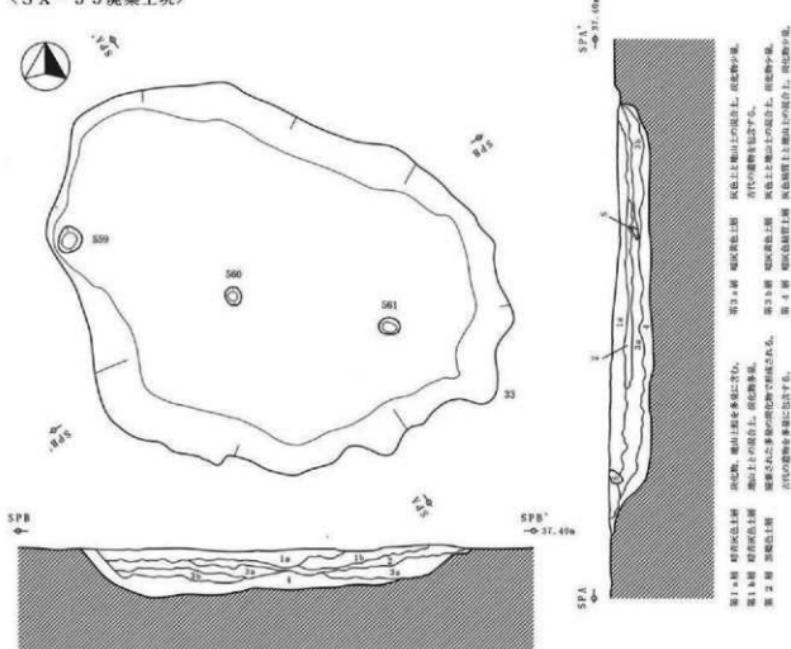
<SB-1021建物跡>



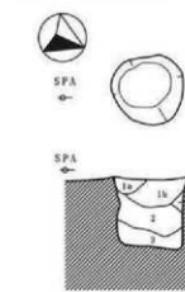
深町遺跡遺構個別図12 (建物跡12)

深町遺跡 29

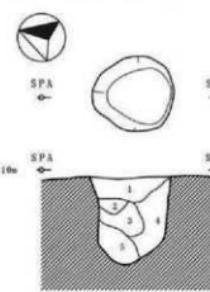
<SX-33廃棄土坑>



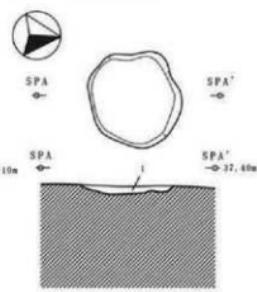
<SK-104土坑>



<SK-108土坑>



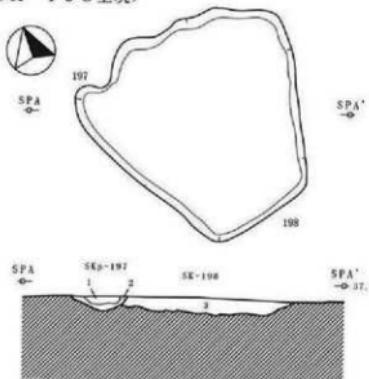
<SK-200土坑>



深町遺跡遺構個別図13（土坑1）

深町遺跡 30

<SK-198土坑>



<SK-p-197>

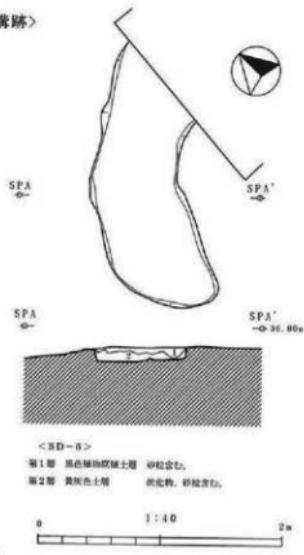
第1層 灰褐色土層 硫化物、鉛山土粒多量。

第2層 灰褐色土層 硫化物少量。

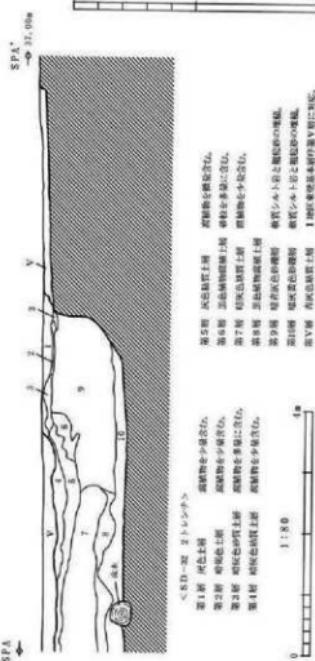
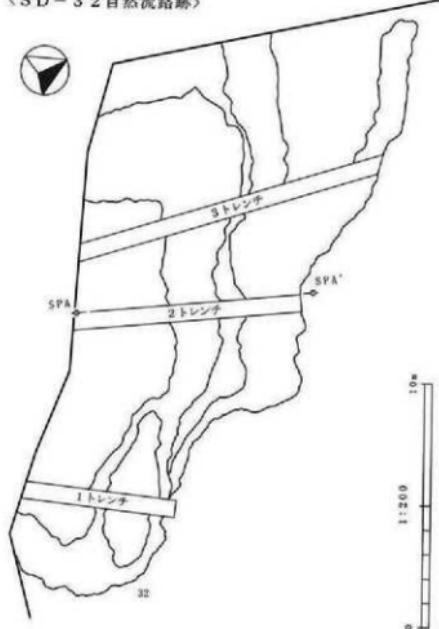
<SK-198>

第3層 灰白色土層 地山土との混合土。硫化物多量。

<SD-6溝跡>

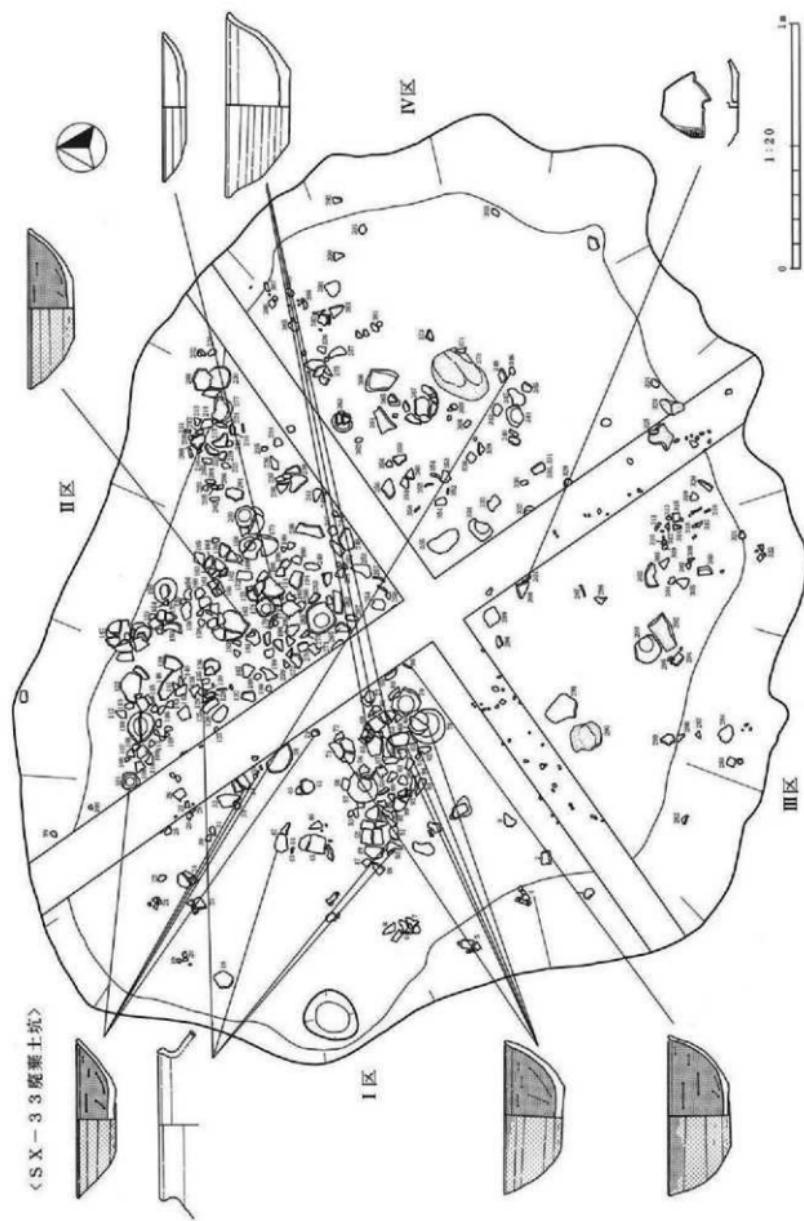


<SD-32自然流路跡>



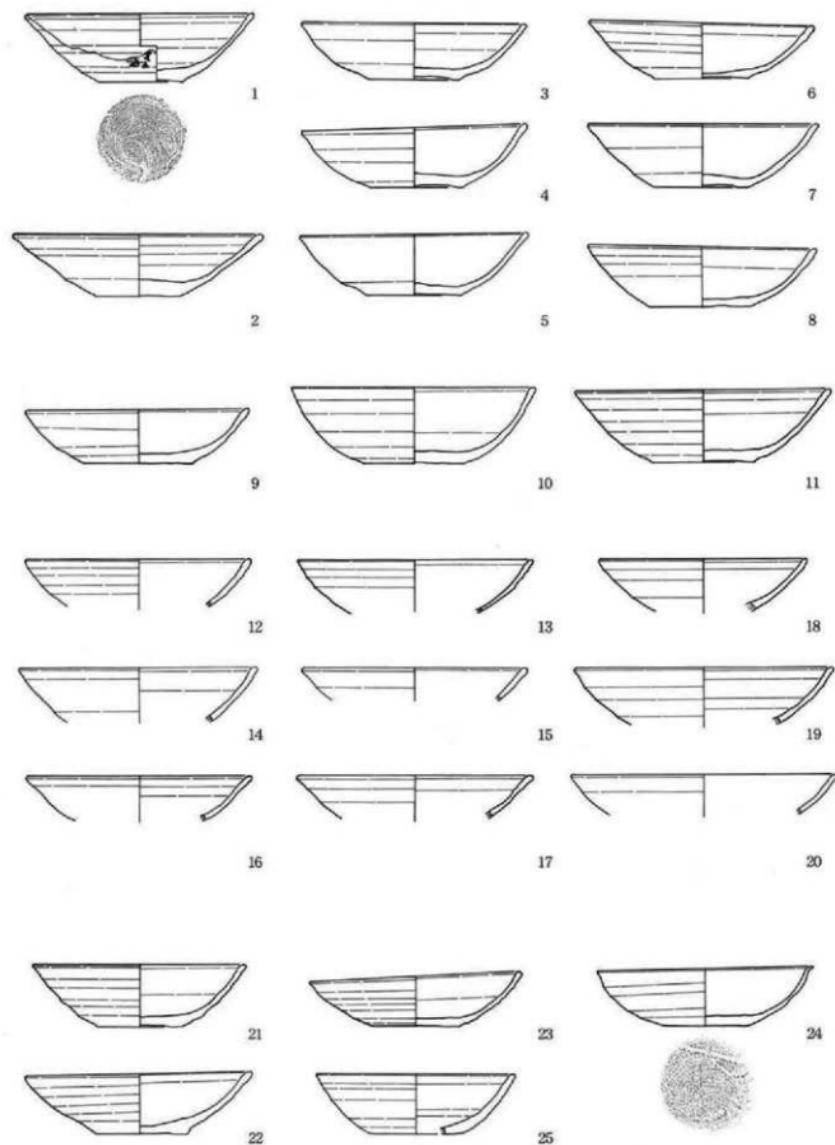
深町遺跡遺構個別図14（土坑2・溝跡・自然流路跡）

深町遺跡 31



深町遺跡遺物出土状況（廃棄土坑）

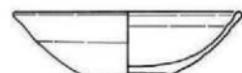
深町遺跡 32



0 (1 : 3) 15cm

深町遺跡 33

図版 35



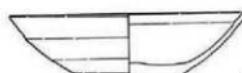
26



29



32



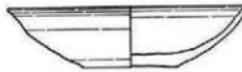
27



30



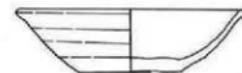
33



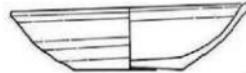
28



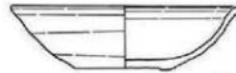
31



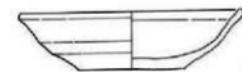
34



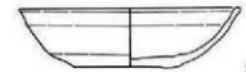
36



38



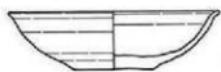
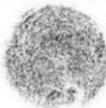
35



37



39



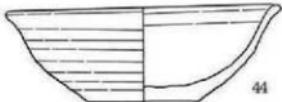
40



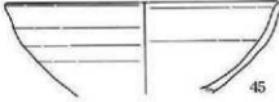
41



42



44



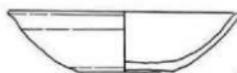
45



0 (1 : 3) 15cm



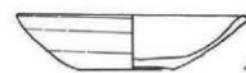
46



49



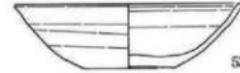
52



47



50



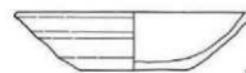
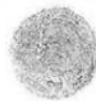
53



48



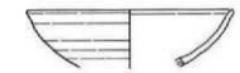
51



54



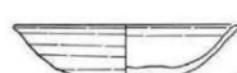
58



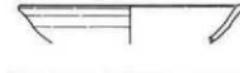
61



55



59



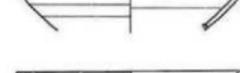
62



56



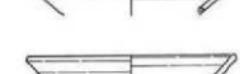
60



63



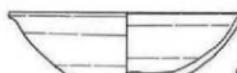
57



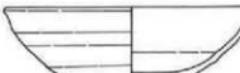
64



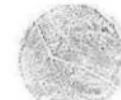
66



67

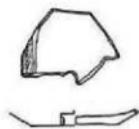


68

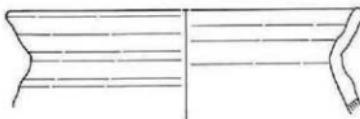


0 (1 : 3) 15cm

深町遺跡 35



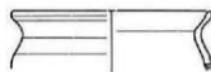
69



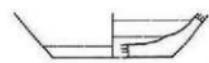
71



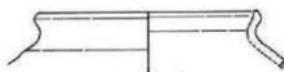
70



72



73



85



74



75



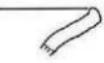
76



77



78



79



80



81



82



83



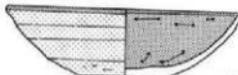
84

0 (1 : 3) 15cm

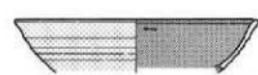
深町遺跡 36



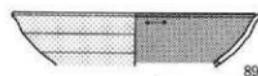
86



87



88



89



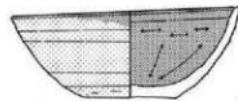
91



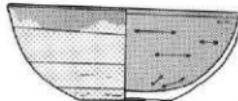
92



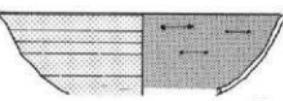
90



93

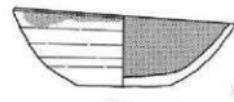


94

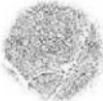


95

■ 黒色處理
□ 赤彩



96



97



98

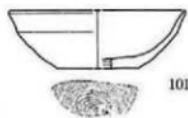


99

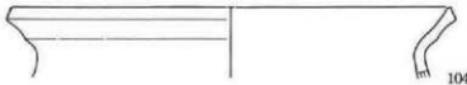


100

0 (1 : 3) 15cm



101



104



102



105



103



106



108



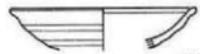
107



109



110



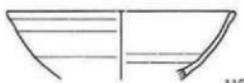
111



112



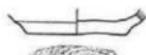
113



115



116

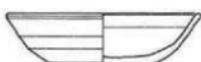


117



114

0 (1 : 3) 15cm



118



120



121



119



122



123



128



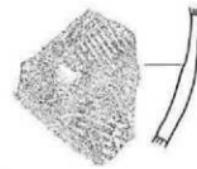
124



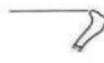
129



130



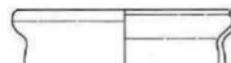
125



131



132



136



133



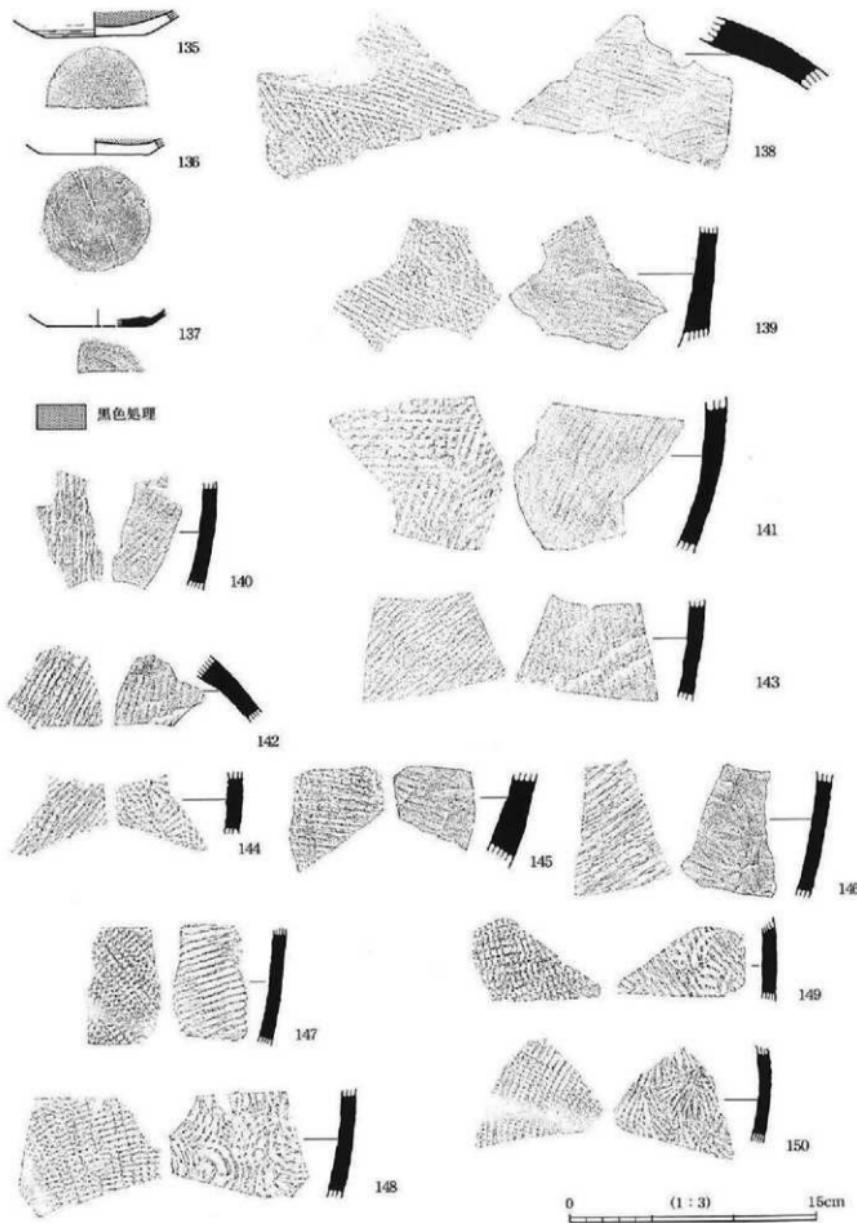
134



127

0 (1 : 3) 15cm

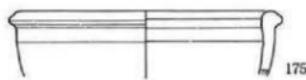
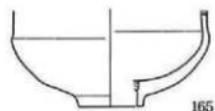
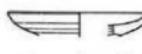
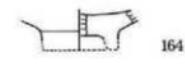
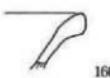
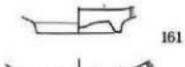
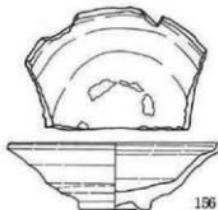
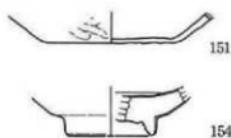
深町遺跡 39



深町遺跡出土遺物 8 (造構外 2)

図版 42

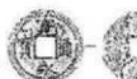
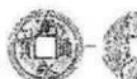
深町遺跡 40



タール付着



0 (1 : 3) 15cm

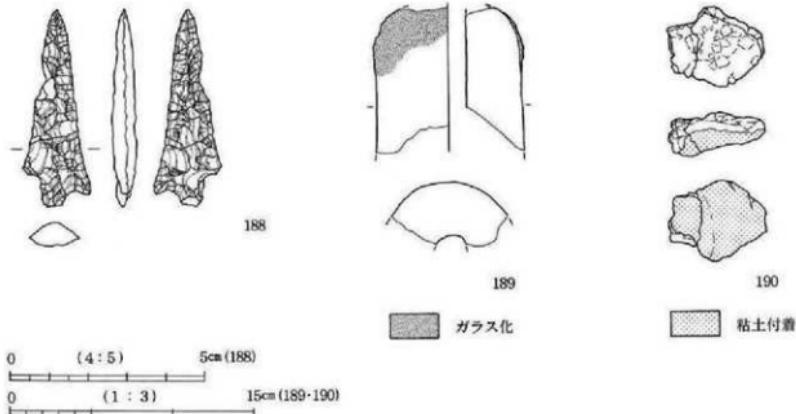
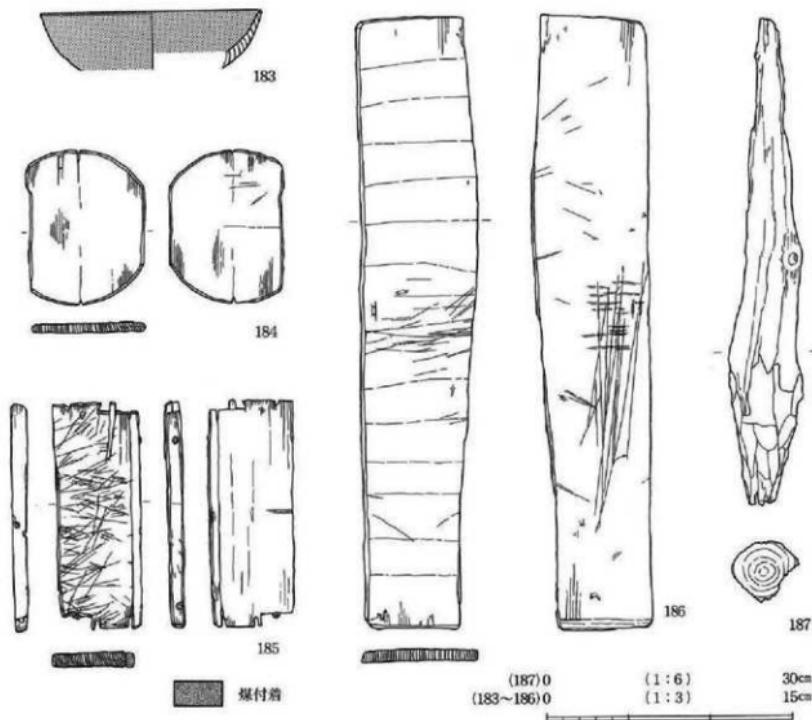


0 (2 : 3) 7.5cm



深町遺跡 41

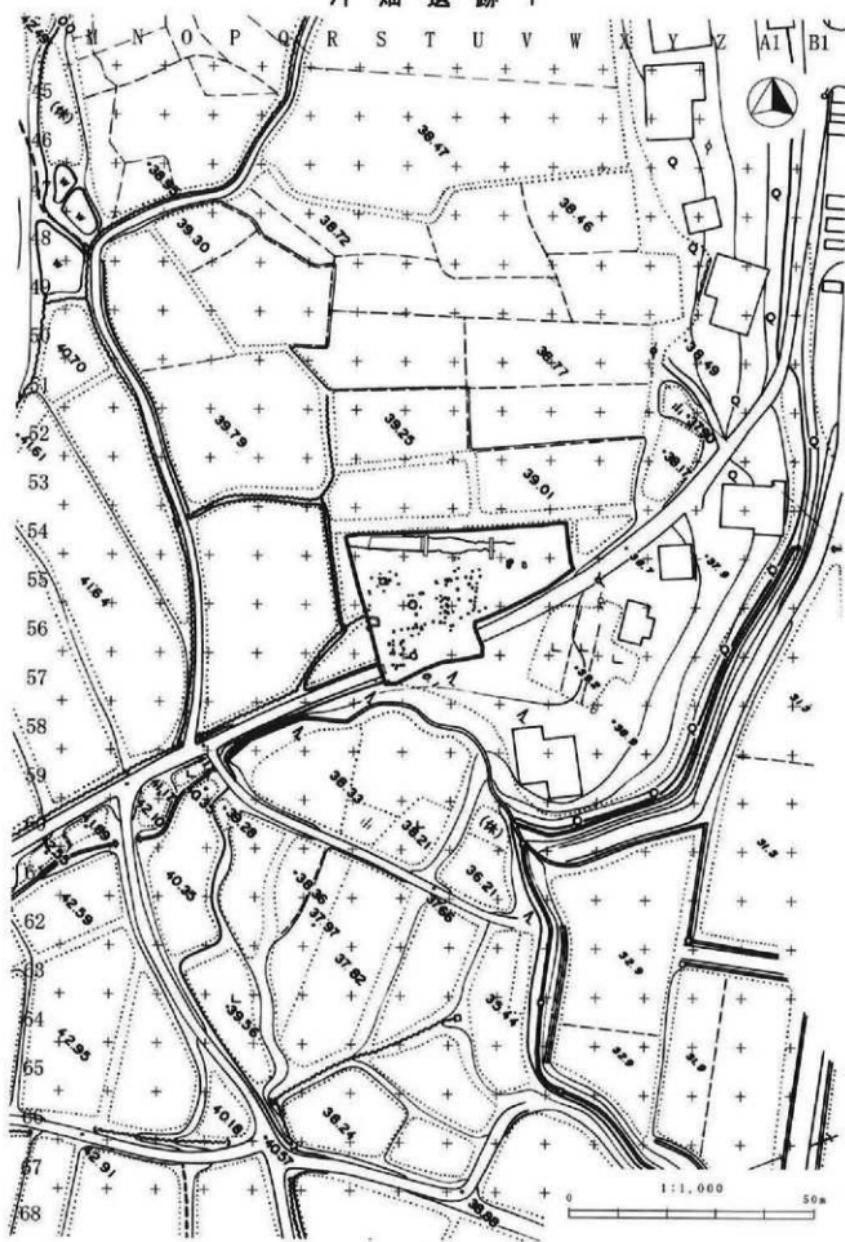
図版 43



深町遺跡出土遺物 10 (木製品・石器・鍛冶関連遺物)

図版 44

片 番 遺 跡 1



片畠遺跡と周辺の地形

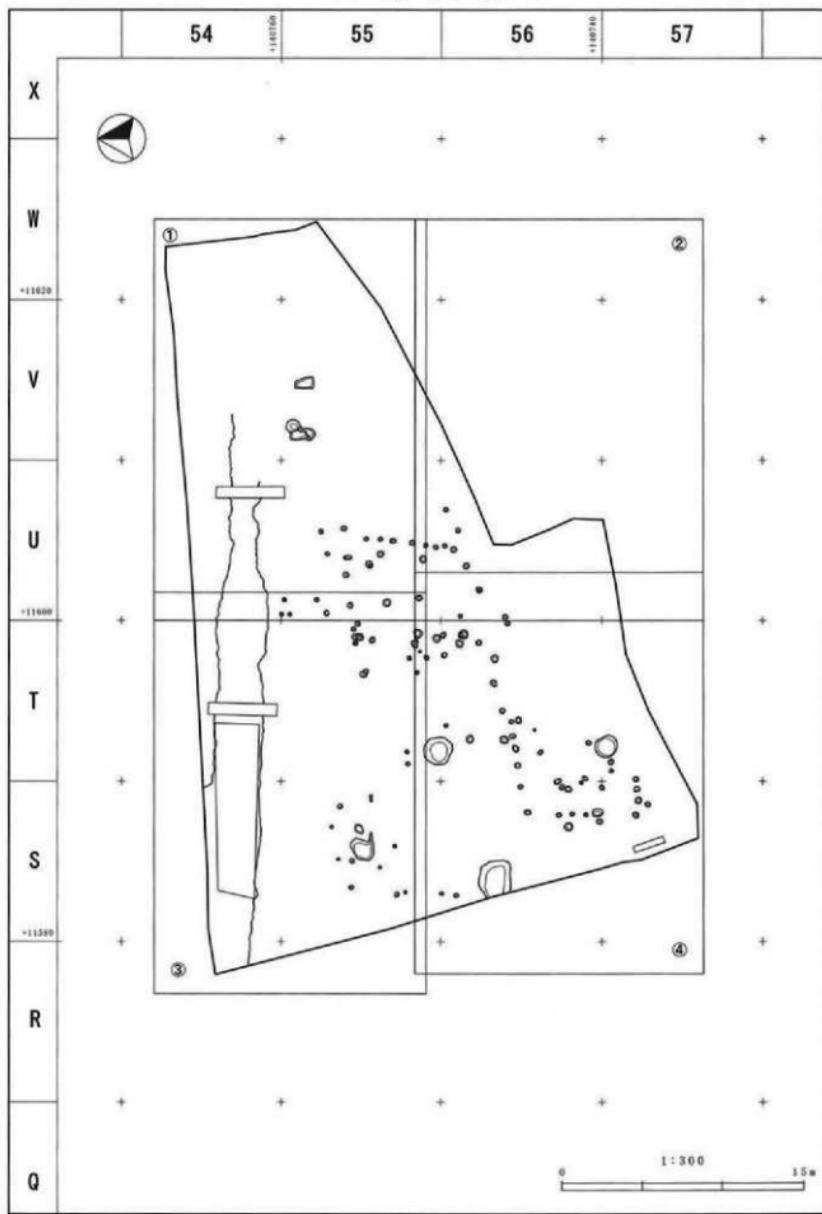
片 畑 遺 跡 2

図版45



片畠遺跡全体図

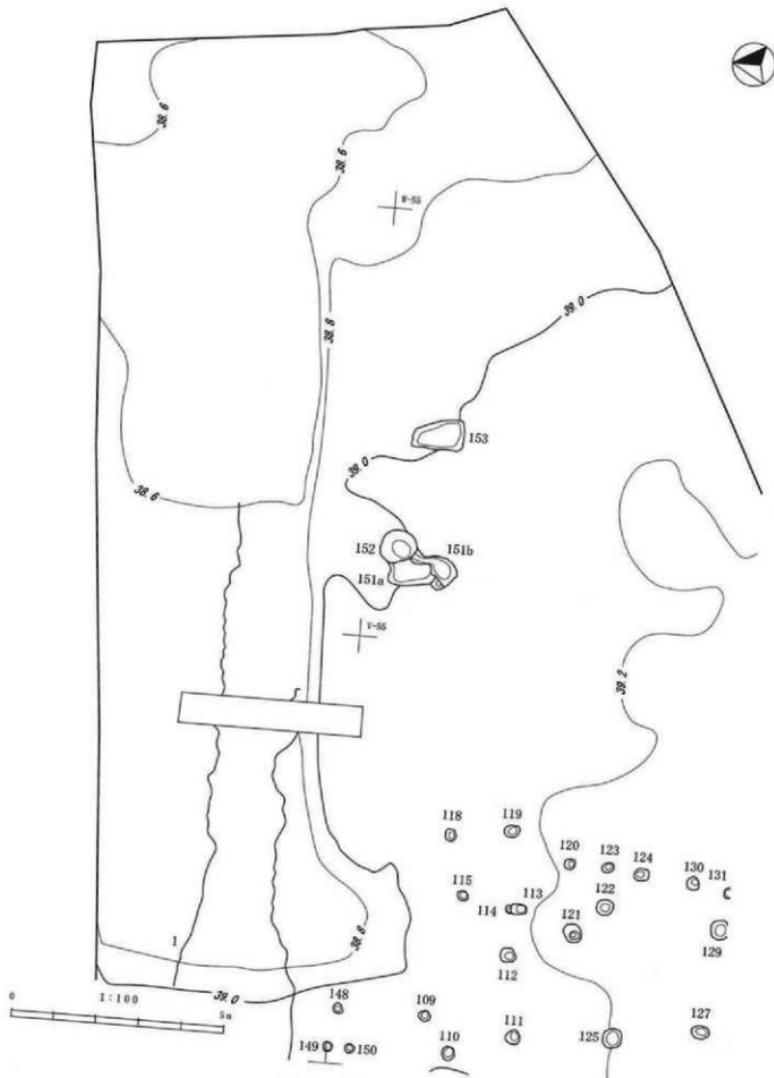
片 畑 遺 跡 3



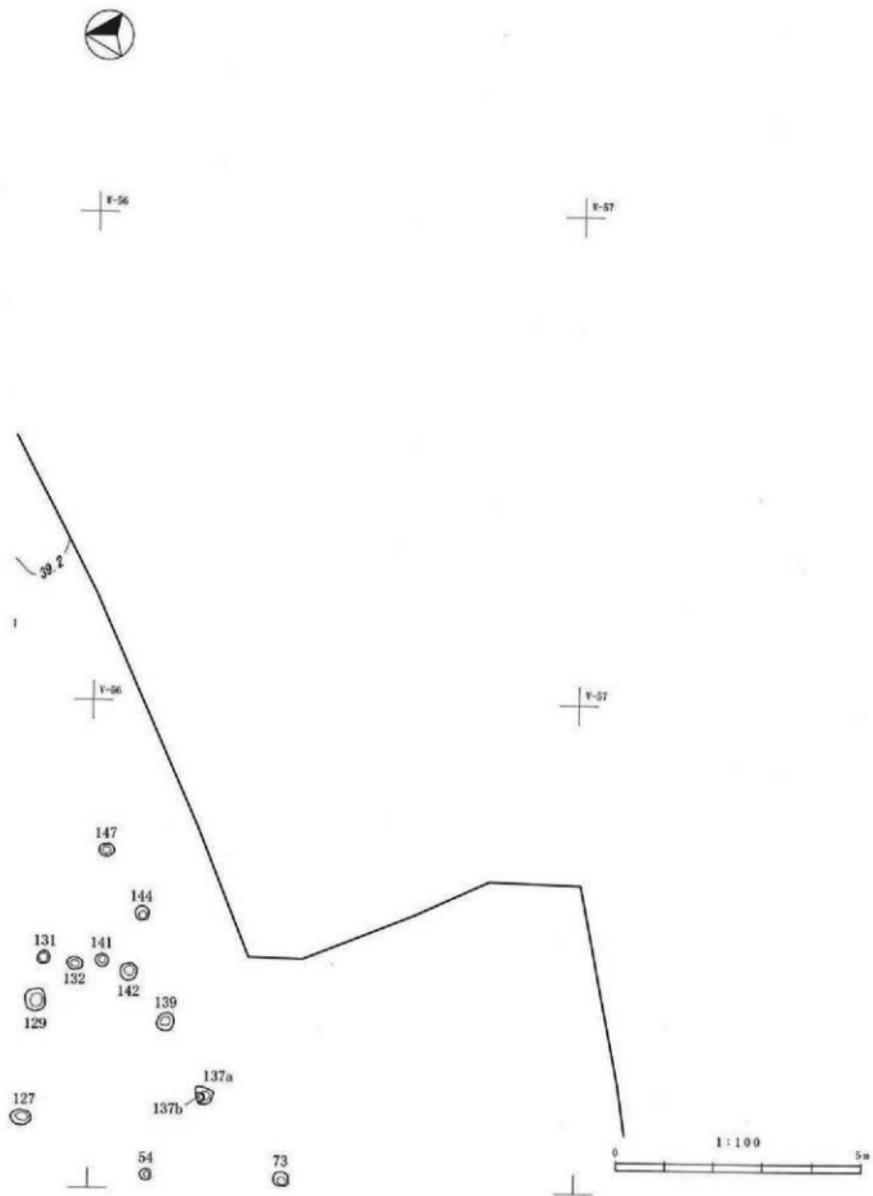
片畠遺跡遺構全体図割付図

片 烟 遺 跡 4

図版47



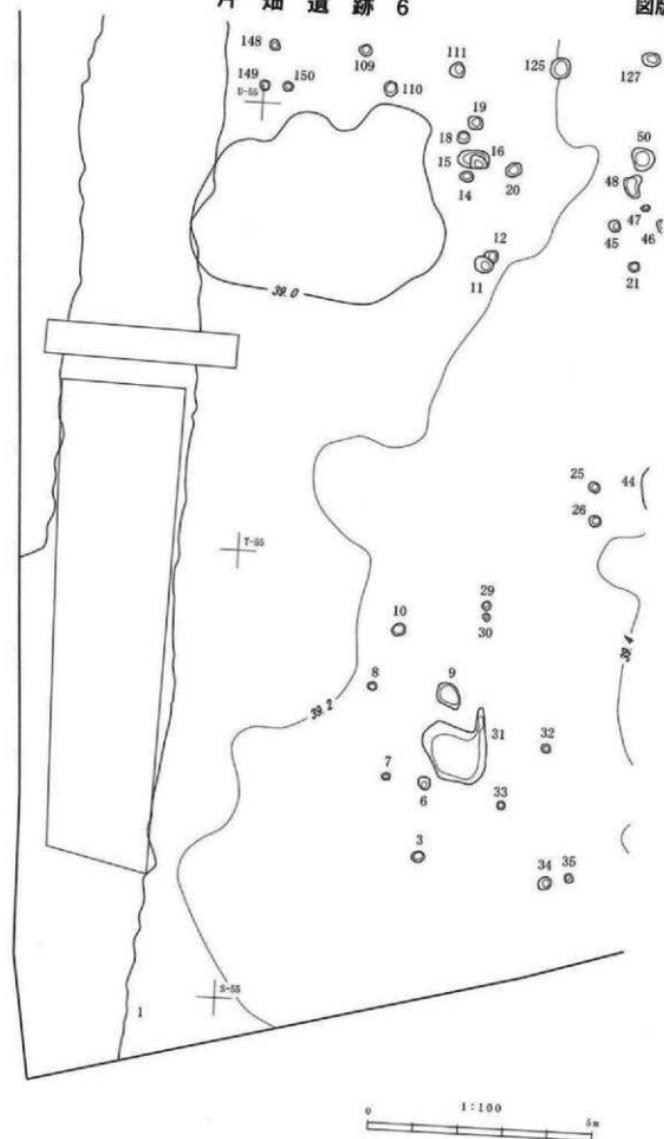
片烟遺跡遺構全体図 1



片烟遺跡遺構全体図 2

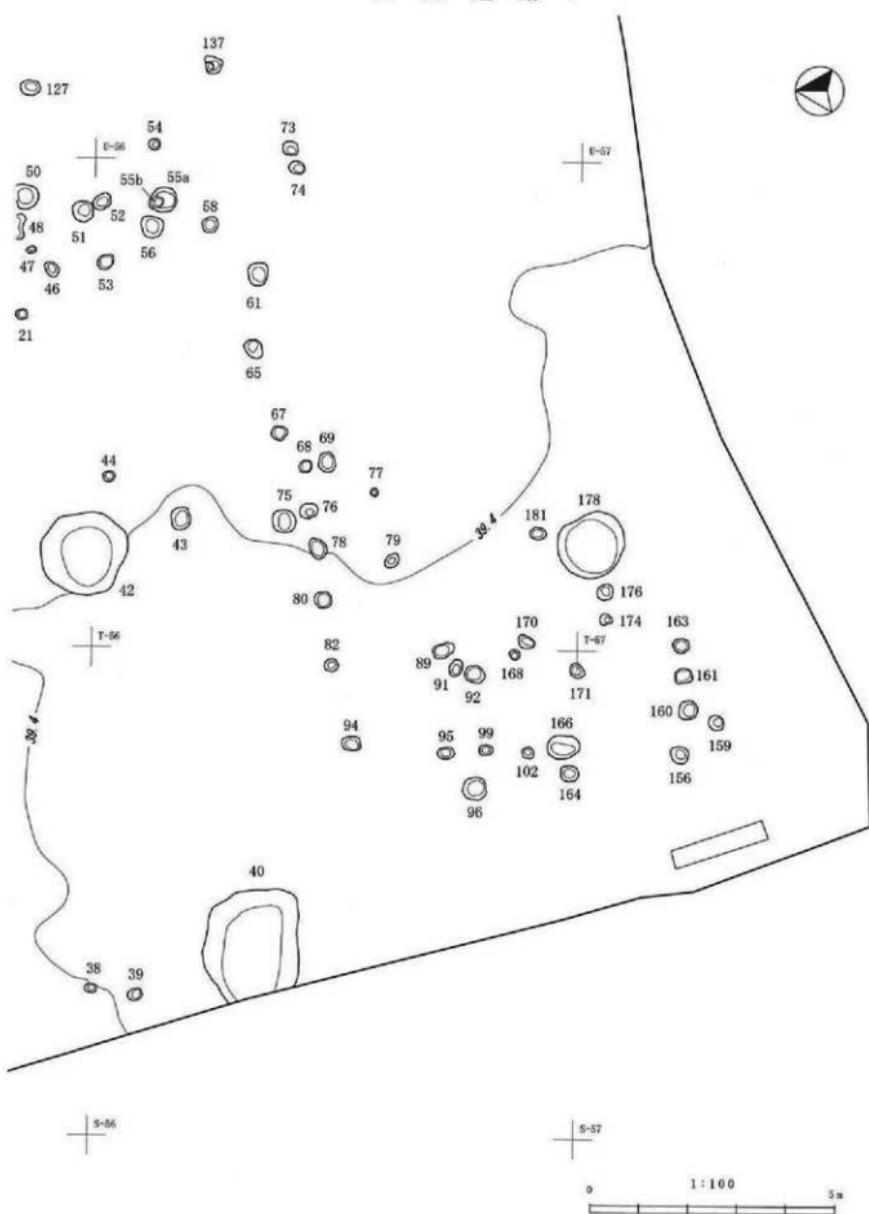
片烟遺跡 6

図版49



片煙遺跡遺構全体図 3

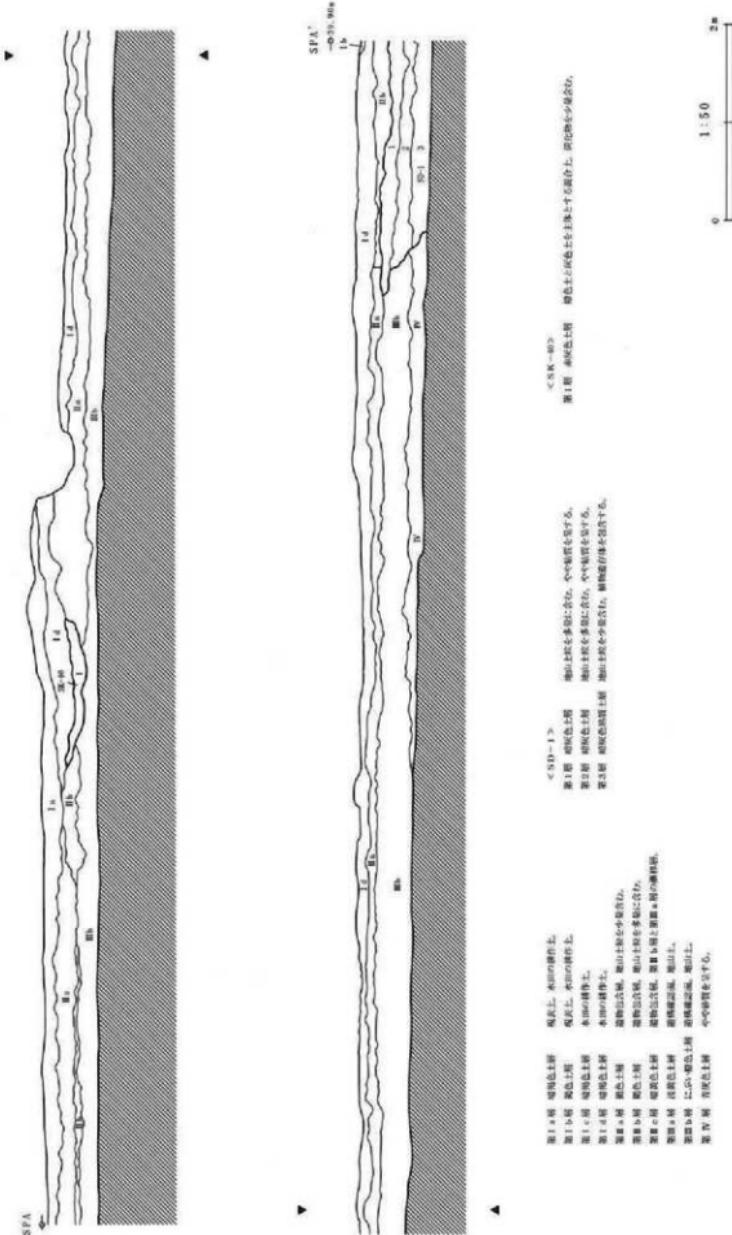
片 烟 遺 跡 7



片烟遺跡遺構全体図 4

片 畵 遺 跡 8

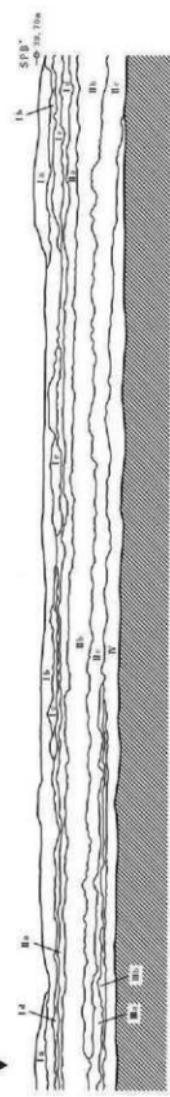
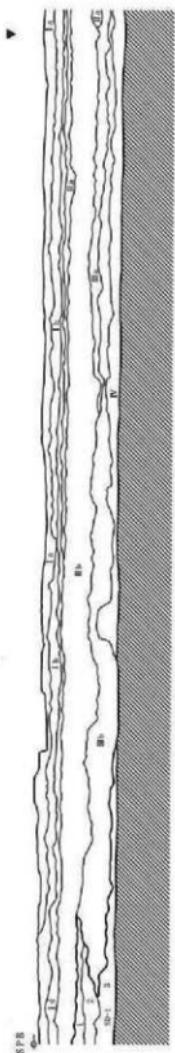
西壁



片烟遺跡基本層序 1 (西壁)

片 畵 遺 跡 9

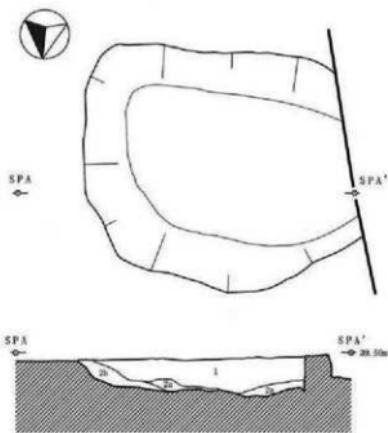
北號



片烟遺跡基本層序 2 (北壁)

片畠遺跡 10

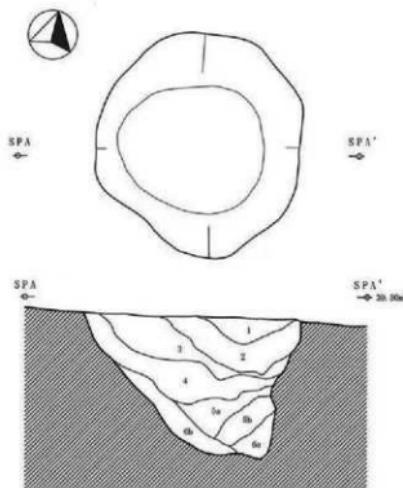
<SK-40土坑>



<SK-40>

- 第1層 青灰色土層 灰色土と灰色土を主部とする泥合土。炭化物を少量含む。
第2a層 青灰色粘質土 炭化物を少量。堆积土粒を微細化する。
第2b層 灰灰色粘質土 炭化物を少量。堆积土粒を多量に含む。

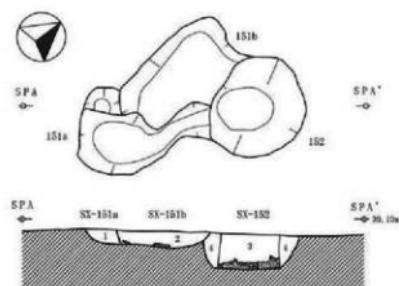
<SE-42井戸跡>



<SE-42>

- 第1層 青灰色土層 炭化物を多量。堆积土粒を多量に含む。
第2層 青灰色土層 灰色土を主部とする泥合土。炭化物を多量に含む。
第3層 青灰色土層 地山土との混合土。炭化物を多量に含む。
第4層 青灰色土層 灰色土との混合土。炭化物を多量。堆积物を多量に含む。
第5a層 青灰色土層 炭化物を少量。堆积物を多量に含む。
第5b層 青灰色土層 炭化物を少量。堆积物を多量に含む。
第6a層 青灰色土層 炭化物を少量含む。砂礫が少度混入する。
第6b層 青灰色土層 炭化物を多量に含む。砂礫が少量混入する。

<SX-151a・151b・152墓壙>



<SX-151a>

- 第1層 青灰色土層 地山土との混合土。炭化物を微量に含む。

<SX-151b>

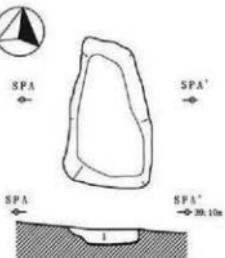
- 第2層 灰灰色土層 灰色粘質土を主部とする混合土。粘性や中等度。
底部の木製板を包含する。

<SX-152>

- 第3層 灰灰色土層 灰色粘質土を主部とする混合土。炭化物を微量に含む。
底部の木製板を包含する。

- 第4層 青灰色土層 地山土との混合土。木製板を埋設する砂土。

<SX-153墓壙>



<SX-153>

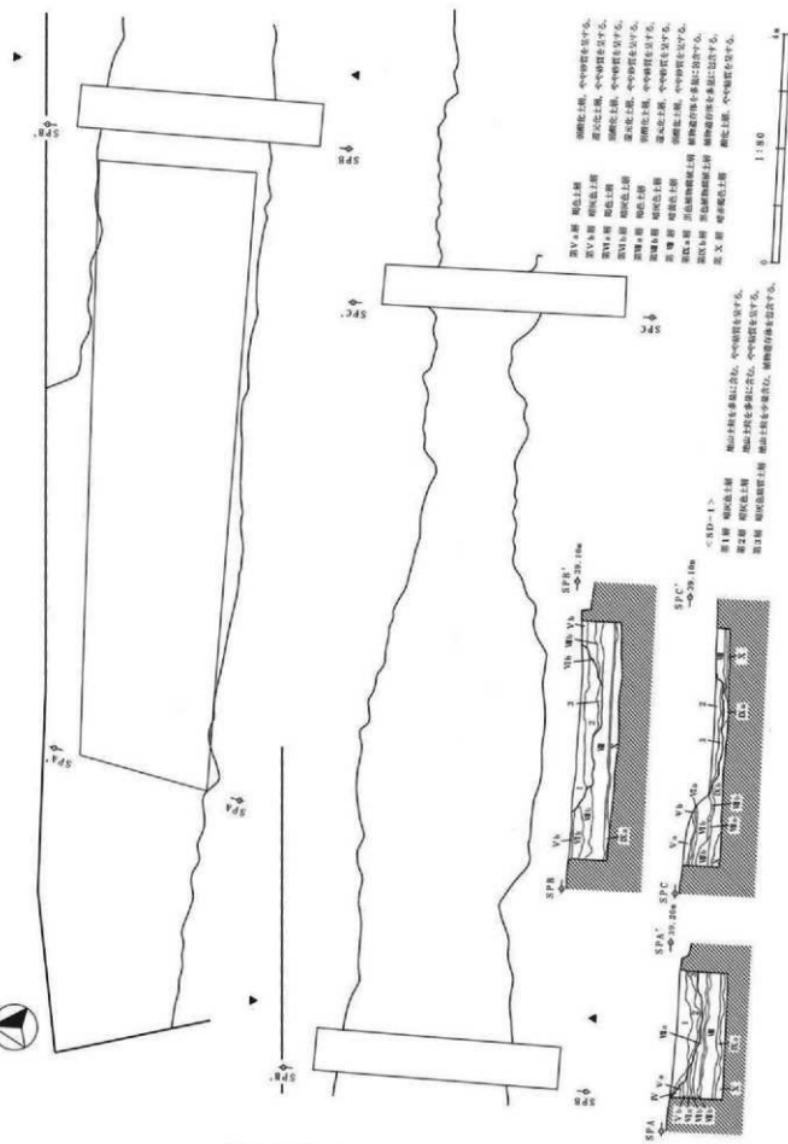
- 第1層 灰灰色土層 地山土との混合土。炭化物を微量に含む。
底部の木製板を包含する。

1:40

2m

片畠遺跡遺構個別図1（土坑・井戸跡・墓壙）

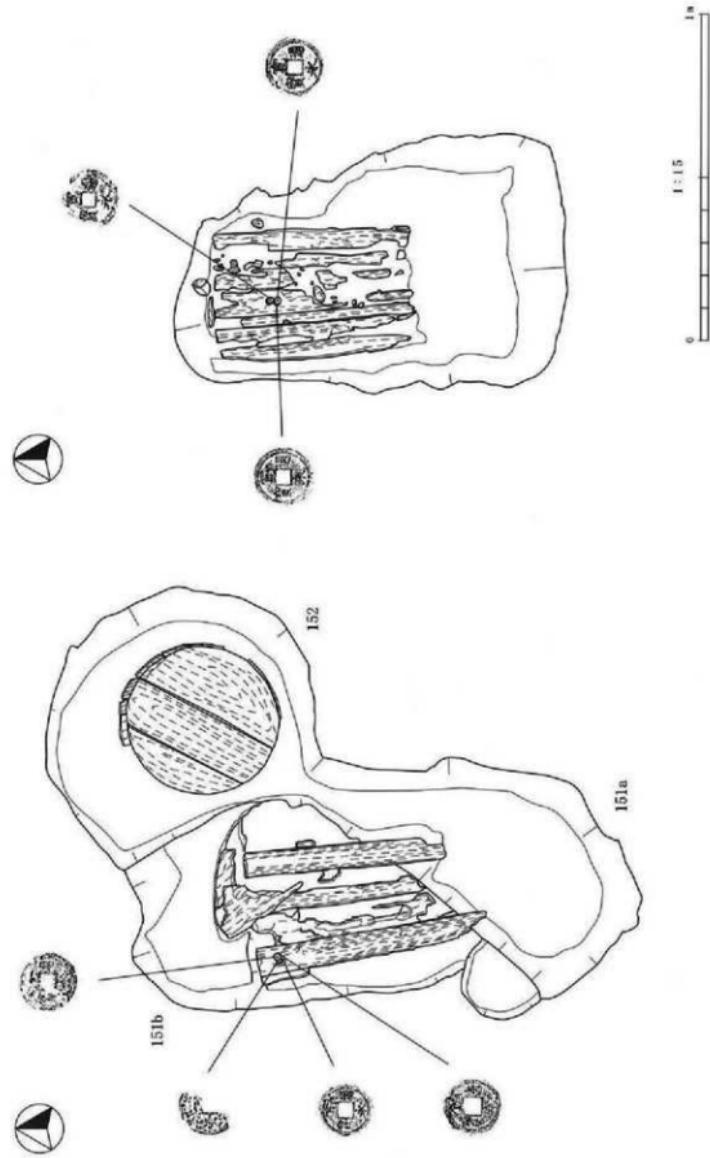
片 番 遺 跡 11



片烟遺跡遺構個別圖 2 (自然流路跡)

片 烟 遺 跡 12

< SX-153 墓跡 >



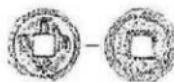
片烟遺跡遺物出土状況（墓跡）



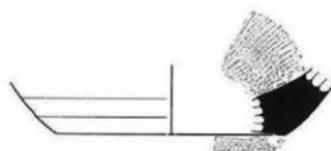
1



2



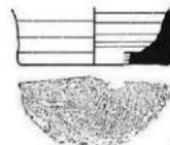
5



3

0
0
(1 : 3)
(2 : 3)

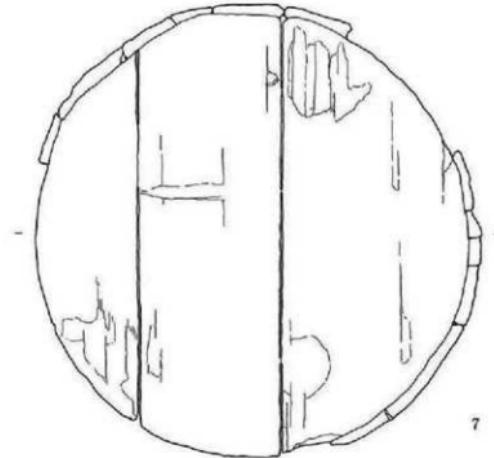
15cm(1~4)
7.5cm(5)



4



6



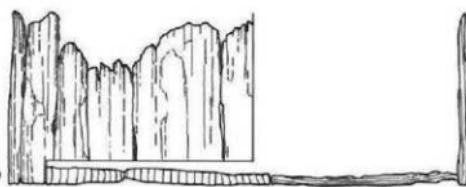
7

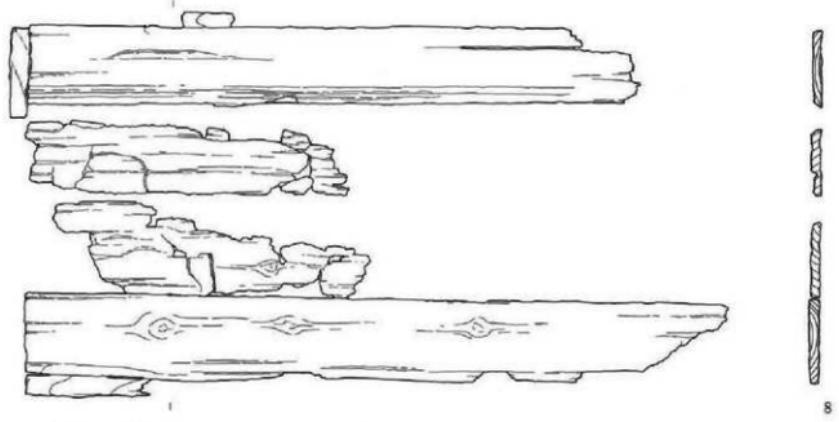


0
0
(1 : 6)
(1 : 5)

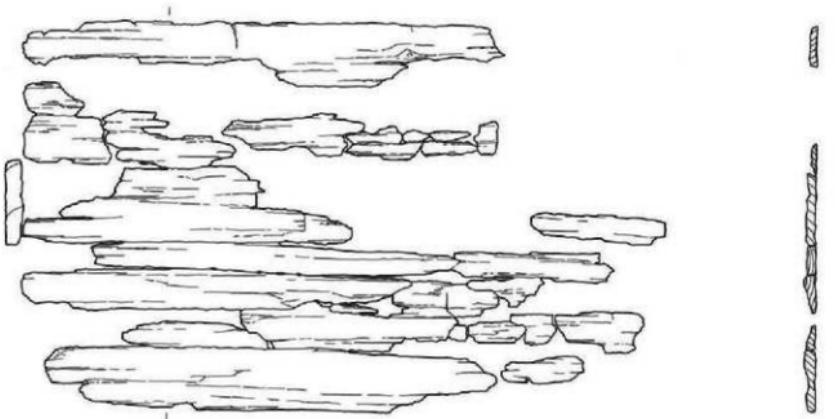
30cm(6)

30cm(7)

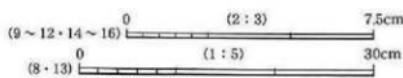


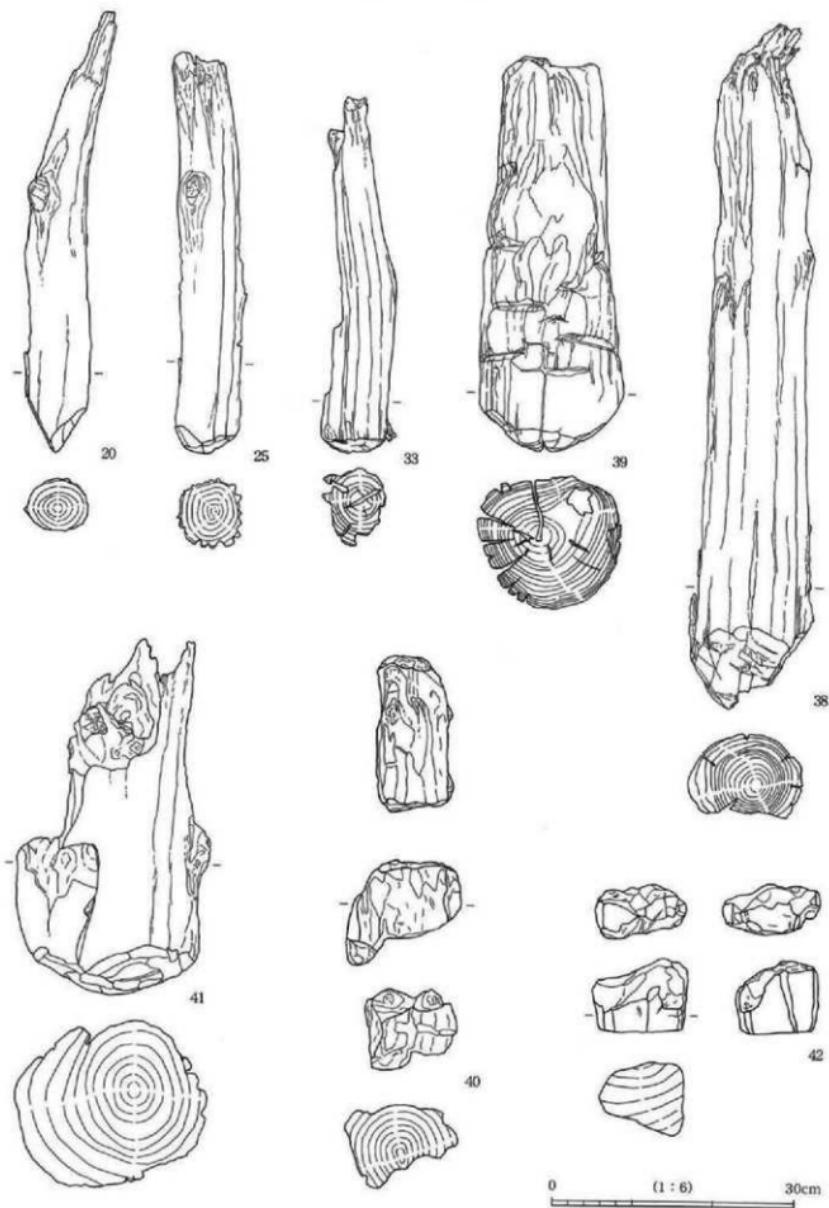


9 10 11 12

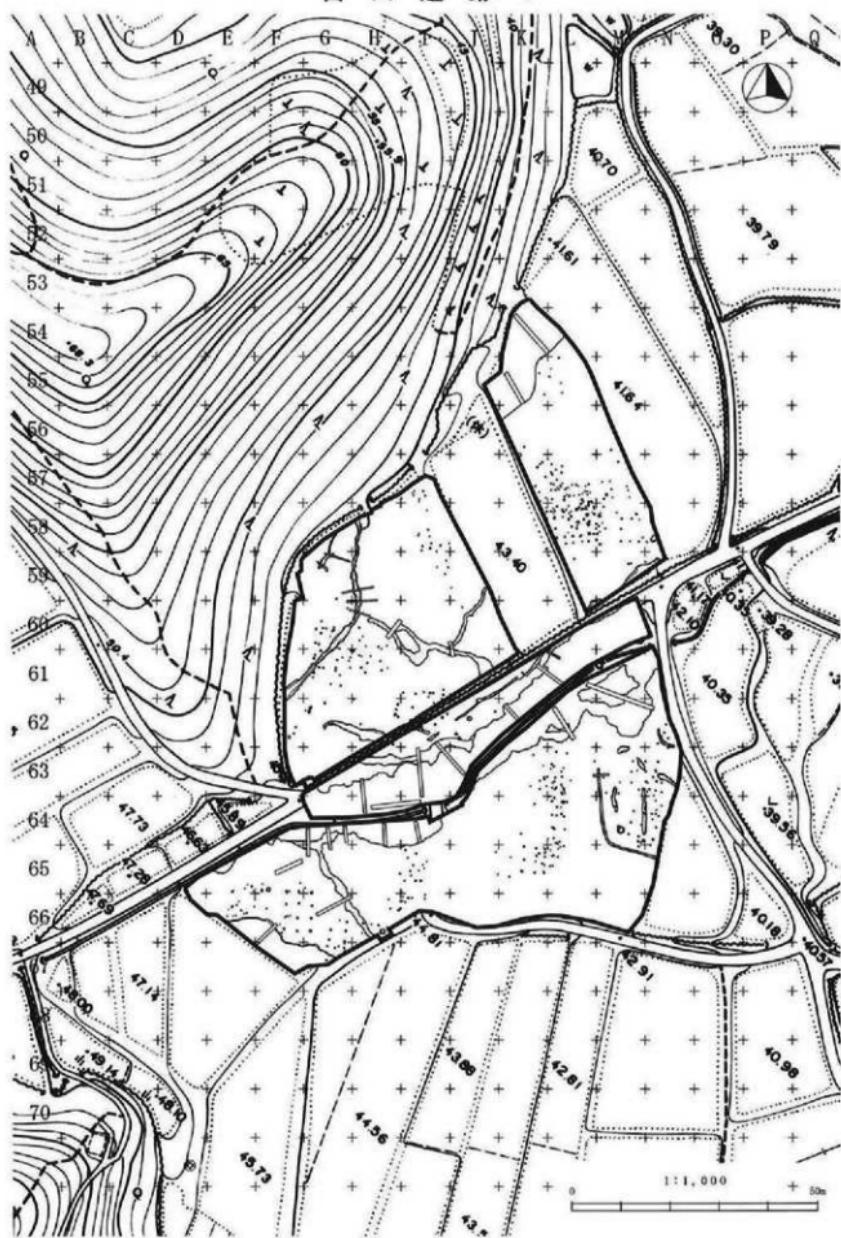


13 14 15 16



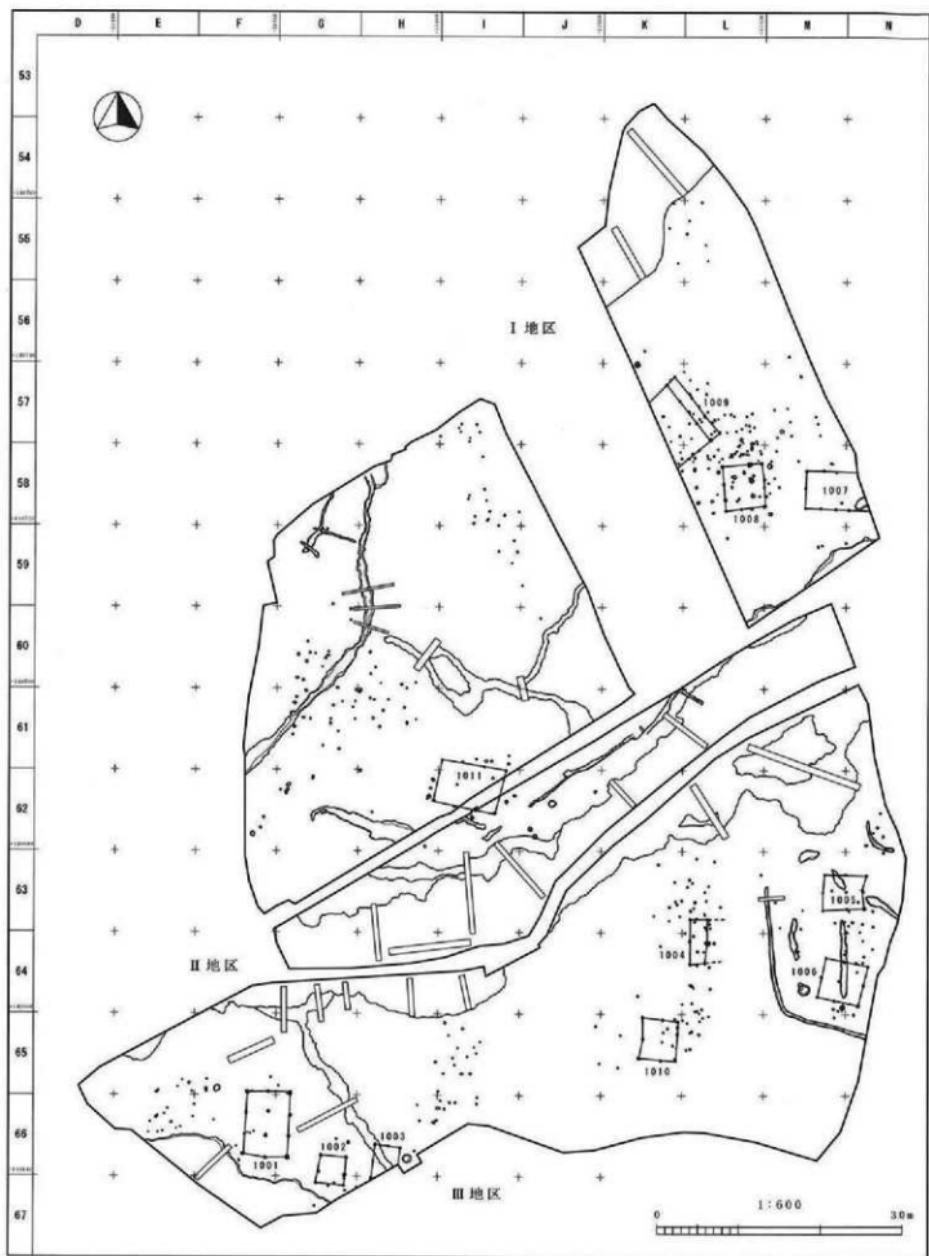


宮田遺跡 1

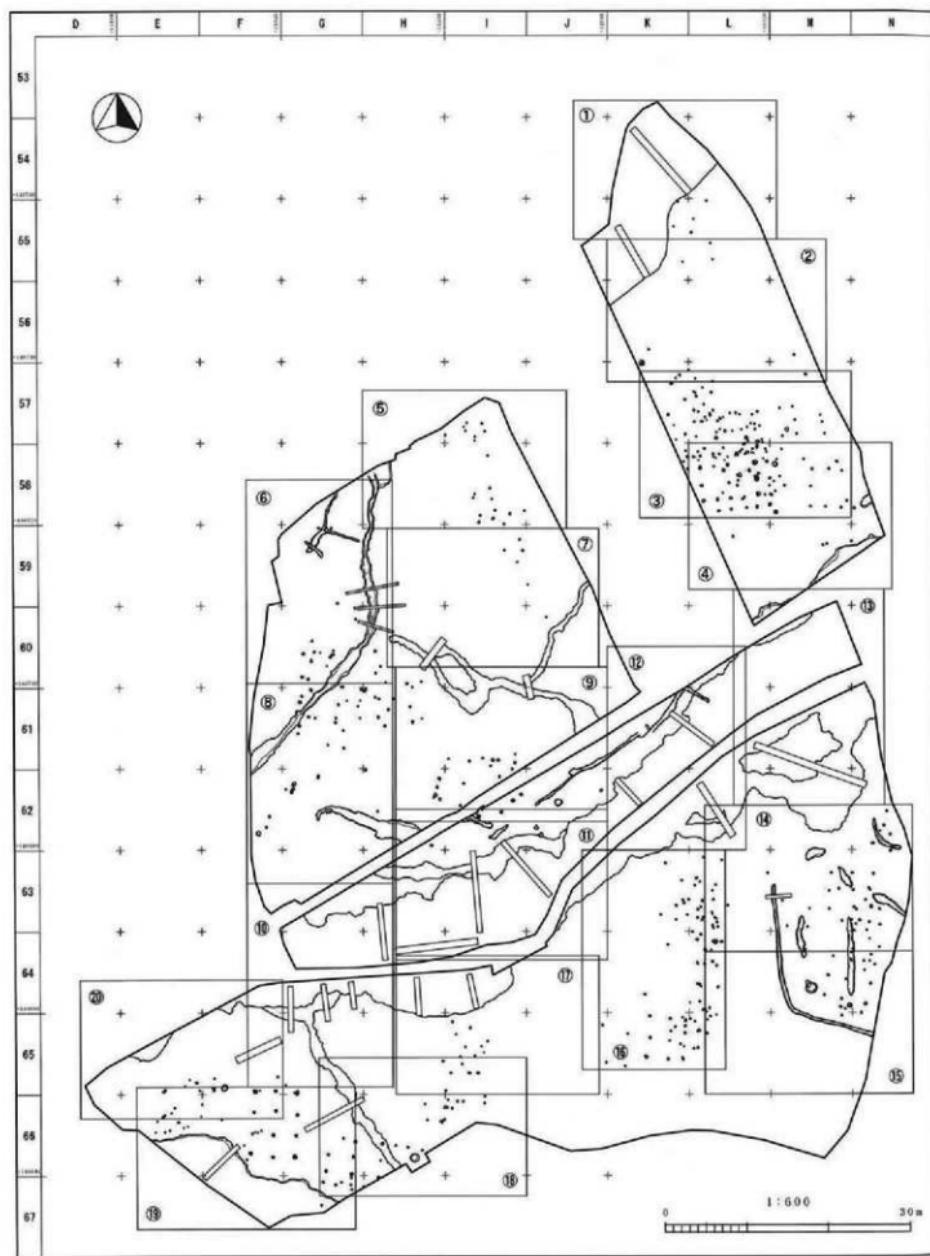


宮田遺跡と周辺の地形

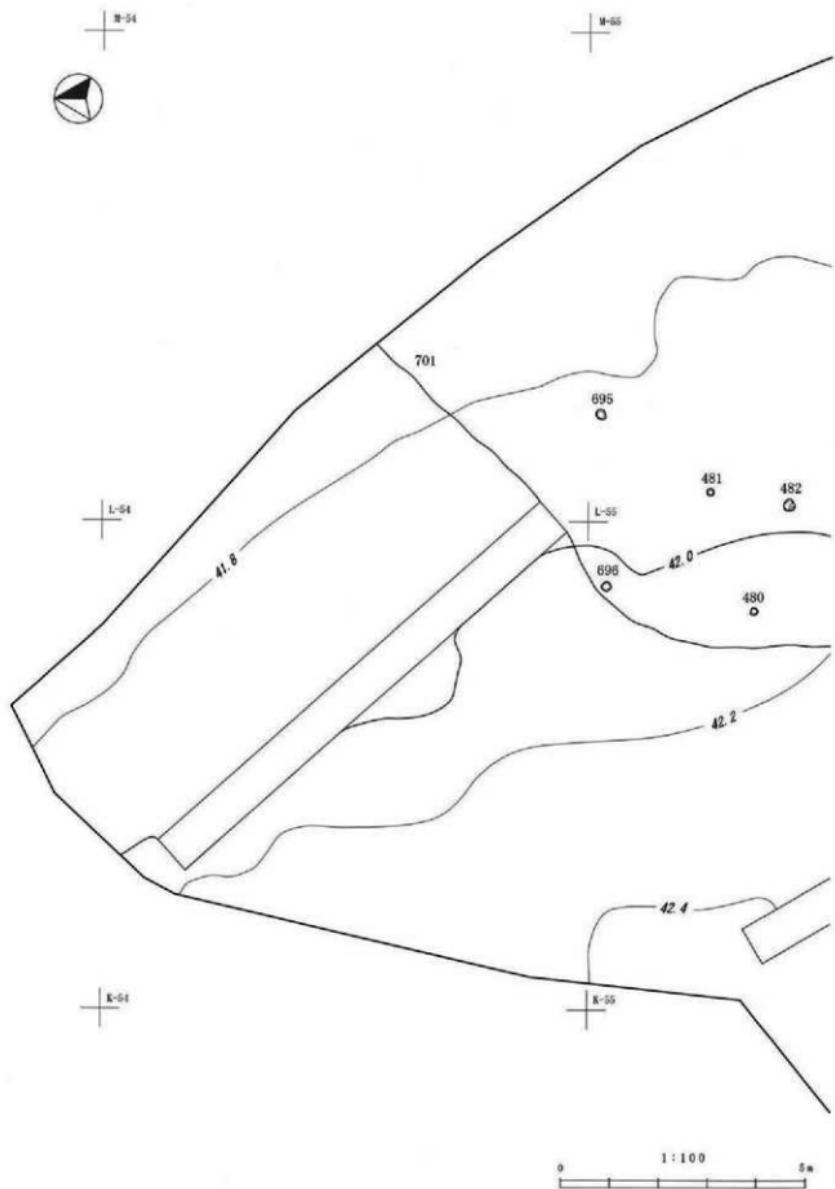
宮田遺跡2



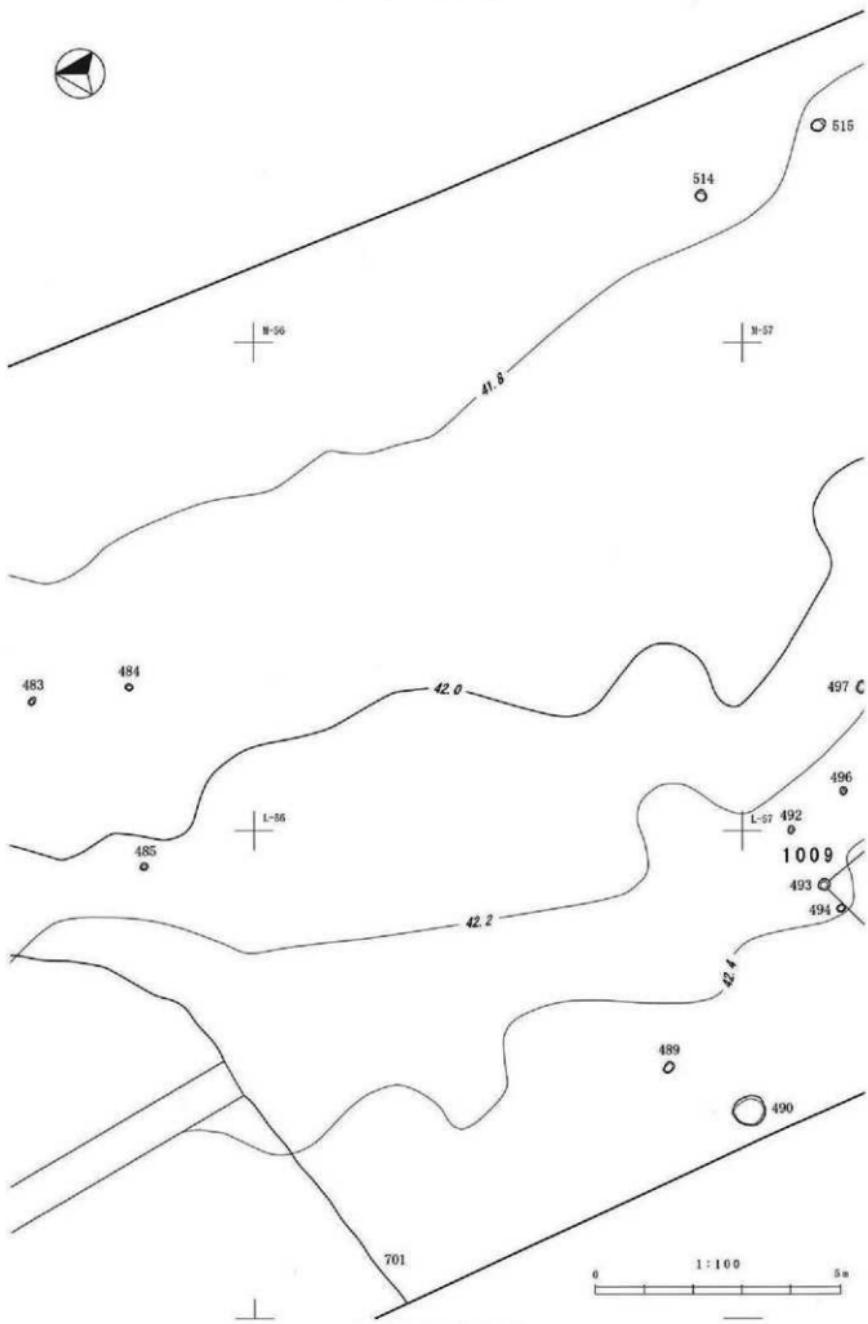
宮田遺跡全体図



宮田遺跡遺構全体図割付図

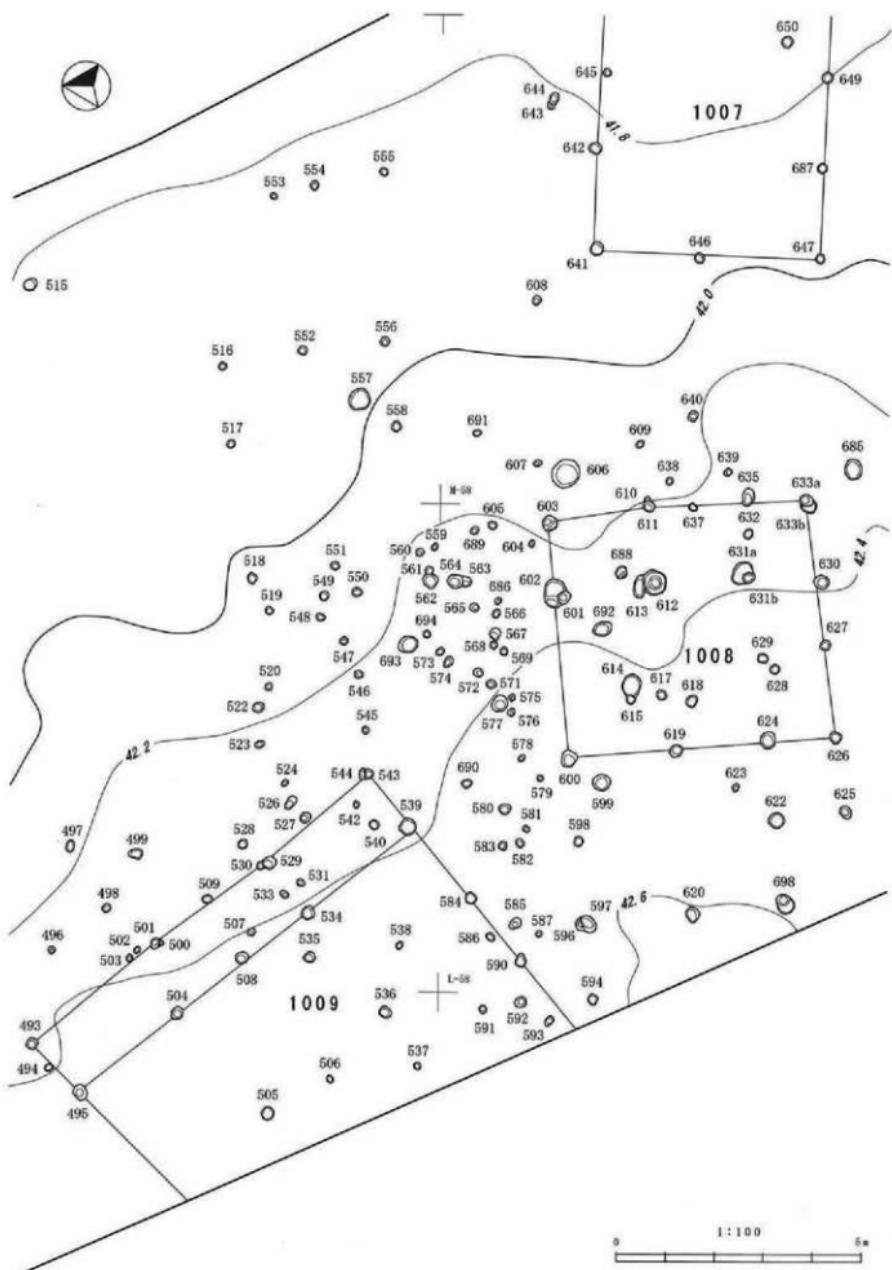


宮田遺跡遺構全体図1



宮田遺跡遺構全体図2

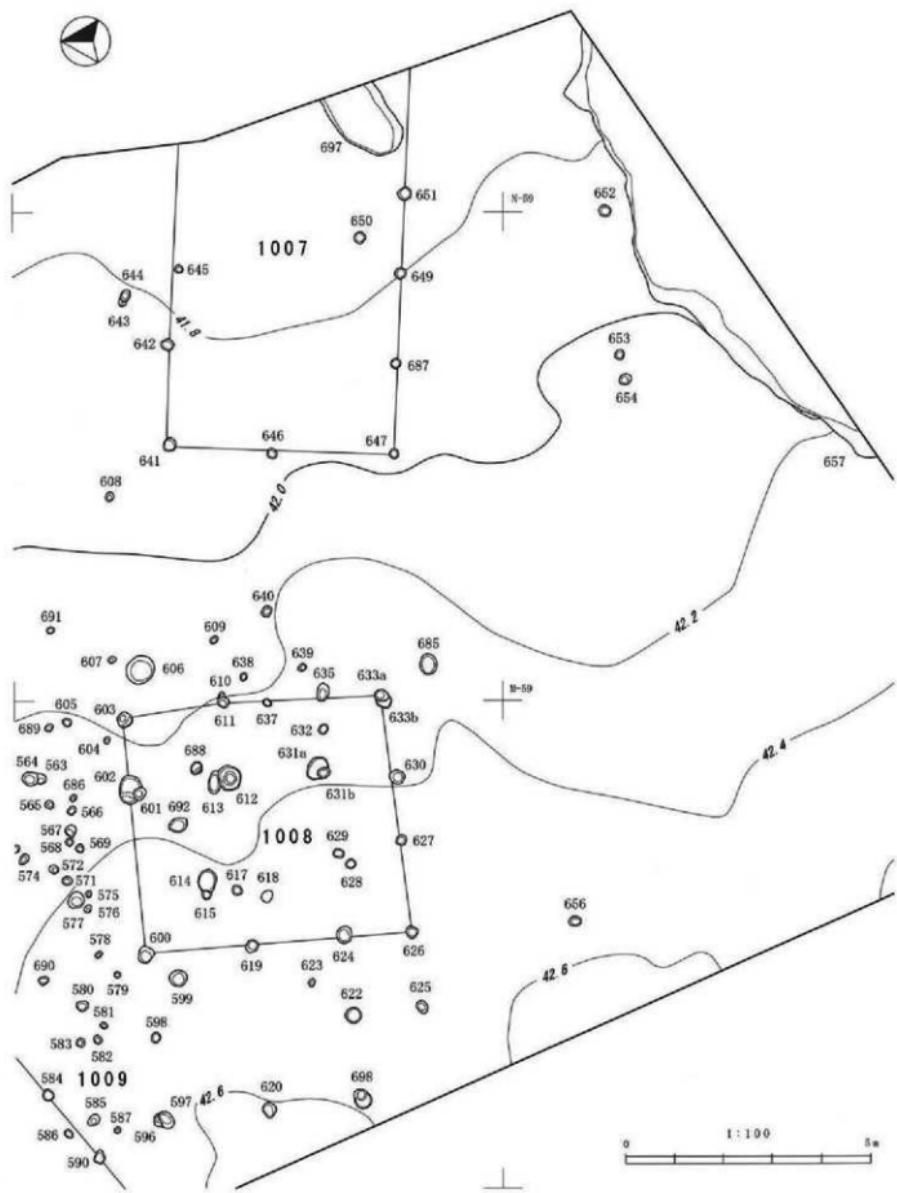
宮田遺跡 6



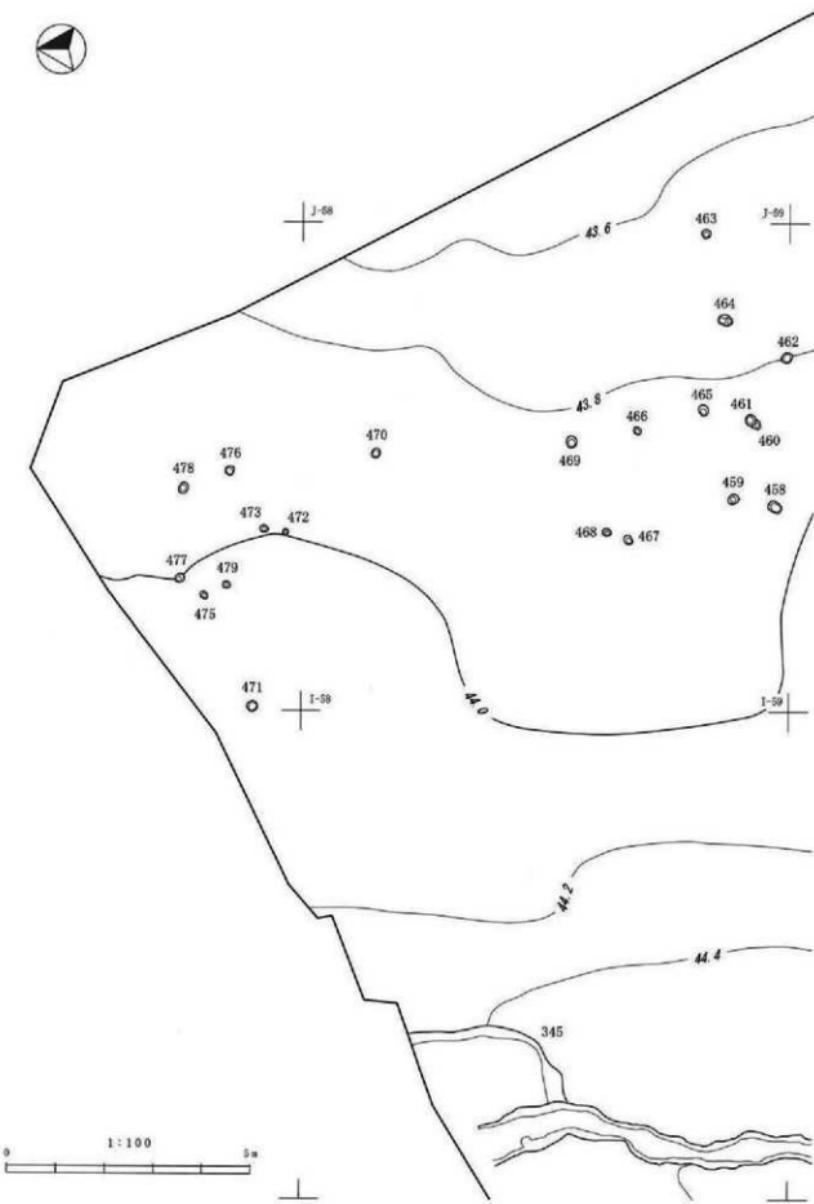
宮田遺跡遺構全体図 3

宮田遺跡 7

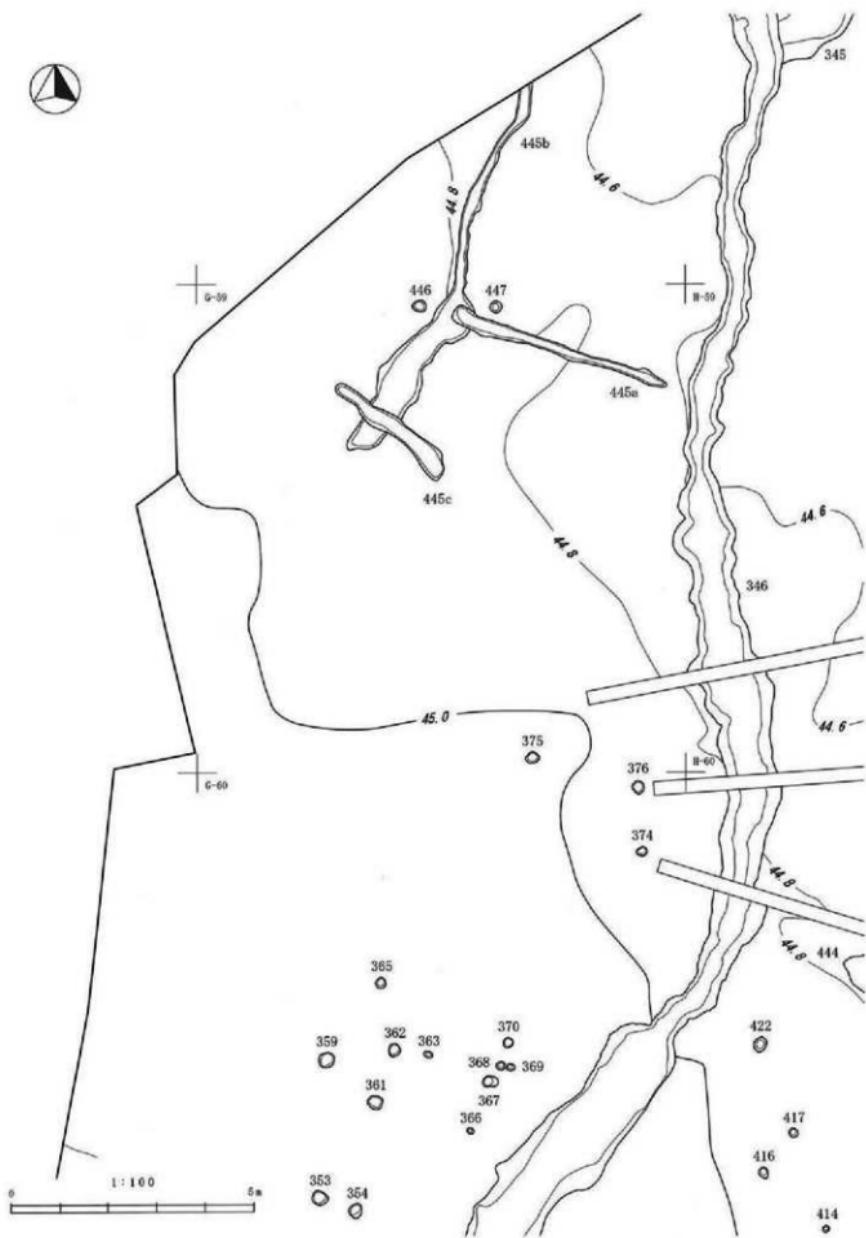
図版65



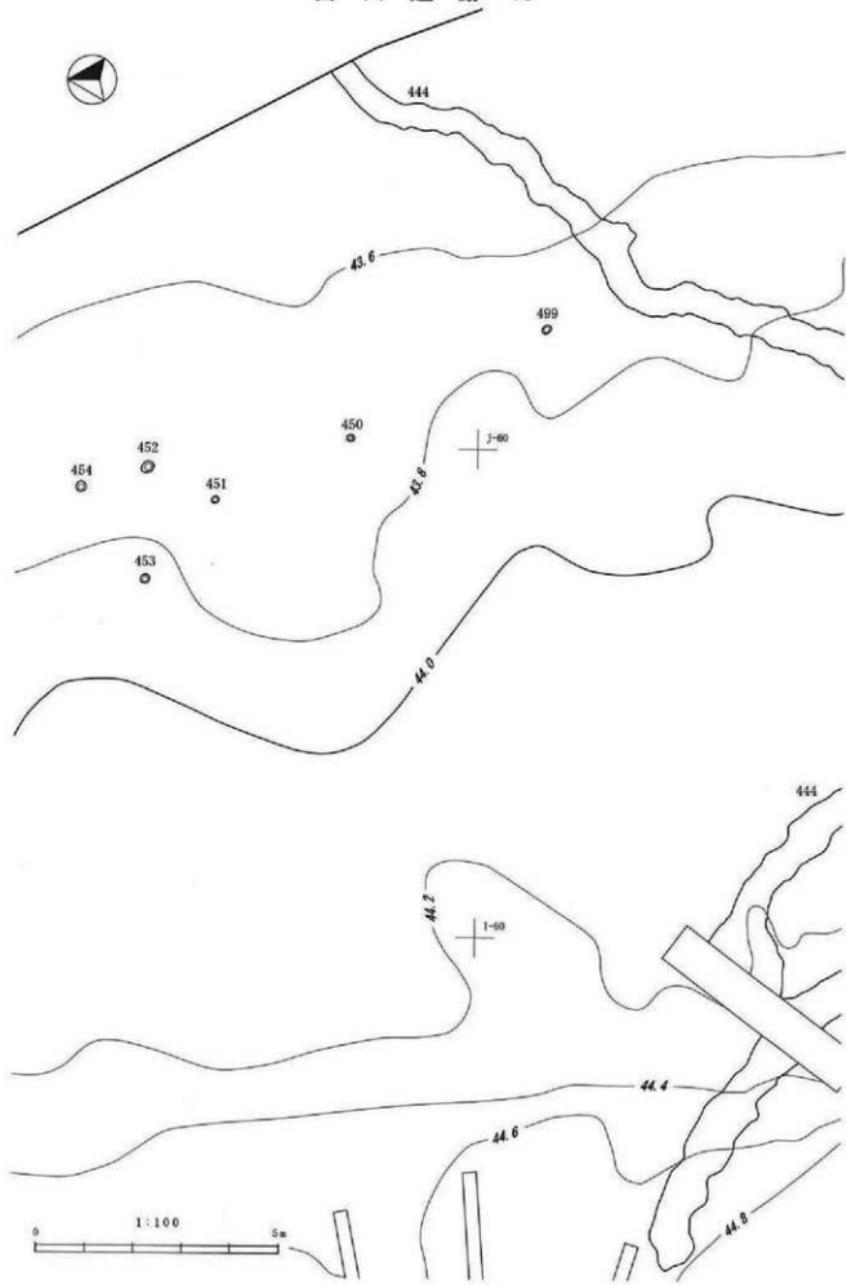
宮田遺跡遺構全体図 4



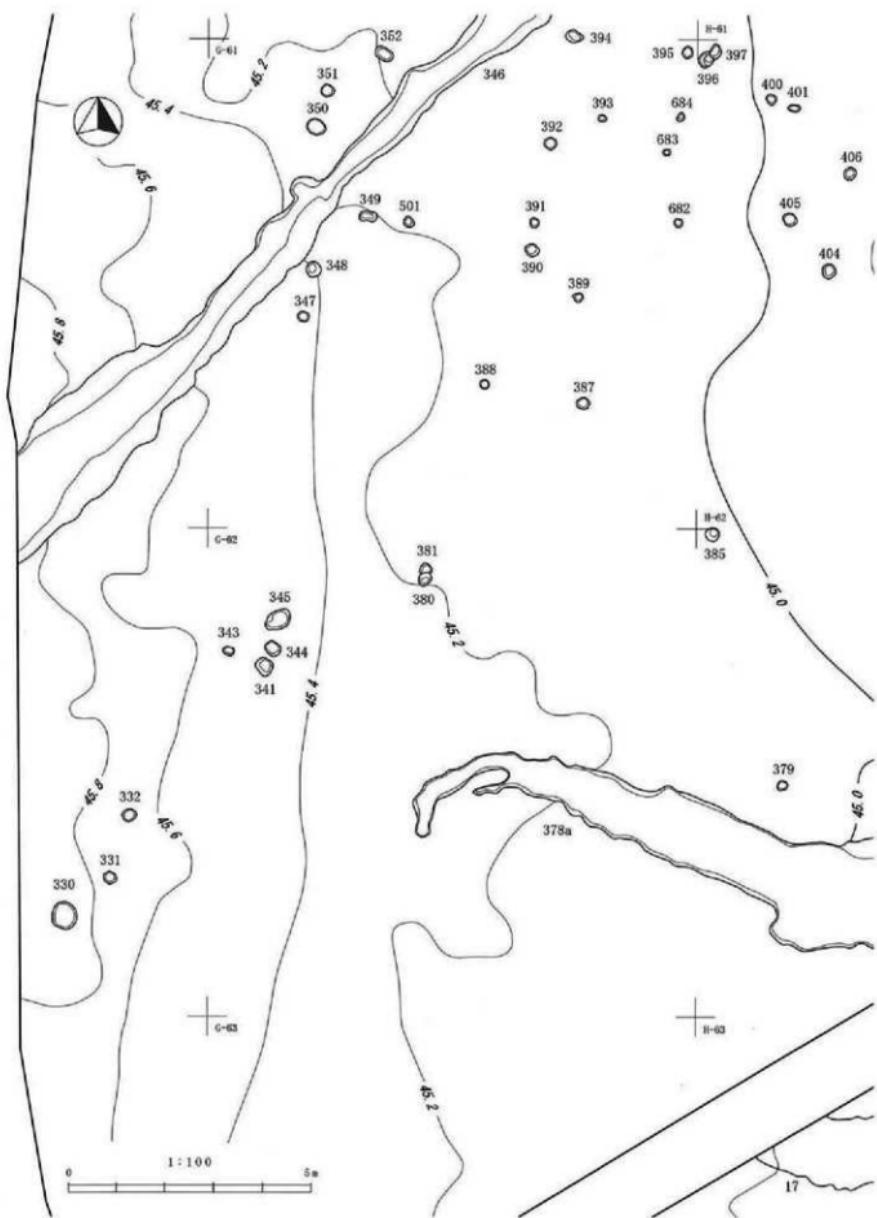
宮田遺跡遺構全体図5



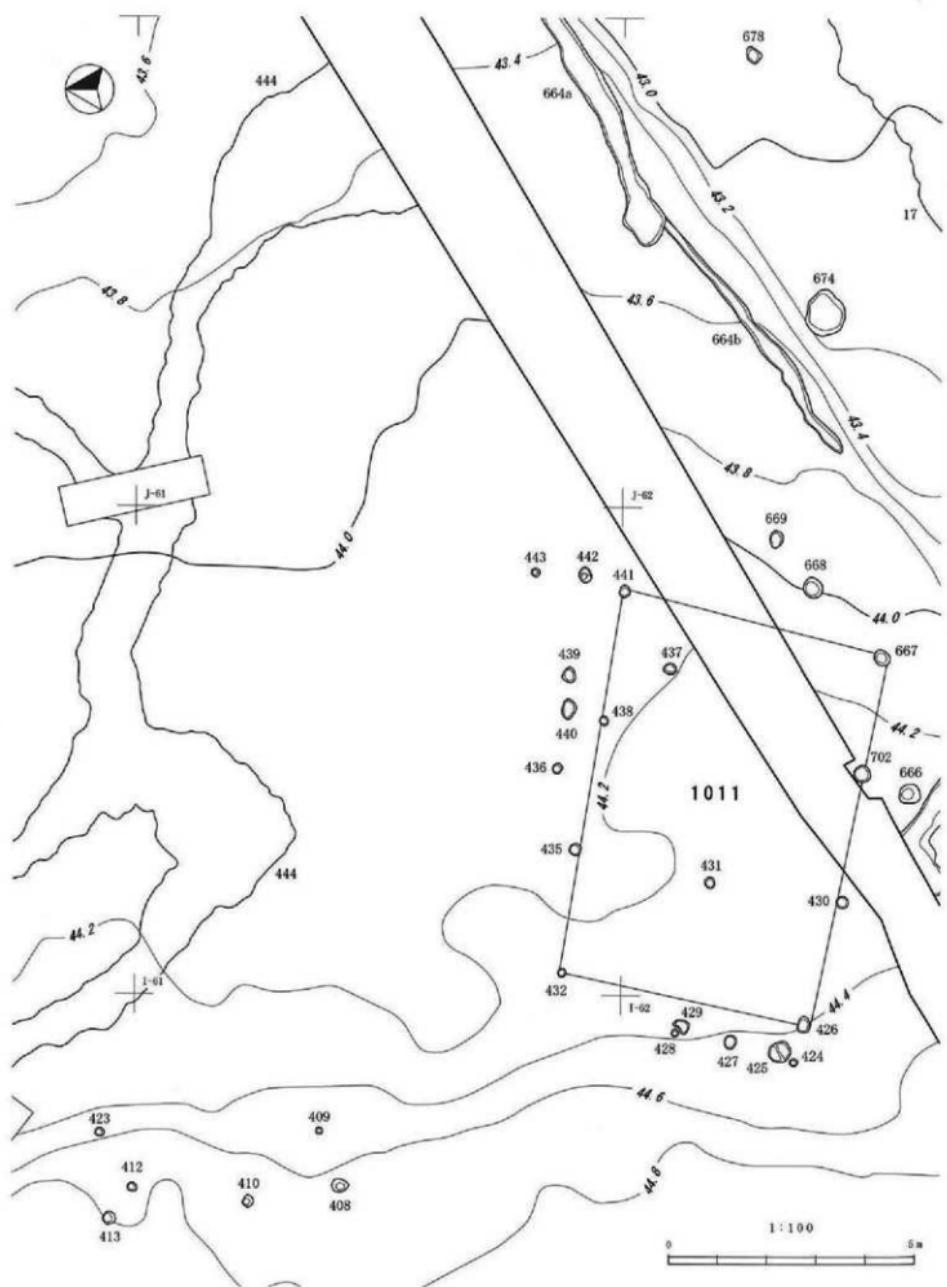
宮田遺跡遺構全体図 6



宮田遺跡遺構全体図 7

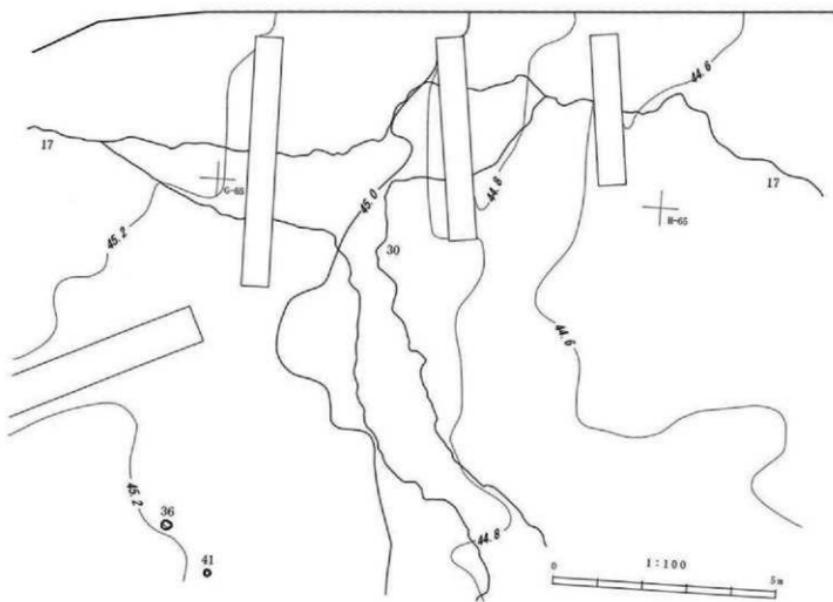
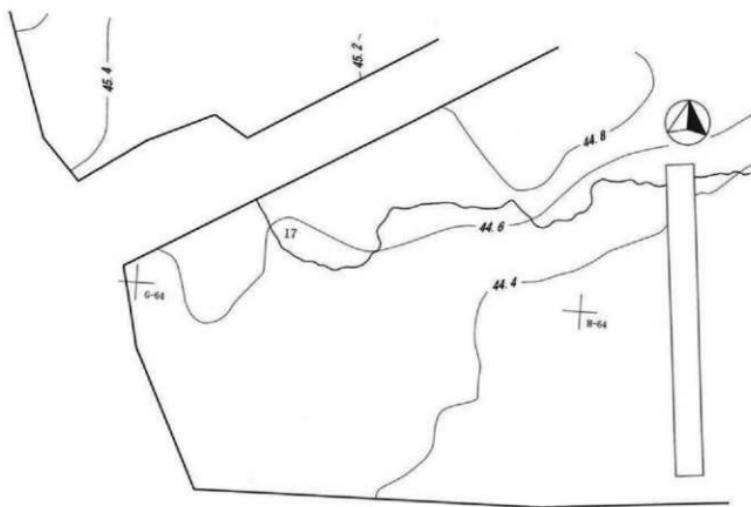


宮田遺跡遺構全体図 8



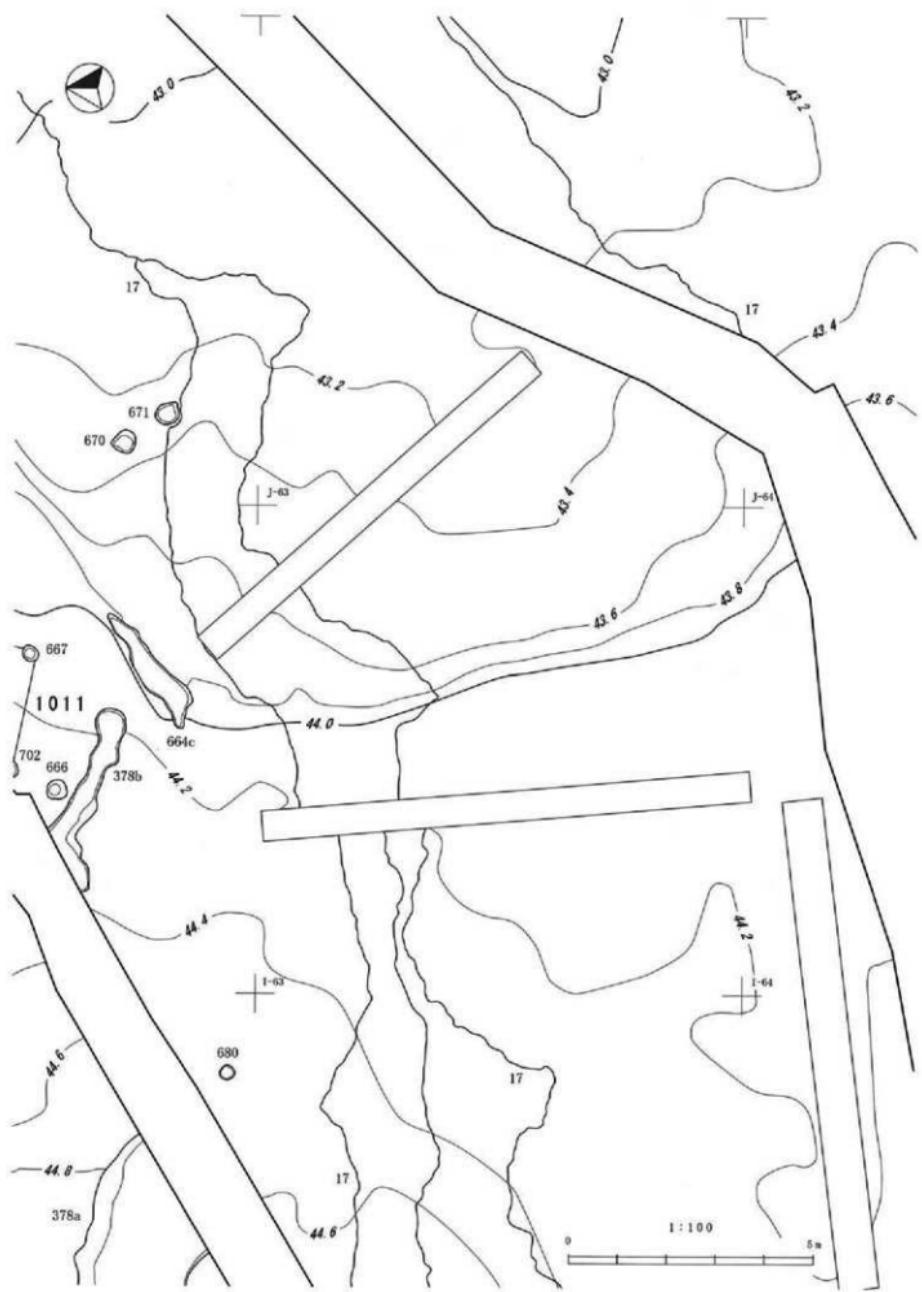
宮田遺跡 13

図版71

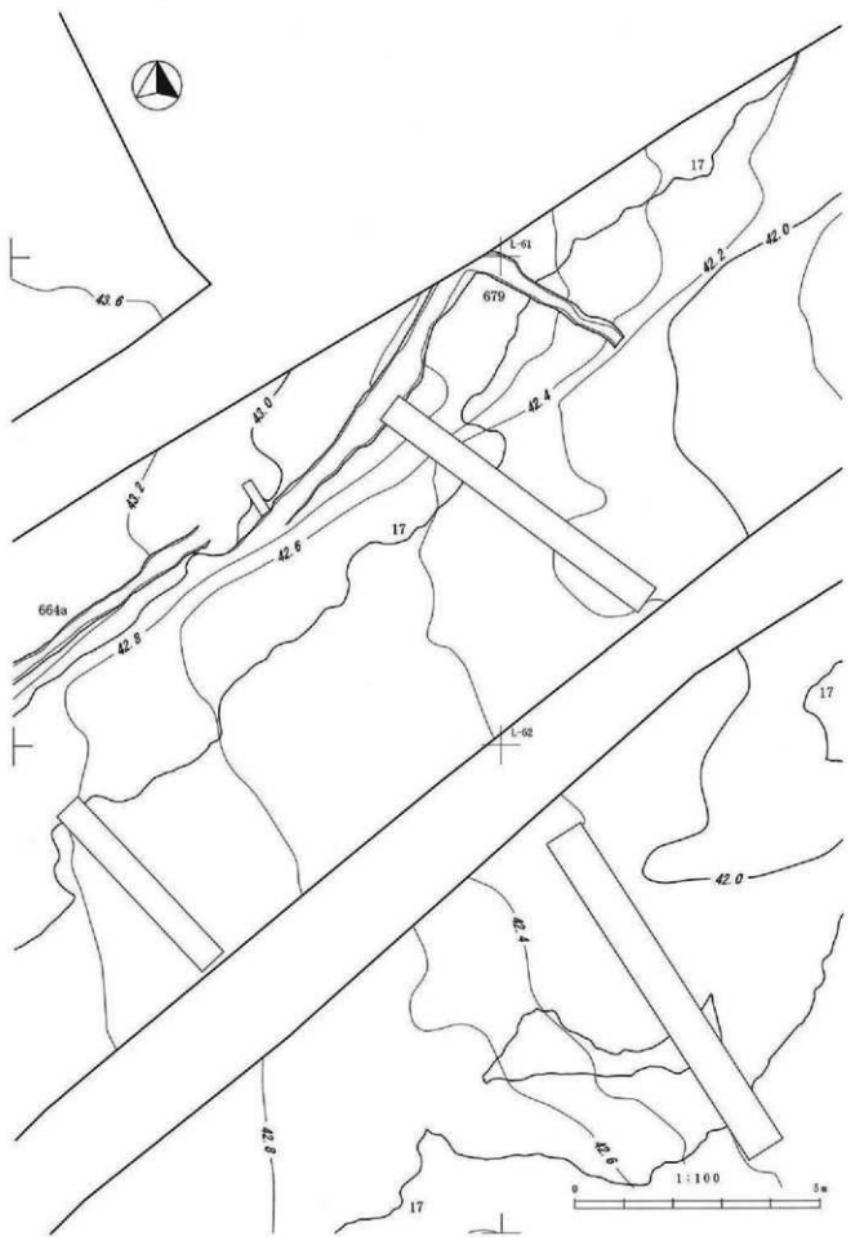


宮田遺跡遺構全体図 10

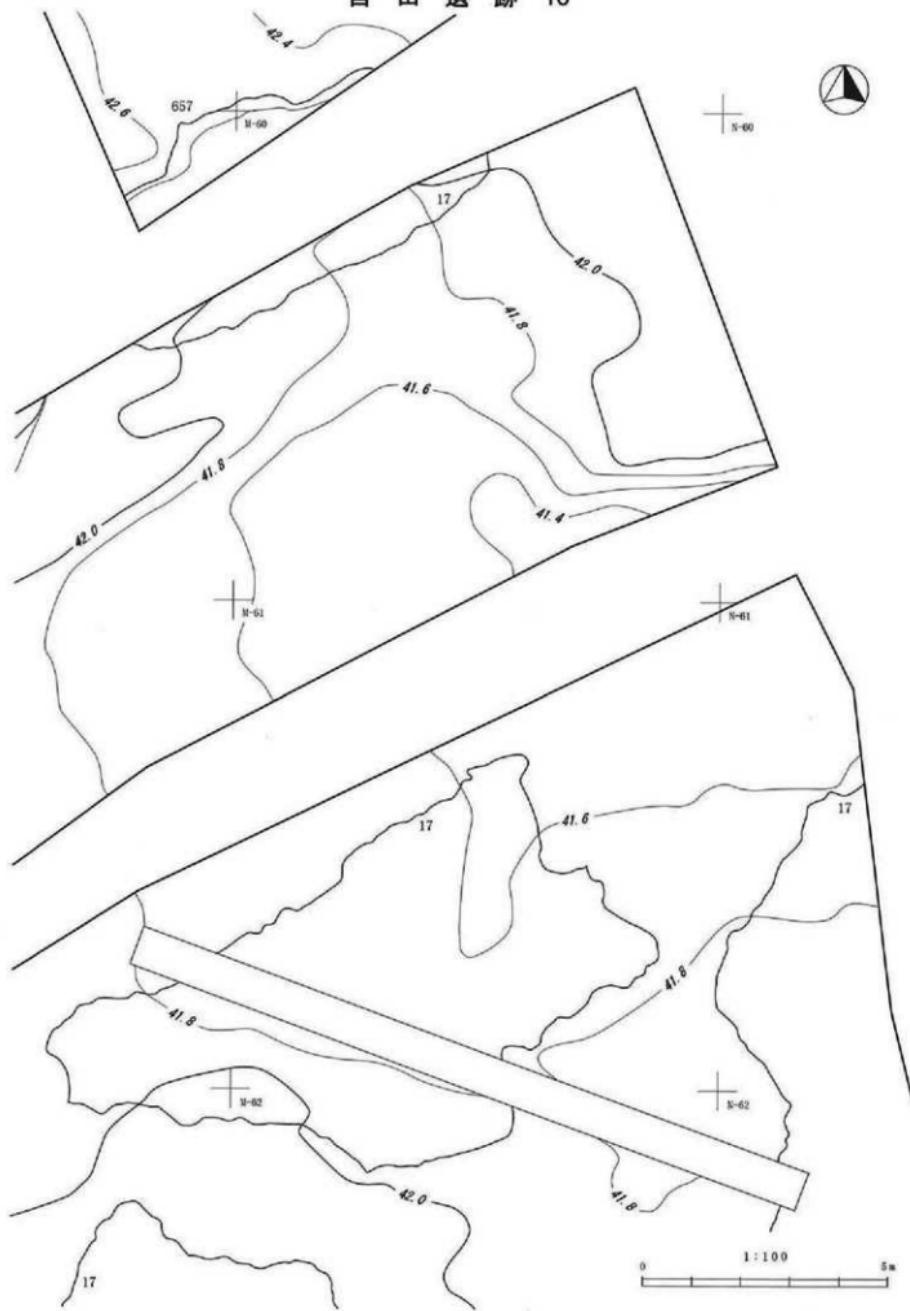
宮田遺跡 14



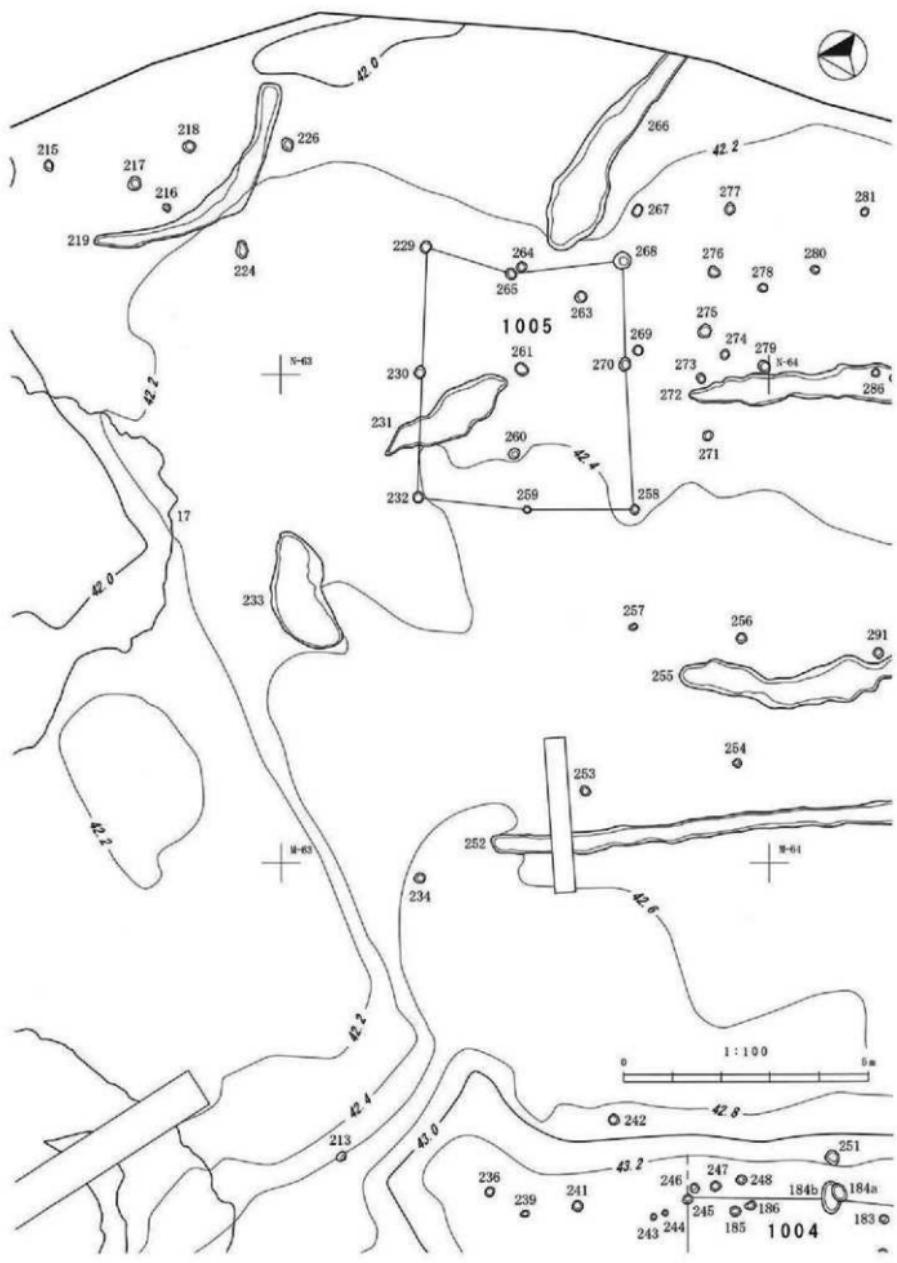
宮田遺跡遺構全体図 1 1



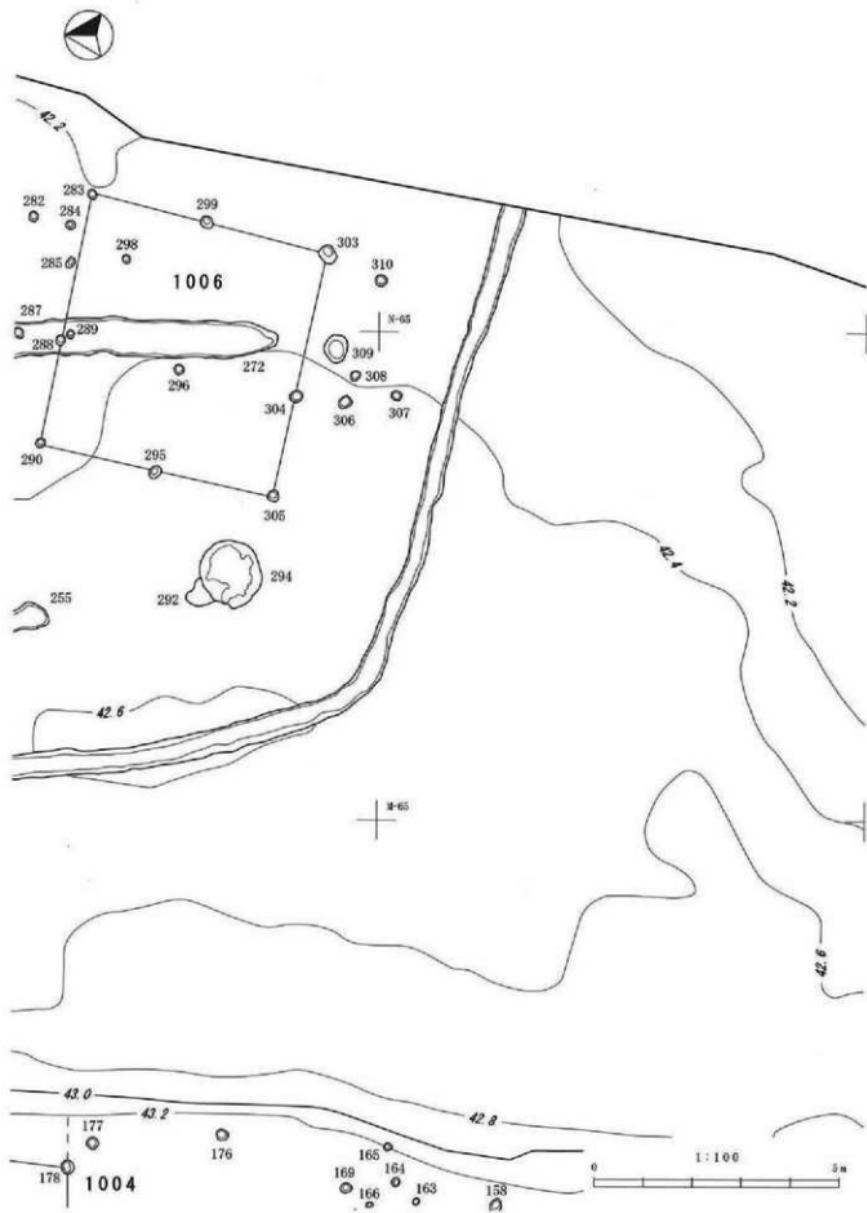
宮田遺跡遺構全体図 12



宮田遺跡遺構全体図 1.3



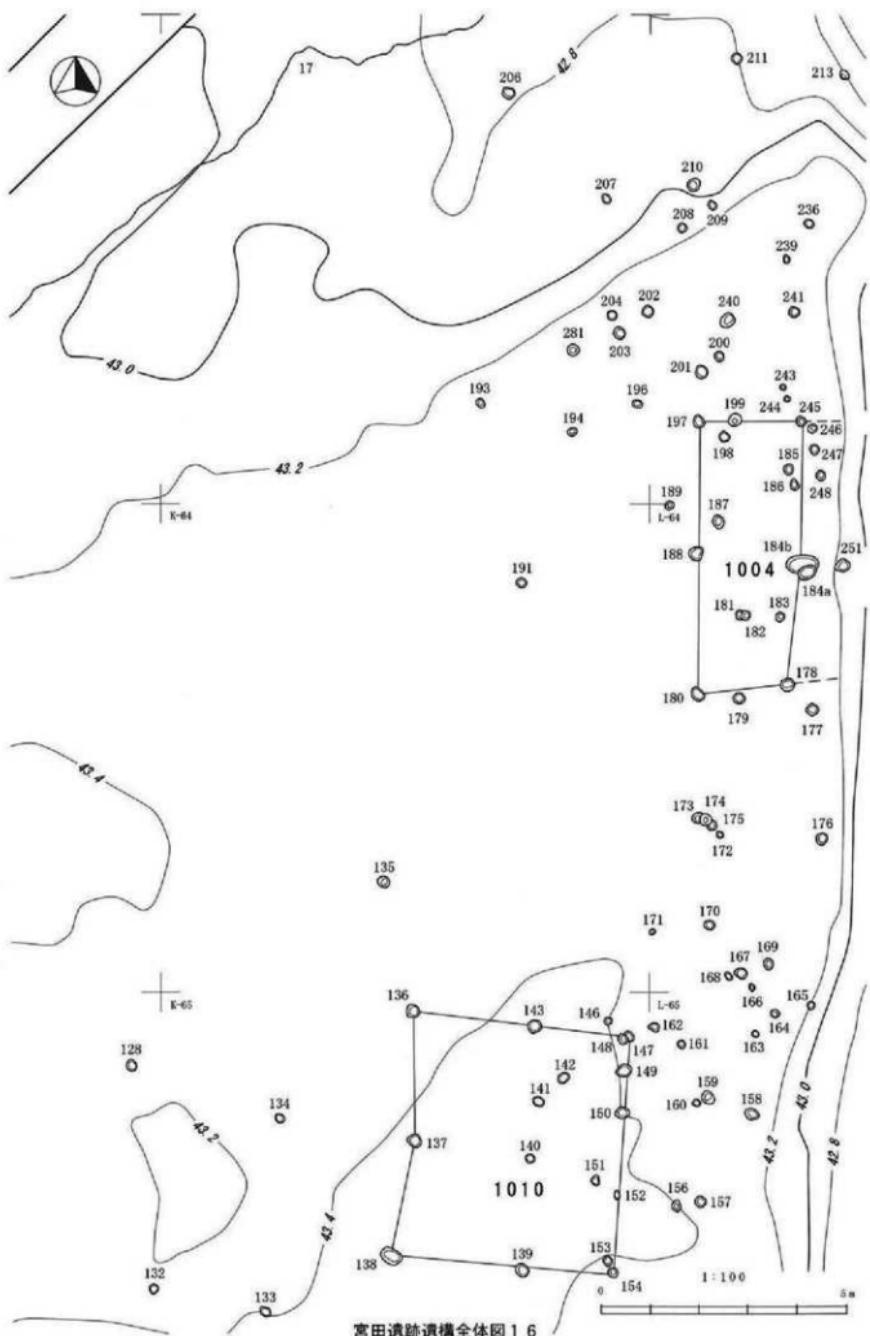
宮田遺跡遺構全体図 1-4

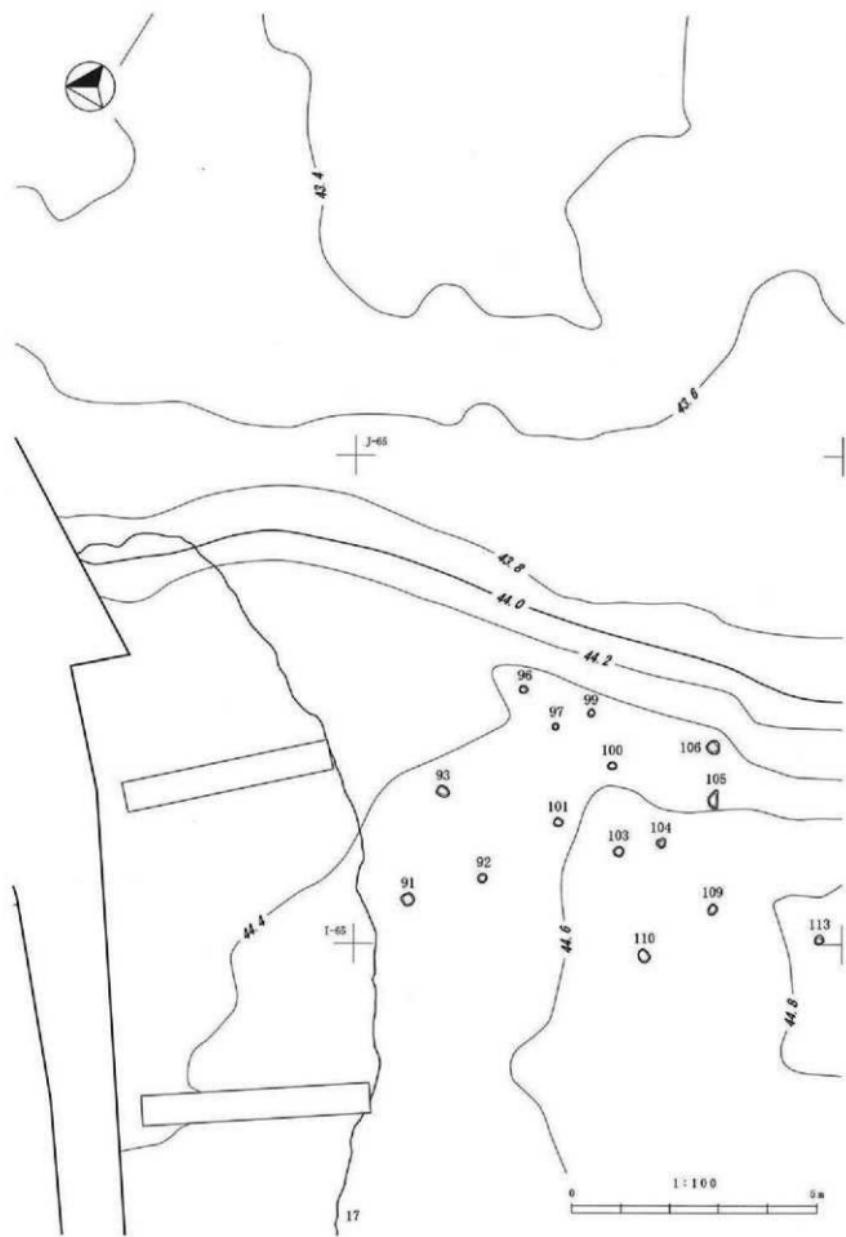


宮田遺跡遺構全体図 1.5

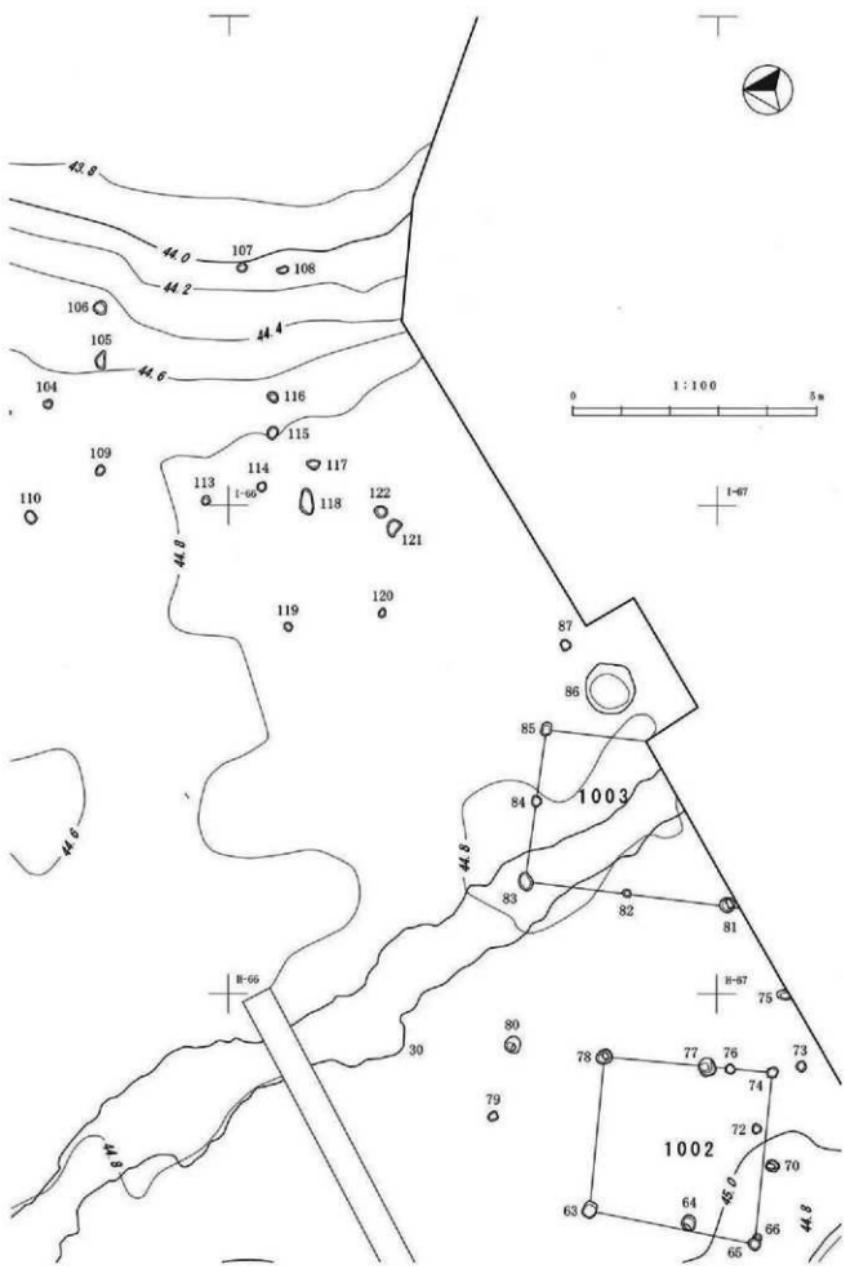
宮田遺跡 19

圖版77



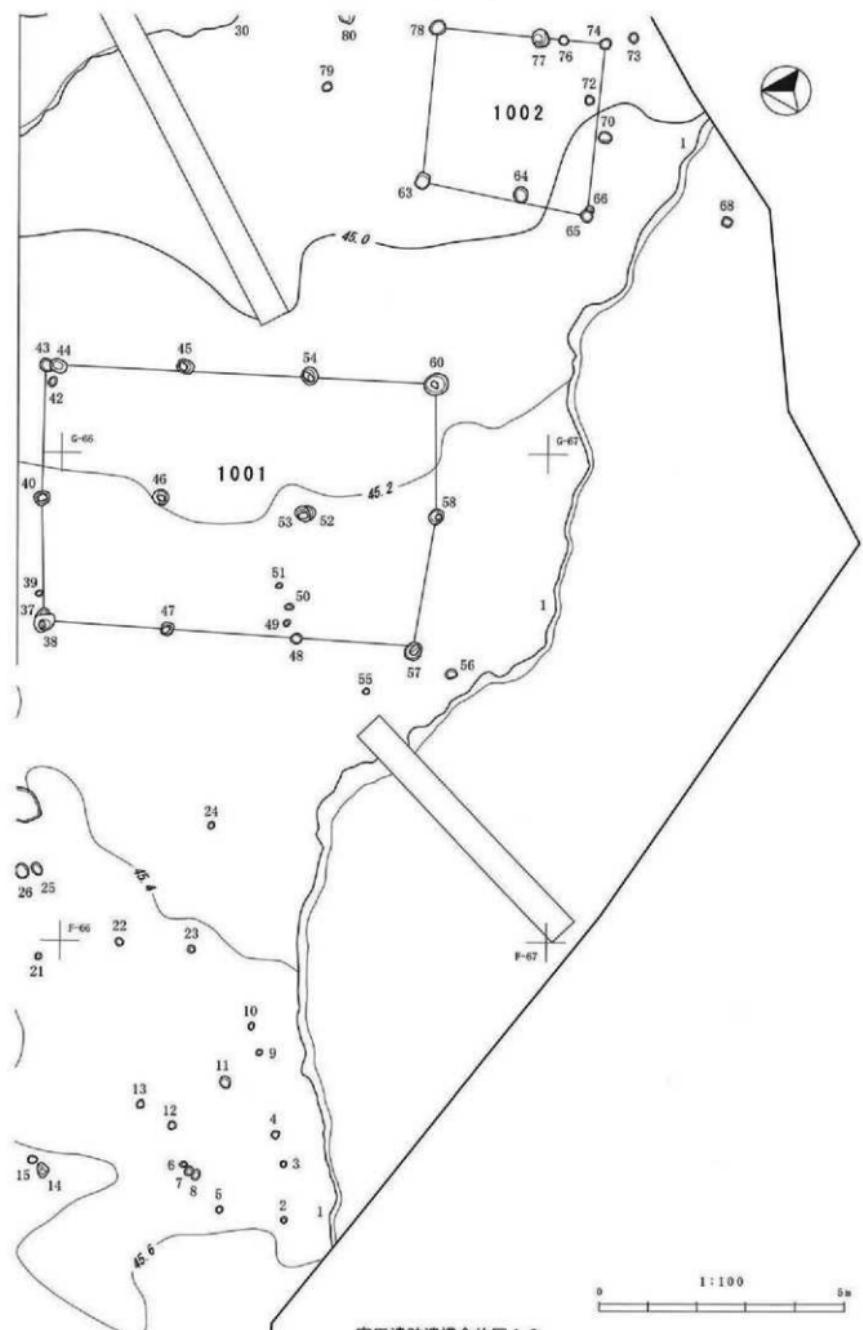


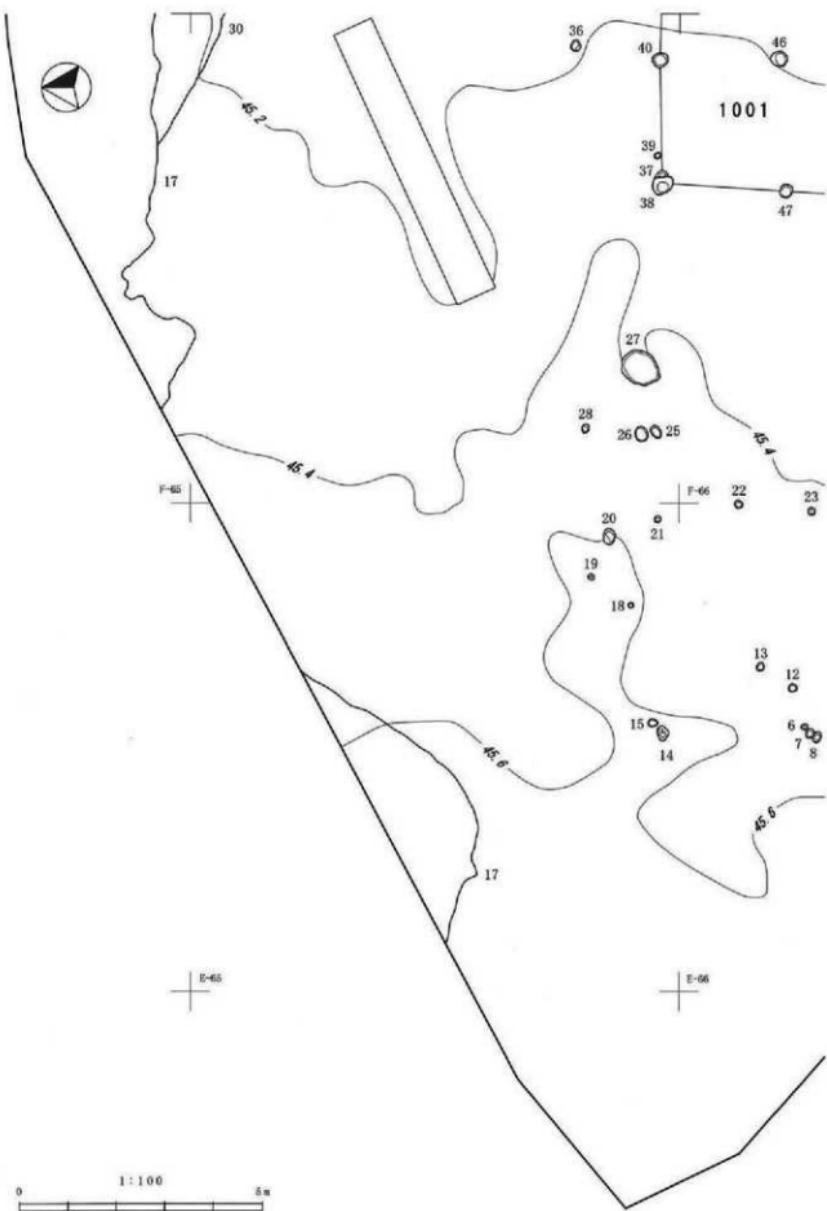
宮田遺跡遺構全体図 17



宮田遺跡遺構全体図 18

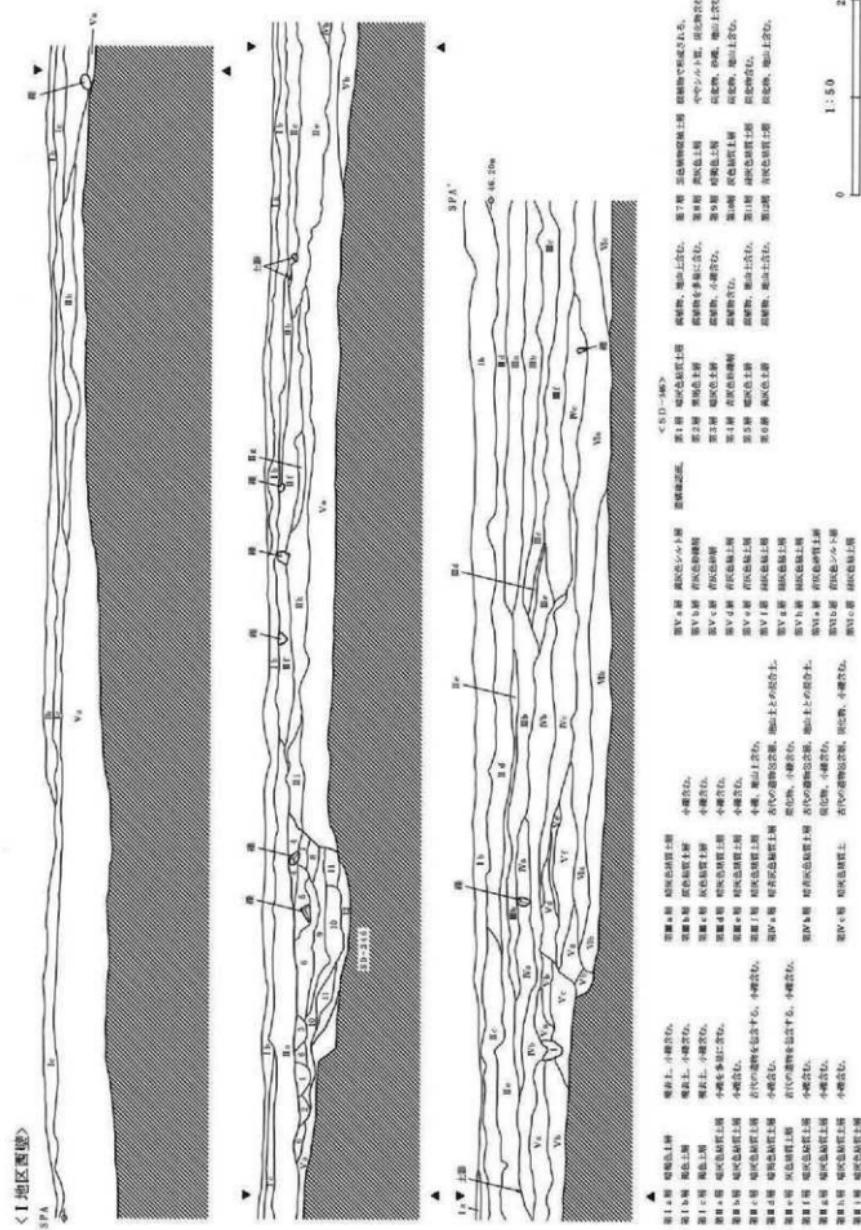
宮田遺跡 22



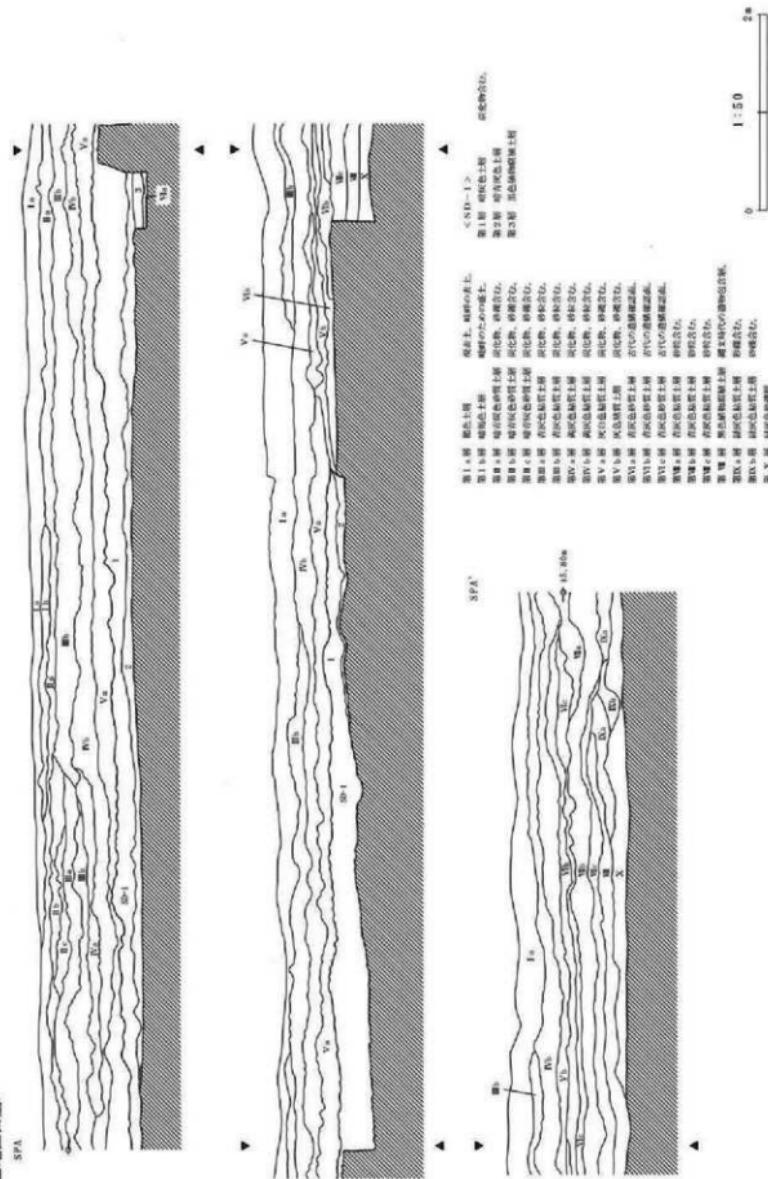


宮田遺跡遺構全体図 20

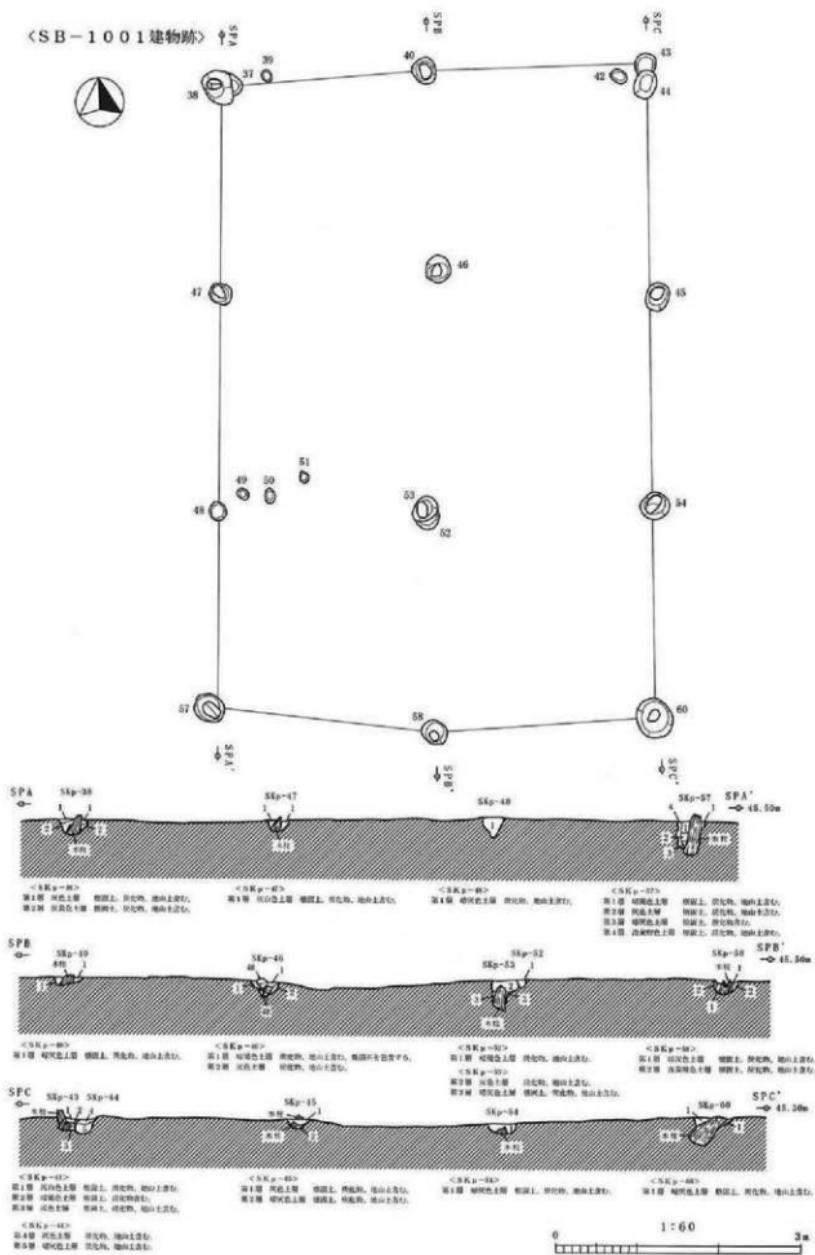
宮田遺跡 24



宮田遺跡基本層序 1 (1 地区)



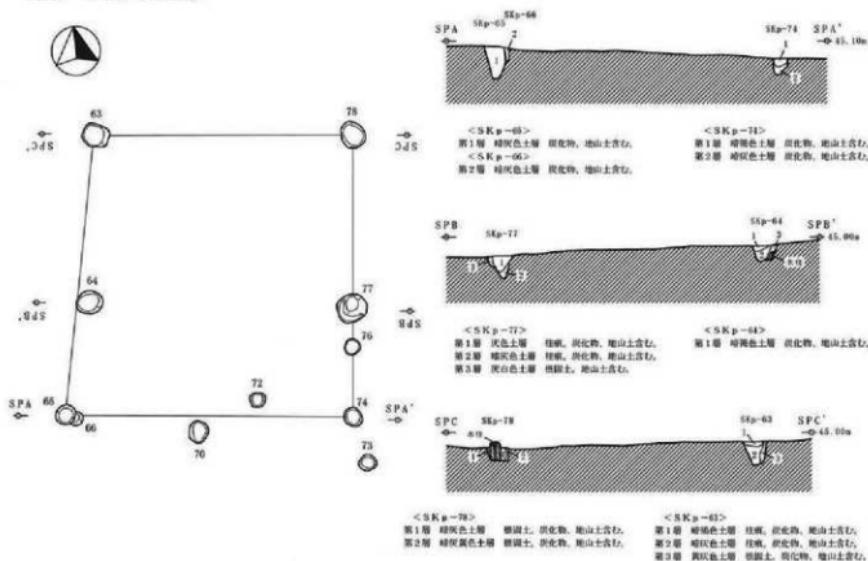
宮田遺跡基本層序 2 (III 地区)



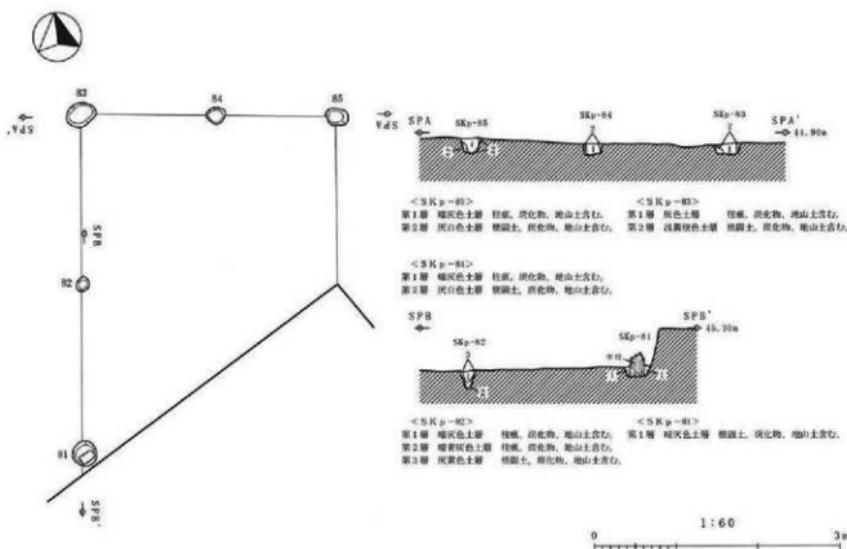
宮田遺跡遺構個別図1 (建物跡1)

宮田遺跡 27

<SB-1002建物跡>



<SB-1003建物跡>

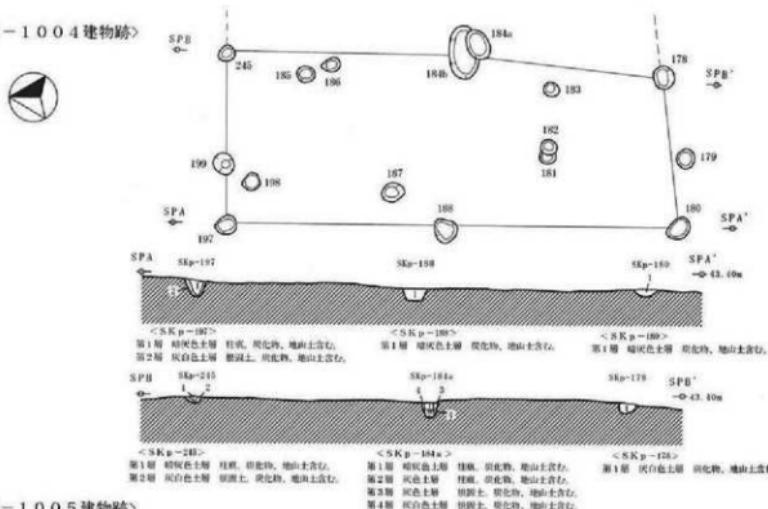


宮田遺跡遺構個別図2(建物跡2)

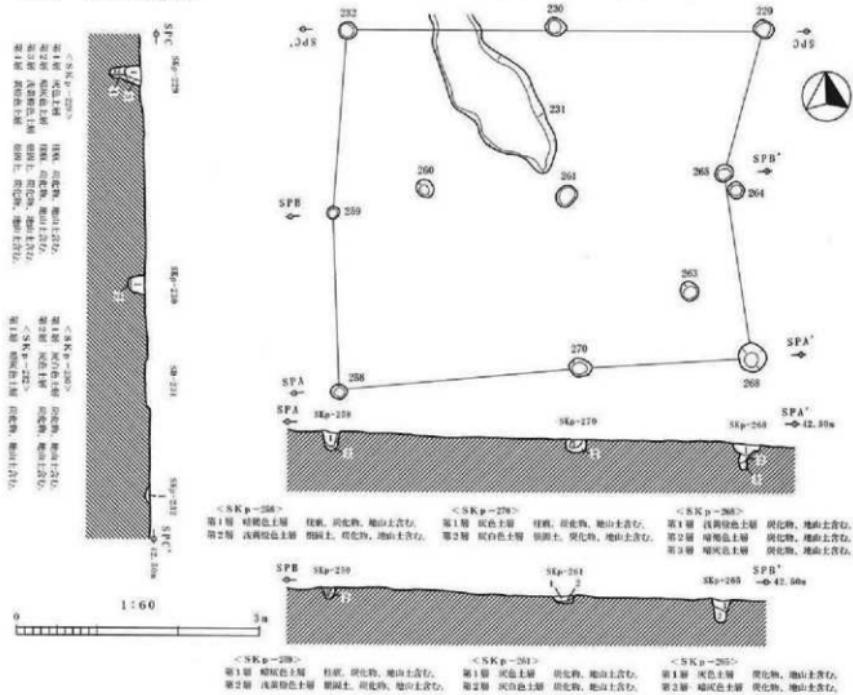
1:60
3m

宮 田 遺 跡 28

〈SB-1004 建物跡〉



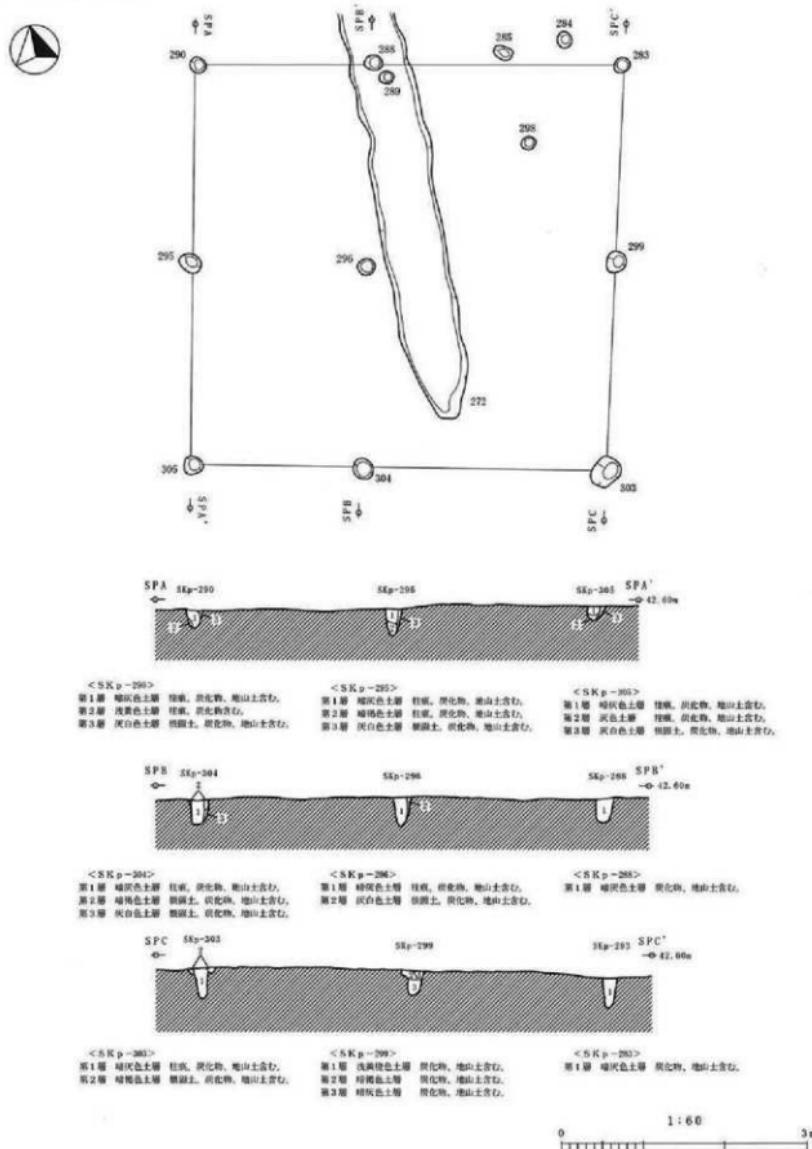
《S B-1.0.0.5 建物跡》



宮田遺跡遺構個別図3 (建物跡3)

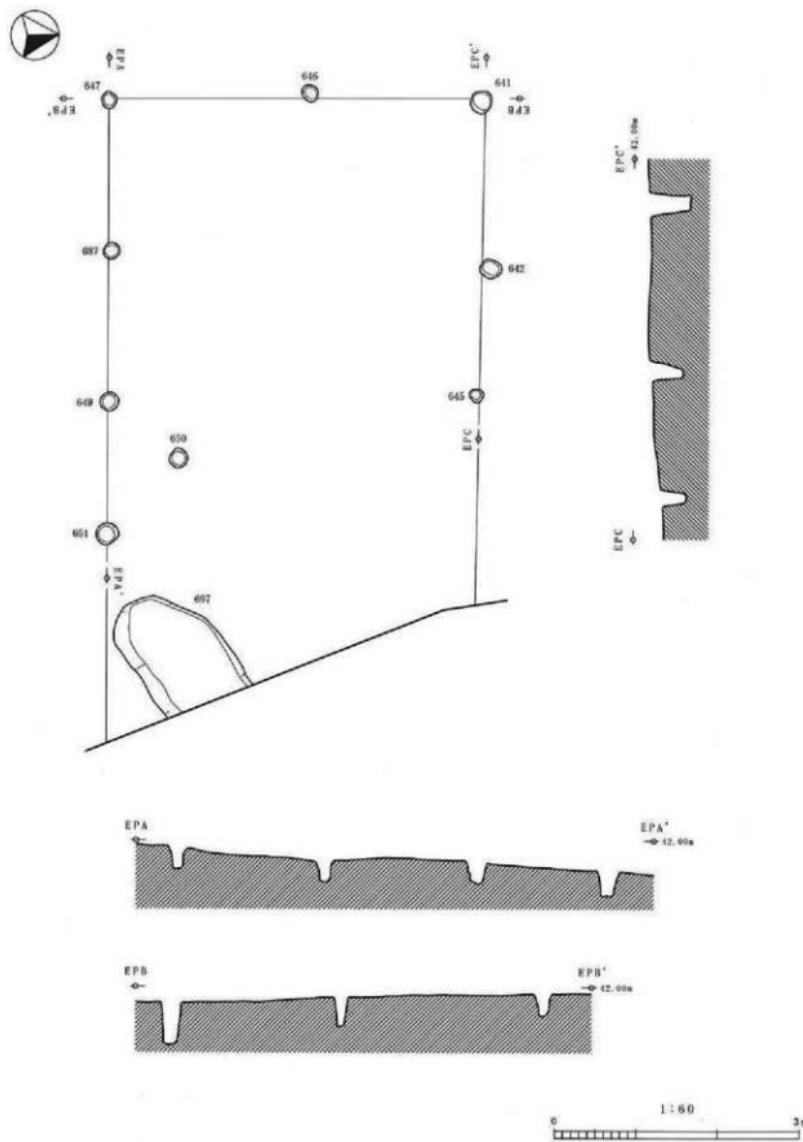
宮田遺跡 29

<SB-1006建物跡>



宮田遺跡遺構個別図4 (建物跡4)

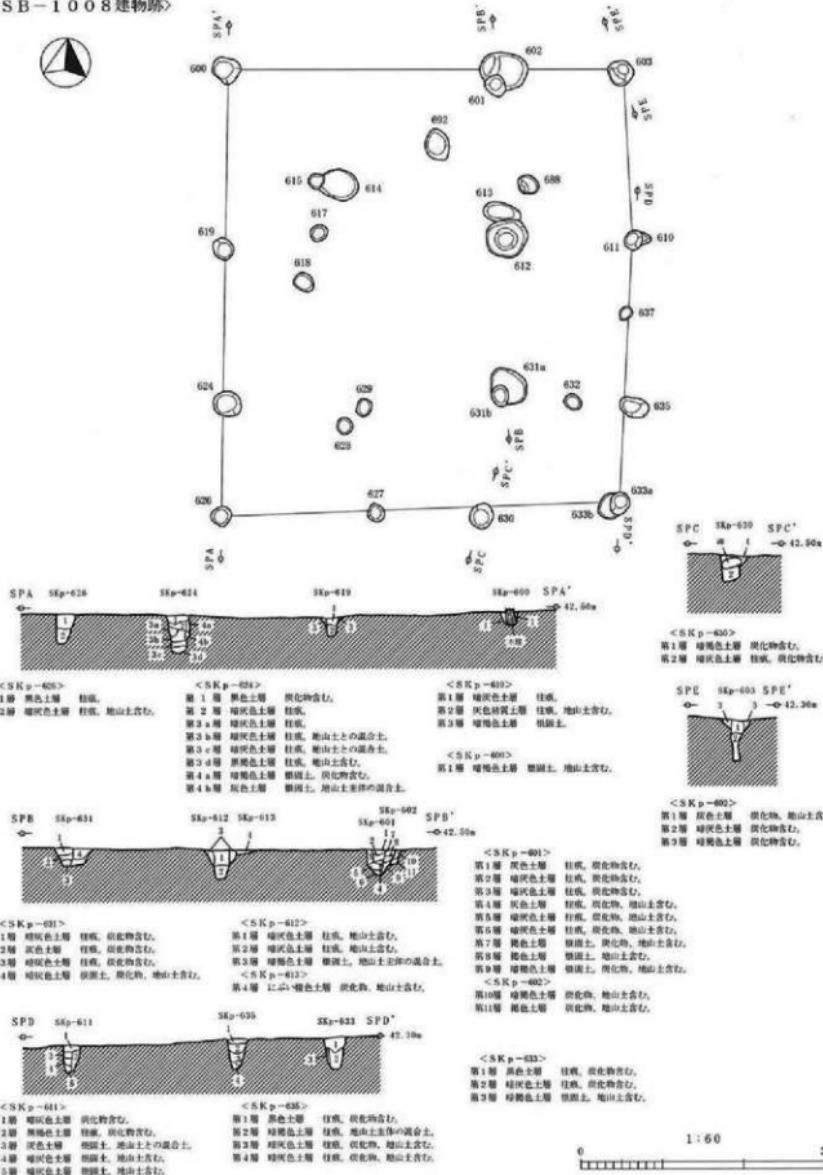
<SB-1007建物跡>



宮田遺跡造構個別図 5 (建物跡 5)

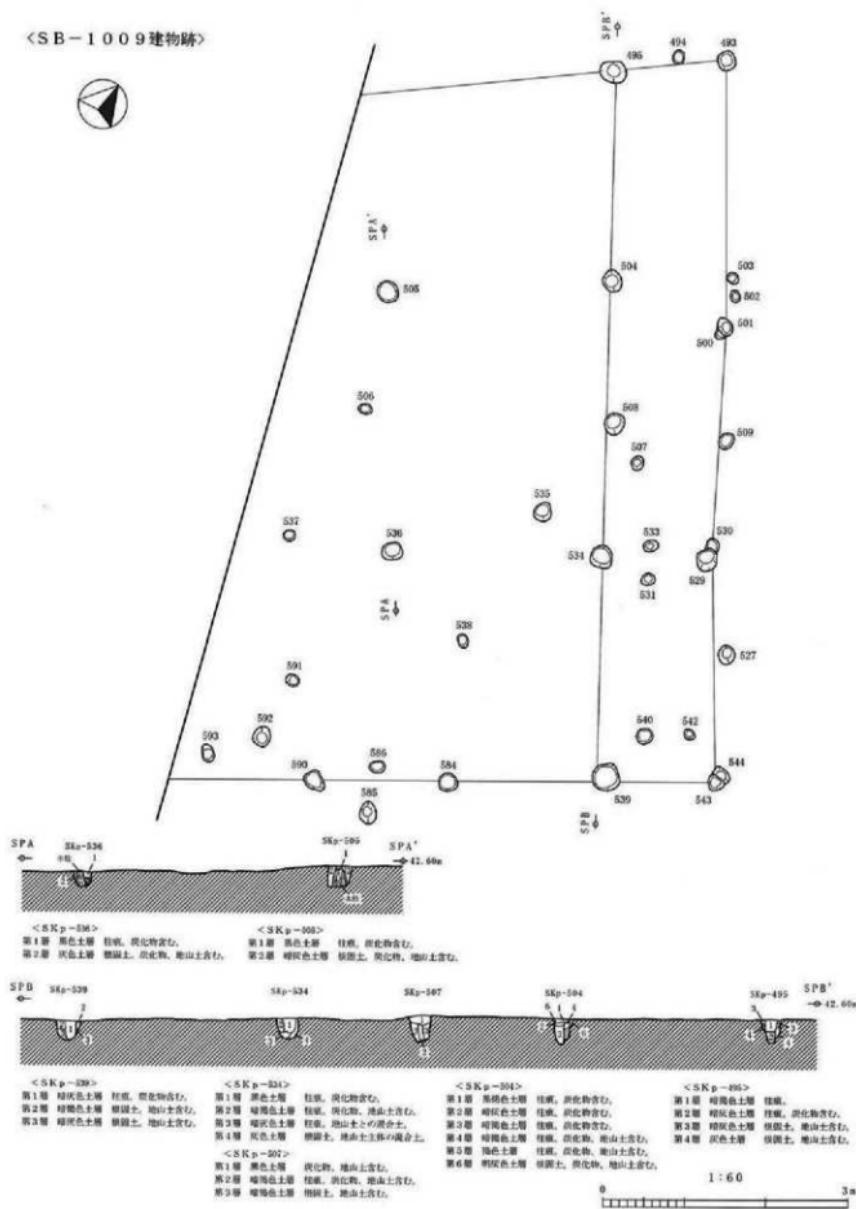
宮田遺跡 31

<SB-1008建物跡>



宮田遺跡遺構個別図6（建物跡6）

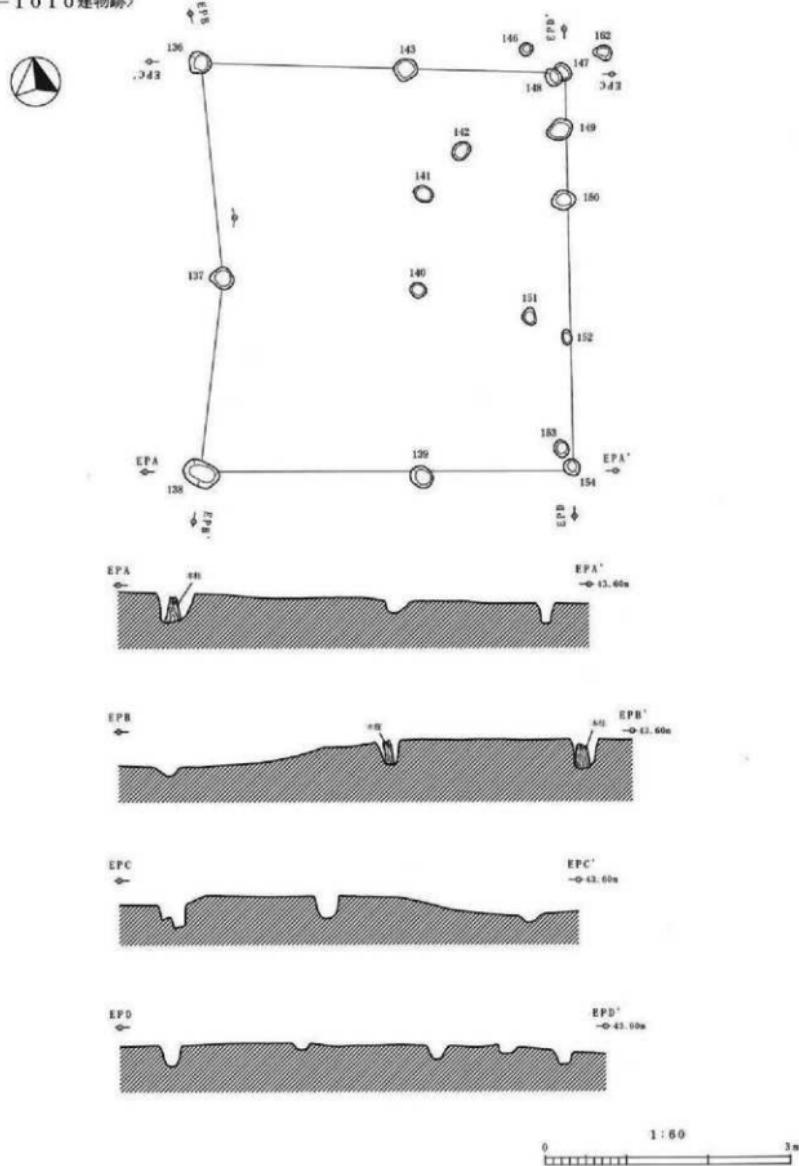
<SB-1009建物跡>



宮田遺跡遺構個別図7（建物跡7）

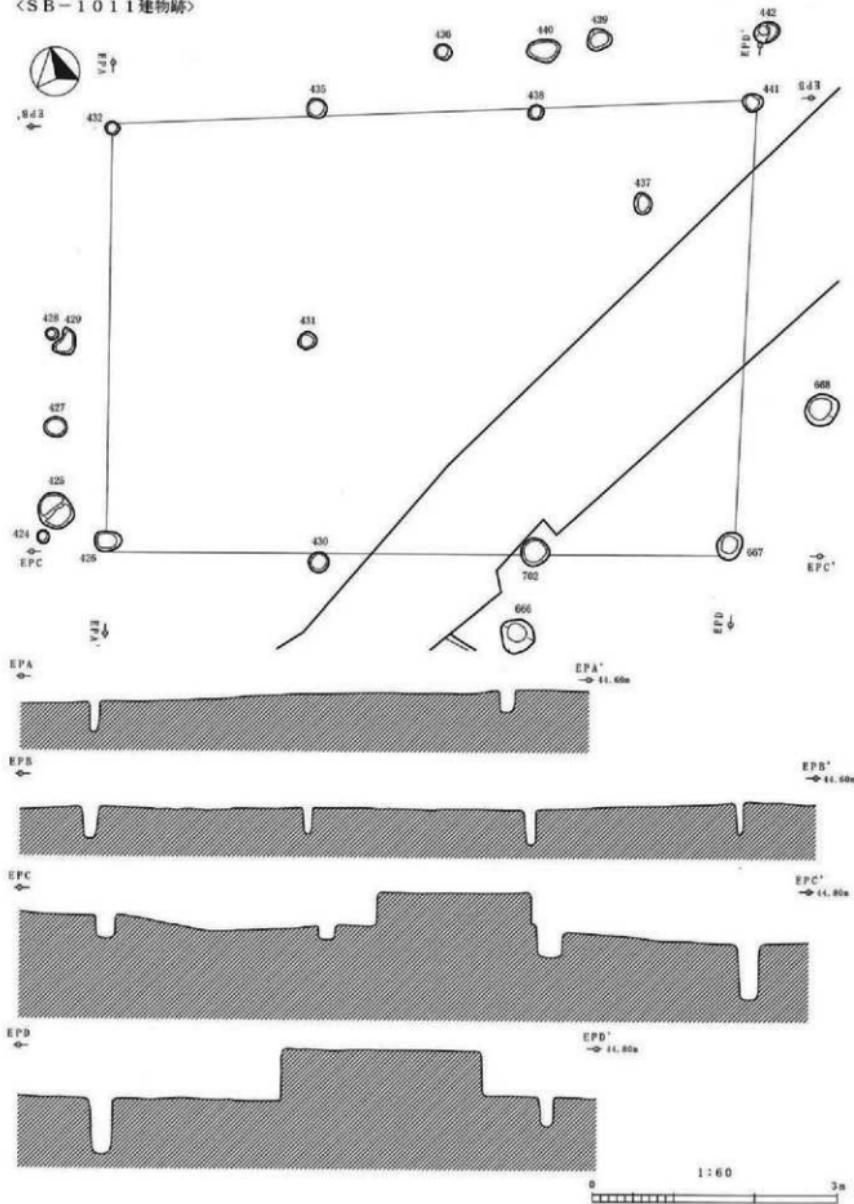
宮田遺跡 33

<SB-1010建物跡>



宮田遺跡遺構個別図8（建物跡8）

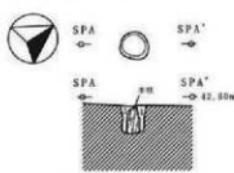
〈SB-1011建物跡〉



宮田遺跡遺構個別図9（建物跡9）

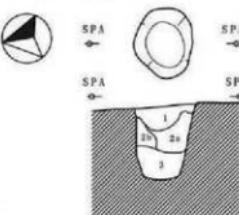
宮田遺跡 35

<SKP-584>



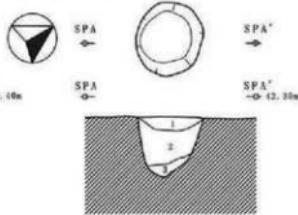
<SKP-584>
第1層 暗褐色土層 塵土、炭化物、地山土含む。

<SK-309>



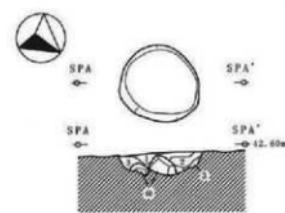
<SK-309>
第1層 暗色土層 炭化物、地山土含む。
第2a層 暗褐色土層 地山土上の混合土、炭化物含む。
第2b層 暗褐色土層 炭化物、地山土含む。
第3層 黒褐色土層 炭化物、地山土含む。

<SK-606>



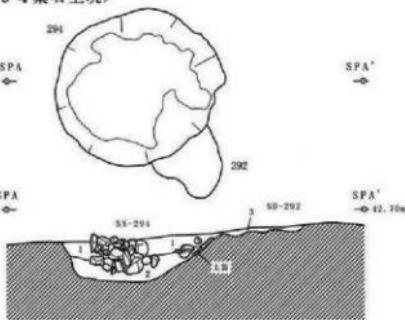
<SK-606>
第1層 暗色土層 古代の遺物を含む、南植物を含む。
第2層 暗褐色土層 地山土含む。
第3層 黑褐色土層 地山土含む。

<SK-490>



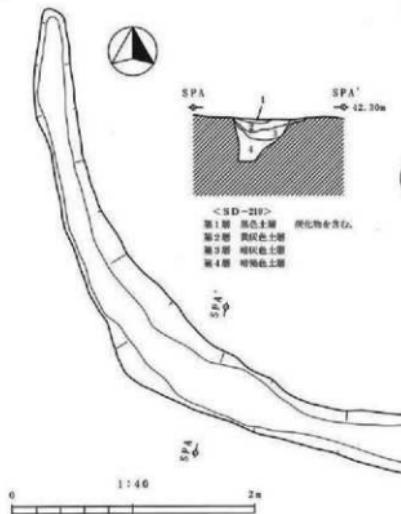
<SK-490>
第1層 明褐色土層 炭化物を含む。
第2層 暗褐色土層 地山土含む。
第3層 黑褐色土層 炭を含む。

<SX-294集石土坑>



<SX-294>
第1層 樹根土層 葉を多量に含む、炭化物、地山土含む。
第2層 樹根土層 葉を含む、炭化物、地山土含む。
<SD-219>
第3層 黑褐色土層 炭化物含む。

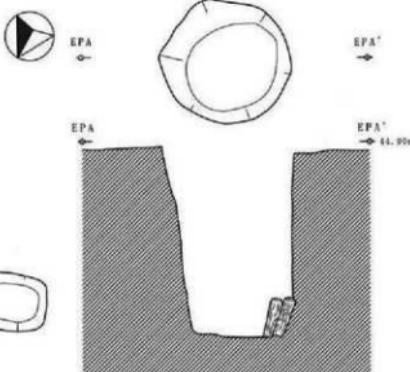
<SD-219溝跡>



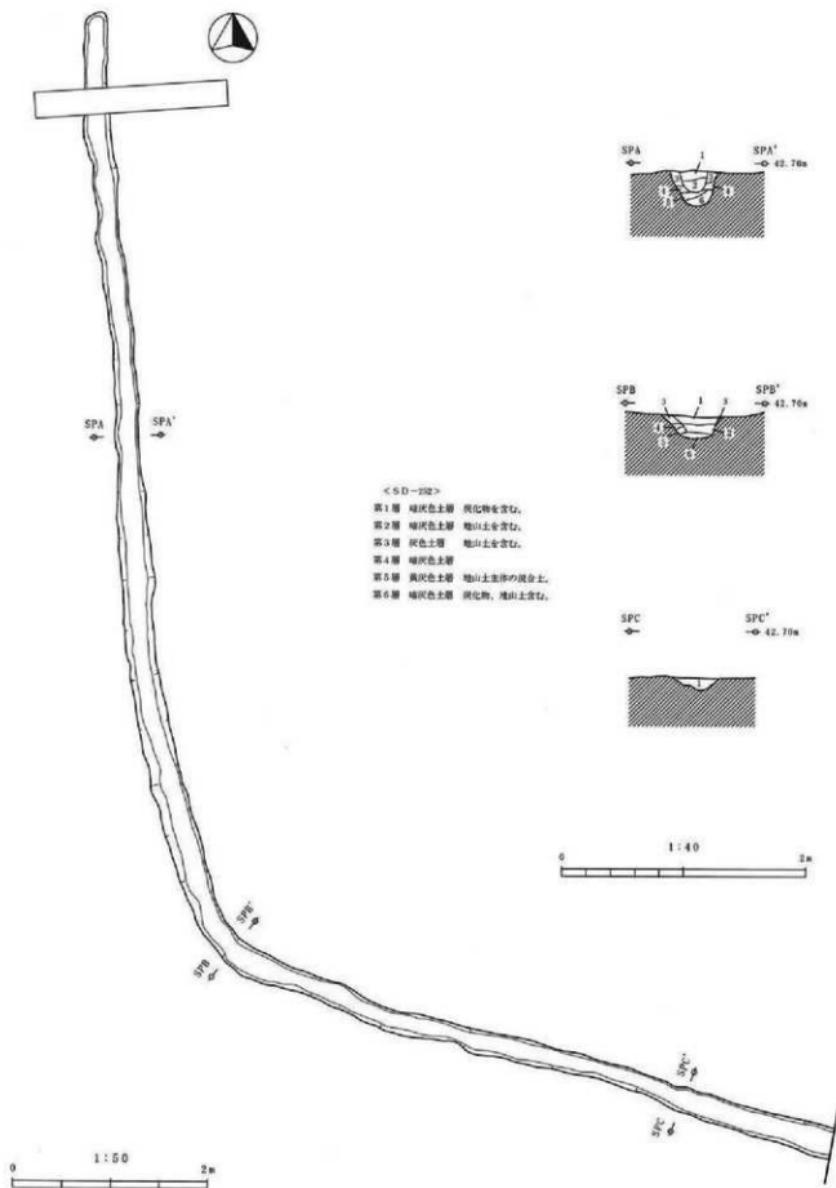
<SD-219>
第1層 黑色土層 炭化物を含む。
第2層 黄褐色土層
第3層 暗褐色土層
第4層 暗褐色土層

宮田遺跡遺構個別図10 (ピット・土坑・井戸跡・溝跡1)

<SE-86井戸跡>



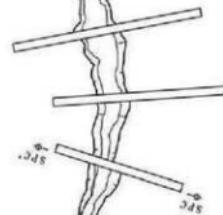
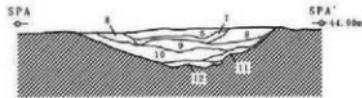
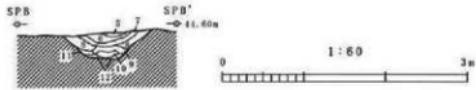
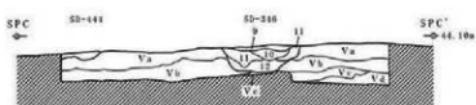
<SD-252溝跡>



宮田遺跡遺構個別図11 (溝跡2)

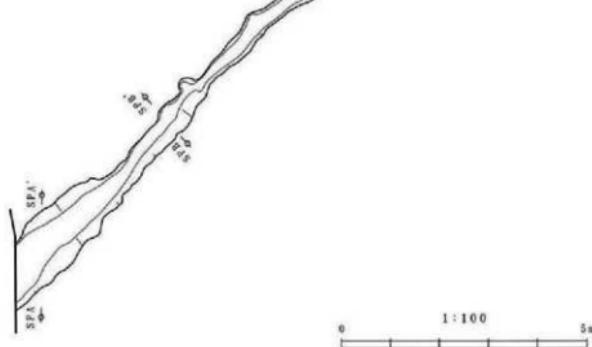
宮田遺跡 37

<SD-346溝跡>



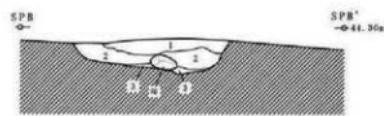
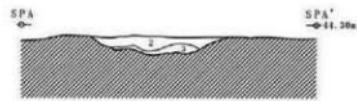
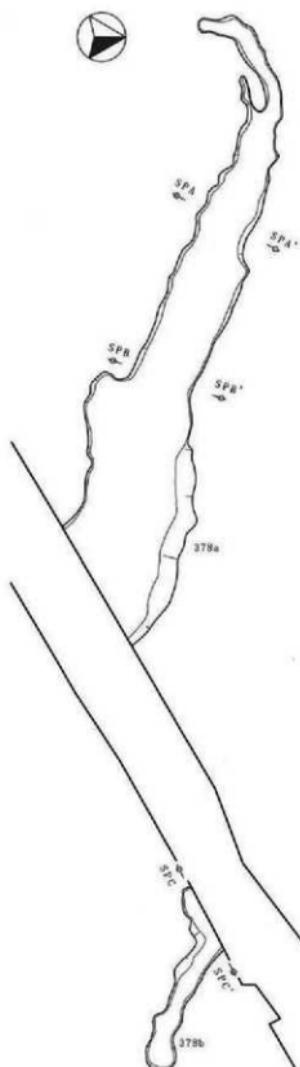
- <SD-346>
 第5番 塗状色土層 腐植物、地山土含む。
 第6番 黄灰色土層 腐植物、地山土含む。
 第7番 黒色腐物質土層 腐植物で形成される。
 第8番 黄灰色土層 ややシルト質、粘土物含む。
 第9番 塗状色土層 地化物、砂礫、地山土含む。
 第10番 黄色粘土層 地化物、地山土含む。
 第11番 黄灰色粘土層 地化物含む。
 第12番 塗状色粘土層 地化物、地山土含む。

- 第V-a層 黄灰色シルト層 道耕層22cm
 第V-b層 青灰色砂礫層
 第V-c層 青灰色の層
 第V-d層 青灰色粘土層

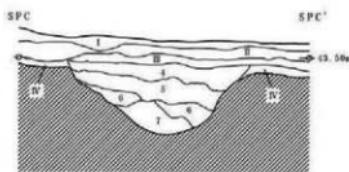


宮田遺跡遺構個別図12(溝跡3)

<SD-378a・378b溝跡>



<SD-378a>
第1層 灰黄色土層 地山土との混合土。砂礫、炭化物含む。
第2層 暗褐色土層 小礫、炭化物、地山土含む。
第3層 黄褐色土層 砂質シルト質、砂礫を含む。



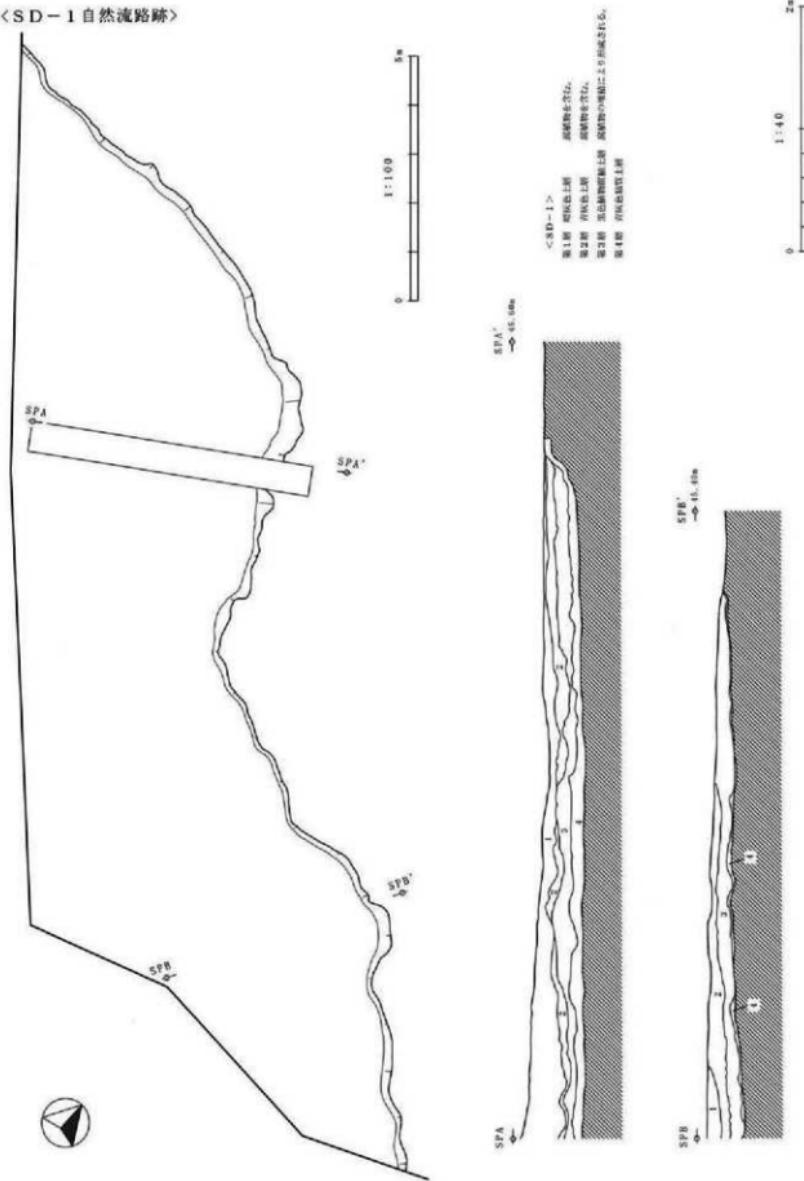
<SD-378b>
第4層 青灰色土層 砂礫、炭化物含む。
第5層 暗褐色土層 地山土との混合土。砂礫、炭化物含む。
第6層 灰褐色土層 小礫、炭化物、地山土含む。
第7層 黄褐色土層 砂質シルト質、砂礫を含む。

第1層 青灰色土層 瓦敷の鋪装面高さ7.9m。砂石を含む。
第2層 灰褐色土層 瓦敷道築造時の搅乱堆积。砂石を含む。
第3層 暗褐色土層 瓦敷道築造時の搅乱堆积。炭化物含む。
第4層 黄褐色土層 透照確認面。

宮田遺跡遺構個別図13 (溝跡4)

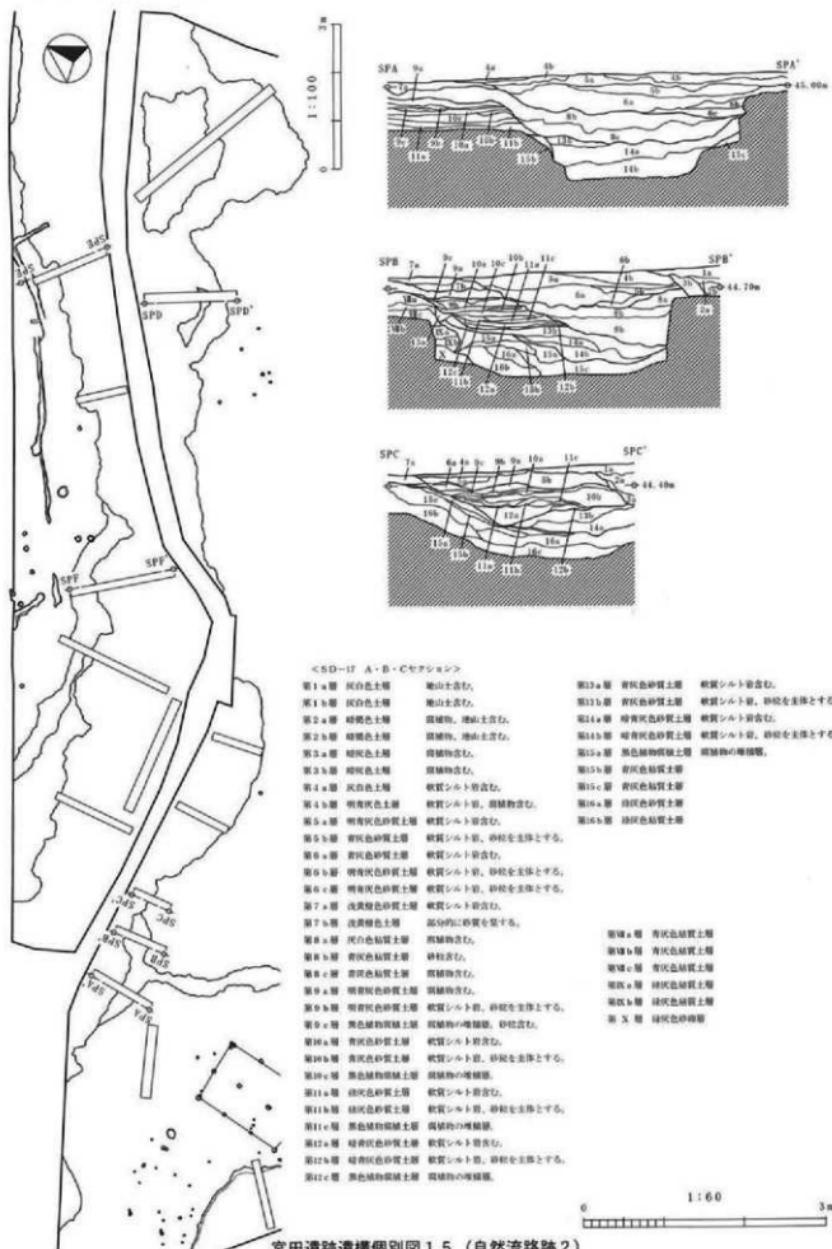
宮田遺跡 39

<SD-1 自然流路跡>



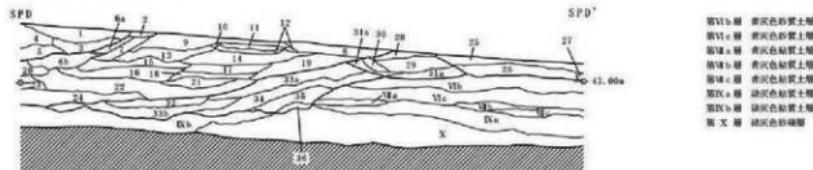
宮田遺跡遺構個別図1-4 (自然流路跡1)

<SD-17自然流路跡>



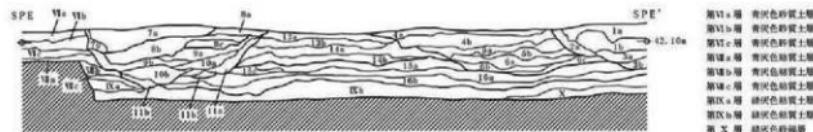
宮田遺跡 41

〈SD-17自然流路跡〉



＜S3D-iT デセクション＞

- | | | | | | | | | |
|--------|---------|------------------|--------|---------|------------------|---------|---------|-----------|
| 第 1 項 | 暗褐色砂質土質 | 軟質シルト層、砂粒を主とする。 | 第 13 項 | 暗褐色砂質土質 | 軟質シルト層を主体とする。 | 第 26 項 | 暗褐色砂質土層 | |
| 第 2 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 14 項 | 暗褐色砂質土層 | 砂粒を主体とする。 | 第 27 項 | 青褐色砂質土層 | |
| 第 3 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 15 項 | 暗褐色砂質土層 | 砂粒を主体とする。 | 第 28 項 | 青褐色砂質土層 | |
| 第 4 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 16 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 29 項 | 青褐色砂質土層 | 相間シルト層含む。 |
| 第 5 項 | 青灰色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 17 項 | 暗褐色シルト層 | 砂礫地帶含む。 | 第 30 項 | 暗褐色砂質土層 | |
| 第 6 項 | 暗褐色砂質土層 | 暗褐色砂質土層 | 第 18 項 | 暗褐色砂質土層 | 砂礫地帶含む。 | 第 31a 項 | 暗褐色砂質土層 | |
| 第 7 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 19 項 | 暗褐色砂質土層 | 暗褐色砂質土層 | 第 31b 項 | 暗褐色砂質土層 | |
| 第 8 項 | 暗褐色砂質土層 | 暗褐色砂質土層 | 第 20 項 | 暗褐色シルト層 | 砂礫地帶含む。 | 第 32 項 | 暗褐色砂質土層 | 相間シルト層含む。 |
| 第 9 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 21 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層含む。 | 第 33a 項 | 青褐色砂質土層 | |
| 第 10 項 | 暗褐色砂質土層 | 暗褐色砂質土層 | 第 22 項 | 暗褐色砂質土層 | 暗褐色砂質土層 | 第 33b 項 | 暗褐色砂質土層 | 相間シルト層含む。 |
| 第 11 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 23 項 | 暗褐色砂質土層 | 砂礫地帶、軟質シルト層含む。 | 第 34 項 | 暗褐色砂質土層 | 相間シルト層含む。 |
| 第 12 項 | 暗褐色砂質土層 | 軟質シルト層、砂粒を主体とする。 | 第 24 項 | 暗褐色砂質土層 | 砂礫地帶、軟質シルト層含む。 | 第 35 項 | 暗褐色砂質土層 | |
| | | | 第 25 項 | 暗褐色砂質土層 | | 第 36 項 | 暗褐色砂質土層 | |



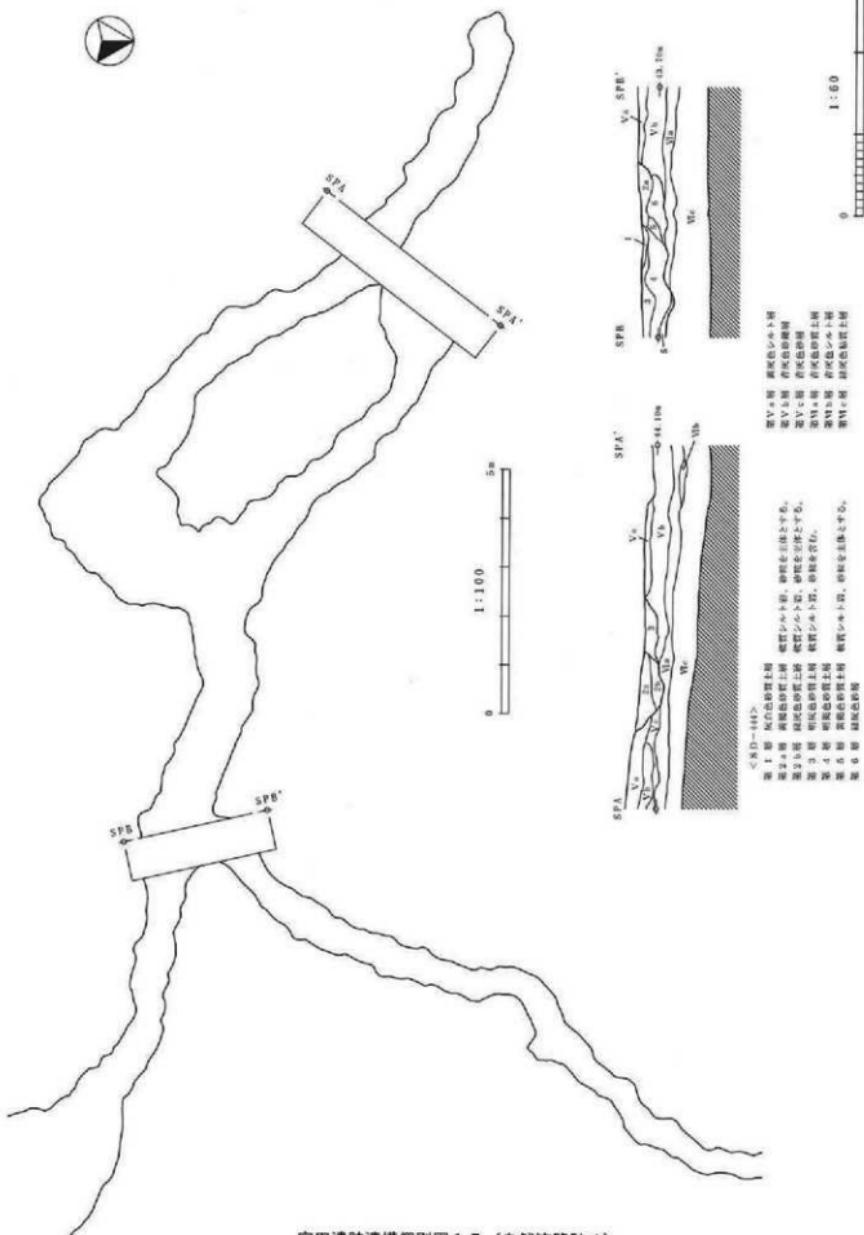
＜SD-17 エセクション＞



650-17

- | | | | |
|-----|--------|------|--------|
| 第1番 | 暗赤色の葉裏 | 第7番 | 暗赤色の葉裏 |
| 第2番 | 暗赤色の葉裏 | 第8番 | 暗赤色の葉裏 |
| 第3番 | 暗赤色の葉裏 | 第9番 | 暗赤色の葉裏 |
| 第4番 | 暗赤色の葉裏 | 第10番 | 暗赤色の葉裏 |
| 第5番 | 暗赤色の葉裏 | 第11番 | 暗赤色の葉裏 |
| 第6番 | 暗赤色の葉裏 | 第12番 | 暗赤色の葉裏 |

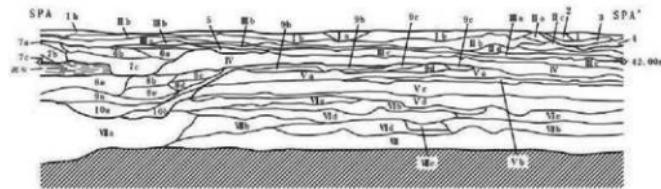
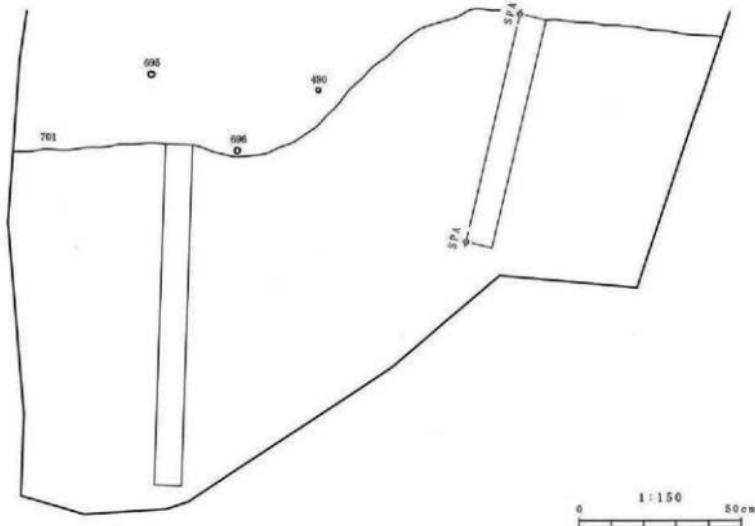
〈SD-444自然流路跡〉



宮田遺跡遺構個別図 17 (自然流路跡 4)

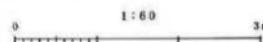
宮田遺跡 43

<SD-701自然流路跡>



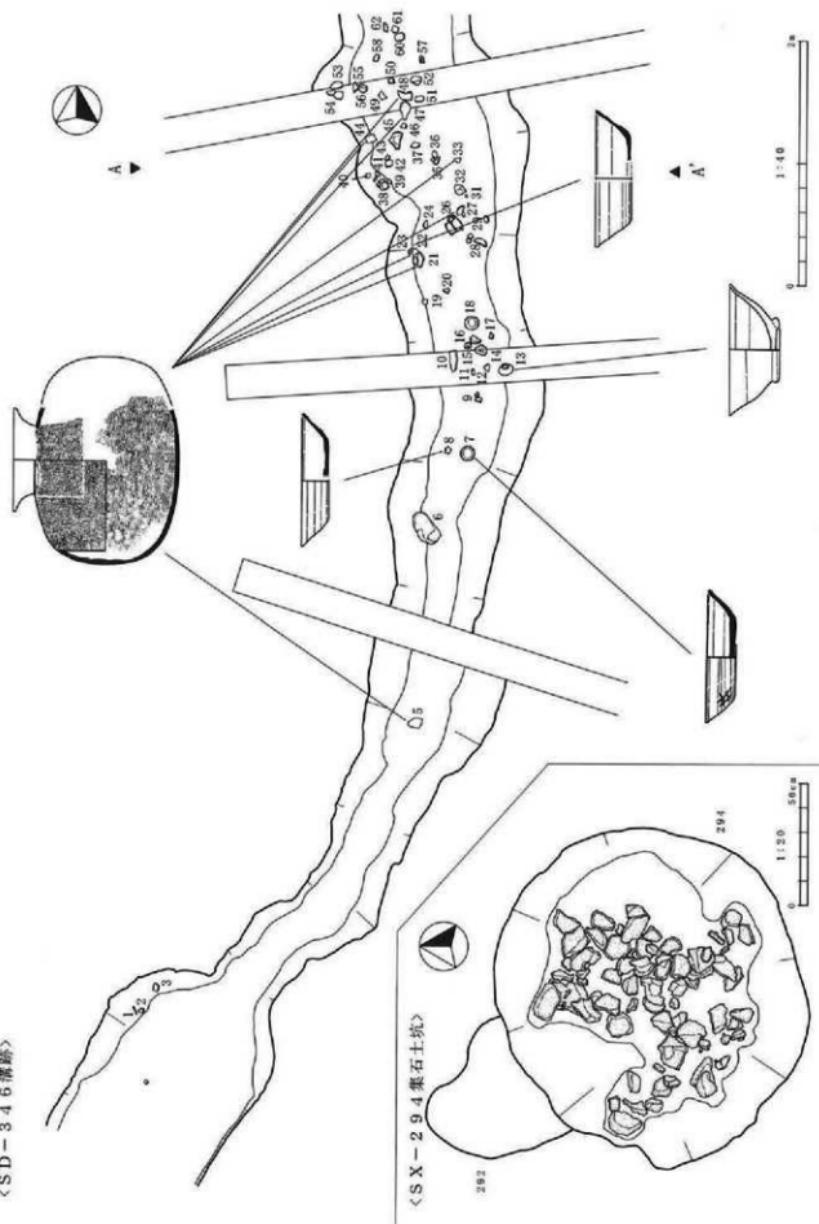
- <SD-701>
- | | |
|----------------|------------------|
| 第 1 層 淡灰色砂質土層 | 軟質シルト層を含む。 |
| 第 2 層 増灰色砂質土層 | 軟質シルト層を含む。 |
| 第 3 層 増青灰砂質土層 | 泥炭物を含む。 |
| 4 種 暗灰色砂質土層 | 軟質シルト層。砂粒を主張とする。 |
| 5 種 黑色砂質粘土層 | 泥炭物の塊状層。 |
| 6 種 暗灰褐色砂質土層 | 泥炭物、軟質シルト層含む。 |
| 7 種 深灰褐色砂質土層 | 泥炭物含む。 |
| 第 8 層 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 9 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 10 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 11 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 12 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 13 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 14 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 15 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 16 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 17 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 18 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 19 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 20 层 深青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |

- | | |
|----------------|-------------------|
| 第 1 層 増褐色砂質土層 | 暗褐色シルト層、砂粒を主張とする。 |
| 第 2 層 增灰色砂質土層 | 軟質シルト層含む。 |
| 第 3 层 增灰褐色砂質土層 | 軟質シルト層含む。 |
| 第 4 层 增灰褐色砂質土層 | 有灰褐色砂質土層。 |
| 第 5 层 增青灰褐色土層 | 暗褐色シルト層含む。 |
| 第 6 层 增青灰褐色土層 | 暗褐色砂質土層。 |
| 第 7 层 增青灰褐色土層 | 黑色植物残渣層。 |
| 第 8 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 9 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 10 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 11 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 12 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 13 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 14 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 15 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 16 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 17 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 18 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 19 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |
| 第 20 层 增青灰褐色土層 | 青灰褐色砂質土層。 |



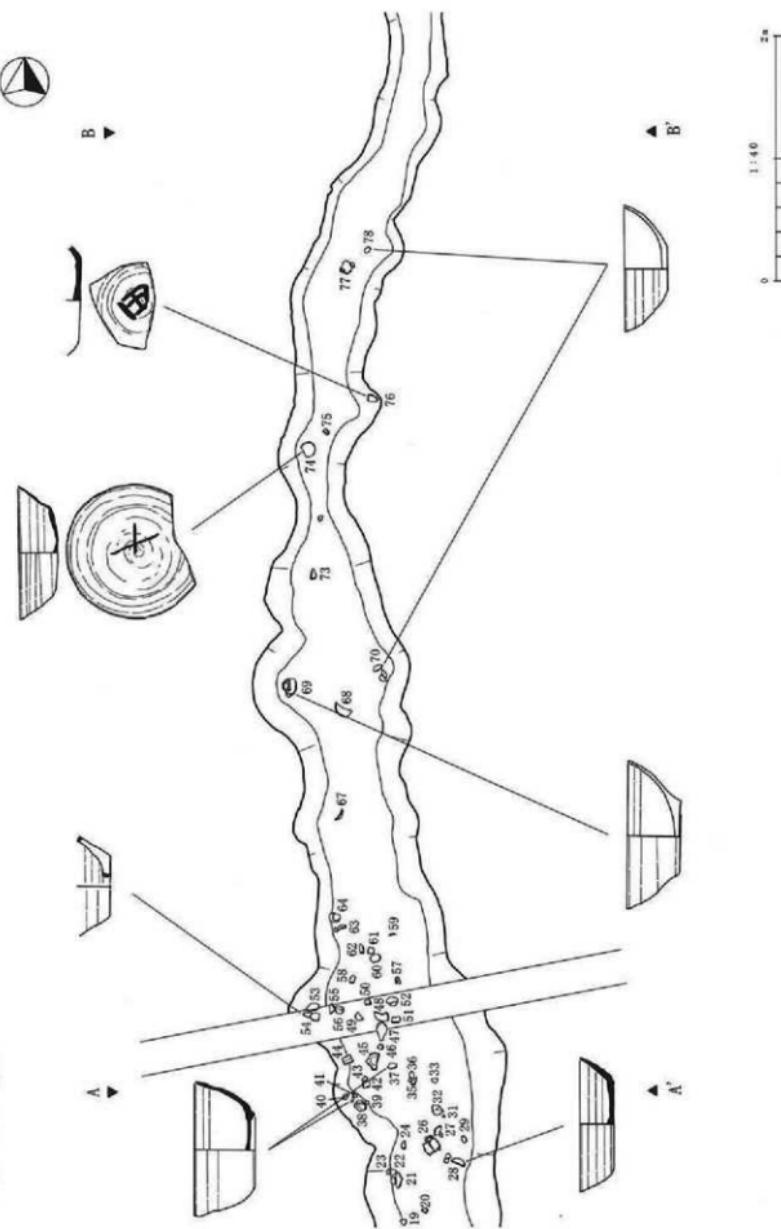
宮田遺跡構造個別図 18 (自然流路跡 5)

宮田遺跡 44



宮田遺跡遺物出土状況1 (集石土坑・溝跡1)

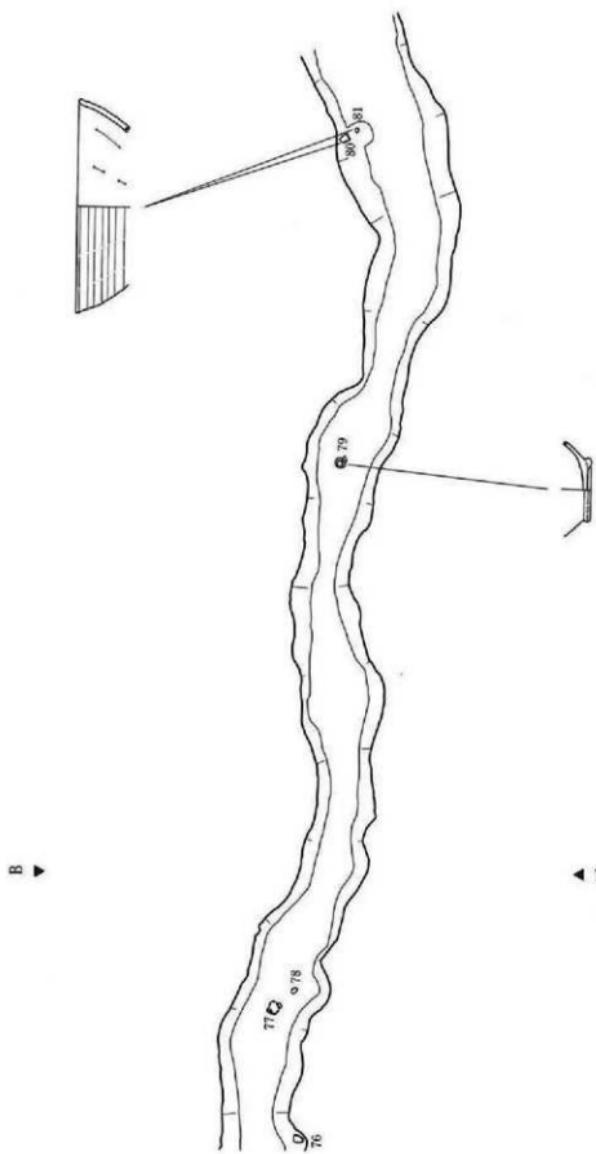
宮田遺跡 45



宮田遺跡遺物出土状況2（溝跡2）



1:40
2m

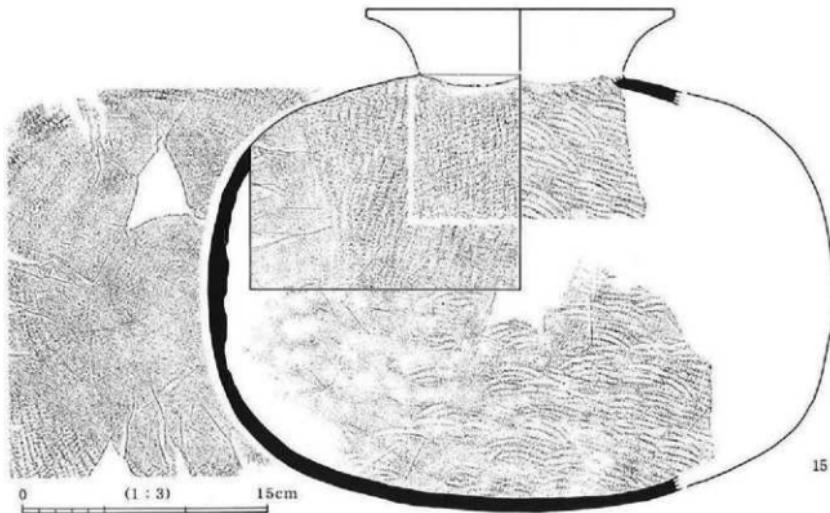
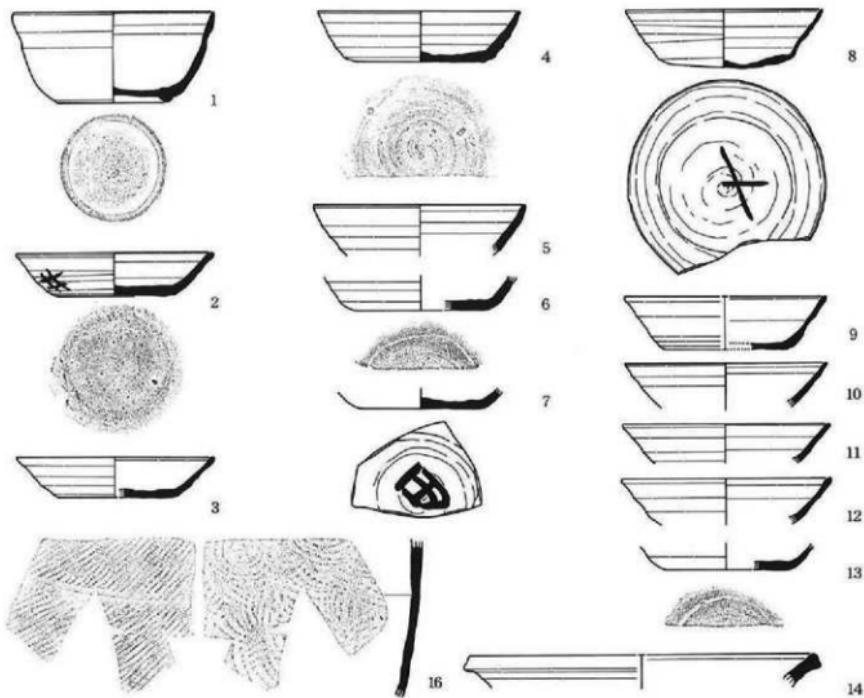


<SD-3 4 6溝跡>

宮田遺跡遺物出土状況3(溝跡3)

宮田遺跡 47

図版 105



宮田遺跡出土遺物 1 (SD—346 1)



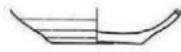
17



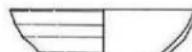
19



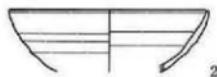
20



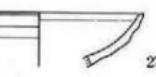
18

21
21

22



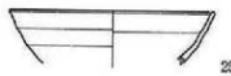
24



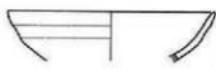
27



30



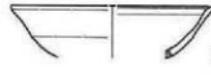
25



28



31



26



29



37



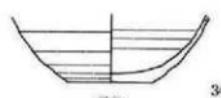
32



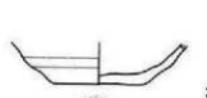
33



38



34

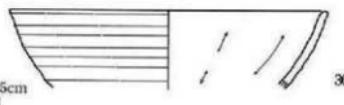


35



39

0 (1 : 3) 15cm



1

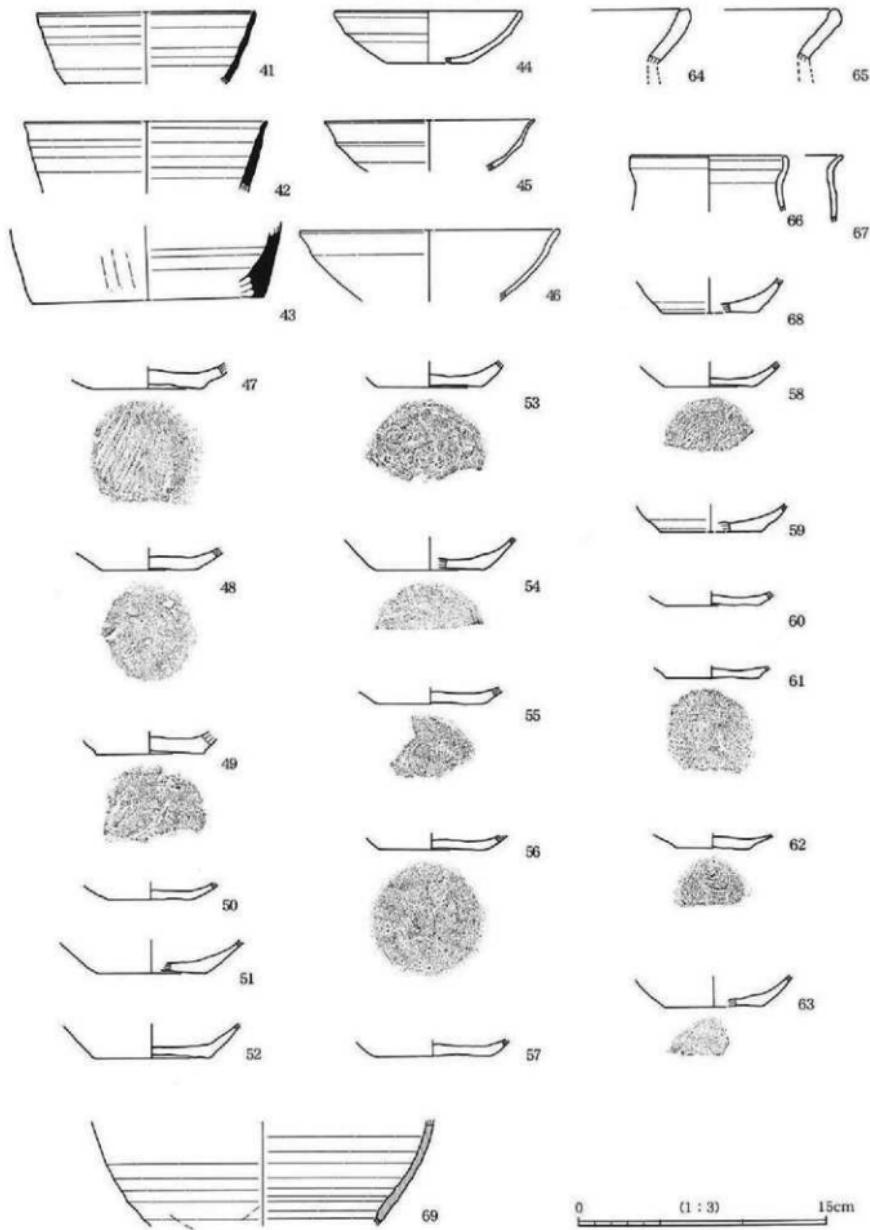
11

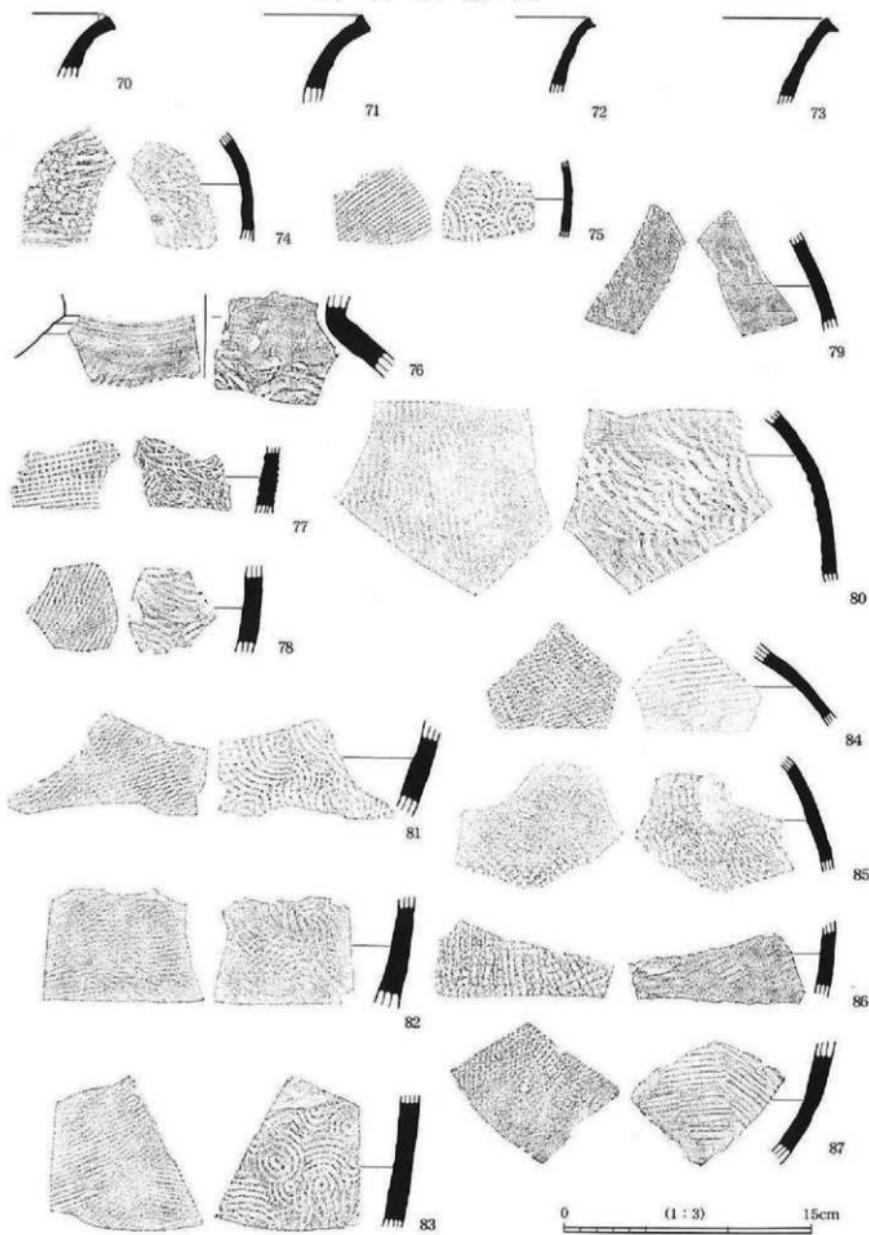
36



40

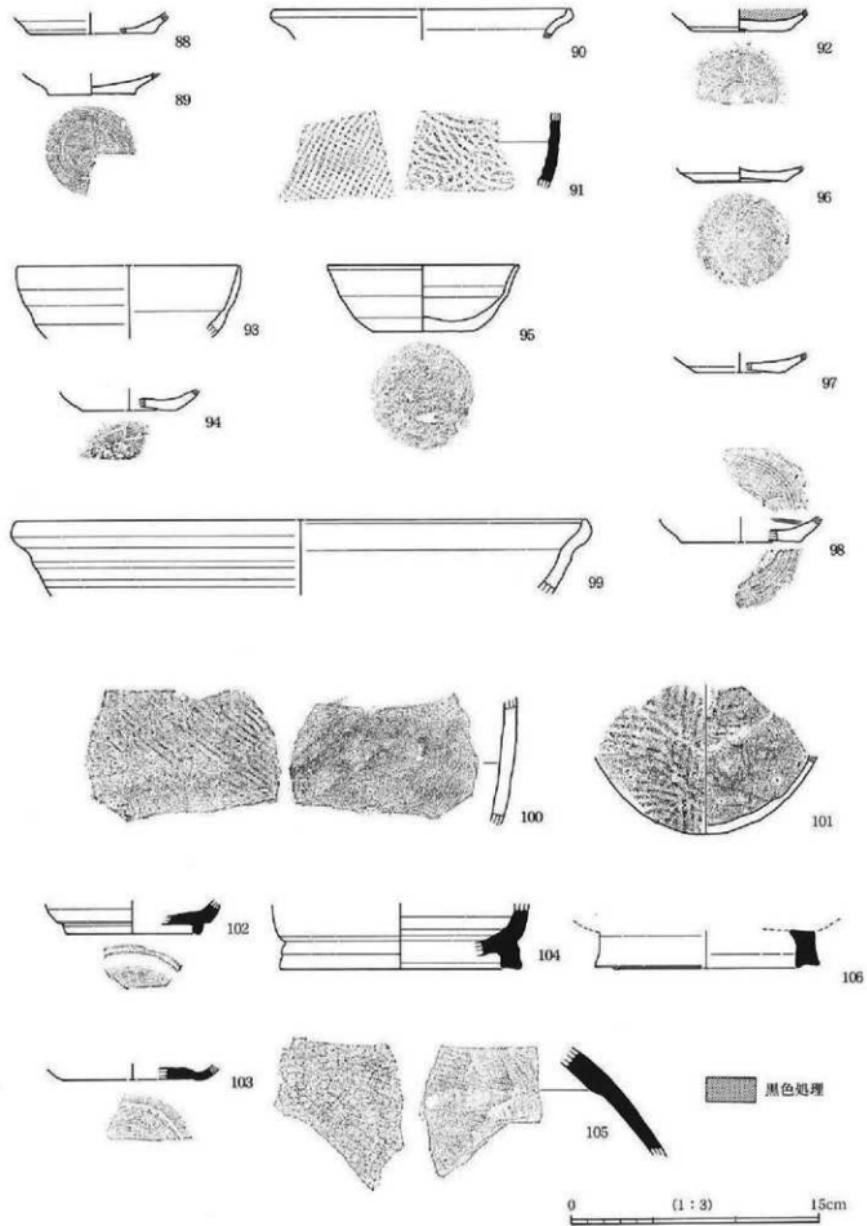
宮田遺跡 49



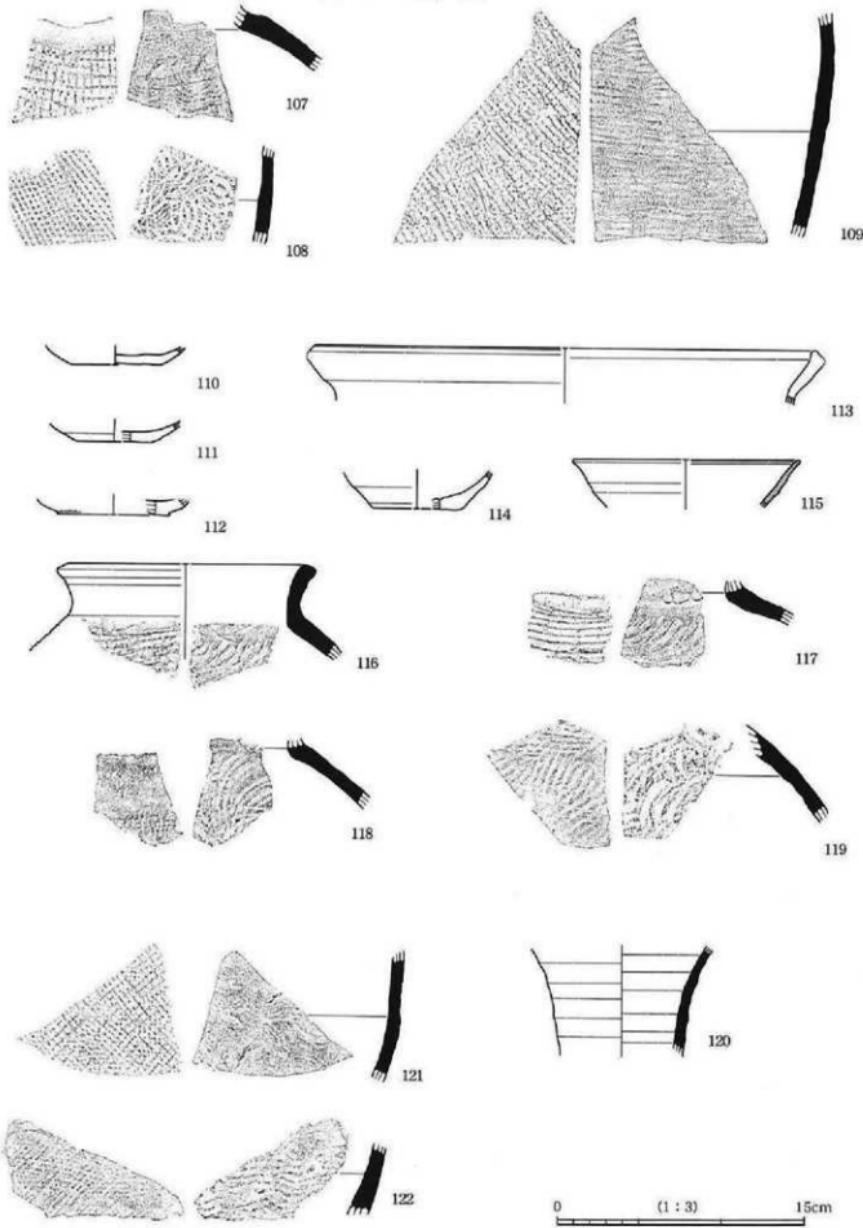


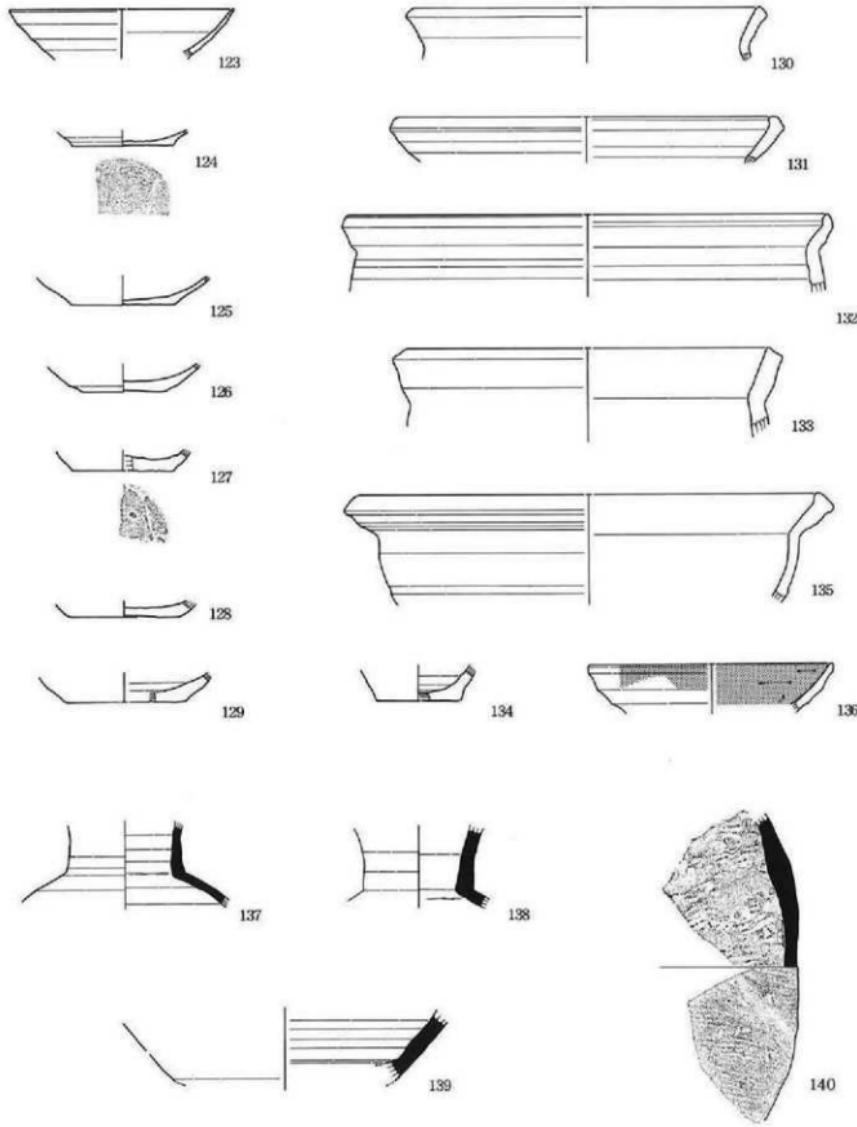
宮田遺跡 51

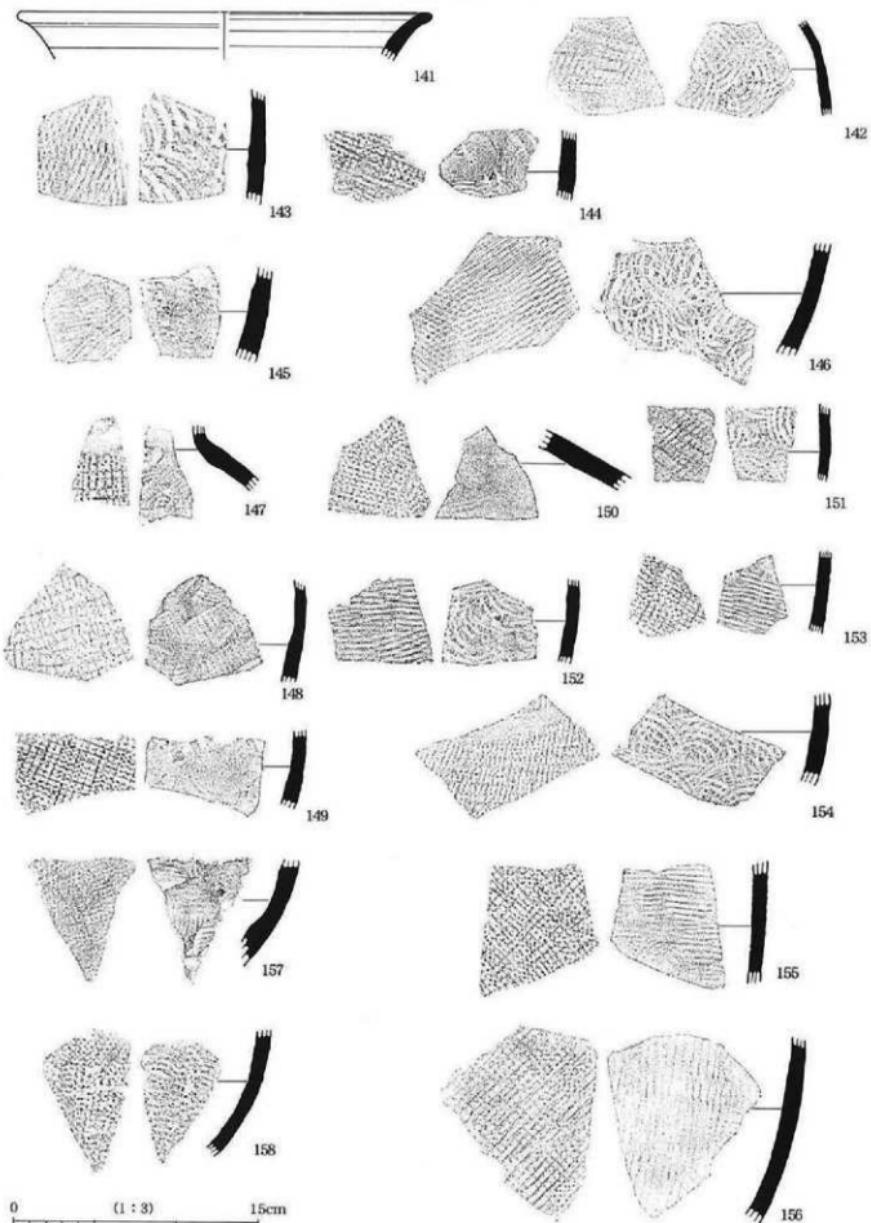
図版 109

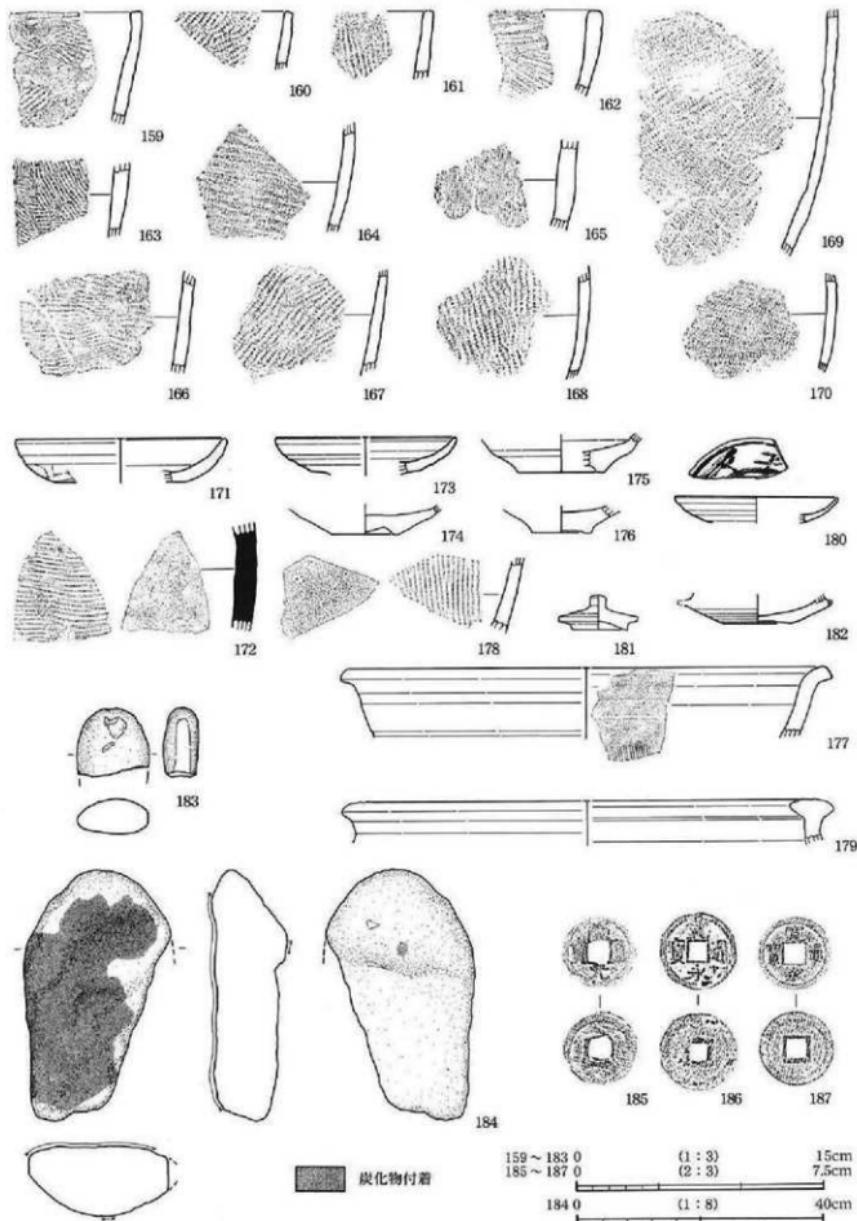


宮田遺跡出土遺物 5 (その他の遺構 1)



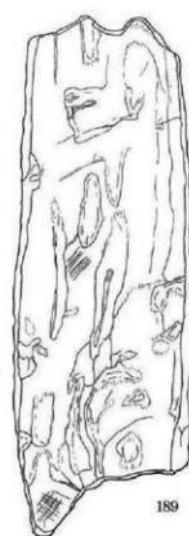




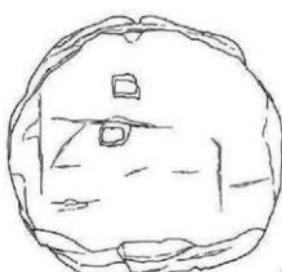
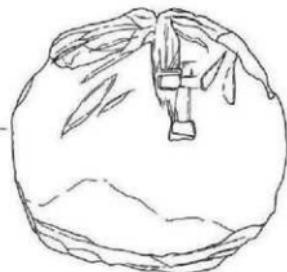




188



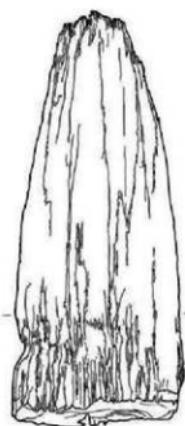
189



190



0 (1 : 4) 20cm



191

192



193

194

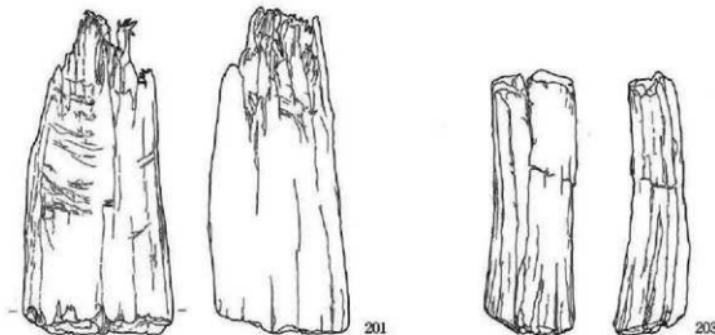
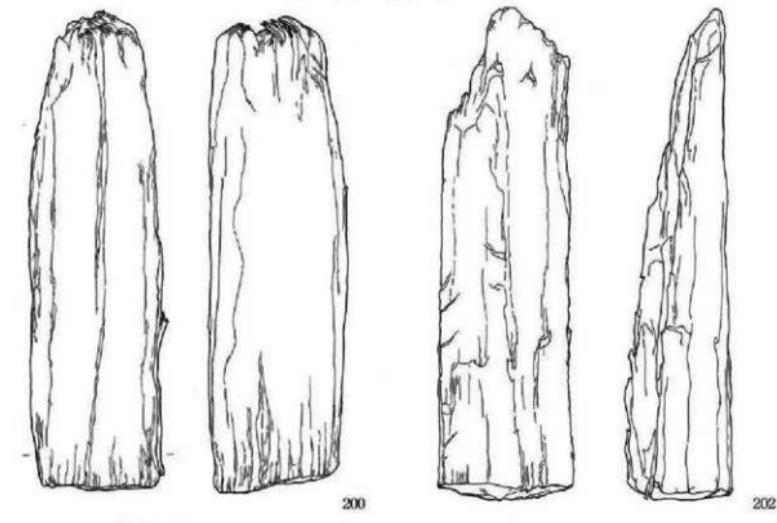


0 (1 : 6) 30cm



0 (1 : 8) 30cm
0 (1 : 6) 30cm

宮田遺跡 59



0 (1 : 6) 30cm

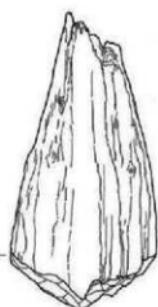


204

205



206



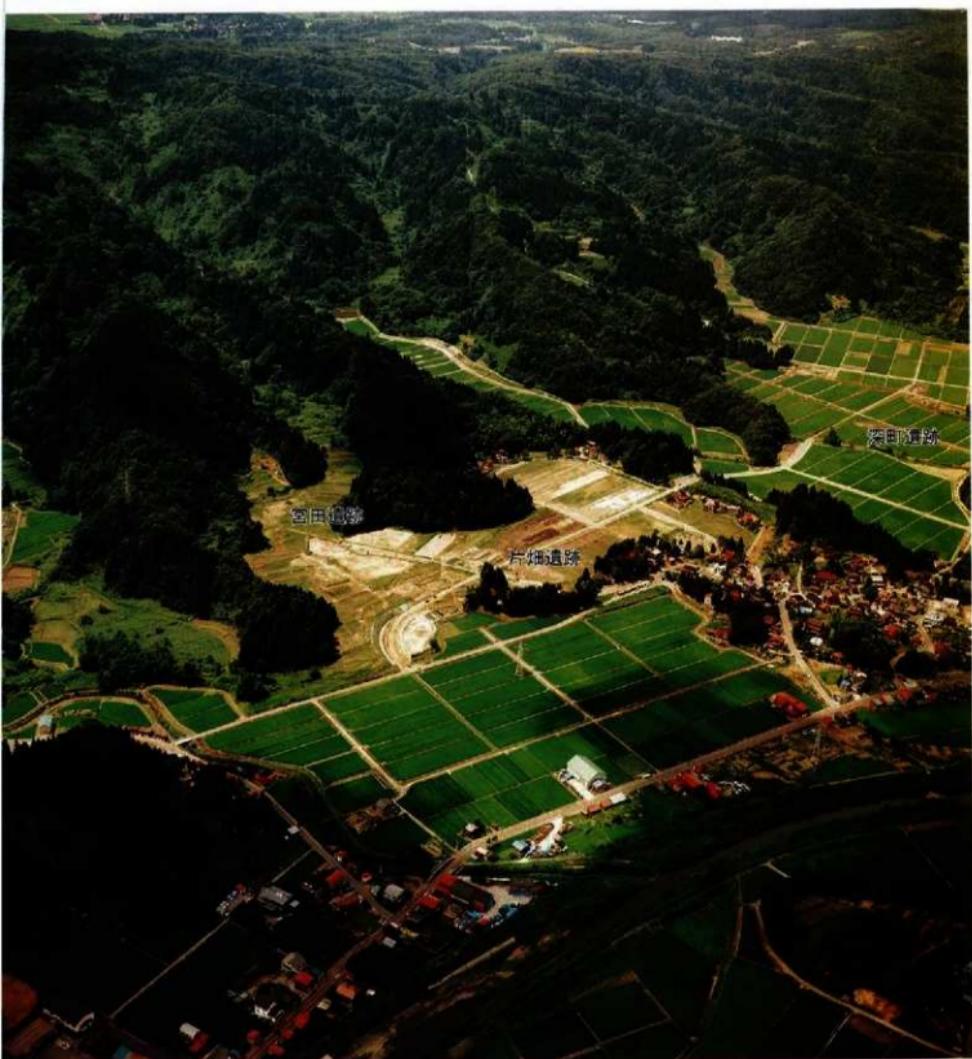
207



208



0 (1 : 6) 30cm



宮之下遺跡群全景（1）



宮之下山地群全景 (2)

谷田温泉



宮之下・上田地区全景 (3)



深田遺跡

片山遺跡

宮田遺跡

深町遺跡 1



深町遺跡全景

深町遺跡 2



a 深町遺跡近景

(南西から)



b I地区全景

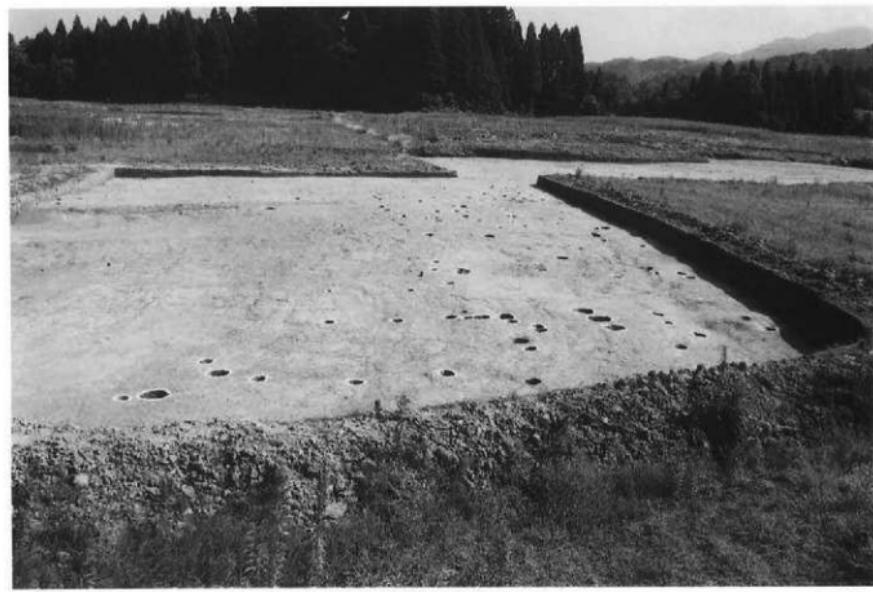
(北から)

深町遺跡3



a Ⅱ地区全景

(西から)



b Ⅲ地区全景

(北から)



a 作業風景

(北東から)



b 作業風景

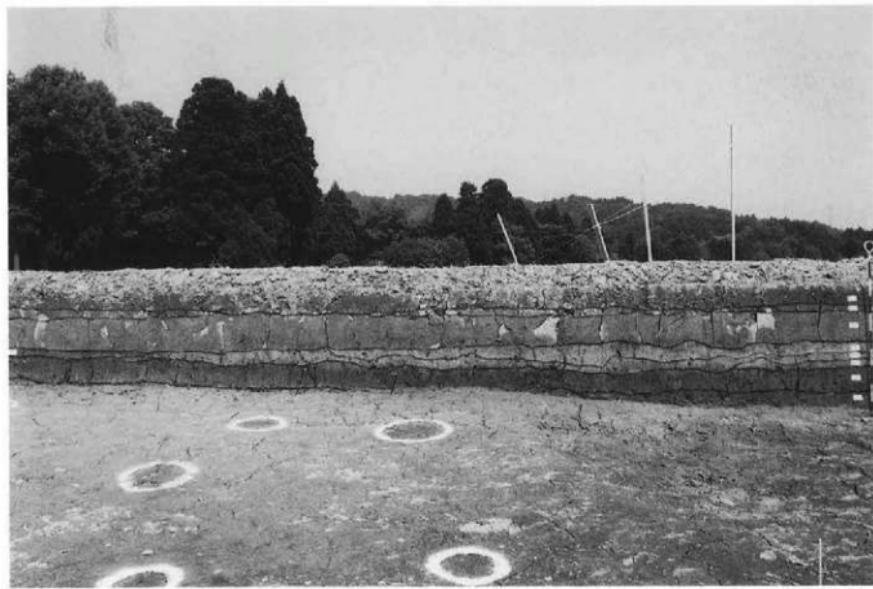
(東から)

深町遺跡 5



a II地区作業風景

(西から)



b I地区東壁層序

(西から)



a II地区西壁層序

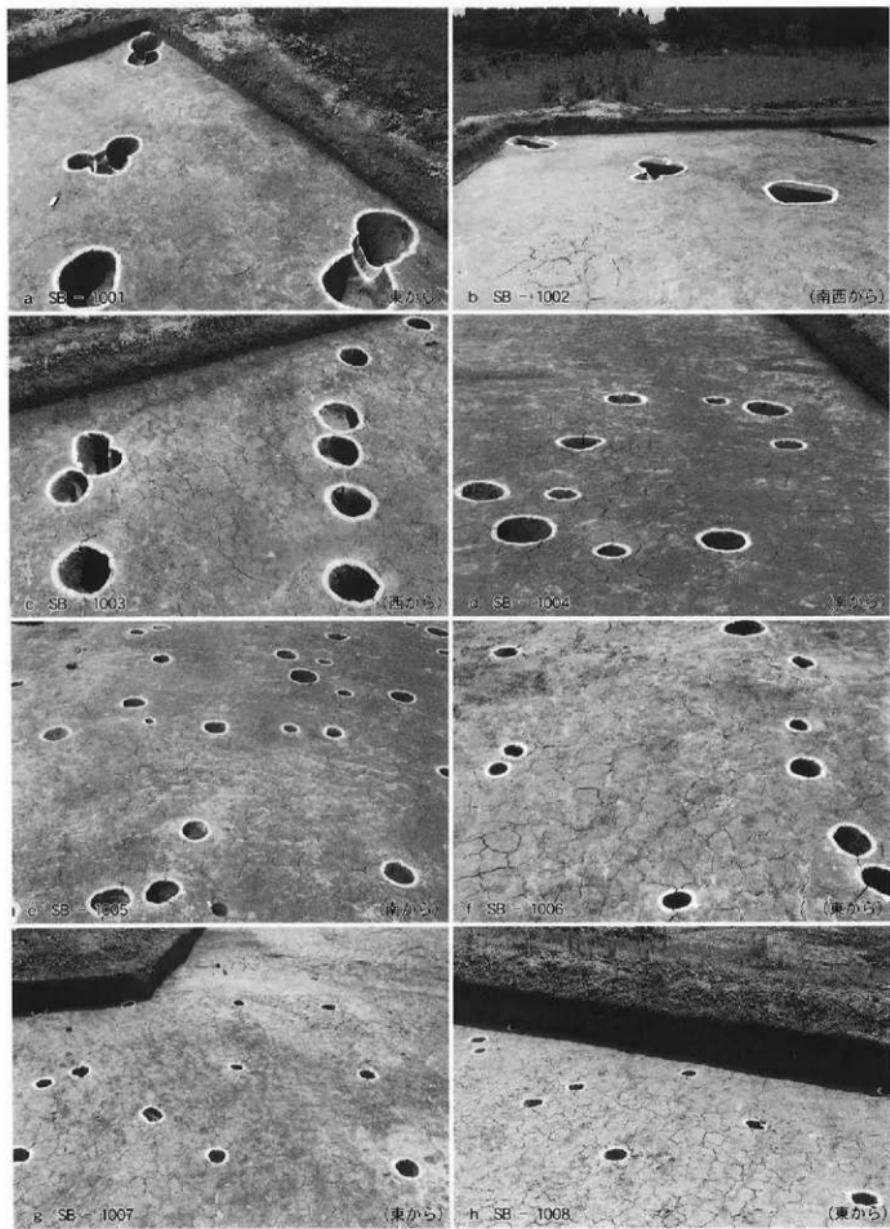
(南東から)

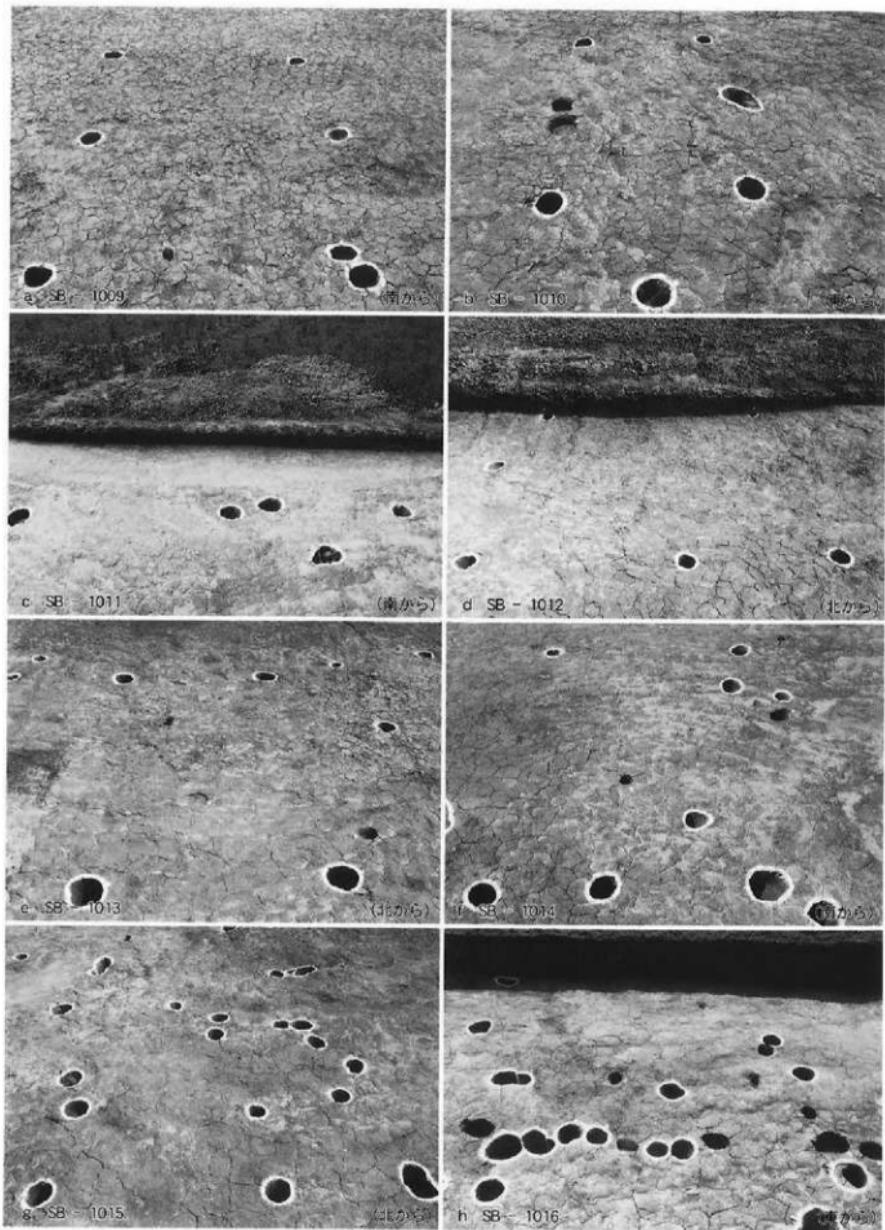


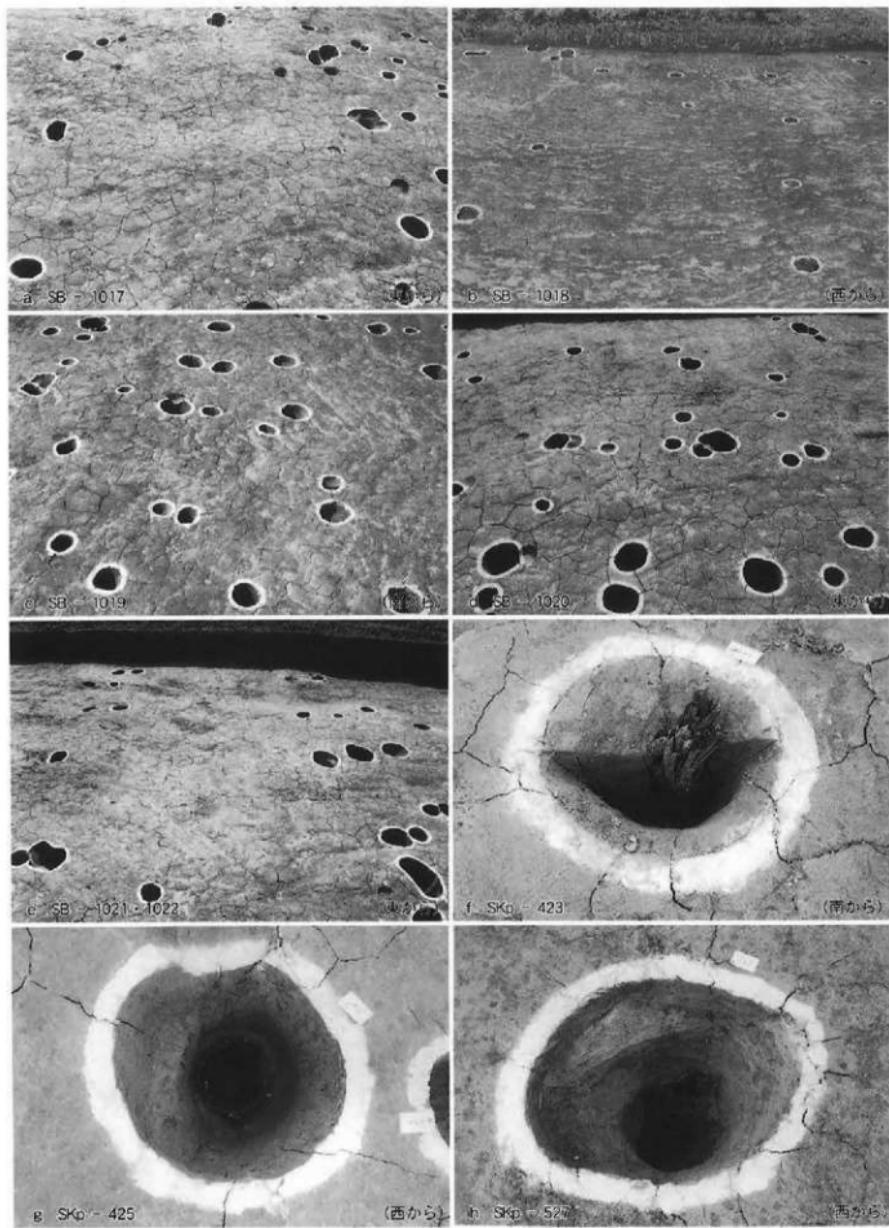
b III地区東壁層序

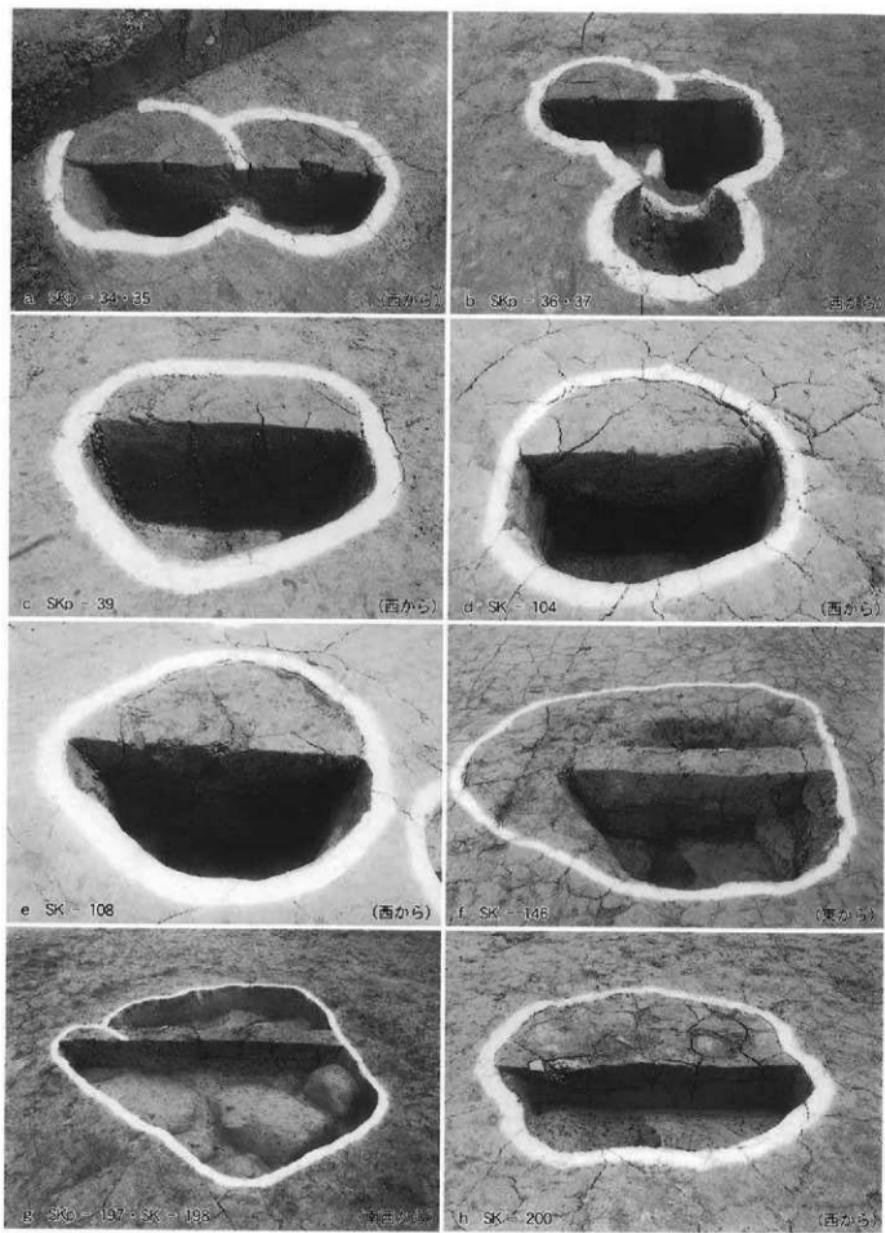
(北西から)

深町遺跡 7





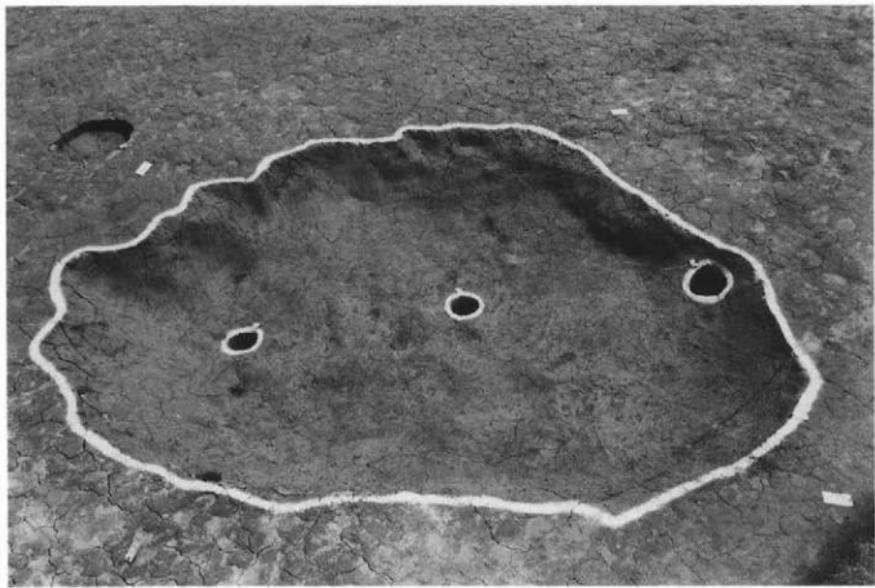






a SX - 33 遺物出土状況

(北から)

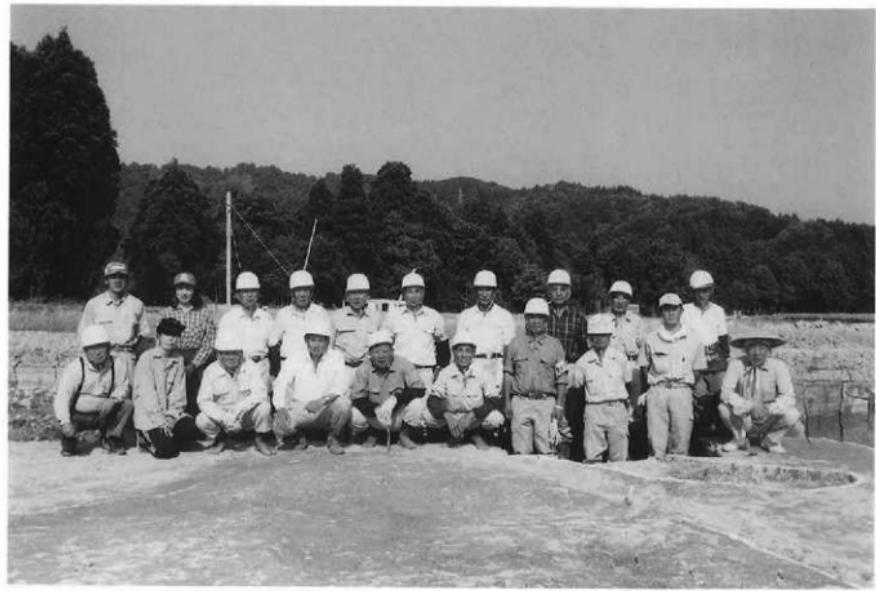


b SX - 33 完振

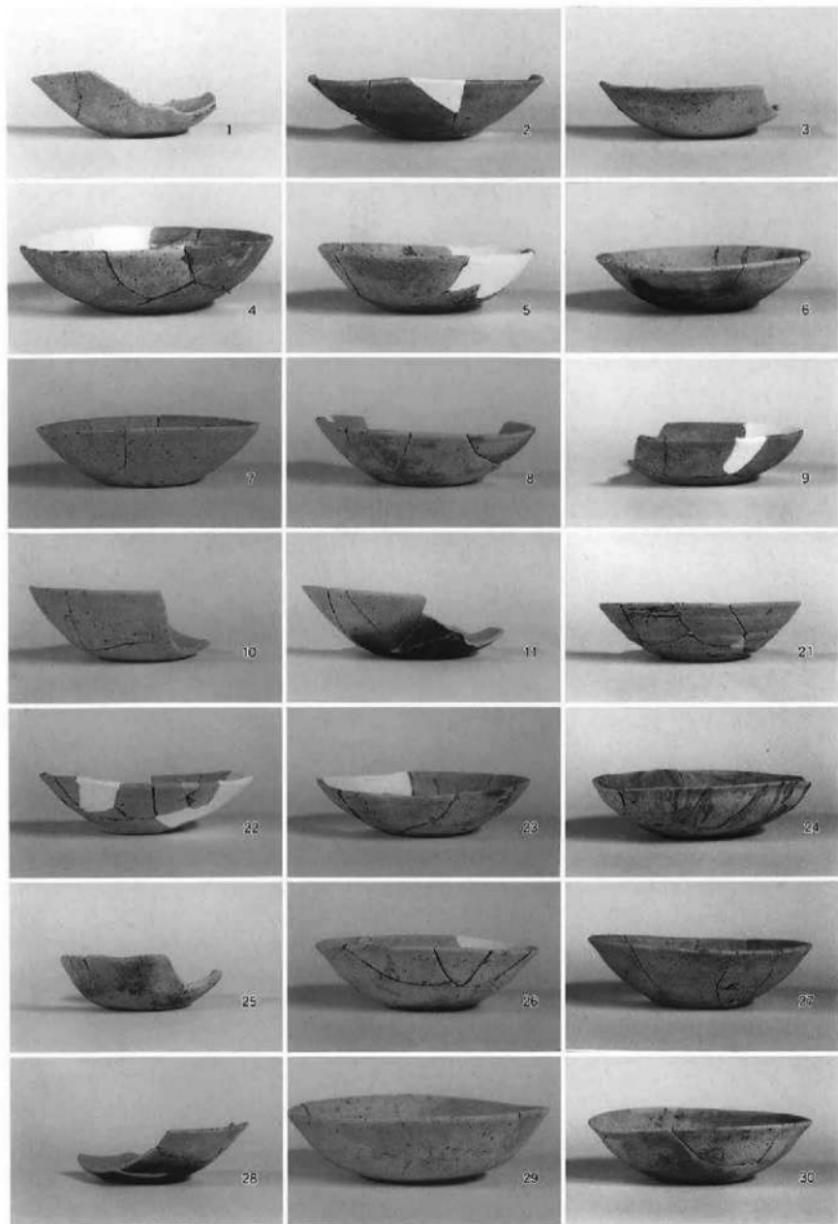
(北から)



a 現地説明会

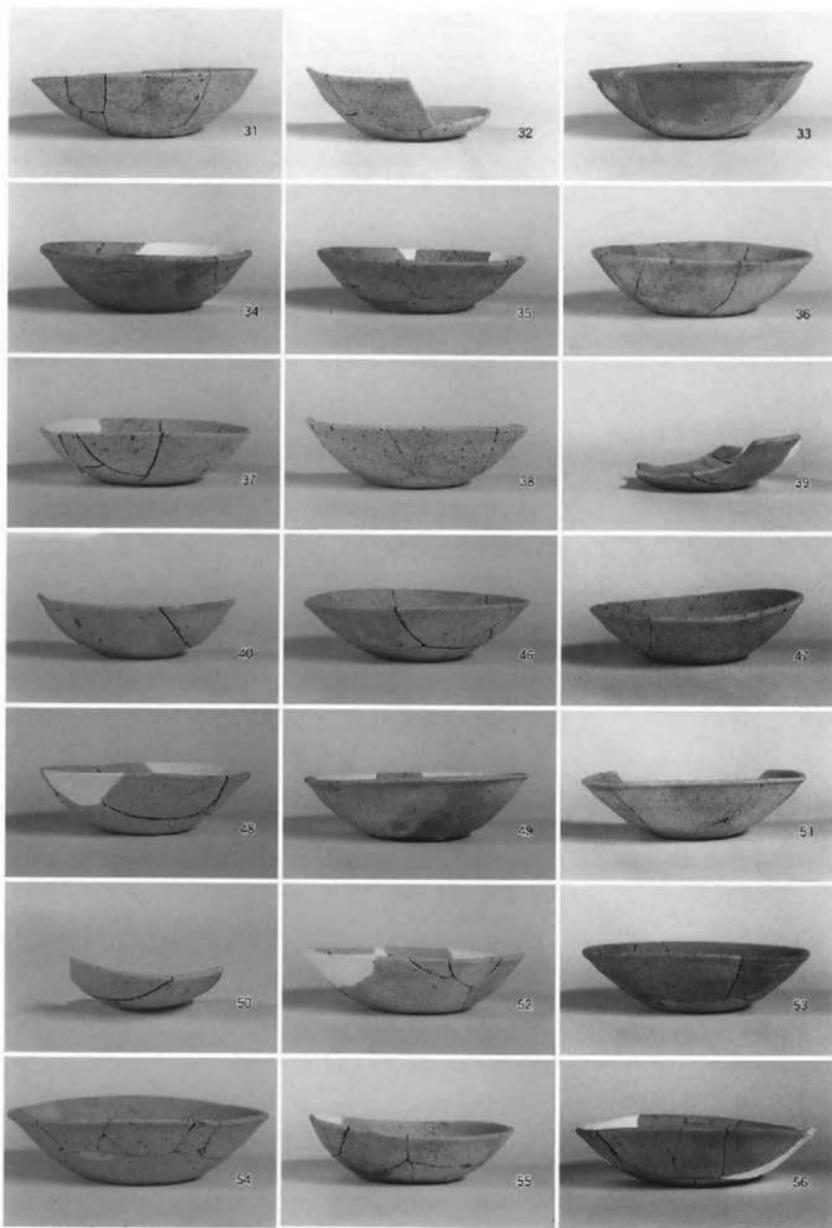


b 発掘調査スタッフ



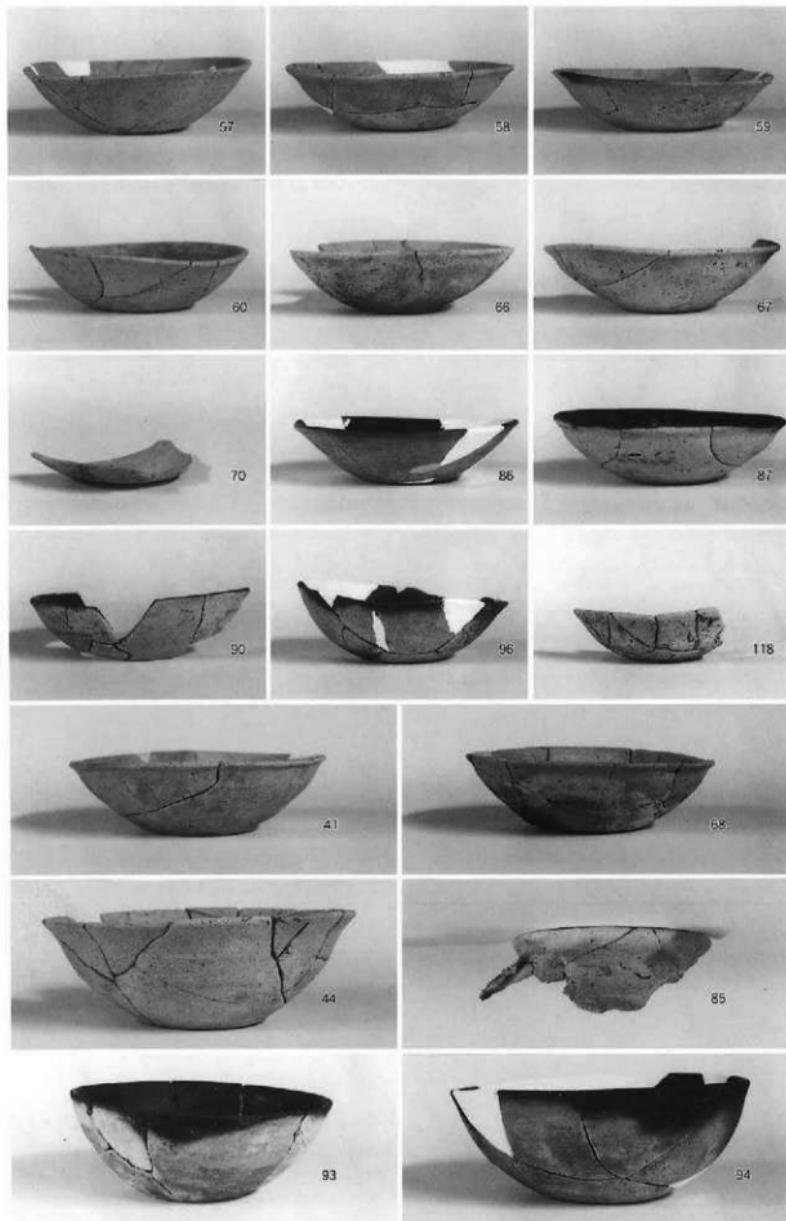
出土遺物 1 (SX - 33 - 1)

(約 1:3)



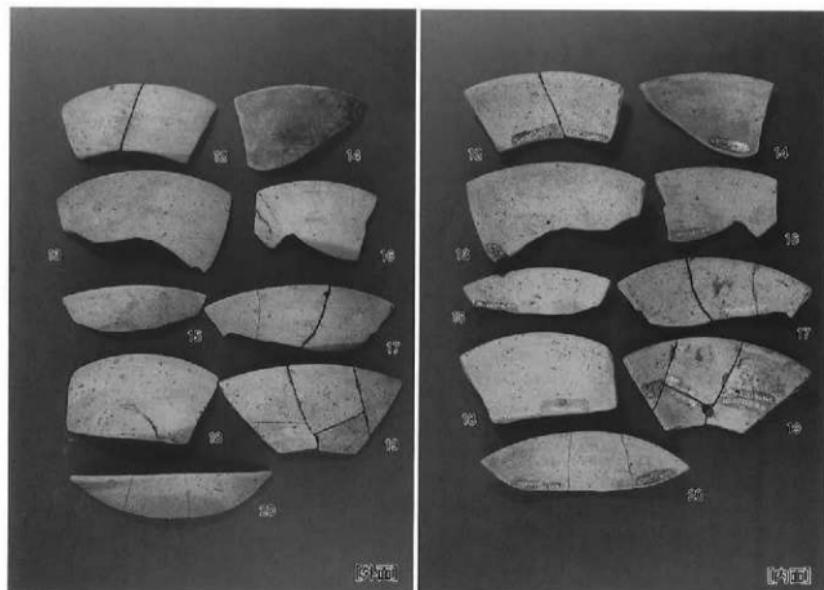
出土遺物 2 (SX - 33 - 2)

(約 1:3)



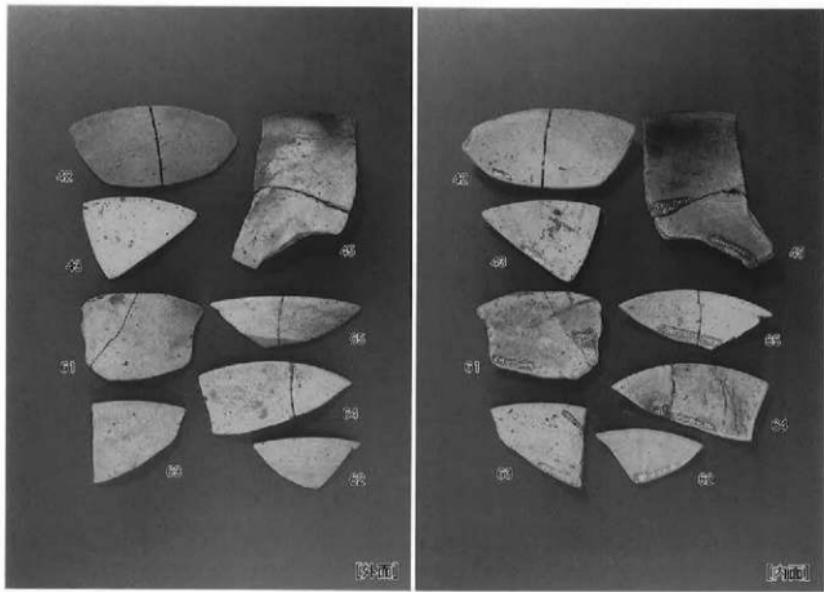
出土遺物 3 (SX - 33 3ほか)

(約 1 : 3)



a 出土遺物 4 (SX - 33 4)

(約 1:3)



b 出土遺物 5 (SX - 33 5)

(約 1:3)



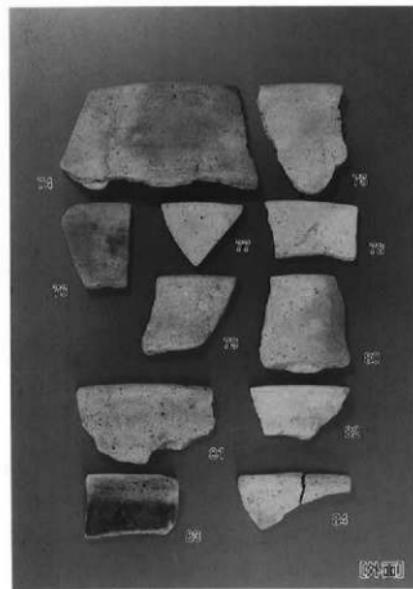
[外観]



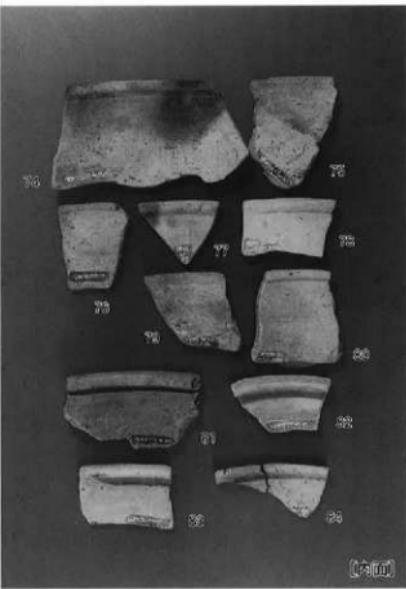
[内観]

a 出土遺物 6 (SX - 33 - 6)

(約 1 : 3)

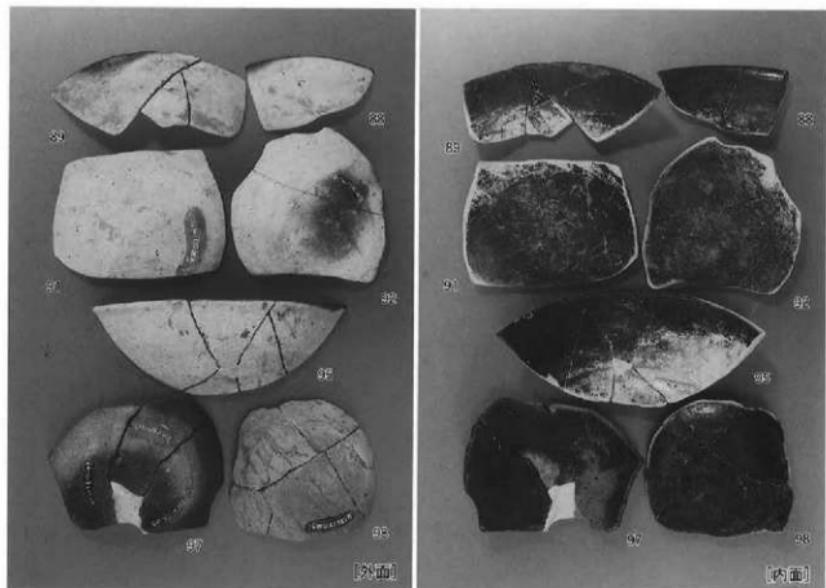


[外観]



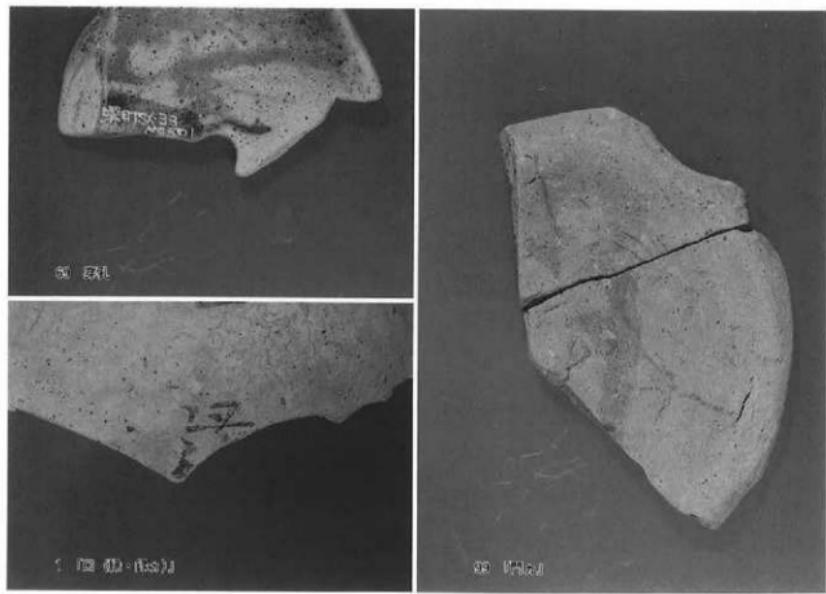
b 出土遺物 7 (SX - 33 - 7)

(約 1 : 3)



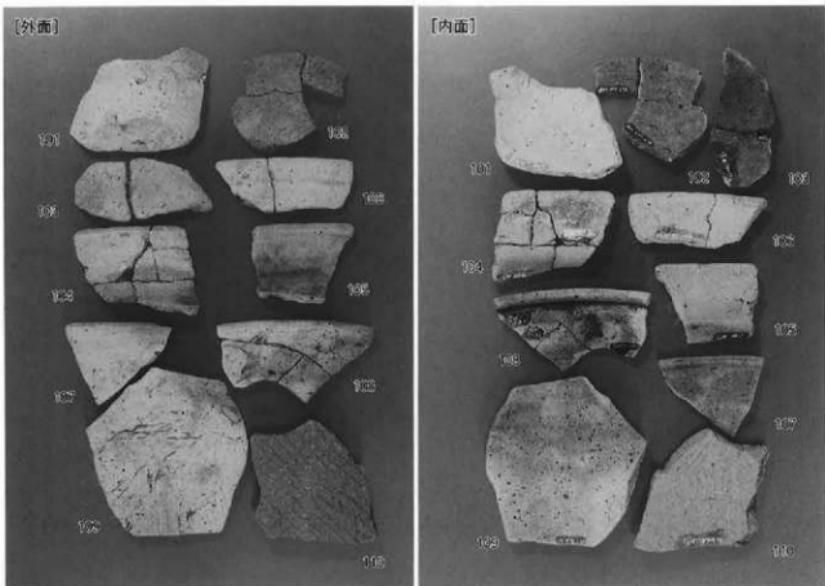
a 出土遺物 8 (SX - 33 8)

(約 1:3)



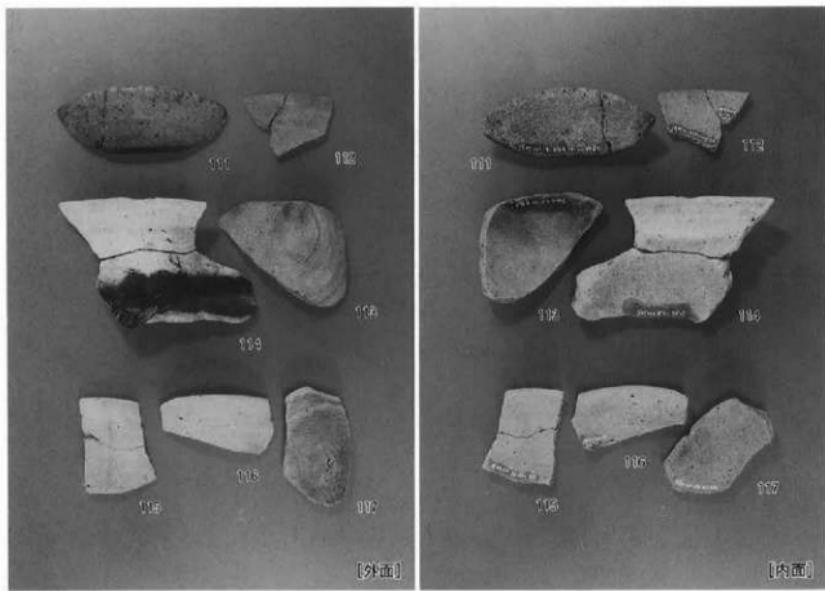
b 出土遺物 9 (SX - 33 9)

(約 1:3)



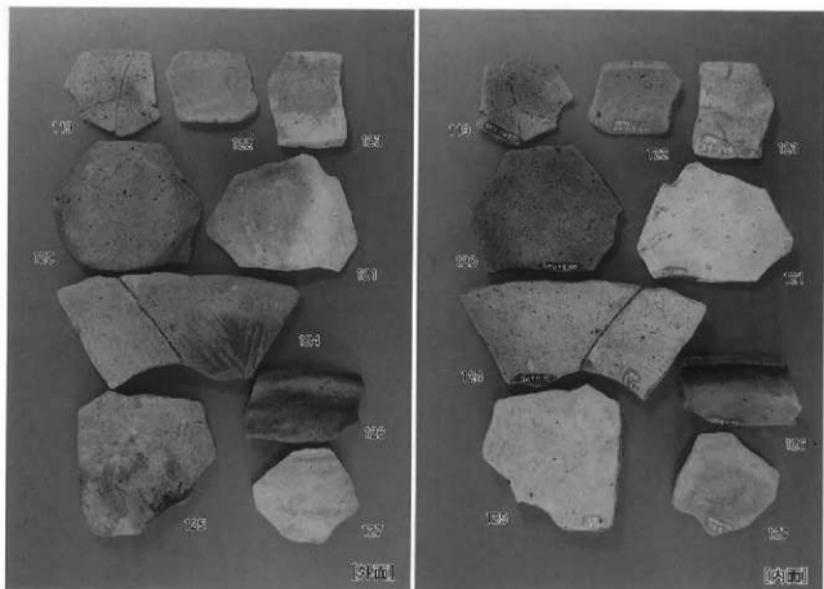
a 出土造物 10 (その他の造構)

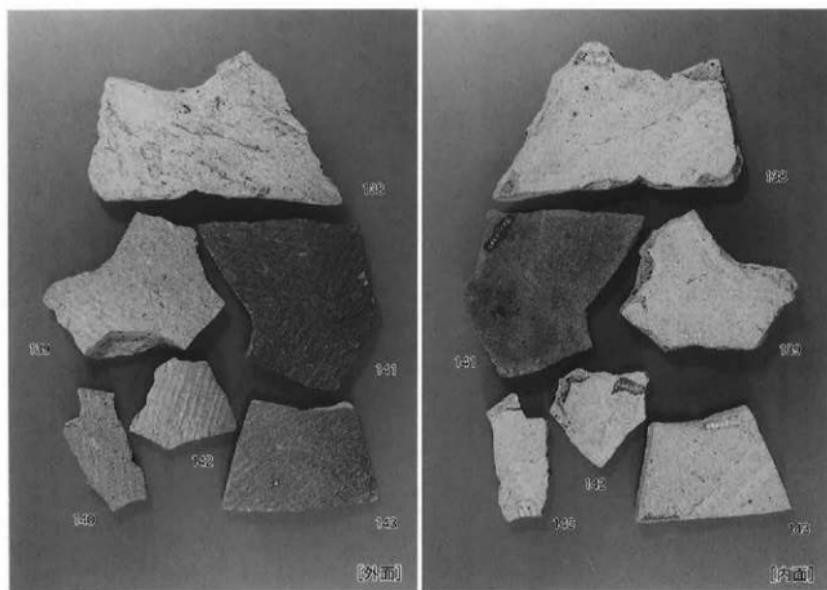
(約 1 : 3)



b 出土造物 11 (河川跡)

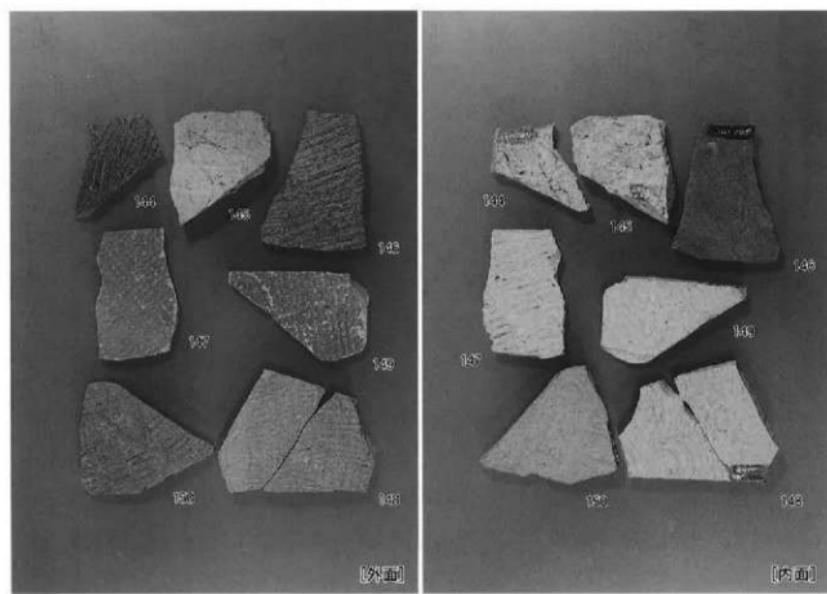
(約 1 : 3)





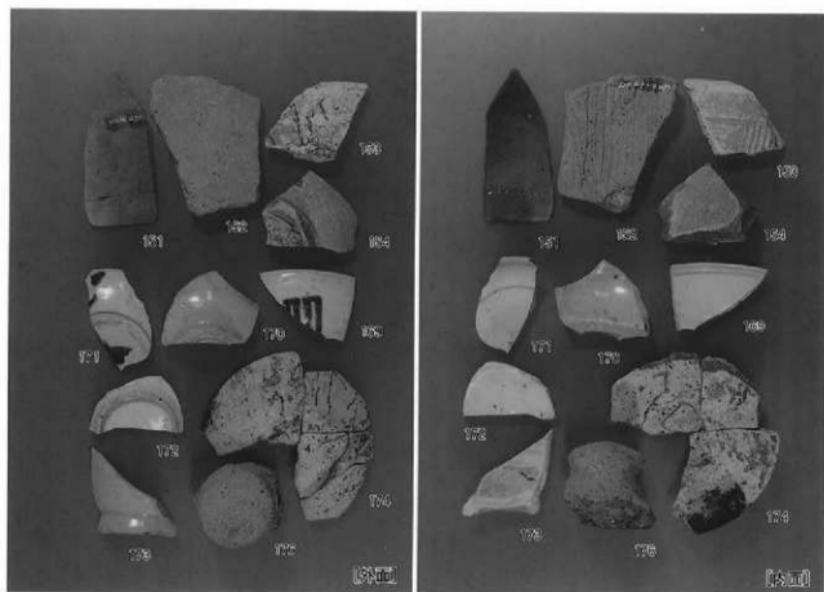
a 出土遺物 14 (遺構外 3)

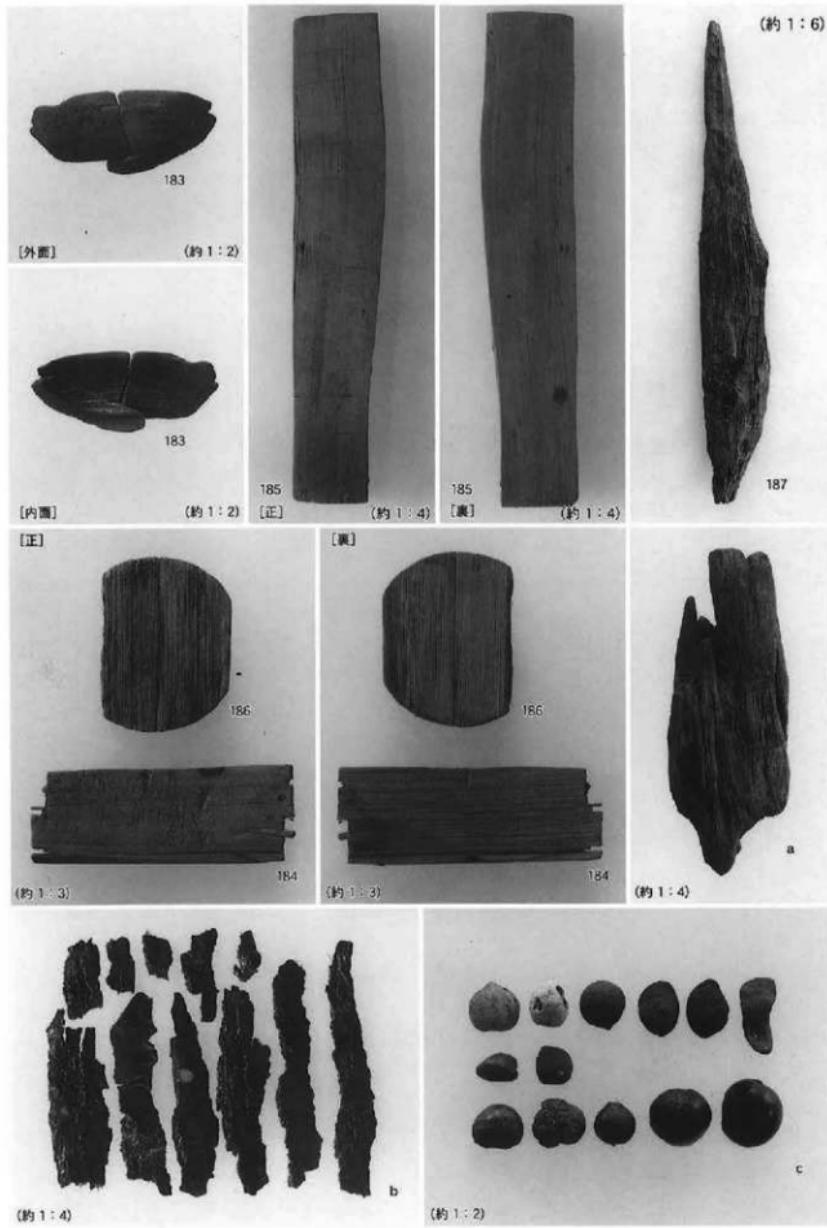
(約 1:3)



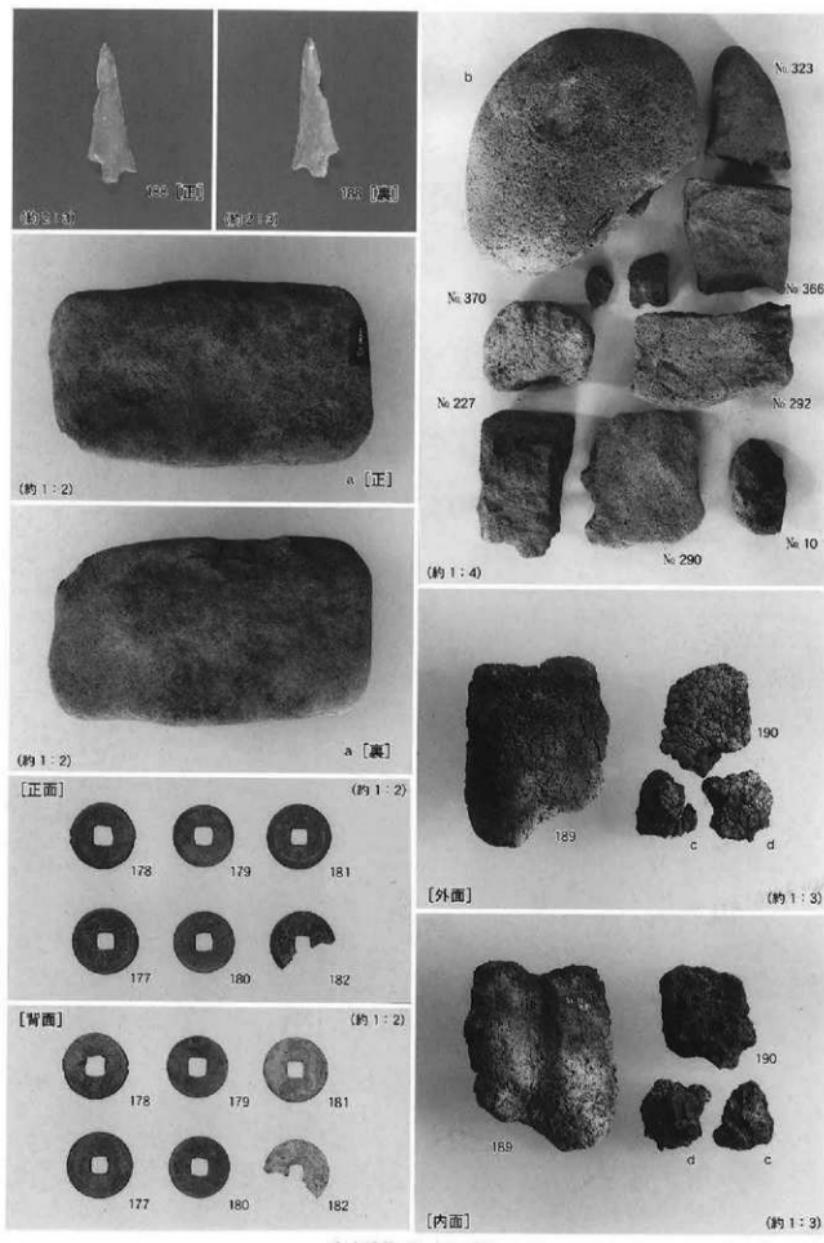
b 出土遺物 15 (遺構外 4)

(約 1:3)



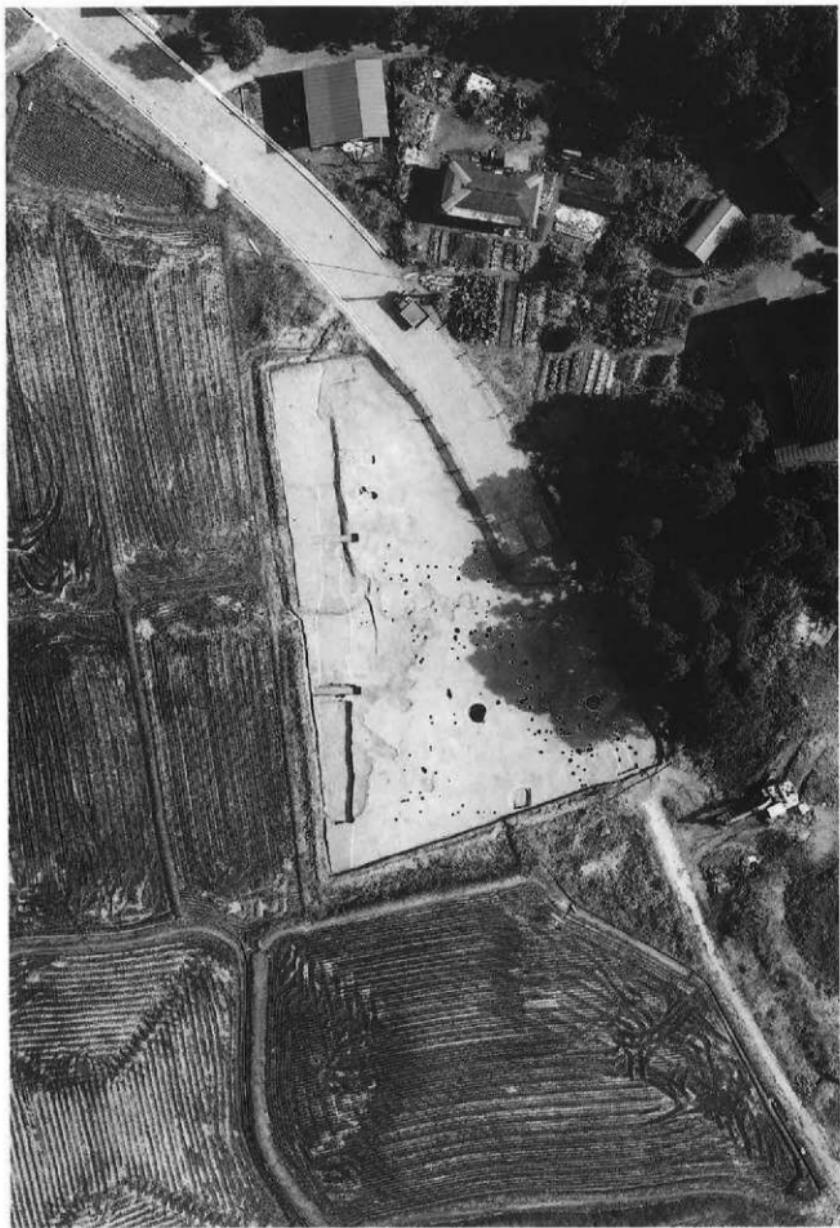


出土遺物 18 (木製品類ほか)



出土遺物 19 (その他)

片 烟 遺 跡 1



片烟遺跡全景

片 烟 遺 跡 2



a 片烟遺跡近景

(北西から)



b 片烟遺跡近景

(北から)

片畑遺跡 3



a 調査区全景

(南西から)



b 調査区全景

(北西から)

片 烟 遺 跡 4



a 調査区西側

(南から)



b 調査区西側

(南西から)

片 畑 遺 跡 5



a 作業風景

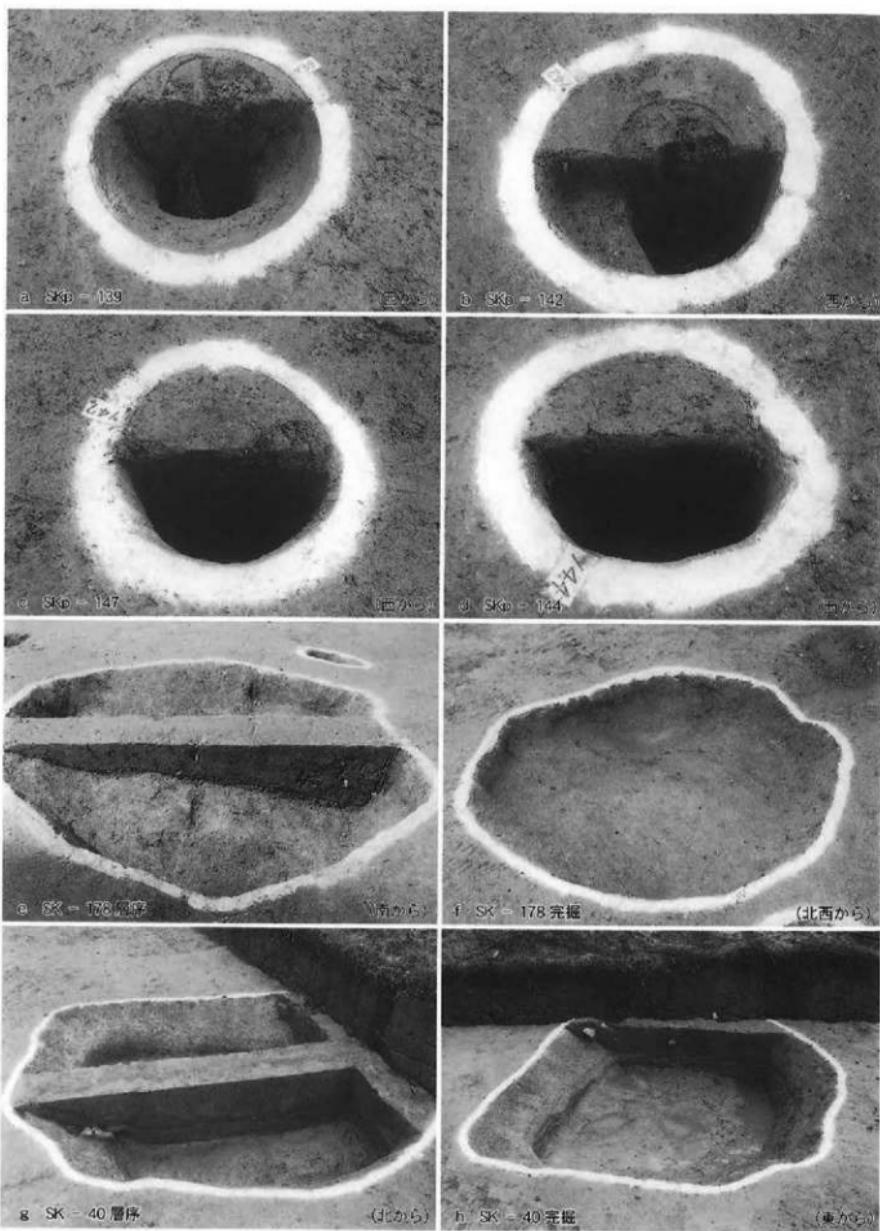
(南から)



b 作業風景

(北から)

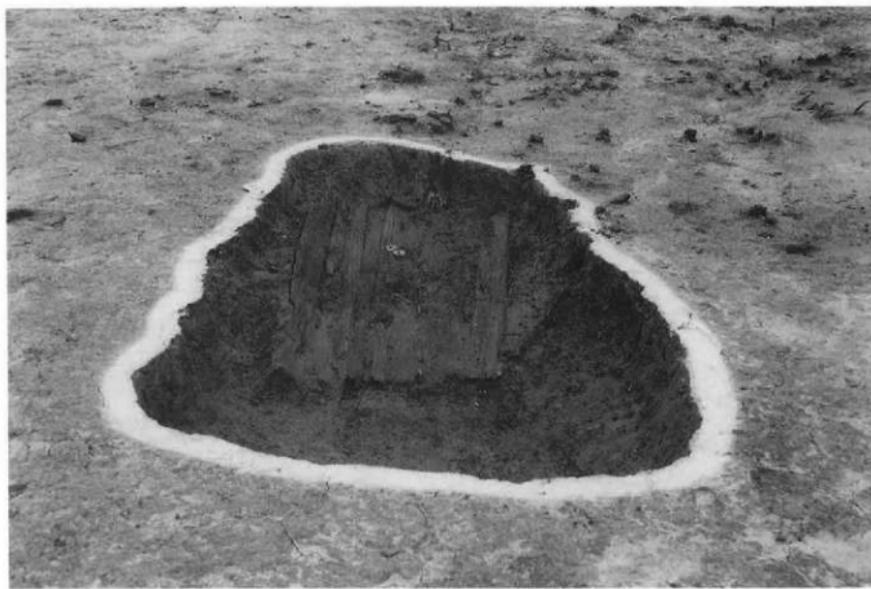
片 烟 遺 跡 6





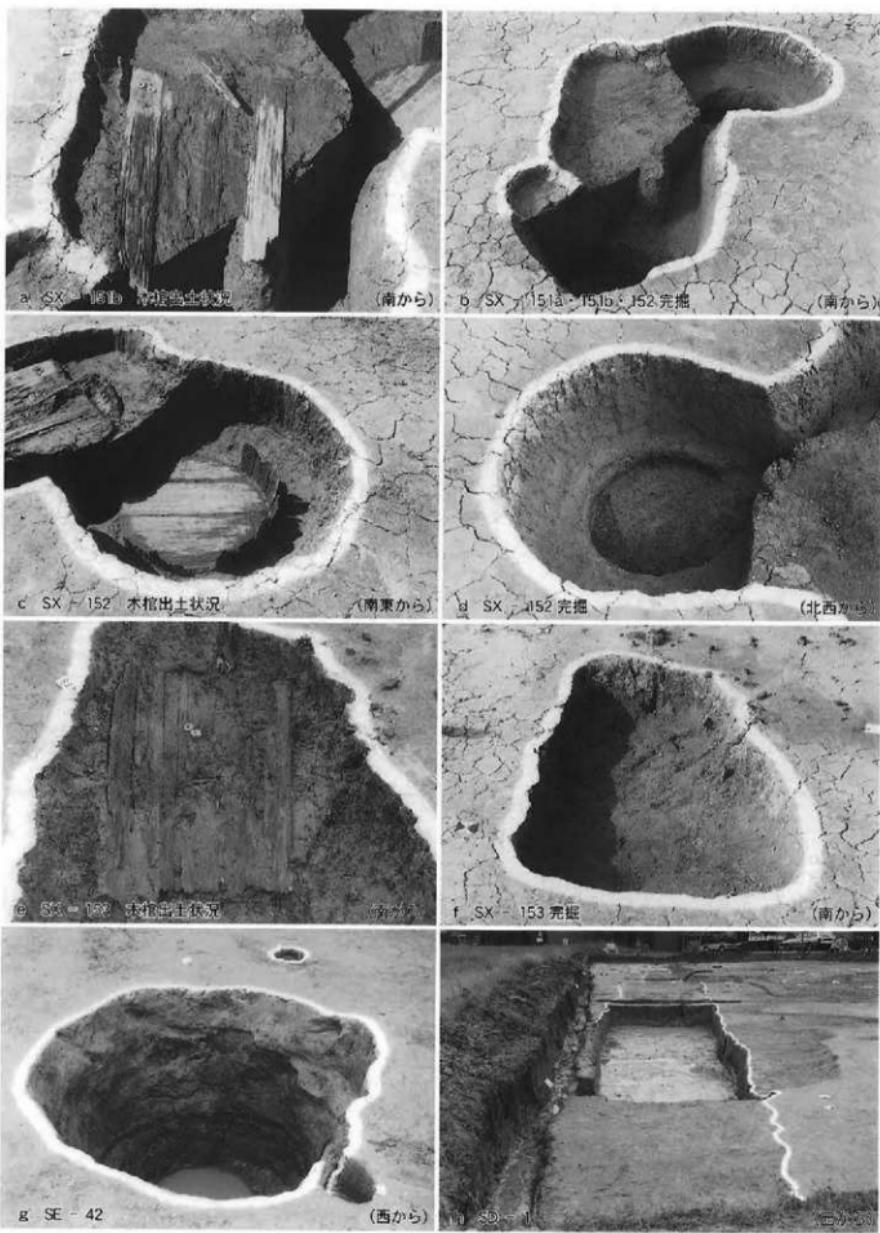
a SX - 151a・151b・152 木棺出土状況

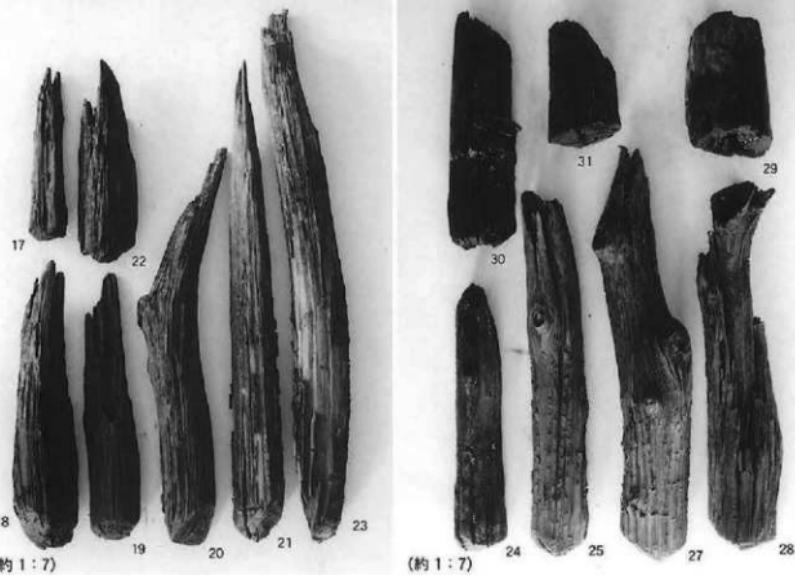
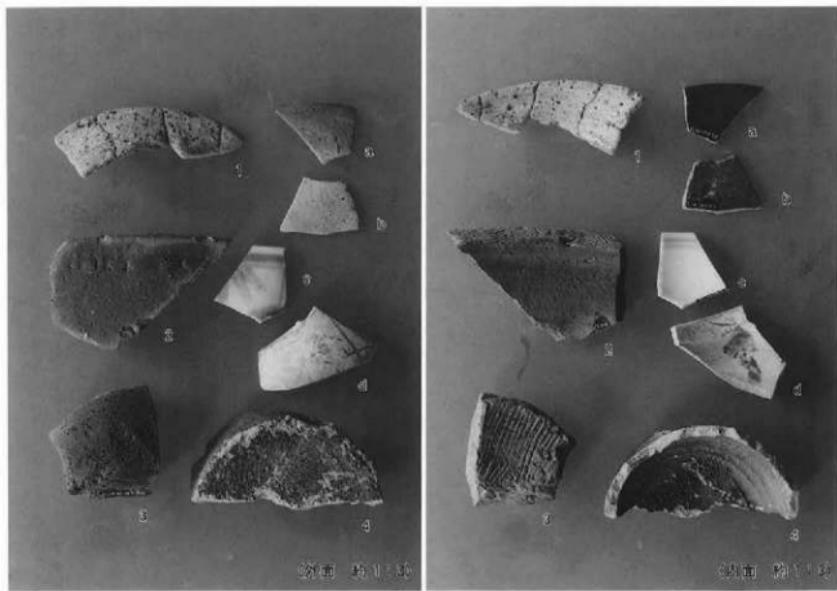
(南から)



b SX - 153 木棺出土状況

(南から)





出土遺物 1 (土器類・木製品類 1)

片 烟 遗 蹤 10



(約 1:4)



26

32

38



40

(約 1:4)



39

(正面 約 1:5)

出土遺物 2 (木製品類 2)

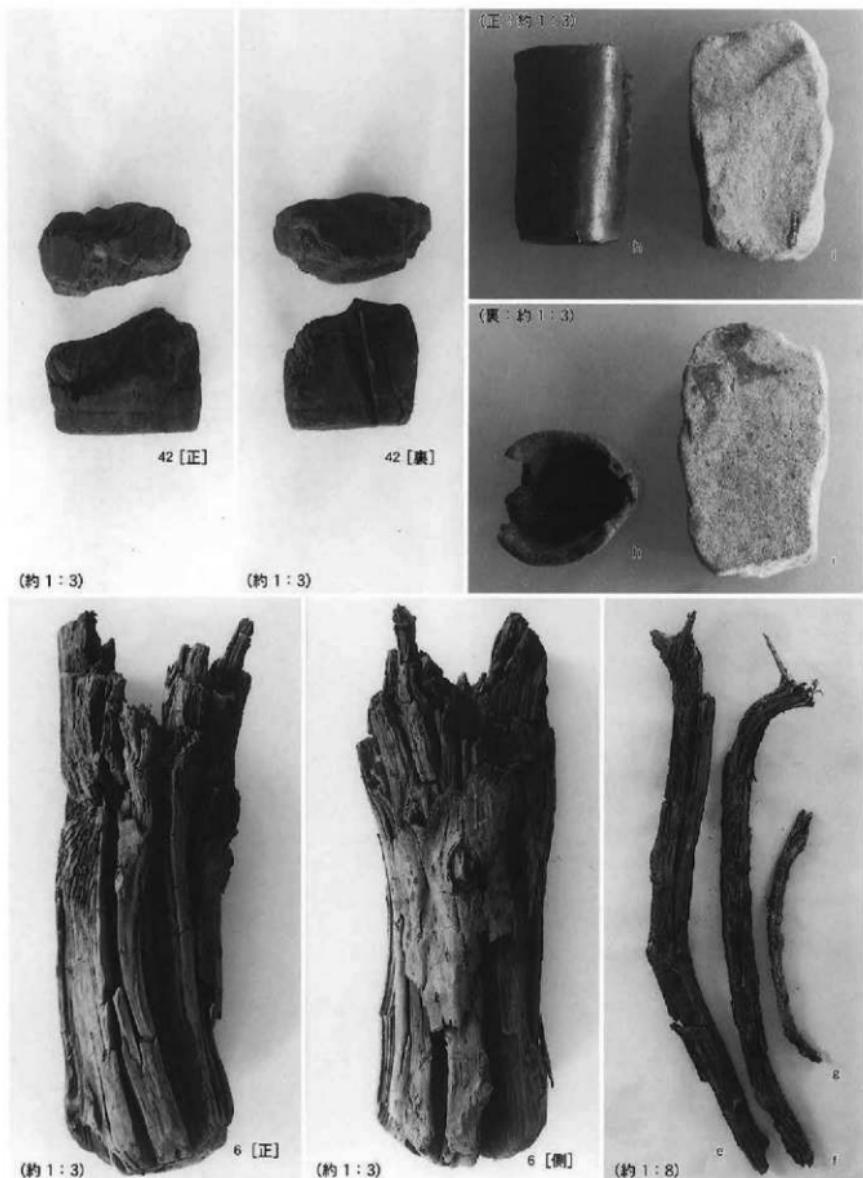


39

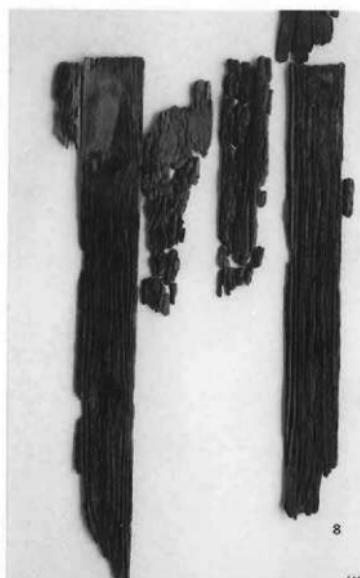
(側面 約 1:5)

片 烟 遺 跡 11

図版157



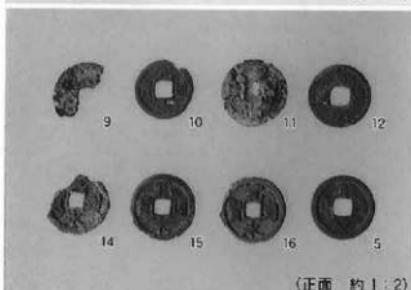
出土遺物3 (木製品類3・SE-42)



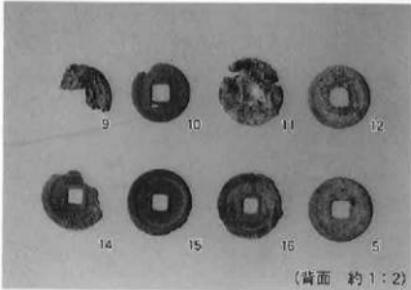
(約 1:7)



(約 1:7)



(正面 約 1:2)



(背面 約 1:2)



(約 1:7)

出土遺物 4 (墓壙)

宮田遺跡 1



宮田遺跡全景

宮田遺跡 2



a 宮田遺跡遠景

(南東から)



b 宮田遺跡遠景

(南東から)

宮田遺跡 3





a Ⅲ地区西壁層序

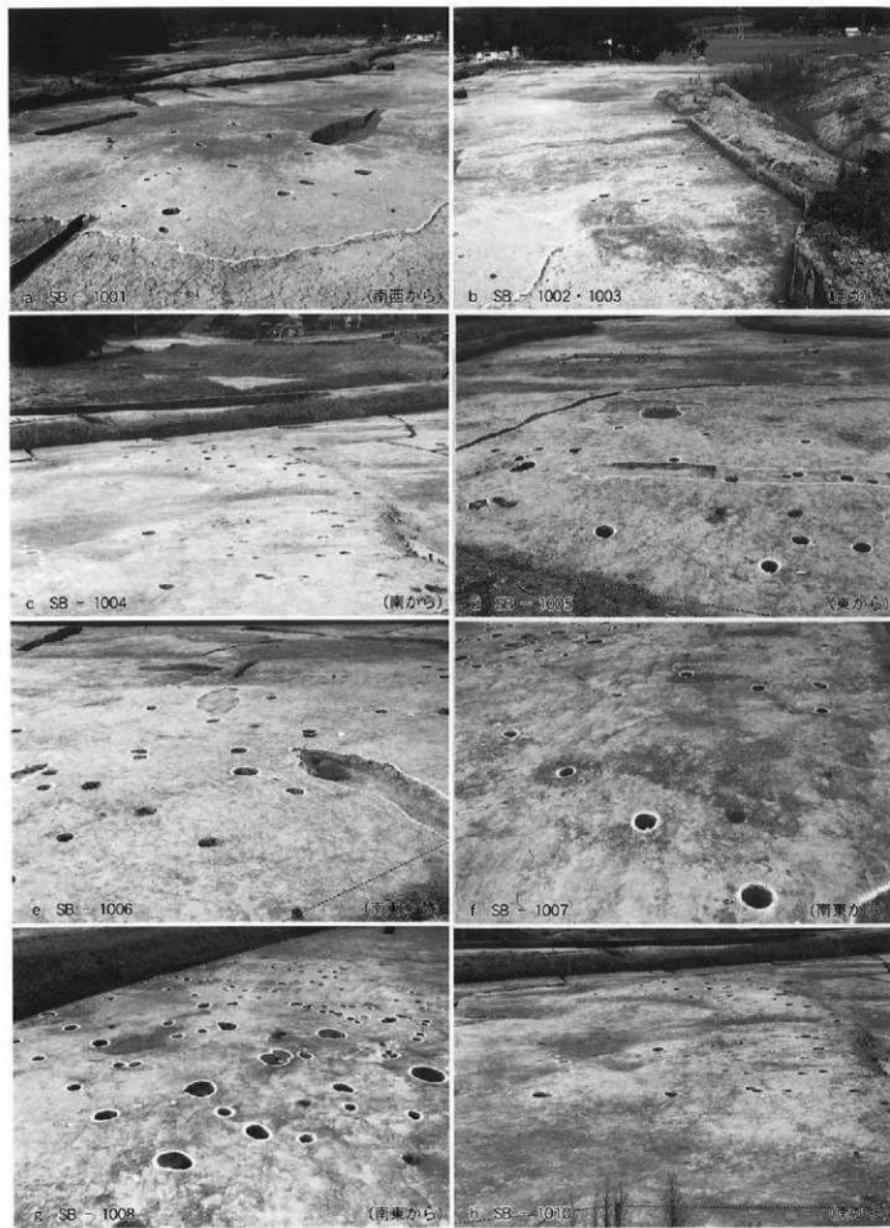
(東から)

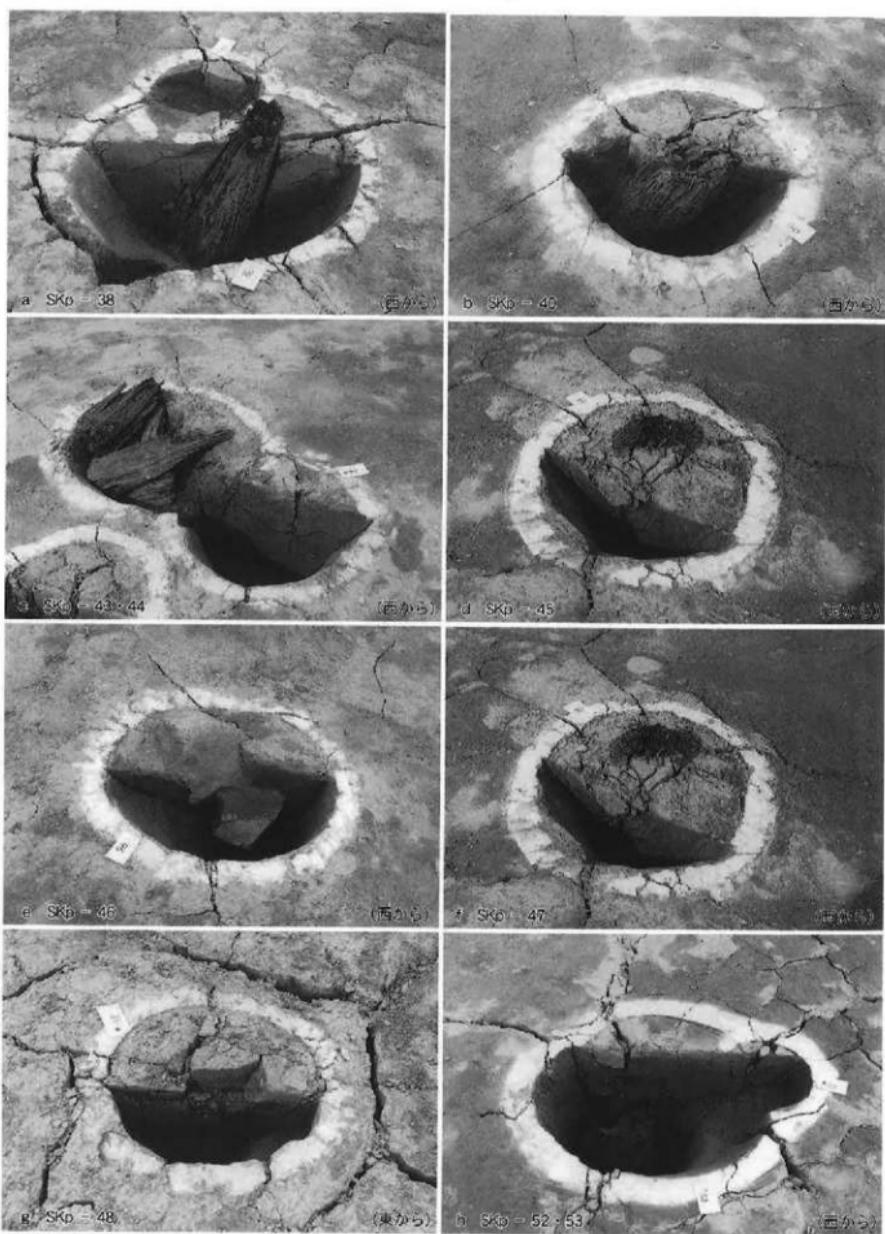


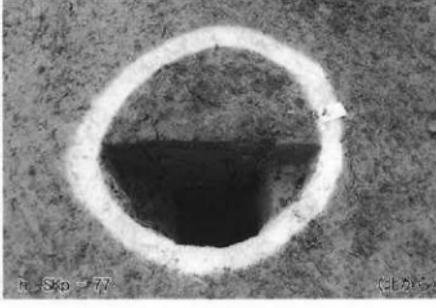
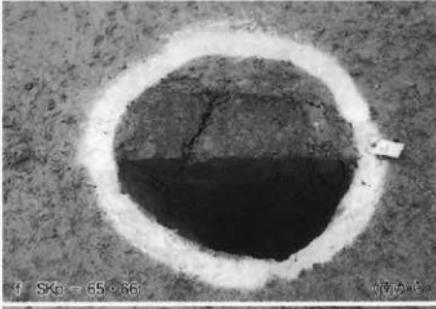
b Ⅰ地区西壁層序

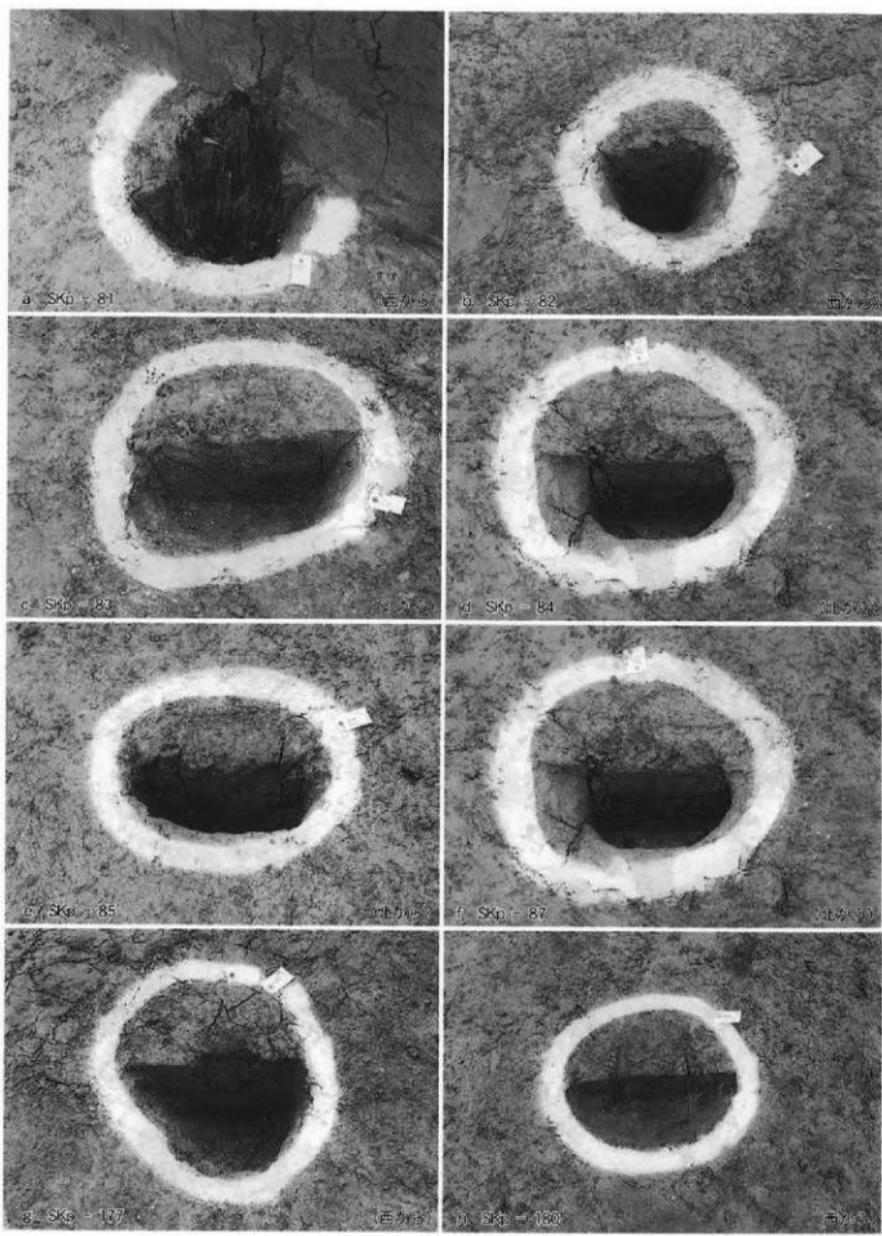
(北東から)

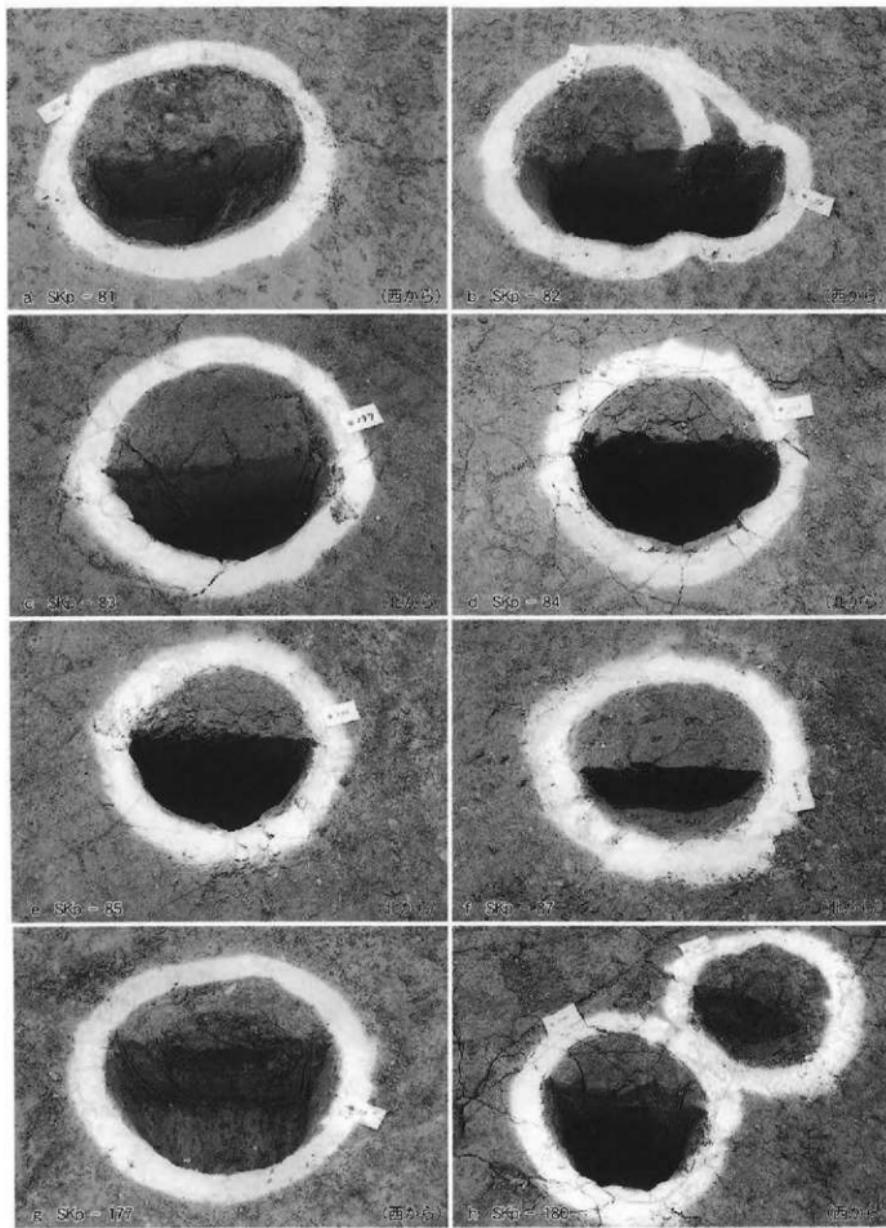
宮田遺跡 5

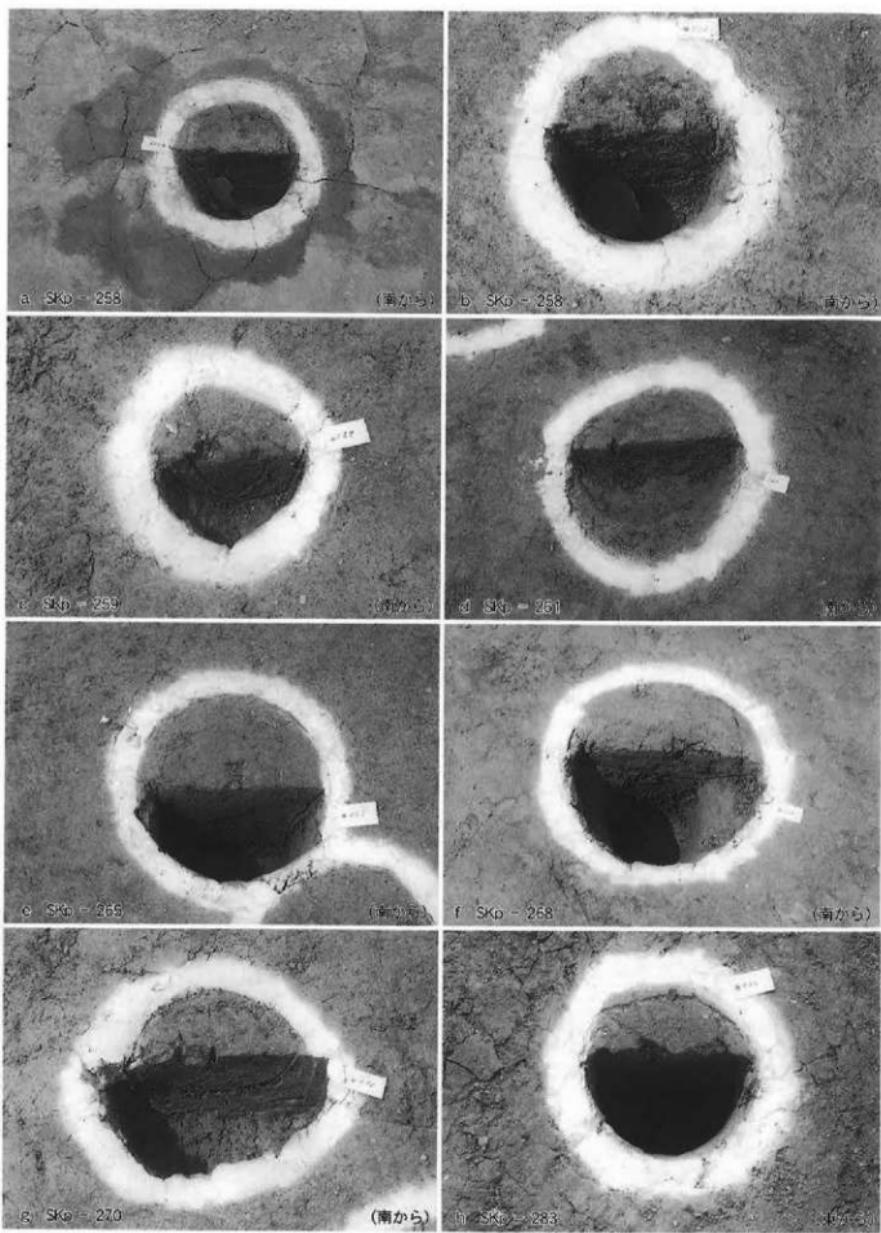


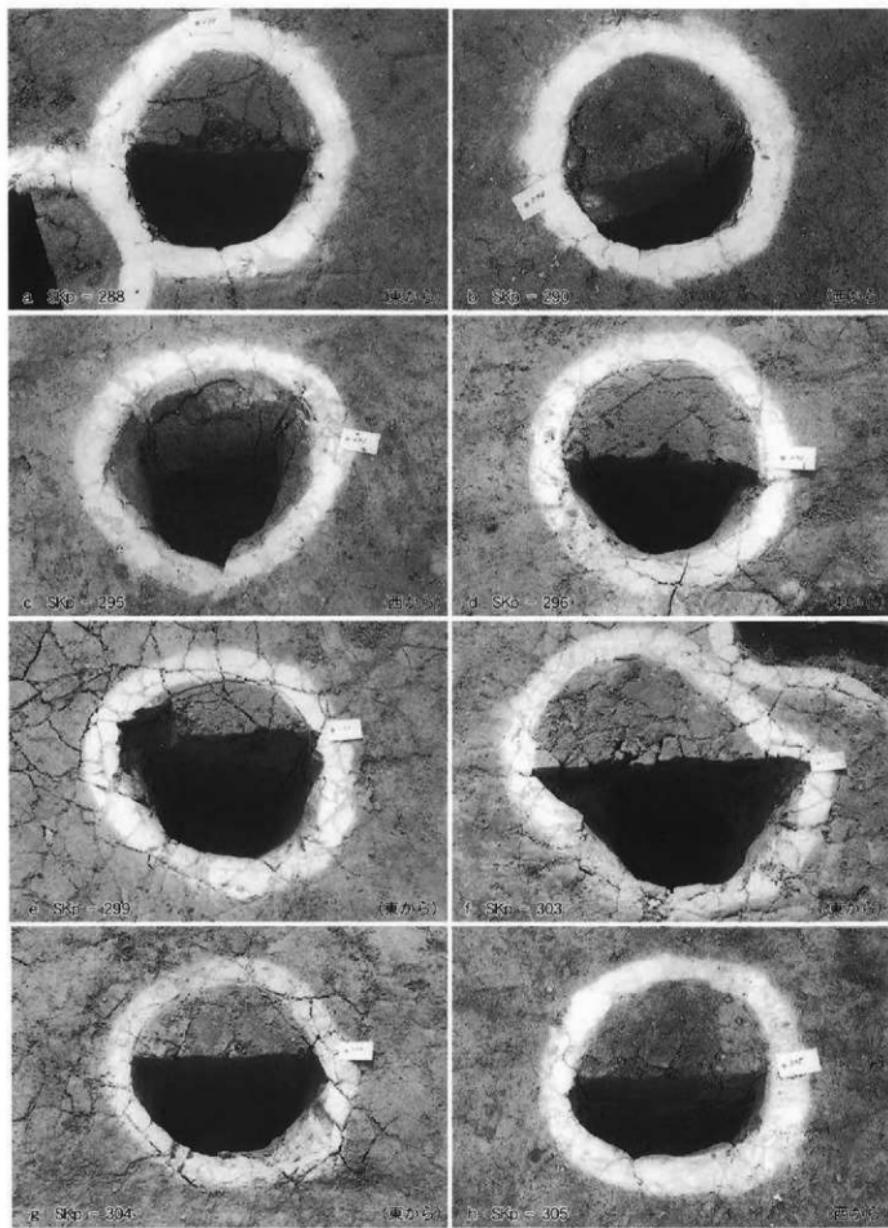


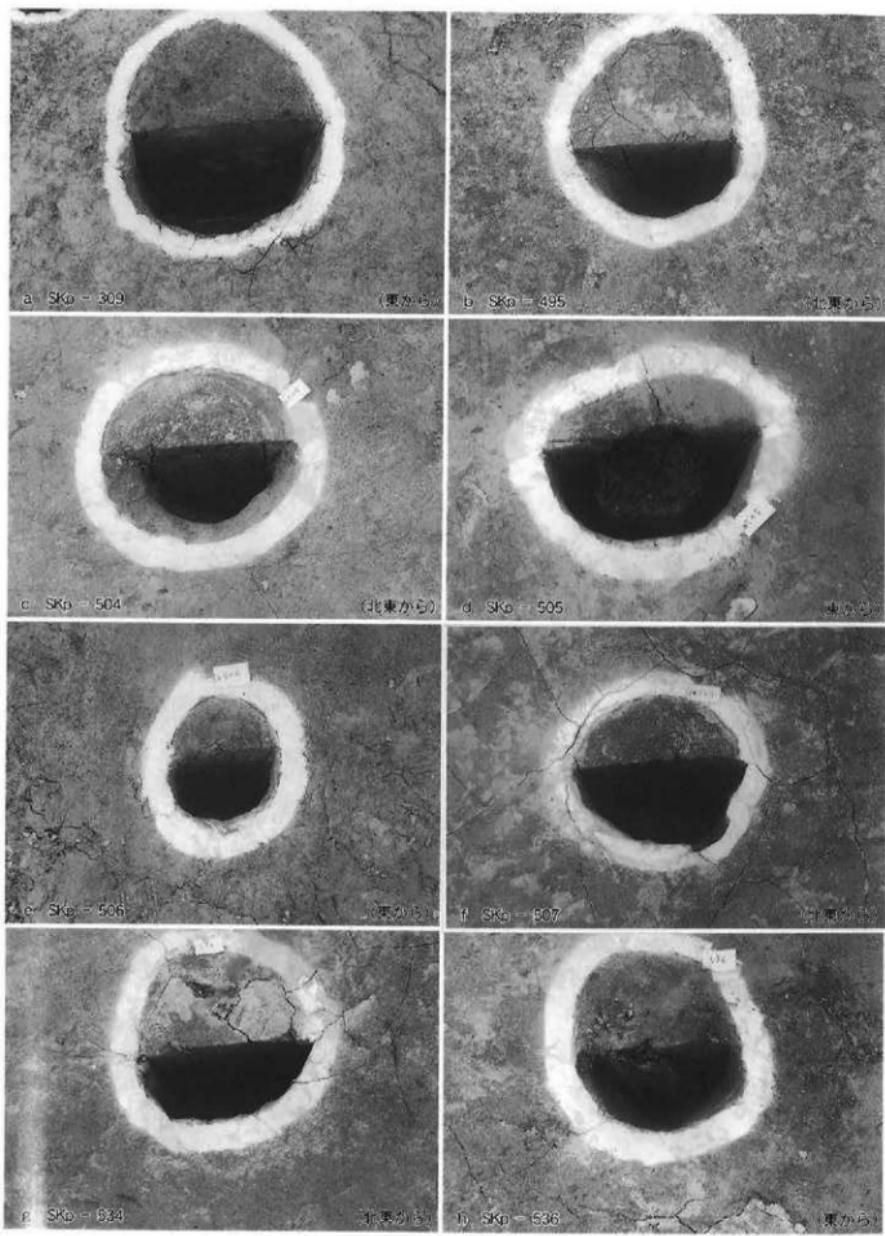


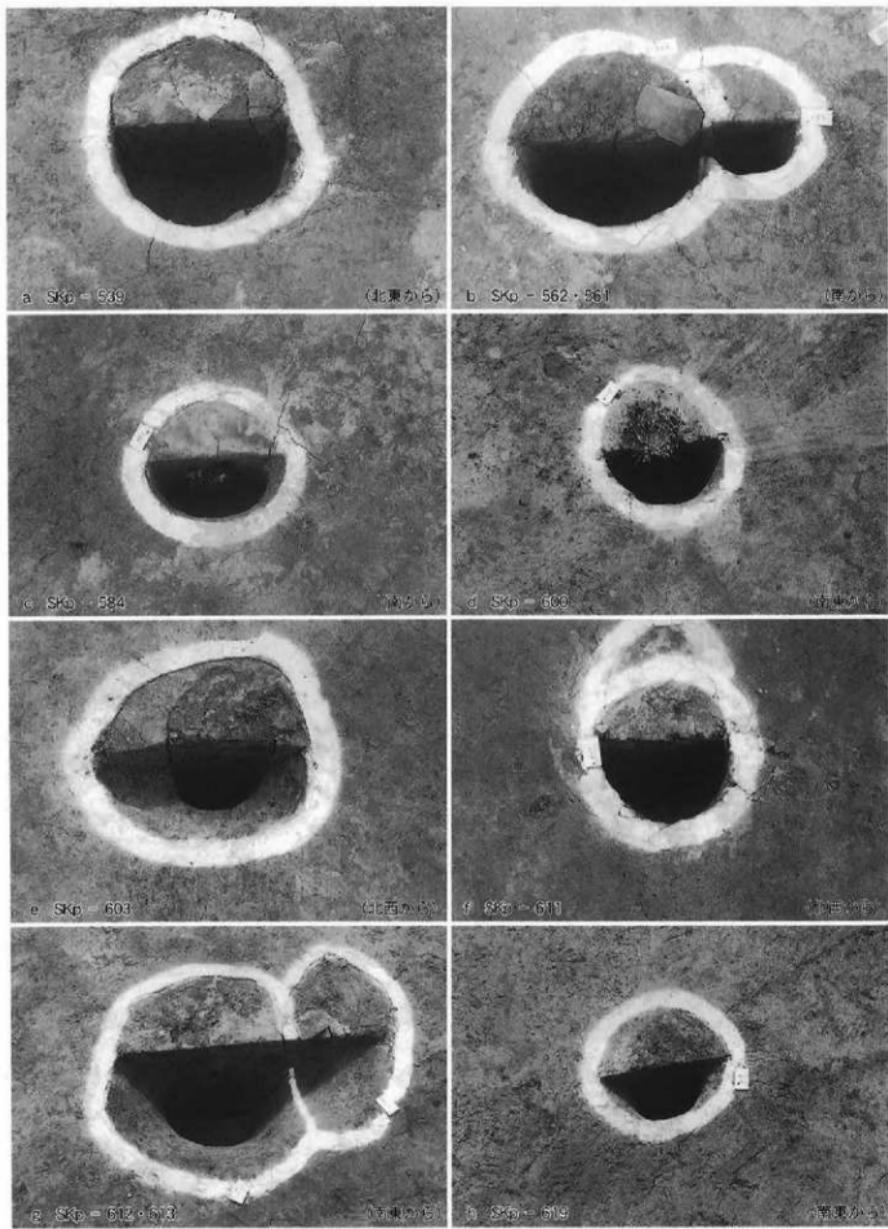


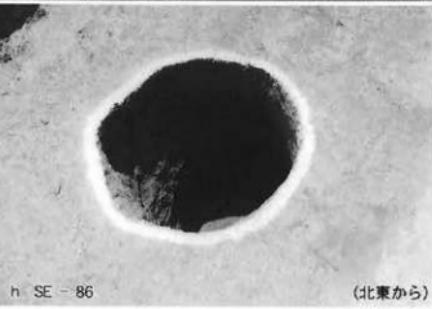
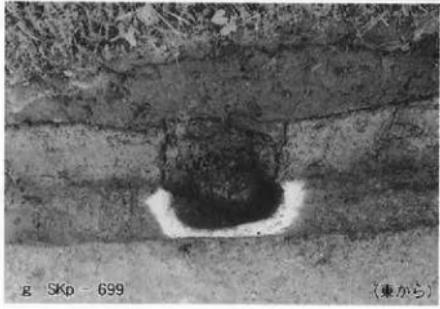
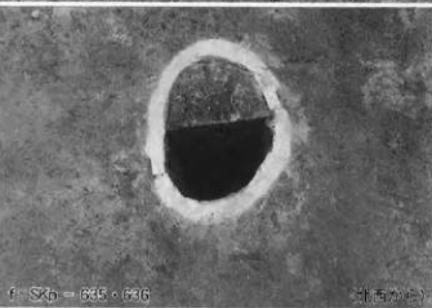
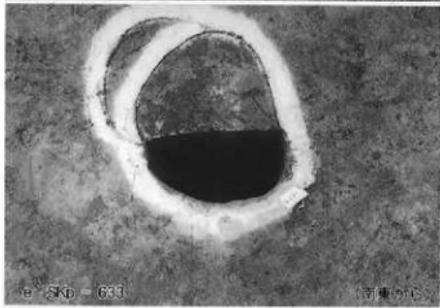
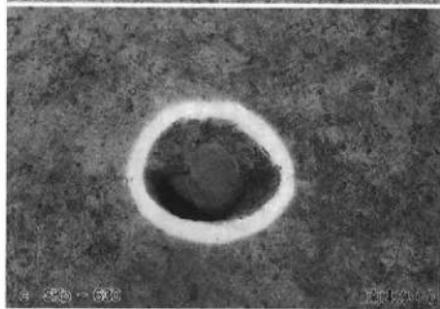
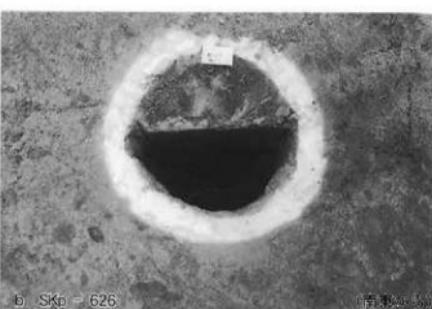
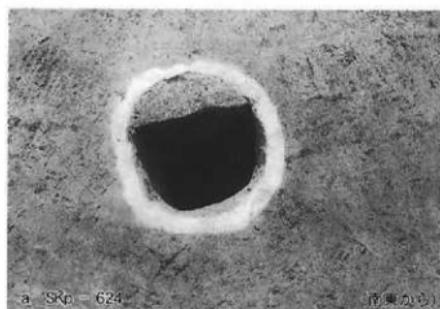


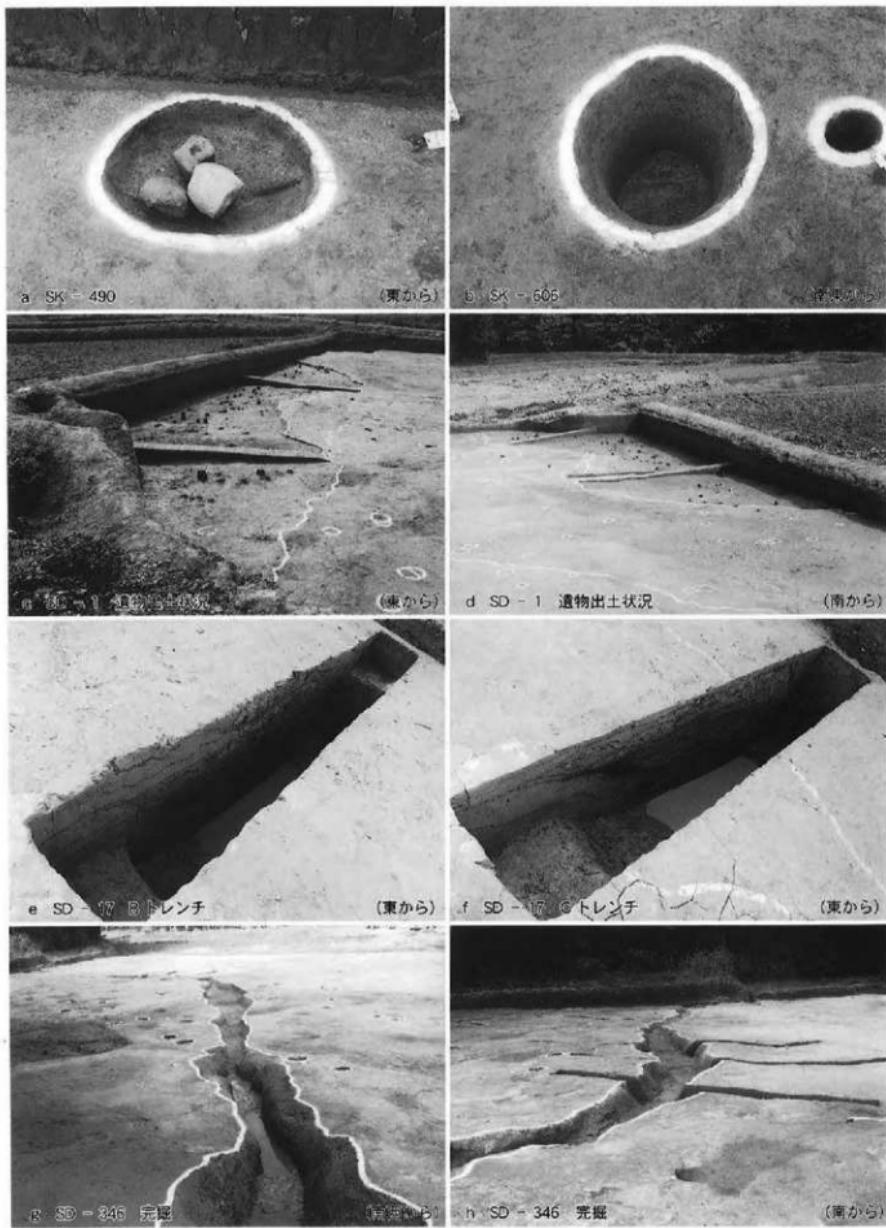














a SD - 346 遺物出土状況

(北から)



b SD - 346 遺物出土状況

(東から)



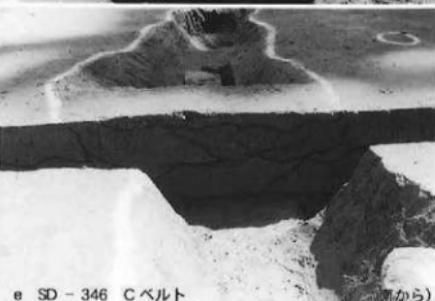
c SD - 346 遺物出土状況

(東から)



d SD - 346 A ベルト

(東から)



e SD - 346 C ベルト

(東から)



a SX-294 集石出土状況

(北西から)



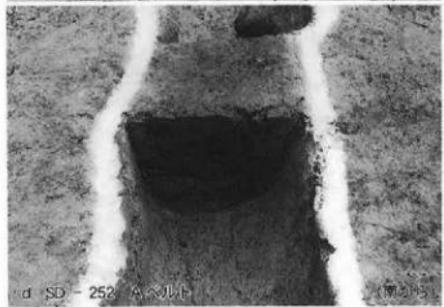
b SX-294 層序

(北から)



c SX-294 外縁

(北西から)



d SD-252 中心部

(北から)



e SD-252 外縁

(北東から)



a SD - 378a 遺物出土状況

(北西から)



b SD - 378a 遺物出土状況

(南東から)



c SD - 378a 遺物出土状況

(南から)



d SD - 378a Aヘルト

(南東から)



e SD - 378a Bヘルト

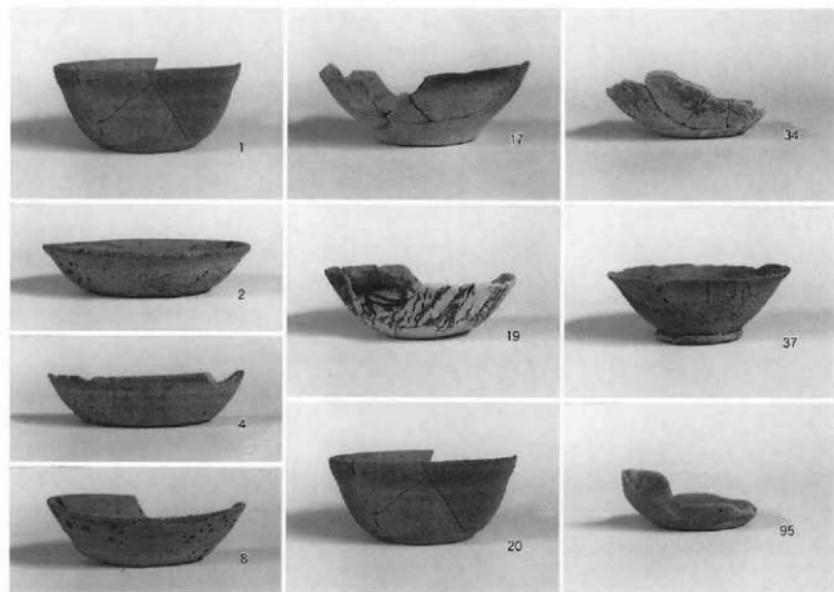
(北東から)



a 現地説明会風景



b 発掘調査スタッフ

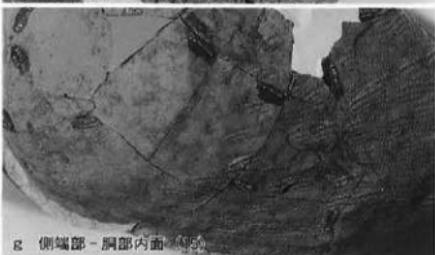
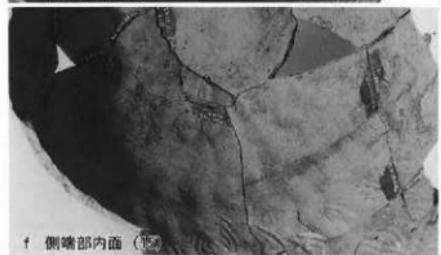
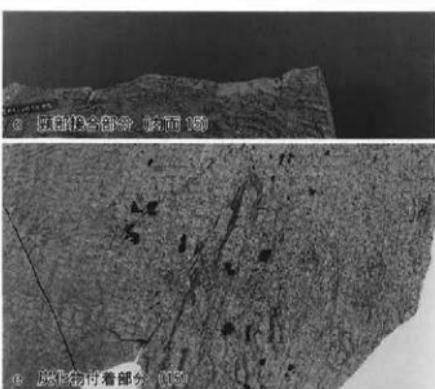
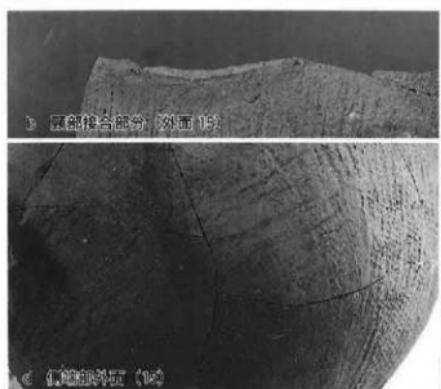
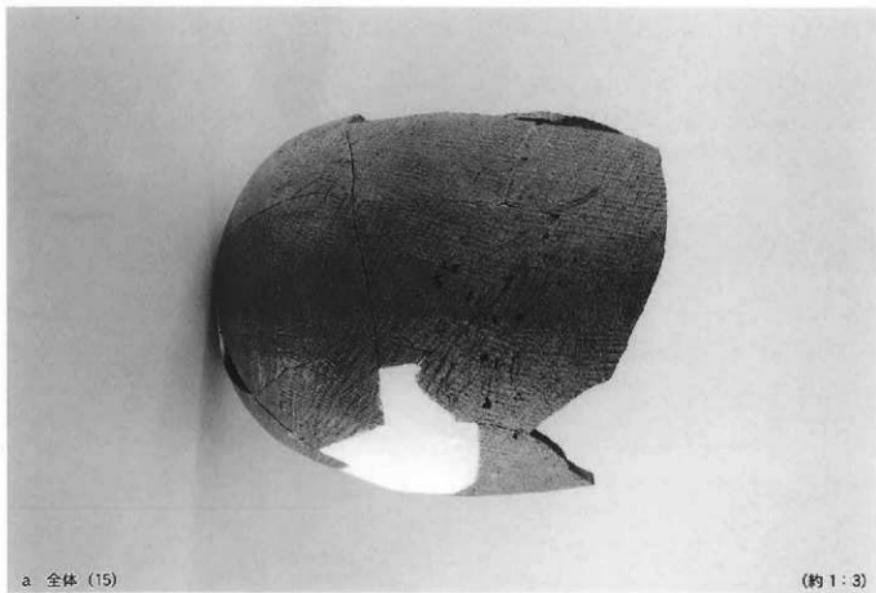


a 出土遺物 1

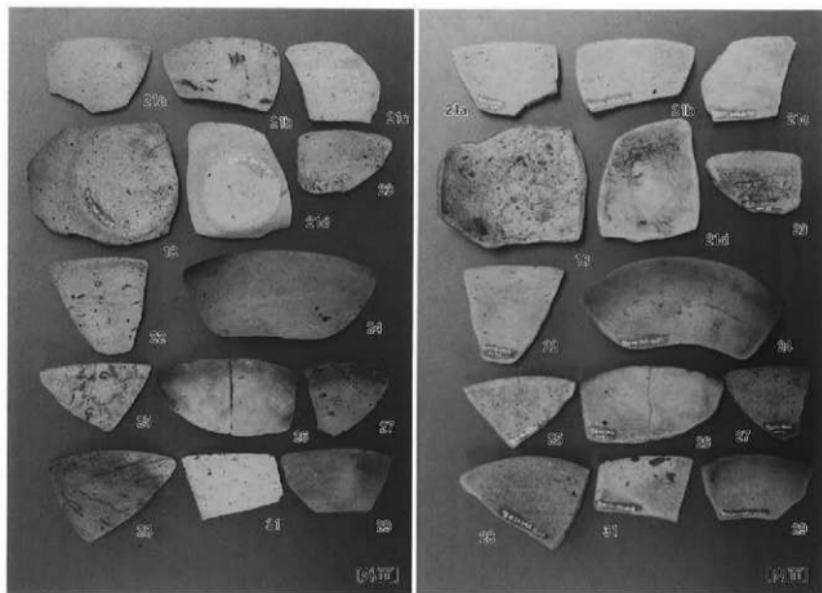


b 出土遺物 2 (SD - 346 1)

(約 1 : 3)



出土遺物 3 (SD - 346 2)



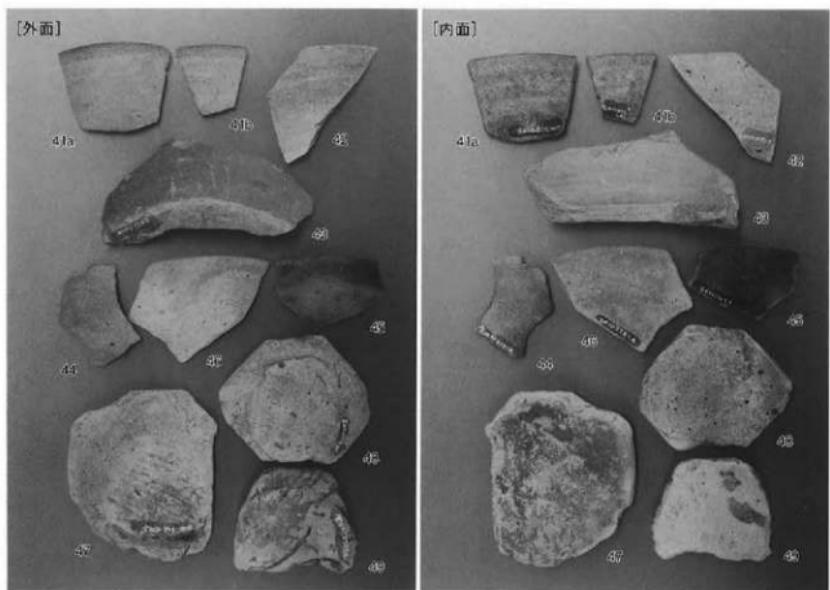
a 出土遺物 4 (SD - 346 3)

(約 1:3)



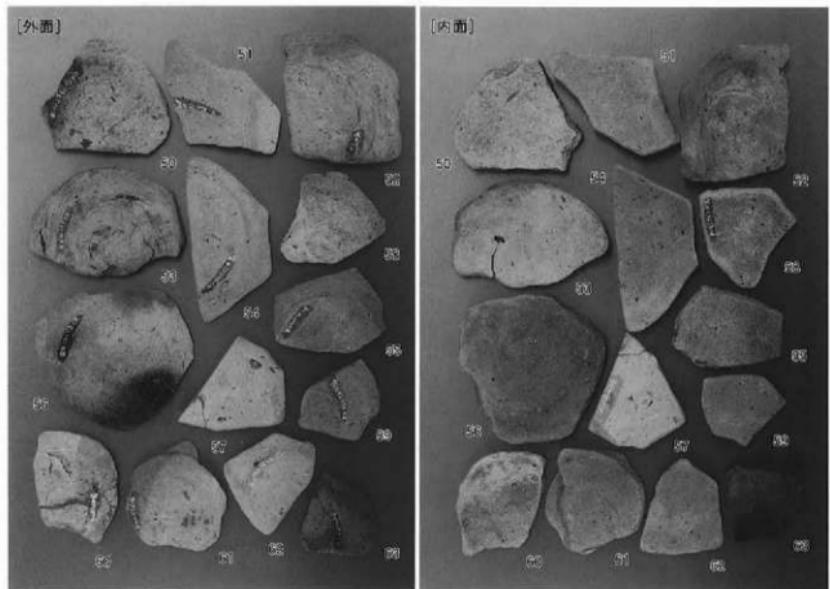
b 出土遺物 5 (SD - 346 4)

(約 1:3)



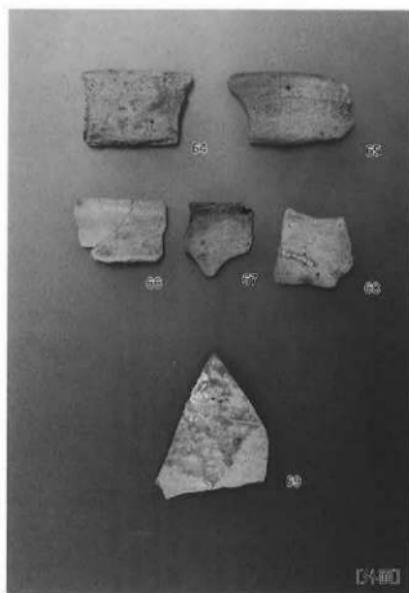
a 出土遺物 6 (SD - 378a. 1)

(約 1 : 3)



b 出土遺物 7 (SD - 378a. 2)

(約 1 : 3)



a 出土遺物 8 (SD - 378a 3)

(約 1:3)



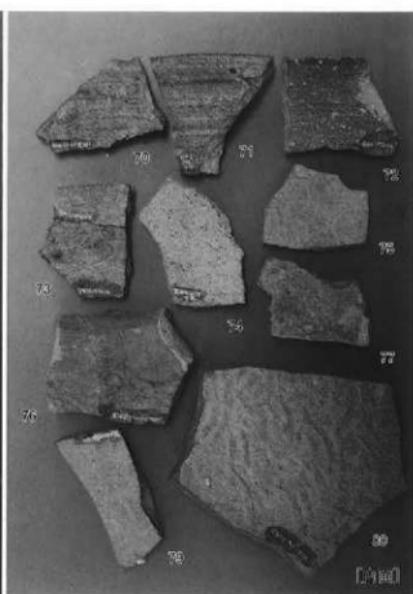
[外観]

[内観]



b 出土遺物 9 (SD - 378a 4)

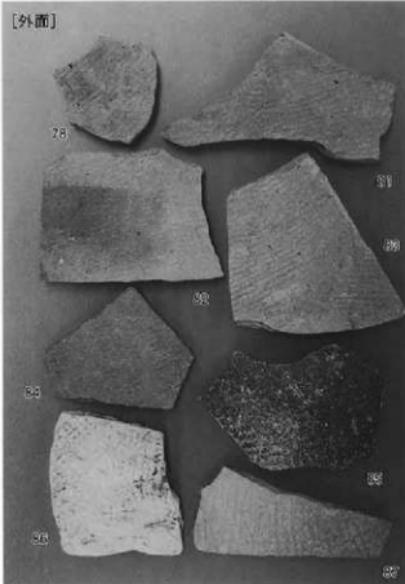
(約 1:3)



[外観]

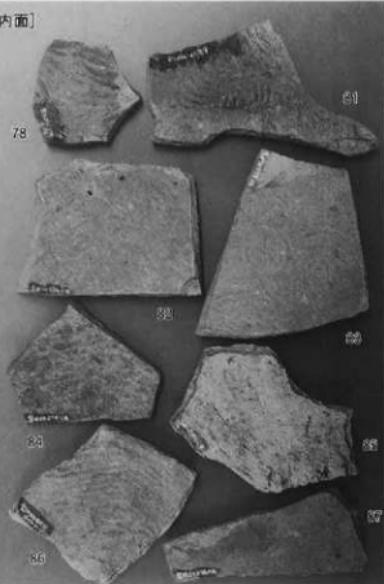
[内観]

[外面]



a 出土遺物 10 (SD - 378a. 5)

[内面]



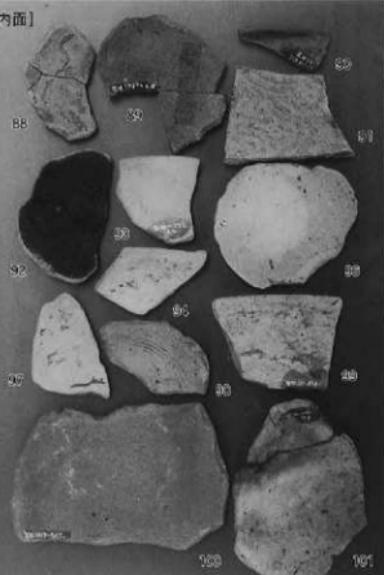
(約 1:3)

[外面]



b 出土遺物 11 (その他の遺構 1)

[内面]

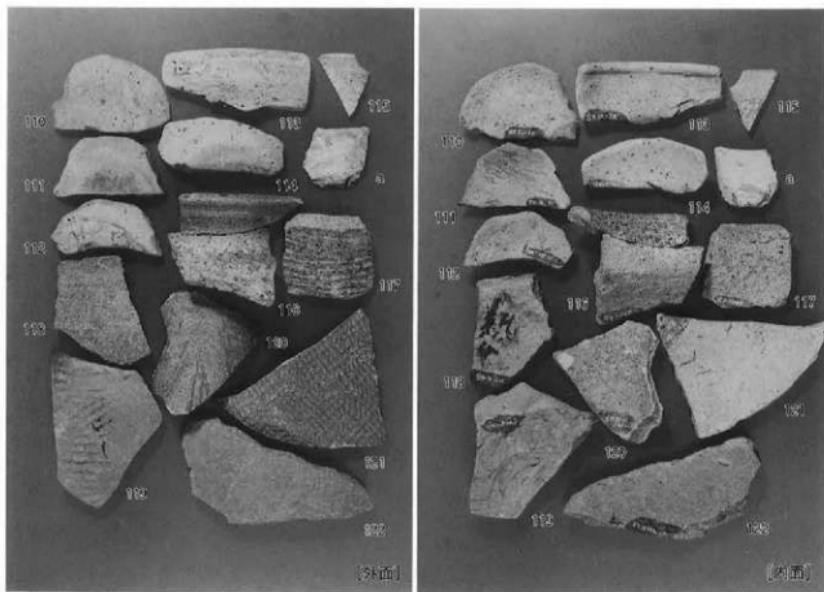


(約 1:3)



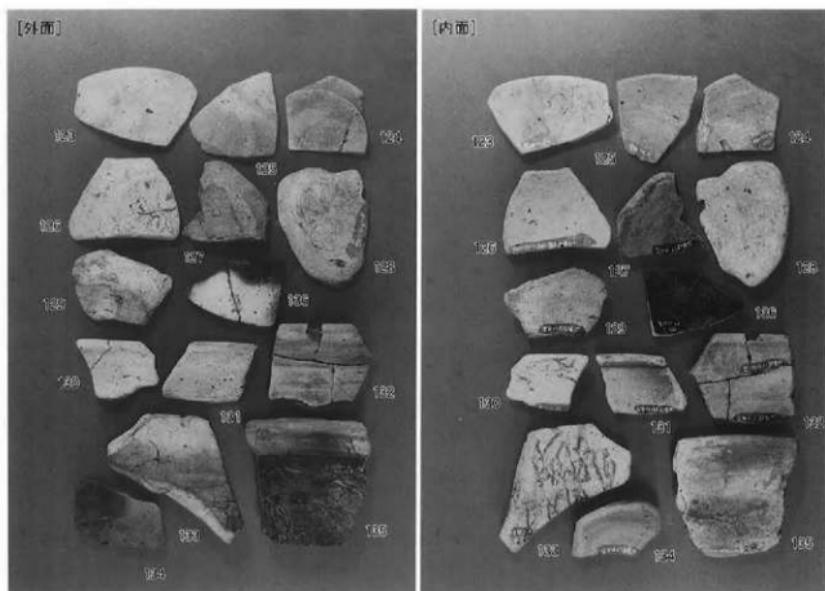
a 出土遺物 12 (その他の遺構 2)

(約 1 : 3)



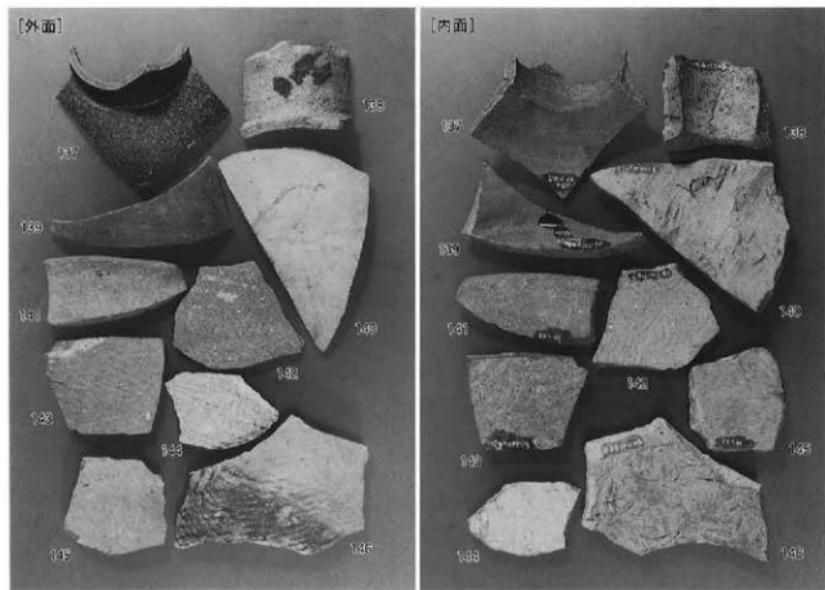
b 出土遺物 13 (河川跡)

(約 1 : 3)



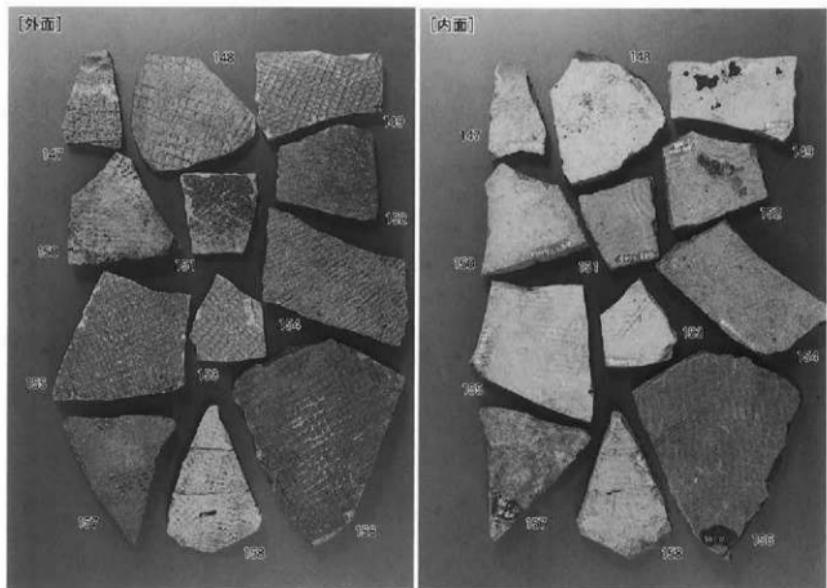
a 出土遺物 14 (遺構外 1)

(約 1:3)



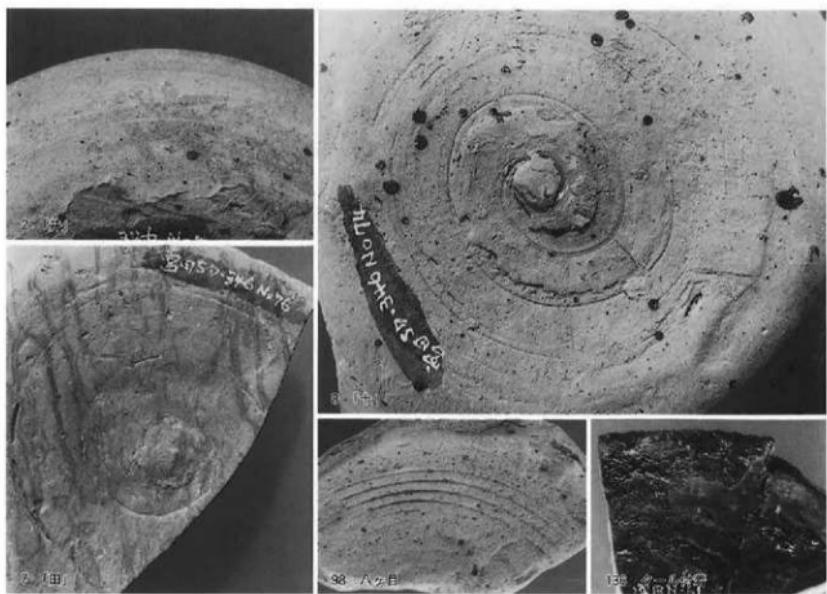
b 出土遺物 15 (遺構外 2)

(約 1:3)



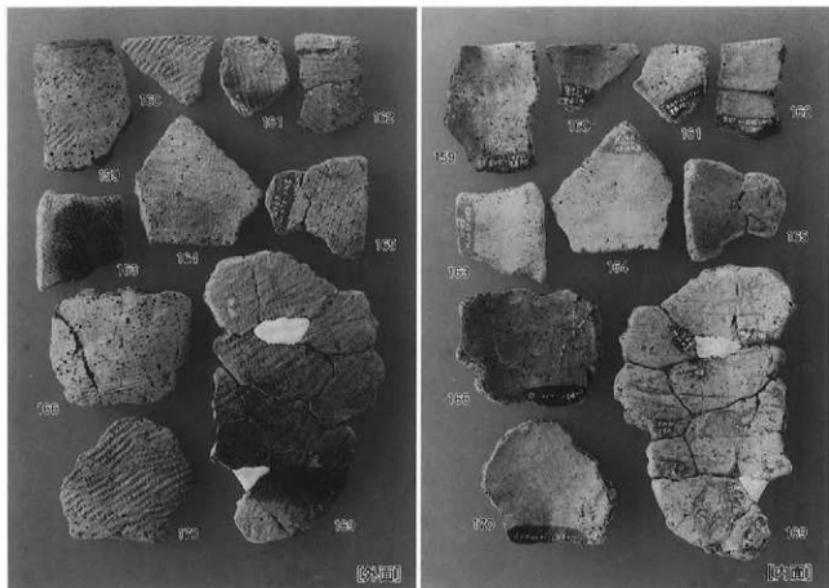
a 出土遺物 16 (遺構外 3)

(約 1:3)



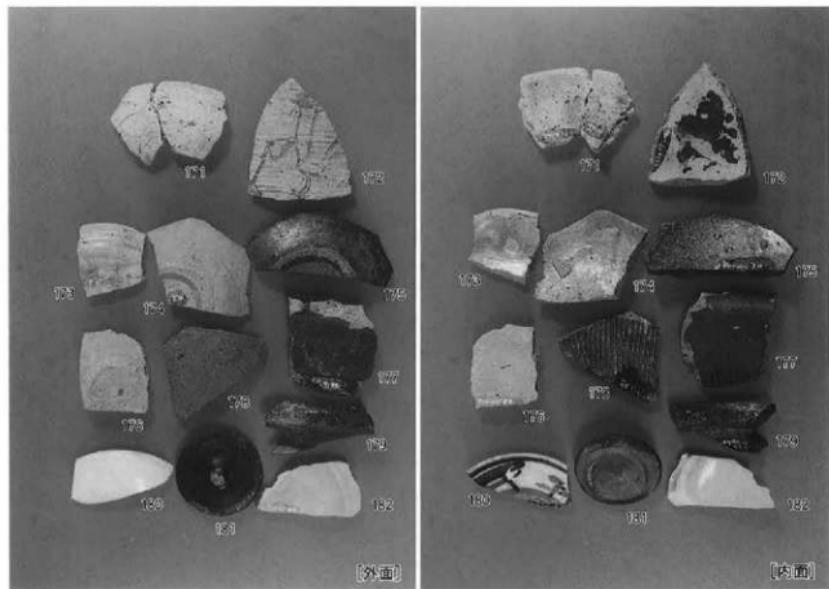
b 出土遺物 17 (墨書き)

(約 1:1)



a 出土遺物 18 (縄文)

(約 1:3)



b 出土遺物 19 (中・近世)

(約 1:3)



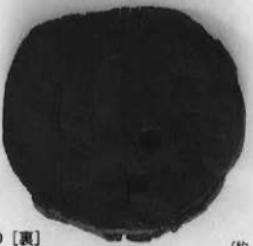
188 [正] (約 1:4)



188 [裏] (約 1:4)



190 [正] (約 1:4)



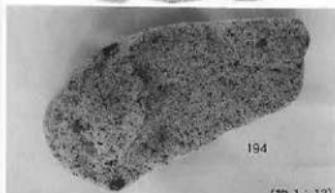
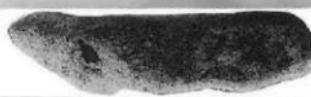
190 [裏] (約 1:4)



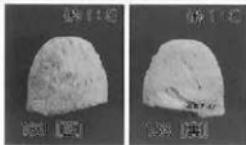
189 [正]



189 [裏]



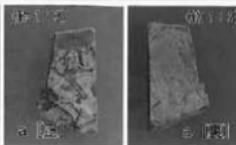
194 (約 1:13)



185 [正] (約 1:2)



185 [裏] (約 1:2)



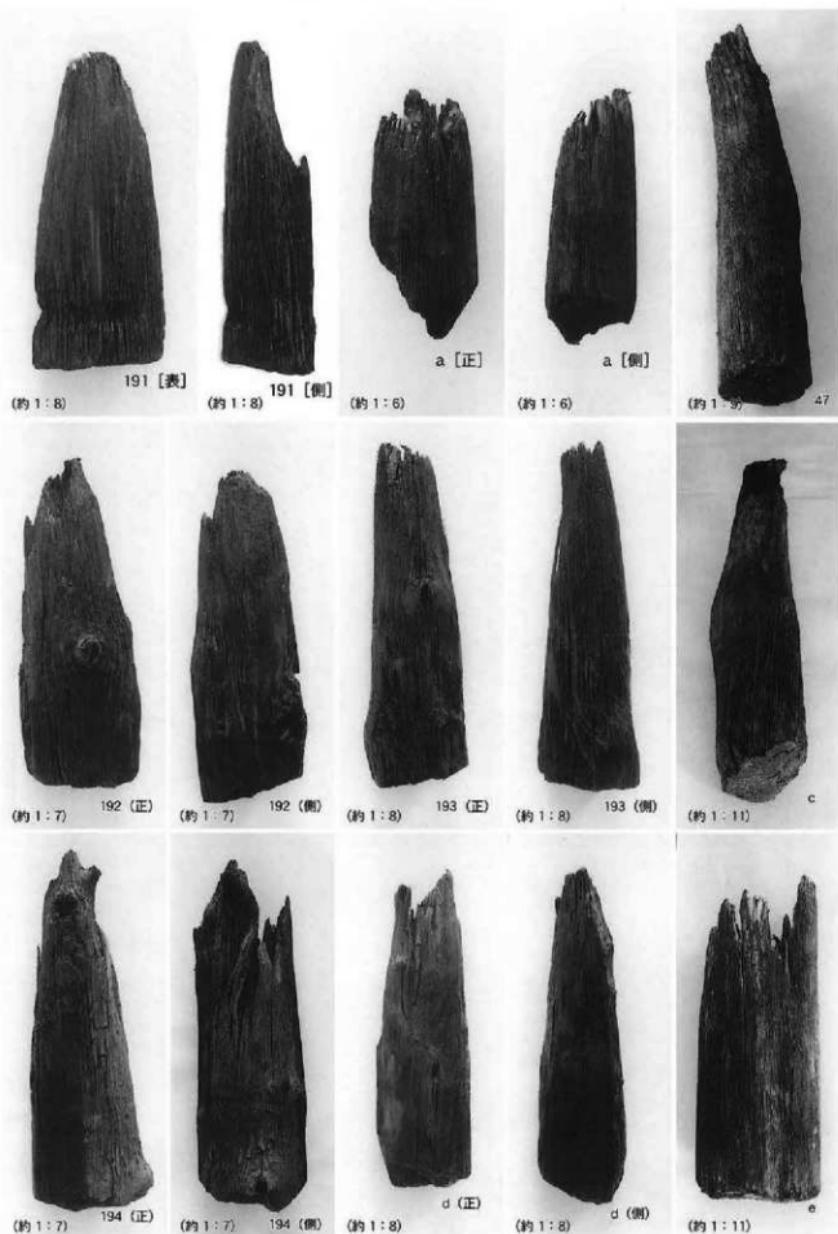
186 [正] (約 1:2)



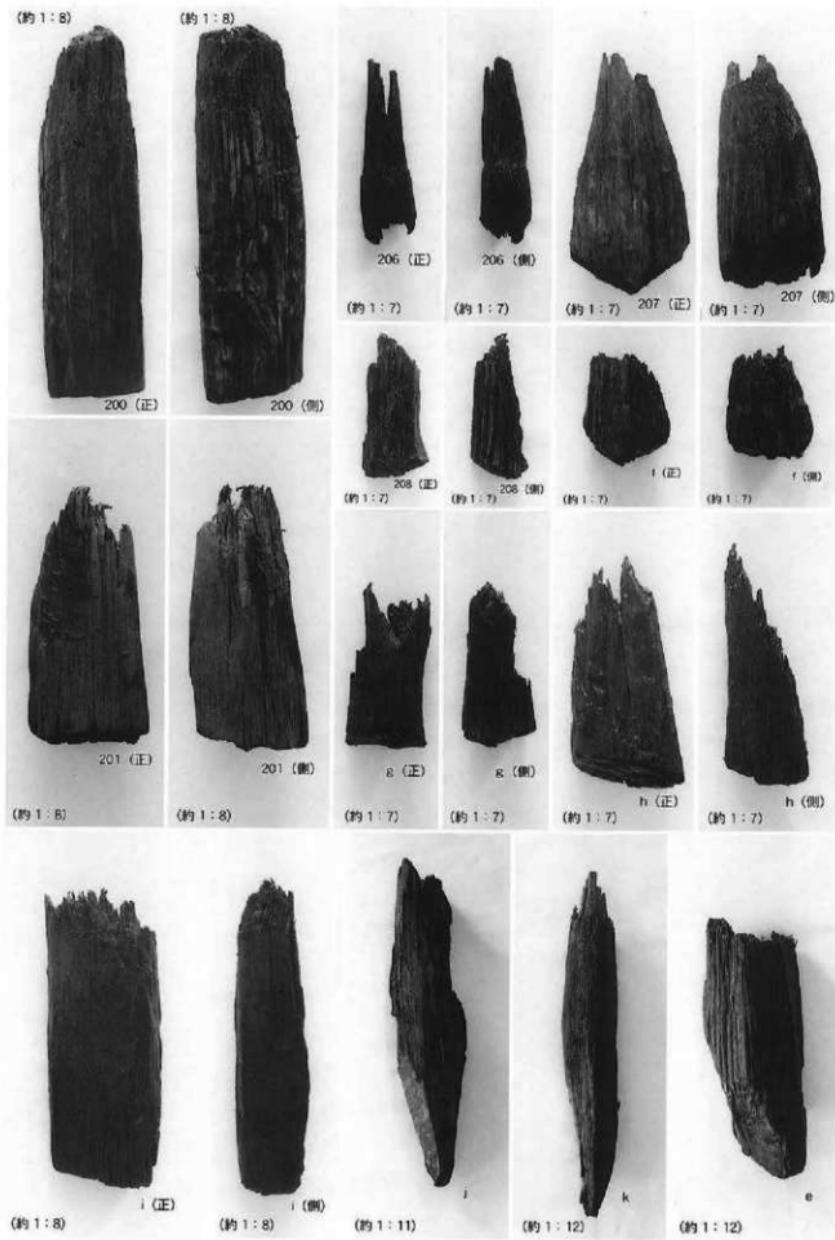
186 [裏] (約 1:2)



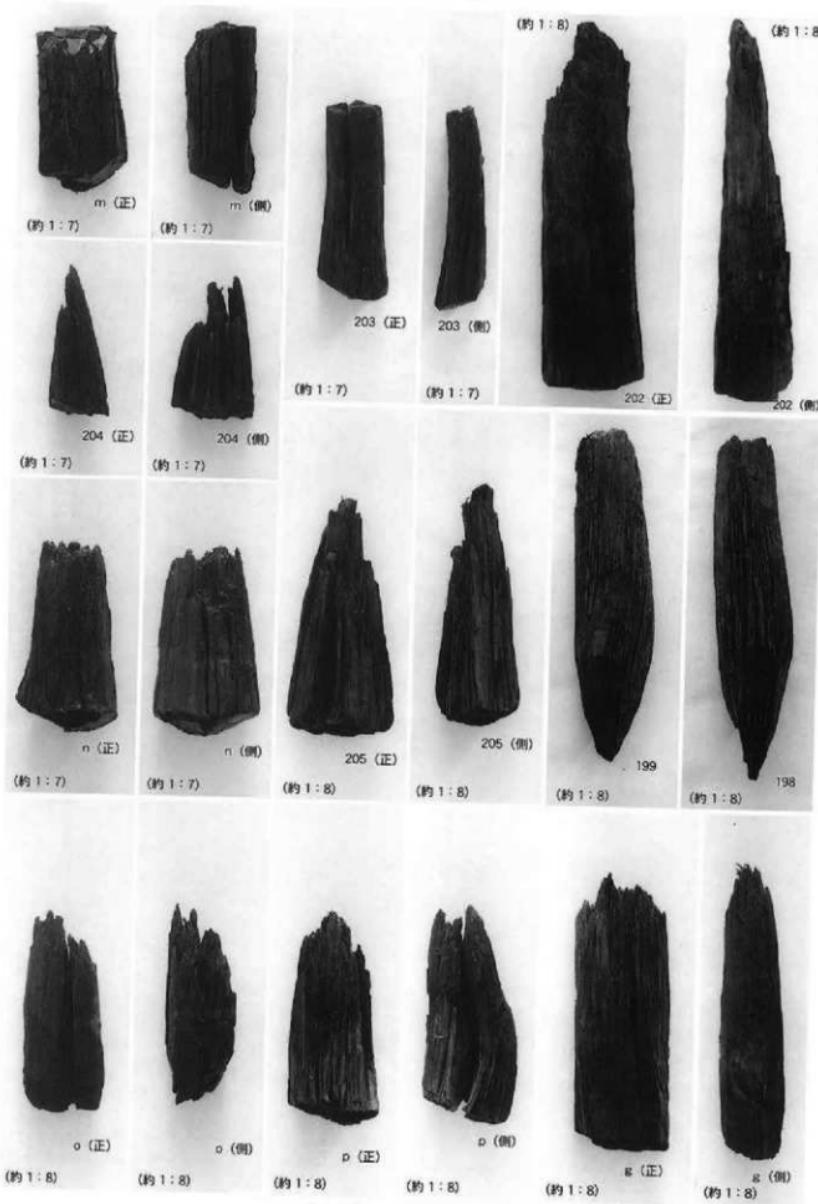
出土遺物 20 (木製品類 1ほか)



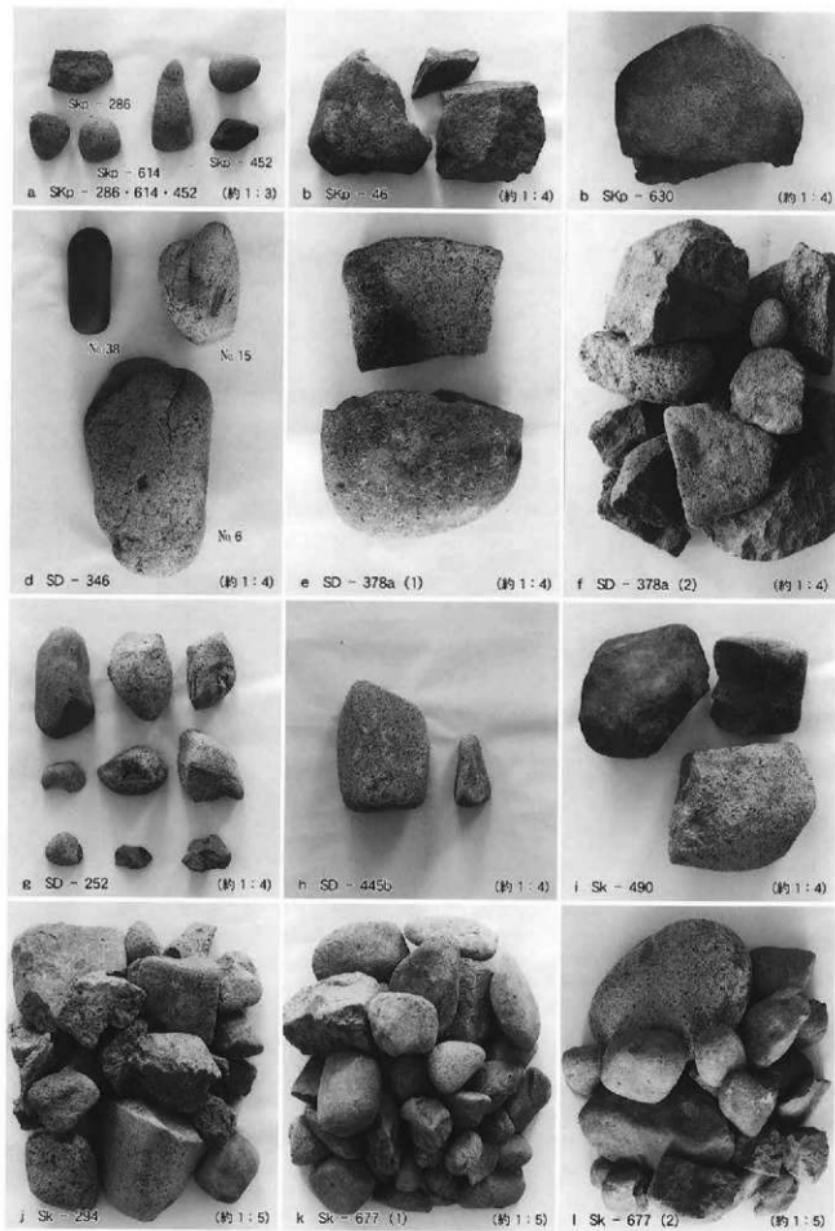
出土遺物 21 (木製品類 2)



出土遺物 22 (木製品類 3)



出土遺物 23 (木製品類 4)



出土遺物 24 (礫)

柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第35集

宮之下遺跡群

—新潟県柏崎市・宮之下遺跡群発掘調査報告書—

平成13年3月15日 印刷

平成13年3月21日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5番50号

印刷 北条タイプ印刷

宮之下遺跡群 (柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集)

正 誤 表

頁	行・図・表	誤	正
挿図目次	3行目	第2図 中村遺跡と周辺の地形	第2図 中村遺跡の周辺地形と基本層序柱状模式図
挿図目次	5行目	宮之下遺跡群第2次確認調査トレーニング配置図	宮之下遺跡群確認調査(第2次)トレーニング配置図
挿図目次	10行目	34	36
挿図目次	11行目	35	37
挿図目次	20~21行目	宮之下遺跡群出土土師器・黒色土器 法量分布図107	宮之下遺跡群出土土師器・黒色土器 食膳具法量分布図109
挿図目次	23行目	113	112
挿表目次	2行目	44~47	44~46
挿表目次	10行目	宮之下遺跡群の編年的位置付け	宮之下遺跡群出土古代土器の編年 的位置付け(試案)
挿表目次	11行目	宮田遺跡主要遺構の土器類組成表	宮田遺跡 SD-346・SD-378a 出土 土器類組成表
7	第2図	中村遺跡と周辺の地形	中村遺跡の周辺地形と基本層序柱 状模式図
7	第3図	第3図 中村遺跡基本層序柱状模 式図 (1:40)	《削除》
9	第4図	第4図 中村遺跡出土遺物	第3図 中村遺跡採集遺物
97	第8表 中10行目	o	195
97	第8表 中12行目	p	196
97	第8表 右7行目	q	197
109	第17図	宮之下遺跡群出土土師器・黒色土 器・食膳具法量分布図	宮之下遺跡群出土土師器・黒色土器 食膳具法量分布図
図版116	左下	上のスケールに (198・199)、下のスケールに (195~197) を付加	
図版189	右上	47	b
図版190	右下	e	l
図版191	左下	o	195
図版191	中下	p	196
図版191	右下	g	197